ネギ魔改造物略してネギ魔

XYZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギ魔改造物略してネギ魔

【Ｎコード】
Ｎ２５９３Ｎ

【作者名】
ＸＹＺ

【あらすじ】
『魔法先生ネギま!』の主人公、ネギ・スプリングフィールドに転生した男。
ただし、彼にはチートな設定が生えていた。　そんな彼が、色々頑張る話。

注意）この作品は「最強」「転生」「チート」「テンプレ」などの所謂「最低物」要素を多数含んでおります。
そういった物に抵抗感・嫌悪感を示す方は読まない事を

お勧めします。

基本コンセプトは「主人公がチートしてもいいじゃない」

第０話：つまり、いかに転生するかと言う話（前書き）

初めてな上、駄文でございますが宜しくお願いいたします。

第０話：つまり、いかに転生するかと言う話

その日、俺は死んだ。

走馬灯によぎったのは不幸な出来事ばかりであった。
生まれてこの方、俺は不幸の連続だったといっていい。
生まれてすぐに両親を無くし、親戚の間をたらい回しにされ続け。
ろくな学校にも行かせて貰えず、友達すらろくに作れない。
成績が悪いわけでも無いのに、このご時勢かまともに職にもつけず。
その他諸々大小含めて生きててよかった、と思ったことがろくに無い。

それでも世を儚んで自殺、などと考えなかったのは単に死ぬ根性が無かったと言うだけに過ぎない。
……痛いのは嫌だし。

そしてそんな俺の最後は、突然突っ込んできた車に引っ掛けられた挙句地べたを引き摺られるという最悪の終わりであった。

想像してみるといい、時速６０ｋｍは出ている車に引き摺られてガリガリ言わされる状況を。
どっかの吸血鬼漫画で壁で顔面紅葉卸にされた姉御の気持ちが少しはわかった、
とだけは言っておこう。

そして気がつけば、俺は待合室に座っていた。
どうしてここが待合室だと分かるのか、そもそもここはどこなんだ、

そんな事を考える前に
俺を呼ぶ声がした。
目的地であるＺ－０００番窓口、と書かれたカウンターまで歩く際に、周りを見渡してみる。
……あれだ、職業安定所をイメージすると分かりやすいと思う。
もっとも、広さはハンパ無く広いが。
そして老若男女、国籍も人種も違う人間が座っていたり話し込んでいたりする。

ようやくどうにかこうにかＺ－０００番窓口に到着、
カウンターの向こうに座っている綺麗なお姉さんがどうぞ、と席を勧めてくれるので
どうも、と言いつつ座る事にした。
しかし、このお姉さんは美人である。どれぐらい美人かと言うとすげぇ美人。
お前は何を言っているんだ、と思うかもしれないが美人なのだ。
それ以外の形容が出来ないくらいに美人。
粗茶ですが、とそのお姉さんが出してくれたお茶に手をつけて―美味かった、天にも昇るぐらい―から本題に入ることにした。

「ここ……どこっすか？」

そう、まずはここからだ。
いや何となく想像はついているのだが、一応念のため確認である。

「はい、こちらは天国と地獄の狭間になります。
言ってしまえば、あの世と言う事になるのですが。」

……だよな。俺死んだもんな。
しかし、狭間という割にはやたら人間臭い……と言うか現代的とい

うか。

「この時代に合わせた様式で建造していますので。
世界・時代・種族・文化等に合わせて多数存在していますよ。」

と俺の疑問に答えてくれた。
つまり、犬と猫は違う待合室だったり、ＳＦ世界とファンタジー世界でも違う待合室だったりするんだろう。
ＳＦ世界の犬とファンタジー世界の犬は別の待合室になるのか、と言う事は？
そこまで考えて俺は考えるのをやめた。あまりにも不毛な考えだし、何より神かそれに近い存在が考える事に突っ込むだけ野暮だ。

「それで、本来なら死ぬまでの人生をこちらで審査させていただいて、
どちらへ送るか決めるのですが……」

本来なら？
あれか、俺の死因は神様のうっかりミスとか、てりやきバーガー食いながら書類仕事してた担当がソースで書類汚したとかそんなのか？
それとも、余りにも貴方が不幸なので天国へ無条件ご招待、とかいうやつか？
そんな風に聞いてみると、お姉さんは一枚の書類を出してくれた。
やたら古い。紙、それも色が変色しているのを考えるとかなり古い。
文字もやたら汚くて読めたもんじゃない。誰だこのミミズののたくったシャンポリオンを呼ばざるを得ない字を書いたのは？

「貴方です……正確には、前世の貴方と申しますが。」

お姉さんの話してくれたことによると、何でも俺の前世が『転生プラン』の適応を申請し、
それが通ったらしい。
『転生プラン』とは、ぶっちゃけて言ってしまえば有利な条件で転生ができる、と言うものである（他にも色々あるらしいが）。
よっぽど俺の前世は転生に憧れていたんだろう。
まぁ、俺も興味が無いわけではない。そういうジャンルがあることくらいは知っている。。
俺の生前の不幸はそれが原因だという。
つまり、「次の転生では不幸まみれの人生ですが、その次の転生では薔薇色の人生が
待ってますよ」と言う事らしい。
まぁ、転生先ｏｒ生まれ変わった人生の選択によって多少は変動―最悪死ぬ、が多少かどうかはともかく―するそうだが。
そりゃいくらオールマイティな才能があってイケメンで金持ちでモテモテだろうが、走ってるトラックの前に飛び出れば死ぬ時は死ぬな。
そこまでフォローはしない、と言う事だろう。
そもそも、前世でそんなプラン適応してたとか本人が気づかんだろうし。
死んでここに来て絶望するのが関の山だと思う。

で、ここからが問題なのだ。
『前世の俺』はこのプランを１０００倍掛けしたらしい。つまり、単純に考えて俺を含めて１０００人の『俺』が不幸まみれで死んだ事になる。
そして、９９９人はここに来て「来世も不幸まみれです」と言われたわけだ……涙が出てきた。
と言うか、１０００倍掛けなんてするんじゃねーよ。どんだけ転生に憧れてるんだよ。

そもそも１０００倍掛けを通すんじゃねーよ。普通2倍とか5倍とか１０倍が限界だろう。

「書類は正式な形で通りましたので……」

申し訳なさそうにお姉さんが言う。丸っきりお役所仕事かよ……
いや、こんな職場でアドリブ効かせてるとそっちの方が大惨事なのか？
それに、どうもこのお姉さん、話を聞くと『俺』の専任らしい。
通したからにはきっちり責任取れよ、と言う事だろう。
そう考えると、少しだけ気の毒だとは思ったが同情はしない。

そうだ……俺が「じゃあ、俺も１０００倍掛けすると１０００×１０００で１０００００００になるからそのプラン教えてください」って言うと？
座ってた椅子から立ち上がっておもむろに床に頭こすり付けてそれだけは勘弁してください、と土下座されました。
むしろ泣き出しそうです。
と言うかすいません、『俺』がご迷惑をおかけしました。
何でも、法の穴を突くような荒業で１０００掛けを通したとか何とか……
そこまで転生したかったのか、『俺』。

という訳で、改めて席に着きなおしたお姉さんと話を再開する。
限りなくグレーに近いが正式な形で受理されてしまった以上、俺の来世は凄いスペックで生まれ変わるという。
どれくらい凄いの？と聞くとそれはもう凄いんです、と返された。
その辺の細かい所―転生後の能力、場所、人物など―は選択できないらしい。

とは言え、プランの趣旨的にまともじゃない転生はない、とのこと。
そりゃそうか。
これで「転生して幸せに暮らしました、犬として。」とかだと泣く。
ただ、特典として俺の意識・記憶は残るとの事。もっとも、赤ん坊時代から意識・記憶があるとかいう事はないそうだ。
しかし、プラン掛けた『俺』涙目じゃねーか。
遥か前世からの悲願達成、と書くと実に感動的に聞こえるが。
ちなみに、転生じゃなくて憑依って言うんじゃないのか？と聞いてみたが1から始める分には
どちらも差はありません。と返された。
……間違って無いようなそうでないような。まぁ、その手のプロが言うんだからそうなんだろう。

「それではあちらのドアからどうぞ。よき人生を歩めますように。」

にこやかな笑顔のお姉さんに見送られ、俺はすぐ横のドアを開ける。
光が溢れ、同時に俺の意識は薄れて行った。

光しか無い世界。
そこは、一面の白であった。
気がつけば、俺の意識は水のようにそこに浮かんでいた。
そんな俺に響く声。

〔始めまして、■　■■さん。この度は当『転生プラン』をご利用いただき、ありがとうございます。〕
〔現在、貴方様は転生のプロセスを経ている最中でございます。その間に、転生体に実装される能力の解説をしたいと思います。〕

どこかで聞いたような、聞かなかったような、そんな声だ。

〔【神の頭脳のルーン（ミョズニトニルン）】が実装されました。
これにより、あらゆるマジックアイテムの使用が可能になっております。
付加効果として、マジックアイテムへの鑑定・解析能力をお付けしておきました。〕

〔【白兎のＡＲＭＳ（ホワイトラビット）】が実装されました。
これにより、驚異的な脚力・飛行能力・そして最終形態の使用が可能です。
なお、【白兎】自身の意思はございません。ご了承下さい。〕

〔【幻想殺し（イマジンブレイカー）】が実装されました。
これにより、超能力・魔法などの異能を無効化することが可能になっております。
付加効果として、この機能のＯＮ／ＯＦＦをお付けしておきました。
なお、ご自身の異能に関しては使用可能です。〕

〔【神の左手のルーン（ガンダールヴ）】が実装されました。
これにより、あらゆる武器の使用が可能になっております。〕

〔【直死の魔眼】が実装されました。
これにより「モノの死」を知覚する事が可能になっております。
付加効果として、この機能のＯＮ／ＯＦＦをお付けしておきました。〕

〔【王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）】が実装されました。
ご自身の空間と繋がっている宝物庫を所持しております。
多数の宝具を含めた財宝を収めてありますのでご自由にお使い下さい。

なお、乖離剣・天の鎖は実装されておりません。」

「【文珠】が実装されました。
文字を込める事によってその文字の効果を発揮するアイテムを生成・使用可能です。
なお、大極型文珠は実装されておりません。」

「以上が、転生先の貴方様の持たれる能力となっております。
ですが、最初から全てを所持している訳ではございません。
また、すべての能力が最初から全力で使用できるわけでもございません。
その辺はご了承下さい。」

これはひどい。
いや、能力はどれも破格過ぎる。十分だ。一つでも贅沢すぎるくらいに。
だがしかし、まとめて渡す必要は無いだろう？
と言うか、『それはもう凄いんです』とか言うレベルじゃないだろうこれは。
なんと言うか、別の意味で『まともじゃない』転生じゃないか。何この設定キメラ。
「ぼくのかんがえたさいきょうのきゃらくたー」でも可。
少なくとも前世の『俺』は満足だろう、間違いなく。

『転生作業、間もなく終了いたします。よい人生をお送りくださいませ』

しかし、どう見てもチートなこの状態でも『最悪死ぬ』のか。
どんなスパルタンな世界観なのやら。
逆にママレード・ボーイやらサザエさんみたいな世界観にこんな設

定で行くのも
勘弁願いたいが……

そして、俺は『誕生』した。

第０話：つまり、いかに転生するかと言う話（後書き）

行がおかしくなって無い事を祈って！
後、これを投稿する前にキーワード設定して１０文字オーバーのため、
結局１から設定しなおしたのは黙っていれば分かる事。

と言うか、設定間違えてないか今でも胃に来てます。

８／１７
投稿。
同日
案の定行がおかしかったので訂正。
行の並び方が文章としてなんか変だ……（汗）。

第1話：そして、俺が生まれ育って死にかけたという話（前書き）

相変わらず行間と言うか、行がおかしいです。
すいません。

後、紹介文は改行とかできないんですかね？（改行タグ効くのかな？）
なんかみっともない……

第1話：そして、俺が生まれ育って死にかけたという話

物心がついた2、3歳の頃。
ようやく俺は『前世』を思い出した。
正確には思い出したわけではなくて、『前世』に関する事まで頭が回り始めた
という事なのだろうが些細な問題である。
今の俺がどういう状況なのか、軽く確認をかねて説明してみよう。

ここはどこ？：イギリスのウェールズ地方のとある小さな村。
私は誰？　　：ネギ・スプリングフィールド。性別、男。

……そう、俺は『ネギま！』の世界に転生してしまったらしい。
それも、主人公に。
本編に関しては知らない。正直、名前は知ってるが話の内容はさっぱり、と言う奴である。

まぁ、本当にここが『ネギま！』の世界とは必ずしも限らない。
よく似た全くの別世界の可能性もある。
実は俺は同姓同名の別人で何事もなく村で一生を平凡な村人で終えました。
で終わる可能性だってあるのだ。

それに、だ。
仮に、ここが『ネギま！』の世界で俺が主人公の『ネギ・スプリングフィールド』だとしても
原作をトレースする必要もあるまい。
まさか今存在している場所が漫画の中の世界と言う訳ではあるまいし、原作から逸れても

原作者の作品は変わらないだろう。
……いや、最終決戦時に「ここは二次元の世界なのだ！」とラスボスが言い出したら
それは知らん。
と言うか、そんな事になったら神殺しという名のチェーンソーで神を叩き斬ってやる
（きっと【王の財宝】の宝物庫には入ってると信じてる）。

当面の俺のやる事は、ひたすら地力を蓄える事である。
仮に主人公なら主人公補正の影響でトラブルが向こうから転がってくるのが確実なのだから。
とは言え、今の俺は非常に非力である（幼児なのだから当然と言えば当然であるが）。
実装された能力を確認もしてみたが、どれも発現する様子は無い。
レベルが足りないのだろう、きっと。
では、レベル上げと言いたいがこの歳で動ける範囲なんて限られる（精々が村の外れの湖だ）し、この体で出来る事も限界があるわけで。
今確実に出来る事はひたすら本を読んでこの世界の知識―特に魔法関係
（そう、この世界は魔法があるのだ！）―を集める事ぐらいである。
幸いにして、今の俺は前世に比べて遥かに天才なのだ。
「媚びろ～、媚びろ～、俺は天才だ！」と言いたくなりそうな位には。
【神の頭脳】の補正だろうか？　読み書きも『前世』以上のレベルで習得したし。
英語の成績が悪かった『前世』に比べれば格段すぎる進歩とも言えよう。

しかし、父親も母親もいないとか。

何でも父親は『千の呪文の男』とか『サウザンドマスター』とか言う世界を救った英雄らしい。
ふーん。
母親に関しては……誰もが口を閉ざすとかどういう事だ。
行きずりの売春婦とかそんなスキャンダラスな存在のか。
生きてるにしろ死んでいるにしろ、どこか遠い所にいる事は確実である。
しかし、離れを借りての実質1人暮らしとはどういった理屈だ！
幼児虐待か！？
俺は神話になった少年か！！
……本当にこれ、幸せになれる転生なのか？なんかこう、違わない？
いやまあ実際、虐待か！？とか言ったものの村の人とか親身に面倒見てくれますよ？
スタン爺さんとか幼なじみのアーニャさんのご両親とか本当にお世話になってます。色々と。
あれか、『終わりよければ全てよし』的考え方か。神様の考える事はわからん。

そうこうやってるうちに、アーニャさんから杖を貰いました。練習用の。
これで魔法の練習もできるな、と大喜びした物です。
とは言え、周りから借りてきた本を読む作業も疎かにする訳には行かず。
結果、一日のライフサイクルが、

朝：起きて飯を食う、その後部屋でひたすら本を読む
昼：飯を食う、その後外に出て魔法の練習とか能力の確認をする
夜：帰ってきて飯食って風呂、その後就寝するまで本を読む

時々（しょっちゅう？）アーニャさんが襲撃をかけてきたりしますが、大体こんな感じ。
正直構ってくれるのはありがたいんだけど……迷惑だ何て言うと失礼だよなぁ。
遊んでいる暇があるなら、１ページでも本を読みたいと言うか。
まぁ、ここまでやって実は『同姓同名の別人』だと吹くしかないのだが、
父親が英雄だと言う事は、原作世界に間違いないと判断してる訳で。
となると、いつの日か大変なトラブル＝下手を打つと死ぬ＝が襲い掛かってくるのは確実である。
……俺はこんな所で死にたくない。しかし、英雄の息子とか死亡フラグ満載な気が！

そして、実装された能力ですが全く出る気配がありません。
宝具を引っ張り出そうとしても出てくる気配もなく、文珠とか論外。
ルーンなんて掠れ字ほども見えない。
死が世界に満ちてるだなんて台詞も吐けそうに無いし（見えないに越した事は無いんだが）、
幻想はぶち壊せない。ＡＲＭＳ？お察し下さい。
まぁ、この歳でそんな物ががしがし出てきたとしても、逆に異端扱いされるから
いいと言えばいいんだろうけど……本当に実装されたのか？
実は性質の悪い詐欺にあったとかそういうオチが待ってるとかマジ勘弁ですよ。
好意的に解釈すればリミッターがかかっている、と考えるべきなんだろうけど……なぁ。

あ、魔法の方に関しては初歩の初歩である着火は余裕でした。
今は魔法の射手と対物理・対魔法障壁の練習してます。
発動のプロセスが体系的に理解できるなら、発動させるのは楽なよ

うで。
理解できない物よりは理解できてる方がやりやすい、と。
読んでてよかった魔法関係の学術書。
とは言え、魔法の射手は3発が精々だし障壁は確かめようが無いし……
前途多難な感じです。
ちなみに属性は風、光、そこから派生する雷が相性がいいようで。

そんな感じで春夏秋冬と時は過ぎ……ある雪の日。
その日も俺は、いつもの村はずれの湖で釣りをしつつ読書にいそしむ、
と言う日課を繰り広げていた。
そうこうしてると、雪がちらつき始めて来たので、続きは家で読むかと考えて撤収作業に入った。
よくよく考えてみれば、今日は従姉のネカネさんが帰ってくる日である。
（俺が頼んでるのもあるけど）毎回読みやすい本とかをお土産に持って帰って来てくれるので、
大変助かっています。
何だかんだで天才っぽいこの頭脳でも、大人向けの学術書を予備知識抜きで読むのはかなりの難問なのだ。
正直、頭に入れてるが理解はしてない、と言う部分が幾つかあったりする。
やっぱり基本は大事だね！
さて、何の本を持って帰ってきてくれたかな……と村まで考えながらたどり着き、それを見た。

燃え盛る村。
崩れ、跡形も無い建物。
石となった村人達。

一体、何がどうなってこうなった!?　いきなり俺人生のピンチか!!

等と思っていると、目の前には接近中の異形の怪物が。
ほとんど反射的に魔法の射手ー属性：光ーを詠唱、相手にぶち込んで逃げ出す!
後ろを振り向くと効いてない!!
そりゃそうだ、3歳児の魔法があんな大人よりもでかいデカブツに効いたらそれこそ問題だ。
その辺は俺も分かってるので顔面狙って打ち込んで怯みでもすればな、と思ったのだが。
もう必死で走ってはいるのだが振り切れそうに無い、と言うか遊ばれてるよこん畜生がっ!
振り下ろされた腕から身を護る為に対物・魔法障壁を展開、障子みたいにあっさり破られて
近くの建物の中に窓ガラスをぶち破りながら吹き飛ばされる。
それでも勢いは止まらず、壁にぶつかる事でようやく止まるも、口から血を吐いた。
向こうとしては遊んでるんだろうがこっちからすればあの一撃が致死クラスの打撃じゃねーか!
今生きてるのが不思議なくらい。
立ち上がることも満足に出来ず、突き破った窓ガラスの方を見ると口を開けて
何かエネルギー充填殺る気満々の怪物が!
魔法、と言っても杖がないっ!
どこ行ったっ、さっき吹き飛ばされた時にどっか飛んでいったか!?
まずいっ、死ぬっ!　こんな所で死にたくねーぞっ!!
どこで人生のフラグ間違えたっ?、あれか『転生したのが間違いでしたね』と言う奴かっ!!

次の瞬間、俺の頭の中で声が弾けた。
〔能力使用のリミッターが解除されました、よい人生をお送りくださいませ〕と。

グッドタイミングっ、だが遅いっ！　と言うかこれのどこがよい人生かっ！！
そう思いながら放たれた光芒に右手を突き出す！　光芒を掌で受け止め……消滅させる。
怪物がうろたえた？（表情なんて分からん）隙に自分の能力を確認。
幾つかいまだに使用不可の能力がある？
使用不可な理由は不明だが、気にしている場合でもない。
この場合は、こいつを使うしかないかっ！

「【白兎】……あんたの力、全力で借りるぜ！」

次の瞬間、俺の意識は一旦弾け飛び一空から落ちるような感覚一そして再び再構成した。
そして俺の姿は、異形となる。
兎と人が混ざったような姿に、蝙蝠のような大きな翼。
これこそが、オリジナルＡＲＭＳ【白兎（ホワイトラビット】。
オリジナルの中では一番戦闘力はないと言っても過言では無いだろうが……
これで十分すぎる！
相手が認識困難なスピードで接近、そのまま首を圧し折ってやった。

後はこの調子で、この村を襲った怪物どもを全滅させるだけ。
翼を使って飛び立ち上空から俯瞰、怪物の同類らしい奴を見つけるとそのまま叩き潰す作業に入る。
正直、これは戦いではなく作業なのだ。
高高度から相手を確認↓そのまま突撃↓ぼっこにする、と言う流れ

作業。
経験値にもなりゃしない、と言うやつである。
気をつけなければならないのは、ソニックブームとかの発生で石像を壊さないようにする事だけと言う。

だが、そんな俺の快進撃も終わりを迎えた。
強烈な雷の奔流が、怪物の数体と戦闘だった俺を飲み込み、吹き飛ばしていったのだ。
そして、俺の意識は黒い闇へと落ちて行ったのである。

畜生め、俺の人生終了かよ。

……そう思っていた時期が俺にもありました。
目が覚めたのは病院のベッドの上。
全身包帯まみれでまるでミイラみたいになった俺がいましたとさ。
生きててよかった。いや、本当に。

第1話：そして、俺が生まれ育って死にかけたという話（後書き）

そんなに長い文を書いたつもりではなかったけど予想外に文章短くてびっくり。
ですが、今の俺の限界がここまでです。

8／17
投稿、同日やっぱり行のおかしいところを訂正。
【王の財宝】が『王の財宝』になっていたのでそれを訂正。
細かい点をちょこっと手直し。

第2話：そして、レベルアップに励む話。（前書き）

もう、毎回の行直しは必要経費だよ畜生め。
ちなみに、メモ帳使って書いてます。

第2話：そして、レベルアップに励む話。

さて、見事に病院おくりにされてしまった訳だが、どうしてそうなったのか？
ネカネさん曰く。

ナギ・スプリングフィールド、つまり、俺の父親が危機一髪の所を助けに来てくれたらしい。
そして『雷の暴風』で怪物ども（悪魔だそうな）を全滅させたとか。
つまり、俺が巻き込まれたのはこの一撃だった訳で。
あの顔・姿どう見ても、悪魔の仲間にしか見えないだろうしなぁ。
と言うか、俺がいた辺りまで見えてたかどうかも怪しい。

最も、その父上殿も2，3話したら杖を俺に渡せと預けてどっか行ってしまったそうだが。
（その杖は今、俺のベッドの近くに立てかけてある）、
『サウザンドマスター』ってくらいなら探査魔法とか色々持ってるだろうに。
あれか、数が多すぎてどの魔法を使えばいいか分からないとか言うのか。
と言うか、せめて一人息子を探してからどっか行けと。

そしてその後、俺を探しながら救援を待っていたらしい。
最も、救援が来るまでに俺は見つけられず、俺自身は救援隊に発見される事になる。全裸で。
一体何があったのか？　どうして全裸なのか？
色々疑問は尽きなかっただろうが、意識を取り戻してから来た調査の人には「覚えていない」
の一点張りで通しておいた。

記憶精査魔法とか来るとマジやばい、と思ったが幸運にもそれは来なかった。
三歳児の頭を（記憶精査の為とは言え）弄くるのはやばいだろうと言う判断か、
それ以外の理由なのかはわからない。
精査中に何かあって頭がパーに、とかなっても責任問題だろうしなぁ。

結局、あの村で生き残ったのは俺とアーニャさんとネカネさんのみ。
後の村人は、石化してしまったのだ。
（この辺はネカネさんは誤魔化したのだが、生憎既に俺は石化した村人を見ているのである）

そうそう、貰った杖を無くした事（結局見つからなかった、壊れたのだろうきっと）を
アーニャさんに謝ったのだが、そんな事より自分の体の心配をしなさいと怒られた。
ごもっともである。

それから暫くは怪我を治すことに専念……する事になると思ったがそんな事は無かった。
包帯を替えるべく取っ払うとあら不思議、完璧に無事な肉体が！
詳しくは教えてくれなかったが相当ひどい状態だったそうなのだが、
どう言った理屈だこれは？
って原因はＡＲＭＳじゃねーか。自己再生能力が働いたと言う事なのだろう。
不審すぎるだろ、と思ったがそもそも治癒魔法をかけての治療なので、
上手い具合に体に効果したのだろうと言う事になった。……いいのか、それで。

いや、俺は一向に構わんのだけど。
まぁ、それでも体を動かさなかった事には変わりないので、リハビリなんかをしたり。
ネカネさんに頼んで持ってきてもらった本を読みふけったり。

実装された能力に関しても、一通り把握してみる事に。
各種ルーン：見えません。まぁ、発現したら聖痕と言う事で誤魔化すかなぁ……
文珠　　：出そうな気配全くありません。
王の財宝　：何となく出そうな感覚が。
幻想殺し　：自分の張った障壁を自分で消してみようとしたら触っただけで見事消えたでござる。
直死の魔眼：……見えた。普段はオフにしています。と言うか本気でやばい。
ＡＲＭＳ　：ズボンとかパンツとか破らないように脱いでから確かめる事に。無事確認。
あ、完全形態は実証済みなんで再確認してません。後パンツまで脱ぐ必要はなかった。

そういや、これからの生活どうするんだろう？
そう思ってたら山奥の街に移り住み、魔法学校に入学すると言う事になりました。

しかし、お祖父ちゃんが魔法学校の校長とか始めて聞いたんだけど。
もうちょっとコミュニケーション取ろうぜ！（お前が言うな？ごもっとも）。
よくよく考えてみれば、３歳児に「お前のおじいちゃんは魔法学校の校長やってるんだよ」
と言う必要性がねーな。ごめん、俺が悪かった。

で、魔法学校に入学して授業を受けていますが……正直退屈です。
ほら、普通の学校に例えたら今まで中・高レベルの自主学習していた所に
小学校の学習ですよ？
そりゃ確かに分かりやすいんで、授業中はずっと寝てますとか言わないけどずっと本読んでます。
書庫から借りてきた奴を。
ながら勉強でも何とかなるこの頭脳ほんとすげぇ。
『俺に不可能は無い』と言い出しそうなくらいには。
最近はそれに加えて、魔法の練習とか運動とか色々やってます。
入院時にベッドの中で色々考えたり、魔法学校に入学してからも色々考えた訳ですよ、
これから俺はどうして行くべきだろうか、と。

1．体を鍛える。
とにかく、体が資本だと言う事は確実。
無茶なはしない（してもこの歳では意味が無い）にしろ、最低限は体を動かして基礎だけでも
作っておかないとまずい。

2．魔力量を増やす
魔法を使うには、魔力が必要。
ついでに言うと実装されてる【文珠】【王の財宝】は俺の魔力依存の可能性がある。
魔力量を増やすにはひたすら魔法を使って限界容量を拡張していく必要があるのだが……
村でそんなことする訳にもいかなかったしなぁ。

3．覚える魔法は回復・防御中心で。
まず生き延びる為には、死なない事が大事。

ぶっちゃけ、火力だけなら最悪ＡＲＭＳ引っ張り出せばいい訳で
（最終形態とかは本当に最後の手段。いやほんと、頼ってると精神
が墜落するね間違いなく）。
その為には回復と障壁・防壁・結界などの防御系魔法をメインにす
る必要がある。
それに、こういう学校では大火力魔法なんて教えてくれない、
と言う身もふたも無い事情もある。（『魔法の射手』『武装解除』
くらいだもんなぁ）
後、石化の解呪もやれたらやっておきたい。
覚えた魔法が使えるかはさておき、下地くらいにはなるだろう。
放っておいても誰かが解きそうな気もするが……見捨ててしまう
のも後味が悪いと言うか。
最低でもスタン爺さんとアーニャさんのご両親は治さないと人とし
てどうよと思う次第で。

と言う行動方針に乗っ取って行動を開始した訳である。
……俺はまだ死にたくは無いんだ。
ぶっちゃけ、この世界ではＡＲＭＳだろうが決して無敵ではないと
言う事が
分かってしまったのだから尚更である（いや、元々ＡＲＭＳは無敵
じゃないけども）。

そんな訳で、朝は日課のランニングから始まるのである。
左手のルーンが使えればなぁ。体を効率的に動かせそうなのに。
そして、ランニングを終えて着替えてご飯を食べたら学校である。
いつもの様に授業を聞きつつ本を読む日々。
……そうか、『戦いの歌』とか言う魔法があるのか。これは覚え
るしかないな。
と、目ぼしそうな魔法があれば手近な先生をひっ捕まえて
この魔法はどうやって使うのか尋ねるのである。

攻撃魔法ならさておき、回復・防御やこの手の支援増強型魔法に関しては割りと
教えてくれやすいのはありがたい事である。
俺が『サウザンドマスターの息子』と言うのもあるのかも知れない。
どことなく期待している目で見ているのが感じ取れる事もある。
そこにつけ込んで上目遣いで純粋な少年っぽく教えてー、と懇願してる訳ではあるが。

授業が終わればひたすら魔法の訓練と言うか特訓である。
訓練と同時に、自身の魔力容量を増やす為に体（この場合は魔力か）をこき使っているとも言う。
これで魔力が増えるのがびっくりだ。あれか、筋肉を鍛えているような物か。
たまに限度忘れてぶっ倒れて起きたら月が見えていた、と言う事があるのはご愛嬌と言うか何と言うか。
そして、夜は眠くなるまでひたすら本を読んだり自習したり予習したり、
部屋で使える魔法を使ったりである。

そんな毎日を繰り広げていると、ようやく【文珠】と【王の財宝】が使用可能になりました。
入学してからおよそ半年。長かった……
それでも【文珠】は1日1個出て1個使うのがやっと。
【王の財宝】の方も一品外へ出し入れできるだけ、と言う状況である。
とは言えこれで選択肢はぐっ、と広がったはずなのだ。
【文珠】に関して言えば、この調子で魔力が伸びれば2年もすれば4文字は制御できるはず。
それが無理でも2文字は堅いと思いたい。
石化に関して言えば、〔石〕〔化〕〔解〕〔除〕でもいいし、石像

を〔解〕〔析〕して〔解〕〔呪〕してもよい。
それでダメなら【王の財宝】から適当な物を見繕うしかない。〔破戒すべき全ての符〕とか。
【幻想殺し】でも行けそうな気配はあるけど……石像ごと消してしまいそうでなんか怖いしなぁ。
後、触った部分だけが解除とかだと洒落にならん。
片腕だけ石化解除とかならまだわからんけどさ。
と言う訳で、安全策をとるなら【文珠】か【王の財宝】と結論。

とは言え、問題は石化治療の可能性がある事をどうやって周りに伝えるかである。
できるだけこの能力は内緒にしておきたい。魔法使い的に考えても常識外の産物だし。
まさか「拾った」とか「突然女神様が現れてこれを授けてくださいました！」
とか言う訳にも行かないし……
「いいですか、治療している間絶対にこのドアを開けてはいけませんよ？」
……ダメだ、覗かれるフラグ見え見えだ。
ともかく周りから見て怪しさ大爆発な方法しか思いつかん。
今の段階じゃそこまで回復魔法使えるわけでも無いし。

いっそ旅に出て「旅の途中こんなもの拾っちゃいました」とかやるか？
魔法界の遺跡で拾ったとかならまだ言い訳と誤魔化しは効く、はず。
家出同然になるけど、今でもそれほど周りに友人がいるわけでも無いし。
（相変わらず襲撃かけてくるアーニャさんと世話してくれるネカネさんくらいだ）

後の問題は旅費だな。パスポートだの出国の手続きだのは……後で考えよう。

まさかお金貸してと言う訳にも行かず、自力で稼ぐしかない訳だが。

……【王の財宝】の中に換金用なのか宝石やら金の延べ棒やらが転がってたな、そういや

（後で宝物庫をちゃんと確認する必要があるな）。

移動手段も船が一隻あったはずだし。

とは言え、見つかった時に「出国時の金はどうしたのか？　逃亡先での生活費は？」

とか聞かれると困る。最低でも言い訳できる理由を用意しないとまずい。

と言う訳で少々方向転換。錬金術を学ぶ事にしました。

正確には魔道具とかアーティファクトとかそういう類ですが、

総称して錬金術と呼称することにする。

かっこいいし。

自力で作ったものを売りさばいて金にする分には問題ないだろう、うん。

それに石化解除薬が完成するきっかけになるかもしれないし、【神の頭脳】が使用可能になった

時に役に立つ事間違いないだろうし。

向こうに言っても最低限食べるだけのお金は稼げるだろうきっと。

と言う訳で、朝は日課のランニングから始め、

授業中は授業を聞きながら錬金術関連の本を読む。

【文珠】で〔学〕（まなぶ）とか〔習〕（ならう）とか〔修〕（おさめる）とか〔覚〕（おぼえる）

とか色々試しながら勉強やってます。

後、そう言うのを専門にしている先生に話を聞いたり魔道具なんかの作り方を教えてもらったり。

放課後時間が余ってるとそのまま魔法の訓練。
対魔・対物魔法障壁を同時展開しつつひたすら『魔法の射手』をぶっ放してできるだけ魔力を
からっけつにして最大魔力容量を上げようという目論見である。
結界魔法の方も形になってきたので、最近は自前の認識阻害結界を張って
そこで派手にやってます。
あんまりこういうの見られたく無いしなぁ。心配してくれるのは嬉しいんだけど……。
夜は自室で貸してもらった機材や資材を使って実際に魔道具作成してみたり、
【文珠】の増産に励んでみたり、【王の財宝】の宝物庫整理してみたり。
後、時々禁書庫に忍び込んでます。〔隠〕（かくれる）とか使って。
錬金術関係はやっぱり普通の生徒には教えない部分があるから……
人体錬成とかは流石になかったけど、勉強になりました。

原作開始時期がわからんけど、正式名称が『魔法先生ネギま!』だったはずだから
まだ時間に余裕はあるはず（まさか１０歳にもならずに教師とか無いだろう）。
５歳くらいから向こうに行って、１０年くらい冒険者（ホワイトメイジ／ウィザード／アルケミスト）
辺りで頑張れば後の余裕はばっちりの計算である。
死亡フラグ回避の為に死亡フラグを立ててる気もするが、何もしないよりは
きっとマシに違いない。
……これが原作の流れだったら泣くしかねーな。

で、５歳と言う事は、２，３年ほどしか時間がなかったわけだが頑

張って勉強しました、錬金術。
と言うかやればやるほど面白いです。調合とか製造とか。
1年ちょいで「もう教えることはない」とか教えてくれた人に言われました。
大体、薬品ならポーションから惚れ薬、年齢詐称薬（しかし、惚れ薬とか教えて良いのか、
本当に？）まで材料さえあれば作れるレベルに。
物品も魔法の発動体とか、空飛ぶ箒とかも材料さえあれば作れるように。
そうこうやってたとある朝、額が熱いと思ったら【神の頭脳】のルーンが！！
……経験積んだから、と言うオチかこれ？
まぁ、これのお陰で尚更魔道具作成が楽になった訳です。
解析能力のお陰でダメな部分を手直ししてより効率的な作業を行えるようになった訳でして。
あ、額のルーンに関してはバンダナ締めて隠す事にしました。
伸ばした前髪だけで隠そうとか考えてたけど、やっぱ無理だわ。
最終的には視覚的に隠す薬品かなんかを作るつもりだけど。
風呂入るときとかバンダナできんし。

髪の毛に関しては殆ど切ってません。後ろでまとめてます。
ほら、髪の毛にも魔力は宿るって言うし。
最低限の手入れはしてますけどね……余裕があれば。
後、勉強のしすぎなのかちょっと視力が落ちてきたので眼鏡をかける事に。

そして、【神の頭脳】の力を利用して新薬とかの製造に乗り出したり。
魔力を一時的に増強するブースターみたいな奴とか。
細かな所では動物が近づきにくくなる害獣避けの薬とか。

魔力養成ギプスみたいなのを作ったり、
簡単な魔法を封じて任意で発動できるアクセサリを作ったりとか。
そうやって作った奴を、休みの日を利用して大きな街に出て店に売ることに。
場所に関しては錬金術の先生の方から、時々お使いと言う事で伺ったことがある所を選択。
他に知らないし。
外見に関してはそれこそ年齢詐称薬の出番である。
１０歳ほど年上になった状態なら問題なく相手にしてもらえました。
一度に大量に売るわけにもいかなかったし、世の中に出さずに自分の物にしておきたい奴も
あったのでそれほど無茶な量も種類も売らなかったけどね。
それでもいいお金になりました。
何でも固定でまとめ買いする人まで出てきたそうで、
店から最終的にもうちょっと数量何とかならないかとまで言われたくらいには
知名度も上がったという。
こうして旅費と当面の生活費になりそうな資金はゲットした訳であります。

（俺は知らなかったのだが、作って売りさばいたポーション類。
あんまり変なのを売るのもまずいと一般的に市場に流れている奴を作って売ったのだが、
一般的に売られている奴の2、3倍近い効果があったとか。
勿論、俺が旅に出たら売らなくなったのである種の伝説的ポーションとして
一時期話題に上がったらしい。）

そうやっている間にも、修行と勉強の日々は続く訳で。
相変わらず【文珠】は2個制御できません。自作の魔力増強薬使え

ばいけるんだけど、
それだと意味が無いしなぁ。
この薬、３０分ほどのブーストを引き替えにその後４８時間は動くのがやっとな全身筋肉痛が
襲ってくるのである。
【神の頭脳】も副作用まではどうにもならなかったと言う。要改良。

【王の財宝】の方は出せる数を増やせるようになって来ました。この差はどこから来るんだろう？
直結している宝物庫の方もちゃんと確認……これが地味に辛かった。
確認しようとすると目録が脳内に浮かび上がって来たのが大変ありがたかったと言っておこう。
その後は整理したり、自分の作った奴とかを放り込んでみたり。
入れてる宝具とか武装の威力具合とかも一応試してみました。
真名解放は（【神の頭脳】のお陰でできるけど）流石にまずいんでやってませんが。
しかし、エクスカリバーとかカリバーンとかマジやばい。
何と言うか触るのが恐れ多いレベルで神々しい。
別の意味でやばいのがストームブリンガーとか村正とか。怖くてそのまま転がしてます。
と言うか、ストームブリンガーとか無造作に突っ込んでるんじゃねーよ！
絶対に素手で触らないからな、これは！
……あ、神殺しと言う名のチェーンソーはバッチリありました。

鎧や盾、服装関係、薬品類やその他の装飾品なども一通り確認。
ここにある武装を装備するだけでＬｖ１でもレベル上げいりませんでした、
と言う戦闘力持てそうです。

ちなみに、空間に待機状態にさせた宝具を撃ち出すという練習もやってみました。
自然破壊がやばかったです。
一番しんどかったのが隠蔽作業と言うこの空しさよ。
それと、出した宝具に関しては手で入れなくても勝手に仕舞えるみたいで。
まぁ、手を使わずに出せるならそうだろうけど。
これで射出した宝具は自分の手で後片付けなのかなぁ、と言う疑問も解決しました、はい。

そんな感じで5歳まで雌伏のときを過ごし、誕生日が過ぎたある日俺は出国した訳です。
魔法界に。
必要な手続きやらの手段は売りに行ってた店経由で紹介してもらいました。
正確には、そこで俺の作ったポーションを買ってくれるお得意さんに大目にポーション渡す約束で
色々やってくれる場所紹介してもらいました。
ぶっちゃけ偽造とかやってくれる所を紹介してもらったわけで。
やっぱり大事なのは現ナマだね！

石化解除手段の為のアリバイ作りと、原作突入後の死亡フラグを減らす為に！
原作に無い死亡フラグを立てる事を覚悟して！！
ここから俺の新しい冒険の旅が始まる！
あ、形見の杖は置いてきました。ちゃんと帰ってくるよと言う俺なりの決意表明で。
（勿論、代わりの発動体に指輪を作って持ってます。）
置手紙も置いてきました。「武者修行の旅に行ってきます」と。

（後に聞いた話。出て行った翌日、関係者一同すげぇパニックになったらしい。
どれくらいかと言うとネカネさんがその場で倒れて1週間寝込んだくらいには
……うん、マジごめん。）

第2話：そして、レベルアップに励む話。（後書き）

取りあえずはここまでです。
できるだけ早めに上げるつもりではいますが、具体的な確約は無理です。
ごめんなさい。

８／１８
投稿、そしていつもの行直し。
後、細かな所をちょこちょこと。
「申し訳が立たない」は表現としておかしいと思ったので手直し。
０～２話までの【文殊】を指摘により【文珠】に変更。
【神の頭脳】効果で宝具の真名解放できる事に気がついたので訂正。

８／２７
寄宿舎云々を修正。どうしても斜め読みしちゃうんだよなぁ。

第3話：そして、冒険して狩猟した話。（前書き）

活動報告にも書きましたが、魔法世界編は完全オリジナル設定です。
まぁ、地域名とかは出して無いんですが。
後、何故か書いてたらモンハンネタが……そんなつもりなかったのに。
（元々は「そして、冒険者になった話」だった）
その辺ご了承くださいませ。

第3話：そして、冒険して狩猟した話。

魔法界に辿りついた俺は、さっそく活動を始める事にした。
時は金なり、である。

現実問題として出国の際の費用が予想以上に掛かった、
と言うのもあるんだが（必要経費なんだからしょうがない）。

まずは事前に集めておいた情報通りに、冒険者の養成所の門戸を叩く事にした。
なるだけなら名乗るだけで出来るのだが（別に冒険者カードがあるわけでもないし）、
いろはも知らずに冒険者とか危険すぎる。
そう言う冒険者志望の人間を集めて基礎とかを叩き込むような専門学校みたいな場所は
やっぱりあるのである。
勿論運営してたり講師してるのも元冒険者とか現役冒険者だったりする訳で。

入所の際に「何が出来ますか？」と聞かれたので回復・補助魔法が少々と
アイテム作成できます、と答えておいた。
ちなみに名前は流石に本名はまずいので『アルミール・カモベール』としておいた。
……うん、昔助けたオコジョ妖精の名前をちょっともじっただけなんだ。
流石に丸パクリは気が咎めた。
養成所とは言え、身分証の提示とかは求められなかったのでちょっと安心。

訳ありで冒険者やろうって人もいるからそんな物か。
まぁ、求められても偽造身分証も名前は同じなんだけど。

歳は特製詐称薬でごまかしてます。
具体的には1錠飲めば1ヶ月は持つと言う優れものである（勿論、解除薬もあるよ）。

で、一年ほどみっちりと冒険者としての修行を……と思ったのですが。
半年ほどで修了しました。
カリキュラムとしては、半年は冒険者としてのマナーと言うか基礎を叩き込まれ、
残り半年で専門職（戦士とか魔法使いとか）の履修に入るわけだったんだが、
「お前、専門職の履修は免除でいいよ」と言われた訳で。

実装された能力は使用してませんよ？
いや、常時発動型の【神の頭脳】【神の左手】はしょうがないにして。
それを抜きにしても後は実践あるのみ、と言うレベルにはあると判断された訳です。
そして、ある意味飛び級で卒業した俺は冒険者の道を一歩踏み出したわけでした。

話が前後するが、養成所に通っている段階で【神の左手】がようやく使えるように。
武器を使用した戦闘訓練が効いたようです。
そのせいで白兵戦の訓練が大変で……さっきも言ったけどこれ、ＯＮ／ＯＦＦ効かないから。
体が動く、と言うか動かされている感じなのでどうにもちぐはぐに

なると言う。
チャンバラ剣術で神鳴流と言うその筋では有名らしい剣術を使う人と互角に戦えるんだもん……

その人曰く「剣は上手いが戦い方はなっていない、心技体が一致していない。」との事。
いや全くその通りだと思います。
あくまでも「武器の使い方が上手くなる」だけだもんなぁ。
「戦いの駆け引き」ができるわけじゃない。
雑兵相手なら無双できても、達人クラスだと勝てなくなるそんなレベル。
この辺は自身のスキルを上げれば問題ないわけだけど……俺、基本後衛なんだよなぁ。

で、以前言っていた視覚的にルーンを隠す薬を開発してみる。
ずっと手に包帯巻きつけてるわけにもいかないし。
色塗って誤魔化しているようなもんなんですけどね。
セットになってる薬品を塗らないと基本的に色が落ちない、と言うだけで。
ちょっと売ってみたら、刺青を隠したりする薬としてそれなりに売れました。

しかし、世の中そんなに甘く行かなかった。
何故かこのルーンの部分だけは一日で薬品が剥がれ落ちてしまうと言う。呪いか？
……原因は不明。要改良です。

それはさておき。
一歩踏み出した俺は養成所の方から紹介された冒険者ギルドで色々依頼をこなす事に。

それほど規律のきつくない代わりに結束も緩い、大規模ギルドと言うよりは
養成所のＯＢ・ＯＧ懇親会みたいな所だったので俺としては楽でした。
ぶっちゃけて言えばしがらみがそれほどないと言う。

どこかのメンバーに入れてもらって任務達成したら報酬を分けてもらって、
また違うメンバーに入れてもらって違う依頼へ、みたいな感じで。
依頼内容も荷物の移送とか、農作物を荒らすモンスター退治とか、
素材を得る為の狩猟とか。

そんな中で【瞬動術】と言うのを教えてもらいました。
足に魔力（気でも可）を集中する事で瞬間的に加速すると言う短距離移動術です。
これを極めると【縮地】になるとか。
ついでに【虚空瞬動】と言うのも教えてもらえました。
空を蹴って行う【瞬動術】みたいなものです。
【瞬動術】自体の欠点ー一度動き出してしまうと方向転換不可ーを補う手段であり、
空中でも自在に方向転換可能になりました（空を飛んでるわけじゃないんですが）。

これで戦闘時の高速移動手段を確保した訳で。
【文珠】で〔加〕〔速〕と組み合わせると凄い事になりました。
こけたら俺が大惨事だなと覚悟するぐらい。

そうやって実績を積んで、自分に自信がついて来た辺りで
当初の目的である遺跡探索に乗り出したわけで。
この段階で既にアリバイはできているような物なのだが、

具体的な遺跡の描写とか求められると困るし。

まぁ、遺跡と言っても天然の洞窟なんかをそのまま改装したようなやつから、
明らかに人工物な物まであるわけで。
一人旅の時は〔探〕〔索〕とか使って遺跡攻略してました。
防衛システムとかもどうにもならなかったら宝具射撃とか死の線切ったりしたし。
自分の能力も使って、できる事と出来ない事の把握をしておく必要もあるし……
出来るだけ使わないようにはしたけど。

少々話は前後するけど、冒険者初めて1年ほどして（つまり、6歳くらいに）
ようやく【文珠】の二文字制御が可能になったよ！
これで対石化治療対策は問題なくいけるわけだ。
よく考えれば、【文珠】だと何個使うか分からないんだよな。
村の総人口なんか覚えてねーぞ。１００人とすれば最低２０２個いる計算か……
できるだけストックは多めに取るようにしてるけども、足りなかったらどうしょう。

【王の財宝】も十数個単位で撃ち出す事が可能に。
まぁ、精密射撃とは程遠いので『死の点』を狙って撃ち込むとかは無理なんだけど。
後、【神の左手】を利用して宝具なども振り回してみた。
中華製夫婦剣みたいな二刀流とか、雷神の鎚みたいなでかくて重い武器とかも
余裕で振り回せました。
ノリと勢いで斬艦刀・星薙の太刀！とかやったら辺りが大変な事に

なったのもいい思い出です。
何で液体金属のお陰で刀身サイズ自在の斬艦刀があるのかは、俺に聞かないで欲しい。

【幻想殺し】も確認できる時に確認してみた。魔法的なトラップ、ゴーレムとかの
魔法生物も機能停止できました。
廃棄された研究所っぽい遺跡の番人やってたキメラを殺せたのは予想外だったけど。
「種別：魔法生物」に効果は絶大の模様です。
まぁ、あえて白兵戦を挑むような真似は出来るだけ慎みたい所ではあるんだけど
（その時は〔停〕〔止〕と【文珠】を投げつけて確実に動きとめてからやった、反省している）。

あ、分泌液とかは防げませんでした
（別のモンスターだが、お陰で手と言うか腕が大変な事になった）。

【白兎】も何度か試してます。ぶっつけ本番とかそれこそ問題だと思うんで。
最終形態で大型の竜種とか相手にしてみましたが、やっぱり攻撃力不足と言うか
決め手不足が問題点。
いや、物凄いスピードでかっとんでソニックブーム引き起こすだけで大概なんですが。
ＡＲＭＳ殺しは実装されてませんでした。まぁ、他にＡＲＭＳいないししょうがないや。
後、最大の問題点は最終形態時は他の能力が起動しないこと。
つまり、【白兎】の能力のみで相手しなければならないと言う……。

どっかのゲッターみたいに、とっさにチェンジを繰り返すのは流石に無理でした。
体の負担が本当におかしい。
１０分やってそのまま倒れて、そのまま全裸で翌日丸一日寝込んだぐらいには疲労した。
人のいない所でよかったぜ、全く。

まぁ、傍から見るとでかい怪物がいきなり全裸の少年になったかと思うと
また怪物に戻るんだからちょっとシュールだ。

話を戻そう。
遺跡で見つけた物品とかは基本売るようにしてます。
どうしても欲しいのは宝物庫の中に突っ込んでるけど。
場合によったら遺跡で朽ち果てた冒険者達の成れの果てとかあったりするんで、
そういう遺品もできるだけ持って帰る様にしてます。
ギルドの方に回したりして、遺族の方に渡ればいいなぁ、と。
偽善だけどしないよりはマシさ！

と言うか、持って帰るだけなら凄い楽なんだ。
問題は個人の積載容量を明らかに越えた量を表立って持って帰れないと言うことであって。
その辺がネックだったので暇な時に異次元バックとも言うべきトランクケースサイズの物を製造してみたり。
容量が無限なわけでは無いけど、鞄の中の空間を弄って見た目以上に収まるように
設計した一品です。あ、生物は入れられません。

ちょうど滞在先の街で余分に作った一つを売ってみたら凄い値で売

れました。
……そりゃそうか。

影魔法の応用で自分の影を倉庫に設定できるらしいけど、そっち方面はさっぱりだからなぁ。
天は二物を与えずである。
……いや、この場合はこれ以上とか贅沢言ってるんじゃねえ、か。

後、複数で遺跡潜った時の為に特製眼鏡を作ることにしました。
魔力なんかの解析とか、熱源探知とか、超音波視覚なんかを眼鏡のつるに仕込んだダイヤルで設定できる万能眼鏡です。
勿論、魔眼を防ぐ為の処理なんかもばっちり。
この対魔眼処理（と言うより、最終的に対精神魔法処理になってた）は、
最低でも月一でやり直して効果の強いのにしてます。
肉体的な防御力はさておき、精神的な奴を防ぐ手段が少ないんで。

人前での攻撃手段は相変わらず『魔法の射手』と『武装解除』、
それから養成所で学んだ護身レベルの戦闘術ぐらい。

『魔法の射手』とは言っても１００矢くらいは余裕でぶっ放せるんですが。
後、バリエーションを持たせて射出スピードに強弱を持たせたり、ただ直進しない飛び方をしたりさせてます。
どの道追尾機能は持たせられるんだけど、迎撃されにくい手段を用意するに
越した事は無いという。

後はひたすら防御結界張ったり、回復魔法したり、拘束結界設置したり、

自作ポーションを投げつけたり渡したりして援護したりです。
それに伴って、ポーションシューターと言う魔法銃みたいな奴を作成してみました。
その名の通り、薬品などを遠距離へ打ち出す銃型の射出装置です。
これで離れた味方への支援が楽に出来るように。
腕前の方は【神の左手】でカバー。

業界入って1年（俺、実年齢7歳）もすると、
「後ろからの援護がここまでありがたいと実感したのは久しぶり」
と言われるぐらいのレベルには達したようで。
俺としては嬉しい事です。やっぱり褒められると伸びます。

そうやってるとそこそこ有名な冒険者、と言う認識をされ始めたらしく、
一筋縄ではいかない依頼なんかを頼まれることも。
大型モンスター（竜種等）の捕獲とか、退治とか、撃退とか。

しかし、一番てこずったのは何と言っても吸血鬼退治である……
いや、本気で大変だった。
真祖吸血鬼マジ強い。

依頼内容の詳細は守秘義務のため語れないが、
魅了の魔眼で前衛が操られるハメになってＰＴが半壊。
接近戦は剛力無双だし魔法の威力も恐ろしいし、本気で死ぬかと思った。
（久々に人間サイズの敵に本気の瞬間防御障壁を素手で（！）ぶち破られてマジ焦った、
慢心しすぎだ俺）。
結局、その場で無事だったのは俺だけでした。後のメンバーは吸血

鬼化されてしまった状態に。

何とか逃げ出して（覚えてよかった【瞬動術】。そして【文珠】様様だ、いやほんと）

体勢を整え、そいつが1人の所を宝具全弾発射でぼこぼこにした後『点』ついてやりました。

ちなみに、吸血鬼に【幻想殺し】は通用しない模様。

儀式魔法とかで吸血鬼になるとか聞いてたから通用するか、とも思ったんだが

「種別：吸血鬼」らしいこいつらは。

吸血鬼化されたメンバーは親吸血鬼が死んだ時点で吸血鬼化治療薬作って飲ませて

何とかなりました（親が死んだら解けるかと思ったけどそうでもなかった）。

……本当に大変だったのは、この後元に戻ったメンバーに完全後衛型の俺が

どうやってあれを倒したのかを誤魔化す事だった訳ですが。

結局、【文珠】で全員で何とかかんとか倒したように〔誤〕〔解〕させる事にしました。

吸血鬼を倒した後で吸血鬼化治療薬飲ませたんじゃないか、と。

みんなごめん……本当は嘘なんかつきたくなかったが流石にバレると悪目立ちすぎる。

この手の使い方はほんと自重しないとな……

これを機に、抗吸血鬼化薬の研究開発・製造に乗り出すことに。

もう吸血鬼と関わる事なんて無いと思うけど。

と言うか、何百年物の真祖クラス吸血鬼とかもう勘弁して欲しいです。

その時の吸血鬼の本拠地で分け前としてもらったのが俗に言う『別荘』である
（一番の功労者だから持っていけと言われました、本当に感謝）。

ぱっと見はボトルに入ったジオラマ模型みたいな感じなんですが、付属の魔方陣に入るとあら不思議！別世界がそこに！！
邸宅……と言うか城を中心に、密林やら砂漠やら火山やら森丘やら雪山やら樹海やら。
どこの狩猟ゲーだよ。
『別荘』に入るとそこは妖精郷でした、さあここの謎を解き明かそう！
と言われてもそれはそれで困るんだけど。

中央の城にある魔方陣から各エリアに移動可能で、ちゃんと拠点も出来てました。
勿論、実際にモンスターもいたよ！

後に城に残された文献を紐解くと元々の『別荘』の持ち主は生物、というか
モンスターの研究をやってたそうで。
つまり、ここは巨大なモンスターの動物園と言うか、
保護・飼育・研究施設のようなものだったとのこと。
問題は製作者の意図しない勢いでモンスターが大量に繁殖したと言う事で……
結局人の領域を確保する為に結界を張るだけで一杯一杯だったらしい。
そして放置された？この施設は生態系が進化してこんな有様になってしまったと言う事である。

俺にとっての幸運は、詳細なエリア地図とモンスター図鑑、植物図

鑑等があったと言う事で。
普通に世間での希少種がたくさん生息してたり、絶滅種が生息してるっぽい。
……まぁ、本格的に使うとなると調査しないとならんだろうけど。
城自体も探検してみました。

入ったら女性型自動人形がお出迎えしてくれました。
精巧な着せ替え人形を等身大にしてメイドロボに仕立てた感じ。
ケットシーとかじゃなくてよかったです。

名前は特に無く、この『別荘』と言うか城を建てた時からずっと稼動してるそうです。
どうやって稼動してるんだろう、と思ったんですが野暮なので聞くのは辞めました。
下手に聞いて「心魂機関（ゴスペル・エンジン）」です、とか言われても困る。
同型機が（本当に同じ顔、髪の毛の色と服だけ違う）何機かあって、城などの施設の維持等を務めてるそうで。
俺、侵入者にならないの？と聞いたら、いくつかの質問をお許し下さい、
と質問してきたので答えました。内容をダイジェストでどうぞ。

「貴方の心臓はいくつ？」1つです。
「貴方の血は何色？」赤いです。
「貴方の左足の指は何本ですか？」5本です。

そんな感じでいくつか質問をされて、問題ありませんと返されました。
……どういう基準なのかさっぱりわからん。

ちなみに、ご主人様は例の真祖吸血鬼が2代目だったようです。
つまり誰かが作った『別荘』をあの吸血鬼がちょろまかしたか奪い取ったかした、と。
その吸血鬼も死んじゃったんだけど、と言うと、
では新しいご主人様ですね、と宣言されました。
いやいや、そんなのでいいのかあんたのご主人様は？

構わないそうです。要はこの『別荘』を使う人なら誰でもいいようで。
しかし、裏を取るぐらいは考えるべきだと思うんだがなぁ……
いや待て、嘘をついたところで前の持ち主が戻ってきたら牙を剥く可能性もあるのか。
この自動人形にどこまでの性能があるのかはわからんけど。

で、色々城内を案内してもらいました。
流石に宝物庫や武器庫まではなかったけど図書室と言うか書庫はあったのでラッキーです。
後、資料室とか研究室とかいった類の物も。
変わったところでは時間調整室なるものが。
団体で入った場合、ちょっとしたずれで滞在できる日数が変わるのでそれを調整する為の部屋らしい。
後、この中央の城の地下にもダンジョンが広がってると教えてくれました。
怖くて確認してません。地図も無いし……。

後、この『別荘』の中は時間の流れが変わっているらしく、ここの一週間は外の1時間のようで。
専用のカレンダーまでちゃんと置いてあります（1ヶ月はきっちり35日）。
ここで1ヶ月過ごすと外では5時間、仮に1年（12ヶ月）過ごす

と１２×５で
二日と半日（６０時間）経っている、と。
最大の欠点は、『別荘』に入ると一週間きっちり経たないと外に出れない、と言う事だ。
やる事が多いと大歓迎だが、ちょっと休憩のつもりではいると暇になるな、これは。

まぁ、幸いにして時間は有り余っていると言うか吸血鬼退治と言う大物仕事
（一生に一度あれば十分レベルだそうな、そりゃそうだ）のお陰で心身ともに疲れたわけで。
下宿している宿屋に戻って暫く充電し、『別荘』の方に取り掛かることにしました。
その間に何かあったら困るのだが、下宿先の方は問題ないだろう。
払うものさえ心持ち多めにちゃんと払っておけば下手な詮索とかしない所を選んでいる。

それに、ここの管理人さん（女、未亡人。死んだ冒険者の旦那の遺品渡した縁で知り合いました）
には色々世話したり世話してもらったりしています。いろんな意味で。
切欠としては、遺品渡した時に酒に付き合ったら酔った勢いで襲わ……おっと、この先は無し。
ともかく信用は出来る。信頼が出来るかどうかは別にして。
念の為に部屋に簡易阻害結界を張っておいてこの部屋を意識しないようにはしておいたけど
……これで死んだら俺マジ孤独死だな。
一週間１時間なのでそこまで神経質になる事も無いのだが、念のための措置である。

と言う訳で再び来ました我が『別荘』。
まず手をかけたのはエリア地図と図鑑の確認。優先するのは前者で。
全部見つけようとするとどれだけ時間かかるやら……
事前に用意しておいた冒険者用セットを担いで、いざ出発である。
（この時【王の財宝】の中に放り込まなかったのは浮かれていたからに違いない。）
まずは、楽そうな森丘からスタート。

森丘踏破に実時間で６０時間掛かりました……はい、１年です。
こ、こんなに広いとは想定外だったわ、いやマジで。
道というか地形そのものは地図のお陰でわかってるので道に迷う事はなかったんだけど。
それでも、生態系の進化かあるはずの道がなかったり、獣道ができていたり。
その辺のマッピングも出来る範囲でこなしつつ、やり遂げました。

モンスターに関しては襲ってくる奴と、食料調達時にのみ交戦する事に。
いや、素材になるモンスターとかもいるから大変美味しい場所なんですけどねここは。
それ以上にここはできるだけありのまま残しておかなければならない場所に違いない、
と自然保護派みたいな事を思ったり。
モンスターだけじゃなくて、植物とかキノコとか鉱石とか昆虫とか魚も
今ではそうそうお目にかかれない種類がごろごろある始末で。
錬金術師的な目から見てもここはいい所です。
そうそう資源が尽きる、って事もなさそうだし。
そもそも、『外』の大体２週間が『別荘』の約６年に相当する訳で……

1ヶ月で12年ちょいだし、完全に根絶でもしない限りは大丈夫か。
もしくは生態系を著しく狂わせるような何かをするとか。

いったん外に出て、手に入れた素材なんかを売り払いつつ再びアイテム作成に着手。
『別荘』の残りエリアは密林・火山・雪山・砂漠・樹海。城の地下ダンジョンは一先ず無視。
樹海はさておき、後はちょっくら環境が厳しそうなのでそれを打開する装備を作ることに。

耐寒・耐熱効果もある『究極技法』と呼ばれるものもあるんですが、ちょっと俺には無理でした。
何でも反発しあう気と魔力を合成させるとかどうとか……俺、気の方はさっぱりなんですよね。
魔法使いなんだから当たり前と言えば当たり前なんですが。

それはさておき、温度・湿度調節型フード付きコートを開発してみました。
こいつを着込んでいれば大抵の環境は快適、とまでは行かなくても不自由しないぜと言う。
まぁ、それでも念の為に耐寒装備は充実させた状態で雪山行ったんですが。

……何故雪山か？　俺、暑いより寒い方がまだマシだと思ってるんだ。
ほら、夏は全裸になっても涼しくならないけど冬は着込めば暖かくなるっしょ？

そしてやっぱり大体1年後。俺は戻ってきた。
ごめん、寒いにも限度があるわ。何度凍死を覚悟した事やら。

雪山と言っても全部が極寒地域とかと言う訳では無いんだけど、それでもつらかった。
何が一番辛かった、って最大の切り札でもある【白兎】の使い所が難しかった事。
だって、雪山よ？　吹雪いてる雪山で全裸なんてなったら死んじゃうよ俺！
幸いにして使うことなんてなかったわけですが。
必死ぶっこいて逃げたり宝具撃ち込んだりしてどうにかした。
吹雪とかのせいで地図が使えないこともあって、予定より時間がかかったなぁ。

この後、砂漠・火山・密林・樹海の順番で踏破していきました。
大体それぞれ一年かかってる計算です。
つまり、ここをコンプしただけで６年掛かっている計算に。
実際にはトータルで１５日しか掛かっていないと言うこのマジック！

……まさか詐称薬使わずに済むようになるとは思わなかったぜ
（実年齢：まだ７歳。肉体年齢：１３歳）
うん、１３歳の割には背丈があると言うか。１５，６ですと言っても通じると言うか。
宿の管理人さんに素の状態で出会っても不審がられなかったから問題ないはず。

さて、次は図書室の探索だな……

第3話：そして、冒険して狩猟した話。（後書き）

本来はこの後、図書室の探索から研究、そして……
と続く話だったのですが、ちょっと長すぎたのでここで切り。

しかし暑いですね。
皆さん、熱中症とかには気をつけましょう。

８／１９
投稿。
タイトルに「：」を入れ忘れたので入れなおし。
細かな部分を手直し（「た」→「る」など複数個所、行など）
８／２０
感想にて指摘があったので追加訂正。
流石にアイルーは自重した。
別の方面に自重しなかったけど反省はしない。
後、それに伴っての変更と文章のおかしかった所を訂正。
眼鏡の設定を追加。魔眼どころか精神系を防ぐぞ！

第４話：そして、連れ戻された話（前書き）

手直しのほうも終わったので、投稿したいと思います。

……致命的なミスは無いと思いたいなぁ。

第4話：そして、連れ戻された話

さて、エリア踏破も完了したので今度は図書室の本・資料室の資料を片付けることにしました。
……地下のダンジョン？知らね。

最初は【文珠】で〔速〕〔読〕とやろうとしたんですが途中で問題が発生。読めない本がある。
ちと古い言語のようで……
しょうがないので辞書を探し、〔習〕〔得〕する所からスタート。
その後、〔習〕〔得〕した内容を思い出しつつ〔理〕〔解〕して、成果を確認してから
改めて〔速〕〔読〕開始。
〔記〕〔憶〕だと本当に覚えるだけだからなぁ。応用とかが利かないのだ。
テストの為に一夜漬けしたはいいけど、それは後に残らない訳で。

で、色々勉強になりました。魔法使い的にも錬金術師的にも。

一番の成果は毒・石化・呪い等についての考察・研究レポートが書かれた本に出会ったこと。

色々解説してもいいのではあるが、これを解説しだすと長くなるので結論から述べよう。
石化治療薬の開発は材料さえあれば可能、ただしそれで治るかは分の悪い賭け。だそうな。
そこに書かれた治療の為の材料は、幸いにして『別荘』で調達可能な代物ばかりである。
むしろ、この時代ならば『別荘』でもないと調達できない物の方が

多い。

問題は、悪魔の石化光線?を直せるほどの薬が完成するかと言う点だ。

例えば爵位持ちの悪魔だと、永久石化クラスの石化を行ってくる事もあると言う。

そうなってくると、ここに書かれた薬では治療不可なわけで。

どちらにしろ、石化サンプルがあるわけでもないので本の通りに作るしかないという。

読み直したり他の資料とか本を参考にしたりして、修正かけられる所はかけるつもりでいるが。

しかし、ぶっちゃけてしまえば俺が無理に作る必要はどこにもないのだ。

既に治療・解除する為の手段は確立しているし、それを使えばいいわけで。

なら、俺はどうしてここまでやる気なのか。自分でも実はよく分かっていない。

ある種の意地なのか、ただの自己満足なのか……。

その作成と調査の傍ら、本の中で興味があったものを色々試してみる事にする。

と言っても精々遅延呪文・無詠唱魔法くらいでしたが。

前者はキーワードや時間を設定しておく事で、

自身に待機していた魔法を発動させる手段である。

最も、余り長時間は待機させて置けないらしい。

まぁ、待機時間過ぎても暴走するわけじゃなく消滅するみたいなのでよしとする。

後者はその通り、一つの魔法を発動しつつ別の強力な詠唱呪文を詠唱できると言う物で。
まぁ、意識せずに詠唱できる呪文としか併用できないと言う問題点はあるみたいが、
そこは慣れと実践あるのみである。

後、これは資料のみだが『闇の魔法』と言われる物もあるそうで。
何でも自身が唱えた魔法を体に取り込んで劇的パワーアップを図る、と言う手段だそうだが。
ただ、これを習得しているのが『闇の福音』と呼ばれるその筋では有名な吸血鬼
（エヴァンジェリン・グーデリアンだっけ？そんな名前の真祖吸血鬼。６００年物）だそうで。

そんなもんとほいほい会えるか！仮に会った所で教えてくれるか！
と言うか、かち合った瞬間それは戦闘だろう常識的に考えて。
何しろ、相手は泣く子も黙る元６００万ドルの賞金首。
ここ十数年は全く活動の報告を聞かないために賞金こそ凍結されている状態ではあるが、
いつどこで人間に牙を向けるやら……
頼むから、孤島に城を構えて血袋と一緒に優雅な吸血鬼ライフを送っていて欲しいものである。

で、一番ショックだった事。
魔力容量を増やす為の魔法をぶっ放したり負荷を掛けるトレーニングって、非効率的だそうで。

生まれた段階で魔力容量の殆どは決定してしまうそうです。
なんと言うか、筋トレにはうさぎ跳びだ！と頑張ってきたのが無駄なぐらいショックです。

と言うか、折角作った魔力養成ギプスシリーズが……ゴミ一歩手前に。
けして全く上がらない訳ではないけど、どっちかと言うと魔法の効率化とか
そっちの方がいいらしい。
容量は増えにくいけど、使用量は減らせるよね？と言う事で。
そんな訳で効率化の方に力を入れてみることにしました。

地下のダンジョンにもちょっとだけ足を踏み入れてきました。

地下1階の段階で怪物のスペックがおかしい。
撤退する間もなく秒殺されて、気が付いたら入り口で寝てた……
どーなってんだ。
どうやら死なないらしいと判断したので、改めて突入するとさっきと構造が違う？
……不思議のダンジョンだこれっ！！そりゃＭＡＰもねーわ。
結局、やっぱり秒殺されて入り口へ。ダメだこりゃ。

と言うか、エンカウントした見た目辮髪に仮面を被った伸縮自在のトンファー使いマジ強かった。
必殺の宝具連続発射を全て回避、打ち落とすとかアンタは一体なんなんだ！！

この城の自動人形に聞いてもダンジョンについては何も知らないとの事。
ゲーム的に言うと、２周目の後半以降から突入できる資格があるような所なんだろう、きっと。

この件に関して俺に出来た反抗はただ２つ。
入り口に首吊りロープをぶら下げる事、

そして「この入り口を潜る者、一切の希望を捨てよ」と看板を立てておいたくらいである。

しかし、何の為のダンジョンだこれ？　地下に大魔王とか住んで無いだろうな。

まさか、このダンジョンの地下最下層に住む者こそがこの世界の隠しボスかも知れん。

もしくは、地下を降りきると荒廃した大地と対照的なまでに秩序だったアーコロジーがあるとか……いやまさか。

しかし、それよりも大事な事がある。

一体誰が、俺をダンジョンの入り口に戻したのか、と言う事だ。

とまあそう言う感じで、本を読みふけって石化治療薬の開発に乗り出しつつ、

気分転換に魔法の訓練をしたり各エリアに遠出してみたり。

幸いにして、暇と時間だけはあったのでひたすら頑張りました。

勿論、外の事も忘れてません。

大体2日に1回は外に出て依頼を受けたり戦利品や素材を捌いたりしてます。

そんな感じでかれこれ合計『別荘』時間で6年ほど過ごした計算になりました。

（実年齢：まだ7歳。肉体年齢：１９歳）

この数年でだいぶ逞しく、わんぱくに育ったと自負しています。

石化治療薬も無事完成しました。

もっとも、6年の大半の時間はこいつに費やした訳ですが……そ

れだけの完成度はあります。
勿論、臨床試験もやりましたよ？
正確にはまさか使うことになるとは思わなかった、ですが。
それ以外にも気分転換とかに色々作ってみたり。何かの機会で紹介するかもしれません。

あ、意外と年齢が上がってる事はばれてません。
時々外に出て活動してる、と言うのも手伝ってるでしょうけど。
まぁ、気にして無いだけかもしれません。

管理人さんなんかは「依頼に出るたびに逞しくなっていくわね、若いっていいわ～」
とか言ってましたが。
正確には依頼から帰ってから逞しくなるんです。
後、貴方もまだまだ若いです。夜とか特に思います、はい。

で、そんな俺にも危機が迫っています。
ある日懇意にしてる情報屋が教えてくれました。
何でも『悠久の風』が自分を探しているそうです。
またどうしてそんなビッグネームな組織が、と思ったけどそりゃそうだ。
かれこれ2年……3年近く失踪してる状態だしなぁ、世間的には。
黙っておいてね、と幾らか握らせておいたけど……向こうが幾ら積むかだ。
もしくは俺の払った額と相手のネームバリュー、どっちが上回るか。
うわ、ダメっぽい。

いや、別に帰りたくないわけでは……当初の予定年数の半分も消化して無いのか。

『別荘』を含めると余裕ぶっちぎって消化してるわけなんだが。
石化解除手段は確保したので帰ってもいいが、ここで帰ると
原作開始前まで燻る必要がある予感！
『別荘』に入っててもいいけど、そんな暇があるかどうか。
こういう事やっちゃってるから監視の目が厳しいだろうしなぁ。正
直読めない。

ん……閃いた。
取りあえず、【王の財宝】から〔破戒すべき全ての符〕出して、
それと作っておいた石化治療薬を一緒にメルディアナの魔法学校に
郵送すればいいじゃないか！
冷静に考えてみるとなんつーもんを郵送で送ろうとしてるんだ俺、
と言う感じはするが
他に手段はなさそうだ。
【文珠】の複数同時使用は俺だけしかできないしなぁ。〔解〕〔呪〕
案はお預けと言う事に。

いや、一応〔転〕〔移〕で自分が届けてこっそり帰るプランもある
けど、
魔法学校がイメージできん。なんと言うか冒険者生活が長くて濃す
ぎて……忘れかけてます。
帰ってみると「あー、懐かしいなぁ」と言う感覚になるだろうみた
いな。

後、根本的な問題として現実世界と魔法世界の明らかに隔絶された
距離を
〔転〕〔移〕することが可能なのかどうかだ。
やったはいいが、全く別の異世界に移動したとかマジ勘弁して欲し
いです、と言う。

そう決まれば善は急げ、早速準備である。
取りあえずは自分を欺瞞する所からスタートである。
この姿格好なら当人とばれる事は無いと思うが（そもそも、１０歳以上も上だ）、
魔力反応を辿られる恐れがある。
折角なので魔力を隠蔽するブレスレットとアンクレットを用意してみた。
と言っても、全く魔力を隠蔽する訳ではなく人並みの魔力量しか無いように欺瞞する訳である。
ついでに、魔力と言うのはある程度個人の「色」と言うか指紋のように個人差があるのだが、
それを分かりにくくする作用もある。

この時、俺は物凄いポカミスをかましていた。
俺は『悠久の風』が『ネギ・スプリングフィールド』を探している、と勘違いしていたのである。
探していたのは『アルミール・カモベール』だった……冷静に考えればそりゃそうだわな。

そんな事は露知らず荷物を異次元バッグへ放り込んで、
長い間離れるから部屋を解約する旨を管理人さんに。

現実世界まで荷物を届けてくれるような運送会社となると、大都市の方に行く必要があるのだ。
……流れ流れて腰を落ち着けていた片田舎の中規模都市には流石にないのです。

そういう事は早く言えと怒られました。
むしろ、明日にしろとお願いされました。
翌日、すっきりした笑顔の管理人さんに見送られて旅立つ事に。

……何も言うなっ！　俺だって男なんだっ！！

そして日数かけてやってきました大都市に。
やっぱ喧騒具合が違うわ。おのぼりさんになりそう。
まずは飯食って、そっから郵送するか……しかし、どれくらいの値段になるのやら。
どっかで宿とってもう一つ異次元バッグ作成してそこに放り込んだら鞄一つ分じゃね？
よし、そうするかと飯屋で飯食いつつ脳裏で今後の活動をシミュレーションしていると、
それは来た。

一瞬静まり返る店内。
１人の男が入店してくる。
背広を着こなした眼鏡の中年男性－歳は３０代後半ちょいか？－だ。
無精髭を生やしたやたらダンディな人だ。
そいつは、真っ直ぐ俺の方へ近づいて飯を食ってたテーブルの真向かいに座ると
辺りに会話を聞かれないようにしながら、俺に話しかけてきた。

「ネギ・スプリングフィールド君だね？」
「違います。」

真顔で超即答。コンマも掛かっていない。
人の発言に被せなかっただけ感謝して欲しい。
そして、無言でお互い視線を交わす。

見た感じ俺より強い。
戦いなれた歴戦の戦士、と言うオーラを感じる。
俺が、なりふり構わず全力全開で行けるなら勝てるだろう……と

言う所か。
そんな事をすればこの飯屋が全壊確定・流れ弾で重軽傷者多数なのだが。
取りあえずはこのテーブルをひっくり返して目くらましにする所からスタートか？
【文珠】でも構わないが……

「うん、確かに僕の勘違いだったようだね。」
俺が行動に移す前にあはは、と笑うダンディメガネ。

「今の君は『アルミール・カモベール』君だったね。」
そう言って俺に投げて寄越したのは……俺の偽造身分証じゃねえか！？
いつの間にスリ取られた？いや、そもそも鞄から出してねぇぞ？

「まず、君を探す為にやったことはどこへどうやって移動したか、と言う調査からでね。」
と尋ねてないのに語りだすダンディメガネ。

ミステリ物で片平なぎさ（船越英一郎でも可）主演の素人探偵が断崖絶壁の崖の上で犯人を問い詰める並に長い話なので、ダイジェストでお送りします。

まずは俺の顔写真から年齢が上がった場合どう変化するかをイメージして、
（見せてもらったが、今の俺と殆ど同じ顔だった。ダンディ曰く親父にそっくりとの事）
年齢が上がった状態の写真を作成し、そこから近隣の空港・港・転送ポートを虱潰しに
聞いて回ったらしい。

5歳児の状態で密航すると言う可能性はあったが突然錬金術を初めた所を見ると、
この『家出』は予め計画していた可能性の方が高く、堂々と出国した可能性を考慮したらしい。

同時に俺の交友関係ー と言ってもお祖父ちゃんとネカネさんとアーニャさん以外を除くとごく僅かーを洗い出し、そこから俺と外の接点である魔道具などを扱う店を特定。
後は、芋づる式に俺が偽造身分証明書・旅券等を用意して貰った場所とかを突き止めたという。

で、投げて寄越された偽造身分証明書。
作る方は作る方で何かあった時の為の保険としてもう一通作成していた様なのだ。
それを持ってきたそうである。こういう事態を予測して。

そこから魔法世界に移動して（ゲートの関係で時間が空いたそうだが）、
地道に聞き込みを進め……る必要は然程なく。
冒険者界隈で最近時々名前の挙がる『アルミール・カモベール』の足跡を辿ってた、と。

その頃には俺が遺跡なんかに一人で潜る事もあったので、
足跡を辿るのが難しくなったそうなのだが。
吸血鬼ーそれも真祖級ーを一匹滅ぼしたと言う有名なＰＴの一員に俺の名前を発見。
（幸か不幸か、俺が『別荘』を持ってると言う話は聞いてないようだ。
俺が吸血鬼化を治した、と言う事以外をダンディが喋らないと言う

事は、知らないに違いない。）
そこから再び足跡追跡。
そしてようやく今日追いついた、との事である。

……あれか、一日余分に泊まったのが仇になったか！？
まさか女性で失敗するとは思わなかったっ！
いや、タッチの差だからそれほど嘆くような原因でも無いか。
一番の原因は冒険者としてそこそこ名を上げちまった、と言う事か。

まぁ、ともかくそこまで語られると俺の完敗である。
『マギウスクエスト　ネギの奇妙な大冒険』完、である。
しかもアンケート悪くて打ち切りルート。
第二部にご期待下さい、となるかどうか。

「俺の負けです、刑事さん……」
と神妙な顔をして両手をグーにして手首をくっ付ける形で上に向けた状態で出す。
これが日本の伝統的な手錠をかけられるスタイルだっ！

今の俺に出来るのは、敗者である事を受け入れるだけ。
……この屈辱をばねに、次こそは勝つ！！

「じゃ、行こうか……じゃなくてね。」
意外とノリがいいぞ、このダンディメガネ。
ノリダンディと名前を変えてやろう。

「え、俺はここにいていいんですか？」
行こうか、じゃないと言う事はそういう事だろうと明るい顔で聞いてみた。
明るい顔で違うよ、と返されました。おい話が違うぞ。

刑事ではないそうです。
名前は高畑・T・タカミチと言うそうで、噂の『悠久の風』のメンバーとの事。
俺の親父とも面識があったそうで。
ノリ・ダンディ高畑本人は親父のことを話したがってそうでしたが、あえて尋ねませんでした。
今更いない親父のこと語られてもなぁ。俺は俺だし。
取りあえず、そのミドルのTは何のTだ、と聞いておきました。
笑って誤魔化されました。

いいだろう、お前のそのTは俺の中ではテンタクルスのTだ。
怨むなら自分のその浅はかさを怨むといい。

こうして結局、俺は荷物を故郷へ送るどころか俺自身が故郷へ送られる事に。
あ、ちゃんと年齢は相応の年齢に戻してます。詐称薬で。
まさか年齢を下げる為に飲む事になるとは思わなかったぜ……

第４話：そして、連れ戻された話（後書き）

Ｔが何の略なのかってどこにもありませんでしたよね？
俺が見落としているだけか……？

ここまでの話を読み返すと魔力容量に関しての食い違いがひどいです。
……まぁ、主人公が勘違いしていた＋実際に容量が増えた感覚は掴めていたので
気づこうともしなかった、と言う辺りでお願いします。
うさぎ跳びがどれだけ非効率だろうが、
やった人間が満足してるなら問題ないだろう、と。
プラシーボ効果とも言う（多分違う）。

８／２３
改行。
幾つか文章を手直し。
「が」→「を」とか「世界移動」→「全く別の異世界に移動」など。
８／２５
「６００万ドルの賞金首」→「元６００万ドルの賞金首」に変更。
横棒で線引っ張ってあるんですよね、あれ。

【文珠】を大量に送りつける部分を削除。その関係で文章訂正。
よく考えると、複数使用可能なのは製作者だけだろうあれ。

第5話：そして、帰国して卒業して出国する話（前書き）

と言う訳でお待たせしました。

第5話：そして、帰国して卒業して出国する話

そんなわけでメルディアナ魔法学園よ！私は帰ってきた！！

……すいません、調子乗りすぎました。
ただいまベッドの上でネカネさん主催のスーパー説教タイム中の
ネギ・スプリングフィールドです。

どうしてこんな事になったのか。
帰国↓魔法学園へ↓出迎えたアーニャさんが見事な飛び蹴りを顔面に！！
そのままマウントポジション取られてぼっこにされました。
泣きながら何か言ってましたけど、最初の飛び蹴りの段階で意識もほぼ飛んでました。
何言ってたのか覚えてません、はい。

え、防壁とかは張らなかったのかって？
やっぱり、何も言わずに黙って出て行ったのに後ろめたい部分が全く無かったといえば
嘘な訳で。
一発くらい黙って殴られるべきだろう、と。
蹴りが飛んでくるとは思いませんでした、はい。

そのまま学校の保健室に直行です。
気がついたらその後はネカネさんからの涙ながらの説教が待ってました。今真っ最中です。
当然ですね、はい。
これが大体昼ぐらいから日が落ちるまで続いたわけでして……
俺が全面的に悪いので、聞き流す訳にも行かず。

尻叩き百発、とかされないだけマシと思っておこう。

その後は、向こうで何をやっていたのか聞かれました。
高畑・テンタクルス・タカミチさんは俺を送り届けた後でまた仕事に戻ったので、
事情の説明とかはしていないそうで。

一応、帰国途中に高畑さんとは話を合わせるように申し合わせてます。
実際の所は色々やってきたわけですが過少申告しておこう、と。
流石にえらい人の方にはちゃんと報告をするそうです。
具体的には捜索依頼主のお祖父ちゃんとか。そりゃそうか。

いやね、本当は誤魔化したかったんですよ？
原作開始前からなんか凄い事やってる奴とか思われたく無いし、
原作入ってから「ほほぅ、こいつがあの……」とか変な評価されたくないし。
この冒険譚まで原作に織り込み済みなら諦めるが、抗う努力はしたかった。

しかし哀しいかな報告書は定期的に上げられていたと言う。
報告者は誤魔化せても、既に渡された報告書は誤魔化せません。
誰にその報告書が渡って……とか調べだすときりがないだろうしなぁ。
と言うか、犯行を見られて目撃者を消す犯人のような事はしたく無いと言うか。
……いや、一度やってるんだけど。

で、ネカネさんやアーニャさんには、向こうで旅の錬金術師を師匠に仰いで師事しつつ、

素材集めとか、道具作成とかやってたと答えておきました。
一般的にはこういう事にしておこう、と示し合わせた内容でもあります。
そっちの技能も上がってるので嘘ではありません。

流石にロケットランチャー持ってこないと一撃で吹っ飛ばせないようなワイバーンとか、
『闇の福音』とまでは行かないだろうけど、吸血殲鬼の様な真祖吸血鬼とか、
そんなのとドンパチしつつ冒険者してました、とか言ったらネカネさんが卒倒する間違いなく。

証拠、と言うか証明として持ってきてくれていた異次元バッグから色々出す事に。
この鞄、セキュリティもばっちりです。
具体的には蓋を開ける際に感知した魔力で無いと開かない仕組みにしてます。

適当に作った薬やらアイテムやらを出しつつ、適当に思い出を捏造して語ってみました。
実体験に基づいた捏造なので早々バレ無いと思います。
勿論、『別荘』持ってることはいいませんよ？余計な心配かけさせますから。

で、その後で祖父ちゃんとこ行きました。
やっぱりお説教は喰らいましたが、何でも親父も学校中退で飛び出した口だそうです。
それを考えると俺はまだマシか、と思ったけど五十歩百歩ですね、はい。
祖父ちゃんには報告が言っていたようですが、それに関しては何も

行って来ませんでした。
薮蛇になっても困るので、俺の方も黙ってましたけど。

話が一通り終わった所で、石化治療の当てがあることを告白。
惚けられましたが、あの日俺も石になってる人をみたと言うと観念して案内してくれました。
……いや、治すって言ってるんだから観念も何もあったもんじゃないんだけどね。

どうも、色々治癒魔法が使える魔法使いが治療に当たったのだがダメだったらしいです。
ダメで元々、と言う考えも半分くらいはあるのでは無いだろうか。

そんな訳で石像が置かれた所へ。

まず最初にやったのは〔解〕〔析〕である。
自作の薬品が効くかどうか確認する為に！

……無理っぽいです。
この石化自体が永久石化クラスの魔力強度を持っています。
薬を〔強〕〔化〕すれば行けるか？

一先ず学校側が治療サンプルとして採取した欠片で実験です。
強化なしはやっぱりダメでした。落胆はしてません。

しょうがないので、薬を〔強〕〔化〕してみることにします。
その前に、〔解〕〔析〕した内容を〔理〕〔解〕するところからスタート。

〔理〕〔解〕したお陰で頭痛がひどいです。

まぁ、〔解〕〔析〕した段階で〔理〕〔解〕するのも困難とは分かっていましたが。
見せられた図面が電子回路の図面、と分かってもそれを理解するのはまた別の話と言う事で。

〔理〕〔解〕して、どう薬を〔強〕〔化〕すれば治療できるかイメージします。
その結果、〔強〕〔化〕した薬でサンプルの欠片が元の姿に戻りました！成功です！！

そのまま、頭痛を抑えつつ石像に薬を使って行く事に。。
使ってる薬の〔強〕〔化〕の効果が切れたり、〔強〕〔化〕した薬が尽きたりすると、
【文珠】で改めて薬を〔強〕〔化〕します。

それでも、俺が作った分では薬が足りない……微妙に。
村一つ分と言う事で、相当多めに作っては来たんですが。
頭痛のひどさも抑えられないぐらいになって来たので、【文珠】も使用がきつい。
色々面倒になってきたので残りに関しては〔破戒すべき全ての符〕を使って解呪して行く事に。

全員の治療が終わったので、道具を片付けて〔理〕〔解〕した事を〔忘〕れました。
悪魔のことを人間が理解しきるのは不可能だったと言う事ですね。
そしてほっ、と一息ついたと思ったらぶっ倒れました。
相当限界だったようです、俺。

起きたら1週間経ってました。そこから酷い頭痛が取れるまで3日間。

その後またお説教タイムです。今度は無事になったスタン爺さんも一緒です。

……涙が出てきました。

説教されてる情けなさじゃなくて、スタン爺さんの声を聞いて。

彼此２０年近く聞いて無いんだぜ……涙も出るさ。

その後、あの薬とマジックアイテムはどうしたのかとお祖父ちゃんやら

専門家に問い詰められました。

いや、実際に問い詰められたわけでは無いんですが、同じような物です。

何人もの魔法使いが治療に挑んでどうにもならずに挫折したのを治した訳なので、

それは当然の事かと思います。

と言うかお祖父ちゃん、あんた俺が何してたのか分かってるんだから話に加わらないで。

薬に関しては勉強したと言っておきました。

まぁ、嘘は言ってません。

師匠についた錬金術師の伝手を辿って専門書を貸してもらって学習した事にしました。

これに関してはちゃんと手書きのまとめノートも作ってたので、それを出す事に。

作成に必要な素材、使用したマジックアイテムに関しては素材集めの際に見つけた遺跡で

拾った、と言う事にしておきました。

使った【文珠】は消えてしまうし〔破戒すべき全ての符〕も片付けたのですが、

力を失って崩れ去ったと言う事にしました。
出せ、と言われても正直困る。

そんな感じで一躍村の、と言うかメルディアナの英雄扱いです。
行方不明というか家出してたのは、村人達を治す手段を探す為という事になりました。
正直、視線が痛いです。
作ったのは確かに俺の才能かもしれませんが、そこに至るまでの道はチートなわけでして。
結局、俺の薬だけじゃ足りなかったし。
スケールは小さくなりますが、丸写しした読書感想文で賞を取った気分です。

そういう訳で『マギステル・マギ』に推薦しよう、と言う声が上がった時は断固拒否しました。
自分はまだまだ修行中の身であり、『マギステル・マギ』からはほど遠い、と。

そうそう、村の人達は村に戻っての再建に励んでいます。
またあんな事があるとやばいので、暫くは学校の方からも人を出し、村の警備代わりに傭兵も雇うとか言ってましたが。

で、今の自分の状態ですが、案の定暇な日々を送っております。
ぶっちゃけて言えば、四六時中ネカネさんかアーニャさんが近くにいる状況です。
外に出るにも一緒で、トイレに付いて来ないだけ１００倍マシと思うしか無い状況です。

寝る時間は？と思うかもしれませんが、部屋がネカネさんと一緒なんだ。

修行とかできたもんじゃありません。
『別荘』とか論外、鞄の中も整理できません。
正直勘弁して欲しいです。
個室が欲しい、と言いたい所なんですが今までが今までなので我慢してます。

どちらかと言うと、寝る時に人を抱き枕にするのはやめて下さい。
もう（実年齢は）そんな歳じゃありません。

せめて研究・実験室くらいは欲しい。
このままだと、習った事が全部ダメになってしまう。
と一週間主張してようやく自分の部屋を持つ事ができました。
ただしベッド等の寝具の持ち込みは不可、使用時間は就寝時間までです。
相変わらずどっちかが部屋にいる、と言う状態ですがはるかにマシになりました。
【神の頭脳】が発動してる分には人には分からないですし。
なにより、研究・開発時の集中力の前では貴方方は炉辺の石にしか過ぎないっ！

そんな感じで、ポーションとか発動体の指輪等の薬品とかアイテムとか作ってます。
お祖父ちゃんに正式に許可を貰って、まほネット経由で通販を初めて見ました。
それほど金に執着してる訳でもないので、「営業時間：やる気がなくなるまで」とか言う
個人商店くらいの適当っぷりで商品売りさばいてます。

売り上げは学校に2割納めて、残りの半分はこっそり村の復興資金として送ってます。

勿論、匿名でですけど。
やっぱり恥ずかしいじゃないですか。

勿論、情報収集もまほネットで一発です。超便利。
ここメルディアナ魔法学校は、と言うか魔法学校全般に言えることですが
世間から隔絶させたような場所にあるのが殆どです。
魔法を隠匿する、と言うスタンス上しょうがないとは言え外の情報は意識しないと入りません。
何だかんだで情報は超重要です。世界を制するくらいに！

そうやって自分のやりたい事をしながらも、勉強はしています。
正直な話をすると、既に授業で学ぶものなんて殆ど無いと言う状況なのですが。
卒業くらいはしないとな、と言う事で。

ちなみに頭の方は酷使してますが、身体の方は帰ってきてからろくに動かしてません。
最低限のランニングとか走りこみとか筋トレとかはやってるんだけど。
戦闘訓練とかその手の類を全くやっていない（できない）と言う。

一応、錬金術師で通っているから大っぴらにする訳にも行かず。
まさかアーニャさん相手に模擬戦やろうぜ！とか言えるわけが無い。

しょうがないので〔眠〕を使って確実に眠らせてから、夜に【別荘】へ行く事にしました。
これで鍛錬とかばっちり可能に！

まぁ、対人戦が出来ないのが痛いですがこればかりはしょうがない。

管理用の自動人形は特定条件化でのみの防衛モードのみが認められてるらしいですし。
流石にそれの条件とかの設定を弄るのもなぁ。

しょうがないので地下ダンジョンに潜る事にしてみました。
相変わらずトンファーが倒せません。
むしろ、トンファー相手に何秒持つかが課題と言うか。

そんな感じで修行を続けた結果、ついに【文珠】が3つ同時使用可能に！
〔超〕〔加〕〔速〕すればトンファーも余裕なんでしょうが、それじゃ意味ないしなぁ……。
スキルレベルを上げないと行けないのにチートで倒してもしょうがないと言う。

そうそう、飛び級が認められて卒業することになりました。
メルディアナ魔法学校（戸籍上）最年少卒業生になりそうです。
序に言うと、アーニャさんも飛び級で卒業するそうです。
まぁ、勉強してる自分の横で同じように勉強してたら賢くなるよな、と言いますか。
明らかにレベル高い内容を持ってきて「いいから教えなさい！」とか言うのやめて下さい。
結局教えてしまうんですけど。
そして、理解したアーニャさんが更にレベルの高いのを持ってきて……と言うループ。

卒業した後は、それぞれ最終課題を貰って一人前の魔法使い目指して頑張る事になるそうで。
課題をこなす中で師匠を探して師事し、更なる研鑽を詰みなさいと言う事でしょう。

まぁ、俺は正直言ってどっちでもいいんですが。
結果なっちゃったらしょうがないけど、進んでなろうとも思わないというか。
まぁ、できれば目立たない方が良いなぁ。

そうこうしている内に、卒業式の日が来ました。
監視体制バッチリのお陰で、遅刻する事無く出席です。
無事卒業証書と課題も貰う事ができました。

休校期間が長かった訳ですが、休校期間中を魔法世界という荒波で揉まれ、
尚且つ石化治療までやってのけた人間を学校においておく理由もありませんね、はい。
と言う訳で、卒業式終了後に廊下を歩きながら卒業課題を見てみることに。

アーニャさんは『一年間ロンドンで占い師』だったそうですが。
俺もどっかで1年間パン屋兼宅急便、とか道具屋の経営とか、図書館の司書とかしたいなぁ。
そう考える俺の目の前で浮かんだその文字は!!

『ＡＴＥＡＣＨＥＲ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ』

日本で教師をやる事……だと。
思わず唾を飲み込んでしまいました。
待て待て、俺はまだ（戸籍上は）９歳、数えで１０歳とは言えまだ９歳なんだ。
教師には早すぎる。
しかも『ＴＥＡＣＨＥＲ』の単語のみと言う事はあれか。本当に学校で先生やるのか俺。

幾らなんでも教育委員会が黙って無いだろう常識的に考えて。

そんな感じでさり気に脳内でテンパっていると、気がついたらお祖父ちゃんの所に
引き摺られていました。ネカネさんとアーニャさんに。
ただ今、二人で猛抗議中でございます。

しかしアーニャさん、チビは関係無いと思います。明らかに。
後ネカネさん、倒れないで下さい。支えるのは俺達なんです。

まぁ、結局それが覆るはずも無く。
俺は教師になることが確定するのでありました。
何でも、お祖父ちゃんの友人が学園長をやっている麻帆良学園と言う所らしい。

しかし、着任時期が2月頃とか。
今が7月なので5ヶ月近い間が開いている。
まぁ、受け入れについての話やら準備やら上の準備も色々あるんだろう。
こっちとしても、色々準備をする必要があるし。

と言う訳で早速準備に取り掛かることにしました。

まずは日本語の習得と教職の勉強です。
担任なのか、担当教科を持つだけになるのか分からないけど、
どっちにしろ日本語喋れないとまずい。
なんちゃって教師で行く訳にも行かないので、最低限の心構えとかも叩き込む必要があります。
後で話を聞いたところ、英語を担当すると言う事なのでそっちの勉強もしないと……。

次に、と言うか並行してやったのは勤務先の調査です。
流石に何も知らずに現地入りとか危険すぎる。行き先がわかってるなら尚更の事。

ざっと調べてみましたが、学園都市のようで。
と言うか、これはでかすぎる……回りきるのにどんだけかかるんだ。
目立つのは図書館島と言われる大型施設くらいかな、と思ってた時期が俺にもありました。

まほネットで調査を掛けてみた所、まぁ出るわ出るわ。
まず、世界樹と呼ばれる巨大な樹がある。それも学園の中心部に。
ただの学園では無いと思ってましたが、魔法使いも多数在籍しているようです。
どれだけの割合かはわからないですが。

後は、関東魔法協会の本部もここにあるそうです。
西日本は関西呪術協会と言う所が抑えているらしく、対立している状態だとか。
……でも、調べてみるとお互いのＴＯＰは身内なんだよな、これ。
緊張感を敢えて出す事で、お互い組織の引き締めを図ってたりするのかこれは。

とにかく、触らぬ神に祟りなしのような状況になる事はわかった。
むしろここからが原作の始まりだ、と言う奴である。

しかし、それにしては「魔法教師をやれ」ではなく「教師をやれ」なんだよな。
よくよく考えてみれば、ぽっと出の人間が現地で魔法教師とかやれ

と言うのが無茶振りなのか。
でも教師をやれの段階で十分に無茶振りだしな……。

いや待てよ。
向こうだって魔法使いの集まりなんだ、年齢詐称薬くらいは想定に入れてるだろう。
大きくなって教師をやりなさいと言う事に違いない。
実は子供だけど、大人として生きていく事になった魔法使い見習いの悲哀が原作のテーマか。
詐称薬のストックが切れて先生大ピンチとかそんなの。むしろ逆の方が面白そうなんだが。

しかし、俺は【別荘】効果で既に大体23歳くらいである！
そのようなピンチには陥らないのだ、ざまぁ。

それに、向こうから魔法教師とか言わない限りはこっちは黙ってれば良いだろうしね。。
態々藪を突いて蛇を出す必要も無いわけで。
平凡な教師ライフが送れるかも！

後は向こうで契約書とかを確認して細かい所を詰めてから、行動方針を決めるとするか。

そんな感じで、ネカネさんとアーニャさんの見送りを受けて、
俺、ネギ・スプリングフィールドは一路日本へと向かう訳であった。

向こうに着いたら前任の先生から引継ぎして、挨拶回りもしないとダメだろうし
……住む場所も探さないとなぁ。当面はホテル暮らしでいいとしてだ。

3日くらいは準備期間あるだろうから、やれる事やっておかないと。

願わくば向こうで死亡フラグが俺に立ちませんように……。

第5話：そして、帰国して卒業して出国する話（後書き）

幾らなんでも着任当日に「君今日から授業してね」は無茶振り過ぎると思うんだ。

普通は契約書書いて引継ぎとかして「じゃあ、○日からよろしく」みたいな事になると思うんですけどねぇ。

その日に授業して欲しいなら、もうちょっと早めに着任させておけと言う話でもあります。

８／２６投稿。
色々足したり直したり。
８／２７
１５年を２０年に変更。
５歳の旅立ちの年齢を基準にしてました。
まぁ、１５年以上だから２０年も入るんですが（苦笑）。

第6話：そして、原作に入ったと言う話。（前書き）

ひょっとしたら改定するかもしれません……。

第6話：そして、原作に入ったと言う話。

やって来ました麻帆良学園都市。
まずは学園長に挨拶する為、学園長室に向かうべきなのですが。
何でも向こうから迎えが来るそうです。

と言う訳で、予め向こうから指定された待ち合わせ場所で待機中です。
時計を見ると３０分ほど時間に余裕が。
慣れない場所なので、早め早めに動いた結果がこれです。
最低でも5分前集合は基本ですよね、と言う事で。

時間を持て余してるので、辺りを観察する事に。
なんと言うか、西洋の町並みをイメージして建築された学園都市のようで。
もう１００年もすれば、風格漂う建築物群として観光客も来そうです。
交通機関として路面電車も走ってて、何と言うか日本とは思えない情緒があります。

そうこうしてると、始業ベルまで後３０分とか言う放送が。
それと前後してスタンピードの如く走り抜ける生徒達！
徒歩からバイクから路面電車にしがみつく様にしてる奴から、朝食を売ってる奴まで。
バイタリティ溢れすぎです、はっきり言って。

……しかし、遅いなぁ。
いきなり今日から授業と言う事も無いだろうし、のんびりしてますが。

よく考えたら、俺は向こうから来る人間を知らない。
特徴くらいは聞いておくんだったなぁと思いながら旅の途中買った本の続きを読む事に。
向こうは知ってるだろうし、ここで俺が慌ててすれ違ってもしょうがないし。

本も読み終わり、時計を見ると後１５分で始業チャイムがなる時間のようで。
既に待ち合わせの時刻は過ぎています。
どうなってるんだ？あれか、自力で探す所から試練と言うのか？
とか思っていると、声をかけられました。

そこには制服をきた女の子が二人。
１人は黒髪で、お淑やかそうなイメージの子。
もう１人は、鈴の髪飾りをつけたツインテールの子。こっちは活発そうなイメージ。
二人並んで月と太陽、みたいな感じである。

ネギ・スプリングフィールドさんですか？、と拙い英語で聞かれたので
そうです、と英語で答えておきました。
すると、何か二人できゃいきゃいやってます。

やっぱりそうやったやんか、でも幾らなんでも違いすぎでしょこれ、とか。
ウチ英語喋れへんよどないしょ、私だって喋れないわよ、とか。

……やっぱり日本語で喋るか。
と言う訳で、日本語が大丈夫な旨を伝えるとほっとしてました。

どうやら彼女達が迎えのようです。確認するとその通りとのこと。
二人も授業があるだろうし、少し早足で学園長室に案内してもらう事に。
その道すがら、遅れた理由を聞いておきました。
と言うより、向こうから喋ってきました。

そもそもはカグラザカさん（ツインテールの方）が寝坊したのが原因だそうなのですが、
待ち合わせ場所に来ても、それらしい人間は一人もいない。
探し回ってもそれらしい影も形も見当たらないし、このままだと授業に間に合わなくなるので
呼び出しでもかけて貰おうか、と言った所で俺を見つけたそうで。

一体どんな姿格好をしてると言われたんですか、と聞いたらコノエさん（黒髪の方）が
写真を預かってきたんやけど、と渡してくれました。

……はい、メルディアナでの俺の身分証明写真。つまり、９歳児の写真ですね。
そりゃわからんわ。

で、明らかに子供と大人の差はあれど同じような髪型だし、どことなく雰囲気似ているし
始業時間も迫っているし、と意を決して声をかけて見ることにしたようです。

もしかして自分の弟の写真を間違えて渡したんじゃないんでしょうか、と言っておきました。
納得してくれたので良しとします。

そうこうしてると、高畑さんに遭遇。
あんたここの関係者だったのか！
俺が絶句してると、向こうも絶句した様子です。
ネギ君……だよね？と確認とって来るくらいには。

いやあんた俺の姿一度見てるだろ。
と言うか、この姿にどこかおかしい所があると言うのだろうか。

今の俺は詐称薬を解除して２０代前半の姿な訳で。
眼鏡をかけて、束ねた長い髪は腰の辺りまで。
一張羅の背広に身を包み、まだ寒いのでコートを着込んでます。
ちなみに鞄はいつのも異次元バッグ。

形見の杖？【王の財宝】の宝物庫の中に放り込んでますよ。
あんな目立つ物常時手に持ってたら魔法使いだって宣伝してるようなもんじゃないですか。
実はいい発動体なんですけどね、あれ。

お久しぶりです、と無難に返しておきました。
幾らなんでも遅いから迎えに来たそうです。
先に学園長の方に連絡してくるから案内宜しく、と去って行きました。

予定外の事があったかのようにやたら慌しく去って行ったのはどういった理由だろうか？
と言うか、彼女達授業はどうするんだ？

どちらか片方だけでも授業でた方がいいんじゃないかと言ったのですが、
まだＳＨＲだから大丈夫の事。

ついでに言うと、1時間目は英語で担当は高畑さんだそうで。
あの人、教師やってたのか……。

二人に案内されつつ話を聞くと、何でも高畑さんはクラス担任でもあるそうです。
凄い二足の草鞋の履きっぷりだな、おい。
……いや、人の活動方針なんて人それぞれだろうけど。
と言う事はあれか、俺を捜索中もクラス担任だったということとか。
何かあった時に頼れないかもしれないクラス担任とか本当に大丈夫なのかそれは。

予想に反して、出張は確かに多いですが親身になって話を聞いてくれるいい先生だそうです。
そんな高畑さんに、アスナさんはどうも見た感じ惚れているようです。
まぁ、人の色恋沙汰に興味はありません。

その後、高畑先生とはどういう関係なのかを聞かれました。
父親の知り合いでその繋がりで、と言っておきました。
多分嘘は言っていないはずです。後は高畑さんに任せましょう。

そして学園長室です。
ノックをして入ると、そこには特徴的な頭部を持つ老人の姿が！
なんと言うか、エイリアンみたいに頭部に奥行きがあるというか…
……仙人？

まぁ、別に驚くには値しません。
魔法世界には角が生えたり、獣耳尻尾だったりする亜人がいるんですし。
そういう人がいたって良いじゃない。

この老人が麻帆良学園の学園長である近衛近右衛門さんだそうです。
ん？　近衛……？　コノエさんの方を見ます。
ウチのおじいちゃんなんよー、と言われました。

そうですか、全然似てませんね。
そっくりとかだったら世を儚んで自殺してもおかしくない。

取りあえずは３ヶ月の間教育実習との事です。
まぁ、妥当と言えば妥当かな。
逆にいきなり本採用と言われたほうが困る。

２－Ａの担任で担当教科は英語、高畑先生は代わりに非常勤の講師と言う形になるそうです。
それを聞いたカグラザカさんが悲しみと絶望の余り落ち込んでました。
……すいません、俺のせいじゃないけど心の中で謝っておきます。

しかし、教育実習生にいきなり担任持たせていいのか？

後、学園長の方がうちのコノカを彼女にどうじゃ、とか俺に薦めてトンカチで殴られてました。
いい人だとは思いますが、流石に出会ったばっかりの女性なので……とやんわり断りました。

と言うよりは、いつ何に巻き込まれるかわからんと言うのに彼女なんか作ってられるか！
人質に取られたりしたらどうする気だ！！
作るなら同じ魔法使い関係者かなぁ。当ても何も無いけど。

それと、ダメだったら故郷へ帰らないと行けない訳だが覚悟はあるか、と聞かれました。
なきゃここへ来てません。
逆に、それは教育実習の3ヶ月間で結果を出せなかった場合ですか？　と尋ねました。
笑って誤魔化さないで下さい。

そもそも何を持って『ダメだった』と言うのか。
3ヶ月で修行失敗、と言うのもそれはそれで情けない話ではあるのだが。

まぁ、別に失敗なら失敗でいいか、と思ってる俺がいる。
ネカネさんとかお祖父ちゃんとかには申し訳ないけど。
そうなったらそうなったでどっかに引篭もって隠遁生活でも送るか、みたいな。
……別荘に入り浸る訳にもなぁ。
老化停止の手段でも考えるか？　そうか、だからあいつ真祖になったのか！？

で、もう1時間目が始まってるとの事なので、早速今日から始めて貰おうかと言われて、
指導教員としてシズナ先生、と言う方を紹介されました。

顔を埋めたくなるほど大変巨乳の美人です、シズナさん。
大人の包容力があります。勿論胸がでかいという意味では無いぞ。

……ってちょっと待て。
百歩譲って実習生を行き成り授業に投入するのはよしとしよう。そんな事もあるらしいし。

しかし、授業の引継ぎとかは？
もうすぐ2年も終わりの時期だから、授業範囲なんて知れてるだろうけどさ！
そもそも高畑先生授業しに行ったんじゃないの？

聞いてみると出張だそうです。
お前も待てよ高畑さんっ！
せめて、どこから授業するのかだけでも説明していけよっ！
まぁ、だから慌しかったんだなあ……と納得。

取りあえず、カグラザカさんとコノエさんを先に行かせて後から追いかけることに。
契約書とか色々やらないと行けない事は多いですが、その話は後にする事に。
これ以上生徒たちを待たせておくわけにもいかないし、下手したら他所のクラスに迷惑が。

「時間も時間ですし、今日は授業しなくてもいいですかねぇ？」
「いいんじゃないでしょうか、自己紹介で終わらせても問題ないと思いますよ。」

などとシズナ先生と話しながら教室へ。
途中で名簿を受け取って目を通す。

そうそう、自分の担当クラスと言うか勤務先ですが。
麻帆良学園本校女子中等部です。
つまり、一言で言えば女の園です。
ごきげんようからタイが曲がっていてよ、見たいな場所……では無いと思いますが。
しかし、クラスの数だけで２４クラスあるとかどんだけでかいんだ

よ！

で、名簿に一通り目を通す。

……ん？　Ｅｖａｎｇｅｌｉｎｅ．　Ａ．　Ｋ．　ＭｃＤｏｗｅｌｌ？

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルっ！『闇の福音』じゃねーかっ！！

お前こんな所で何中学生やってんだよ！？　ちゃんと引き篭もってろこの野郎。

少し顔が引きつった俺を見て、どうかしましたか？とシズナ先生が声をかけてくる。

ちょっと知り合いに似た顔が、他人の空似でしたけど。と返しておいた。

高畑さんが「困ったときに相談しなさい」とか書いてるけどできるかっ！

何を代償に要求されるかわかったもんじゃない……いや、要求されるのは血か。

どっちにしろ、後で話しないとまずいな……勿論高畑さんとですよ？

そんな事を考えながら扉を開けると、上から何かが落ちてきたのをほぼ無意識に掴み取る。

そのまま、ロープやなんだを何事も無いかのように無造作に踏み越えて教卓まで。

この程度素人トラップなら、解除するまでも無いわ。

あ、シズナ先生。後ろのドアから入りなおした方がいいです。

おぉー、と歓声の上がる教室。
ふと見ると、エヴァンジェリンが一瞬動揺して腰を浮かしかけた？
何故に？

「急な話で恐縮ですが今日からこの学校で英語を教えることになりました
ネギ・スプリングフィールドです。３学期の間だけですがここの担任も兼ねさせて貰います。
教育実習の身の為、未熟な所もありますが宜しくお願いします。」

と挨拶と共に一礼。勿論英語で。
……あー、やっぱ動揺してるか。
しょうがない、日本語に切り替えて改めて挨拶しよう。

クラスの半分以上がほっとした空気を出したぞ。
割と分かりやすい発音で喋ったんだが、大丈夫かこのクラス。
……いや、俺が相当な無茶振りをしただけか。

時間的に今から授業しても中途半端な時間になりそうなのでこの時間は質問タイムです、
と言うと歓声が上がる。

……ただし質問は英語でのみ受け付けます、と言うと静まり返った。
そんないきなり通夜会場みたいな事にならないで、お願いだから。
勿論冗談です、ただし他のクラスは授業中ですから静かに質問してくださいねと言って置く。

ついでに、トラップを仕掛けた犯人３名を椅子の上で正座させておお

きました。
今からバケツに砂を詰めに行く時間も惜しいですからねー、と言ったら
砂っ！？と驚かれました。
ノリいいな、このクラス。

で、改めて質問タイム。

「歳はいくつですか？」２３歳です。
「どこから来たんですか？」ウェールズの山奥からです。
「ウェールズってどこ？」イギリスです。詳しい場所は地図帳で確認してくださいね。
「今どこに住んでるんですか？」まだ決まってません、今日来日したもんで。
「椅子の上で正座は厳しいですー」それは質問じゃないですよね、次。
「彼女いますか？」残念ながら。作ってる暇もありませんでした。
「このクラスで彼女にするなら誰ですか？」今日出会ったばかりですが、皆さん魅力的ですよ。

きゃー、と歓声を上げられました。
はいはい、静かに静かに。

そんな感じで授業時間は無事終了しました。
シズナ先生によると今日の授業はこれだけだそうです。

一先ず職員室へ案内してもらう事に。
前後する事になるけど他の先生方にも挨拶しないと……
勿論お土産もバッチリです。
イギリスと言えば紅茶だろう、と言う事で詰め合わせセットを用意

してみました。
お茶請けにクッキーの詰め合わせも。

職員室の挨拶回り一と言ってもいない先生もいましたが一が終わると改めて学園長室へ。
荷物もここに置かせてもらってました。
まぁ、人の荷物を勝手に開ける真似とかしないだろうし。
したらその程度の人物と言う事でこちらも態度を考えさせてもらうだけです。

一先ず契約書を取り交わす事に。
ざっと……もとい、ちゃんと見たところ本当に教師としての契約書です、これ。
特に魔法的な何かが働いている訳でもないし。

教育実習期間と言う事で本来はお給料とかは出ないんですが、特別に出すとの事。
教師としては安い給料ですが、実習中にもらえるなら贅沢は言えません。
まぁ、3ヶ月どころか一生遊べるだけの金はあるんですけどね……出しませんよ？

家に関してですが、申し訳ないがホテルの一室を用意したのでしばらくはそこで寝泊りして欲しいとのこと。教員住宅は一杯だそうです。
微妙に何故か悔しそうな感じ？……何が悔しいんだ、一体。

一通り仕事の話が終わった後で、単刀直入に学園長から切り出されました。
何で年齢詐称薬飲んだの？って。

……いや、９歳で教師とかありえないでしょう、常識的に。
そう言ったら少し黙ってから納得しました。大丈夫なのか学園長。
まぁ、詐称薬なんて飲んでませんが黙っておきます……と言うか気づけよ。
あえて泳がされてるのか、それとも。

こちらからも、事前調査の段階で魔法先生と言うのがいる事を確認してるんですが、
俺はそっちの方はいいんですか？と尋ねてみました。
当面は教師としての本分をまっとうして欲しい、との事です。

まぁ、予想通りと言えば予想通りだな、うん。
幾ら冒険者としてぶいぶい言わせてた時期があったとしても、それとこれは別か。
高畑さんの報告書はこっちにも上がってるはずだし、その辺を知らないと言う事は無いだろう。

その時は改めて契約書の更新をお願いしますね、と言ってから帰りのＳＨＲの為２－Ａへ。
職員室へ先に寄って連絡事項とか無いか確認しないと……

ＳＨＲが終わったら、高畑さんがやって来ました。
授業どうだった、と聞かれたので今日は自己紹介と質問タイムに留めた旨を告げておきました。
さすがにあの時間で授業するのはしんどいのと、引継ぎなしで授業とか勘弁してください。

引継ぎとか聞きたい事とか色々あったんですが、出張の報告があるそうで。
後で話は聞くよ、と言って去って行きました。

行きしなに神楽坂さんに声を掛けながら。
……何だかんだで高畑さんも神楽坂を好きなのか？年齢差大きいぞ？

そうなってくると時間がぽっかり空いてしまったわけで。
実習生が放課後に職員室で出来る事もそんなにありません。
ホテルの方へ行ってらしたらどうですか？荷物の整理もあるでしょうし、とシズナ先生に
勧められたのでそうさせてもらう事にしました。
本格的に教師として歩くのは明日からと言う事にしましょう。

という訳で、地図を片手にホテルへ戻りすがら辺りの散策です。
時折生徒から挨拶をされるので挨拶を返したり、飛んできたボールを投げ返したり。

そうこうしてると、少し離れた所にうちの生徒が。
えーと、宮崎のどかさんだっけか。……あー、あんなにたくさん本持って。
よろよろしていて危なっかしいです。
傍から見ていても怖いので、ちょっと手伝いに……落ちたっ！？

次の瞬間、鞄も地図も放り出して【瞬動術】を使用、無事キャッチ！
ただしお姫様抱っこと呼ばれるスタイルで。

あ、危ねぇ……あの高さは流石に落ちたら大変な事になる所だった。
しかし、日常生活でこんな事するとは思わなかったぜ。

大丈夫ですか？と抱えたまま宮崎さんに声をかけるとふと人の気配。
神楽坂さんが、何か信じられないものを見たような眼でこっちを見

ています。

あー、ひょっとしてさっきの全部見てた?とにこやかに聞くと首を縦に振りました。
ちょっと拳法を齧って、縮地とかそういう類だよ。聞いたことあるでしょ?
と言いながら、顔を真っ赤にしてあうあう言ってる宮崎さんを下ろします。
見たところ怪我も無くてよかったです。

その後、神楽坂さんにも手伝わせて散らばった本を拾いつつ
今度からは誰か他の人と荷物を分担するように、もしくは道や階段の端っこの方
とかを歩かないように、と宮崎さんに注意しておきました。

今日は偶々俺がいたからいいものの、下手したら死んでるぞあれ……。

ついでなので、そのまま本を図書室へ運ぶのを手伝います。
と言っても自分は鞄があるのでそれほど運びませんでしたが。
代わりに神楽坂さん大活躍、とだけは言っておきます。

その道すがら、神楽坂さんが先生は拳法嗜むんですか?とか聞いてきたので
まぁ、護身術レベルだけどね、と言っておきました。
嘘はついてません。
あんまり自慢できる事でも無いから黙っててくれると嬉しいな、とは言っておきました。

そこから話が派生して、何でもクラスメイトの古さんは凄い強い格

闘家だそうです。
何でも中国拳法やってるとか……そういや、そんな事名簿に書いてたな。
手合わせを願う、とか言わないでくれよ頼むから。

無事本の移送も完了したので、自分もホテルに行く事に……と思ったら
二人から是非教室に来て欲しい、と言われました。
何だ？と思いつつ教室のドアを開けると、クラッカーの音。

歓迎会だそうです。

シズナ先生に高畑さんまでいます。
真ん中の席を用意されて、乾杯して本格的に歓迎会と言う事に。

なんと言うかお祭り好きが多いなぁ、このクラス。
いや、最近の女子中学生と言うのはこんなものなのか？

生徒たちと雑談したり、和泉さんから日本語上手いですねと言われたり、
超さんから肉まん（これが凄い美味い。口からビームが出るかと思った）を
貰ったりしてたら、宮崎さんがさっきのお礼ですと図書券をくれました。

いや、本屋がもうアタックって。
……そうか、宮崎さんの渾名は本屋なのか。何となく納得は出来る。

そこからさっきのお礼、って何のお礼？と言うことになって階段か

ら落ちた彼女を
俺が助けた、それもお姫様抱っこでという話になったらまた歓声が。
ただ神楽坂さん、俺が凄い速さで移動して助けたとか言わないで。
何か眼を輝かせてたりする人たちの雰囲気がしますよ？

そんなこんなしてると高畑さんの方から一日お疲れ様、と声をかけられました。
まぁ、今日の授業は1時間目だけの上に後は契約書とかの細かい部分だけだったんですが。
明日以降の授業の引継ぎとか諸々あるんで時間を貰う事に。

そのうちいい時間になってきたんで片づけをして解散、と言うことになりました。
で、こっちは職員室で引継ぎです。

まぁ、案の定2年ももうすぐ終わりだし範囲も知れてますんで時間はかかりませんでした。
割と余裕のあるスケジュールが組めそうなので、高畑さんには感謝です。

元気なクラスメイト達だろう？　いや元気すぎるでしょう、別に構いませんけど。
とそんなやりとりをして聞かなきゃならん事を思い出した。
そっと認識阻害を張り巡らせ、何気ない会話に偽装しつつ疑問をぶつける事に。

何故『闇の福音』がこんな所にいるのか、と言う。
さっきの歓迎会でも隅の方で絡繰さんと一緒にいたが。

彼女は悪い奴じゃないよ、とは高畑さんの台詞。

いやめっちゃ（元）賞金首なんですけど、と突っ込みたかったがどうも古い知り合いらしい。
流石にその台詞は失礼だな、と思いとどまりつつなんでこんな所にいるのかを聞いてみる。
詳しくは本人に聞いてみると良いよ。僕が話していい話でも無いしね、と言われました。

……嫌な予感しかしません、絶対に聞かないからな！！
と言うか、態々俺が聞く必要も無い。
きっと人間になりたいんだろう……うん、と1人納得する事に。

その後は職員室に残ってる人に挨拶しつつ、ホテルに帰る事にしました。
と言うか、まだ荷物置いてすらいないんだよな……。

無事ホテルに到着。
そこそこの部屋です。流石に最高級のスイートルームとまでは行きませんけどね。
着替えとか日用品とか、授業に使う教材を出しつつルームサービスで飯を頼む事に。

特に食べられない物はありません。贅沢を言ってると死ぬからな！
あ、好物は肉です。特に牛。焼肉うめぇ。

飯食って荷解き終えて、風呂入ってから部屋に宝石を触媒とした結界を構築する事に。
何も無いとは思いたいが、何かあってからでは遅いわけで。

最悪、真祖の吸血鬼が従者と共に殴りこみに来る事を想定する必要がある。

……まぁ、高畑さんがああいう以上はんなことないだろうけどさぁ。

俺のアレンジが加わった結界は、既に結界と外界の区別が外部から不可能なレベルに
完成されています。
どこかで聞きましたが、結界が張られてると気づかれる事は2流の結界だそうで。

そういう意味ではこの麻帆良を包む結界は立派な物かと思います。
きっちりと結界を確認した訳ではないんですが。
暇な時にちょっと調べてみるのもいいかもしれません。

そんな感じで時間も時間なので簡易な奴を仕掛けておいて今日の所は寝る事にしました。
明日も無事に過ごせますように……。

第6話：そして、原作に入ったと言う話。（後書き）

迎えに行ったはずの木乃香が姿も名前も知らない、
と言う事は無いだろうと言うことで。

後、タカミチがいたのは魔法行使を感知したからか……？＞パンツ消えた時

それから、歓迎会は生徒全員参加と言うことにしています。
ちうもその辺は空気読むだろう、きっと。

第7話：そして、本格的に教育実習生活する話（前書き）

バレーとかその辺一気にまとめました。
1話使ってやることでも無いな、と思ったんで……。

第7話：そして、本格的に教育実習生活する話

俺、ネギ・スプリングフィールドの朝は早い。
４時くらいには目を覚ます。

実際の所、睡眠時間は1時間……いや、３０分で十分です。
冒険者の必須、とまでは行かないが持ってると便利な技能でして。
場所によってはろくに眠れない場所とかあるし。
考えてみて欲しい。飢えた獣が徘徊するジャングルでグースカ寝てられますか？
そんな場所でも瞬間快眠、と言う奴だ。
教えてくれた冒険者の先輩曰く、ヨガのちょっとした応用らしい。
凄いぜヨガ！

まぁ、眠気が取れないなら〔覚〕〔醒〕と言う手もあるし。
眠れない時は〔安〕〔眠〕や〔快〕〔眠〕の出番である。
〔永〕〔眠〕もできるんだろうけど、怖くて使えません。

着替えてからホテルの外へ。
日課のジョギング……と言うかランニングである。
辺りの地理がよく分かってないので近場をぐるぐる回るだけにする。
迷った、とかいうと洒落にならん。

しかし空気が美味い。
こういう都会で故郷ばりに空気が美味いとは思わなかった。
……やはり、世界樹のお陰かこれは？

そんな風に走っていると、おはようございますと声をかけられた。
そこには新聞をたくさん抱えた神楽坂さんの姿が。

挨拶と共に朝早くから大変だね。と返しておく。
何でも親がいないので学費は自力で稼いでいるらしいです。
まぁ、授業に支障がないようにね、と返しておきました。

あははは、とか愛想笑いで返さないで欲しいです。先生心配ですよ?

向こうの仕事を邪魔してもアレなので、適当な道で別れることに。
大体1時間近く走ってから切り上げる事にしました。
ルームサービスまだやってないだろうから、朝飯と昼飯も買って帰ることにします。
ちゃんとした自分の住処が欲しいです。

『別荘』?……いやいや、それだけの為に1週間とかないから。
別にもう一つ作ればいいじゃない、と思われるかもしれませんが結構手間なんですあれ。
材料とお金と時間と技術力に魔力が大変要求される高度な代物です。
……まぁ、『別荘』に篭って『別荘』を作ると言う手はあるんですけど。
そこまでして欲しいかと言われるとなぁ、と言う話でございまして。

春休みに入っても住宅の当てが無いようなら家でも借りるか?
一戸建てでもマンションでも借家の一つ二つあるだろう。

それはさておき、ニュースを見たりしながら今日の準備を整えます。
今日からはちゃんと授業しないとなぁ。他のクラスの授業もあることだし。
まぁ、やる事は決まってるんですけどね。

そんな感じで少し早めに学校へ出勤、今日の授業の準備をする事にします。

そうこうしていると、他の先生方も出勤してくるので挨拶をしながら準備の続きです。
何とか終わった頃に丁度朝の職員会議が始まりました。
最初に俺の挨拶です。
昨日のうちに挨拶したんだけど、まあその辺はしょうがない。いない先生とかもいたし。

連絡事項などのやり取りを済ませると、しばらく暇な時間が出来ました。
改めて名簿を見ることに。

高畑さんのお陰で、名前の読みに困る必要が無いのはありがたい。
しかし、すげぇクラスだな……これ。

何で「京都神鳴流」とか「忍」とかいるんだよ、おい。
そもそも「さんぽ部」って何する部活だ？
超さん肩書き持ちすぎマジすげぇ。
相坂さんだけ制服古そうだな、と言うか１９４０～って死んでるだろこれ。

と、どこからでも突っ込めるクラス名簿ですこれ。
他のクラスもこんな感じなんだろうか……と、ちょっと他の先生に聞いてみたら、
どうやらうちのクラスだけがこんな感じらしいです。
他のクラスが極端に大人しいわけでもないんですが、頭一つ飛びぬけているそうな。
それでもいい子達ですよ、との事なので大丈夫でしょう。

そんな感じで他の先生方と話をしていると時間になりました。
ＳＨＲから１時間目の授業が当面の予定です。

宮崎さんとか、和泉さんとかに挨拶を返しつつ教室へ。
懲りないトラップは全て当然のように回避です。
そこ鳴滝姉妹＋春日さん、ちっとか言わない。

よく見ると、姉妹は昨日席を入れ替わってたのか。
そこは感心しておきました。
ほどほどにね、と釘も刺しておきましたが。

なお、仕掛けた3人に関しては、ＳＨＲから1時間目の間正座と言う事にしておきました。
流石にそれは厳しい？　君たち、世の中には連帯責任という言葉があってね、
いたずらを止めなかった君たちも……と切り出すと、
ごめん私たちの為に尊い犠牲になって！とか言い出しました。
正しい判断と思います。

そんな感じの和やかな雰囲気で進む英語の授業。
教科書の問題とかを当てる時は窓際から順番に当てる事にします。
これなら平等に一巡しますからね。

そして、授業の終わり１０分間を使って今日の授業のまとめテストです。
次の時間からは最初の１０分間もおさらいテストです。勿論今やってる問題と違う奴で。
何だかんだでこの手の勉強は慣れてもらうのが一番。
本当はＡＬＬ英語で授業したいんですよ?俺。

分からない事があれば放課後とか休み時間に職員室まで聞きに来るように。

分からないと言う事は悪い事じゃないけど、それをそのままにしておくのは悪いことだ。
そう言って1時間目を終わらせる事にしました。

そんな感じで授業をこなしていると昼休憩に。
先生はパンだー！と言う事で採点しつつ職員室でもしゃもしゃやってると、
質問に来る生徒が時折やってきます。
しかしなんと言うか、質問に来る生徒より取り巻きの人数の方が多い！
宮崎さんは後ろに図書館部の二人がいたし、
和泉さんに至っては、チア部の三人が！
君たちは質問大丈夫？と思わず聞いたほどですからね、ええ。

そんなこんなで昼休憩も終わり、お昼の部です。
と言っても、それほど授業も無かったんで空き時間は次の時間の準備してましたけど。
そして、帰りのＳＨＲの時間になったので再び教室へ。

連絡事項を伝えたりしながら、ＳＨＲを終わらせると時間が空きました。
帰りの職員会議は今日は特に無いそうです。
それに、実習生なのでやる事もそれほどあるわけではなく……。
だからと言ってさようならー、と言う訳にもいかんのですが。
そんな訳で、授業の準備を続けます。
最初のうちに貯金を作っておけば後から楽になるぜ、と言う方向で。

時折、生徒たちが質問に来るのを答えたりしつつ時間は過ぎて。
帰っても問題ない時間なので、先に上がらせてもらう事にしました。
色々とやりたいこともあることだし。

と言う事で、辺りの散策を行う事にしました。
しかし、広いっ！！ガイドマップを先ず買い求める所からスタートです。
それでもどこから回った物か……途方にくれそうです。
手近な所から一つ一つ、と思ってたら声をかけられました。

うちのクラスの朝倉さんでした。
仕事も一段落ついたので、少しこの辺りを散策しようかなと思いまして、
と言ったら案内しましょうか？と提案されました。

報道部と言う事はその辺詳しいでしょうから、お願いすることに。
まぁ、全部回りきるのは不可能なので学内の主要施設だけでも。
大掛かりな散策は春休みにする事にしました。

何でも、記事になりそうなネタを求めて自転車で走り回ってるそうで。
案内ついでに、宮崎さんを助けた所にも連れて行かれました。
と言うか単独インタビュー状態です。差しさわりの無い範囲で答えておきましたが。

近場ながら案内も一段落し、小腹も空いたので食堂棟へ。
お礼もかねて朝倉さんに奢る事にしました。これくらいはマナーですよマナー。

気をつけて帰るように言って朝倉さんと別れてから、自宅代わりのホテルへ。
正直、今のうちに授業でやれることは終わってるんだよなぁ。
そういや、修行と言うか身体動かせる場所探さないと。『別荘』以

外で。
地図で見る限り、向こうの方に森と言うか山があるのか……そこかなぁ？
麻帆良を包む結界も確認したいし。今日のうちにやってしまうか？
山は春休みにしましょう。

と言う事で、晩飯を済ませてから結界を確認する事に。
やり方はとっても簡単。結界を感じ取ってから〔解〕〔析〕するだけです。
最もそのためには結界を触る必要があるという。
まぁ、触ると言っても物理的に触る必要もなくて感じ取ると言いますか。
外と内の世界の違いを感じ取ればいいというか。

と言う訳でやってきました麻帆良大橋！
ここが一番外と内がはっきりしてて分かりやすい場所なのです。
早速〔解〕〔析〕してみる事にします。

大きく分けてこの結界は3つの効果があるようで。

1：この学園都市全体に広がる大規模認識阻害結界。
2：外部からの侵入者を感知する結界
3：高位の魔物・妖怪などの力を抑制する。

世界樹と6箇所の魔力溜まりを用いた大規模結界魔法、だなこれは。
正確にはそれに電力を加えて強固な物を形成してるみたいだけど。
……ん？　と言う事は真祖・エヴァンジェリンは今パワーダウン中なのか？
3に吸血鬼が当てはまるかどうかはわからんが、当てはまってもおかしくはない。

とは言え、吸血鬼の場合は他人の血を飲んである程度は補填できるからなぁ。
全盛期までにはいかんだろうが、６００年のキャリアはマジやばい。
職業病か、どうしても戦う事を想定してしまいます。
どちらにしろ【幻想殺し】で結界触ると大惨事なことは確定。

その後何事もなく無事帰宅。
ネットで色々情報仕入れつつ時間をつぶし、適当な時間に就寝しました。

ここからは時間を飛ばしつつダイジェストでお送りしようと思います。
まぁ、同じ日常パートを延々見せてもしょうがないしね。

と言う訳で、高畑さんからやってた居残り授業を引き継ぐことになりました。
成績下位者向けに、放課後居残り授業をしていたそうで。
リストを見せてもらうと案の定、例の５人です。
いやほら、俺も小テスト繰り返してますからね？誰がどんな物かはわかるわけですよ。

シズナ先生曰く、３学期だし赤点取る生徒がいると実習生としても問題ありだそうですが……いやちょっと待とうよ。

それは今まで担当教科やってた高畑さんの責任じゃないの普通？

言ってしまえば、今までベテランがやってきた事を新人が引き継いだら、
ベテランがやった部分から不具合が出て、それを新人が責任取れっ

て言ってるような物で。
俺悪くないよね？いや、多少は責任を負うべきだろうが全面的に取る必要は無いよね？

いやまぁ、実習生だろうが何だろうが教師は教師ですよ？
わかっちゃいるが納得できねぇ……。

ともかく、放課後に通称『バカ五人衆（バカレンジャー）』を居残らせて補習です。
幸いにして今日は土曜日、時間は幾らでもあります。
小テストで１０点満点のテストで、８点以上を合格ラインに設定します。
６点でもいいんですが、最初から低い合格ラインを設定しても仕方ありません。
高い崖から子供を突き落とした獅子のように！

真っ先に終わらせたのがバカブラックこと綾瀬さん。点数は９点。
これだけできるなら普段から真面目にやろうよ、と言ったら勉強が嫌いですと言われました。
長い人生、何が必要になるか分からないんだし好き嫌いしちゃダメだよ、
とは言っておきましたが分かってくれたかどうか。

それから１時間後、間違えてる所を訂正したり勉強のポイントを解説したりしつつ
小テストを繰り返していきます。
そうこうやってると、バカイエローこと古さんとバカブルーこと長瀬さんも無事終了。
まぁ、古さんの場合日本語勉強しながら英語は辛いわな。
後、長瀬さん。拙者日本人でござる故に英語は苦手でござる、とか言わないで下さい。

そして残ったのは二人。
バカピンクこと佐々木さんとバカレッドこと神楽坂さんです。
サドンデスみたいな様相を呈してきたのと、時間も１５：００近くなってきたので
もう少し易しい問題をテストに出す事にしました。
このままだと本気で二人帰れなくなっちゃいますしね。

そのかい（？）あって佐々木さんも無事合格。
まぁ、これからもゆっくり頑張っていきましょう。やればできます。

そして残ったのは神楽坂さんただ１人。
諦めずに頑張りましょう、諦めてしまえばそこで終了ですよと言いつつやってると
途中高畑さんが様子を見に来て神楽坂さんが取り乱したり。

去った後、上手に教えられなくてごめんと謝ったら逆に恐縮されました。
ただ、「私、馬鹿ですから」と自分を卑下するのは頂けない。
小テストの点数も全体で見れば少しずつ上がってる訳ですから、諦めたら負けです。
努力すれば、必ず結果はついてきますからこれからも頑張りましょう、と言っておきました。

取りあえず、作っておいた小テストを渡して今日の宿題としておく事にして解散する事に。
３時間近くやってる計算になるし、これ以上は集中力も限界過ぎるでしょうからね。
提出は直接朝でも昼でも放課後でも職員室へ持って来てくれたらいいから、

と言っておきました。

後日、職員室に持ってきた宿題はその場で採点して間違ってる所を解説して、
詳しい解説と回答はこれねとプリントを渡しておきました。
それとついでに、いつ持ってきても良いからと新しい宿題も渡しておく事に。

そんな感じで回答と問題の受け渡しを繰り返すことにしました。
やっぱり反復練習が一番です。
特定の生徒を贔屓している気もしますが、一番成績悪い生徒だし構わないよね？

そんな感じで着任してから5日後の事。再び事件が発生しました。

事の始まりはお昼休みの事。
やる事の無い職員室でまったりしながらシズナ先生と茶飲み話をしてた時のこと。

佐々木さんと和泉さんが職員室に呼びにきたわけでして。
何でも校内で暴行事件とか。
確かに佐々木さんの手の甲には傷。
何がどうなってそうなったのかは道すがら聞くとして、まずは現場です。

と言っても原因は場所の取り合いだとか。
ウルスラ女子高等学校の生徒たちが先にとった場所を奪い取ろうとしてるそうです。

現場に到着すると確かに揉めているようです。

間に入って仲裁する事に。

明らかにウルスラの人たちが後から入ってきたよね？
それを先輩後輩とか上級生だからと言う理由で場所を取ろうとするのはどうなのかな？
ましてやボールを人にぶつけるとか、大人気なさ過ぎるだろうここは引きなさい、と。

そんな感じで無事撃退です。
仲裁に入ったはずだったけど、どう見ても一方的に向こうが悪いしなぁ。
と言うかもう少し遅かったら２－Ａの面子が集まってきて乱闘の可能性があったな……これ。
短い付き合いだが、神楽坂さんとか黙ってるようには見えないからなぁ。

高等部の生徒指導の先生に昼の一件を報告してると昼休みも終了。
次の授業はないんでゆっくりしてようと思ったら、
何でも体育の先生が来れなくなったそうなので、自習監督に行ってもらえないかとの事。
２－Ａが屋上のバレーコートでバレーするそうです。

まぁ、見てるだけだし楽勝だろうと思ったら甘かった。
えーと、ウルスラ女子高等学校の人君たち何でここにいるのかな？
向こうもげっ、という顔をしています。
……はい、昼休みと同じ面子がいますね。

自習になったそうなのでレクリエーションでバレーするそうですが。
ここは中等部の敷地内ですよ？高等部は自分たちの敷地でどうぞ、と言ったんですが。

何でも既に使用中とか。人数の割りにコートの数は少ないそうで。
それを抜きにしても今から授業で使うコートを自習のクラスが使うのはおかしいでしょう、と。
先に来たのは私達だから中等部が場所を譲るべき？
……お前達は何を言ってるんだ。
その頃には、２－Ａの生徒達も屋上に上がってきて俺達のやりとりを見守ってる状態です。
まぁ、下手に手を出されても困るわけだけど。

何の恨みがあるかは知らないけど、授業妨害を宣言したと受け取っていいのかな？
とにこやかに聞くと別にそういうつもりじゃ、と首を横に振りました。
取りあえず、彼女達の自習監督と話をする必要がありそうです。
その旨を告げると、慌てて出て行きました。

しかし「覚えていなさいよ」は捨て台詞でも頂けない。
うちのクラスに言い放ったリーダー格らしい子を呼び止めます。
向こうは俺に聞こえて無いつもりでしょうが、俺の地獄耳を舐めてもらっちゃ困る。

今すぐその台詞を謝罪するか、ここで授業終了までクラス全員で正座かどっちがいい？
と聞くと、顔を見るに不承不承ですが謝罪しました。
この件はまとめて後でそちらの先生の方に報告させてもらうからね、と言って解放します。

去った後は、すごーい、さすが先生ー、と言う賞賛と感謝の声を抑

えてから、
何かあったらこっちに伝える事と、喧嘩になっても手を出さないようにと告げて、
後は壁にもたれてバレーを見てることにしました。
あ、ちゃんと俺がいる理由も喋ってます。

和泉さん、俺を誘うのは止めて下さい。背広でバレーは厳しいです。
古さん、勝負アルよって君のその勝負はバレーじゃないよね？

結構目の保養になった事は内緒です。
やっぱりいいよね、女子中学生の体操服姿って。

そんな感じで無難に実習生としての日々を過ごす俺でしたとさ。

第7話：そして、本格的に教育実習生活する話（後書き）

朝倉さんが浅倉さんになってしまう……イライラしてるのか俺。

実際の教師がこのような生活をしているかどうかは不明であり、伝聞と推測によって成り立っております。ご了承下さい。

しかしネギ、何事もなく生徒と一緒に登校してるけど
本来だと間に合わんぞお前ｗ
実習生だからと言って朝の職員会議とかに参加しなくていいわけじゃないだろうしなぁ。

そしてＳＨＲが無い事になってる第２話。
教室に入って挨拶して１時間目の授業を、と言ってる事はやってないって事だろう。
まぁ、一々必要ないことまで描写する必要も無いんですけどね。

後、席順を改めてみて思ったこと。
絶対ザジと史伽は難儀してるはず、主に前に座ってる人間の身長的な意味で。
まぁ、だからと言って席替えとかさせられるとそれはそれで困りますがｗ

＞橋と結界と
原作でエヴァＶＳネギのラストバトルをやった橋を
『麻帆良大橋』としています。
実際に名前があるかどうかまではわかりませんでした。

後、エヴァの魔力を封じている電力使用結界＝麻帆良の結界として

あります。
主に電力は2、3番目の為に使用してあるとお考え下さい。
でないと、停電の日は大変な事に……ｗ

まぁ、この場合エヴァは１５年間お間抜けな子になっちゃうんですが……
（今まで使えてた魔力が突然しょぼくなった！？）
学園に来た当初は結界設備も完全に完成していなかったと言う事で。
本格的に電力を使い出したのが１５年前、
それまでは別の方向で強化してたんでしょう。

＞居残り小テスト
原作の時計を見ると１３：３０近く。
この時間で放課後の居残りと言う事は、土曜日であると判断しました。
……あれ、この学校週休二日制じゃない？
ちょっとＷｉｋｉで調べたら、中高一貫校では
土曜日でも授業してる所あるそうです。
つまりそういうことで。

しかしネギ、違う小テストを何枚も作って印刷したのかあいつ……
…いやまさか。
でも同じテストを繰り返してたらただの覚えゲーだしなぁ。
アスナが解いたテストを見ても全くの別もんだし。

８／３０
やや訂正。

第8話：そして、期末テストの話（前書き）

ちょっと短いです。
そして相変わらず説教モード……こんなはずじゃなかったんだがなぁ。

第8話：そして、期末テストの話

2月も終わりに近づき、間もなく3月。
期末テストも近づいてまいりました。

……しかし、我らが2－Aは緊張感が全くありません。
他のクラスと比べると、脱力しきってるかのような感じでございます。
テスト期間に入ってからは期末テスト対策の授業をしてるんで、
まさか知らないと言う事も無いだろうけど……大丈夫なのか本当に？

ある日のＳＨＲにその辺どうなの？って聞いてみたところ、
うちの学校エスカレーター式だから成績悪くても大丈夫。ずっと最下位だしねー。
とありがたいお答えが。涙が出てきそうです。

あのね君達、確かに高校進学の受験は無いだろうけどもね。
でもね、将来君たちはどうするつもりなの？大学行くの？最終学歴高校で働くつもりなの？
大学に入るとなると勉強しないと入れないし、会社で働くのだって試験あるんだよ？
学歴が全てだ、何て言わないけれど社会は学歴が必要な機会が多いんだよ？
1位を取れとは言わないけども、最下位から脱出しようと言う気概くらいは持ちなさい。

と、つい説教してしまいました。
なんと言うか、教師始めてから説教する回数が増えた気がします。

裏で新田2号、とか言われてたらどうしょう？

本来説教なんて柄じゃないんだけどなぁ。
まぁ、教師は少々憎まれるくらいがいい。

そして3月7日金曜日。
日直の椎名さんと明石さんと雑談しながらクラスへ向かう俺の前に、
シズナ先生が
一通の封筒を持って俺を呼びとめました。
封筒を受け取ってみると、学園長からの教育実習生としての最終課題との事で。

後で読ませてもらいますね。とそのまま内ポケットへ突っ込んでおきました。
日直二人が先生、今の封筒は？と聞いてきたので業務連絡ですよ、と答えておきました。
わざわざ教える必要のあるもんでも無いしね。

と言う訳でいつもの様にＨＲもテスト対策の授業です。
まぁ、復習とかおさらいとか問題集のやってない部分やったりしてる訳ですが。
成績の優秀な超さんとか葉加瀬さんは暇かもしれませんが、そこは諦めて欲しい。

授業も無事終わって職員室へ戻ってから封筒の中身を見てみることに。
２－Ａ最下位脱出できたら正式に採用、との事。
……マジか。

実際問題、頭抱えるほど成績悪い２－Ａ。

成績上位者は恐ろしいほど頭いいんだけどなぁ。バカレンジャーの方々が足引っ張ってると言う。
とは言え、最近は何度かやってる居残り授業等の成果か小テストの点数もいいし、
英語に関してはそれほど心配していません。

しかし、他の授業はどうなのか。
……ちょっと気になったので教科担当の先生に聞いてみる事に。
案の定と言うか、振るわないそうです。
まぁ、しゃーねーか。

しかし、英語の成績じゃなくて期末試験全体で最下位脱出とか、俺一人でやるハードル越えてないか？小学校の授業ならまだわかりますが。
あれは実質全教科先生1人みたいなもんですし（技術家庭科とかはさておき）
担当教科以外の成績まで面倒見れるか、って話です。
今から他の教科担任に根回ししても間に合わないしなぁ。

そもそも今まで最下位で放置していたのは高畑さんな訳で……。
あれか、ここまでを見越して最下位のままにしていたとか？いやまさか。

まぁ、明日は土曜日だし放課後使って他科目も含めた勉強会でもやるか。
クラブ活動もテスト期間中だから休みだし。
そう思いながら、他の教科担任からも話聞きつつプリント作成してたらあっという間に夜でした。

そして8日の土曜日。

ＳＨＲの為に教室に行くと、パニックが発生していました。
俺の姿を見て、早乙女さんと宮崎さんが駆け寄ってきます。

何でも、バカレンジャー＋近衛さんが図書館島で行方不明だそうです。

……何やってんだ一体。

詳しく話を聞くと、最下位のクラスは解散とか小学校からやり直しとかと言う噂を近衛さんが
仕入れてきたそうで（どこだよ火元？）。
流石にそれは勘弁と『読めば頭がよくなる魔法の本』を探しに行ったそうで。

……繰り返すが何やってんだ一体。

図書館島と言うと明治の頃に学園創立と共に設立された世界でも最大規模の巨大図書館で、
世界各地から蔵書を集めた結果、地下に地下にと施設が拡張された大変な図書館だったはず。
図書館探検部なんていう中・高・大合同サークルが未だに調査を続けてるそうで。
そういやこの二人図書館探検部だったな。後近衛さんと綾瀬さんも。

話によると、盗掘者避けのトラップまであるらしく。
本来なら中等部では入れない地下１１階付近まで潜ったようなので、
地下でもしかして何かあったんじゃないか、と。

しょうがないので新田先生辺りに話を持って行って指示を仰ぐ事にします。
こうなって来ると俺一人では判断しきれませんし、何かあったら声をかけるよう言われてたし。
まさか一人で探しに行く訳にも行かないしなぁ。

幸いにして俺の授業は2時間目、時間はあります。

で、新田先生連れてそのまま学園長室へ。
捜索チームの編成・出動要請をする新田先生に学園長曰く。
既に司書によって保護されてるそうで、地下で勉強中だとか。
テストまでには必ず戻らせるそうです。
仕事早いな、司書。
と言うか、説得にこっそり魔法使うのやめましょうや、学園長。

それなら、と言う事で解散となったのですが俺は残らされました。
嫌な予感しかしません。
何でも、図書館島の地底図書室にいるそうで迎えに行ってもらえないかとの事。
その司書に送り出してもらえばいいじゃないですか、と言うと忙しいらしいです。

これから授業があるので放課後以降に迎えに行きますので地図下さい、と言っておきました。
今から迎えにいかんのかね？と地図を渡しつつ聞いてくる学園長先生。
……あのですね、クラスの授業もあるんですよ俺は。
それに、司書が保護したって事は安全な所にいるってことですよね？

そう言ってやるとそれもそうじゃな、と納得してくれたようです。
本当に大丈夫かこの学園長。

そう言う訳で、2時間目に入って授業となったのですが……ダメだこりゃ。
無事にしている旨は告げたのですが、なんと言うか集中力が本気で無い。

いや、心配してるのは分かるのよ、心配してるのは。
ただお前ら授業に集中しようぜ。

先生は心配ではないんですか、って？そりゃ心配ですよ雪広さん。
ただ、話によれば彼女達は向こうで勉強してるって話なのに、君たちは何をやってるんだ。
今君たちは彼女達を心配する事よりも他にやる事があるだろう？
学校が終わったら俺も探しに行くから、あいつらに抜かれないように勉強しろと。
英語の成績だけで言うなら、いつでもバカレンジャーの入れ替えは発生しうるぞ？と
何故か普段より落ち着きの無い態度の桜咲さんの方に視線をやりつつ言っておきました。

士気を上げだしたので、予定通り放課後に勉強会をやる事に。
会場はこの教室、１４：００～１８：００まで。ちゃんと許可を取ってます。
成績上位者の手を借りながらも、少々の休憩を挟んだだけで無事４時間終わりました。

明日の日曜日もちゃんと各自勉強しておくように言っておき、
分からなかったら分かる人に聞きに行くように言っておきました。
勿論分かる人への了解は取ってます。
俺も手伝いたいけど、どれだけ図書館島で時間がかかるか分からんからなぁ。

と言う訳で、何が起こるか分からないので最低限の準備だけは整えておきます。
まぁ、堅気の人に見られても大丈夫な範囲での装備ですが……。
服も背広から動きやすい私服に着替えて、と。

ちなみに、この服は対物・対魔法処理を施してあります。
常時結界を張っているわけにも行きませんからね。最低限の防御と言う事で。
と言うか俺の衣服は全部処理施してありますよ?下着以外は。
その分、持ってる服が少ないと言う。
結構手間なんです、処理。

それはさておき、地図の方を見てみます。
1F直通エレベーターから螺旋階段を下って非常口から地底図書室、と言うルートですね。
早速利用させてもらう事にします。

長い長い螺旋階段を下り終わり一扉の問題は何だったんだ?開けっ放しにしておいたけど一
ようやくたどり着きました非常口。ドアを開けると流れる水が見えました。
滝の裏側のようです。

しかし、なんつーとこだ。
今森の小道を歩いている訳ですが、そもそも図書室に滝と森がある時点でおかしい。
そうこうしていると、湖に出てきました……ここ本当に図書室なのか?

きゃっきゃと声がするので、そちらの方に行ってみるとそこには驚きの光景が!
バカレンジャー+近衛さんが緊張感の欠片も無く快適な生活をエンジョイしてただけですけどね。
……『司書が保護して勉強させてる』って言うのは新田先生用の

方便だった訳だな。

真っ先に俺に気づいたのは長瀬さん、それから遅れて古さんでした。
流石出席簿に「忍」と書かれているだけはある。分身しても驚かんぞ。
佐々木さん、先生どうしたのー？じゃないんだ。

お前達はそこで何をやってるんだっ！
……思わず怒鳴ってしまいました。いつ以来だ怒鳴ったのなんて。
思い返しても浮かばないと言う事はこれが初めてか。
びくっ、とする生徒たち。

まぁ、向こうにも言い分はあるだろうので聞くことにしました。
と言っても、朝聞いた内容と変わりは無いわけですが。

……あのね君たち。
常識的に考えて中学2年が小学生に戻るわけが無いだろう？
クラス解散にしてもそう、この時期からそんな事やってる暇があるわけが無い。
そもそも、保護者が納得する訳無いじゃないか。
大体『読めば頭がよくなる魔法の本』なんて不確かな物に頼るとは何事か。
俺を含めた授業してる教師に対しても失礼だろうそれは。
先生方の授業じゃ勉強分からんと言ってるようなものなんだから。
それに、クラスの人間がどれだけ心配してたと思ってるのか。
放課後まで残って勉強会してるのに、お前達は遊び呆けてるとかどうなんだ。

そんな感じで正座させた面々に説教してる俺がいます。
今回の件に関しては流石にちょっと頭にきてます。

そのバイタリティを勉強に向ければ成績上がるだろうに……。

ともかく、英語だけで言うなら成績は上がってるんだから横着せずに勉強しろ。
千里の道も一歩から、お前達はやれば出来る子なんだから。
そう言って、帰る準備をさせます。

ここに興味が無いわけではないけど、今はその時ではありません。
昨日の分の勉強会を取り戻さないと……。
教室なりなんなりどっかスペース借りてやるとするか。

そう言う訳で、来た道を戻る形で引率します。
この道？学園長から連れ戻すように、って言われて地図貰ったんですよ綾瀬さん。
そりゃ学園長だから図書館の構造ぐらいは知ってるんじゃないの？
もしくは司書から地図貰ったとか。
ま、この道しか載ってない地図だけどね、と言うともし良ければそれを頂けませんか、と。
……あのね、反省してるの本当に？と聞くとすみませんと言って黙りましたが。
どちらにしろこれは借り物ですけどね。

長い螺旋階段を上がりきり、エレベーターで地上へ。時刻はまだ夜に入ったばかりです。
女子寮に戻って、クラスの人間に迷惑かけた事を謝ってくるように。
明日は勉強会やるので、中等部前に集合の事。
新田先生からも説教はあるだろうけど、テスト後にしてもらうように言っておくから、
ちゃんと今晩から勉強するように。
それだけ言って解散しました。

職員室でまだ残ってた新田先生に生徒たちが戻ってきた事を報告。
これから最後の追い込みに入るので説教はテスト後にして欲しいと頼んでおきます。
それと、勉強会やりたいんで明日教室使えないかどうかも聞いてみました。

使えるとの事なので、明日の勉強会は２－Ａの教室でする事にします。
これから俺は明日使うプリントを作らないと……。
ちょっとだけ新田先生が同情してくれました。ついでに今度飲みに連れて行ってくれるそうです。
お酒は飲めないんですが、それでよければと言っておきました。
……いや本当は飲めるんだけど、飲んじゃうと対外的にまずいと言いますか。
ここじゃなきゃ飲むんだけどなぁ。

そしていつの間にかクラスの殆どが参加していた９日の日曜勉強会も終了し、
テスト期間も無事に過ぎて結果発表の時間です。
結果？最下位は免れたと言っておきましょう。

と言う訳で、無事に俺は教員採用が決定した訳です。
相変わらず住む場所はホテルなんですが。
やっぱ家か部屋借りるかなぁ。
流石に自分のスペースを好きに作れないのは地味に痛い。

そんな感じで春休みに突入した訳です。
ああ、ネカネさんに手紙出さないと……アーニャさんにもだけど。

第8話：そして、期末テストの話（後書き）

あかん……他所と微妙にかぶってる（汗）。
とは言え常識的な判断するとまず上に指示を仰ぐだろう、と言う話でして。

赤松健作品総合研究所さんによると、３／２５が３学期終了式との事で。
そこから逆算して３月の始めの７日～９日までの話とさせていただきました。
特に意味があるわけでも無いんですけどね。

８／３１　細かい所訂正。

第9話：そして、春休みの話。（前書き）

今日もちょっと分量少な目です。
後、今回も平坦な話なのでそこらへんごめんなさい。

第9話：そして、春休みの話。

3学期終了式後の「学年最下位脱出おめでとうパーティ」も終わり、春休みです。

しかし、長谷川さん調子悪くてパーティ参加しなかったけど大丈夫だったんだろうか……

パーティに出たおやつとか飲み物の一部は置いておいて後で渡すように言っておいたんですが。

エヴァンジェリンが来てたのが個人的には意外でした。

とは言え、孤高を貫いている様子。

まぁ、俺に（魔法的な意味で）関わらなければ別に構いませんけどね。

あ、無視してるわけじゃないですよ？連絡事項とか授業中とかありますし。

春休みの最初にやった事は街の探索でした。

と言っても、それほど期間があるわけでもないので近辺にとどめましたが。

3年に入ってからの準備もあるしね。

そうやって街を歩いてるとふと思い出しました。

……携帯電話買わないと。

そう、実は俺は携帯電話を持ってないのです。

ウェールズの片田舎じゃ使う必要もなかったしなあ。

魔法世界にしても使うとかないわー、だし。

職員室で他の先生に持ってないんです、って話したら驚かれました。

と言う訳でやってきましたオフィス街。

しかし、どういった物を買うべきか……と悩んでいると声をかけられました。
珍しい事に長谷川さんです。そういうキャラでしたっけ？と一瞬悩んだり。
歩道のど真ん中で悩んでるので他人の振りしようかとも思いましたが、と言われました。
ごもっともです。
お体の調子はどうですかと尋ねた所、問題ないとの事で。それはよかった。

折角ですので目的を話して手伝ってもらう事にしました。
よく考えると、俺は携帯電話をどうやって買ったらいいかわからない訳で。
その辺説明すると、唖然としましたね長谷川さん。
いやほら、俺イギリスの田舎の方から来たんでその辺わからないんですよ。
そう言うと一応納得してくれたみたいです。

実際、もうこの頃になると『前世』の自分がどんなのだったかなんて覚えちゃいません。
すでにネギ・スプリングフィールドとしての自分が確立されてしまってる訳でして。

携帯電話売ってる店で店の人のお勧めとか、長谷川さんからの忠告も貰いつつ一台買いました。
それほど多機能なやつではなくて、防水加工で実用一辺倒なやつです。
ほら、機能たくさんあっても使いこなせないですからね。
極端な話、通話機能とメールとカメラだけあればいいわけですから。

一通りこっちの用事も済んだところで、長谷川さんは何の用事だったのか聞いてみました。
何でもパソコンのパーツを見に来たとか。時間は空いてるので同伴させてもらう事にしました。
先生パソコン分かるんですか?とか聞かれてちょっと心外です。
いや、携帯持ってなかったけどパソコンはノートサイズですが持ってますよ?
授業のプリントとか作れないじゃないですか、と言ったらすいませんと謝られました。

色々パソコンについての話を聞きながらやってると、いつの間にかお昼に。
いや、大変勉強になりました。こんなにパソコンに詳しいなんて。
そう褒めると出来れば内密にして欲しいとのこと。どうやら余り目立ちたくないらしいです。
了解の旨を伝えておいて別れる事にしました。

本当はお昼ぐらいは奢りたかったのですが、他の生徒に見つかりたくないでしょうからね。
何か困ったこととか相談したい事があったらいつでも職員室来てくれたらいいよ、
とだけ声をかけておきましたが。

そして別の日。
前から考えていた通り、山に登ることにしました。
登山道具やらも用意して出発する事に。
地図も購入しましたが、こういうのは実地で歩いて何ぼです。
山岳部とかその手の部活動に話してみればよかったかな?

まぁ、こっちもしばらくブランク空いてますが経験者。

何とかなるでしょう。

結論から言えば何とかなりました。
食人植物が生えてるわけでもなければ飢えた獰猛な肉食生物がいる訳でもなく。
山賊とか野党の類がいる訳でも無い訳で。
ちょっとしたきつめのハイキング気分です。

疲れたので小休止していると上から気配が。
ひょい、と上を見上げると忍装束に身を包んだ長瀬さんがいました
……いや待てや。
おや、ネギ先生ではござらんか。って君はそんな所で何してるんだね？

休日は修行の為に山篭りしてるそうです。
忍者の？と聞きましたがさてなんのことやらさっぱりでござる、と返されました。
そういう先生はこのような所まで如何様でござるか？と聞かれたので、
ちょっとしたハイキングだよ、と答えておきました。

ここは相当な山奥なんでござるがなぁ、と言われて地図を見直す。
……おや本当だ。どうやら調子に乗って歩きすぎたらしい。
一応、広げた地図を見せてどの辺テリトリーにしてるの？と聞いておきます。
結構広かったです。まぁ、修行だしなぁ。

長瀬さんのテリトリーに入らないようにして探索を続ける事にしました。
と言う訳で、彼女と別れて探索再開です。

修行もいいけど勉強も忘れちゃダメだよと言ったらにんにん、と言って去っていきました。
お前忍者隠す気ゼロだろ。

いい加減端っこの方一結界との境目辺り一まで来たので今日はここで休む事にします。
念の為に敵意感知と認識阻害結界を張り巡らせておいて、
樹の枝の上で毛布を被ってお休みなさい……。

頭の中に鳴り響く敵意感知アラームで目が覚めたのが午前2時過ぎ。
おいおい、一体何が来やがった？
久々に眼鏡を弄って熱源・魔力探知……するまでもありませんでした。
目を凝らせば見えるその姿。
鬼とか鬼とか鬼とか。鬼ばっかりじゃねえか。
いつからここは百鬼夜行になったのか。

鬼と召喚師の雑談を聞く感じ、この麻帆良に喧嘩を売るつもりらしいです。
魔法使いどもに目に物見せてくれるわ、とか本気でこの戦力でどうこうできると思ってるのか？
とか思ってると一匹の鬼にそこの兄ちゃん降りてこいや、と声をかけられました。

……マジか。
いやまぁ、獣避けとかその辺のレベルの阻害結界だったけどさぁ。
一目散に逃げるか？
等と考えてるうちに、体が傾いていく感覚が……樹が折れたのか！
慌てて飛び降り、無事着地。
ええ、見事に団体さんの目の前に。

陰陽師みたいな服着こんだおっさんは、馬鹿なこんな所にまで警備があるだと！

とか言ってますが、すいませんただ山登りしに来ただけなんです。

話の流れからすると、この辺は防衛網の穴だったらしい。

……まぁ、麻帆良の広さと防衛人数を考えるとどこかしらそういう場所でるわなぁ。

こっちとしてはただの登山家なんだけどと言ってみたんですが、兄ちゃんみたいな身のこなしした堅気がおるかい、と鬼に突っ込まれました。

いやごもっともです。

溜息をついてポケットに片手を。

逃げてもいいんですが、根本的な解決になりそうにありません。

と言うよりは防衛網の穴に来た連中を見逃したら大惨事だっつーに。

俺がやる気を見せたのを見て、あちらの鬼さんたちも臨戦態勢に入ります。

先に一つだけ言っておく。俺の戦い方にはわびもさびも無い。

それだけ告げて結界を構築し、展開するは【王の財宝】。

空間より姿を見せるは聖剣・魔剣・妖刀・魔槍・その他諸々の武器群です。

ちなみに結界の種別は外部からの魔法探知阻害結界。

外からデータ取られたらたまりません。

戦闘そのものは武器群斉射三連で余裕でした。

ちゃんとした経験値が入る戦闘ではないけど、この際しょうがない。

時間の制約が厳しいですし。そもそも、数の暴力がひどすぎる。

こうしてる間にも異変を感じて人が来るかもしれません。

辛うじて死んでなかった（ちっ）おっさんを眠らせてから【文珠】で〔忘〕〔却〕させます。
〔忘〕でもいいんですが念のためです。
最低限の回復魔法だけはかけてあげたので、死ぬかどうかはおっさん次第。

ストックを取り出して自身を〔隠〕〔蔽〕してこの場から急速離脱する事に。
全くひどい目にあった。今日みたいな事はこりごりです。
2時間ほど星を頼りに山を歩いて、改めて場所を見繕ってから寝ることに。
もうすぐ朝だよこんちくしょうめ。

翌日元来た道を戻る形で帰っていたら、綺麗に戦場跡が片付いてました。
ついでに言うと、「熊出没注意」の看板が新しく登山口（？）にありました。
……麻帆良仕事はえぇ。

この手の侵入者の相手をすれば対人戦スキルも上がるんだろうけど。
流石にここの警備やってる先生方に喧嘩売る形になるしなぁ。
わざわざ人の邪魔する必要も無いだろう。

ネギ・スプリングフィールドはまだ見ぬ魔法先生・生徒たちを応援しています。
主に後ろからこっそりと、生暖かい目で！

それでも一応、見ただけじゃ俺とはわからないようにするコートとか作っておこうかしら。
これを着るとあら不思議！黒い影にしか見えません、とか。

流石に不審すぎるので特徴の無い印象の人間にしか見えないようにするのが一番だけど。
久々に『別荘』で研究開発するかなぁ。

その前に家を借りる事にしました。学園長の方にも話は通してます。
自分のちゃんとした居住スペースをゲットです。
それに、薬品の調合とかアイテムの作成とかホテルでやるわけにもいかないですし。
一応これでも錬金術師やってるんで、腕を落としたくないですし。

そう言う訳で不動産巡りをしていいところを見つけました。
危うくエヴァンジェリン宅近くの一軒家に決定する所でしたが……
…危ない危ない。
住宅街のど真ん中の可もなく不可もなく、と言う一軒家です。
お金は稼いだ貯金がある、と言う事でどさっと出しました。家具とかも必要だし。

一通り家の中も片付いたころには既に夜です。
今から飯の準備と言う訳にも行かないので今日は外食と洒落込む事に。
焼肉でも食うか、久々に。

と言う事でやってきました焼肉屋。
もうちょっと高い所一ＪｏＪｏ何とかだっけ？一もあるんですがここで妥協しました。
そこで出会ったのが釘宮さんと椎名さんと柿崎さんのチア部の三人です。
何でももうすぐ3年生だし、たまにはぱーっとやろうと言う事だとか。
自分も焼肉食べに来たんですよ、一人で。って言うとちょっと引か

れました。

ようやくホテル住まいから抜け出して家借りたのでそのお祝いみたいなもんです、
と言うと少しは納得してくれましたがそれでも1人はないと。
よかったら一緒にどうですか、後から一人来ますけどと誘われました。
あぁ、確かに釘宮さんが電話してますね。

全然構わないんで、5人席で焼肉を頼むことに。
いつの間にか俺が奢る事になってますが、別に構いません。
ああ、お酒はダメですよ当然ながら。肉は少々いいの頼んでも構いませんから。
食べながら雑談しつつやってると、和泉さんが合流。
呼ばれたのは彼女のようです。
対面は3人で埋まってるので、自分の隣に座る事に。

しかし、お肉焼けてますよと入れてくれるのはありがたいですが、
全然食べてないじゃないですか。
どうせ俺の奢りだし、遠慮せず食べないと勿体無いですよと逆に入れてやる事にします。

後、どこに引っ越したんですか?と聞かれたので答えておきました。
教えたくないけど、この場合教えない方が不自然だしなぁ。
最終的に実験中とかは家自体に認識阻害結界張るので、
やばい所を見られる心配はないですが。
それでも用も無いのに来ちゃだめだよ、とは言っておきましたけど。

そんなこんなで満腹になって時間も時間なので店を出ることに。
外はもう暗いので寮まで送っていく事にしました。

柿崎さん曰く、満月の夜には桜通りに吸血鬼が出るとか。

……ははっ、まさかね。

一応学園長の方に注進に及んでおくべきか？

いや証拠があるわけでも無いしなぁ。

それにまさか学園側が把握して無いわけも無いだろう。

と悩んでるとただの噂ですから気にしないでいいですよ、と言われました。

まぁ、幸いにして今日は満月では無いですし大丈夫でしょう。

夜は出来るだけ出歩かないように。どうしてもと言う時は二人以上でね、と言っておきます。

寮へ送り届けてから帰る道すがら、以前開発していた抗吸血鬼化薬を増産する事を心のメモに。

家に帰ると、一室を早速自分の工房に……する前に防衛の為の結界を構築しないと。

結局今日はそれだけで終了しました。

そうこうやっているともうすぐ春休みも終わり。

新学期から正式に教師としてやっていく事になるので学校に行く必要ができました。

久々に背広に着替え、出かける前に郵便受けをチェックするとエアメールが一通。

ネカネさん……手紙は嬉しいんだけど、魔法学校からの宛名で送るのは止めようぜ。

誰がどこで見てるかわからないんだからさぁ。

まぁ、返事は後で書くにして今は学校です。

授業の準備やらなんやらやって、一通り片付いたので少し気分転換

に外に出る事に。
下駄箱の辺りで和服に身を包んだ京美人に遭遇しました。
俺を知ってる?えーと、どちらさんですか?

近衛さんでした。いやすいません、全然雰囲気違うんで分かりませんでした。
着物似合ってますよ、とかやってると近衛さんを呼ぶ声が。
近衛さん曰く逃げてる所だそうで。突き出すのも薄情なので匿う事にしました。
と言っても、職員室なんですけどね。幸い皆出払っている状況ですし。

お茶を出しながら事情を聞くと、お見合い用の写真を取らされる所を逃げてきたとか。
近衛さんの祖父でもある学園長の趣味がお見合いらしい。
お見合い写真も幾つか見せてもらいましたが……スペックたけぇ。
医者とか弁護士とか地位も金も持ってるような人ばっかりです。
まぁ、近衛さんの言うとおり歳が倍近く離れてる訳ですが。
取りあえずは婚約者と言った所ですね。

近衛さんが言うにはまだ子供なのに将来のパートナーとか早すぎる、との事。
うーむ、ちゃんと学園長と話し合う必要があるんじゃないかなあ、それは。
嫌な事は嫌だとちゃんと言わないと。勝手に将来決められるのが嫌なら尚更
ちゃんとその辺話した?と聞くとそうでもないみたいですし。
今からでも遅くないから時間貰って膝つき合わせて話してきなさい、と言っておきました。

でもウチ、ネギ先生やったらかまへんよー。ってまたまたご冗談を。
教師と生徒が結婚とかしたら色々まずいじゃないですか、と笑って流しておきます。
ちょっと頬を膨らませた近衛さんは愛嬌があって可愛かったです。
……いや、恋人とか婚約者とかそんなんじゃなくてですよ？

そんな感じで春休みも過ぎ……ついに3年生が始まったのです！
このまま無事に教師ライフを送れるといいなぁ。

第9話：そして、春休みの話。（後書き）

本当はもうちょっと長谷川さんと絡ませるつもりだったけど、色々煮詰まって削除。
あまりずかずかと相談乗るよ、とか言うと逆に引きそうなイメージがある。

9／1
改行と文章の訂正。
学年トップのつもりで話書いてたｗ

第１０話：そして、３年になって挑戦されたり社会戦したりした話。（前書き）

１日目で切りたかったけどあまりにも短すぎたでござる、の巻。
と思ったら今度はやたら長くなったので切ったでござる、の巻。

第１０話：そして、３年になって挑戦されたり社会戦したりした話。

『３年Ａ組！』『ネギ先生ーっ！』と言うどこかの学園ドラマのような生徒達の挨拶から、
俺、ネギ・スプリングフィールドの教師生活がスタートした訳でございます。
正確には始業式とか諸々あったわけですが、語るべき事もないので省きます。
……今日は佐々木さんが欠席か。それといつものように相坂さんと。

改めて１年間よろしく、と挨拶をしてると感じる視線。
一番後ろの吸血鬼、もといエヴァンジェリンが視線の発信地のようです。
そっちに視線を向けると眼を逸らしましたが。

一体なんだったんだ？

そう考えるのも束の間、今日は身体測定だった事を思い出して準備をするように言います。
勿論、俺は立ち去りますよ？
きゃいきゃいやってる教室から少し離れた辺りで時間を潰します。
まぁ、デリカシーの問題と言いますか。

しかし、佐々木さんが欠席とは珍しい。相坂さんはさておき。
だって相坂さん名簿に１９４０～とか書いてるんですよ？
学生と言う歳じゃないよそれ間違いなく。
２年の時に朝倉さんに話を聞いてみたんですが、『座らずの席』だそうで。

もう完璧に幽霊だろ、これ？
暇も余裕もその気もないので調べるつもりも無いんですが。

ぶっちゃけた話をすると〔霊〕〔視〕とかすると見えると思う。多分きっと恐らく。
ただ、悪霊の類とかになってたらどうしようかと考えてしまう訳で……

それなら、見えないし何もしてこない今の現状を維持しておく事が望ましい。
ぱっと〔成〕〔仏〕させてもいいんだが、その必要も理由も無いしなぁ。
花を生けた花瓶でも置いておこうかしら。
とは言え、教師が率先して虐めとか言われても困るしなぁ。
……誰も相坂さんの存在を気にして無いのか？

そんな事をつらつらと考えていると、しずな先生が駆け寄ってきました。
何でも佐々木さんが保健室に担ぎこまれたとの事です。
とりあえず様子を見てくるのでクラスの方お願いします、と後を任せて保健室へ。

そしてやってきました保健室。
保健の先生はいませんが、佐々木さんはベッドで眠ってる状況です。
しずな先生から聞いていた話によると、桜通りで眠っている所を見つかったとか……
そういや『桜通りの吸血鬼』とか言う話があったな。
調べてみる為認識阻害結界を保健室に構築。ちょっと本格的に魔力を確認してみる事に。

案の定でした。微弱ながら首筋辺りに魔法の力を感じます。

魔法使いが何かやらかしたのか、これは？
『桜通りの吸血鬼』は魔法使いと言う事は確定していいかも知れません。
本当に吸血鬼かどうかまではわかりませんが。いや、確かにうちのクラスにいますけどね？
幾らなんでも元６００万ドルの賞金首がこんなせせこましい事しないだろう。

仮に吸血鬼の仕業なら前に作った抗吸血鬼化薬があるんですが、吸血鬼かどうかはっきりしないうちから飲ませるのもなぁ。
いやほら、風邪かどうか分からないけど取りあえず風邪薬飲ませるようなもんですからね。
あまり身体にいい薬でもないわけでして。

結界を解くと、しずな先生から聞いたのか生徒達が雪崩込んできました。
ほらほら、保健室は静かにね？
先生、まき絵は？と聞かれたので佐々木さんならご覧の通り寝てますよ、と言っておきます。
甘酒飲んで寝てたとか、夜涼んでてそのまま気を失ったとか色々言ってる生徒達と一緒に
教室へ戻ることに。このままいてもやる事無いですからね。

幸いにして、身体測定も終了したわけでして。
しかし、この黒板に書かれたチュパカプラは何かな？
なるほど、桜通りの吸血鬼の正体はこれだ！と。

まぁ、こんなのはいないと思いますが夜は出歩かないように。
どうしても用事があるなら二人以上で行動するように、と注意だけはしておきます。

神楽坂さんが先生は吸血鬼信じるんですか？と聞いてきました。
彼女曰く、ただの噂じゃないですか。だそうですが。
実際に佐々木さんがあいう形で保健室で担ぎこまれてる事は事実だからね。
事実関係がはっきりしない以上は最悪を想定しておくもんだよ。と返しておきました。

吸血鬼はいないかもしれないけど、吸血生物はいるかもしれないしね。と
黒板のチュパカプラを指してオチもつけておきましたが。

他の先生方にそれとなく聞いて回ったりすると、桜通りは寮への道でも人気の少ない所らしく。
ちょこちょこと佐々木さん見たく寝ている状態を発見されている人がいたそうで。
凡そ2ヶ月ほど前くらいから。……えらいちまちましてるな。

しかし、2ヶ月前か……俺が赴任する前から活動してるじゃねーか。
何やってんだここの連中は。給料分くらいは働こうぜ。

そんな感じで今日の授業も一日終了し、放課後に佐々木さんが意識を取り戻したとの事なので、
事情を聞いてみましたが、何で寝てたのか覚えてませんでした。
そもそも寝てたと言う記憶が無いわけで……記憶操作はばっちりという事か。
しょうがないので、夜歩かないように注意だけして帰す事にします。
職員室で今日の授業のまとめプリント作りつつ明日以降の教材作り

をしていると、
あっという間に夜。本当に時間が立つのは早い。

やれやれ、と言う感じで椅子にもたれて背伸びしていると他の先生から連絡が入りました。
今度は宮崎さんが桜通りで倒れていたとか。
……おいおい、昨日の今日で頑張りすぎだろう『桜通りの吸血鬼』さんよ。

仕事はそこで切り上げて、女子寮の方へ向かう事にしました。
この件の上への報告は他の先生にお任せしておきます。

しかし、昨日今日とうちのクラスばかり狙われると何か挑戦状を叩きつけられた気分です。
まともに受ける気はありませんけどね。
と言うか何故うちのクラスがこうも集中されてるんだ？
たまたまか？それとも何か意図があるのか？
いや、これまでの犠牲者は別にうちのクラスではなかったわけだから、それはないはず。
となると、偶然か……。

そんなこんな思ってると女子寮に到着。
入り口前に神楽坂さんに近衛さん、それに早乙女さんと綾瀬さんの姿もあります。
寮の中に入る訳にもいかないんで容態の方は？と聞いてみたんですが、
特に外傷があるわけでも無いとの事。佐々木さんの時と同様に眠っているだけだそうです。

詳しい話を聞いてみると、部活帰りに合流して帰る途中コンビニへ

行こうという話に
なったものの、宮崎さんは先に帰る事にしたそうで。
吸血鬼なんていないだろうから大丈夫だろうとその場では一旦別れたものの、
やっぱり気になった神楽坂さんと近衛さんが一緒に帰る事にして道を戻れば倒れてたとか。
慌てて二人を呼び戻し、宮崎さんを神楽坂さんが背負って寮に戻り、連絡したそうです。

神楽坂さんと近衛さんに何か見なかったか、と聞いてみましたが答えはＮＯ。
……まぁ、魔法使いともなれば空を飛ぶのに認識阻害くらいはするしなぁ。
魔法の箒使うにしても飛ぶと自動的に一般人への認識阻害が働くようにできてます。

他の生徒達は？と聞いたところ綾瀬さん曰く2日続けてこんなことが起こった事がわかると
大変な事になるので隠密裏に行動しましたとのこと。よくやった。
傍目から見たら寝てる宮崎さんを運んだだけにしか見えないからな。
そのまま緘口令を徹底させておきます。特に早乙女さんに釘を刺しておきます。
先生ひどっ、とか言ってますが、周りは納得のご様子。

実際、同じクラスから2名犠牲者とか洒落になってない訳で。
変にパニックになられても大変困る。
パニックどころかうちのクラスは「吸血鬼退治だ！」とか言い出しそうで怖いのもあります。

宮崎さんからも詳しい話を聞きたいですが、佐々木さんと同じなら

気は失ったままでしょうし、
記憶もあるかどうかも怪しいので、もし今日の晩の事を覚えていたら明日職員室に来て欲しい
と言う事を伝えておきます。
こちらから呼び出して変な勘ぐりうけてもしょうがないですしね。

後、宮崎さんに根掘り葉掘り聞かないようにとも言っておきます。
知らないならそれはそれで構わないですし。
下手に「私、何かされたの？」と思い込まれてもえらい事になりますからね。
職員室に電話が来た以上は上に報告を上げはしますが、大騒ぎにするつもりもありませんし。

その辺だけ言い含めておいて帰る事にしました。もう、俺がやる事はありません。
帰り際に桜通りの場所だけ聞いておいて、帰りはそっちから帰る事に。
それほど寂しい通り、と言う訳でもありませんでした。

職員室に戻って報告し、一応報告書の方も書いておきます。
こうなってくると部活動中止して早く帰らせた方がいいんじゃないですかねぇ、と言ってみたり。
気を失って倒れてるだけでそれ以上何事も起こってませんが、起こってからでは遅いですし。
そう言うと、明日の職員会議で話題に出す事が決定しました。

こっちはこっちで学園長の方に話しないとなぁ……。
吸血鬼かどうかはさておいて、魔法を駆使して何かやってる奴がいる事は事実。
向こうは向こうで何か掴んでるかもしれませんし。

そんなこんなで今日一日は終わった訳でございます。
あぁ、疲れた。

そして、夜も明けて次の日。
朝の職員会議でしばらくの間部活動の中止が決定しました。
まぁ、昨日の事を考えると当然と言う話はあります。
打ち出されたのは実質１８：００以降の外出禁止令。この辺は全寮制の強みですね。
……そういやエヴァンジェリンは寮の外で暮らしてたな。
後、研究室で寝泊りしてるらしい人もいたっけか確か。超さんとか葉加瀬さんとか。

ＳＨＲ前に学園長室へ。ちゃんとアポも取ってます。
話題は『桜通りの吸血鬼』に関して。
うちの生徒の佐々木さんから魔法の痕跡があった件も述べて知ってる事を尋ねます。
それを知ってどうするつもりか、と聞かれたので別にどうもしません。と答えておきました。

いやだって、俺一般教師ですし。
餅は餅屋と言いますし、魔法先生・生徒方にお任せしますよ？
相手が文字通り吸血鬼ならですが。
ただの変質者なら警察の出番でしょうしね。
一昨日昨日と立て続けにうちの生徒を狙われてるので気になって聞きに来ただけですから。

お主自身は何もせんつもりなのか、って？
いや、だからこうして動いてるじゃないですか。
大体俺は探偵とか刑事じゃなくて魔法使いなんで捜査とか無理っす。

その魔法にしたって攻撃魔法なんて魔法の矢と武装解除しか持ってない後衛型ですし。
吸血鬼と正面から一人でガチバトルなんて（対外的には）無理っすよ、ぶっちゃけ。
そんな俺が出来る事は、動ける人間を動かせる人に事件解決を頼みに行くのが関の山な訳で。
それに、授業もありますし。

あ、抗吸血鬼化薬なんて物を開発してみたんですが、もし良ければ如何ですか？
本当に『桜通りの吸血鬼』が吸血鬼なら犠牲者が出たときに飲ませると効くと思います。
勿論個人差とかはあるんで一概に１００％とは言えませんけど、全く効果が無いとか
そういうことは無いと自負させてもらいますよ。
気になるなら成分とか確かめてもらってもいいんで。
と鞄に放り込んでた数本を渡しておきます。

それじゃ事件解決の方は宜しくお願いします、とだけお願いしておいて退出しました。
早く行かないと朝のＳＨＲに間に合いません。
……そういや、結局何も聞いて無いじゃないか俺。

ＳＨＲで部活動の中止と夜間外出禁止令が決まった事をプリントを配りながら話すと
ブーイングの嵐でした。
そうは言うけど君たちね、実際に吸血鬼か吸血生物かがいるかいないかは別にして
前からそういう話があって実際に犠牲者も出てるわけだし、
親御さん方から君達を預かってる身としては、慎重にならざるを得

ないんだよ。
あぁ、夜間無断で外出したりするともれなく新田先生と楽しい生徒指導室コース1時間だからね。
勿論延長もあるから覚悟しておくように。

後、間違っても「吸血鬼とやらの正体を見てやろう」とか考えないように。
特に朝倉さん。報道部の使命が騒ぐかもしれないが命あっての物種ですからね。
やだなー、先生そんな事する訳ないじゃないですか。
って君はやりかねないから注意してるんだ。
それに、古さんも吸血鬼と勝負だとか考えないように。
何で分かったアルか？ってそれだけやる気満々のオーラ出してたらそう思うってばよ。
超さんとか葉加瀬さんも、色々研究とかあるかもしれないけど寮に居てね。
うん、研究棟とかは大丈夫と思うけどこれも決まりだからね。例外は無いよ。
エヴァンジェリンさんは大丈夫とは思うけど、戸締りはちゃんとしておいてね。
気になるなら先生が泊まりに来ればいい？
いやいや、生徒の家に教師が泊まりに行くとかないから。

と言うか、真祖と同じ家とか絶対にないわ。全力でお断りします。

そんな風に心の中で思いつつＳＨＲも終了です。
そうそう、エヴァンジェリンを昼休み職員室に来るように言っておきました。
授業について、とは理由をつけましたが実際の所は『桜通りの吸血鬼』の件です。

何もしないとは言ったものの、心当たりに聞き込むぐらいはしておこう。
当たりなら通報すりゃいいしハズレならそれで問題ないわけだし。
生徒指導室みたいな所で1対1とかやると、何されるかわからんしなぁ。

どれだけ昼間＋学園結界効果（実際は不明）でパワーダウンしてても真祖は真祖。
ましてや現代社会に慣れ親しんでいる分、何をやってくるか分かりません。
ぶっちゃけ、科学パワーでサイボーグ真祖とか鋼鉄真祖とかになってても驚かない。
変身（ウェイクアップ）！して光のオーロラ身にまとった改造真祖になってても驚きません。
ここ麻帆良の技術レベルは微妙におかしいし。
だって、ロボが生徒にいるんだぞ？アシモ真っ青です。

そして時間は過ぎて昼休み。
注文して貰っておいた焼肉弁当食べつつプリントの採点してたらやって来ましたエヴァンジェリン。
堂々と話せる内容でも無いので認識阻害は忘れません。
これでただの話にしか聞こえないとかマジ便利です。

腹芸とか交渉とか下手なんで単刀直入に聞くけど、『桜通りの吸血鬼』って君？
って聞いたらそうだ、って秒殺されました。
……言い終わる前に言わなかっただけマシかもしれません。
ちょっとだけ高畑さんの気持ちが分かった気がします。

どうした？犯人を捜してるんじゃないのか先生？と聞かれて我に返

る俺。
いや、自白だけじゃ証拠にならないでしょ？なんて返したら、昨日の一件を喋ってくれました。
昨日の件に関して生徒で知っているのはごく僅か。被害者と通報者と……犯人のみ。
中々美味かったぞ、などと言ってるエヴァンジェリンが真っ黒です。

で、君が犯人なのは理解できたけどそれを態々自白した理由は？
少なくとも君が自首するタマには見えないけど、自首するなら付き合うよ？と聞いてみます。
何をバカな事を言ってる、どこかの魔法使いが不甲斐なさ過ぎるから挑戦状を叩きつけただけだ。
父親とは大違いのボンクラだな、無駄に歳だけ取ったか。と好き勝手言われます。
姿の件はバレてるな、こりゃ……まぁ、気にしませんが。

しかし、親父は関係ないだろ親父は。
顔も見たことも無い奴と比較されても困ると言うより迷惑だ。
……ほんとマジで勘弁して欲しいです、怨むぞ親父。

そう思ってるのは貴様だけだ、誰も彼もが『英雄の息子』と言う目で見、期待をかけてくるぞ？
ましてや貴様の父親に怨みを持ってる者は幾らでもいる。そう、私のようにな。
そうそう、学園長やタカミチに助けを求めようとか思うなよ？
これ以上生徒に手を出されたく無いだろう？
そう言って悪役面で笑みを浮かべるエヴァンジェリン。
悪役面も何も悪人だったなお前。

溜息をついてＯＫ分かったもう行って良いよ、とだけ言って結界を解除します。
そっちがそう言うつもりなら、こっちにも考えがある。
ふん、と鼻で笑うように去っていったエヴァンジェリンを見送りつつ作戦を考える事に。

一番単純なのは休みの日にアレの家に強襲をかけて全力全開で全火力ぶち込む事なんだが。
真祖でも強者の部類に入るアレがその程度で死ぬタマではないと思うが、一番確実ではある。
次の休みは……土曜日か。
昼帰宅した辺りを狙って叩き込んでやる事にする。
日光を克服したとは言え吸血鬼。夜よりは戦いやすいはずである。
幸いにして、アレが住んでいるのは人気も少ないログハウスの一軒家。
予め結界を張るわけにも行かないので、全弾迷わずぶち込んでから結界だな。
その後は臨機応変に対処、と言うより態勢が整っていない所を押し込むしかない。
一応、魔力増強薬と身体強化薬の類は用意しておくか。
吸血鬼と白兵戦とかやりたくないんだが、確実に殺せる手段と言えば白兵戦しかないと言う。
……ほんと吸血鬼は地獄だぜ。

しかし、痛いところを突いてきたな……実際、肩書きは『英雄の息子』なんだよなぁ。
恐らくここに送られたのもその辺が考慮されていると考えていいかもしれない。
麻帆良にいれば大抵のでかい揉め事は飛び込んでこないだろうからなぁ。周りが片付けるし。

とは言え、いつまでもここにいる訳でもないだろうし……どうするか。
偽造戸籍とかその辺を用意してくれる人を探してみよう。
顔や声は幻影魔法を使えばなんとでもなる。魔力にしたって誤魔化せているし。
まぁ、この一年間は大人しく教師しますが。
一年経ってまだここにいる必要があるなら……まぁ、雲隠れでもするかなぁ。
ネカネさんに手紙くらいは毎年出す事にして。

そんな事より今はエヴァンジェリン対策である。
どう聞いても昼のアレは宣戦布告である以上、向こうから喧嘩売ってくる可能性もある。
学内ではさておき、やばいのは外だ。特に夜はまずい。
今日からはできるだけ早く帰ろうと思います。
特に部活動を持って欲しい、とかそういう話も来てないので。
授業の準備は家でもできますし、ストックは作ってありますからね。
とは言えただ殴られっぱなしと言うのも腹が立つ事実。
何か言い手は無いものか……腕組みしつつ考えていると昼休みが終了しそうです。
続きは後で考える事にします。

そして時間は過ぎて夜。
日が落ちるまでとは行きませんでしたが、早めに帰宅した俺がいます。
そもそも外出禁止令が出てる関係上、誰かが見回りしないとダメなんですよね。これが。
まぁ、今週は俺は大丈夫みたいですが。
そういや、大規模な停電があるとか言ってたな……大丈夫か結界？
流石に結界は補助動力とかで維持するだろうけど。

機会があれば確認しておくのがいいかもしれません。

家の結界強度を倍にしておいて攻めにくくしておきます。
まぁ、どれだけ役に立つかは分かりませんができるだけの事はしておきたい。
一通りの処理が終わったので考えていた事を実行に移すことに。
必要なのはネット回線に繋がったパソコンが一台。勿論繋ぐのはまほネット。

魔法世界のコンピューターネットワークに繋いで一体何をするのかと言うと……社会戦です。
まほネットは魔法世界でのみ使われているわけではなく、
こちらの世界でも使用されているわけで。
インターネットみたいなもんですからアンダーグラウンドな部分もある訳ですよ。
で、その手の大型掲示板とかに

「修行先で来た麻帆良で『闇の福音』が生きているようです」

とかスレ立てる程度です。ついでに麻帆良で起こってる『桜通りの吸血鬼』の噂と実態も。
最もそのままだと与太話にしかならないので、うちの学校の名簿載せたりして
信憑性を上げます。賞金首時代の写真と一致するので問題は無いはず。
……あぁ、ちゃんと関係ない生徒達は黒塗りで分からなくしてあります。
賞金稼ぎギルドみたいな所、アウトローが情報を集めるようなサイト、冒険者ギルドに至るまで
同じような情報を流しておきます。

当然現実世界を拠点にして動いている団体関係の所にも流れるように。

名を売りたい奴らが討伐に来るならそれでよし、法王庁のような吸血鬼全滅だ！

みたいな機関が動き出して殲滅に乗り出すならそれもよし。

戦わずして勝つのは戦術の基本……かどうかは知りませんが、効果的ではあります。

むしろ俺が馬鹿正直に戦う必要は無いわけで。

色んなルートからアプローチをかけたので何も起こらない、って事は無いだろう。うん。

ついでに住所も晒しておくかと名簿を見てると、絡繰さんも同じ住所じゃねーか。

従者かもしかして。

しかしロボが従者とかなあ……前衛としてはおあつらえ向きじゃねーか。

うーむ、1対2とか本気で勝てる気がせんぞ。

まさか真祖の従者がヘタレ雑魚とか肉の壁とか言う訳ではあるまい。

武装コンテナとドッキングしてフルバースト全弾発射とか、強化パーツと三位一体六変化で

茶々丸・ザ・グレートとかやりかねない。

ゴーレムの類なら【幻想殺し】で余裕でしたなんだけどなぁ。

いや、そもそもあれは純粋な科学技術でのロボットなのか本当に？

……どっちにしろ、前衛と接近戦しろとか正気の沙汰じゃないんだが。

【神の左手】がどこまで粘るかだな。ＶＳエヴァンジェリン戦も似たようなもんだけど。

ほら、【直死の魔眼】が決まれば勝てるんだよ、決まれば。

あれやこれやとやってると既に深夜過ぎ。
明日に差し障るので寝ることにしましょう。
……さて、明日が楽しみだぜ。

第１０話：そして、３年になって挑戦されたり社会戦したりした話。（後書き）

カモ君周りは１１話に回しました。
諸々を詰め込むと今度は長くなりすぎと言う。

日数的には
４／８～４／９ですね。
のどかの仮契約とか、エヴァ茶々丸襲撃が無いから早い早い（笑）。

１．エヴァと出会ってないのに犯人は吸血鬼だと確定していて
書き直しでござる、の巻。

「犯人＝エヴァ」は当然なんですが作中でそれが分かる訳ではなく。
『桜通りの吸血鬼』と呼ばれてるからと言って本当に吸血鬼かどうかは
わからない、と。

２．エヴァンジェリンの事件に関するタイムテーブルを立てたはいいものの
全く別物に仕上がったでござる、の巻

ずらっ、と書いたのにとある理由で軒並み消滅するハメにｗ
その理由は雑談の方で。

３．後書きがやたら長くなりすぎたので雑談の方に回したでござる、の巻

本分書きながら後書きの文章を書いてるんですけど、
つらつら書いてるとかなりの量にｗ

第１１話：そして、停戦して再会した話。（前書き）

書き方を変更してみました。

第１１話：そして、停戦して再会した話。

―これは、ネギ・スプリングフィールドが朝起きる前の一幕―

麻帆良学園に激震が走ったのは彼が社会戦を仕掛けて数時間後のこと。

『闇の福音』の事実上の復活がネット上で暴露・拡散した事から始まった。

国内では関西呪術協会、国外では法王庁、魔法世界では元老院。

大小さまざまな組織から問い合わせが相次いだのである。

「この情報の真偽や如何に!?」と。

仮に事実なのであればどう対応するのか、そしてどう責任を取るつもりでいるのか?と。

そういう意味で苦労したのは元『紅き翼』の一員にして現在は関西呪術協会代表である

近衛詠春もその１人には違いない。

個人としてはエヴァンジェリンを人となりをある程度知るものの、

下を納得させる為に動かざるを得なかったのだから。

時を同じくしてフリー・団体に関わらず賞金稼ぎ・吸血鬼ハンター等が行動を開始。

とは言え相手は仮にも『闇の福音』。最強ともいえる魔法使いにして真祖の吸血鬼。

考え無しに乗り込むなど愚の骨頂……最悪吸血鬼の領地となっているのだから。

だが、１５年の歳月は「『闇の福音』なんて今時古いぜ」とロート

ル扱いする血の気のある
勇敢と無謀を履き違えたような連中が増えるには十分な時間。
富と名誉を求める命知らずが、麻帆良へと動き出す。

そういった連中を丁重に、かつ時には武力でもってお引取り願うのは麻帆良の魔法先生、
そして魔法生徒たち。
そんな彼らへの良い知らせと言えば、ネットで広がった事実が伝わって彼らが行動を開始し
こちらに来る頃には既に早朝となり始めたので真夜中に叩き起こされる必要が無かった事。
悪い知らせは、これからその手の来訪者が増えるであろう事。
それに対応する為に通常シフトから警戒シフトに移行したのは当然と言える。

このような事になった以上、麻帆良魔法先生緊急会議が開催されるのは必然であった。
議題は勿論「『闇の福音』をどうするかについて」である。
とは言えシフトの都合上全ての魔法先生が参加する、と言う訳にも行かなかったのだが。

「いったいどうなさる如何なさるおつもりですか、学園長！
そもそも何故１５年前彼女を受け入れたのです！？」

机を叩いて主張するのは眼鏡をかけた黒人の魔法先生であるガンドルフィーニ。
実際に１５年前から麻帆良で勤務している魔法先生、と言うのは現時点では存在しない。
教師である前に魔法使いである以上、ＮＧＯとして世界を回ったり
魔法世界で活動したりして

『立派な魔法使い（マギステル・マギ）』を目指している者が殆どであるのだ。

「正直に言えば、ワシもあのエヴァンジェリンを連れてきた時はびっくりしたもんじゃ。
それに、かの『サウザンドマスター』が連れてきたとあれば無下に扱えんじゃろう。
この１５年間大人しく生徒として、警備員としてやってきておったのも事実じゃしの。」

熱いお茶を飲んで真夜中に叩き起こされた眠気を覚ましつつ対応するのは学園長。
実際の所、学園長とて『闇の福音』を警備員として雇う事になるなど思ってもみなかったのだ。
『サウザンドマスター』ナギ・スプリングフィールドが登校地獄による呪いをかけた、
などと言う事がなければ雇うという選択肢は存在しなかったに違いない。
それだけのネームバリューがナギにはあったと言う事でもある。

「ですが今現在、吸血行為繰り返し『桜通りの吸血鬼』とも呼ばれているのも事実でしょう！
ただ単純に１５年間を雌伏の時と考えていた可能性も考慮するべきではありませんか！？
今からでもエヴァンジェリンを拘束するべきです！」
「今回の件に関しては、僕もガンドルフィーニ君に賛成ですね。
今からでもエヴァンジェリンに何らかの対応を取るべきだと思いますよ。」

ヒートアップ気味のガンドルフィーニの意見に同調するのは同じく

眼鏡をかけてるものの、
人の良さそうな印象のある明石教授。
一人娘がエヴァンジェリンと同じクラスである、と言う状況下では同調するのも当然と言える。

「勿論、ここまで騒ぎが大きくなった以上、何もなしとはいかんじゃろう。
ワシの方から警告は出しておく。それで良かろう。」
「そんな悠長な事を言っている場合ですかっ！」

ペースを崩さない学園長に焦れた様に詰め寄るガンドルフィーニ。

「まぁまぁ、生徒の事が大事なのは分かるが少し落ち着きたまえガンドルフィーニ君。
ワシとしてはこの時期にお互い麻帆良を守る者同士で潰しあう真似はして欲しくないんじゃよ。
それにエヴァンジェリンの方も吸血行為だけでそれ以上は何もしておらん。
何より、学園結界がある以上はエヴァンジェリンは大きく動けんのじゃからの。」
「確かに、停電時も最低限の結界は予備電力で稼動しますので問題は無いでしょうが……」
「学園長がそう仰るのであれば……。」

学園長の発言に不承不承ながらも同意する明石教授、そしてガンドルフィーニ。
明石教授としては学園結界などのシステム的な面を管理している以上、納得せざるを得ない。
また、停電時においては通常より侵入者の数が増える事は過去のデータからでも明らかである。

このような時にエヴァンジェリンと真っ向からぶつかり合って戦力を減らすのは論外だ。

「では、その方向で進めることにして今は解散じゃ。賞金稼ぎその他の面々が麻帆良に入ってくる数は増えるじゃろうが、頑張って欲しい。ワシの方からも手を回せる所には回して引かせるように試みるでの。」

学園長の締めの言葉で解散する魔法先生たち。

立ち去る彼らの中から明石教授を呼びとめ、小声で尋ねる。

「ところで、誰がこの情報を流したのかは分かったのかの？」

「ええ、特に偽装した訳でも何台もパソコンを経由した訳でもありませんので、直に特定しました。ですが……」

質問に答える物の煮え切らない明石教授に首を傾げる学園長。

「何じゃ、何か問題でもあったのかの？」

「いえ、発信先が……」

それだけ言って書類を渡す明石教授。

読み進めて行った学園長は、頭を抱えたくなった。

割り出された住所から判明した住んでいる人間。

それは『英雄の息子』ネギ・スプリングフィールドであったのだから。

―そして、夜は明ける―

朝起きてまほネットを確認してみると祭り状態でした。なんと言うか大変な事になってます。

「『闇の福音』復活！」とか「某特務１３課が聖堂騎士を派遣するらしい」とか

「我こそは『闇の福音』を倒すと言う勇者求む」とか「え、あいつ生きてたの？」まで。

小さな所では「こちらスネーク、麻帆良に潜入しようとして失敗した」とか、「『闇の福音』復活を祝って殺戮の宴を行うオフ」とか……後者は小さくねーな。

どちらにしろ、『闇の福音』復活は今ホットな話題になってます。

……確認すると賞金も復活してます。相変わらず６００万ですが。

『６００万ドルの吸血鬼』と書くとアメリカのドラマみたいですね。

そんな感じで朝飯を食いつつ優雅にネットサーフィンした後、出勤です。

そうやって出勤しながらも対エヴァンジェリン戦に考えをめぐらす俺。

よく考えれば、土曜の昼とか言わずに日曜の夜明けから行動開始すればいいんですよね。

まぁ、普通の１ＶＳ１の戦闘でも日が暮れるまでとか夜が明けるまでとかはないでしょうが、

相手に時間稼ぎされて夜、とかやられるのも癪です。

ましてや相手には優秀であろう前衛がいるのだから尚更。

そんな感じで学校に出勤し、職員室へ向かっているとしずな先生に呼ばれました。

何でも学園長がお呼びだそうなので、早速向かう事にします。
学園長室では、気難しい顔をした学園長がお出迎えしてくれました。
……また犠牲者でも出たのか？

「ネギ君、お主は一体何を考えておるのかの？」
「……は？」

質問の意図がよくわからないので、間の抜けた返し方をしてしまう俺。
何かやばい事やったっけか俺？精々『闇の福音』復活をネットで報告したぐらいですが。

「あー、ひょっとして昨晩のネットの件ですか？」

頷いた学園長を見るに、どうやら大当たりのようです。

「そのお陰で関係各所から問い合わせは殺到するわ、侵入者の数は増えてゆくわ、
ワシは夜中に起こされて対応にてんてこ舞いだわ、お陰で寝不足だわ大変だったんじゃよ。
で、何でそのようなことをやったのか、と聞いておるのじゃ。」

まぁ、寝不足ならそりゃ気難しい顔にもなるな。
こうなった以上は報告せざるをえないだろう、と言う事で昨日のエヴァンジェリンとの
やり取りを報告して、宣戦布告された旨を告げます。

「明らかに『闇の福音』復活じゃないですか。その事について情報を流す事に何か問題が？
それとも麻帆良は『闇の福音』を匿っていたって事ですか？」

と逆に聞いてみます。

すると、学園長は一つの昔話をしてくれました。
要約するとエヴァンジェリンはここに括られてるそうです。登校地獄と言う魔法によって。
使用者はナギ・スプリングフィールド……俺の親父です。
そして親父が去って１５年、約束の１年が過ぎたどころかいつまで立っても解呪しにこない
親父のせいでずっと中学生やってるとか。
言い残した言葉は「光に生きてみろ」だったとか。

正直俺としては「ふーん」くらいの意味しかありません。
流石に空気読んでその辺は口を出しませんが、言いたい事は言っておきます。

「つまり親父が身元引受人みたいだから安全とか言いたい訳ですか？」
「うむ、身元引受人と言う訳ではないのじゃが、あやつが連れてきた以上は危険は無いと
判断しても構わんと言う事じゃ。そこまで危険ならば連れてきたりはしておらん。」

学園長、流石にそれ甘いだろう？
そりゃ英雄が何もせずに連れてきたならそう考えてもおかしくはないだろうけどさぁ。

「でも現に吸血行為を行っている訳ですよね、エヴァンジェリンは。
１５年前に親父が何を考えてそれをしたかは知りませんが、
今現実はご覧の有様じゃないですか。結局光に生きれず闇に生きて

るって事でしょう？
それとも、この程度の吸血行為ならば黙認するとでも仰るおつもりですか？」
「そのような事は言っておらん、無論エヴァンジェリンの方には今朝にでも警告を出す。
これ以上の吸血行為は辞めるようにの。」

……遅いっつーに、とは口に出しません。
出した所で犠牲者が元に戻るわけでは無いですからね。
これから被害者が出ない、と言う事に眼を向けましょう。

「そう言うわけでじゃ、ネギ君もこれ以上情報をネットで広げぬように。」
「それは分かりました。ネットに関してはそのようにします。
しかし、これ以上エヴァンジェリンが何かやらかした時はどうなさるおつもりですか？
こちらで始末をつける事になる、と考えて宜しいですね？」
「……む、むう。そうせざるをえんじゃろうなぁ。
勿論、彼女が何をやらかしたかにもよる。それ次第の対応にはなるじゃろうがな。」

なんと言うか、玉虫色の答弁を聞かされてる気がします。
何を躊躇う必要があるんだろうか？ばっさりやっちまえばいいのに。
そうだ、ついでにこっちも言っておこう。この流れだと無理に喧嘩売る必要ねーや。

「学園長、エヴァンジェリンへの警告の際に申し訳ありませんがこちらを狙うのも
止めるように言っておいて貰えませんか？
本来なら、先手必勝とばかりこちらから仕掛ける予定でしたがその

必要もなさそうですので。」
「お主……そこまでやるつもりじゃったのか？」

少しどん引き気味の学園長。
いやそりゃそうでしょ、どう考えても命狙われてたんだよ俺は！

「勿論、彼女が聞き入れないならそれで構いません、こちらもそれ相応の手段を取りますので。」
「う、うむ……分かった。その件に関しても言っておく。」

学園長の事です、エヴァンジェリンを逆なでするような説得はしないでしょう。
何しろ１５年来の付き合いです。それくらいのコツは心得ているはず。
取りあえず話はそれだけとの事なので、俺は退室する事に。
去り際に、溜息を吐いていた学園長が無駄に印象に残っています。

学園長の話から推測するに目的は恐らく俺をぼっこにしてその血を奪って触媒にし、
その『登校地獄』と言う呪いの解除を目論んでいるんでしょう。
事情話して血液下さい、って言ったら俺が死なない程度にやるんだけどなぁ。
……いや、どうだろ。わざわざ真祖フリーダムにさせる理由も無いか。
まぁ、親父への怨み辛みをその子供にぶつける様な大人気ない奴だししょうがないか。

職員室によってから教室へ行くと、絡繰さんが呼び止めてきました。

「ネギ先生、申し訳ありませんがマスターは少々遅刻します。」

「あー、例の件？」
「はい、その件です。どれくらい掛かるのかはわかりませんが。」
……本当にわかってるのか？
まあ仮にも従者だし主人の動向くらいはちゃんと把握しているでしょう。
で、エヴァンジェリン本人はＳＨＲ過ぎても来ず、１時間目の俺の授業にも出ませんでした。
えらい時間かかってるな、がんばれ学園長。

そして時間は過ぎて昼休み。
頼んでおいた牛丼弁当を食べていると人が来る気配。
昨晩から有名人返り咲きの『闇の福音』ことエヴァンジェリンさんです。

「どうしましたか、エヴァンジェリンさん？授業で分からない事でも？」
「……よくもまぁ、そんな事が言えたもんだな。」

俺の軽い挨拶に殺気すら篭っている声でそう言ってきます。
それでも結界を張って堅気にばれない様にしてるのは評価してもいいかもしれません。

「貴様のせいで、じじぃと3時間以上も無駄な時間を過ごす羽目になった。
いや、それ以上に大それた事をしてくれたもんだな、ええ？」
「……や、自業自得でしょう？」

実際、お前が何もしなきゃ俺も何もしてねーんだよ。
と言うか、朝登校してからずっと学園長室におったんかい。

「それで、わざわざそれを言うためだけにエヴァンジェリンさんは職員室に？」
「余裕の対応だな、もしかして勝ったつもりか？」
「勝ったつもりは無いけどね、負けたつもりも無いよ。少なくとも、この勝負は学園長預かりでドロー。そう思ってるけどね。」

まぁ、実質停戦みたいなもんですからね。
別に証文を書いてる訳ではないですが、学園長の前で宣言するだけでも意味はあるはず。
無視するまでならそこまでの奴だったって事で。
こちらは専守防衛に切り替えて対応すればいいでしょう。

「貴様がそう思うには勝手だがな。いつまでもその調子でいられると思うなよ？
『登校地獄』が解ければこちらはいつでも外へ出られるんだ。」
「なぁ、『闇の福音』さんよ。負け犬の遠吠えは見苦しいぜ？」

いや実際、負け惜しみ言ってるようにしか聞こえません。
と言うかめっちゃ学園長の顔に泥塗る気満々じゃないですかこいつ。
だからと言って先手取る訳にもいかんしなぁ……。

「ふん、その余裕がいつまで続くか見ものだな？」
「あ、ちょい待ち。」

捨て台詞を吐いて去ろうとするエヴァンジェリンを呼び止めます。

「何だ、ここに来て命乞いでも始めるか？」
「今日の授業に出て無い分のプリントだよ。ちゃんとやっておくよ

うにね。」

一瞬物凄い目つきで睨んできましたが、ひったくる様に奪い取るとそのまま去って行きました。

まぁ、確かに俺が空気読んでなかったな。これは。

とは言え、頭が痛いです。

あの調子では何かしらのタイミングで仕掛けてくることは確実。

こちらもちょっと動かないとまずいかなぁ。

いつでも攻撃に出れるように準備を整えて……大体は宝物庫の中身で足りるな。

やろうと思えば背中から引っ張り出したりポケットから出たりする振りもできます。

まぁ、サイズ的に斧やらチェーンソーを背中から出したり、明らかにポケットに入らない物をポケットから出したりするとシュール極まりないんですが。

学校の授業の方も終わって放課後。

職員室でいつものように作業しながら今後について考えます。

エヴァンジェリンが攻めないと攻撃できない以上、先手を向こうに渡す事になるのは確実です。

となると、向こうから動いても大丈夫な態勢を整えるのが確実なんですが……。

入ってきた人達も全員が全員強制送還されたわけでは無いでしょうし、何とかして繋ぎを

取って共闘体制を取るのが一番良さそうですが、ううむ。

流石に一人で出来る事の範疇を越えているのも事実。

今朝の事を考えると、あんまり大っぴらに探し回る事も難しいしなあ。

せめてもう1人協力者と言うか、動き回ってくれる人がいれば……

そう考えを巡らせながら残りの時間も過ごし帰宅途中。

「辛気臭い顔してるじゃねえか兄貴？」

と懐かしい声が。

下を見下ろすと、一匹の白いオコジョがそこに！

「カモ君、カモベール・アルミール君じゃないか！」

「アルベール・カモミールっスよ兄貴！！

しかし、えらい歳取りやしたね？」

「や、今学校で教師やってるからね。流石に9歳児で教師は無理だよ。」

そんな感じでカモ君を肩に乗せながら話をする。

「しかしまたどうしたんだい急に？」

「いえね、兄貴の姉さんに頼まれて助っ人に来たんでさぁ。

まさかそんな姿になってるとか予想もしてないんで、探すのに手間取って手間取って。」

ネカネさん、何やってるんですか貴方。

そこまで俺が心配ですか。

「とは言え、教師生活でオコジョ妖精に助けてもらう事って無いんだけどなぁ。」

「何言ってるんッスか、パートナーっスよパートナー！

そろそろ兄貴も仮契約して1人はパートナー見つけないとかっこつかないっスよ！？

ましてやそんなナリでいるなら尚更っスよ！」」

何故か必死になって仮契約を勧めるカモ君。
とは言え、特にパートナー候補がいるわけでもないしなぁ。

「いやほら、今の所そもそも魔法使いとしての修行が教師だからね。仮契約で従者作っても宝の持ち腐れだよ。はっきり言ってね。」

などと言いつつ無事帰宅、ポストを確認するとメールが一通。
ネカネさんからのようです。
とりあえず、カモ君を適当に寛がせながら目を通します……おい。
いえ、普通の形式で来てるのでそこは問題ありません。
問題は中身です。

要約すると今ここで寛いで酒は無いっスか？と言ってるアルベール・カモミール君は
収容所から脱走したそうで。
もしかしたらこちらに来るかもしれないので、その時は送り返して欲しいとのこと。
ちなみに、収容されていた容疑は女性の下着２０００枚の窃盗罪。
こいつ何やってんだ。
後は近況とか怪我とか病気はしていない？とか言うお決まりの文章です。

ふむ……と手紙を背広のポケットにしまい、考え込みます。
送り返すには楽な仕事ですが、このまま返してしまうのも惜しい。
となれば……これしかねーな。

「うん、カモ君。ちょっとお話があるんだけどいいかな？」

にこやかな顔で話しかける俺に、カモ君は嫌な予感がしたと後に語ったそうです。

第１１話：そして、停戦して再会した話。（後書き）

原作で言う４／１０の出来事ですね。
カモ君の到着がずれこんでいます。
理由は作品にあるとおり、まさかカモもネギが大きくなってるとは思うまい、と
もうちょっと到着が遅ければ麻帆良の強化防衛網に引っかかってる可能性もｗ

今回もまた長いので後書きは活動報告の方で。

第１２話：そして、６００年物真祖と戦う話（前書き）

きりがいいので１２話はここまで。
決着は１３話予定です。

第１２話：そして、６００年物真祖と戦う話

あれから数日。
ネットの方で情報を確認するに、表立っては『闇の福音』をどうこうしよう、
と言う動きは沈静化しています。
学園長が「既に手綱はつけている、今回の件については既に処分済みである。
次に何かやったら必ず責任取る（意訳）」と説いて回ってるそうで。
噂ではエヴァの学園来歴秘話まで喋ってるとか何とか。それだけ親父の名前が強いのか。
まぁ、「かの英雄が捕縛して括った吸血鬼です、ちょっとやそっとでは逃げられませんよ。
今回の件はちょっとした反抗期で、いざとなったら処分楽勝なんで安心してください」
って事なのか？どういうやり取りがあったのかは知らないが、学園長頑張ったな。

まあともかく、表立っては様子見の模様です……あくまでも表立っては、です。
『正義感溢れすぎる人材』とか『命令を聞かない跳ね返り』とかが個人的に独断で動くのまでは
向こうもやめろと絶対厳守できませんからね。
それに加え、６００万ドルの賞金自体が再び消滅したわけではないので、
その賞金とか倒して名を上げようとする命知ら……もとい挑戦者達は後を絶たないという。

もっとも、急いては事を仕損じると言いますか浅慮で突っ込んでく

るような方々は
既にとっ捕まったりして強制退去されてるようです。
「麻帆良の防衛網かてぇ」とか「自動防御機能付き影の使い魔（？）マジつえぇ」とか
「中に入ったと思ったらスナイプされて気が付いたら強制帰国でした」とか、そんな声が。
もっとも、そんな安直な連中ばっかりな訳ではなく。
諸々のちゃんとした手続きをして堂々と入ってくる連中もいます。
もっとも、手続きはちゃんとしてるけど身分証は偽造とかそんなのですが。
大体にして、一般人お断りの都市ではありませんし理由も手段もいくらでもあります。
単純に、セールスに来た海外からのビジネスマンでもいいんですから。

で、俺は俺でそういう方々と繋ぎを取っている訳です。カモ君を使ってね。
カモ君とは試用期間付きで月給５万円の雇用契約です。三食昼寝つき……
とまでは行きませんが危険手当とかはつけてます。
と言うか、口止め料とかも諸々込みで５万円と言いますか。
まぁ、言ってしまえばメッセンジャー・ボーイと言うやつですね。

勿論事情は出会った日の晩にちゃんと話してます。
今、俺『闇の福音』と喧嘩してる真っ最中、今は休戦状態だけど直に再燃するよって。

「そ、それじゃ俺っちはこの辺で！」
「いやいや、ちょっと待った。」

聞いた瞬間慌てて逃げ出そうとするカモ君の尻尾を掴んで引き止める俺。

「何言ってるんっスか、『闇の福音』といやぁ６００万ドルの賞金首ですぜ？
なんでまたそんなもんとそんな事に？」
「実はね……」

と学園長から聞いた話を語る俺。
聞いたカモ君は腕を組んで考え込みます。

「そりゃあ……災難と言うか、ご愁傷様と言うか何と言っていいやら。
いっその事『血をやるから襲うな』って話しに行ってみるのはどうっスかね？」
「……行ってみる？うちの兄貴がどうしてもお話したいと申しておりやすって。」

首を全開で横に振るカモ君。
まぁ、そうだわな。俺だって嫌だ。

「あの手の吸血鬼はプライドだけは高いからね。それだけ長く生きてきたって事なんだろうけど。
まぁ、向こうからすれば奪い取れば楽勝の話だと思ってるからね。」
「うーむ、やはり兄貴ここは仮契約でパァーっと従者を作ってボコるしかねーんじゃ……」

そこまで仮契約に拘るか君は。溜息を一つ。

「あのね、カモ君。そもそも仮契約する人間がいないんだけど？」

「何言ってるっスか、こんなに候補がいるってーのに！」

引っ張り出してきたのは俺のクラス名簿。

お前何やってんだよ。

「堅気の素人を従者に仕立てて『闇の福音』相手にどうしろと？

ましてや、向こうにも熟練の従者はいるよ？」

「ううむ……」

そういうと沈黙して考え込むカモ君。

少なくとも心配してくれるのはわかるんですが。

「正直、詰みかけの状況だなこりゃ。兄貴自身はどれくらいできるんで？

俺っちの見立てじゃ相当やるみたいだけどよ。」

「残念だけど、攻撃魔法は『魔法の射手』と『武装解除』のみ。後は回復・防御魔法メインさ。」

「あー、詰んだっスね。」

と言うか、６００年キャリア持ちの真祖吸血鬼と魔法で撃ち合えとか言うのかお前は。

ましてや２対１とか無理ゲー過ぎるだろう。

「せめて優秀な前衛がいれば話は別っスけどねぇ。そんな都合のいい話ねえよなぁ……」

「あるよ。」

一言で返した俺に固まるカモ君。

「正確には、前衛候補がいるって話なんだけど。」

「何でそれを先に言わねぇんですか。それなら話は別だ。」
「ただ、それには君の活躍が必要だカモ君。今のこの周りの情勢から説明するよ？」

ネットでの状況を説明しつつ、麻帆良に賞金稼ぎなどの類が集まりつつある事を説明します。

「つまり……こいつらとの共同作戦でぶったたいちまおうって腹ですかい？」
「ま、向こうが動いてくれればだけどね。予想では４月１５日。」
「またえらい具体的な日にちを……」

そういうカモ君に一枚の紙を見せます。
そこに書かれているのは学園都市停電のお知らせ。

「この日、学園全体が停電するんだ。そして、学園を覆う結界は電力で賄われている。
正確には電力で結界自体の効果をブーストしていると言うべきかな。
まぁ、停電してしまえば別の手段で結界の強化は維持すると思うけど……。」
「それを見逃す『闇の福音』じゃねえ、と。」
「俺が『闇の福音』なら間違いなくこの日を狙うね。ネットワークからウィルスでも
流し込むなりなんなりして完全に全てをダウンさせてしまえばいいんだから。
停電自体は４時間だけど、逆に言えば完全状態なら４時間あれば十分すぎる。」

向こうにはロボがいるんだ、ハイテクが全くダメって言う線も消えたようなもんだし。

「つまり、おびき出すなり誘導するなりして数でぶっ叩く、って寸法で？」
「最終的に数は暴力だよ、カモ君。」

最も、世の中には数を凌駕する質と言うのは存在します。口には出さないけど。
仮に停電時に狙ってくるなら、最低勝利条件は４時間持ちこたえればいい訳でして。
とは言え、４時間も一人で粘るのは無茶なので数に頼もうと言う寸法である。

俺自身がその日だけこの麻帆良から出てれば、ある意味解決するんですが……
まぁ、その後もずっとアレに付けねらわれる事を考えると後顧の憂いは断ちたいといいますか。
向こうから仕掛けてくる分には反撃させてもらいますと言うか。

「で、俺っちにその手の連中に話を持ちかけて欲しい、と？」
「俺は堂々と表立って動けないからね。きっと学園内も全員が『闇の福音』擁護派でも無いし、
排除派を騙って接触しても問題ないと思うよ。それに、いざとなったら代表者役で俺も出る。」
「身元割れちまうのはまずいんじゃねえの、兄貴？」
「それは向こうも同じ事だよ。お互い素性は黙して語らず、さ。」

それに、こっちには新兵器があります。
以前言ってた『誰か分からなくなるコート』を完成させて見ました。
正確には『被ると誰かわからなくなる帽子』です。コートだと装備部位が被る。

問題は濡れたり破れたり穴が開いたり……まぁ、ちょっとしたことで使えなくなる事で。

「しっかし、最強状態のエヴァンジェリンと戦うような命知らずいますかねぇ？」

「……いるさ。声を掛けたやつが全員来るとも思って無いけどね。それに、誰がそこまで喋るって言ったかな？」

「え、まさか兄貴……」

「まぁ、調べれば停電なんてすぐに分かる事だし、分からないやつが間抜けだよ。」

お、鬼だこの人……とか言ってるカモ君はスルー。

どの道エヴァンジェリンが魔力を開放した段階で逃げる奴は、いつ声をかけても逃げる。

この段階で町に居ついている連中は間違いなくベテランの類、と言うのも勘定に入れてますが。

「しかし、そうなるともうちっと給料の方は何とかなりやせんかね兄貴？

幾らなんでもちょっと厳しいと言うか……げ。」

一枚の手紙を見せると押し黙るカモ君。

まぁ、ネカネさんからの手紙ですが。

「もし、仮にこれでエヴァンジェリンを倒す事が出来たら、君も功績が認められて

罪の帳消しになるんじゃないかな、と俺は思うんだけどどう思うカモ君？」

「りょ、了解っス！この程度の雑事ならいつでもどんと来いってやつでさぁ！」

カモ君がぴしっ、と敬礼します。素直なのはいいことです。

と、そんな訳で潜伏している連中と繋ぎを取る事はできました。
と言うよりいつのまにか『麻帆良闇の福音討伐部隊』みたいなことになってます。
まぁ、個人個人で目立たないように入ったらそれほど横と繋がっていないと言いますか。
そこをカモ君に頼んで繋げて貰ったと言いますか。
2日ほどで連絡網諸々を組んだ最大の功労者は間違いなくカモ君と断言していいと思います。
終わったらバーボンを奢ってやる事にしましょう。

ちなみに俺はそんな方々用に配布するポーション類の作成をやってます。
身体増強とか魔力増強とかそういう類のブツです。
自分で飲んでいるのよりは効果も薄いですし、1服しかありませんがこれで十分でしょう。
金曜夜から日曜朝までずっと家に作った工房に篭ってこの作業です。
あ、『別荘』は使ってません。まだカモ君に見られるつもりも無いですし。

そして日曜日は顔合わせに行きます。１００人ほどなので1日がかりでしたが。
比喩抜きで本当に一日がかりです。朝から晩まで。
まぁ、本当の一匹狼さんは少なくて大体はチームだったりで助かったんですが。
それに顔合わせと言っても、

「この度は大変お世話になります。我々としても『闇の福音』は倒

さなければならない存在。
本来なら我々麻帆良の手で始末を付けなければならないのでしょうが、宜しくお願いします。
少数派ゆえに大それた支援は出来ませんが、これをどうぞ。」

とちょろっと話をしてポーション渡して終わりなんですけど。
後、麻帆良内ではネット関係から監視の目が光っているので今は内密にとも頼んでおきます。
まぁ、顔も見て無いし向こうも俺が誰かはわからないんですけどね。
ちなみに、倒した場合の６００万ドルについては等分に山分けです。
どっかの宗教の神父っぽい人とかは

「賞金が目的で来たわけではない。」

とか言ったんですが、

「そもそも勝った後での話なんで、今は合わせておいて下さい。
丁度今なら頭割りで割り切れて楽なんです。」

とお願いしておきました。変に端数が出ると揉め事の元です。
大体、何人残るかわからないわけですけどね。
もし足りないようなら、要領のいい奴は麻帆良に請求するでしょうきっと。

で、週が開けて月曜日。
職員会議にて、中止していた部活動の再開などが決定しました。
と言っても火曜日があけてから……停電の後ですね。
丁度いいといえば丁度いいといえます。
もっとも2年生は停電明けたらすぐに修学旅行なんですけど。

それと、停電時の夜間見回りシフトが発表されました。俺、寮の方の見回りだそうです。

ちなみに、この日はエヴァンジェリンさん風邪を引いてお休みです。お大事にって言っておいてね、と絡繰さんには言っておきました。あぁ、後ちゃんと授業のまとめプリント作って渡しておくようにお願いしてもおきましたけど。

しかし、今ふと思ったのですが。
エヴァンジェリンの目的が分かってるのに、俺に護衛の一人もいないとかどうなんでしょう？
学園長はもしやエヴァンジェリンが言われた事を素直に聞くと思っているのでしょうか？
それとも「これくらいは自力で何とかせんかい」と言う愛の鞭なのか。そんなのいらねぇ。
１５年の付き合いで誑かされたと考えるべきかなぁ……まぁ、連れてきたのが親父って言う補正が入って甘めに見てると考えるべきなんでしょうけど。

そんなこんなで火曜日当日。

「はい、今日は皆さんご存知の通り夜２０時から２４時まで学園全体が停電の日です。
エレベーターも街灯も全て電気が落ちます。勿論外出も不可なので絶対に出ないように。
明かり代わりの蝋燭とか使う時は、火事だけ気をつけてね。」

と帰りのＳＨＲで言って今日の授業も終わりです。

そう言えば停電セールやってたよね？とか言いながら帰宅の準備を

する生徒達を後ろに、
俺も見回りの準備をする為に職員室へ行く事に。
その後、外へ出てカモ君と合流します。

「兄貴、準備の方は滞りないですぜ。
これでエヴァンジェリンの奴が動かなかったらいい笑いもんですぜ、しかし。」
「それこそまさかさ、社会的に殺されかけた挙句に学園長に止められて報復も出来ない。
そうなって来たらやれる時に確実にしとめに来るさ、彼女なら。」

むしろあそこまで言い放っておいて何もしてこないとか言うならただのチンピラです。
……そっちの方がいいんだけどなぁ。
しかし、今日は天気が悪い。
夕日が沈んだのも分かる間もなく夜が来て、時間は過ぎて２０時の鐘が鳴ります。

学園を闇が包んで少しして、震えが来るような魔力が巻き起こるのが感じ取れました。

「カモ君、これって……」
「間違いねーな、かなりの大物クラスとなりゃ他にいねーだろ兄貴。」
「だよねぇ。と言う訳で最終調整宜しく。」
「合点でさ！」

そう言って乗っていた肩から飛び降りて駆け出していくカモ君を見送ります。
さて、後はアレがどういう手で俺に攻めてくるかです。

不意を付いてくるのか、真っ向から攻めてくるのか……
そう思いながら1時間ほど歩いていると、佐々木さんが突っ立っています、全裸で。

「さ、佐々木さん、君こんな所でそんな格好して何やってんの!?」
「ネギ・スプリングフィールド、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさまがきさまにたたかいをもうしこむ。10ぷんごだいよくじょうまでこい。」

どうやらと言うかやはりと言うか、眷属になったみたいです。

「……ふぅ、お断りだよ。」

そう言って【瞬動術】で急接近、そのまま一発当て身を叩き込む振りして
【文珠】で〔眠〕らせます。
がくっ、と意識の無くなった佐々木さんを目立たない場所に引きずり込んで……
なんと言うか、犯罪者の気分ですねこれは。
【王の財宝】の宝物庫に放り込んでる毛布を被せて、少し記憶を〔覗〕かせて貰う事に。

うーむ、ひどいことになってます。
具体的には佐々木さん除いて眷属が大河内さん、和泉さん、明石さん、それに
宮崎さんと早乙女さんに、綾瀬さんもか……。
まぁ、噛まれた人間の関係者がそのまま眷属に早変わりしたといいますか。
しかし……これで討伐の名目は完全に立ったな。

【王の財宝】から杖を一本引っ張り出します。親父の形見ですね。
何だかんだ言って、発動体としてはこちらの方が優秀です。
後は、用意しておいた身体・魔力強化ポーションを飲んで準備完了です。
あれから改良を重ねて４時間くらいは楽勝で行けるようになりました。
もっとも、バックファイアの軽減は不可能でしたが。
……これでも吸血鬼の身体能力・魔力には及ばないんですけどね。
と言うか、素の身体能力から桁違いだと言うのに。

さて、吸血鬼退治と参りますか。

一場面は変わり、ここは女子寮大浴場。一

『闇の福音』ことエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルはイラついていた。
ネギ・スプリングフィールドを呼びに行かせた佐々木まき絵が戻ってこない。
返り討ちにあったのか、不測の事態に陥ったのか。

「いいか、力ずくででもここまでつれて来い！！」
『わかりました、エヴァンジェリンさま。』

３０分後、宮崎のどか、早乙女ハルナ、綾瀬夕映の３名をネギの元に向かわせる事にする。
……しかし。

「マスター、３０分経過しました。現在時刻２２：００。停電終了まで残り１２０分です。」
「まさか……このまま逃げ続ける気か、あの坊やは！？」
そう。向かわせた3人も戻ってこない。
ここでようやく眷属の視界を奪い取る形で状況を確認するも意識を失っているのか、
詳細は全くの不明。

「ちっ、こんなこすい手で攻めて来るとはな……下らん知恵だけ良く回る。」
「ですが、効果的かと。」

イライラの増したエヴァンジェリンと冷静に評価する茶々丸。
実際の所、エヴァンジェリンの最強モードは実質この日４時間限定なのだ。
それを過ぎてしまえば、また結界によって力の大半を封じられる形となってしまう。
茶々丸がクラッキングを掛けたシステムにしても、次に破れる保証は無いのだ。

「ちっ、仕方が無い。こちらから打って出る。」
「了解ですマスター。魔力探査モードに移行します……高魔力反応確認！？」

茶々丸がその機能を活用して付近一帯の魔力を探査しようとした時……
大浴場の外に面した大きな窓ガラスが砕け、無数の『魔法の矢』が撃ちこまれる！！
咄嗟にエヴァンジェリンを庇える位置に割り込む茶々丸。

風の矢と言う事と、数と速射性を重視しているのか威力は抑えられた物である。
だが、一体何人の魔法使いがそれを為したのかと言わんばかりの面砲撃。
その範囲は当たるを幸い、いや大浴場全てを打ち砕かんとばかりに降り注ぎ……
唐突に終了した。

「マスター、ご無事ですか？」
「ふん、この程度でどうにかできると思ってるなら大間違いだぞ！！」

撃ち込んだ方角に向けて吠えるエヴァンジェリン。
しかし、手元に残しておいた眷属３人が行動不能になっているのを確認して唇を噛む。
あれだけ用意しておいた眷属が、既に０人となっている。
面制圧を目的として撃たれた風の矢をかわしきれず、そのまま喰らった形だ。

「こんばんわエヴァンジェリンさん、絡繰さん。いい夜の晩とは言えない天気ですね？」
「……貴様っ！　どういうつもりだ！！」

窓の外……宙に浮かび、いつもと同じ自然体で佇むネギ・スプリングフィールド。
エヴァンジェリンのイライラはまさに頂点に達しようとしていた。

「どういうつもりだ？　お前が言うなよ吸血鬼。休戦協定破るつもりか？

ご丁寧に眷属までこさえて用意しやがって。」
「ふん、それが素の貴様か。貴様が何を以って休戦と言ってるかは知らんがな、
私はそんな事を約束した覚えは一つも無いぞ？」

控えていた茶々丸がすっ、と前に出る。

「元々、こいつらは場の賑やかし程度に過ぎん。貴様１人、私と茶々丸だけで十分すぎる。」
「いいのか吸血鬼？　それとも６００年も生きてると１分１秒程度どうでも良いってか？」
「……っ！　良い度胸だ。ガキならまだしも、今の貴様なら殺さない理由など無いからな。
せいぜい足掻け、ネギ・スプリングフィールド。貴様の絶望の叫びを聞かせてもらうぞ！！」

それと同時に、詠唱を開始するエヴァンジェリン、
そしてスラスターを吹かし空へと舞い上がる茶々丸。
迎え撃つべく杖を構えるネギ・スプリングフィールド。

『英雄の息子』と『闇の福音』主従の戦いがここに開始される。

停電終了まで……残り９０分。

第１２話：そして、６００年物真祖と戦う話（後書き）

＞頭割り
原作でもそのように言われているエヴァンジェリンさんの賞金額は６００万ドル。
最近の為替参考にしても日本円で大体5億円前後。
ちょっと物の値段を調べてみましたが、世界一高い車を2台買えるかどうか。
ドル換算で話をするとＳＷＡＴ隊員を１０人ほど養成できるそうで。
１００人で頭割りしても５００万円から４００万円辺りは堅いと言う。
真祖の吸血鬼命賭けて倒すのにそんなもんか、と思われるかもしれません。
だけど魔法世界に持って帰ると大金になるって俺は信じてる（何）。

しかし、この賞金を掛けてるのはどこなんでしょうね？
ドルと言う単位である以上は現実世界から賞金がかけられているのか。
それとも、魔法世界でもドルは取り扱っていてくれるのか。
通貨の両替はあるとは思いますが……多分。

＞原作ネギＶＳエヴァ、茶々丸、眷属メイド隊
２０：００～２４：００までが停電時間。
女子寮の大浴場からの戦闘が一通り終わって逃げ出したネギを追いかけるときに
言った残り時間「７２分２１秒＝１時間１２分２１秒」より、時刻は２３時前後。
やたら時間掛かってないか？とタイムテーブルを確認してみた。

２０：００学園停電→茶々丸同時に学園結界を完全に停止させる
→停止後にエヴァンジェリン、まき絵を使役して眷属増やす（ネギこの時間帯見回り中）
→茶々丸、人数分のメイド服を持って（？）合流、その間にまき絵にネギ呼びに行かせる
→まき絵帰還後、眷属メイド服に着替えて待機。
→約１０分後ネギ到着、ちょろちょろと会話
→眷属メイド隊ＶＳネギ

……パッと見大量の出来事が起こってるけど、
学園結界停止と眷属使役・支配は同時刻でいけるし、
茶々丸がメイド服持ってきてる間にまき絵お使いにやればいいわけで、
眷属たちが着替えて待機する時間は１０分弱。

茶々丸のいた場所にもよるだろうけど……あぁ、あそこが学内施設なら
女子寮までは時間がかかるか。とは言え、空飛んで１時間とかかかるのか？

仮に１時間掛かるとして、その間に支配と使役とまき絵お使いを終わらせて
着替え含めて１時間１０分。ハッキングとかの時間含めても１時間半前後？
まさか一旦荷物取りに家に戻るとかはしないだろう。
と言う訳で、諸々含めて女子寮にエヴァ組が揃ったのが２１：３０くらい。

ネギ到着したのが２１：４０分近くか？

もうちょっと諸々遅めに見積もっても２２：００くらい？
そこから会話と眷属メイド戦で１時間ほど掛かってる計算になるけど……

しかし、本当に慢心過ぎたんだな……エヴァンジェリン。
茶々丸と二人で攻め寄せれば楽勝の子だったのに。

……そういやネギ、あいついつの間に結界なんて書いたんだ？
それも橋のあんな所に。
まぁ、さんざか「エヴァンジェリンさんは更生してくれたんだいぃっほぅ。」みたいな
感じで喜んでおきながら「こんなこともあろうかと」と準備をしてた時点で突っ込むのは
野暮と言う話はありますが。

＞あの坊や
６００歳からすれば十分坊やです。

第１３話：そして、６００年物真祖が倒された話（前書き）

麻帆良学園都市大停電。
年２回のメンテナンスの為に２０：００～２４：００の間、学園都市全体が停電を起こす。
実質的に都市機能の麻痺である。
それは、この学園都市に張り巡らされた結界も同様である。
本来は世界樹の魔力と６箇所の魔力溜まり、これを用いた魔方陣による結界だったのではあるが、
科学技術の発展に伴う魔法科学ともいえる技術が、この結界の強化を容易くしたのだ。
主に探知・防御面で。

逆に言えば、科学の恩恵を受けられなければ結界は惰弱なものと化す。
即ち、停電時において学園都市の結界は通常よりも弱体化してしまうのだ。
だからこそ、この時間を狙って動く他勢力と言うのが存在するのである。

『図書館島』の貴重な魔導書を狙ってくる者。
世界樹そのものを狙ってくる者。
そして、特定人物への襲撃を行おうとする者。
関東魔法協会に何らかの恨みを持つ者。

ともかく、理由を挙げればきりが無い。
それらを迎撃する為に、魔法先生・生徒達は身を粉にしてこの４時間必死に働くのである。
それぞれが持つ理由の為に。

そんな麻帆良を護る者たちの中に、イレギュラーが1人。
エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。『闇の福音』と恐れられた吸血鬼の真祖。
しかし今は登校地獄の呪いに括り付けられ、学園都市の結界によって封じられた存在。
それを差し引いても、６００年のキャリアはけして侮れない存在である。

この１５年間、彼女は魔力を封じられて不自由な生活を強いてきた。
……しかし少し考えてみるとおかしいのは分かる。
登校地獄は「学校に登校させる」と言う呪いであり、決して魔力を封印する代物ではないと。
そうなると次に考えるのは「自分の魔力を抑圧する何かがあるんではないか？」と言う事だ。
仮に、年2回の停電時に魔力が戻ればどう思うだろう？
「電力を用いた結界を使用しているのではないのか？」と考えてもおかしくはない。
しかし、停電時においても彼女は魔力行使に制限をかけられ続けてきたのである。

実際の所は、エヴァンジェリンを封印するため『だけ』の結界が存在するのだ。
それも完全電力依存の結界を。そして当然停電時においては予備発電システムも存在する。

全盛期のエヴァンジェリンの力を借りれるならば、麻帆良側としても願ったり適ったりだ。
だがしかし、もし何かの気まぐれでこちらに力を向けられたら？
たった４時間、されど４時間。『闇の福音』と侵入者との２正面作

戦など正気の沙汰ではない。
ならばいっその事魔力を封印してしまえばいい。
その理由で１５年前急遽敷かれた結界である。

だが、ここで麻帆良の人間はミスを犯したのだ。
物理的に封印システムを他の警備システムと切り離して運営しなかった事である。
最も、エヴァンジェリンがハイテクを理解しきれていない以上は存在を隠匿すれば済む話であったのだが……更に誤算が生じる。

絡繰茶々丸。工学部が作り出したガイノイドにしてエヴァンジェリンの忠実な従者。
エヴァンジェリンが開発を依頼したわけではなく超、葉加瀬を中心にしたメンバーが
作成したものではあるが、ハイテク＝現代科学を上回るレベルで一の産物が従者と
なったのである（これを切欠に超は魔法先生側から監視対象となる訳ではあるのだが）。

しかしそれでも、学園側は余裕の構えを見せていたのだ。
何しろ警備システムに関して言えば最強の電賊でもてこずる多層防御プログラムが守りを
固めており、停電時においてもそれは例外ではないのだから。
……しかし、この日その自信は正面から打ち砕かれる事となった。

そう、まさに正面から打ち砕かれたのだ。
封印結界システムの電力を停止され、予備システムまで制圧された。
防御プログラムの展開よりも速く、である。
警備システム自体に影響は無いのがせめてもの救いと言うべきなの

だろうか。
オペレーターたちに出来る事は、一刻も早く復旧するために尽力すると言う事だけであった。

こうしている間にも、『闇の福音』は動いているのだから。
目的は関係ない。今は、全盛期の彼女が動いている事自体が脅威なのだから。

今、闇の福音は何をしているのであろうか……。

第１３話：そして、６００年物真祖が倒された話

『闇の福音』エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは驚愕していた。
ネギ・スプリングフィールドの戦闘能力に。

事前に茶々丸に調べさせた所によれば、一時期失踪し魔法世界にて錬金術師に師事していたと聞く。
勿論、魔法世界は平和な世界などではない。
人が入らぬ場所に踏み込めば、危険と隣り合わせなのだ。
そんな中で在野の錬金術師に師事していたならば、相当な無茶振りをされてもおかしくない。
ドラゴンの巣穴から鱗を取って来いとか、野獣の群れが生息する森から花を摘んで来い、等。
戦闘スキルが自然に身についてもおかしくは無いのだ。
実際、赴任初日見せた身のこなしは一流とまでは言えないが評価は出来る代物だった。

だが、浮遊術で宙を浮き、従者である茶々丸と杖で渡り合っているのはどういう事だ？
贔屓ではなく、茶々丸の接近戦スキルは非常に高い。
呪文詠唱時に自分に敵を近づけさせない為の前衛である。
自らが手ずから指導し、戦闘プログラムそのものも優秀だと超からは聞いている。
何より、自分自身が胸を張って優秀だといえる従者だ。弱いわけが無いのだ。

その茶々丸と、身体強化の魔法を使っての防戦一方ながらも対等に渡り合っている。

いや、自ら攻めに出ずひたすら守りを固めて後ろに下がりつつ、カウンターを取りに行っている。

だが、それだけでは驚愕はしない。

問題はもう一つ。

「魔法の射手、連弾、氷の17矢!!」

「風盾よ!!」

こちらの魔法詠唱のタイミングに合わせるように的確な防御を行い、近づこうとすれば

「魔法の射手、連弾、雷の17矢!!」

と接近しようとするタイミングを制するかのように魔法がこちらへ飛んでくる。

何らかの魔力強化を行っている以上、魔法障壁を過信する訳にも行かない。

真祖の魔法障壁とて無敵の代物ではないのだ。

「あいつ……私の行動を先読みしているのか?」

そうとしか考えられないのだ。

余りにもタイミングが良すぎ、行動が的確すぎる。

勘だの第六感だのというレベルではないのだ。

「このままでは、時間切れのほうが早いか……っ!」

恐らく、このまま残り90分間を耐え凌ごうという腹なのだろう。

積極的に攻めに出ずに体力・魔力を温存し、時間切れを狙うつもり

なのだと判断する。
最も、エヴァンジェリン自身が殺す気で動けば全て解決するのだ。
だがああ言った物の、エヴァンジェリン自身にも本気で殺す訳に行かない理由が存在する。

第一に、結界復旧までの時間が残り少ない事。
結界が復旧してしまえば少々厄介な事になる。外へ出れるが出れるまで生きているかどうか。
第二に、本当に呪いが解けるのか？と言う事。
呪いを解く為に血液が必要ではあるが、本当に呪いが解けるのかはわからないのだ。
理屈の上では間違いなく解けるのではあるが……かけた魔力が馬鹿魔力なのである。
解けなかった場合色々とまずいことになる。

「（最も、こうなってしまえば解けようと解けまいと同じの気がするがな）」

自嘲した笑みを浮かべるエヴァンジェリン。
既に『闇の福音』が復活したと言う話が回っている以上、そしてこうやって動き出した以上、
成功しようがしまいが、元の生活に戻ることは不可能であろう。
学園長やタカミチとてこうなってしまえば庇いきれまい。

だがそれでも、自分の選択を後悔したりはしない。
そうやって自分は生きてきた。
人として死ぬ事ができず、変わりに吸血鬼として悪の道をひたすら生きてきたのだ。
昔の生活に戻るだけ。たったそれだけの話。

「……結局、光に生きれなかったな。私は。」
「前にも言ったけど……自業自得だよ、吸血鬼。」
「っ！？」

気が付けば、ネギ・スプリングフィールドが見つめていた。
明らかに侮蔑の目で。

「生きれなかった？　生きようとしなかっただけだろうが。てめぇのミスだよ、吸血鬼。」
「貴様に……何が分かるっ！」
「吸血鬼の考えてる事が人間様にわかるわけないだろう？あえて言うならば……
親父に呪いを掛けられた事が失敗だったな。ひっそりと目立たず生きてりゃ良かったんだよ。」

その一言で、エヴァンジェリンはキレた。
お前に光に生きる資格など無い、そう言ったようにしか聞こえなかった。
光に生きろと言ってくれた男の息子は、その男の思いすら踏みにじったとしか思えなかった。
始めからこいつは殺しておくべきだった！
そう思い、動き出そうとした瞬間。

「風花旋風風障壁！！」

ネギと茶々丸を中心に、まるで竜巻のような防御壁が発生する。
そう、通常展開されるそれよりも巨大な風の障壁が。

「ふん、そんなものでどうする気だ！
どれだけ強化したかは知らんが、そいつが切れた時が貴様の終わり

だ！！」

そう言いながら、呪文詠唱を開始するエヴァンジェリン。詠唱するのは『闇の吹雪』。
あの障壁魔法は精々効果時間が2，3分。
あらゆるパターンを想定して茶々丸とは連携を取れるようにしている。
障壁が解除され、茶々丸が飛び出した瞬間に打ち込むのだ。

そして、渦巻いていた風が収まり始め……それが見えた。
全身にハリネズミのように剣が、槍が、刀が突き立った茶々丸の姿を。
そして、次の瞬間。

爆発と共に茶々丸は吹き飛んだ。
完全に破壊された状態で。地面へと落ちていく彼女の姿。

「貴様ァァァァッ！！」

怒号と共に放たれた『闇の吹雪』。
それは、忠実にして有能な従者、そして数少ない家族だった茶々丸の仇を取るべく
ネギを飲み込んだ……ように見えた。

「なん……だと……。」

６００年生きてきた、と言う事はそれだけ物を見、知識を蓄えてきた事。
だがその自分を持ってしても目の前で起こったことは不可解であった。

彼がやった事は単純の一言に尽きる。右手を出しただけ。
加減抜きの『闇の吹雪』に、ただ右手をぶつけただけなのだ。
それだけで、魔法は打ち消された……消滅したのだ。

流石に唖然としたエヴァンジェリンの隙を突くかのように、ネギは逃走する。
脱兎の如く、と言う表現がまさに相応しい逃げっぷりである。

「逃げられると思うかっっっ！！　貴様だけは確実に殺す！！」

それを追いかけるエヴァンジェリン。
追いつ追われつのチェイスはすぐに終了する事になる。

―残り時間は３０分―

現在、麻帆良学園市街地オフィス街に向かっている俺、ネギ・スプリングフィールドです。
ここまで持ってくるのに恐ろしいほど時間がかかりました。
まぁ、時間が掛かれば掛かるほど別働隊が楽になるでしょうからいいんですけどね。

佐々木さんを保護したあの後。
無理に急ぐ必要もねえよ、どうせ不利になるのは向こうだとのんびり歩いていたら
図書館組の３人がメイド服でやってまいりました。

「ネギせんせー」

「エヴァンジェリンさまは、たいへんにおいかりなのです。」
「そういうわけで、きょうせいてきにつれていくから！」

と言ってるので、向こうが動き出す前に『眠りの霧』を唱えてまとめて眠らせます。
そして佐々木さんと同じように安全な所に引きずり込んで毛布を被せておきます。
事件が解決したら治療もしないといけません。こっちの人たちに任せてくれようか、もう。

これでともかく、残り眷属は3名。流石にこれ以上戦力の逐次投入はしないでしょう。
本人込みで打って出られて広い場所で襲い掛かられても困るので、大浴場の方へ移動。
直接行く訳ではなく、【文珠】で〔透〕〔視〕して状況を確認します。
いい感じに固まってるので、窓ガラス越しから風の矢を無詠唱込みでひたすら打ち込む事に。
大浴場を全壊させる勢いで一修理費払えと言うなら払ってやりますとも一打ち込み終わると、
見事に残ったのは二人だけになりました。

ここからが一番難易度がきつい部分です。
格闘戦を挑んでくる茶々丸さんを【神の右手】で杖術を駆使してあしらいます。
ひたすら待ちの戦法です。無理に攻め込まなければそうそうぼろは出しません。
そして、後衛の吸血鬼に関しては【文珠】で〔読〕〔心〕してやります。
これもできるだけ数を減らしたかった理由ではあるんですが。

積極的に攻めずに前衛を受け流し、更に火力のある後衛を牽制しつつ動きを潰します。
正直、真祖の吸血鬼が前衛でコンビネーションとかされると洒落になりませんしね。
そうこうしてると、吸血鬼が余計なことを考え始めたようです。
……まぁ、そうだよな。こうなるともう後には引けないよなぁ。

その辺を突っつくと激昂しました……図星だったようです。
本気で来る事が心読むまでもなくわかったので、最大クラスの防壁を展開。
真祖の吸血鬼とて、これに突撃・突破するのは至難の業のはず！

「ですが先生、2・3分でこの魔法は解けるかと思うのですが。」
「その通りだよ、絡繰さん。それまでに君を倒して俺は逃げさせてもらう。
あくまでもこの障壁は君たち主従を各個撃破するための手段でしかないんだからね。」

自信満々に宣言する俺に何かを感じ取ったのか、構えを取る絡繰さん。
だが、遅い。ここで初めて俺は攻勢に出ることにします。

「先生の杖術は見事な物です、ですが……」
「悪いね、これが目的じゃないんだ。」

近距離から相手を釘付けにしての【王の財宝】による宝具一斉投射。
無名・有名に関わらず武器群が絡繰さんを串刺しにしていきます。
……なまじ『別荘』地下ダンジョンで死に回った訳ではありません。

接近戦型の敵に対してどう打ち込めば当たるのか。それなりに勉強したつもりです。

「……これで終わりだよ、絡繰さん。」

「……」

既に言語回路すら破損したのか、言葉にならない言葉を紡ぐ絡繰さんにぶつけるのは

〔爆〕〔破〕の【文珠】。〔爆〕でも〔壊〕でもよかったんですけどね。

轟音と爆発。科学技術の粋を集めて作られた絡繰さんは、こうして終わりを告げたのでした。

そして、吸血鬼が放った『闇の吹雪』は【幻想殺し】が全て無効化します。

……実際の所マジ怖いです。想像してみてください。

電車が走ってくる真正面に立って、右腕突き出してるようなもんです。

止められる事は分かりきっていますがそれとこれとは別と申しますか。

『闇の吹雪』が止んだ段階で一目散に逃げ……誘い出します。

まぁ、この予定が無くても全力で逃げざるを得ない雰囲気です。

殺気がびんびんでマジでヤバイです。

そう思いながらも、風の精霊の力を借りてスピードをひたすら出して引き離すように飛びます。

そしてやって来ました麻帆良学園市街地オフィス街。ここが最終決戦の場です。

１００人規模の面子が動けて尚且つ防衛網の邪魔にならず、堅気さ

んに迷惑かから無い場所を
考えた結果がここです。……まぁ、ドンパチやらかす時点で迷惑は決定なんですが。

急停止すると同時に、接近してきた吸血鬼に投げつけるのは閃光玉。
よく『別荘』でお世話になった代物を少し弄って光の持続時間を長くしてあります。
真っ暗闇のオフィス街を煌々と明るく照らすその光。そして『闇の福音』の姿！

「そんなただの光で、この私が……っ！？」

次の瞬間、打ち込まれる無数の『魔法の射手』！
仮に１００人勢揃いし、全員が魔法使いだったとして、１人が１１矢撃つだけで
１１００発の計算です。
光・雷・炎・風、あらゆる属性の魔法の矢が吸血鬼に叩き込まれます。

……誰だよ、地対空ミサイルとか持ち出してきたやつは。
戦争でもする気か、と思いましたが十分に戦争ですね。

その間に俺自身はこのオフィス街に結界を展開、外部からの介入を最小限に留めます。
後は適当なビルの屋上に身を隠して簡易回復結界を書き、そこで一休みする事に。
俺の仕事はこれで終了です……時間を確認すれば残り３０分切った状態。
１００人が3分もしないうちに全滅、と言う事にならない限りは大丈夫でしょう。

と言う訳で高みの見物です、邪魔にならないように。

戦術としては単純。
接近戦を徹底的に避け、四方八方からの十字砲火。下から上へ打ち上げてるので誤射もなく。
西を向けば東から、東を向けば西からと言った具合で。
それでも範囲攻撃型魔法で迎撃を試みる吸血鬼ですが、詠唱時間の都合でかいのは無理。
それでも建物がド派手にぶっ壊れているのは流石と言うか何と言うか。
地上に降りて各個撃破するのがベストですが、それをやろうとすると時間が邪魔をする。
遮蔽物の多い街中で、地上で１００人倒しきるまでにどれだけの時間かかると思います？

そして、街に明かりが灯り始めます。時計を見ると２３時５２分３３秒。
予定よりも７分２７秒早い！？そいつはラッキーな事です。
ま、これで吸血鬼終了のお知らせですね。
後は下の皆様方が片付けてくれるでしょうし、俺は遣り残した仕事を片付ける事にしましょう。

絡繰さんからデータ流出だけは避けないとまずいし、吸血鬼化した生徒達を元に戻さないと。
何で死んでも元に戻らないかなぁ、面倒な。記憶の操作もしないといけないし……。

第１３話：そして、６００年物真祖が倒された話（後書き）

―光が街を暗闇より解放する―

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは今まさに力尽きようとしていた。
停電が復旧すると同時に封印結界も再起動され、力は再び封じられた。
もはや手負いの獣……いや、それ以下の存在にまで落ちてしまったのだ。
彼女は既に『闇の福音』と恐れられた戦闘力を持っていない、ただの少女なのだ。

悪の魔法使いとして生きてきた自覚はある。
自分がろくな死に方をしない、と言う覚悟もあった。
それでも、最後にもう一度あいつに会いたかった。
いや……あいつも死んでいるのならばあの世まで追いかけるのも一興か。
一発ぶん殴ってからこう言ってやる事にしよう。
「貴様の息子はとんでもない悪人だ。将来が楽しみだな。」と。

それが、彼女の最後の思考。

―『闇の福音』、麻帆良にて死亡す―

第１４話：そして、戦い終わって夜が明けた話（前書き）

第１４話を投稿します。

昨日も書きましたが今回の話は、皆さんの反応が恐ろしい。
エヴァ殺した時より恐ろしいのはどういう事だ、とも思いますが。

無い知恵絞って書けるだけ頑張って書いたつもりです。
どうかお手柔らかに……いや、マジで。

第１４話：そして、戦い終わって夜が明けた話

『闇の福音』エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル、麻帆良にて死亡。

このニュースは深夜にも関わらず瞬く間に世界を駆け巡った。
麻帆良学園都市の停電を狙って『闇の福音』が復活。潜伏していた賞金稼ぎ・吸血鬼狩人など
『闇の福音』の命を狙ったハンター達が総力を結集して『闇の福音』と交戦、
これを殲滅する事に成功したのである。（既に死亡した『闇の福音』の画像も出回っている
状態である。その後、死体を焼却・河へ流す所までを撮影した映像も存在する。）
１００人規模で挑んだこの戦闘で死亡者・重軽傷者含めて５０人弱。
もし、麻帆良を覆う結界が復旧しなければ死亡者は増えていただろう、と言うのが見解である。

同時に、麻帆良学園の排斥派の手がなければここまで戦う事ができなかったとも語っている。
別々に入り込んだ狩人達を繋いだ一匹のオコジョ妖精と、裏で動く正体不明の謎の男。
一体正体は誰なのか?それは誰にも分からない。分かっている事は一つ。
彼らのお陰で『闇の福音』を倒したという名声を得ることが出来たと言う事だけである。

一方、対応に苦慮したのが麻帆良学園側である。
つい先日「大丈夫、大丈夫だから！」と主張しておいてこの有様で

ある。

確かに『闇の福音』を専用の結界で封印していた点は評価できる。
だが、何故事件を起こしたのにも関わらず停電が起こる事が確定のメンテナンスをするのか？
正式な事件解決まではメンテナンスを延期するなり『闇の福音』をその間拘束するなり
何らかの手があったのではないか？と。
先の事件においても『闇の福音』に対して何ら処罰しなかったと言う話もある。
そして停電時も『闇の福音』をノーマーク状態にし、結果学園外の人間達が始末した有様。

学園の管理体制・指導体制は一体どうなってるのか？
と疑問を呈されても仕方の無い状況である。

上位組織であるメガロメセンブリア元老院は麻帆良に査察団を派遣する事を決定。
安易に関東魔法協会理事・近衛近右衛門を首にする訳にもいかない故の処置である。
彼が長い間日本という極東の地にて理事として辣腕を振るって来たのもまた事実。
有体に言ってしまえば、彼の代わりがいないのだ。
精々が給料の減額、戒告、謹慎処分に留める程度が現状である。
最も、謹慎とは言え現状のごたごたを片付けられるのも彼だけなのではあるが。

厳重な抗議、と言う点で一番声が大きかったのがメルディアナ魔法学校である。
『英雄の息子』ネギ・スプリングフィールドが在籍した学校であり、

校長はネギの祖父だ。
ましてやネギはそこに教師として修行に行ったのであり、『闇の福音』は生徒なのである。
一体お前達は何を考えているんだ、と言いたくなるのは当たり前である。
（この件が明るみになった時真っ先に倒れたのがネカネさんだったと言うのは余談である）
復興途中の故郷、ウェールズからの声もあり抗議の声が大きくなったのも当然と言える。

関西呪術協会では、反関東魔法協会派の動きが活発化しつつある。

「『闇の福音』を隠匿しただけでなく、その活動を押さえる事もできない脆弱な組織が
置かれている地に木乃香嬢を預けておくなど危険すぎる、こちらに呼び戻すべきである！」

と言う意見が出始めたのだ。勿論、無能を曝け出した今が攻め入るチャンスと息巻く者もいる。
結果として数少ない親関東魔法協会派、そして関西呪術協会の長であり木乃香の父でもある
近衛詠春の旗色は非常に悪い物となっている。

その他では、大小に関わらず魔法関係の組織が麻帆良に支部を置かせるように要求。
「今の麻帆良は信用が出来ない」と。
特に声が大きかったのは法王庁などの宗教関係である。

「『闇の福音』は滅びた、だが既に親の支配から離れた個体が存在するのではないのか？

このまま放置して犠牲者が再び出るのを見逃すのは教義が許さない」

そのように主張し、強硬に訴え出たのだ。

麻帆良学園側としても強くＮＯを言える状況ではなく、結果的に受け入れる形となる。

最も、身元……と言うよりは社会的に信用できる組織のみではあるが。

こうして、麻帆良を取り巻く情勢は変化して行った。

閉鎖されていた環境が開かれ始めた、とも言える。

その変化は、学園外のみならず学園内でも起こるべきことであり、必然ともいえた。

大きな変化と言えば内部における近衛近右衛門の権威が下がった事があげられる。

元々麻帆良学園内部において、魔法先生の権力闘争と言うのは余り無いといっていい。

まず、魔法使いであると同時に教師であり、そんな事をしている暇も必要も無いのが一つ。

次に、少々愉快犯的な面はあれど、近衛近右衛門が有能な人物であったと言う事。

最後に、近衛近右衛門に立ち代るだけの才覚がある人間がいないと言う事である。

唯一派閥と言うべきものがあるとすれば『闇の福音』に対する静観派と排斥派である。

「何かアクションを起こす訳でもなく、生徒として生活しているのだから見守るべき」と

「何かアクション起こされてからでは遅い、力なき今こそ叩くべき」と言う対立である。

当初の勢力分布を割合で示すと３：７。
数でこそ排斥派が多いが、静観派として近衛近右衛門と高畑・Ｔ・タカミチのＴＯＰ２
が存在し、睨みを効かせている辺りで均衡が取れていたと言う状況である。
（最も、排斥派と言っても強硬な手段に出ようという人間は存在しなかったのだが。）

しかしこの一件で勢力比が一気に傾いたのだ。当然であると言えばその通り。
排斥派から見れば「それ見たことか、だから早めに叩くべきだったんだ」なのだから。
静観派から転向する人間が現れた事もあり、一部の排斥派は暴走とも言える行動を起こす。

即ち『闇の福音』の痕跡を麻帆良から完全消滅させる事。

在学していたと言う事実を改ざんする事は既に不可能だ。
（勿論、在校生徒教師に記憶操作をすれば可能であるが現実的ではない。）
だが、ここで生活していたと言う事実を「なかった事」にする事は可能である。

結果として桜ヶ丘に存在するエヴァンジェリンの家は『謎の失火』により消失する事となる。
魔法使い的に見れば、６００年の長い歳月で集めた数々の資料は勿体無くもある。
しかし、それ以上に彼らは痕跡を残したくは無かったのだ。

『闇の福音』がこの地に存在していた、と言う事実を。

話を戻そう。

『麻帆良学園都市・闇の福音の乱』によって、『闇の福音』を押さえておくべき立場であった学園長の権威が下がるのは当然のことだといえる。

「あの時、学園長が断固とした態度で処罰を下していれば」

そう考えることは当然なのだ。

ましてや、女子寮付近で吸血鬼化された生徒たち一『闇の福音』のクラスメイト一が保護されたと言う情報も入ってきてその考え方は加速する。

結果、学園長は求心力を失っていく事となる。

一方、麻帆良最高頭脳と言われる才女・超鈴音は困惑していた。

知る者こそ少ないが、彼女は遥か未来よりある目的の為にやってきた未来人である。

当然、この時代に来るにあたり過去に関しての調査は出来る範囲で行ってきた。

１００年前の出来事とは言え、全く情報が無いわけではない。

可能な限り情報を集め、整理し、分析してこの時代・この場所へとやって来たのである。

しかし、これは一体どうしたことだろうか?

１００年後も名を轟かす『闇の福音』が死亡するなどと!

いや、そもそもにしておかしな所はある。

齢9歳にして担任となるはずの『英雄』ネギ・スプリングフィールドは大人の姿で現れ、
『桜通りの吸血鬼』事件では『闇の福音』の存在が外へ暴かれる始末。

自分が逆行してきた事で、世界の修正力が働いているのだろうか？
現に、『闇の福音』との伝を得る為に開発した（他の理由もあるが）ガイノイド・茶々丸も
自分の目の前で無残な残骸と化している。

「葉加瀬さん。絡繰さんはどんな感じかな？」

自分達を電話で呼び出した張本人であり、担任教師でもあるネギ・スプリングフィールドが
共に来ていた葉加瀬に問いかける。

「ダメです。修理と言うよりこれはもう、新しいボディを用意した方が早いですね。」

もっとも、記憶などを保存しているメモリーなども全て破壊されてるんですけど。
辛うじて回収できたパーツを前に、そう寂しい声で呟く葉加瀬。
結果的に『絡繰茶々丸』と言う存在は『死亡』した事になる。

「そうか……」

そう呟く彼の声は、どことなくほっとしたように聞こえたのは気のせいだろうか？

「所で先生、どうして茶々丸がこんな事になったのかはご存知カ？」

「勿論知ってるとも。しかし、君達に教えることはできないかな。」
「そこを曲げて教えてもらえないカ？　茶々丸を作ったのは私達ヨ。どうしてこうなったのか聞く権利くらいはあると思うけどネ。」
そう言うと考え込むネギ。
「うーん、エヴァンジェリンさんについてはどこまで知ってる？」
「ネギ先生が知ってる所までは知ってるネ。」
「なるほど、ならやっぱり教えられないね。申し訳ないけど。」
「ちょ、ちょっと待つネ。エヴァンジェリンについては裏の事情まで知ってるヨ。」
慌てて訂正する超。
こいつどこまで曲者なのか、と評価を修正する。
葉加瀬の方に目をやるネギ。
「大丈夫ネ、ハカセも知ってるヨ。」
「ふぅん、それなら説明しようか。」
彼の説明によれば、『闇の福音』が停電に乗じて決起。
その結果、オフィス街にて賞金稼ぎ達に討伐されたとの事である。
茶々丸の撃破もそのあおりであるとの事。
「この件に関してはクラスメイトには内密にね。まぁ、分かってるとは思うけど念の為。」
「勿論ネ、喋った所で誰も信じないヨ。」
「それじゃあ、先生はこれから学園長の所に行く必要があってね。ここは任せる事にするよ。
絡繰さんの処置についても決まるだろうから、その時に改めて電話するから。」

そう言って立ち去るネギ。その後ろ姿を見つめながら超は考え込んでいた。
やはり、差異が生じている。いや、これは差異などというレベルでは無い。
『英雄』は最初にして最高の破魔の従者・神楽坂明日菜を得、麻帆良大橋にて決戦が
行われたはずなのだ。その『過去の』事実が全く違う事になっている。

「だけど、まだ修正は可能な筈ヨ。私は諦めないネ。」

未来を変える為に、自分はここに来たのだから。

現在、学園長室前のネギ・スプリングフィールドです。
カモ君は先に家に帰らせています。討伐隊に連絡取らせたらいてもいなくても同じなんで。
停電終了後、吸血鬼化した生徒達に吸血鬼化治療薬を飲ませてから途方に暮れました。

……彼女達の処置は一体どうすりゃいいんだ?
記憶操作するべきなのは分かっているのですが、どう記憶を弄るべきなのか。
ガス漏れで意識を失った事にでもするべきか?
いやいや、女子寮に迷惑かけるわけにいかんだろう。
とは言え停電も終わったこの時間では大騒ぎになる可能性が……
大浴場がヤバイ。
深夜も過ぎている事がせめてもの救いか?

魔法先生とかの連絡先とか知らんしなあ。学園長に連絡入れるか。
そう思った矢先。

「おや、ネギ先生じゃないか。こんな深夜にこんな所で何か用かい？」

声を掛けられたので振り向くと、うちの生徒の龍宮さんでした。
狩りにでも行きそうな動きやすそうな格好に、ギターケースがアンバランスです。

「や、見回りしてたんだけどね……どうしたものかなぁ、と悩んでたんだよこれが。」
「これは……」

一まとめにしておいた元吸血鬼の眷属と化した生徒達を見て、龍宮さんも絶句したようです。
何しろ全員クラスメイトですし。そりゃ驚きもするか。

「エヴァンジェリンの件と関係があるのかな、先生？」
「どうしてそこでエヴァンジェリンさんの名前が挙がるのかが分からないんだけど？」

関係者だとは思いますが、迂闊に「君も関係者かい？」と聞くわけにも行かず。
……ああ、まどろっこしい。
そんな俺に龍宮さんは溜息を一つ。

「心配する必要は無いよ、先生。私も『関係者』だ。
最も、報酬さえさえ貰えれば、誰からでもどんな依頼でも受けさせて貰うけどね。」

「……ふぅ、やっぱり横の繋がりが無いと一々面倒で困るよ本当に。
その通り、『闇の福音』が眷族にしてたみたいでね。治療の方はやっておいたんだけど、
この後の後始末をどうしたものか、とね。」

魔法生徒と言うよりは傭兵というべき存在かもしれませんね、彼女は。
それはさておき、どうするべきかな？と先達である龍宮さんに聞いて見ます。

「なら、こちらの方から魔法先生に連絡を取る事にしよう。勿論仲介料は貰うけどね。」
「えっ？こんな事でお金取るのかい！？」
「冗談だよ、今回はサービスと言う事にさせてもらうさ。」

と言う訳で、龍宮さんにこの件は丸投げする事にしました。
後は優秀な魔法先生・生徒方が頑張ってくれるでしょう。
そのまま、茶々丸撃墜地点まで行く途中に名簿にある緊急連絡先に電話を入れて、
大破したので回収しに来て欲しい旨を告げます。

学園長の方から学園長室に顔を出すように連絡が入ったのがこの辺り。

絡繰さんの残骸自体大きなパーツもなく安心しました。
データ残ってたりするとほんとヤバイからなぁ……
見つけた範囲で形のある奴は【王の財宝】で仕舞っておきましたけど。
パーツが足りなくてもこの爆発です。粉々になったと思うでしょう、

きっと。

で、そこも工学部と言うか超さんと葉加瀬さんにお任せして
今現在に至る訳です。
部屋に入るとそこにいるのは学園長と高畑先生。久々に見た気がします。

「それで、御用の向きは何でしょう？」

正直帰って寝たいです。と言うより、全身筋肉痛の状態です実は。
はい、薬の副作用ですね。【文珠】もこれには効果が無いという……薬は効くんですが。
とは言え、痛み止めとかそういうレベルの話でして。
今戦え、とか言われると体裁を捨てて全力全開で挑む覚悟がありますよ？
討伐隊に配布した奴はこれより効き目の薄い奴なんで副作用も知れてるんですけどね。

「うむ、今晩の件なのじゃがな……あれもお主か？」
「勿論です、学園長。正確には俺とオコジョ妖精のカモ君の共同作業ですが。」

そう言って、先日学園長から釘を刺されてからのエヴァンジェリンさんについて語ります。

「少なくとも、彼女自身は諦めるつもりは全く無かったようですので。
もしもの事を考えて予防措置を講じる事にしたんですが。何か問題でも？」
「……何故その事をワシらに相談せんのじゃ、君は？」

なんと言うか、学園長も一杯一杯の模様です。
ネット関係を確認してないので分からないのですが、既に大ニュースなのか？

「お言葉ですが学園長。彼女に対してはちゃんと釘を刺したのですよね？」
「勿論じゃ、この１５年間でエヴァンジェリンの扱い方は心得ておる。」
「では、それにも関わらず彼女はその足で俺の所まで来て『休戦なんてとんでもない』と言った事になります。言ってしまえば学園長のお言葉は全く届いていないかと。
有体に言ってしまえば、この件でエヴァンジェリンは全く妥協するつもりはなかった事に。」
「じゃから、その件を含めてもワシらに相談するべきだったのではないかの？
相談してくれれば幾らでも手の打ちようはあったはずじゃ。」

……何言ってんだこいつは。いい加減になってきました。
そこまで『闇の福音』大事なのか、こいつら。

「あのですね学園長。本来なら『桜通りの吸血鬼』と言う噂と被害者が出た時点で
エヴァンジェリンとの関連を疑い、調査し、犯人ならば拘束しておくべきだったんです。
それを怠ったのは誰ですか？ましてや俺が事件に関して報告した後も何もリアクションは
起こそうとしてませんでしたよね？それとも俺に事件の解決をさせるつもりでしたか？

ネットの件で話をした時に俺は言いましたよね、『彼女がその気なら相応の手段を取る』と。
有言実行したまでですよ俺は。そんなに『闇の福音』を退治されたくないなら尚の事
毅然とした態度で臨むべきだったんですよ。停電時に拘束しておくとかね。
はっきり言わせて貰えば、それをしてこなかった貴方達のミスですよ。」

一息。一息でこれだけ喋って息をつきます。

「ともかく、この件に関して処分したいならどうぞご随意に。
部外者を用いて学園都市内で混乱を引き起こしたとでも何とでも名目は立つでしょう。」
「いや、ワシは別にそこまでは言っておらんのじゃが……」
「そうですか？てっきり俺は『闇の福音』は処分したくないとばかり思ってましたよ。」

もう敬老精神とかそんなの置き忘れてますね、俺。
そこで黙っていた高畑さんが一言、俺に問いかけます。

「ネギ君、君は自分の生徒をこうしたことに何も思わないのかい？」
「……生徒である前に『闇の福音』であり、俺の敵でした。それで十分でしょう。
それとも、血を吸われて失血死しろと？眷属になれと？そう仰るんですか高畑さんは？」
「エヴァは、そんな奴じゃない。」
「俺にとっての『闇の福音』はそんな奴です。考え方の違いですね。」

そう言うと黙る高畑さん。
高畑さんとエヴァンジェリンさんの付き合いがどれくらいかは知らないですが、
「悪い奴じゃない」と言い切るだけの付き合いはあったんでしょう。
ですが、俺からすれば稀代の悪の魔法使いであり真祖であった。それだけです。
そんなに彼女が大事だと言うなら、仲介にでも何でも入ればよかったんですよ。

「もう何も無いなら、俺は帰っていいですかね？」
「うむ、最後に一つだけ。」

そう言って一枚の契約書を俺に渡してきます。
魔法先生用の契約書ですね、これは。

「こうなってしまった以上、お主を一般教師として置いておくわけにもいかんでの。
ちと予定が早くなってしまったのじゃが、今日付けで魔法先生として契約したい。」
「はぁ、わかりました。その件のついでなんですが……」

魔法先生に関しては断る理由も無いですしねぇ。
ついでにカモ君の下着２０００枚の窃盗と収容所からの脱走に関して今回の件でチャラに
出来ないかどうか尋ねてみます。

「ふむ……わかった、問い合わせるだけは問い合わせておこう。」
「それじゃ、宜しくお願いします。」

契約書を穴が開くように確認して、おかしな所が無いかを確認。

魔法的にもおかしな所も無いのを確認してからサインします。
……給料、倍以上違うじゃねえか。

まぁ、契約も交わしたので帰ることにしましょう。
体中がマジで痛い……明日休みたいなぁ。

しかし、本当に魔法先生になってしまうとはなぁ……藪突いて蛇出したか、俺。
それともここからが本当の原作の始まりなのか？
あ、エヴァンジェリンと絡繰さんの扱いについて聞くの忘れてた。
明日に回そう……。

ネギ・スプリングフィールドが去った学園長室。
そこに残るのは近衛近右衛門と高畑・Ｔ・タカミチの二人。実質のＴＯＰ２である。

「学園長、一体何をお考えなのですか？」
「まさか本気で処分する訳にもいかんじゃろう。とは言え、何もせんわけにもいかん。」

高畑の問いに、溜息をついて答える学園長。
そもそもどういう理由で処分しろと言うのか。
彼の言う通り、部外者を用いて学園都市内で不必要な混乱を引き起こしたと言う理由で？
それこそまさかである。

対外的には『闇の福音』は悪の魔法使いであり、世界の敵と言って過言無い存在である。

その『闇の福音』を退治する為に動いたのであり、やましい部分は存在しない。
そんな理由で処分してしまえば確実に麻帆良は二つに割れてしまう。
いや、それだけで済む問題ではなくなってしまう。
魔法関係を司る組織がここぞとばかりに非難を集中させ、この地位も追われるだろう。

……ならば、旗印にしてしまえばよい。
学園長は、そう考えたのだ。

『闇の福音』殲滅の為に行動した『英雄の息子』として。

溜まりつつある内部の不満と外からの外圧を逸らす為の一時的な手段であり、
本質を見ている人間達からすれば効果は薄いかもしれない、だがそれは少数の事。
大多数の人間はそちらに意識が向けられる事となるであろう。
……負け戦の軍隊が勲章を与えて英雄を作る事で戦意高揚を図るのにも似ているが。

「しかしそれでは……」
「分かっておる、分かっておるよ高畑君。
ワシは最低のことをしようとしておる。じゃが……」

そもそもこの事態を引き起こした元凶はネギ自身である。
元を辿れば学園側の監督不行き届きとか色々あるのだが、話を大きくしたのは彼だ。
ならば彼にも少々背負ってもらおう、と考えた学園長を責める事は出来ないだろう。
彼もまた人間であり、組織の上に立つ人間なのだから。

こうして、彼の知らない所で彼は『英雄』としての道を用意される。
本人が望んだ訳でもない道を。

―『英雄の息子』ネギ・スプリングフィールド、『闇の福音』退治に尽力す―

この情報を本人が知るのは翌朝の事である。

第１４話：そして、戦い終わって夜が明けた話（後書き）

改行については２２：００以降の訂正となります。
読みにくかったら申し訳ありません。

＞タイトル
実際には夜が明けてません。
「日が暮れて」みたいなもんだと思ってください。

＞画像
一瞬、「死んだ『闇の福音』の前でポーズを取る狩人たち」と言うどこのハンティングだ、と言わんばかりの描写も浮かんだのですが、
流石にどうかと思ったのでｗと言うか死体は汚しちゃいかんよ、死体は。
（焼いたりするのはただの処置です。汚すのとは別物ですよ？）

＞５０人
１０面体二つ振って決めました（おい）。１００面体持って無いもんで。

＞ネカネさん
俺の中では倒れる人になってますｗどうしてこうなったｗ

＞親の支配から
実際の所、ネギま！における吸血鬼の設定なんてあってないような物なんで
独自設定です。

＞割合
かなり適当です。ダイス振ってません。
実際、穏健派のほとんどは「学園長と高畑さんの言ってることだし」だと思う（何）。

＞エヴァンジェリンさん家
……魔女狩りの様相を呈してきてますね。何でこうなったんだろうw
と言う訳で、チャチャゼロ退場です（おい）

まぁ、チャチャゼロだけで言うなら【神の頭脳】なら動かせると思うんですよね、きっと。
同時に【幻想殺し】で触るとただの人形になるでしょうけど。

＞超さん
結局こういう形になりました。
未来の荒廃ぶりがわかりませんが、全く何も知らずにはこないだろうと。

＞ハカセ
茶々丸提供しておいてエヴァの素性知らないと言う事も無いだろう、と言う判断です。

＞カモ君
前からちょろちょろと言っておりますが、本来はカモ君退場予定でした。

↓「手紙どういうこと？」「実はかくかくしかじかで」「ＯＫ、分かった。」
↓「兄貴……」「君の妹の面倒は見てあげるから収容所へ戻ろう、

な？」
↓「えっ？」「そういう事でちゃんと刑に服すんだよ？」
↓「兄貴ｗｗｗ待ってｗｗｗ」

と言う感じでして。
まぁ、ネギ１人では今回のプランが組み立てられなかったのが原因です。

後、罪の取り消しとかに関して学園長に借りとか作っちゃうんじゃないの？
と思うかも知れませんが、ネギ自身は正当な対価と思ってると言う事でひとつ。
駄目なら駄目で「やっぱり駄目だったよ、じゃ、そういう事で。」で終わらせそうですし。

＞負け戦
あれですよほら、えーとアルテミスの荒鷲じゃなくて……
グリマルディの蒼き鷹でしたっけ？某不可能を可能にする人。あんな感じで。
（ぐぐるのが面倒だった。反省はする。しかし私は謝らない。）

９／１４
題名の訂正。
有言実行が有限実行になってたので訂正。

９／１６
感想での指摘を受けて関西呪術協会の対応について修正。
１０／２８
指摘により、責めるが攻めるになってたのを修正

第１５話：そして、魔法先生と特使になる話（前書き）

ちょっと短めかもしれません。

第１５話：そして、魔法先生と特使になる話

朝起きたら、祭り上げられていたネギ・スプリングフィールドです。
飯食いつつネットサーフィンやってたらそのニュース見つけて牛乳吹きました、リアルで。
キーボードが牛乳くさいです。

要約すると『闇の福音』死亡の裏で俺が動いてたと言う事が暴露されてます。学園公式発表で。
書いてる事は推測から組み立てられてますが、やった事は間違ってないので反論できません。
と言うより、あれだけ擁護してたのが嘘のような掌返しっぷりで『闇の福音』が弾劾されてます。
これだけ悪い奴だから俺が倒す為に立ち上がったんだぞ、見たいな感じです。

これはあれか。俺への当て付けか何かか学園長っ！
……恐らく間違いないでしょう。これは学園長からの挑戦に違いありません。
きっと学園長の血は強酸性に違いない。もしくは緑の蛍光色。

目立ちたくないって言うのに何でこんな事するかなぁ……。
いや俺も何も言わなかったけどさあ、空気読もうよマジで。

そう思いながらも、学校に出勤する事にします。
全身筋肉痛で大変厳しい状態ですが、休む訳にもいかず。痛み止めだけ飲んでですけどね。
職員室に向かってる途中にいつものようにしずな先生に呼ばれて学

園長室に行く事に。

いつものように好々爺の笑みを浮かべる学園長が座っておりました。

……無性にムカつきます。

「どうしたんじゃね、ネギ君？　調子が悪いようじゃが？」

とか余裕ぶっちぎりの様子で聞いてくるのが尚更ムカつき感ＵＰです。

「いえ、昨日働きすぎたもので身体が本調子じゃないもんでして。それで昨日言っていた件なんですが……」

「うむ。その件じゃが『闇の福音』退治の功績に免じ特例で罪の取り消しを認めるそうじゃ。ただしお主の使い魔として話をさせてもらったのじゃが、構わんの？」

……この爺、どこまで俺に押し付ける気でいやがりますか。

や、カモ君に関しては言われずとも面倒見るつもりですけどね。

「それを前提で話を持って行ったなら断われないでしょう。後で正式な書類を送って下さい。

それと、そういう話はせめて当事者の許可を得ていただいてからにして欲しいですね。」

「それに関しては申し訳ないと思っておる。じゃが、一オコジョ妖精が独断で『闇の福音』を倒す為に貢献した、と主張しても信じるかどうかは微妙な所でのう。」

「その絡みで俺を担ぎ出した、と言いたい訳ですか。」

「担ぎ出したとは人聞きが悪い。ワシはネギ君の要求に応えるべく

動いたまでじゃ。」

嘘つけ、大方『闇の福音』の件で評判の悪い麻帆良学園の知名度を上げるためだろうに。

事実『麻帆良に英雄現る！』みたいな見出しの記事あったぞこの野郎。

この辺を突いても不毛な争いになるだけなんでやりませんが。

「まぁ、わかりました。そういう事にしておきます。

それでエヴァンジェリンさんと絡繰茶々丸さんについて、クラスでどう説明するかなんですが。

そちらでシナリオを用意しているなら合わせますが。」

「うむ……」

結局、『海外に住んでいる両親の都合で転校＋その付き添い』と言う事で落ち着きました。

妥当と言えば妥当ですね。

後で超さんにもその方向で連絡しておく事にします。

「そうじゃネギ君、今日の昼休みに世界樹広場の方へ来て欲しいんじゃ。

他の魔法先生・生徒たちとの顔合わせがあるでの。」

「はぁ、わかりました。」

とそれだけ話をして学園長室から出ることに。

朝のＳＨＲに間に合うように急ぎたいですが……身体が言う事効かないという。

それでも何とか間に合ったんですけどね。

「あら、ネギ先生どうかされたんですか？」

「いやいや、昨日の見回りが堪えてね。ちょっと睡眠時間が足りないんだよ。」

心配してくれる雪広さんに返事を返しておきます。

「さて、今日はちょっと残念なお知らせがある。
うちのクラスのエヴァンジェリンさんと絡繰茶々丸さんが海外に住んでる両親の都合で
急に転校する事になりました。」

そう言うと、えー！　との声。

「また急な話だね、先生？」

「ちなみに、既に昨日の時点で国外へ出てるそうです。先生もびっくりです。」

疑問をぶつける朝倉さんに俺もびっくりしてる事をアピールしておきます。

「先生、少し宜しいですか？」

と手を上げたのは桜咲さん。

「どうしました？」

「その、修学旅行の班が同じだったのですが、転校したとなると班員が3人だけ
なのですが……」

残ってるのは班長である桜咲さんと、班員の相坂さん、ザジさんの3人だそうです。

……どういう基準でこの班選びやったんだ、おい。

「となると、どこかの班に入れた方がよさそうかな。」

と言う事で、逆順処理で5班に桜咲さん、4班に相坂さん、3班にザジさんを入れる事にしました。

勿論ちゃんと班の了承は取ってますよ？いや、断わる子はうちのクラスにはいないでしょうが。

無性に嬉しそうな顔の近衛さんと、不本意そうな顔をしている桜咲さんが印象に残ってます。

そんなこんなで昼休み。

言われたとおり飯も食わずに世界樹広場の方へ。

広場の方へ向かうと結界を感知します。人払いの結界ですね。

さてさて、どんな人たちがいるのやら……。

そして顔合わせも無事に済み時間は進んで帰りのＳＨＲ。

……あ、顔合わせは無事に終わりました。本当に顔を合わせるだけでしたが。

結構な数がいたのにはびっくりです。

まぁ、関東魔法協会本拠地でもあるしなぁ。

魔法先生・生徒とも人の良さそうな人ばかりでそこだけは安心……したいかな。

「はい、朝のＨＲでもありましたが来週から修学旅行に行く事になります。

場所はご存知の通り、京都・奈良です。みなさん、準備は出来てますか？」

はーい！と上がる声。元気があっていいことです。

雪広さん曰く、留学生が多くまた、俺も日本は初めてとの事で日本文化を学ぶ意味でもここを選択したとか。

「まぁ、逆に言えばまだ修学旅行まで大体1週間あると言う事です。浮かれすぎて事故とか怪我とかしないように。皆さんは大丈夫でしょうが、問題行動とかやっちゃうと修学旅行の中止とかもありえますからね、絶対にやらないように。」

と釘を刺しておくのは忘れません。

それでも早く修学旅行来ないかなー！とはしゃいでいる鳴滝姉妹を温かい目で見ていると、

しずな先生がまた俺を呼びに来ました。

連絡事項も伝えたので、ちょっと早いですが終わりにすることにします。

……しかし学園長、連絡事項は一度で全部終わらせようぜ。

学園長室で受け取ったのは「修学旅行での京都行き中止」との宣告でした。

「はぁ、そうですか。」

「うむ。京都がダメだったらハワイに……」

ハワイか……ワイキキビーチ辺りで水着姿のねーちゃん見て目の保養も良いかも知れん。

こう、癒しが欲しいと言うか。

「じゃあ、そういう事で宜しくお願いします。生徒達には明日伝えますんで。」

そう言って一礼し、扉を開けて……開かない。
力を込めてみますがドアノブが回りやがらない。施錠の魔法の様子。

「いやいや、ワシの話を最後まで聞くんじゃネギ君。
まだ中止と完全に決まった訳ではないんじゃ。先方がかなり嫌がっておってのぅ。」
「それなら行く必要は無いじゃないですか。態々相手方に不快感を与える必要は無いでしょう。」

ドアを開けることを諦めて学園長に向き直ります。
……力ずくで吹っ飛ばすとか裏技で開けるとかやるわけにもいかんしなぁ。

「それはその通りなのじゃが、既にどのクラスも行き先が決まっておるでの。
無理に３－Ａをそこに押し込んでしまえば他の先生方の負担が増えるだけじゃしのう。
それに、一クラス分の増員は旅行会社側にも余計な負担をかけるじゃろうし。」
「ハワイ行きのクラスを入れ替わりに京都に入れたらいいでしょう。
それで解決です。」
「それはちと傲慢すぎやせんか？ハワイを楽しみにしておる生徒もいるんじゃぞ？」

どっちが傲慢なんだよこんちくしょうめ。

「そもそも、中止の理由は何です？過去に３－Ａが京都・奈良でやんちゃしすぎましたか？」

奈良公園の鹿で鍋料理を作ったとか、清水の舞台からダイビングしたとか。
仏教の矛盾からの葛藤で金閣寺に火を放ってみたとか……流石に無いな。

「いや、関西呪術協会がの……説明は必要ないの？
今年の引率の魔法先生に関して、修学旅行での京都入りに難色を示しての。」

てっきり対立は双方の長による自作自演と思ってましたが、マジで仲が悪かったようです。
うちの学年で京都・奈良に行く魔法先生……瀬流彦先生も行く、って言ってたな。

「その魔法先生を連れて行かなければいいじゃないですか、それなら。」
「ネギ君、君の事なんじゃがな。」

……俺かよっ！

「そうなってはしょうがないですね。何か理由を作って俺は学校に残る事にしますよ。
生徒たちと思い出を作れないのは残念ですが、折角楽しみにしてる修学旅行ですからね。」
「いやいや、ネギ君ちょっと待つんじゃ。話を勝手に終わらせるんじゃない。
ワシとしてはもう西と喧嘩するのはやめて仲良くしたいんじゃよ。

そこでお主に特使になって
西へ行ってもらいたいんじゃ。この親書を向こうの長に渡してくれるだけで構わんでの。」

そう言って机の引き出しから一通の封書を取り出す学園長。

「道中、敵の妨害もあるじゃろうが、あちらも一般人に手出しはせんはずじゃ。
引き受けてくれるとありがたいんじゃがのう。」

「……あのですね、学園長。」

頭痛い……帰りたいです、マジで。

「どこの世界の特使が修学旅行の片手間に親書持って行くんですか？馬鹿にされてると
受け取られてもしょうがないですよそれ？」

「何、心配はいらん。向こうの長はワシの義理の息子じゃ。」

「いや、周りがどう思うかですよ。こういうのは形式が大事なんじゃないんですか？」

少なくとも俺ならキレる。
いや、流石にキレはしないがそれで仲良くしようと言われてもなあ……。

「西との和解は修学旅行の片手間でやる事か！」って言われても文句言えんぞ。

「ネギ君……逆に考えるんじゃ。
『西への親書を持ってきたついでに修学旅行に来た』。こう考えるんじゃ。」

「一緒だっ！！」

思わず叫んじゃいましたよ。
いいよね、これくらい？

「ともかく、婿殿にも連絡は既に入れてある以上は逆に行かない方が問題じゃ。
これは関東魔法協会理事として魔法先生であるお主に命令するものである。問題はないの？」
「……だったら、最初からそう言ってください。」

思いっきり馬鹿にされてるのか……俺？
今までのやり取りは何だったんだよ、いやマジでさ。
とは言え正式な命令である以上、問題があっても受けざるを得ず。
仕方無しに封書を受け取ります。後、向こうの住所と連絡先も。
と言うか人が受けること前提で段取りするのやめようぜ、本当に。

「それと、もう一つ。孫のこのかの件じゃ。」
「何か問題でも？」

特使だけでも面倒なのにまだ押し付ける気か、この人は。

「うむ、実はこのかは婿殿の娘での。最近西の一部がこのかを西へ戻せと言うて来ておる。」
「つまり、何らかのアクションがあるかもしれない、と？」

頷く学園長。
何、この鴨が葱背負ってる状態。
そこまでして京都・奈良に行く理由が本当にあるというのか……？

まぁ、アクションがあったら『西も変わらないじゃないか！』って言ってやりゃ済む話
なんでしょうが、近衛さんに何かあっても困るしなあ……生徒だし。

「わかりました……出来る限りそちらにも気を使っておきます。」
「うむ、すまんの。」

つまり、親書を届けつつ修学旅行の引率をやって尚且つ近衛さんのカバーに入れと。
……死ねと言うのか、俺に！

「他に無いならこれで失礼して宜しいですか？」
「うむ、昼にも言ったが夜間の見回りに関しては修学旅行が終わってからじゃ。
今は修学旅行の件に集中するように。」

なんと言うかマジ勘弁して欲しいです、この展開。

恐らく学園長としては今一番ホットな話題を持つ俺を行かせる事で西の目を引きつけて、
反関東魔法協会派を引きずり出して一網打尽にしたいんでしょう、きっと。
それに、俺が親書を持っていったって事で親書に重みもでるでしょうしね。
西の長は西の長で殆ど同じ思惑のはず。
親書さえ手に入れれば、表立って東と敵対しようと言う人間も出てこないでしょうし。

しかし、そこで自分の孫（子）すらも撒き餌にしようとするとは…

……半端無い話だ。
そこまで追い詰められてる、って事なのか……？

ともかく、修学旅行の準備もしないとなあ。
カモ君も連れて行くとするか。何かの役に立つかもしれないしね。

夜、一軒の酒場にて。
二人の男が話し込んでいた。

どちらも背広で眼鏡を掛けてはいるが、明らかな違いがある。
1人は日本人、もう1人は黒人。
どちらもそれほど酒を飲んでいる訳ではないようである。

「昼の件、ガンドルフィーニ君はどう思った？」
「まるで茶番ですよ、あれでは！」

話を振った明石教授に、吐き捨てるように言い放つガンドルフィーニ。

「『闇の福音退治に尽力したネギ・スプリングフィールド君を新しく迎えようと思う』……
ネギ先生を担ぐ気満々ではないですか、我々が放置してたツケを払わせる事になっただけ
と言うのに！」
「うん、そうだね……ネギ君もその辺は分かってるんだろう。
『自分は場を整えただけで、命を賭けて戦った外から来た人たちが居てこその勝利です』と。
なんと言うか担ぎ出されたくないと言う印象だったね、やっぱり。」

お互いに不甲斐ない思いで一杯だった。
本来ならば、自分達魔法先生で片付けなければならない出来事だったのだ。
倒すことは出来なくても、事前に行動を起こせておけば拘束するなり手段はあった。
……許可さえ下りれば。

「卒業試験で来た先でこんなトラブルに巻き込んでしまうとは……全く！」
「メルディアナの方からも改めて抗議が来ているとの事ですよ。『安心して預けられるから麻帆良を選んだのに、このような事にして一体どうしたいんだ！』とね。」

仕事柄、明石教授の耳には様々な情報が入ってくる。これもその一つである。
研修先でほぼ人為的な理由で研修生が危険に晒されたような物である。怒るのが当然だ。
ましてやそれを出汁にするとは何事か、とより強い抗議があったのだ。

余談だが「日本へ行きます！」と言い出したネカネを止めるのに校長は1日費やしている。
行った所で状況が変わるわけでは無いし、逆にネギの負担になるだろう。それに仮にネカネが日本へ行けばアーニャも修行を放り出して来日しかねない、話が大きくなると。

「聞けば『闇の福音』はかつてネギ君の父親と因縁があったそうですし、何故学園長はそれを

分かっていて彼女のクラスの担任にしたのか……」
「まさか、学園長はここまで織り込み済みでネギ先生を担任に据えた……いや、まさか。」

慌てて自分の説を打ち消すガンドルフィーニ。
明石教授の表情は暗い。一歩間違えれば一人娘を失う所だったのだ。
一時的な吸血鬼化と怪我だけで済んだのは僥倖と言える。

「とにかくネギ君には借りがある。できるだけ力になるつもりですよ、僕はね。」
「……確かに今彼を取り巻く環境は、まだ若い彼には厳しいものですし。
出来うる限り、彼の助けになる方向に動ければ彼も少しは楽になるでしょう。」

ネギに行かないようにはしているが、取材の申し込み等が溢れる様に来ているのが現状である。
魔法世界でも恐れられた『闇の福音』退治の立役者なのだ。注目が集まらない方がおかしい。
「英雄の子は英雄なのか!?」「英雄の息子、『吸血鬼殺し』成し遂げる!」などなど。
それだけではなく「勲章を与えたい」「うちに来て欲しい」「講演をして欲しい」など様々な
組織から様々なアプローチが掛けられている状態なのだ。

ひとまずは、これらの反応へ一つ一つ対応していくしかあるまい。
最悪は本人の談話を何らかの形で発表しなければならないだろうが……。

自分達のやるべき事をやるしかない、そう考えた大人たちの夜であ

った。

第１５話：そして、魔法先生と特使になる話（後書き）

＞班選び
いや実際、どういう絡みで班組みしたのか。
基本的に仲がいいグループ（図書館組、運動部組、チア部組、超組）に＋α、
みたいな感じだけど。
なんと言うか、６班の余り物っぷりは異常と言うかｗ

＞修学旅行
２－Ａの段階で決定したのかしら？実際選択式なのはいいけどいつ決めたのやら。
少なくともネギは選んだ事を知らなかったみたいですし……
でも雪広さんの台詞から考えるとネギが着任してからの決定みたいですし。

普通の学校における修学旅行までの段取りの取り方とかぐぐってみたけど
わからない……
今見つけた分では１１月修学旅行だと４月、つまり大体半年前に下見に行くそうですが。（どっかの学校の校長先生の日記より）
杓子定規に適応すると、去年の１１月の段階で下見が終わっている事になる。
……で、下見して問題ない幾つかの候補地から選択式と言うことなのか。
新幹線の予約から宿の手配諸々を考えると１週間２週間あれば、いけるかな？
何らかの施設にお邪魔するなら一ヶ月以上前から予約要るだろうけど、

それもないしなあ。
あぁ、ホテルの予約考えると1週間じゃ無理か。
じゃあやっぱり1ヶ月は見ないとダメっぽいし……
ネギが正式に採用される前には場所決めておかないと
間に合わない可能性のほうが高い。

それとも、どこのクラスが流れてもいいように
「大体これくらいの人数。プラスマイナスはあるけど」みたいな大雑把な予約の
取り方をして宿を取ってたりするのだろうか？取れない気もするけど……
いや、各クラスの人数にそれほど無茶な差はないだろうから、
最大クラス人数で予約しておけば問題ないか？減る分には問題ないし。

まとめると半年前の段階で候補地の下見・ホテルなどの予約完了、
選択すること事態は1ヶ月ほど前に決定、と言うことか？
まぁ、場所が既に決まってて準備するだけなら修学旅行1週間前に決めてもいい気がしますが、
クラス間での調整とか考えると1ヶ月前が妥当かなあ、と。

……まぁ、これで「全クラスハワイ希望！」が通る修学旅行だ、と言ったら大惨事ですが。
幾らなんでも候補地6箇所くらい用意して、「4クラス上限な」くらいと思いますけど。

＞今年の引率の魔法先生
瀬流彦先生がいるわけですし「一人いるからダメ」では矛盾するので。
と言うか、潜在的に対立してる状況なら「修学旅行で、うちからこ

ういう人員出すよ」とは
連絡取ってると思うんだ。お互いに。

しかし、実際修学旅行なんか何度もやってるだろうに何故今回に限ってダメなのか？
それとも実は魔法先生を修学旅行で関西にやるのは初めてと言うのか？

＞このかの件
原作においては「このかに魔法バレしないように」と釘を刺しなおしてますが、
同居してる故の釘刺しと判断した為、カットしております。
その代わり、このかさんが事件に巻き込まれる可能性を示唆してますが……。

９／１８　改行、それに伴う一部修正。

第１６話：そして、修学旅行へ出発する話（前書き）

お待たせしました、最新話でございます。
ちょっと今回は微妙かも。

第16話：そして、修学旅行へ出発する話

関西呪術協会。
それは日本において関東魔法協会と勢力を二分する組織である。
その構成員の殆どは陰陽師と言われる日本独自の体系を持つ者達である。
そして、関東魔法協会とは米ソの冷戦にも似た極めて険悪な関係でもある。

何故これほどまでに東西の仲は悪いのか？

関西呪術協会の歴史を紐解けば、律令制の頃より存在した「陰陽寮」こそがその前身である。
陰陽術に代表される東洋呪術の力にて時の権力者達を、そして日本を霊的に防衛・守護するための組織であったのだ。
しかし、明治維新による西洋文化の流入に伴って西洋魔術が流れ込み、東洋呪術が蔑ろにされてしまったのである（「国を護れなかった」と言う理由も大きいであろう）。
結果として「陰陽寮」が廃止されてしまい、それと同時に陰陽師たちは西洋魔術の力に追い立てられるかのように力も規模も失ってしまう事となる。
（この辺りのいざこざが今だ西洋魔術に対する嫌悪感として残っている理由でもある）
結果、細々と地方で活動するためのネットワーク同士の繋がりが残るだけになったのだ。

その様相が一変したのは魔法世界における戦乱が、日本にまで波及した時である。
どのような理由で魔法世界の争いが日本にまで飛び火し大乱となったかは明らかではない。
しかし、最終的にかつて封印されていた鬼神『リョウメンスクナ』の封印が解かれ、
日本を発端にした現実世界最大規模の魔法戦争も秒読みかと思われた。

それを解決したのが『赤き翼』であり、『ナギ・スプリングフィールド』である。

この事態を憂慮したのが関東魔法協会、そして魔法世界のお偉方である。
言ってしまえば、一部の陰陽師の暴走ともいえる行動がこのような暴挙に至ったのだ。
今回の事件こそスクナの封印が決定打となって終結したのではあるが、このままでは
第二、第三の事件が起こってもおかしくは無い。

そこで、国を通じて再結成させたのが今の関西呪術協会なのである。
「西日本における魔法使いの養成、魔法絡みのトラブルの解決を行う事」が表向きの理由。
実際の所は「西の術者の把握と統率」である。

しかし、ここで問題が発生する。リーダーの不在である。
規模が縮小化して寄り合い所帯のような状態であり、取りまとめる役がいなかったのだ。
まだ同時に、先の大乱により主だったネットワークの指導者が命を落としていた事もある。

結果『赤き翼』の一員であり、退魔で名を馳せる神鳴流の名家でもある『青山家』の
人間でもある青山詠春（後に、近衛家に婿に入ることで近衛詠春となる）を
長に据える事にしたのだ。

だが、世の中そう上手くいくはずがない。

第1に、元々西にいた術者を差し置いて、「外へ」出ていた青山詠春が組織の長になった事。
第2に、彼は一流の戦士ではあったが一流の組織人ではなかったこと。
第3に、彼が近衛詠春となった事で「東に尻尾を振っている」と思われてしまった事。
最後に、実際に彼は親関東派であったこと。

燻るだけの火種は残したまま、消すこともままなら無い状態であったのだ。
勿論、長である以上最低限の礼儀は尽くす。尽くしはするが、忠誠があるわけではない。
結果として親関東派と呼ばれる派閥は青山家とその縁の者が殆どである。

一方、反関東派はどうなっているのか？
実の所一まとまりとして活動を行っている訳でもないのが実情であるのだ。
「日本から西洋魔術師は出て行け」と言う極端な過激派から「長は東の方しか向いておらぬ」
と言う穏健派まで様々に存在するのが実情である。

そんな派閥の中には当然「西を治めるのは我々こそが相応しい」と考えている所もあり、
その目的の為に彼ら一掌握派とでも言うべきか一は動こうとしていた。

何しろ、近衛家の跡取り娘であり魔力だけならば『サウザンドマスター』をも凌ぐ存在である
近衛木乃香が、警護の厚い麻帆良からこちらへ来るのだ！
正確に言うならば、欲するのは彼女ではなくて彼女の秘められた魔力。

その魔力をもってしてかつて封じられた鬼神『リョウメンスクナ』を復活させる。

かつての大乱でこそ封じられたスクナではあったが、
はっきり言えば相手が悪すぎたとしか言いようが無かったのだ。
実際の所アレを封印するだけでも莫大な被害が出て当然。
逆に言えば、『赤き翼』を持ってしても倒せなかった存在。まさに天災なのだ。
そのスクナをもって西の総本山を叩き潰す。
西の総本山の壊滅一そして、近衛詠春の死一が成し遂げられれば、
遺児となる近衛木乃香を
傀儡にして自分達が西を取り仕切ればよい。

さらには、麻帆良の魔法先生が特使として親書を携えてくると言う情報まである。
中身までは分からないものの、親書と言うのはそれそのものが外交手段の一つである。
それを妨害するだけでも、十分に西は東と仲良くする気は無いと言

うアピールにはなる。
勿論、その結果として東との全面戦争になる可能性はある。
しかし、スクナさえ手元にあれば西洋魔法使い等如何ほどのものであるか。
総本山の壊滅の余勢を駆って、東への侵攻とて不可能ではあるまい。

そんな掌握派の青写真を、天ヶ崎千草は冷め切った表情で聞いていた。
彼女自身は前述の過激派の部類に属する人間であったが、そこを見限ったのだ。

理由は簡単。
過激派は既に形骸化した集団と化してしまっているのだ。
もはや口だけであり、彼らには実行力など存在しない。
そんな彼らに見切りをつけ、掌握派へと誘われる形で移った彼女ではあったのだが……

「（所詮、この程度が西の限界なんどすなぁ……）」

正直、スクナを舐めているとしか思えない。
あれは決して『強くて便利な生物兵器』などではない。文字通りの『鬼神』なのだ。
本当に制御できると思っているのか？
動けと言えば動き、止まれと言えば止まる従順な存在とでも思っているのか？
だとすれば、相当おめでたい。
おめでたすぎて腹を抱えて笑ってしまいそうなくらいにだ。

アレは満足するまで喰らい尽くし、全てを破壊する。
鬼である以上それが当然の事。

アレは決して人には扱いきれぬ。
神である以上それが当然の事。

しかし、自分の目的の為には彼らの力を借りる必要があるだろう。
この機を逃してしまえばいつ目的が達せられるかは全く分からない。
スクナを復活させるだけの魔力など、そうそう存在しないのだ。
それに、自分単体での戦闘力などたかが知れている。
後ろ盾が必要なのだ、今の自分には。

ひとまずは、自分の手でこの件を進められる方向へ持って行ける事に安堵する。
監視役のつもりかどうか知らないが、イスタンブール魔法協会から研修に来たと言う
西洋魔術師の少年を支援の名目で付けるそうではあるが、気にすることは無いだろう。

「（もうすぐや……もうすぐ、本懐を成し遂げたる。待っとってや……）」

このタイミングを逃せば、恐らく次は無いのだから。

4／22日（火）

修学旅行の日がついにやってきました。ネギ・スプリングフィールドです。
集合は9時とか言ってるのに、既に7時の段階で集まっている生徒

達もいるみたいで。
図書館探検部の3人に、運動部の4人、それに長瀬さんと古さんですね。

「ネギ先生、おはようございますー！」
「待ちきれなくて始発で来ちゃいましたー！！」

そんなのっけからテンション高いと、後半息切れしますよ？明石さん、佐々木さん。
そう言いながら、宮崎さんと綾瀬さんの方を見ると手に枕を……枕？

「二人とも、枕投げには早すぎると思いますが……？」
「ち、違うですー。」
「枕が変わると寝れなくなるので、マイ枕持参なのです。」

なるほど。
まぁ、そう言うのは鞄の中に仕舞っておくようにね。

「所で先生。その肩に乗っているそのオコジョは？」
「小さい時から飼ってるオコジョでね。家に置いたままと言う訳にもいかないから
連れて行くことにしたんだよ。」

勿論、ちゃんと許可も取ってます。
人前なので喋れないカモ君ですが、ちゃんといますよ？
セクハラと下着ドロだけはやらないように釘を刺してます。

ちまちまと作った専用の檻を横にして誠意ある説得をしたらわかってくれました。

まぁ、少々なら大目には見るつもりですけどね。

「先生、触っていいー？」

と佐々木さんに聞かれたので渡してあげる事に。

途端に揉みくちゃにされるカモ君。

……まぁ、うら若い美少女に揉みくちゃにされるなら本望だろう。

まだ時間もあるので、魔法先生である瀬流彦先生と話をしておくことにします。

歳は（見た目）自分と同じくらいの若手ですが、攻守ともにバランスが取れてるそうで。

「どうも瀬流彦先生、おはようございます。」

「おはようございます、ネギ先生。

色々大変と聞いてるけど、できる限りサポートはしていくつもりだから。

とは言え、僕は他の生徒達の守りで忙しくなると思うけど。」

「はい、お気遣いありがとうございます。何かあった時は宜しくお願いします。」

などと話している内に集合時間。

ありがたいお話を新田先生から聞いたり、諸注意を終えると早速乗車する事に。

2班……こんな所でまで売ってるんですか、饅頭。

「先生も一つどうアルか？　力でるネ。」

「それじゃ、一つ貰おうかな……食べるのは後だけどね。」

古さんから一つ受け取ってポケットの中に入れておく事に。
美味しいんですが、今は仕事中ですからね。全班確認してから食べる事にします。

４班……和泉さん、気分悪そうだけど大丈夫？

「に、肉まん美味しすぎて食べ過ぎました……」

「うん、確かに美味しいのは分かるけどね。まぁ、何事も程々が一番だよ？」

そう声をかけながら、龍宮さんにメモをそっと渡しておきます。
俺一人で動く事を考えれば、味方は多いほうがいいですし。
幸い、金には困りませんしね。

５班……えーと、桜咲さん？

「どうかしましたか、先生？」

「いやね、その背中の竹刀……袋は？」

剣道部の合宿じゃないんだから。
と言うか、竹刀袋にしては長いよねそれ？

「え、これは……その。」

「とりあえず、修学旅行が終わるまでこちらで預かっておくから。」

と言うわけで没収です。
いや、ちゃんと修学旅行終わったら返しますよ？
しかしこれ本当に竹刀か？と思って左手で触ってみる。

解析……野太刀じゃねーか！

あれか、人斬りか何かなのか？
いや、京都神鳴流とか名簿に書いてたなそういや……常在戦場の心得か？
にしてもＴＰＯを選ぼうぜと言うか何と言うか。

そう思いながら、ようやく饅頭を食べ始めます。
少し冷めてますが、それでも美味い物は美味い。

「しかし勿体ねぇ……兄貴、本気で仮契約するつもりは無いんで？」
「ない、って言ってるじゃないかカモ君。あの時も言ったけどさ。」
誰も居なくなったのでようやく喋れるカモ君が、俺に語りかけてきます。

「どう見たって堅気さんじゃない人だっているじゃないっスか。
ちょいと事情を話して戦力を増やしておいた方が、この先も楽になりますって。」
「まぁ、知ってる顔には声をかけておいたけどね。それでも仮契約するほどじゃない。
大体、仮契約するって事はこれから従者として頑張ってねって事なんだから。
そうほいほいやるもんじゃないよ。実際ね。」

等と言っていると、真剣な表情で桜咲さんが戻ってきました。

「あの、先生少し宜しいですか？」
「ん……別に構わないけど？」

同時に張られたのは認識阻害の結界？
……まぁ、神鳴流ならそれくらいはするか？

「先生はご存じなかったかもしれませんが、私は大事な使命を預かっておりまして……
その荷物を返して頂けないでしょうか？」
「桜咲さんが神鳴流やってるって事は名簿に載ってたから知ってるけど、大事な使命って？」
「はい……その、先生は西についてはどの程度ご存知なんでしょうか？
少なくとも神鳴流についてはご存知のようなんですが。」

ご存知どころか立ち会ったこともありますけどね。

「うーん、一通り常識の範囲内では知ってるかな。」
「それでは、このかお嬢様の事も？」
「学園長の方からも、よろしく頼むと言われてるよ。」

親書の件についてはまだ黙っておいた方がいいかも知れません。
まぁ、知ってるような感じもしますけど。

「それでしたら話は早い。私は西の長よりこのかお嬢様の警護を仰せつかっておりまして。」
「一応、確認取らせてもらっていい？」

と言う事で了解を得たので学園長に電話を入れてみる。
どうやら間違ってはいない様子。
こういう重要な話は事前に報告して置いてくださいね、と言ってから電話を切って
さっき没収したばかりの竹刀袋を桜咲さんに渡します。

「ＯＫ、学園長から確認は取ったしこれは返すよ。
全く……危うく懸案事項がもう一つ増えるところだった。」
「いえ、こちらこそすいません……お手を煩わせたみたいで。
後、お嬢様についてですが護衛は本人にも秘密となってますので、
そこの所お願いします。」

そういやふと思った。

「今更聞くんだけど、近衛さんは事情知らないの？」
「は、はい。親の方針で魔法の事は内密にする事になっております。
普通の女の子として
日常を謳歌して欲しいと長の希望でして。」

羨ましい話です。
……いや、俺が選択しなかっただけだな。

「つまり、護衛対象に護られてる自覚の無いまま敵地に乗り込むわけか。」
「ほ、本当に大丈夫なんっスか、この状況？」
「大丈夫だよカモ君、無茶振りだけど不可能なミッションって訳じゃない。
桜咲さんが付きっ切りで付いててくれるみたいだしね。」

ねぇ？と話を振ると困った様子。
何が困ることがあるんだ？と思ったら近衛さんが来ました。

「せっちゃん、どないしたん？」
「いえ、何でもありません……それでは先生、失礼します。」

一礼して逃げるように去っていく桜咲さん。
寂しそうにしてる近衛さん。

……なぁ、桜咲さんは近衛さん護衛する気あるの？
いやそりゃさ、べったり引っ付いてるだけが護衛じゃないけどさ……。

「近衛さんは、桜咲さんと知り合いなのかい？」

そう聞いてみたら、幼い頃友人だったそうです。
中学一年の時に麻帆良で再会したそうですが、今の調子だとか。

「何かウチ、悪い事したんやろか……」

そんな事は無いよ、と言いたい所ですがここで話してしまうわけにも行かず。
下手に慰めてもぼろが出そうだしなあ。

「前向きに考えよう、近衛さん。
この修学旅行は一緒の班なんだ、もう一度ここで友人になればいいじゃないか。」
「……せやな。先生ありがとな。」

少しは元気を取り戻したようなので良かったというべきか。
そろそろ新幹線も出発するみたいですし、そろそろ座席の方へ移動する事にしましょう。

「と言うわけで、皆さん。１５年度の修学旅行が始まりました。
この４泊５日の旅行で楽しい思い出を作ってください。ただし、羽目は外し過ぎないように。」

出発した車内にてお話中です。
まぁ、後は諸注意を色々と。結構自由時間の取り幅が大きいからなぁ。
後ろからやってきた車内販売の人を避けつつ、つつがなくお話も終わりです。

と言うわけで3時間ほど新幹線に揺られる訳ですが、じっとしてる生徒たちでもなく……。
カードゲームとかやってるわけです。

「へぇ、カードゲームですか。」
「今流行ってるんだよ、先生。」
「魔法で戦うゲームです。」

ざっと場面を見てもよくわかりません。
……まぁ、この手のゲームはそんなもんですけどね。
そうこうしてると決着が付いたようですが……おやつ賭けてるんかい。
なんと言うかこの学校、賭け事好きだなあ。現金賭けないだけ健全ですけど。

そして早乙女さんがチョコレートの箱を開けると、カエルがそこに鎮座していました。
……おい。

それを切欠にあっちからもゲコゲコ、こっちからもゲコゲコ。
一体どこにこんなに潜んでたんだと言わんばかりのカエルの群れが！
幸いなのは小さなカエルばかりでデカイやつがいないことですが……
……

とか言ってる場合じゃない。

とにかく、手分けして捕まえることにします。
しかし新幹線の車内にカエルが潜んでる訳は無い以上は……そう思って【幻想殺し】
を起動してカエルを触ってみると案の定消滅。
魔法で構成されてるのか、このカエルは。

しかし、何故カエル？

そう思いつつも無事に全てのカエルの捕獲完了。
点呼と失神した人の介抱だけお願いしておいて、カエルを捨てに行く事にします。

「兄貴、もしかして……」
「西の仕業に間違いないだろうね、多分。」

このタイミングから妨害工作とか手が早すぎだろう。
妨害と言うよりはただの嫌がらせの気がしますが。

「親書の方は大丈夫ですかい？」
「ああ、それに関しては心配いらないよカモ君。絶対にとられない場所に入れてるからね。」

【王の財宝】使って宝物庫に放り込んでます。取れる物なら取ってみろってんだ。
そんなやりとりをしつつカエルの詰まった袋を自販機ブースのゴミ箱へ。
一息ついてると、龍宮さんが。

「大分難儀してるようだね、ネギ先生。」
「いや全く。その件で依頼をしたいんだけど大丈夫かな？」
「生徒を修学旅行で遊ばせる暇も与えないとは、先生も中々人使いが悪いじゃないか。
……冗談だよ、話を聞かせて欲しい。」

と言うわけで、現状について説明。
西の特使の件、近衛さんの件と。

「つまり、近衛の護衛をすればいいのかな？」
「普段は桜咲さんがついてるから大丈夫と思うけど、それと無く見ていて欲しいんだ。
今はとにかく人数が欲しい。」

3人でも足りないんですが、二人よりは3人です。

「なるほど、了解した。それで報酬の件だが……」
「とりあえずこれだけあれば足りるかな？必要経費は別と言う事で。」

袋に入れた「それ」を渡します。
中身を確認して何故か唖然としてる龍宮さん。
……凄いレアな光景を見た気がする。

「兄貴、あのずっしりとした袋の中身は一体なんですかい、あれ？」
「ん……砂金。」

総資産からすればはした金ですよ、はっきり言って。

「ちょっ、いいんですかい！？」

「何だかんだで儲けてるけど使わないからね。こういうところで使わないと。」

マジックアイテムの物販も相変わらず行ってますからね。
数量限定生産とか限定注文生産とかですが。
後は魔法先生・生徒たちにも幾つか卸してます。学内割引と言う事で安くしてますけど。

「先生……」
「ん、少なかったかい？」
「いえ、学園長の暗殺でも追加で頼んで来るんじゃないかと一瞬思ったくらいですよ。
今度からはこの半分でも十分です。この程度の依頼ならね。」

そう言いながら、袋を仕舞う龍宮さん。
……微妙にちゃっかりしてるな、おい。

「それじゃ宜しくお願いするよ。」
「了解した。料金分は働かせてもらうよ。」

そう言って去っていく龍宮さん。
これで手札は一枚増えた、と。

「そうか……あの量なら学園長の暗殺が頼めるのか。」
「あ、兄貴？」
「ははっ、そんな事するわけ無いじゃないかカモ君。ちょっと呟いてみただけだよ。」

そのときの俺の目は少しだけマジだった、とカモ君は後に語ったそうです。

とそんな感じで、修学旅行は始まったわけで。

……前途多難だなあ、これは。

第16話：そして、修学旅行へ出発する話（後書き）

このタイミングで一度切る修学旅行編、と言うのも中々無いな。
予想以上に上部分で時間取ったからだけど。

＞関西呪術協会
当然、独自設定でございます。
昔から陰陽師が幅を利かせてたと思うんですよね、実際問題。
それでも気が付けば勢力を二分されてると言う事は何かあったんだろうなと。
そして廃仏毀釈だなんだ言ってる時期を考えるとこういう事があってもいいよね？

原作の「魔法先生の関西入りに難色を示した」って表現も難しいよね。
「来るな！」なのか（原作の表現はそんな感じ）「来ない方が望ましい」なのか。
それとも「魔法先生だけど特使だよ」って事で関西入りさせたのか？
でないと、来るなと言ったにも関わらず来た事になって火に油注いでると言うか……。
（まだ特使が親書持ってきた、の方が外交上の話になるので来やすい感じ？）

この考えに至って、「親書を先に届けてしまう」案がカットされました。
……あっれー？俺の3時間余りの文章はー？

最も「土日で親書を渡してしまって、先の「来るな」発言を撤回させる」と言う手も

あるにはあります。
ただ、あくまでも親書は「仲良くしましょうよ」の対話レベルでしょうし、
その翌日に撤回と言うのはちょっと厳しいかなあ……と思った次第。

＞過激派
あれです、モノホンの過激派に眼とか耳とか鼻とかそぎ落とされるような感じ（おい

＞千草さん
……あれ、どうしてこんなことになってるんだ。
とっとと退場してもらう予定だったのに。

と様、かか様言うシーンは二次創作だっけか……原作読んでも見つけられんかった。
いかんなぁ、ごっちゃになりつつあるのが恐ろしい。

＞瀬流彦先生
しかし真面目な話、１人の魔法先生で４クラス護衛とか無茶振りにもほどがあるだろ。
それだけの腕が瀬流彦先生にあるというのか……
（実は名前が出て無いだけで他にいた可能性もあるでしょうが）。

＞ありがたいお話
校長先生とかが出発前に挨拶しますよね？あれです。
まぁ、こうも分散する修学旅行だとあるかどうかも怪しいんですが。

＞乗車
しずな先生の台詞によれば５クラスが希望を出してたようで。

まぁ、実際は男子校やらもあるでしょうからもっと増えるでしょうけど。
……となると、以前どこかで言った「４クラス上限」とかは無いみたいだなぁ。
実は６クラス上限？で４候補くらいとかか？
幾らなんでもハワイと京都のみはないだろう。最大１２クラスが１エリアとか想像できん。
ましてやこの場合は１９クラスがハワイに行ってる計算になる……w

＞修学旅行の持ち物について
意外とフリーダムなんですよね、ここ。
ウォークマンあり、カメラあり、饅頭売るのあり、竹刀袋あり……
カメラはまあ良しとしよう（持ってる朝倉が報道部だし）。
ウォークマンもまあセーフっちゃセーフだ。
だが、残り二つはちょっと待てw

＞桜咲さん
この作品では基本は木乃香の護衛メインで、魔法生徒ではない扱いになっております。
正確に言えば、学園の方からヘルプがあれば夜の警護に出る形。
ですのでネギとは顔合わせのときに会っていないと言う。

大体、個人の護衛が外周部で警備してちゃまずいだろう、と。
ボディガードが対象の護衛ほっぽり出して住んでる屋敷の外警備してるようなもんですし。
（まぁ、ある意味限りなくそれに近い状態なんですが）

……まぁ、原作見ても刹那はネギの事を知ってるみたいでしたが。
とは言え隠匿のあまりのまずさにバレバレだったのか、先に知って

たのかは不明でして。
護衛である事を考えると新任教師で魔法使いのネギが来る事くらい連絡行ってるでしょうが。

＞カードゲーム
ＭＴＧと言うよりは遊戯王なのか？
コタローが見せてたカードを見るとそんな感じはするけど、あれはゲーセン版だしなあ。
「関西限定のレアカード」と言うパルの発言辺りを考えると、兼用の気もするけど……。
最近のあの手のＴＣＧはさっぱりわからないんで。

一番分からないのは新幹線でのデュエル時に、ゆえがカード効果でライフ削ってゆーながパルに本体火力で止めを刺してる光景だったりしますが。変則的３ＯＮ３か？
エンチャント（場）は全てに有効、みたいな……そんなバカな。

＞自販機ブース
原作で言うと、班員紹介してるシーンの場所。
……ちゃんとした名前が分かりませんでした。

＞ゴミ箱
やですよ、幾ら消えるからってカエルの群れに手を突っ込むとか。

第17話：そして、京都に到着してさらわれた話（前書き）

今回はキリがいい所で切ったのでちょっと短めです。

第17話：そして、京都に到着してさらわれた話

と言うわけで、無事に（？）京都に到着したネギ・スプリングフィールドです。
カエルの件については生徒たちには適当にごまかして置きました。
瀬流彦先生にも報告しましたが、他のクラスではそのような騒ぎは起こらなかったとの事。
……ピンポイントに狙われているようです。

気分を切り替えてたどり着いたのは清水寺。
正確には「清水の舞台」と言われる場所ですね。

「これが噂の飛び降りるアレ！」
「誰かっ！！、飛び降りれっ」

とか盛り上がってます。
長瀬さん、「では拙者が……」ではありません。
忍者だろうしこの高さでも余裕だろうけどさ、そりゃ。

そして、長々と解説を始める綾瀬さん。
早乙女さん曰く、神社仏閣仏像マニアだとか。

「そう言えば清水寺には七不思議なんてものがあるとか。
ちょっとそれを回ってみようか？」
「それはいいですね。是非回りましょう。」

と言うわけで、希望者募ってぞろぞろと回ってみることにします。
一通り回ってから、地主神社の方へ向かう事に。

何かざわざわしてるなぁ……と思ったら落とし穴に落ちた人がいたとか。
なんだよ落とし穴って、と思ったら恋占いの石と石の間に落とし穴を掘った奴がいるらしい。
……誰得だよ、いやほんと。

そこはスルーすることにして、音羽の滝へ。
何でも、近所の人はお茶の水にこれ持って帰って使うとか。
ちなみに、清水寺の由来はこの滝がずっと沸き続けてるからだそうで。

「はいはい、他の観光客もいるから飲むのは適度にね。後、3つ全部飲んじゃうと効き目がなくなるらしいから注意だよー。」

えー、先生もっと早く言ってよー！もう飲んじゃったですー、と阿鼻叫喚の状況が。

「先生、本当なのですかそれは？」
「綾瀬さんなら知ってると思ったんだけど。」

水を水筒に詰めてる綾瀬さんも知らなかったそうです。
まぁ、本当かどうかは俺も知らないんですが。
しかし……飲んでる人おかしくないか、なんか？

「先生っ、大変！　みんな酔っ払っちゃってる！！」
「は？」

神楽坂さんに言われてみると、見事に出来上がった生徒たち……プラス観光客の姿が！

とにもかくにも、無事な生徒たちと協力して介抱するというか休憩所の方まで運びます。

「兄貴、屋根の上だぜ！」
「……うわ、マジかよ。」

カモ君に言われて、滝の屋根の上を見ると酒樽が括りつけられてて酒が流れてる様子。
あー、とりあえず新田先生に報告、の前に瀬流彦先生の方に報告するのが先か？
まさかただの嫌がらせってわけじゃないだろ、これ。
丁度いいタイミングで、二人同時に通りかかったので報告する事に。

結局、寺の人呼んで警察に届け出る事にしました。
俺も発見者と言う事で事情を聞かれる訳ですが。
と言うわけで、後のことは瀬流彦先生にお任せする事に。

修学旅行の方は続行するそうです。まぁ、ここで中止でもよかったんですが。
流石にこれは不可抗力の部類だしなあ……。
そんな感じで、俺が宿泊地であるホテル嵐山に到着したのは夕方でした。

「しかし兄貴、のっけから前途多難っスねこれは。」
「……想定内の範囲と言えば範囲だし、範囲外と言えば範囲外と言うか。
この程度で済ませてくれることを感謝するべきだよ、全く。」

ロビーのソファーに座って一休み中です。
いや実際、呪術とか言うなら呪いとか色々あるだろうからなぁ。

この程度で済ませてくれるなら、まだマシと言うか何と言うか。

「で、今晩はどうするんで？」

「どっちにしろ、見回りの方もあるからね。ついでに結界でも張っておくつもりだけど。」

パンフレットとかで大雑把な間取りは確認して、大体の基点の設置場所は確認してあります。

悪意あるものはここを通ることを禁じる、と言う強力な奴ですがここで張らずにいつ張るのか。

……問題は、呪いとかをどうするかなんですが。

通りすがりの桜咲さんに聞いて見ましょう。

「あ、先生。ご苦労様です。」

「あの程度ならまだ可愛い方だよ。それで聞きたいんだけどね……」

と言うわけで聞いてみると、その辺りの対処が出来る結界は一応張れるとの事。

「ですが、呪いをかけるとなるとある程度儀式が必要です。必要な物を揃えるだけでも

一手間である事を考えるとそれは無いかとは思いますが……」

「俺もそう思うけど、一応念のためだよ。そういう訳でお願いできるかな？」

と言う事で、お互い結界を張ることを決定。夕食後に早速実行に移すことに。

……しかし、入り口にぺたぺたとお札をはる桜咲さんを見てると、営業妨害じゃないかとも

思ってしまうんだけどなぁ。仕方ないとは言え。
そんな事を考えながらも、こちらもホテルの四方の目立たない部分に結界の基点を構築。
ホテル屋上、丁度対角線上になるあたりに最後の基点を設置して完了です。

何だかんだで本職放り出してるように見えますが、その辺は瀬流彦先生に頼んでます。
結界張る云々も一応話通してますしね。
一通り終わった所で桜咲さんと合流です。

「ひとまずはこんな所かな？」
「そうですね、これで一安心かと思います。」

一息ついていると、お風呂の時間だそうで。

「あ、桜咲さん。ここのお風呂は混浴風呂だそうですから。入る時は１５分ほどずらすように５班には言っておいてくださいね。」

ちょうどこの時間はそういう時間帯ですしね。
それじゃあ久々にゆっくりしてくるかな。
見回りに関しては、風呂上りに相談する事にしましょう。

静まり返った京の夜。
ホテル嵐山の従業員に扮した天ヶ崎千草は舌を巻いていた。

相手の手際にである。

最も、新幹線と清水寺のあれは本当に嫌がらせである。
相手の西洋魔術師の実力の確認、も多少はあったがあの程度で測れるとも思っていない。
滝の酒混入に関しては、今日の仕事のやりやすさに繋げるつもりでもあったが。
本命は、式神の投入による近衛木乃香の拉致。

しかし、その計画も目の前の二重の結界によって難航する事になる。
西洋魔術と東洋呪術の意図した重ね掛け結界。
呪術結界の方はいい。決して稚拙と言うわけではないがこの程度なら大したことは無い。
閉じた空間に対して効果を持つ結界なら、誰かが外へ出たタイミングで入るだけで十分。

問題は魔術結界の方だ。力任せに破るだけならば何とかなるのだが、それでは意味が無い。
術式を見極めて、相手術師に分からないように解除する……一晩で終わるとは思えない。
となると、餅は餅屋である。

「へぇ、中々良くできた結界じゃないか。これほどの物を張れる人間がいるなんてね。」
「感心するのは結構やけど、解けるんどすかこれ？」

フェイト・アーウェルンクスを名乗る白髪の少年。
どことなく、人で無い印象を持つ支援の名目で付いた監視役。
正直言って馬が合いそうにも無いが、今はそんな事を言っている場合ではないのだ。

「やれやれ、今日は待機だと聞いていたからゆっくりできると思っ

たんだけど……
ま、これくらいならどうにかなる範囲だね。」
「ならとっととやってもらえまへんやろか？　こっちも予定してる時間押してるんや。」
やれやれ、と首を振ったフェイトを名乗る少年は一歩前へ出る。
「5分ほど時間を貰うよ？きっちり5分後、結界を消失させるから。貴方は呪術結界の方を無効化しておくといい。」
それだけ言い残して、姿を消した彼に舌打ち一つ。
やはり気に入らない。
しかし、手際だけは確かだった。きっちり5分後に魔術結界は消失。同時にこちらも呪術結界を打ち消す。
「さぁて、のっけからケチがついたけど始めましょか。
フェイトはんはお仕事ご苦労さん。戻ってもらって構いまへんえ。」
「そうしたい所だけど、これだけの結界を張った人間には興味があるんでね。
僕も付き合わせてもらうよ。」
「勝手にしなはれ、ただし足だけは引っ張らんといてや？」
それだけ言って、親子か姉弟にも見える歳の差の二人はホテルへと入って行く。
目的はただ一つ。
「しかし、夜のホテルって一種独特の空間だよね、カモ君。」
「そりゃあ、これだけ大きな建物っスからねぇ。」

と言うわけで絶賛見回り中のネギ・スプリングフィールドです。
桜咲さんは、部屋で不寝番してるとか言ってましたから俺が外回りになるわけで。
龍宮さんも金額分は仕事するとか言ってましたから、裏で動いてるんでしょうきっと。

「しかし兄貴、結界張ってあるのに中を見回りって意味ねーんじゃ？」

「……念のためだよ、念のため。まさか外を見回るわけにもいかないし。」

そんな事を話しながら歩いていると、ぺしゃっと水の感触が。
誰だ、こんな所に水零したのは？
次の瞬間、気配を感じて猛然と後ろへ！

「へぇ、これを避けるんだ。もしかしてとは思ったけど……のっけから大当たりとはね。」

学生服を着た白髪の少年が、こちらを向いて立っていた。
拳を振りぬいた状態で。
気が付かなければ一発いいのを貰っていた事だろう。
と言うか、俺に気づかれずにあの結界抜いてきたのか！？

「外れてたらどうする気だったんだよ……？」

「ああは言ったけど確証はあったよ、隠してるつもりだろうけどまだまだ甘いかな。」

杖を出してる暇はないので無手……うわ、無理くせぇ。
とにかく『戦いの歌』を発動、同時に辺りに認識阻害を張り巡らせる。

この辺りにうちのクラスの部屋が無いのが救いか。

「カモ君、桜咲さんに報告。走って！」

「が、合点でさ！！」

カモ君を連絡役に回して、俺は……こいつをどうにかする必要があるのか。

「へぇ、どうにかできると思ってるんだ？」

「っ！？」

速いっ！！一瞬にして間合いの内に入られたかと思うと、障壁ごと拳で吹き飛ばされる俺。

壁に叩きつけられるも、まだまだこの程度では……と思ってました。

そのまま敵方の猛攻が俺を襲う！と言う奴です。

恐らく中国拳法の流れとは思いますが、受け流すので精一杯と言うか、受け流しきれねぇ！

「だあっ、鬱陶しいっ！！」

そう言って撃ち放つのは無詠唱の『魔法の射手・光の５０矢』。

この距離では頼まれても外さん！

案の定直撃し、反動で俺も吹き飛ぶハメに。

あたりもボロボロですが、この際止むを得ないっ！

「思い切った手を使うみたいだけど、その程度じゃあね。」

「効いてないのかよ……」

服まで無傷って事はどんだけ硬い障壁張ってやがるこいつ。

詠唱込みで撃てば通るか……いや、無駄っぽいな。

「結界の腕前は凄いけど、攻撃に関しては大した事無いみたいだね。それでも色々厄介だし、君にはここで退場してもらう事にしよう。」

そう言って詠唱を始める少年。

俺の火力じゃ障壁は抜けないから余裕ぶっこいてやがるな……

「それじゃあ、さようならだ。『石の息吹』！！」

「！？」

ガスのように広がるその魔法は俺を石に……石化魔法！？

やばい、流石にこれはやばいっ！！

高い抗魔力のお陰でまだ動く手で【文珠】を出し〔解〕〔呪〕する事でたちまち戻る俺の体。

こいつはここでケリをつけないと、本気でやっかいだぜ。

「……何で石になって無いんだい、君は？」

「企業秘密だよ！」

【王の財宝】より取り出し、手に握ったのは2メートルはある赤き魔槍。

正直、振り回すとか無理で突くしかないがそれで十分！

「中々な業物のようだけど、それで僕を倒せるとでも？」

「……喰らってから同じ台詞を吐いてみなっ！！」

【神の左手】の補正もついて、一足で踏み込むと心臓に叩き込む！

赤き魔槍こと〔破魔の紅薔薇〕は障壁をなかったかのように破り、少年の心臓を刺し貫いた。

「な……」
「悪いな。俺の勝ちだ。」
そう宣告する俺に余裕の笑みを浮かべる少年。何がおかしい？
「確かに僕の負けだ……だけどね、僕の攻撃は囮だ。
本命はとっくの昔に目的を果たしているよ。」
次の瞬間、少年は水になって消滅した。勝負に勝って試合に負けたか、これは!?
結界を解除し、近衛さんの安否を確認しようとした所で携帯電話が鳴った。
着信は……桜咲さんか。
嫌な予感しかしないが、出ないわけにも行かない。
「先生、大変です！お嬢様がっ！！」
……案の定でした。
一日はまだ終わりそうにありません。

第17話：そして、京都に到着してさらわれた話（後書き）

＞清水寺七不思議
実際に存在するそうで。詳しい事はぐぐってもらえれば。
（七つどころか10個くらいあるとか書いてましたけど）

＞トラップの数々
よく考えると、不特定多数が賑わう神社であの仕込みはまずくね？
明らかに落とし穴とか酒とかピンポイントで狙えねえよ！みたいなwましてや、メジャーな観光地なのに……w

後、恋占いの石のある場所って石畳敷いてるみたいだけど
落とし穴設置できるのこれ？
いや実物見に行ったわけじゃないのでわかんないんですけど。
……いや、モンハンみたいな落とし穴ならあるいは。

＞呪い
いや実際に呪いなんかかけたことは無いからわかりませんがw
呪殺とかの部類になってくると一心不乱だろうしなあ、と。

＞お風呂
しかし、教員と生徒の入るタイミングが被るのはどうなんだ。

＞フェイト・アーウェルンクス
ずっとこれを書くまで「フェイト・アーウェンクルス」だと思ってました（おい

＞どうにかなる範囲
原作で西の総本山の結界抜いた以上は、余裕だろうjk。

＞ＶＳフェイト戦
実の所、起源弾ぶっ放すつもりでいたんですが（何）。
本来ならその起源弾も千草さんにぶち込んで差し上げる予定だったんですけどｗ
しかし、起源弾って「相手が魔力を使えば使うほど大惨事になる」弾なんですよね、あれ。
つまりあの障壁の硬さがデフォルトのフェイトさんにぶち込んでも効果が薄いという。
結果的に、防御無視の槍を振り回す羽目になりましたとさ。

魔術体系が明らかに違うであろうネギま！で起源弾が通じるの？
と言う突っ込みは受け付けませんのでご了承を。

９／２７　一部訂正。

第１８話：そして、奪還して攫われる話（前書き）

今日は最初に謝っておく事がございます。
せっちゃんファンごめんなさい。

第18話：そして、奪還して攫われる話

桜咲刹那は自らの不甲斐なさに腹を切って死にたくなっていた。
……最も、そういう訳にもいかないのではあるが。
交代要員も居ない不寝番。それがどれだけの負担になるのかは想像に難くない。
結果、数分の気の緩みが隙となって眠ってしまい近衛木乃香を攫われてしまったのだ！
現在追跡の真っ最中である。

しかし、先生と共に張り巡らせた結界はどうしたのか？

と考えて首を振る。
時間稼ぎに用いた符から考えて、相手は本職の陰陽師。
神鳴流とて術は使うが、あくまでもそれは補助であり本職には及ばない。
それに、現実に攫われてしまった以上はそれを解決するのが先である。
ネギ先生には連絡をいれ、先行する旨は伝えたのでおっつけ追いかけてくるはずだ。

「電車に乗る気っスよ、桜咲の姉さんっ！」
「わかっています！！」

肩に乗せたネギ先生の使い魔のオコジョ妖精一通称カモ一が耳元で叫ぶので怒鳴り返す。
彼が起こしに来なければ、彼女が近衛木乃香が攫われた事を知るのは時間がかかっただろう。

隙を突かれて術中に嵌ったか……不覚！

思い返せば、あの時襲った睡魔は不自然極まりない睡魔。
恐らくは何らかの術をもって眠らされたに違いない。
その間に、直接入ってきたか式神を使ったかして攫って行ったのだろう。

そう思いながらも油断も隙も見せることなく改札口を通り抜け、
まさに扉が閉まろうとする電車に滑り込む。

「しっかし、あまりにも人が少なすぎやしないっスか？
と言うかこんな時間に電車が都合よく止まってるとか……」
「恐らくは人払いの呪符でしょう。そして電車は恐らくどこからか仕立てたか……っ！？」

走り出す電車の窓の外。手を振っているあの女は何だ？どうしてお嬢様を担いでいる？

「ドッキリ大成功です～。どうも～、神鳴流です～。」

追いかけていた女の姿を偽装していた全身の呪符が剥がれ、ロリータファッション調の
ひらひらした服を着た眼鏡の少女が姿を見せる。
同時に担がれていた近衛木乃香の身代わりをしていた呪符の効果時間が終わり、
元の符に戻る。

「な、なんだそりゃあ！？」
「……身代わり、だと！！」

仰天するカモ、唖然とする桜咲。

「はい～、先輩方が追いかけてこられたのはウチです～。
あ、ウチの名前は月詠いいます～。宜しくお願いします～。」

そう言って、抜き放つのは右手に太刀、左手に小刀の二刀。
無防備な立ち振る舞いのようで、その型に隙は無い。
油断ならぬ相手だ、と察した桜咲も〔夕凪〕を抜き放つ。

「貴様に時間をかけてる暇は無いっ！！」
「いややわ～、先輩そんないけずな事言わんといて～。
夜はまだ始まったばかりどすえ～。さぁ、ひたすらに剣力比べと参りましょ～。」

そして、神鳴流同士の戦いが幕を切って開ける。

走り去る電車を手を振って見送り、天ヶ崎千草は近衛木乃香を抱えたままほくそ笑んでいた。
こうも上手く事が運ぶとは、と。

ホテルから運び出した段階で、呼んでおいた月詠に身代わりをさせたのだ。
本来ならば自分は逆方向へと動いておくべきなのであろうが、月詠を変化させた術の維持にある程度の距離が必要だったのだ。
更に言えば、ホテルには時限式で式神が発生する呪符をあちこちに貼り付けてある。
十分に足止めになっているはずだ。

「ま、これで懸案事項は全部片付いたわけやな。」
「いや、そうでもないさ。」

1人ごちた台詞に背後から返ってきた言葉に、咄嗟に胸元に手を入れる。
次の瞬間、銃声と共に銃弾が頬を掠める。

「それ以上動かない方がいい。できれば、その手を外へ出してもらえるとありがたいね。
ついでに言えば、次からは頼まれても外さないよ?」

声は女、距離は……十数メートルと言ったところか。
相手の獲物は銃。恐らくはハンドガン。
溜息を付き、ゆっくりと手を外に出す。

はらはらと舞い落ちる呪符。

「次は、その担いでいる少女を降ろしてもらえないかな?」
「冗談言うたらあきまへん、この子降ろしたらズドンと言わすつもりですやろ?
みすみす自分の命綱手放す阿呆がどこにおりますかいな。」

後ろを振り向かず、冷静に言葉を紡ぐ。
今必要なのは時間だ……そう、事態を打開する為の時間。

「やれやれ、そのつもりなら私は既に撃っているよ。警告なしでね。
その少女を降ろして後ろを振り向かず、そのまま歩き去るなら撃つつもりは無いよ。」
「それを信じるやつはよっぽどおめでたい奴や思いますえ?どうしてもと言うなら……」

千草に狙いを付けていた龍宮が、呪符が服の袖から途切れる事なく舞い落ちている事に
気が付いた時には遅かった。
いや、想像の埒外であっただろう。舞い落ちた呪符が水の流れのようにに襲い掛かり、銃ごと
その腕を拘束するなどと！！

「っ！？」
「猿鬼！熊鬼！出番やっ！！」

一瞬の隙を突き、手持ちで一番強力な式神である『猿鬼（えんき）』『熊鬼（ゆうき）』を召喚、『猿鬼』を前面にて壁にし、『熊鬼』を攻撃に回す。
更に小猿型の小さな式神を呼び出し、数で圧倒する体制を整える。

「（相手は拳銃使い……せやったら、まだ戦いようはあるっ！！）」

念を入れるかのように、呪言を唱える千草。
拘束した腕を締め上げるだけの、簡単な呪い。

しかし、今の龍宮にとってそれは十分に厄介な代物であった。
まるで万力に締め上げられているような痛みが片腕を襲い、拘束し続けているのだ。
無論、苦痛を無視する術は心得ている。しかし、今一番の問題は……

「（リロードの時間が無い！）」

この一点なのだ。

無論、その程度でどうにかなるような世界で生きてきた訳ではない。
だが片腕を封じられた状態で、弾倉を詰め替える作業は骨の折れる作業である。
ましてや襲い来る式神の数が多く、それを捌くので精一杯の状況なのだ。
一発逆転を狙おうにも、対象は大猿型式神の陰に隠れて顔を出そうともしない。
それでも相手を逃がしてしまう訳には行かないので、跳弾による攻撃を試みるが狙いが甘く
大猿型式神がカバーに入ってしまい、威嚇を兼ねた足止めが精々。
咄嗟の発砲による跳弾によって相手を狙えるほどの腕は流石に無いのだ。
だがしかし、龍宮の顔に焦りの色は浮かんでいなかった。

「（しかし、プランBになってしまうとはね……念を入れておいて正解だったか）」

この段階で、ほぼ天ヶ崎千草は勝利を確信していたと言える。
確かに、不意を打たれて銃を突きつけられた時はどうなるかと思ったがそれもどうにかなった。
あの結界を張り巡らせた西洋魔術師もフェイトがどうにかしたのか、追いついてきそうに無い。
（恐らく）神鳴流の剣士は、こちらの神鳴流剣士・月詠と場外乱闘中。
結界の段階でフェイトと言う切りたくない札を切ってしまったが、大よそ理想の展開である。
そして、目の前の銃使いも片手が使えずもう片方も恐らく弾が残り少ない状態であろう。
足止めはされている物の、最終的に押しつぶしてしまえば問題ないのだ。

「とは言え、これ以上時間を掛けられるんも癪や。一気に決めさせてもらいますえ！」

彼女最大の失敗。
それは、彼女の戦闘スキルの中に「気配感知」が含まれていなかった事にある。
さらに言うならば月詠なり、もう1人待機中の『彼』なりを前衛にしなかったことだ。
……いや、彼女を責めるのは酷だろう。

「全くその通りでござるな。これ以上の夜更かしは美容の大敵でござるよ。」
「っ！？」

反応した時にはすで遅し。
浴衣を着た糸目の女に殴り飛ばされ、近衛木乃香を奪い返されてしまったのだから。
『猿鬼』を動かそうとするも、それより早く離脱される。
銃使いの方も戦況が変わりつつあった。
恐らく分身なのだろう、１０人近い浴衣の同一人物が小猿型式神を排除し『熊鬼』もまた
銃使いによって還されてしまう所であった。

「ここらが引き際のようやな……せやけど、ただでは引きまへんで？」

今だ健在の『猿鬼』を起爆。その爆煙を目くらましに印を結ぶ。
銃使いの女の苦鳴の声を聞くと月詠に符で撤収の合図を送り、そのまま転移符を起動する。

「（月詠はんもやってくれたみたいやしな。明日が勝負や。それに……）」

煙が晴れた時、既に彼女の姿はその場から消えていた。

誘拐犯が姿を消したのを確認して、龍宮は構えていた銃を降ろした。

「ふう……お前に声をかけておいて良かったよ、楓。」

「なあに、クラスメイトの危機とあらばこの程度。」

そう言って、肩に担いだままだった木乃香を降ろす長瀬。

ホテルの中の不穏な気配に目を覚まし、部屋を抜け出した所で龍宮に遭遇。

事情を説明されて同行してきたのである。

「しかし、世の中広いでござるなぁ……あのような者が存在するとは。」

「できれば内密にしてもらえるとありがたいね。最悪、記憶を消されることになる。」

それは勘弁でござるな、と呟いた長瀬はようやく龍宮の顔色が悪いことに気が付いた。

「真名、如何したでござるか？」

「何……あの術師、最後にとんでもない事をやっていってくれたんだよ。

当分はこの腕、使い物になりそうに無い。」

呪符に覆われたままの龍宮の腕を見て、絶句する長瀬。
……何しろ、複合骨折の見本と言わざるを得ない状態なのだ。むしろ粉砕骨折と言えよう。
その状態で顔色を変えただけで済む龍宮もまた恐るべし、である。

「それで、刹那はどうなったでござるか？」
「わからん。ただでやられる刹那では無いと思うが……」

自分が駅に入る前に走って行った電車に乗っているのであろうが、ただ走り出しただけではないであろう。何らかの罠なり刺客なりが待ち構えているはずである。
これぱかりは刹那を信じるしか他になかった。

「さて、そろそろ依頼主が来る頃だと思うが……どうする？会っていくかい？」
「ふむ……この件、まだ続くのであるなら話は聞いておくべきでござろうな。」

龍宮の提案に少しだけ考え込んだ長瀬はそう判断した。
この事件がこれで終わるとは思えない……そう考えたからだ。

近衛さんの魔力波長を辿ってようやく駅にたどり着いたネギ・スプリングフィールドです。
駅の改札口前に、龍宮さんとベンチに寝かされた状態の近衛さん、それに長瀬さん……？

「やぁ先生、何とか近衛は守りきったよ……本当に何とかだがね。結果的に、1人助っ人を頼んでしまったわけだが構わないだろう？」

「いや、全然構わないけどね。ってその腕！？」

何か腕が物凄い事になってます。
足元には呪符の成れの果てが散らばっています。多分こいつが元凶か。
取りあえず応急処置として治癒魔法を……の前に長瀬さんの方を見ます。

「もし先生さえ良ければ、拙者も手伝わせて貰うでござるが？」
「楓の腕は私も証明するよ。それに、手は多いほどいいだろう？」

と言う事で長瀬さんにも手伝ってもらう事にしました。
ここに至るまでの状況を聞いた後で、こちらの事情を説明する事に。
勿論魔法関係も大雑把に話をしてです。
隠匿？それどころじゃないです、はっきり言って。
今必要なのは頼りになる人手です。

「中々厄介な話になっているでござるな……」
「いや全くだ。だからハワイにするべきだったんだよ、あの学園長め。」

そう言いながら、龍宮さんに回復魔法の方をかけておきます。

「ありがとう先生、大分楽になったよ。」
「後で部屋に来るといいよ。ここで治療できない分を治してしまうからね。」

念のため薬やら何やら持って来て置いてよかったです。
とは言え、こうまでひどく折れてると薬より【文珠】使う方が早いんだよなぁ。

まぁ、龍宮さんなら口は堅そうだけど。

「しかし、桜咲さんはどこまで行ったんだ一体？」
「電車に乗ったはずだから、線路沿いにしか動いていないとは思うけどね。」

取りあえず、近衛さんは長瀬さんと龍宮さんに頼んで先に連れて帰って貰う事にしました。
念のため魔法で眠りを深くしておいたので、目が覚めることは無いでしょう。
そして、待つこと小一時間……カモ君が走ってくるのが見えてきます。
いや、他にオコジョがこんな所にいるわけ無いでしょうし。

「あ、兄貴っ！大変だっ！！桜咲の姉さんがっ！！」
「大怪我でも負って動けないのかい？」

だとするなら、急いで治しに行かないと。
動けないほどの傷なら大変な事になる。

「いやそうじゃねぇ、敵に攫われちまったっ！！」

……マジか。
どうやら、明日以降も波乱含みの日程になりそうです。

第１８話：そして、奪還して攫われる話（後書き）

これが菊池秀行作品なら今頃せっちゃんは大惨事（こら
……いや、俺にそんなものを書く腕はないっす。

＞このちゃん拉致
用を足しにトイレに入ったところをそのまま拉致。
……大丈夫なのか？　何がとはあえて申しませんが。

本作品ではあえてその辺り（どうやって拉致ったか）をぼかしております。
確定させたのはせっちゃんは眠らされた&拉致の発覚を防ぐ為に何らかの符を用いたと言うことだけです。
強固な結界に対して応援を呼ぶ時間とか色々あって、原作より時間がずれたと思って下さい。

＞電車
駅はいいんだ、駅は。
誰が運転してたんだあの電車、と言う話でｗ
そもそもあんな都合よく時間合わせて電車来る訳ねーだろ、みたいな？

＞つっきー
少女、ですよね？（おい）。
せっちゃんを「先輩」とは言ってるものの、歳と年季は別もんだしなあ。
（極論、５０歳から始めたら２０歳だって先輩だし）
ちなみに、本当は式神が相手取る予定でした（え＞電車内一本勝負

＞せっちゃんとたつみー
ちょっとお馬鹿＋駄々甘かも知れません。
後、たつみー参戦のタイミングがおかしいかもしれませんが、
気にしない方向でお願いします。
単純に考えればせっちゃんより遅れて動いてる訳で、仕事しろと言われても
反論できん（汗）……いや、仕事しましたけどね。
助っ人を頼むのはいいのか、と言うのはさておいて。

＞跳弾
学園祭にてスナイパーライフルによる跳弾攻撃を敢行しておりますが、
あれは狙撃と言う技能があってこその攻撃だと言う事にしております。
どこかのオセロットさんのようには無理と言う事でお願いします。

……そういや、あの時空転移弾って発動は射手の任意なんだろうか？
でないと、壁に当てた段階で発動しちゃうよね、あれ。

＞最大の失敗
実は一番の失敗は戦う事を選択したことだったりしますw
式神に任せて逃げればよかったんだ（何）

＞楓さん
多分一番美味しい所を持っていった人w

＞複合骨折
ようは、一本の骨のあっちこっちがへし折れてる状態ですね。
「複雑骨折」は折れた骨が外に飛び出してるような折れ方やそうです

（Ｗｉｋｉより）

……勉強になるなぁ。

第１９話：そして、修学旅行２日目の早朝の話（前書き）

きりがいいのでここまでで１話とする事に。
何かどんどん分量が減ってる気がする……

第19話：そして、修学旅行2日目の早朝の話

桜咲刹那が目を覚ませば、そこは見知らぬ一室であった。
額に何か（恐らく呪符）を貼り付けられており、両手足は身動きできないように
椅子に縛りつけられ、椅子そのものが固定された状態である。。
ご丁寧に猿轡まで噛まされており、まさに拉致られた典型ともいえる状態である。

私は……不甲斐ないっ！！

猿轡越しに唇をかみ締める桜咲。
月詠を名乗る同門剣士との戦いにおいて、敗北を喫してこの有様である。
両者の実力はほぼ拮抗。しかし、電車内と言う限定された空間において野太刀は取り回しが
悪く、そして桜咲自身にも余裕は無く。負けたのはある意味必然とも言える。

「ようやっと、目を覚ましたみたいどすなぁ？」

声の方向を見れば、黒髪に眼鏡をかけた大人の女性の姿。
……昨日、ホテルの従業員に成りすまして木乃香お嬢様を攫おうとした女。
そして、自分がまんまと一杯食わされた女だ。

声を上げようとするが、猿轡で声も出ず。
それでも殺気を込めて睨みつける。

「おぉ、怖い怖い。せやけど、今のあんさんは気も使えんし力も入らんはずや。
ついでに言うたら、その縛ってる縄も中にワイヤー仕込んだ特別製や。そうそう切れまへんで。
天下無双の神鳴流相手には、これでも不足なぐらいなんやけどな。」

貼り付けられたこの呪符がそれか、と当たりをつける。
実際、何か薬を打たれたかのように力が全く入らないのだ。
気すらも練れない状態であり、独力の脱出は……いや、一つだけ手はある。
しかし、ここで抜け出した所で敵戦力が不明である以上は無意味に終わる可能性が高い。
更に言えば、恐らく再び月詠が立ちふさがる事になるだろう。
無手でも戦えるのが神鳴流とは言え、ほぼ同格で且つ獲物が二刀の相手では荷が重過ぎる。
それに、こうして殺される事なく捕まったままと言う事はまだ自分に利用価値があると言う事。

お嬢様との人質交換要員と言うことか……

「まぁ、大体あんさんが想像してる所で正解や。みっともない話やなぁ？
助けるつもりが捕まった挙句に、取引材料に早変わりするんやから。
ウチやったらとっとと舌噛んで死んでるところやわ。」

そう出来るならそうしたい所ではある。
しかし、向こうもそれくらいは分かっていて猿轡を噛ましているのだろう。
今自分が出来るのは、ただ睨みつけるだけなのだ。

「さて、ここに来た本題はこんなアホな事言いに来たわけやない。ちょっと欲しい物があって貰いに来ただけや。」

……欲しい物？こちらの情報か？
最も、一つたりとてくれてやるつもりは無いが。

「まぁ、ちゃっちゃと終わらせましょか。」

そう言って、その女は懐に仕舞っておいた短刀を引き抜いた。

「……と言うのが昨日一日の流れです、学園長。」
「むぅ……」

夜が明けるまで事後処理で忙しく、ろくに寝る暇も無かったネギ・スプリングフィールドです。
近衛さん助けに行く為に、途中で瀬流彦先生に丸投げしたホテル内に貼り付けられていた
式神召喚符の処分を手伝ったり、ホテルの破損した箇所を人知れず修復したり、
龍宮さんの腕を治療したり、一息ついてから瀬流彦先生に報告入れたり。

３０分ほど仮眠で熟睡してたらもうすぐ夜明け、学園長に連絡を入れてる所でございます。

「それで、応援の方は何とかならないんですか？」
「むぅ……それは分かっておるのじゃが、人手が足らんのは分かっておるじゃろう？
主だった魔法先生は修学旅行の引率とかで動いておるしのぅ。旅行

先で何があるかわからん
以上は迂闊に動かす訳にもいかん。」
「今現に、ここで大事になってるんですよ？　それでも動かせないと言うんですか？」
「それは分かっておる。しかし、他の生徒達の安全を蔑ろにするわけにもいかん。
ましてや学園内の警備の人員の問題もある、応援の抽出には時間をくれい。」

いや、今すぐに戦力が欲しいんですがほんと。

「あのですね。さっき報告したとおり、来た当日新幹線で移動してる段階から妨害工作を
受けて、夜には学園長の孫娘である近衛さんまで攫われた。それは阻止しましたが、その結果と
して護衛役の桜咲さんが攫われる事になってしまった。時間の余裕があるとお思いですか？」
「ネギ先生の言いたい事はよくわかる、よく分かっておる。しかしじゃ、無い袖は振れん。
ワシとて木乃香や桜咲君を蔑ろにするつもりなど全くありゃせんわい。そこまで西が大手を
振って行動に出た以上、こちらから魔法先生を追加で派遣するだけの名分もある。
一人も送るつもりも無い、などとは言っておらん。時間をくれと言っておるんじゃ。」

……これ以上は平行線だな、正直。
しょうがないので話題を変えることに。

「それでですね、親書の件はどうすればいいですか？

こうなった以上は特使だ親書だというレベルではなくなってると思うんですが。」

「……うむ。とは言え、木乃香の拉致が西の総意ではない事は間違いないんじゃ。

恐らく、婿殿も止められんかったのか跳ね返りが独断で暴れておるのか……」

「どちらにせよ、この状態では親書を持って行く時間が取れそうにありません。

相手も相当の手練れが揃っているようですし、生徒達を放って置くわけには……」

実際、龍宮さんの腕は大変な事になってましたからね、あれ。

呪符で拘束されて締め上げられた挙句にああなったそうですが、見てるだけで痛かった。

結局直すのに【文珠】使って「あの料金はこれの口止め料込みね」と言っておきました。

まぁ、治療用アイテムだと思ってくれたみたいですので大丈夫とは思いますが。

そこまでの事をやらかす術者に桜咲さんを倒せるだけの神鳴流剣士が一人。

龍宮さんと長瀬さんに確認をとっても、桜咲さんは決して弱い訳では無いらしい。

カモ君の意見もそれを裏付けているし。

白髪の西洋魔術師は倒した……死んではいないが、復活に時間はかかるだろう。

それにしても、あれで全員とか言うことは無いはず。後2，3人は想定する必要がある。

俺が親書を持って行っている間に生徒が大変な事に、と言うのも勘弁して欲しい。

近衛さんをピンポイントで狙ってくる可能性のほうが高いけど。

「ううむ……こうなった以上は、木乃香を実家の方へ連れて行った方が良いかも知れん。」
「実家？総本山ですか？」
「うむ。おかしな話になるが、総本山の結界はそう易々と打ち破れる物でもないじゃろうし、
その守りを固めておるのは、婿殿の派閥の人間ばかりじゃ。誘拐犯達とて目的の為に総本山
を攻めるとなれば、躊躇するじゃろうし場合によっては行動の中止もありえるしの。」

そう上手くいくか？
と言うか、それってつまり……

「ようは、西の穏健派に護衛を丸投げしちまうんですね？」
「手が足りんと言ったのはお主じゃぞ？修学旅行終了ぎりぎりまで木乃香を預けておいて、
他の生徒の護衛に専念しやすい環境を用意しようとしておるだけじゃ。」

そりゃそうですけどね。
本末転倒と言うか……何と言うか。

「では、その辺の調整をお願いして宜しいですか？結局、総本山に連れて行く必要がある以上は、俺は一時生徒達から離れる必要がありますが。」
「その必要には及ばん。婿殿の方から迎えをやらせるようにする。なので、迎えが来るまでは
木乃香の傍を離れずに護衛に専念してもらいたい。」
「それだと他の生徒達の護衛までままならなくなりますが？正直、

瀬流彦先生だけでは荷が
重すぎるでしょう、人員的な意味で。」
「うむ、そうじゃな……どうしたものか……。」

奈良での自由行動だっけか、今日は。
流石にバラバラになると護衛どころの話じゃねーぞ。
……いや、待てよ。

その時、俺の脳裏に天啓の閃き走る！

「学園長、至急準備していただきたいものがあるんですが。」
「なんじゃ、急に改まって。」
「いえ、こればかりは俺一人でどうにかなる訳でもないんで。恐らく西の手を借りる事に
なるかも知れないし、生徒たちが奈良へ動き出すまでにやって頂きたいんですが……」

そう言って、概要を説明する。

「ネギ君、君と言う男は……何と言う事を考え付くんじゃ。」
「しかしですね学園長、この現状でこれ以上生徒達に被害が出にくい手段を考えた結果です。
勿論、費用が掛かるというなら俺も自腹を切りましょう。時間に関してはこういう言い方は
したくありませんが御身内の危機でもあるんです、急いで頂けると信じております。」

多分、学園長は自分の机で長い頭を抱え込んでいると思う。
……いや、俺も他人からこんなアイデア出されたら頭抱えるだろうが。

修学旅行の趣旨からは思いっきり反しているがこの際止むを得ない！
悪いのは西だ、西を怨めっ！！後、学園長も怨めっ！！

この場合は俺が恨まれても文句は言えないけど……。

「止むを得ないじゃろうな。早急に手配させてもらう事にするわい。
婿殿の方にも連絡を取って
動いてもらう必要があるわけじゃし。その流れで木乃香を保護する
事にすれば問題なかろう。」
「……ただ、この手だと総本山に連れて行けなくなるんですが。」
「それもそうじゃな……まぁ、その辺は婿殿がどうにかするじゃ
ろうて。」

丸投げかい。
まぁ、俺も護衛に就くつもりではいますけど。

「では、その方向で宜しくお願いします。それで、次に桜咲さんの
件ですが。」
「むぅ……」

話さないわけにもいかんだろう。

「敵に連れ去られた以上、恐らく人質にすると思われますがどのよ
うにしたらいいですか？
ぶっちゃけ、近衛さんを取るか桜咲さんを取るかですが。」
「……両方助ける、と言う選択肢がお主には無いのかの？」
「勿論、助けられるなら助けたいですが……最悪の可能性を予想
してるだけです。」

下手したら、頭の中弄くられて廃人になってる可能性もあるからな

ぁ。
いや、そうなったら人質交換どころの話でもなくなるんだけど。
「それで、如何致しましょうか？もし、人質交換になった場合の対応ですが。」
「その場合は両方を助ける事を前提に動いてもらいたい。」
「いやですね、学園長？」
「無茶を言っておるのは分かっておる。じゃがどちらかを切り捨てるなどワシにはできん。
無論、それは婿殿も変わりないじゃろう。その事を念頭において対応してもらいたいのじゃ。」
「わかりました、可能な限り善処したいと思います。」
まぁ、西の穏健派が動くなら最悪そっちに丸投げって訳にも行かんしなぁ。
とは言え、人質交換で両方助けろとか……ちと考えるとするか。
基本相手がイニシア握ってるから、対応難しいんだけど……。
「学園長、最後にもう一つだけ。最悪、近衛さんに魔法の事をバラします。構いませんね？」
「……止むをえんじゃろう。婿殿の方にはワシの方から言っておこう。
じゃが、できるだけ魔法バレは控えるようには言っておくぞい。」
「了解です。前向きに善処するようにします。」
とは言え、こうまで大事になると魔法バレなしとか無茶振りだろう。
そう思いつつも、西側の連絡先を聞いたりしてこれから先の打ち合わせをする事に。
瀬流彦先生も呼んで来ないと……ここからは時間が勝負。

第19話：そして、修学旅行2日目の早朝の話（後書き）

ほとんど学園長とネギの喋くりだけで終わってるというw

後、ネギが何をやらかす事を頼んだのか。

大体見当はつくとは思いますが、自重しようね皆（何）。

＞増援

味方の増援はすぐに来ないのがお約束（おい）。

もしくはヘリごと撃墜されたり、「うわー、もうだめだー！」だったり（待て）。

まぁ、各地に修学旅行行ってる生徒たちの護衛とか、麻帆良自体の警備も

あるでしょうしすぐに戦力寄越せ、ったって無理でしょという事で一つ。

＞おかしな話

西の襲撃から身を護る為に西の本拠地に立て篭もる為に乗り込むわけですからねw

意思統一できて無いならではといいますが。

＞人質交換

木乃香とせっちゃん、片方だけ助けても絶対助けられた方が後悔するでしょうしねぇ。「自分のせいで……」と。

＞できるだけ

「バンバンばらしちゃいなさい」とも言えませんし、立場上。

「押すなよ！押すなよ！」のレベルです正直w

第２０話：そして、ホテル嵐山での話（前書き）

先にお断りしておきます。
作者は色々詳しくないので、適当で書いています。
ですので「それはおかしい！」と言う箇所も出てくるとは思いますが、
大らかな気持ちで流していただけると幸いでございます。

今更何言ってんだ、といわれるとその通りですが（苦笑）。

第２０話：そして、ホテル嵐山での話

４／２３（水）

修学旅行二日目。
麻帆良学園女子中等部の宿となっているホテル嵐山では、ちょっとした混乱が起きていた。
とは言えパニックと言うわけではなく、秩序ある混乱とでも言うべきか。

一言で言えば「修学旅行どうなっちゃうの！？」である。

ホテル嵐山で、一体何が起こったのか？
ここはある１人の女生徒の視点でその経緯を追ってみることにしよう。

麻帆良学園女子中等部３－Ａ、神楽坂明日菜が目覚めたのは朝の４時ごろ。
普段目覚める時間からすれば中途半端な時間ではあるが、他所に泊まればそんなものである。
それに、どうも雰囲気がおかしいのを感じ取ったのだ。

外が騒がしいというか何と言うか……

身体を起こし、辺りを見回せばまだ就寝中の班員達の……一人足りない。
桜咲刹那。エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルと絡繰茶々丸の急な転校によって
こちらの班に編入されたクラスメイト。

友人である近衛木乃香によれば、幼馴染だという。
しかし、それにしては愛想も何も無いし避けている節がある。
寂しそうな木乃香の顔を見て、どうにかならないかとお節介を焼いたりもしてるのだが……

トイレかしら、と思いながら起き上がり部屋の玄関の方まで皆を起こさないように歩く。
当然、刹那の靴はなく。
しかし、部屋の外一つまりホテル内一のざわめきは一体何なのだろう？
もう皆起きだして来たのだろうか？にしては早すぎるし……

そんな事を思いながらドアを開けた彼女は、担任教師に出くわしたのだ。
ネギ・スプリングフィールド。2年の最後の方になって愛しの高畑先生の代わりに担任になった新人外国人教師。その日本語のペラペラぶりは「あれ、先生って日本人だっけ？」と思わせるぐらいである。

クラスにおける彼の評価はそう悪い物ではない。
少々説教癖があり、歳を取れば新田先生みたいになるんじゃない？とか言われているが
基本的に生徒の事はちゃんと考えていてくれているし、何かあれば頼れる先生である。
何より、背もあってハンサムだし。そんな所がクラスの総合評価である。

「あ、おはようございます先生。」
「おはよう、神楽坂さん。今ちょっと立て込んでいてね、部屋に入

っておいた方がいいよ？」
「あの……何かあったんですか？」

よく見れば、彼自身もどこか忙しそうではある。
そもそも、部屋に入っておいた方がいいとはどういう事なのだろうか？

「うーん、後で詳しい事は放送で説明するから。今は部屋で大人しくしているように。」
「え、でも桜咲さんが。」
「あぁ、それを含めて君達の班には後で説明がいくと思うから。」

それじゃ、先生もちょっと忙しくてね。そう言って去ってしまうネギ。
その様子に首を捻っていたが、自分は特にトイレに行きたい訳ではないし、向こうも
終わったら戻ってくるだろうと考えて部屋に引っ込み、二度寝を決め込む事にしたのである。

そして、揺り動かされる感覚とルームメイトが呼ぶ声で、神楽坂は再び目を覚ます。

「アスナ、アスナ、大変や！」
「うーん、どうしたのよ一体……」

携帯電話を引き寄せて時間を確認すれば、もうすぐ7時。
よくよく耳を済ませてみれば、放送が流れていて……

『……と言うわけで、このホテル嵐山にご滞在の方は事態が収拾するまで外出の方を

見合わせて頂くことになります。また、医療スタッフが健康検査の為に各部屋を……』

がばっ、と飛び起きる。
何だこの放送は!?

ぐるりと見渡せば、寝ていたのは自分だけらしい。
不安そうな宮崎と近衛、何を考えてるか読み取れない綾瀬、まいったなーと言う感じの早乙女。

「これ、どういう事？」
「……伝染病の発生です、アスナさん。」

彼女の疑問に答えたのはバカリーダーこと綾瀬夕映。

「で、伝染病？」
「はい。このホテルの従業員が新型インフルエンザに感染していたそうでして。
従業員が働いていたここの全員に同じく感染の疑いがあるそうです。
その為に、外出禁止と
健康検査があることを放送しているのですが……」
「つまり……どうなるの？」
「一言で言えば、修学旅行の中止です。」

身もふたも無い綾瀬の発言。
思わず「な、なによそれー！」と叫んだ神楽坂に罪は無い。

「それで、せっちゃんがおらへんのや。アスナどこに行ったか知らん？」
「え、まだ戻ってきてないの!?」

そう言えば、桜咲の姿が無い。

「確か、昨日の晩は同じ時間に就寝したはずですが……」

「トイレとかじゃないの？」

昨晩の事を思い出そうとする綾瀬と、早朝の神楽坂と同じ事を言う早乙女。

「４時ごろ目を覚ました時にはいなかったわよ、桜咲さん。」

「そしたら3時間もおらへんことになるやん。どないしたんやろ……」

クラスメイト、それも近衛にとっては幼なじみ。

それが長時間の間姿を見せないというのは不安ではあるに違いない。

ましてや、この状況なら尚更である。

「あ、でもネギ先生が後で事情を説明しに来るって言ってたわよ？外せない用事が出来たとか？」

「早朝４時……いえ、それよりも早い時間にですか？」

「そ、それもそうよね。」

早朝の出来事を思い出して、推測してみるが綾瀬の一言で撃沈。

「まぁ、先生が説明に来るというのであれば了解済みなのでしょう。それに、もしかすれば……」

「も、もしかすれば？」

考え込む綾瀬に、不安そうな顔を隠せない宮崎が尋ねる。

「いえ、あくまでもこれは推測です。今は語るべきことではありません。」

そう言って口を噤む綾瀬であった。

宿泊先であるホテル嵐山を、医療スタッフに扮した関西呪術教会穏健派の方々が封鎖に見せて防衛網を構築してたりするのをロビーで見学してるネギ・スプリングフィールドです。

……電話で打ち合わせした詠春さん曰く、信用できる人材だけを動かしたとの事。

まぁ、漏れれば漏れたでそれでも構わないっちゃ構わないんですが。

ようは、生徒達にはそうそう手が出せないという状況さえ作れればそれで構わないんです。

こんな所で油売っててていいのかと思われるかもしれませんが、一仕事終えて休憩中です。

西の人と打ち合わせしたり、一緒に5班の方には説明しに行ったり。

感染症である以上、全員を個室に押し込む必要があるのでその手配をやったり。

流石にこのホテルに全員分の個室は無いので、穏健派の息の掛かったホテルに半分以上を押し込めることにしました。ここよりでかいホテルでしたし。

そっちの方の警護には、さしあたって学園長が抽出できた増援の魔法先生にお願いします。

こういう事態になりましたし、先生が追加で来てもおかしくはないですからね。

詠春さんが信頼できる戦力は軒並みあっちこっちに出払ってる状態だそうですし。

桜咲さんは夜中に調子が悪いと訴え出て病院に担ぎ込まれてる事にしました。

基本、ホテルの部屋から出ないようにしてありますので桜咲さんがいなくなった事を他の班が
知ることは極めて難しいです。知り合いである龍宮さんと長瀬さんはこっち側ですしね。
内密に、とは言いましたが「実は感染源は桜咲さんじゃ？」と思うのは個人の勝手ですし。
そこから話が伝播する分は責任取れません、俺。

……あれだ、捕まったのが失敗でしたねと言う事で一つ諦めてもらいましょう。

「しかし兄貴、とんでもねーこと考えたっスね。
確かにこれなら1箇所で生徒達を守れるのは間違いないっスけど……」
「他に手がなかったんだ、カモ君。
これだけの生徒をばらばらの状態で気を配れと言っても無茶すぎるよ。」

本来なら俺も個室待機なんですけどね。
まぁ、そこはそれ。教師である前に魔法先生ですから。
その辺の誤魔化しはちゃんとやってあります。

「でもよ、やっぱ仮契約してた方が良かったんじゃないっスか？
いざとなりゃカードの効果で従者を呼び出す事だってできたんっス

から。
それに、アーティファクト次第じゃあの女倒すのだって余裕だったでしょうし。」
「……結果論だよカモ君。それに、呼び出す前に倒されてる可能性だってあるしね。」

そうこう言ってると、龍宮さんがやって来ました。
彼女と長瀬さんに関してはこっちから「うちの関係者です」と言う事で説明してあります。
この辺は瀬流彦先生とも打ち合わせ済み。
長瀬さんの扱いだけちょっと揉めましたけどね（魔法生徒でも無いので）。
まぁ、何とかしました。事件に関わってる事は間違いないし、人手無いのも事実なんで。

「しかし、とんでもない事をやらかしてくれたもんだね。ネギ先生。」
「君もそれを言うのか龍宮さん……」

と言うか、電話時に詠春さんにも同じような事を言われてます。

「確かに効果的な事は認めるさ。要は陣地を構築して立て篭もると言う事なんだから。
しかし先生、教職者としてこれはどうなんだろうと私は思うんだけどね？」
「拙者も同意でござるな。ちとやりすぎではござらんかと思うのでござるが。」

長瀬さん、いきなり現れるのは止めてください。

「……そうは言うけどね。生徒達を一つに集めてかつ守りやすい方法、と言うのが俺にはこれしか思い浮かばなかったんだ。ついでに言えば、この流れで近衛さんも安全な場所に保護する事が可能になるしね。まぁ、誤算があったとすれば感染症患者は個室に隔離って事を知らなかったことだけど。」

そう言って苦笑します。まさかそんな事になってるとは思わなかった。

……常識で考えりゃそりゃそうだわな。

「確かに君達の修学旅行をぶち壊した事はすまなかったと思ってる。ただ、生徒達の安全を考えればこれしか手がなかった……自分にはね。

そもそもハワイにしてれば今頃ワイキキビーチでのんびり出来てたんだけどねぇ……」

溜息を付く俺。

確かにこんな事やらかした俺にも責任はあるが、京都とか無茶振りした学園長も悪い。

「まぁ、先生いじめはこの辺にしておいて、だ。これからはどうするんだい？」

「何かしらやっている所を見ると、早々昨晩のような事にはなりそうにはないでござるが。」

とは言え、油断は出来ないしなあ。

昨日の結界もちょっとやそっとじゃ解けないような奴を組んだつもりだったんだけど。

構築した俺が気づかないレベルで結界を解除するとかどんな奴だよ、全く。

「それでも昨日俺が戦ったレベルがくる可能性はあるから、油断はできないんだ。
俺はこれから行かなきゃならない所があるから、瀬流彦先生とホテル内の守りを任せたい。
ただ、白髪の少年が出てきたら無理に戦わなくていい。最悪逃げても文句は言わない。」
「そこまで強いのかい？」

龍宮さんが聞いてきます。

「障壁の硬さが半端じゃなかった。後、石化魔術と中国拳法の使い手だよ。
水を使ったゲートまで使うから相当な術者だと思っておいた方がいい。
一応、心臓を突き刺しておいたんだけど……あれで死んでるとも思えないからね。」
「普通は、心臓刺したら死んでるのではござらんか？」
「まぁ、それだけ厄介な相手だということだな。了解した、肝に銘じておくよ。」

瀬流彦先生にも少年の件は伝えてあります。
まぁ、二人と違って死んでも戦ってもらわないと困りますが。
勿論そんな事は言ってませんよ？

「それで一体、どこへ行くんでござるか？」

そう聞いてくる長瀬さん。

「この流れで護衛対象をより安全な所に運んでしまおう、って話だよ。」
「なるほどね。近衛に感染の疑いがある、と言う事で病院に搬送するようにみせる腹か。」

その通りです。
正確には、病院に搬送するように見せかけて総本山の方へ連れて行くそうです。
詠春さん自らが動いて、近衛さん連れて行くとか。
ここに至って、魔法バレ無しで押し通すのは無理と判断したんでしょう。
念の為と言うか、一応俺もついて行く事になってます。
……親書、渡すのか？　この状況じゃ渡さなくてもいいだろ、いやマジで。

「と言うわけで、自分は近衛さんの同伴と言う形で向こうに付いて行く事になるんだ。
そのまま、向こうの方に残らせてもらうのかこっちへ帰ってくるのかはちょっとわからない。
もし、何かあったら連絡は携帯の方に入れさせてもらうよ。」

そんな感じで打ち合わせしてるとカモ君が声をかけてきます。
ただし、龍宮さんと長瀬さんに。

「そんな訳で姐さん方、うちの兄貴と仮契約とかどうっスかね？
便利アイテムなアーティファクトとか、通信機能とか召喚可能とか特典満載っスよ？」

なんと言うか、どこの営業だよお前。

「オコジョが喋ってるでござるな。」
「正確にはオコジョ妖精と言うケット・シーに並ぶ由緒正しき妖精なんだがね。
悪いが、あくまでも雇用関係だからね。そのつもりはないよ。
それにオコジョ君、後ろに気をつけたほうがいい。」
「へっ？」

振り向いたカモ君が見たのは、専用収容所……もとい作っておいた檻でした。
どうしても彼は入りたいそうです。

「いや兄貴、ちょっと待ってくだせぇよっ！！俺っちはただ兄貴の事を考えて……」
「言ったよね、カモ君？そのつもりはないって？
……まぁ、今はそれどころじゃないから見逃すけど、次は無いよ？」
「りょ、了解っス！」

ぴしっ、と敬礼するカモ君ですが何日持つやら……

「意外と優しいね、先生は。」
「いいや、今はオコジョ妖精の手を借りたいくらいに忙しいだけだよ。」

いや本当に。
さて、そろそろ近衛さんを搬送する頃だし動き出さないと。
しかし、微妙に一手足りないんだよなぁ。
穏健派の中に間者の一人や二人いる事覚悟して動かないとダメだし……。

詠春さんを信用していない訳ではないが、何事も最悪を想定する必要がある。

しゃーない、宝物庫の中の『アレ』を使おう。詠春さんにも許可取らないとダメかなぁ。

とは言え、どうやって説明するよ？冒険者時代に遺跡で拾ったことにするか？

……それしかねーな。

また説明するのが面倒だよなぁ、とか思いつつ俺も行動を開始することに。

この件、向こうが動かないと反応のしようが無いんだよなぁ……

受身は辛い。

第２０話：そして、ホテル嵐山での話（後書き）

スーパー西穏健派タイム（嘘）。
独自設定ばら撒きまくりでございます。

最後にこのネギが何をやらかす事を考えたのか（何を使う気なのか）。

これは俺がこのせっちゃん誘拐イベントの流れ的に色々考えた結果出した答えでございます。
流石にそれは無いわ、と後に言われるかもしれませんがチートのやる事なんで勘弁してくださいと言わざるを得ないことを予め申し上げておきます。
多分、ネタばらしするときにも同じ事を言うと思いますが。

＞普段より中途半端
ありません、そういうの？
……俺だけか。

＞ホテル
こういう時のホテルは基本貸切……のはず（もう修学旅行なんか覚えて無い）。
まぁ、女子中学生の団体が泊まってて貸し切りじゃないのはないわ、とも言うｗ

＞あくまでもこれは推測～
名探偵綾瀬誕生！……嘘です。

＞個室に
修学旅行に京都行ったのが5クラスだから×３１人で１５５人。
教師とか従業員の数を含めるともう少し多いですが、それでも２０
０人はない。
あのサイズのホテルにそれだけの部屋あるかどうかは甚だ怪しいの
ですが……ｗ
今ざっと調べたら客室数６０室……まぁ、そんなもんだよなぁｗ
と言うわけで、こんな形になってしまいました。
微妙に本末転倒かも知れませんが、ご都合主義が発動したという事
でここは一つ。

＞隔離されるとどうなるの？
以前隔離された高校生達の場合ですと、個室での生活となりまして、
そこで１日１回の検診があって、それとは別に１日３回の検温など
健康状況の
報告が義務付けられるそうです。
勿論食事も個室。他の部屋やフロアへの移動は禁止。
洗濯室などに行く時はマスク着用の義務があるとか。
後、退屈でしょうがないそうですｗ（ＴＶを見るしかやる事がなか
ったそうで）

＞ホテル２箇所
実質戦力分散してどうするよ、と思われるかもしれませんが
この先狙われるとしたらほぼ３－Ａの生徒であると考えての行動で
す。
ちなみに、学園長が出した魔法先生は特に名前の無い先生です。
本当に取りあえず身体の空いてる人間を出した、と言う感じですね。

＞西の穏健派（詠春さんの）戦力
戦闘力があるやつは軒並みいない、ですね。

結界とかその辺構築できるようなのはいると思って下さい。
と言うか、あの巫女とかただの素人じゃないだろｗ

＞すまなかったと思ってる
しかし、私は謝らない。とかやったら間違いなくぼっこフラグ（おい

１０／１１日
施設やめて総本山にすることにしました。
俺自身が納得できなかった事が理由でございます。
西が所持してる施設ならあからさまに情報駄々漏れでしょうし、
第三者が施設を持ってるという状況も考えづらい。
（金さえ貰えばどこでも匿う、とかそれもどうよと思いますし）
「吸血鬼退治の繋がりで他所の組織の場所貸してもらう」と言う案も
考えたんですが、わざわざ借り作るかなと考えると疑問符で。

第２１話：そして、千草一派と脅迫状の話（前書き）

番組の最後にそれほど重大でもないお知らせがございます。

第２１話：そして、千草一派と脅迫状の話

第２１話：そして、千草一派と脅迫状の話

天ヶ崎千草一派（と言っても監視役含めて４人なのだが）は、とある一軒家に身を潜めていた。
とは言え辺鄙な場所に家がある訳でもなく、極めて街中にあるどこにでもある家である。
近くには商店街もあり、どこへ行くにも交通の便が良い極めて優良な物件と行って良い。
そんな一軒家の朝の出来事。

「今帰ったでー。」

ドアをガラッと開けて、学生服姿の少年が姿を表す。
彼の名は犬上小太郎。人間と狗族のハーフであり、狗神使いと呼ばれる存在でもある。
彼が彼女と共にいる理由はそれほど複雑な事情、と言うわけでもない。
西洋魔術師が気に入らないと言う点と、千草とある程度繋がりがあったと言う点だけである。

部屋の隅で現在戦利品の刀の手入れ中の月詠も依頼を受けた理由は大したものではない。
「人が斬れて報酬が貰える」仕事を請けたというぐらいである。
元々神鳴流においても、対人を想定した二刀の使い手である彼女は異端の存在である。
その刀の使い方も相まって、自然と仕事もそのような物が多いのだ。

「どないやった、小太郎はん？」

さっきまで朝飯の片付けをしていたのか、和服にエプロン姿の千草が状況を尋ねる。

今日一日の行動方針を決める為、ではないがホテルの方へ偵察へ行かせていたのだ。

「なんや、千草ねーちゃんＴＶ見てへんのかいな？ラジオでもかまへんやろうけど。」

「……どういうことや、それ？」

不審がる千草に、小太郎は黙ってＴＶを付ける。

そこで放送されているのは、新型インフルエンザが某ホテルで発生したとのニュース。

ホテルの名前は言っていないし、場所もぼかしてあるが見る人間が見ればはっきり分かる。

そう、ホテル嵐山である。

「な……どういう事や！」

「いや、どういう事も何もそういう事や。今、ホテルは完全に封鎖状態で誰も出入りでけへん状況や。と言うより、結界張り巡らせて立て篭もる気やで、あれ。」

思わぬ話の展開に唖然となる千草。

当初の予定では相手側の自由行動時を見計らって、直接脅迫状を渡すつもりだったのだ。

昨日の今日で上手く行くとは思ってはいなかったが、こんな事になるとは想定外である。

「結界張り巡らせて、言うて術式はどっちどすか？」
「西や。陰陽術による結界の構築やな。ちらほらとそれらしいのも外におったしな。」
「言う事は、あちらさんは長に連絡取ったと考えた方がよさそうですなぁ……。」

小太郎から張り巡らせた結界の術式を確認して、大よその事態を推測する千草。
昨日の感じからしても、東には最低限の護衛しかいなかったようではあるし、恐らくは
事件の後で西の長と連絡を取り合って協調関係をとる事にしたのだろう。

「で、どないすんや千草ねーちゃん。こないなってもたらあいつら出てこうへんで？」

考え込む千草。
ホテルが閉鎖されている以上、外部からの接触はほぼ不可能に近い。
いや、魔法関係者がいないのならば入りようはあるが、この状況でそれはないだろう。

「……せや、小太郎はん。結界の強度はどないな形でした？」
「俺が見た所は『少々しんどいけど、破る事ができんわけやない』言う感じやなぁ。」

つまり、あくまでも外の結界は強固にはできていないという事か。
こういう場合は中にも防衛網が敷かれているだろうが、東からの増援は昨日今日で大挙して
押しかけてはこないだろう。ニュースを見る限り、修学旅行の生徒

達は数箇所のホテルに分散
して隔離されるようであるし、自然とそちらの護衛にも回らなければならないはずだ。

一方、西は西で主だった戦力は出払っている状況である。掌握派が手を回した結果であり、
さらに言ってしまえば発案したのは千草である。
修学旅行中に東と西の穏健派で協調関係が作られた時に、直に動かせる戦力が残っていれば
誘拐の成功確率はぐっと下がるから、と。
結果、西の戦力は現時点では極めて低いといわざるを得ない状況なのである。
そういう意味では、確かに結界もそれほど強固なものにはできないだろう。

結果として、木乃香お嬢様を守るならどのホテルにせよベターではあるがベストでは無い。
となると総本山に運ぶしかない。
この状況から、総本山に運ぶとなると恐らく不審がられるであろうが、結界の硬さだけで
言ってもあそこ以外に立て篭もるのに相応しい場所は存在しない。

一度総本山に入られてしまうと厄介なのではあるが……。
最悪、脅迫状を総本山に送りつけるという真似をしなければならなくなる。
そうなれば『サムライマスター』近衛詠春が直々に出張る可能性もある。
往年の実力は無いにせよ、決してさび付いてはいないはず。
こちらの前衛二人で押さえられるかどうか……
と言うよりは、むしろ中に入られてしまえば人質はいらなくなって

しまうのだ。
最終的な切り札として仕込んでおいた札を切ればそれで終わりなのだから。
自身の魔力だけではなく、総本山の魔力を利用して起動する切り札を。

とは言え、あくまでも最後の手段。切り札は最後まで置いておきたい。
何しろ、この手段を使えば天ヶ崎千草は終わりを迎えてしまう。
目的の為に命を惜しむつもりは無いが、簡単に投げ捨てる命でも無い。

「ともかく、あのホテル見張って出入りの人間確認せなあかんわ。恐らく、救急車で堂々と表から出すつもりやろうけど……」

そう自分の考えを述べる千草。
そこでふと、一人足りない事に気が付いた小太郎。

「なぁ、あの薄気味悪い西洋魔術師はどないしたんや？連絡来てないんか？」
「昨日ホテルで別れてから連絡はまだあらへん。ちょっとやそっとで死ぬタマやないと思ってるけどな、ウチは。」
「それやったらええんやけどな。正直俺、あいつ好かんし。」

歳こそ同年代っぽいが、なんと言うか……人形か何かと相手してる気分になるのだ。
勿論、受け答えはちゃんとするしコミュニケーションに問題は無いのだが。

「まぁ、現状は3人でやるしかあらへん。月詠はん、お仕事でっせ。

」
「それはいいですけど、先輩はどうしますんですー？」
ちらり、と客間の方を見る月詠。ようやく現実に帰ってきたようである。
同じくそちら側を見てから、千草は判断する。
「ま、逃げようにも逃げられへん状態やろうし、眠らせておいたらええやろ。
小太郎はんは先に行っておくれやす。準備できたら追いかけますさかい。」
「できるだけ早めに来てや？何かあったら俺一人で出来る事限られてくるで？」
そういい残して、小太郎は家を出る。
残った二人も準備を整え、戸締りを確認してから彼女に貼り付けてある呪符を起動させる。
ばちっ、と言う感電するような音が客間の中から聞こえてくる。
くぐもった声も聞こえてきたが、気にする人間はいなかった。
そして、到着したホテル嵐山。
案の定と言うか、報道関係者と好奇心旺盛な野次馬が取り巻いている状態である。
まぁ、近づける訳ではないのであるが。
そんな彼らに埋もれるように、千草一派はいた。
勿論、認識阻害符を使用して目立たないようにはしている。
「なるほどな……確かに『少々しんどいけど、破る事ができんわけやない』やな。」

「せやろ？」

結界を直に確認する千草。

あくまでも小太郎基準ならばそうではあるが、自分ならば余裕と言った所であろうか。

最も、その後を考えるとそんな事はしないわけだが……。

「それで、千草はんどないしますん？中に入って斬って斬って斬りまくりますかー？」

新しく手に入れた刀の試し切りをさせろとばかりににこやかに尋ねる月詠。

よく見れば、彼女の刀が一本野太刀になっていることがわかるだろう。

「それは最後の手段や。当面は穏当な手段で解決目指しますえ。」

「誘拐の段階で物騒なんやけどな。」

千草の発言に思わず突っ込んでしまう小太郎。

そうこうしていると、救急車のサイレンの音が聞こえてくる。

「どうやら、ホテルだけやったらまにあわへん人が出たようですえー。」

携帯でニュースを確認し、報告する月詠。

「言う事は、木乃香お嬢様はこの救急車に乗るんか……？」

千草はそう考えるが、向こうとてこちらの動きくらいは読んでいるだろう。

もしかすれば、これはフェイクの可能性とてある。
『切り札』は切れる時が来るまで、完全に伏せた状態になっており
仕込んだ自分でも
再確認する事はほぼ不可能なのだ。

「しゃあない。小太郎はんはあの救急車を追いかけて、確認できる
なら中の人間の確認や。
ええか、絶対に無理はしたらあかんで？」
「そんな事わかっとるって。じゃ、言ってくるわ。」

一足飛びに追いかける小太郎。
朝とは違い、ちゃんと通信用の呪符も持たせてあるし問題ないだろ
う。

「それで、ウチらはどないするんです？」
「せやな……一先ずは、中の確認や。ちょっと周り見とってや。」

そう言って周囲の警戒を月詠に任せ、精神集中。
彼女がやろうとしているのは他人の式神の視界を乗っ取る事、であ
る。
生徒がそれぞれ隔離されている以上、その様子を確認するのに一番
手っ取り早いのは
式神を用いて部屋の様子を確認することだと思ったのだ。

ラジオか無線の周波数を合わせるように慎重に魔力の流れを辿って
いく。
式神を操作している人数はそれほどいる訳ではないはず。
一つ捉えれば、芋づる式に引っかかるはずである。

そして、辿り始めて5分後。

ようやく式神を操作している魔力を確認し、そこへ目立たないように介入する。
幸いにして、式神使いとしては相手は1流でもないようで、あっさりと視界を手に入れる。
無論、向こうにばれないように、だ。

ホテル嵐山に彼女達のクラスがいない、という可能性は千草は考慮していない。
何があるか分からない状況で、一番狙われているクラスを不必要に動かすような事はしない
だろう、と彼女は推測している。ある種の賭けだが、間違ってるとは思わない。

案の定、昨日新幹線で確認した木乃香のクラスメイトを確認する。
一発目で当たった事は運が良かったと言わざるを得まい。
そのまま、チャンネルを変える要領で次々と式神の視界を確認していく。

そして13番目の式神の視界。
椅子に座った状態で、TVを退屈そうに眺めている近衛木乃香の姿があった。
……だが、まだ油断は出来ない。もしかすれば身代わり符の可能性もある。
この辺は小太郎の連絡待ちなのだが……

一旦視界を元に戻す。
特に外では動きは無かったようである。
そうしていると、小太郎から連絡が入ってきた。

『千草ねーちゃん、こっちはハズレや。若い教師に付き添われてる

女やけど、
近衛木乃香とは似ても似つかへん全くの別人や。今、救急患者が入る方から入った所やけど
どないしたらええ？』

こちらとて確実に他人とは言い切れないのが困ったところではある。
変装・仮装・偽装あらゆる可能性がある。
……とは言え、動かない訳には行くまい。

一先ずは、ホテルにいる近衛木乃香が本物だと想定して動く事にする。
もし仮に身代わり符ならば必ずどこかでぼろを出す。
そうなれば、改めて近衛木乃香の場所を確認すればいい。

人質の腕一つでも総本山に送りつければ本物を出してくるだろう。
それで出してこなければ、総本山に本物がいるなら『切り札』を切るしかない。

『そしたら、そっちの病院の場所だけ覚えて例の場所へ移動や。
こっちで対象確認したさかいに、これから行動に移るで。ええな？』
『了解や。』

それだけ言って、小太郎が通信を切ったのを確認する。
そして、周囲の警戒を任せたまま式神の構築を開始する。
出来る限り隠密性が高い式神を。

ホテル嵐山の一室。
彼女は外でそんな事が起こっているとは知らないまま、椅子に座りＴＶを見ていた。

特にやる事があるわけでもなく、クラスメイトと話を携帯電話ですると言っても、
１日中喋りっぱなしと言うわけにも行かないし、話題がつきる。
ＴＶを見ると言っても、数時間も見てれば飽きる。

退屈やなー、と考えているとかさり、と音がした。
部屋の入り口から紙が落ちたような音である。

特にやる事もないので、見に行くと小包が一つが落ちていた。
……ドアには鍵がかかっており、外した覚えは無い。
となると、この小包はどうやってこの部屋に入ってきたのか？

見た感じ、どこにでも売っている様な箱であり重さは全く無い。
振っても特に音もしないので、開けてみる事にした。
……そして、息を呑む彼女。

そこに入っていたのは髪の毛の束と、２通の手紙。そして１枚の写真。
１通の手紙には、赤黒い達筆な字でこう記されていた。

『さくらざきせつなはあずかった。これいじょうからだのいちぶをうしなうことなく
ぶじにかえしてほしければきょうの１５じまでに～にひとりでこい。
もしじかんまでに、またはひとりで、こなければあらためててがみをおくる。

このてがみをかけばかくほど、さくらざきせつなはたいへんなことになる。』

同封された写真には、椅子に括りつけられて憔悴しきった桜咲の姿。
サイドポニーの部分がすっぱりと切り落とされているので、妙な髪形になってはいるが
間違いなく桜咲刹那である。

もう1通の手紙には待ち合わせの詳しい場所、アクセス方法までが書かれている。
見たところ、にわか観光客には少々分かりづらい寺であるようだ。
逆に言えば滅多な事では人が来ないような場所なのであろう。

……そして、彼女は動き出す。

第２１話：そして、千草一派と脅迫状の話（後書き）

＞愉快な千草さん一派
互いの呼び方が今ひとつ分かっておりません（え
原作と違ってたらご指摘下さい。

＞眠らせる
死ぬほど疲れてるんだ（嘘）。
まぁ、人質の扱いなんてこんなもんです（ひでぇ）

＞野太刀
獲物を選ばないのが神鳴流です（何）。

＞脅迫状を送った時
作った式神に運ばせつつ、相手の式神に分からないように介入して視界を誤魔化してます。

＞小包
最初は封筒にしようかと思ったんですが、パッと見封筒で収まらなさそうなんですよね（え。

＞赤黒い字
いやぁ、一体どんなインク使ってるんだか（棒）。

１０／１３
一部訂正。手紙と髪の毛だけでははっきりしないので、写真を同封する事にしました。ご意見感謝です。

ちょっとした相談のお知らせ。

活動報告の方で期限切って聞いてみたんですが、もう少し皆様の意見をお伺いしたく
改めてこちらの方で書くことに致しました。

以前の感想にて「補佐として他組織がでしゃばらないのが不思議」と言うご意見を頂きまして。「そうか、補佐か……」と思ったわけですよ。

1．ネカネさんがメルディアナからやって来る。

その際の返信時に浮かんだキャラがまず彼女でした。
諸勢力の綱引きの結果、ネギの母校から補佐を送り込む事に！
そしてその流れに乗ってネカネさんが参戦だ！！
オリキャラ出さなくてもいいけど、身内補佐にするのはどうよ、と言う。

2－1．どっかの外部勢力からオリキャラが来る。

今のところ想定してるのは教会関係者。勢力的にはここが大きいと言う判断。
13課とかイスカリオテとか埋葬機関まではいいませんが、そんな立場の人予定。

2－2．魔法世界からオリキャラが来る。

やはり上部組織・元老院的にも麻帆良とネギの動向は見逃せない！
学園長も仕事してるか怪しいし、クライシス帝国のダスマダー査察官じゃないけど
学校の運営状況とネギの状況の確認は必要だよね！と言う。

ただ、この前名前付きオリキャラは出さないって返信で言っちゃってるんですよね。
舌の根乾かないうちにこの有様かｗｗｗと言う話でして。

3．そんなものは来ない。

ご都合主義万歳。多分俺が一番楽。
いやほら、補佐出したら見せ場とかいるじゃん？
ネカネさん何てデータあって無いようなもんだし、補佐来たらきたでネギの隠蔽っぷりが益々ひどくなりそうな予感。
もしくは、洗脳してしまうか！？

Q：補佐って何の仕事するの？
A：表向きは３－Ａで副担任を想定しております。
実際の所は吸血鬼騒動で『英雄の息子』として御輿状態になったネギに
対する（魔法使い的な面での）補佐、と言う形になるでしょう。
そういう意味では2番だとネギの従者してもいいよと言い出しそうｗ

Q：補佐はいつ来るの？
A：修学旅行編途中参加、本格参戦は修学旅行終了後となる事を想定中。
援軍として駆けつける形になるのがベストかな？

本来、今日までの期限で意見を伺おうとしていた訳ですが、近況報告でのご意見にも
あるように冷静に考えれば別にそれほど急ぎじゃなかった（おい）。
と言うわけで、どんな感じなもんでございましょうと読者の方々に意見を
聞いてみたいと思った次第でございます。

もし、意見してやろうと言う方がいらっしゃいましたら、この記事に返信を。

１０／１４を目処に期限を切らせていただきます。

ただ、ここで意見が多かったのを必ず採用する訳では無い事は予め明言させて頂きます。
出来うる限りご要望にお答えしたいのは山々ですが……（汗）

なお、近況報告時にあった余談の可能性は完全に消滅した事を述べておきます。
……いやほら、切り札って切るから切り札ですよね？とｗ

第２２話：そして、人質交換の話。（前書き）

ネギ先生、今回も出番なしｗ

第２２話：そして、人質交換の話。

脅迫状を送りつけてから数時間後。
既に寂れてしまい、観光客も知らないような小さな寺の境内に天ヶ崎千草一派の姿はあった。
念のために認識阻害・人避け・遮音その他の結界を張り巡らせ、仕込みは十分と言った所だ。

人質である桜咲刹那は本殿の柱に括りつけられた状態でいた。
表情は既に死人のそれであり、もし猿轡が外れるならば即座に死を選びそうな雰囲気である。
それも当然。護るべき幼馴染を護れないどころか足手まといになり、更には取引材料として扱われているのだから。

「しっかし、ほんまに来るんかいな？」

階段に腰掛けたまま、暇そうに犬上小太郎が千草に聞く。
直接渡したとは言えそのまま素直に木乃香がここへ来るかどうか。

「間違いなく来るはずや。木乃香お嬢様とこのボンクラは長い付き合いやとウチの調べでもはっきり裏は取れとる。見捨てるとか言う選択肢はまずあらへん。」
「でも、長さんと連絡取ってるんでしたら、何かしらしてくるんとちゃいますかー？」

来る事を断言する千草だが、暇すぎて素振りをしていた月詠がそこに疑問を呈してくる。
振り回しているのはいつもの二刀。

「そうなった事を考えて色々仕込んでる訳や。それに、来ない言うんやったら耳や鼻やとかちまちました事は言わへん、片腕の一本でも贈りつけたらウチらの本気が伝わるやろ。」

そう言う千草。

実際、この境内は既に自分達の領土となっていると言っていい。

「その時は、是非ウチに斬らせてくださいー。試し切りもまだしてまへんさかいにー。」

「流石にそこまで行くとやりすぎや思うんやけどな、俺。」

にこやかに自分が斬ると主張する月詠に大して、難色を示す小太郎。

正直に言えば人質を取って、と言う今の状況は小太郎的には気に入らないのだ。

「まぁ、その辺はお嬢様が来んかったらの話や。その時はその時で改めて考えればええ話や。

時間はまだたっぷりとあることやしな。」

小太郎の様子を察して、少し柔らかい口調になる千草。

へそを曲げられて結果的に戦力が減るのは彼女とて避けたいのだ。

「……どうやら、来たみたいやで。」

小太郎が向いている方角を向けば、表参道からこちらへ歩いてくる1人の少女の姿。

麻帆良学園の制服を着た、腰まである黒髪の少女。

その顔は、これから起こる事に不安を抱き、緊張した顔つきであっ

た。

「……！！」

猿轡で口を塞がれたまま、何かを少女に呼びかける桜咲。
それを横目で見ながら千草は離れた所にいる少女を見極めようとしていた。

「（あの魔力は見た感じ木乃香お嬢様のもんや。身代わり符でもあそこまでのもんは不可能。
何かしらの手段で魔力を誤魔化したにしても、あの表情は演技で出せるもんとちゃう。
ほんまに、この人質が心配でしょうがないと言うのと、何を目的にしてるのかわからんと
言うない交ぜの感情が浮き彫りになった顔や。）」

はっきりした所は腰を落ち着けて判断するしかないが、まず本物だろうと判断する。
辺りに特に異常はなく、また誰かしら侵入者が入り込んだ様子も無い。
と言う事は、本当に一人で来たのだと結論付ける。

「言われた通り、ウチ一人で来たで！何が欲しいんか知らんけど、せっちゃんを返して！」
「まぁ、落ち着きなはれ木乃香お嬢様。ウチが欲しいんはお嬢様や。」

縛られた桜咲の姿を見て、慌てた様子で千草に訴える少女。
対照的に落ち着き払った状態で自分の要求を述べる千草。

「……ウチ？　一体ウチをどないする気なんや？」
「それは、追々話をさせて頂きます。今ここで語ることでもあらへんからな。」

そう言って、小太郎と月詠の方に視線を少しだけやる。
実の所、最終的な目的に関してはこの二人には告げていない。
「西と東の和睦をぶち壊し、木乃香お嬢様を誘拐する」レベルの話しかしていないのだ。
まぁ、月詠は人さえ斬れればどんな仕事でも請けるだろうが、小太郎は少々怪しい。
悪い奴ではないのだが、少々綺麗過ぎるきらいがある。
それでも、西の大多数の戦力を他所に動かしてなお手元における人物は、少々知己のある
彼ぐらいしかいなかったのである。
小太郎自身も「西洋魔術師と戦えればそれでいい」と言うようなことは言っているが、
最終的にどう動くかまでは判断が出来ない。

「せっちゃんはどうするんや？」
「勿論、木乃香お嬢様が来て頂けるなら用はありまへん、ここで開放させて貰います。」

最も、このまま生きているのも辛いだろうし、きっちり止めは刺すつもりだ。
小太郎に木乃香お嬢様を連行させて、自分はこの陣地の撤去、月詠に始末させればいい。

「せやったら、今すぐせっちゃんを開放してや！ウチの見てる前でや！」
「それはできまへん。こない言うたらアレですけど、木乃香お嬢様

が本物の保証は
どこにもあらへん以上、それが確認できてから開放するんは当たり前でっしゃろ？」

少女の提案をにべもなく断わる千草。
だが、少女も食い下がる。

「それやったらかまへん。せっちゃん放さへん気やったら、ウチは死ぬ。」
「……！！」
「……な！？」

少女が取り出したのはカッターナイフ。それを恐れもせず首に当てる。
驚愕する桜咲、そして千草。
何か事態が動けば躊躇わずに刃を引くであろう事は見て取れる。
月詠か小太郎が【瞬動】で取り押さえようと動いても、何かしらの拍子でざっくりと
首を切りかねない。

「千草はん、ちょっとまずいんとちゃいますー？」
「この女放したらええやろ、千草ねーちゃん！？」
「木乃香お嬢様、本気で言ってはるんですな、それ？」

少し慌てた感じの月詠、千草に桜咲の開放を訴え出る小太郎。
それでも、千草は動じない。

「嘘や冗談でこないな事ウチは言わへん。せっちゃんだけでもウチは助けたいんや！
さぁ、せっちゃんを今すぐ開放して！」

自分自身の命を賭け、少女は幼なじみの解放を要求する。
そして、千草は……。

「ならかまへん。死になはれ。」
「!?」

無常にも、そう言い放った。
ここに来て、少女も動揺する。

「な……ウチは!」
「分かってる、本気や言いたいんやろ?
なら死んでみたらええやん。こっちはお嬢様が死体でも一向に構わへんのや。
ほら、さっさと死んでみぃ。」

そう言う千草だが、実際の所は冷汗物の状況である。
死んでしまえば、この計画は全ておじゃんになってしまうのだから。
だが、人間そうすぐに死ぬ覚悟が持てる訳が無い。
そう、簡単に人は死ねない……はずだ。

沈黙が流れる。それは時間にすればわずかの間ではあるが、永劫にも等しい時間。

口を開いたのは、少女だった。桜咲に、語りかけるように。

「せっちゃん。ウチの事避けてたけどほんまはずっとウチの事見ててくれたんやろ?
本当にありがとな。この修学旅行でもう一回友達になりたいと思っとったけど……

その必要はあらへんかった。ずっと、ウチらは友達やったんやから。
ごめんな、せっちゃん。ウチの為にこんな目に合わせてしもうて。
もう一度、せっちゃんに名前呼んで欲しかったなぁ……」
「……！！」

まさに遺言そのものであり、桜咲は自分の身体さえ五体満足に動くのならばと
もがきあがく……こうなってしまう前に、自分ができる事をするべきだったと後悔し。
そして、まさに少女の手に力が篭ったその瞬間。

「……ウチの負けや。この人質は解放する、それでええんやな？」

そう敗北を宣言する千草。
あのままにしておけば、間違いなく彼女は首を切っていた。
演技でもなんでもなく彼女は死ぬ気であったのだ。
今ここで、彼女に死なれるわけにはいかない。

近衛木乃香が手に入るならば、リスクを背負ってまで無理に人質を殺す必要とて無い。
後は、期日まで彼女を隠し通しておくだけの事。

「それでかまへん、先にせっちゃんを外へ出して1時間経ったらウチはこの手を降ろす。」
「それは長すぎる、せめて30分や。勿論、ただでとは言わん。
人質も憔悴しきってるやろし、ウチの方から1人出す。
……心配はいらへん、女性の扱いは一番よう分かってる奴やさかいな。」

少女の提案に異議を唱え、代案を出す千草。

その内容を聞いて、小太郎が「俺かいな?」と言う形で自分を指差す。

「他におらへんやろ。そういう訳でバスに押し込めるなり電車に乗せるなりしてホテル嵐山の方まで連れて行っておくれやす。」

「しゃーないな、せやけど縛ったまま言う訳にも行かんけどどないするんや?」

「縛ってるのは念のためや、その額の札さえ剥がさんかったら小娘の体力ままや。」

なら問題あらへんな、と括りつけていた縄を解き人質を解放する小太郎。

猿轡も解こうとするが、千草に止められる。

「……なんでや?」

「ここでやいのやいのされても困る。できるだけ離れた場所で解き。それと、開放されたから言うて可笑しな真似してみ?逆に言うたら生きてるなら多少不都合でてもウチは一向にかまへんのやさかいな。」

桜咲を牽制するのも忘れない。

最も、手足の感覚がまともに戻るまでには時間がかかるだろうし、武器も無い状態で即リベンジにくるはずもないのではあるが……いや、来かねない。

「ほら、立てるかねーちゃん?」

「……!」

触るなと言わんばかりの桜咲だが、力が入らないのはどうしょうも

なく。
倒れこみそうになって小太郎に支えられる始末。

「無茶やって、少なくともねーちゃんが何かせんかぎり俺は何もせーへんさかい。」
「そしたら先輩、ええ刀ありがとうございましたー。また死合いましょー。」

月詠の言葉に一瞬殺気を向けるが、今の自分では手も足も出ない事を思い出す。
そして、表道ではなく裏道から桜咲と小太郎は境内を後にしたのであった。

それから30分後しない間に、小太郎は戻って来る。

「近くの駅から電車に乗せといた。少々格好があれやけど、何もおこらへんやろ。
なんやったら、どの駅から何時の電車に乗せたまで言うてもええで？」

そう報告を受けた千草は、木乃香の方を向く。

「さぁ、こっちは……？誰やあんたはっ！！」

確かに近衛木乃香だった彼女は、彼女にそっくりな『何か』になっていた。
刀を抜き放つ月詠、咄嗟に構えをとる小太郎。
千草自身も、呪符をいつでも投げられる構えを取る。

「ウチは、近衛木乃香や。」

「嘘や、木乃香お嬢様がそんな低い魔力かいな。正体見せい！！」

しかし、入れ替わった訳ではない。
ついさっきまで確かに『近衛木乃香』だったのだ、彼女は。
確かに身代わり符でも他人に成りすます事はできるが、死のうとした時、
本人が出す気迫そのものを感じ取った。あれだけのものは人間でなければ不可能。
それに、身代わり符ならば誰よりも早く、自分が気がついている。
陰陽師であり、同時に符術師である以上はその程度気づかない方がおかしい。

「そんな事、一々……っ！」

次の瞬間、近衛木乃香そっくりな『何か』は袈裟懸けに斬り捨てられていた。
血を噴き出し、崩れ折れる『何か』。
斬り捨てたのは、当然の如く月詠である。

「偽物でしたら、斬り捨ててしもてもかまへんでっしゃろ？」
「……せめて正体だけでも知りたかったんやけどなぁ。」

事後承諾を取る月詠に苦笑いの千草。
倒れた『何か』を見ていた小太郎が声を上げる。

「これ……人形や。」
「人形、やて……あれがかいな！？」

寸分違わず斬り捨てられた状態の人形が転がっているのを見て、驚く千草。

恐らくは、西洋魔術師が所持するマジックアイテムに違いないのだが……。

「どうやら、ウチはまだ西洋魔術師を甘く見てたようやな。せやけどまだまだ勝負はこれからやで……。」

対象は攫えず、人質も手放してしまい、成果といえば身代わり人形を叩き斬ったのみ。

しかし、それでも千草は諦めない。『切り札』は手元に握ったままなのだから。

第２２話：そして、人質交換の話。（後書き）

と言うわけで、何をうちのネギが使ったのかはきっとお分かりのはず。
記憶・しぐさ・技能はさておき、魔力までは誤魔化せないので
〔模〕しました。（次回改めてネタばらししますが）
（効果時間の都合のいい切れ方は本当にご都合主義です、はい。）

＞ウチが欲しいんはお嬢様
お嬢様「え、ウチ？」（顔を赤くして）
コタロー「ねーちゃん、何か勘違いされてるで？」
千草「そういう意味や無い！欲しいんは間違いないけどそうやない！！」

とかしたかったですけど自重した。

＞【瞬動】で
実際の所、何とか出来そうな予感はします。
まぁ、目を瞑っていただければ……（汗）。

＞こうなってしまう前に
体力的に既に消耗しきっており、半妖としての力を解放する力も無い状態
となっていると言う事で。

＞身代わり符
実際、修学旅行編と学園祭編で大分違うんですよね。
修学旅行編だと、ひどいボンクラみたいな感じですけど、
学園祭編での楓の身代わり符は本体に遜色なかったわけで

（攻撃はできないようでしたが）。

他の面子の身代わりはやっぱり馬鹿っぽかった以上は、その程度の符なのか？

それとも、作り方次第でその辺変化するのか？

第２３話：そして、総本山の話。（前書き）

長らくお待たせしました。
そして待たせた割には……（汗）。

第２３話：そして、総本山の話。

桜咲刹那が目を覚ましたのは、夜半の頃。
目を開けた彼女は、最初自分がどこにいるのかわからなかった。
分かったのは、布団に寝かされているのだと言う事だけ。

言葉を交わすこともなく、木乃香お嬢様と別れた後のことは全く覚えていない。
情けなさや惨めさで思考は溢れかえり、何も頭の中に入っていなかったのだ。
あれから一体自分はどうなったのか……。

そう思って上半身を起こすと同時に、額に乗っていたタオルが滑り落ちる。
誰かが看ていてくれたのだろうか？
そしてはっきりしない頭で周りを見渡し、自分の状況を確認する。
そこは少し大きな和室であり、服も寝間着に着せ替えられている。

この家の雰囲気に匂い、どこかで覚えが……そう彼女が記憶を呼び起こそうとしていると
襖が開く音。そして、水が入った容器が落ちたような音。

音の方を見れば、そこにいるのは驚いた顔の近衛木乃香であった。

「せっちゃん、目が覚めたんっ！
ごめんな、ウチのせいで……ほんまにごめんな……」

そう言って、刹那を押し倒すように抱きしめ涙する木乃香。
刹那の方はまだ思考が現実に追いついていない。

つい先ほど別れた幼なじみが目の前で泣いている。これはどういう事なのか？
既に自分は死んでいて、これは夢なのだろうか？

夢でも一向に構わない。
現に目の前に、木乃香お嬢様がいる。
護りたくて護れなかった、一番大事なお嬢様が。

だから、そっと木乃香を抱きしめ返す。
あの時に伝えたかった事を伝えよう。
それで夢から覚めるなら……悔いは無い。

「本当に謝らないといけないのは、私の方です……お嬢様。
お嬢様を守るためと自分の心に線を引き、結局お嬢様の心を傷つけていたのですから。
ただ遠くから見守るだけではなく、私はお嬢様のお傍にいるべきだった。
友達として一緒にいるべきだったのに……ごめん、ごめんな……このちゃん。
結局ウチは、また守られへんかった……」

そう言って、彼女もまた涙を流す。
その二人の泣き声は、しばらく止む事はなかった。

流石にあの状態の部屋に近づきたくは無いネギ・スプリングフィールドです。
いや、ほら。空気読めって言われそうで。
とは言え、いつまでもあのままにしておく訳にも行かないし……
しょうがない、虎の子を得るには巣の中に入るしか無いと言う。

幸いにして、襖は開きっぱなしだし。

「そろそろいいかな、二人とも？」

そう言って、襖の硬い部分をこんこんと叩いてアピールしてみる。
いや、何と言うかうら若い女子中学生が布団で抱き合ったまま転がってる、って言うのは
非常に絵になると思うわけで。

「せ、先生！？　どうしてここに！！」

がばっ、と起き上がる桜咲さん。
顔、真っ赤ですよ？
と言うか、近衛さんが「えへへー」って感じで張り付いたままです。
まぁ、別に構いませんが。

「どうしても何も、ここがどこかわかってる？」

一応、桜咲さん自身がどこまで現状を把握しているか確認する事に。
だいぶ長い間泣いてた所を見ると、多分ろくに把握して無いと思うけど……。

「どこ？　え？　その……どこなんですか、ここは？」

ついに色ボケたかと思った俺は悪く無いと思う。
と言うか何を今更慌てふためいてるんだ、桜咲さんは？

「ウチの実家やで。せっちゃん忘れてもたん？」

抱きついたままの近衛さんが桜咲さんにそう言います。

そう、今現在近衛さんの実家、つまり関西呪術協会総本山にいるわけで。

「そ、そう言えば……記憶にありますね。
それで、お嬢様はあれから一体どうやって脱出を？」
「もー、このちゃんって呼ばなあかんでー、せっちゃん。」
「それなんだけどね……。」

桜咲さんの自業自得ではあるんですが、凄い言いにくいです。
さっきまでの会話を聞いていたわけでは無いですが、大体想像はつく。

「あ、そうですね。確かに、この場では……」
「いや、桜咲さんが今思ってる事に関しては気にしないでいい。」
「せやで。ウチ、全部話聞かせてもらったさかい。」

えっ？と言う顔をする桜咲。どことなく不安そうな表情が一瞬浮かんだのは気のせいか？

「あの……全部、と言うのはどういう意味で全部なのでしょう？」
「魔法の事とか、この京都でおこっとる事とか、ウチがどういう立場におるんかとか、
せっちゃんがウチを守ってくれてたとかそういう事や。」
「詠春さんがざっと３０分ちょいで説明してくれたよ。
あまり詳しく一気に説明しても困るだろうから、本当にさわりの部分だけだったけどね。」

ホッとする表情を見せる桜咲さん。しかし、それを見逃す近衛さんではなかった！

「せっちゃん、ウチにまだ何か隠してるん？」
「え、い、いえ……その、そういう訳では……」
このままやり取りを見たい気もしますが、長引きそうなので介入する事に。
「まぁ、その辺は二人っきりでゆっくりとやってもらう事にして。取り合えず、事情説明の方をやっておきたいんだけど構わないかな？」
「あ、はい。宜しくお願いします先生。」
これ幸いと話を促す桜咲さん。でも、根本的な解決にはなってないんだよ？
まぁ、あの後の事を時系列を追って説明する事に。
偽の集団感染事件でホテルに立て篭もった、って話をしたらやっぱり呆れられましたが。
近衛さんは「ウチのせいで……」と沈んでますが、無関係の人間を人質にとられるよりはマシだろうと俺は思う次第で。
まぁ、近衛さんにそこまで求めるのは多分無理でしょうけど。
で、近衛さんを救急車で搬送する振りをして総本山に運ぼうって話になったんですが。
恐らく、誘拐犯は直接的にしろ間接的にしろ何らかの手段で近衛さんに接触を取ってくるに違いないと言う事で身代わりを立てることにしたわけで。
「では、アレは身代わり符でできた偽者と言う事ですか……」
「偽物には違いないけど、身代わり符じゃないよ。」

『スキルニル』。
ぶっちゃけてしまえば【王の財宝】の中に入ってた物品の一つ。
外見のみならず、仕草やら記憶やら能力やらを完全再現するゴーレムだそうで。
まぁ、魔法世界から持ってきたマジックアイテムと言う事で紹介しましたけどね。

「で、ですがそれでは魔力までは誤魔化せないんでは？」
「そこらへんもちゃんと考えたよ。」

龍宮さんとかに聞いた話だと、どうも凄腕女陰陽師みたいな感じだし自分が交戦した
相手も西洋魔術師としては破格のスペック。前衛は前衛で神鳴流の使い手みたいだし。
本物そっくりなただの偽物ではまずバレると俺も判断した訳で。

仕方がないので【文珠】から〔模〕を作って偽木乃香さんに使わせたわけで。
これは説明の仕様が無いので打ち合わせのときにこっそり飲んでもらいました。

この辺までの一連の流れを救急車が到着した後で、乗り込んでいた詠春さんも交えて
近衛さんに事情を説明しつつ協力を仰ぐ事にしたわけで。

何しろ、『スキルニル』に必要なのは本人の血液。
流石にホテル内で血液採取は無理っぽかったし、この状況下では当人に現状を教えておいた
方がいいと判断した訳でして。

近衛さんも最初はびっくりしていましたが（そりゃそうだ。呼ばれたと思ったら父親がいるんだから）、事情を説明すると取り合えず納得してくれたご様子でして。
桜咲さんが敵に捕らえられてる状態だ、と言った時は流石に取り乱しましたが。
とにかく、自分のプランを説明して血を一滴頂きました。

で、近衛さんには少し変装してもらう事にして（女って凄いよね。化粧と髪形弄るだけで全くの別人に見えるんだから）そのまま救急車で搬送、偽木乃香さんを自室へ戻すことに。
こういう時完全個室は超楽です。出入りも他の生徒に分からない訳ですからね。

そして、偽木乃香さんから脅迫状が届いたという事で行動を起こす事に。
偽木乃香さんの動向に関しては、【神の頭脳】のお陰で把握できました。
視界とか諸々を共有できただけなんですけどね。

「それでは、お嬢様のあの行動は……」
「あれは間違いなく近衛さんの行動だよ。きっと、本物の近衛さんも同じ事をしてたさ。」

まぁ、偽木乃香さんには「桜咲さんの解放を最優先」とは言いましたけどね。

「しかし先生。もし、仮に……私が解放される前にお嬢様が偽者だとバレた場合は？」

「その時は責任持って助けに行ってたよ、うん。」

……ごめん、嘘です。

流石に、近衛さん目の前で『桜咲さんは諦めるつもりだった』とか言えません。

実際のところ、視覚なんかの共有は行ってましたが自分は近くにいなかったわけで。

相手の戦力がはっきりしない以上、迂闊に付近に近づく訳にも行かないし。

何と言うか、捕まった桜咲さんが悪いよね？と言う事でして。

で、桜咲さんが解放されたのを見てから回収するべく動いた、と。

あんな格好で街いたら不審者全開ですしね。

「今はゆっくりしてるといいよ。

そうそう、詠春さんに報告しておく事があるなら、代わりに聞くよ。」

「それでは……」

と言う事で、知りうる限りの情報は頂けた訳です。

刀を盗られた件に関しては、後で自分から報告しに行くと言いましたが。

「じゃ、さっきも言ったけど今は身体を休めておく事。

近衛さんも嬉しいのは分かるけど、程々にして置いてあげてね。」

とだけ言い残して、部屋を後にすることに。

そして次に行くのは詠春さんの所です。執務室といいますか。

「そうですか、刹那君が目を覚ましましたか。」

「えぇ、今は近衛さんと仲良く話していると思いますよ。」

近衛さんの父親にして関西呪術協会の長、近衛詠春さんはちょっと痩せぎすの中年男性と言った感じです。何と言うか、苦労を一身に背負い込みそうなイメージ？

「娘と刹那君の為に色々して頂いて申し訳ない。本来ならば、こう言う事が起こる事自体があってはならないことなのでしょうが……」

「いえ、お気になさらず。むしろ、俺の無茶振りを通してもらって感謝してるぐらいです。」

実際、ホテルの封鎖だの諸々は詠春さんの協力なくして為し得なかったわけで。

確かに下のものを押さえられないのはどうよ？と思うけど、そんな政情不安定な所に俺たち放り込んだ学園長が諸悪の根源だよね、と。

「それで、犯人の方なんですが……」

「ネギ君のお陰で特定は出来ました。ただ、捜索・拘束に動ける人間がいないと言うのが最大の問題でして……申し訳ない。」

『スキルニル』で共有してた視覚、聴覚から犯人の人相と名前くらいははっきりする訳で。

桜咲さんとガチンコで斬りあった方は本人が名乗ってたのをカモ君が聞いてたし。

と言うわけで、そういう辺りから調べてみるとあっさりと面は割れました。

主犯は天ヶ崎千草と言う陰陽師だそうで。
何でも、西の中でもとりわけ過激な派閥に属してたとか。
色々と西洋魔術師に対して思うことがあったんだろう、との事。

にしては仲間（に違いないだろう）に西洋魔術師がいたのはどういう理屈だ？
ちなみに、その西洋魔術師の少年に関しては今だ不明です。
まぁ、時間の問題ではあるでしょうけど。

「こっちから打って出るには居場所も分からない……か。」

何でも、関西呪術協会の主だった戦力は西日本全域に出払っているそうな。
最短でも帰ってくるのは明後日の昼になるとか。

「少数での犯行のように見えますが、実際の所は後ろで糸を引いてる者達がいるはずです。
この期を逃さずに一網打尽にするつもりですよ。」

そう意気込みを述べる詠春さん。
普段から色々仕事でストレス溜まってるのか、物凄いやる気です。
いやまぁ、娘さんの危機だしなあ。

「どちらにしろ、今は篭城するしかないわけなんですが……防御能力は大丈夫ですか？」
「この総本山の結界は辺りの霊脈から魔力を吸い上げる事で強固な結界を構成してます。
心配はいりませんよ。」

とは言え、一度俺が張り巡らしたやつを悠々と抜けてきてる奴がいるからなぁ。
俺の結界と一緒にすんな、って話なんだろうけど。
一応、確認させてもらっていいか尋ねて許可貰ったんで、後で確認しに行く事に。
生徒たちの方も守りは完璧のようだし……ひとまず安心、としておきたいなぁ。

とは言え、最低でも後2日……何もしてこないわけでは無いだろうし。
油断大敵と言う事か。

第２３話：そして、総本山の話。（後書き）

どうでもいい話なんですが、何故か名字呼びしてたんですよね俺（え。
……何でだ？
と言うわけで名前呼びにしてみた。

つか、京都弁がマジむずいっす。
「わかりました」って京都弁でどう言うの？
「わかりましたえ。」でいいの？
変換ツールは「わかりました」でいいみたいなんだけど。
でも、木乃香が「分かりました先生」って言ってる姿も何か想像できん。
「分かりましたえ、先生」……何か、微妙（これしかなさそうな気もしますが）
結局喋らない、と言う手法をとったんですが（苦笑）。

＞夢から覚めるなら悔いは無い
どうみても精神崩壊エンドです、本当に（ｒｙ）
いや、そんなことやらかしたらどこのエロい同人誌なのかと言うオチにｗ

＞せっちゃん
どっかで「ウチ」と言う表現を使ってた記憶があるんですが……
テンパってる時とか
二次創作だったか本編だったか思い出せないｗｗｗｗ
一応京都生まれになるでしょうので、「ウチ」も使うんでしょうけど。
おかしな話ですが、長文を京都弁で喋る刹那が想像できない（苦笑）

。

後、ある意味書いてて一番しんどいパートでした。
頑張るだけは頑張りましたが、色々gdgdだったらまじすんません。

＞泣き声
変換一発目が「鳴き声」でどうしてくれようかと思った（おい

＞抱き合ったまま
もうお前ら結婚しちまえよ、と自分で思ったんだから世話は無い（苦笑）

＞何を今更
どうやらこれは夢じゃないようだと本格的に思いだしたせったんです。
まぁ、実際目の前であんな事あって次に目を開けたらこうなってたらそうも思うわ、と
言う事でここは一つ。

＞不安そうな表情
せっちゃんはまだ正体については木乃香に喋ってません。
やはり踏ん切りがつかないといいますか……
天秤は間違いなく「喋る」に傾いてるんですが。

＞スキルニル
別案として【文珠】で木乃香に〈憑〉〈依〉する、とかネギ自身が木乃香に〈模〉す
とかあったんですけどねｗ
どっちにしても木乃香自身の人権無視しまくりというｗｗｗ

後、スキルニル関連でぽろぽろ出てる設定は独自解釈でございます。
【神の頭脳】で感覚共有とか、本物と魔力量が違う、とか。

＞総本山守護結界
実際、どれほどのもんだったんだろう?と。
対物・対魔法に優れてるだけと言う気はしますが。
ぶっちゃけ赤松世界に対呪いとか対霊とかなさそうな予感が（おいまぁ、対呪いは対魔法で括ってもよさそうですけど。

第２４話：そして、最終決戦の幕開けの話（前書き）

相変わらずの無茶振り進行でござる。

第２４話：そして、最終決戦の幕開けの話

４／２４（木）

フェイト・アーウェルンクスは総本山を見渡せる木の上に立っていた。
隣には、監視対象の天ヶ崎千草。

「なるほどね。後はここで篭城の構えな訳か。
最初から強固な結界を何らかの手段で強化している……って所かな？」

そう言って見下ろす総本山の結界は、彼の目からしても非常に強固なものに見えた。
突破不可能と言うほどではないが、これを突破するのは至難の業。
恐らく、それだけで相当の労力を要する事だけは間違いない。

「それで、どうするんだい？上は相当焦ってるみたいだけど？
何しろ君の存在も相手にばれてるようだし、明日の昼には実働部隊が戻ってくるんだろう？」
「想定の範囲内どすわ。何も問題ありまへん。」

正直に言えば、彼は彼女が何を考えているのかが分からない。
いや、正確に言えば『何かをやらかそう』としている事しか分からないといっていい。
少なくとも、彼女はただ唯々諾々と上に従ってるだけの人間では無い。
時折彼女が上に見せる目は、侮蔑の光を帯びている。

本来ならば、監視役としてその辺りを報告するべきかも知れない。
ただ、上もそれは承知で扱っているという可能性はある。
あくまでも彼は外様であり、その辺の事情に精通してるわけではない。

そもそも、何故彼が監視役などと言うものをやっているのか？
彼がイスタンブール魔法協会からの研修生の名目で関西にやってきた理由は
難しい物ではない。東洋の陰陽術に興味があったと言うその1点である。
とは言え、関西呪術協会の長は近衛詠春。かつての『赤き翼』の一員である。
何かの弾みで自分の正体が明らかになってもおかしくはない。

そんな訳で接触を取ったのが、関西呪術協会の中でも『掌握派』と呼ばれる対立派閥。
彼らの目的はまず第一に「権力を手に収める事」であり、「西洋魔術師の日本からの排斥」
についてはそれほど優先順位が高い訳ではない。
むしろ、権力さえ手に入れてしまえば排斥はいつでも可能であると考えている節がある。

そんな訳で、自分が知りうる限りの西洋魔術師に関する知識などを教授しつつ陰陽術に
代表される東洋魔術を学んでいたのである。

そこに振ってわいたのが今回の事件である。
天ヶ崎千草を用いての『掌握派』による計画の遂行。
正しくは、『掌握派』を用いて天ヶ崎千草が計画を実行に移したと言ってもいい。

彼女だけが持つ力、『リョウメンスクナ』を復活させるための儀式魔術。
これがあるからこそ『掌握派』は計画の実行にＧＯサインを出した訳であり、
彼女が元の派閥からこちらに移って来る時の手土産もそれだったのだから。

とは言え『掌握派』も彼女に全て丸投げ、と言う訳には行かなかった。
何しろこの計画が成功すれば、西の権力が自分達の物になるわけである。
そこで、彼女が抱えている部下だけで計画が遂行してしまえば後がややこしくなる。

「計画を遂行したのは私達だから、私達が上に立つよ」

などと言われてはたまらない。
だが、彼女を監視しておく役目を任せられる人間の当てが無い。
何しろ、彼らの手駒である戦力まで西日本各地に散っている状況なのだから。

そこで立候補したのがフェイトである。
西洋魔術師としての実力を売り込むことで、安易に西洋魔術師を排斥するのではなく
お互いに利用しあう関係くらいにはしておきたい、と言うのが対外的な理由。

実際の所は『リョウメンスクナ』に興味があったのと、『英雄の息子』の腕前を
知っておきたかった、と言うのがある。

特使としてやってくるならば、恐らく『闇の福音』を倒した彼が来ることは想像がつく。

しかし、そんな彼でも分からなかった事が一つ。
それは彼自身が大人になっていた、と言う1点である。
ホテルでの遭遇時は「魔法先生その1」と言うつもりで見ていたので気づかなかったが、
よくよく思い出せばナギ・スプリングフィールドそっくりのその姿。
まず間違いなく彼が『英雄の息子』であるネギ・スプリングフィールドなのであろう。

魔法使いとしての腕前としては防御型。
と言うよりは、攻撃魔法を全て切り捨てて防御に回してる感じである。
身のこなしも決して素人ではなく、実戦的なそれ。

だが、彼が一番注目したのはその槍。
自身の対物・対魔障壁を無かったかのように突き破り、心臓を貫かれるとは思わなかった。
魔力が篭っていた事から何らかのマジックアイテム・アーティファクトだとは思っていたが、
魔法を無効化する槍とは想像がつかなかった、と言うよりそんな槍は聞いたことも無い。
それに、彼の槍捌きが本職顔負けの腕前だった事も心臓に一発貰った理由である。
ついさっきまで格闘戦で追い込まれていた人間が、槍を握った瞬間に一端の戦士の腕前を
持つようになるとは誰が想像するだろうか？
この身体の心臓が反対側に無ければ本当に『死んでいた』のだ。

その結果、身体の調整に時間がかかって復帰が遅れたのである。

「問題ない、とは言ってもね。実際に上からはどうなってるんだと矢の催促さ。
何らかの報告を持って帰らないと僕としても立場が無いんだけどね。」

「ホテルで分かれてからちっとも姿を現さずに職場放棄してたあんさんに立場がまだあったとは思わへんかったわ。」

「……それに関しては説明したはずだよ。
それに、君の立場も上から見れば似たような物だと思うけどね？」

一瞬流れる険悪な雰囲気。
その雰囲気を破ったのは千草。

「まあ、フェイトはんの言う事もごもっともや。
ただ、今この段階で木乃香お嬢さん連れてきた所で時間的に都合が悪い。
儀式発動の準備もせんとあかんし、本格的に動きだすんは日が暮れてからと言うといて。」

「まだ彼女を連れてきていないのに儀式の準備とは気が早すぎないかい？
あの結界を抜くための目算はあるんだろうね？
言っておくけど、あれを抜くのは僕でも至難の業なんだけど。」

ホテルの結界を抜けなかった彼女に、この結界が抜けるのかと聞くフェイト。
そう尋ねられた千草はニヤリと笑みを浮かべた。

「それに関しては心配あらへん。ウチのとっときの切り札切らせて

もらいます。」
「ふーん。それならいいんだけどね。」
そう宣言する千草に、冷たい反応をするフェイト。
彼女の術者としての腕前は確かに高いが、この結界をどうこう出来るとは思えない。
確かに東洋魔術による地脈を利用した結界である以上、餅は餅屋なのだろうが……
「それとついでに、儀式の際に立ち会ってもらえるとありがたいとも言うといてか？」
「彼らが出てくると思うのかい？」
「ウチがスクナ甦らせて、ウチの言う事しか聞かへんようになっても知らへんで？
何しろ、実際にやったことはあらへんさかいな。儀式自体も注ぎ込んだ魔力次第で
使役される人間判断する可能性かてある訳やさかいな。」
確かに、それならば出てこざるを得ないだろう。
それに彼らとて陰陽師である。不測の事態がおきても自身の身くらいは守れるだろう。
「儀式の場所は封印の地でいいんだね？」
「せや。深夜０時にそこに来るようにして貰えればええ。」
「わかったけど……本当に大丈夫なんだろうね？
連れてきましたお嬢様はいない、となると君の信頼は地に落ちるよ？」
「そんときはどっちにしろお互い破滅してる訳やけどな。」
実際問題、その段階で木乃香が攫えないならば計画はほぼ失敗であ

る。
彼女の指摘は間違ってはいない。
捕縛される時間が早いか短いかの差である。

「確かに違いないね。その辺ちゃんと伝えておく事にするよ。
ま、頑張って近衛木乃香を攫う事だね。」

そう言って、木から飛び降りると同時に下の水を使ったゲートで姿を消すフェイト。
それを見送ってから、千草は呟いた。

「攫う？その必要すらあらへんわ。連れてくればええだけなんやからな。
……切り札とは言え、これは使いたくあらへんかったんやけどなぁ。」

一枚の札を取り出して眺め、感傷に浸るかのように溜息をつく。
だが、それも数秒の事。
スクナの為の召喚陣構築と、もう一つ切り札使用のための陣の構築が必要なのだ。
小太郎、月詠の2名は逃走ルートを選定してもらっている所である。

そして彼女も転移符で姿を消し、そこには誰もいなくなった。

一方総本山。
オコジョ妖精ことカモミール・アルベール一通称カモ君一は窮地に陥っていた。
目の前には雇用主であり命の恩人でもあるネギ・スプリングフィー

ルドの姿。

時間は少し遡る。

総本山に移動してから彼はやる事が無かった。
最も、その前から仕事があったかと言われれば全く無いと言って良い。
ネギの使い魔としての雇用契約は結んであるのではあるが、基本的に何もしていないのだ。
『闇の福音』戦における各所との調整が最大の大仕事だったと言っていい。

今回の修学旅行に際しても、近衛木乃香にくっついて様子をそれとなく伺うのと
近衛木乃香が攫われた時に桜咲刹那を起こし、誘拐犯の追跡に引っ付いていって彼女が
攫われる一部始終を見て報告したくらいである。

折角の仮契約魔法もネギ自身がしたがらないので宝の持ち腐れ状態であるわけで。
勿体無いとは思うが、彼が言う事も最もな話ではある。
しかし、あの二人は大変惜しいことをしたと今でも思っている。
どちらもスペックは（いろんな意味で）非常に高そうだった訳で。

まぁ、収入に関してはそれなりの額を貰っているのであるがそれはそれ、これはこれ。
金は天下の回り物とも言うし、あって困るものではない。
気がつけばいつのまにか皆出て行ってしまってるのがお金と言うものである。

そういう訳で、彼は営業活動に勤しんでいた。

「と言うわけで、如何っスかねお嬢さん方？やっぱり、何かあった時の事を考えると
仮契約ってのは非常に便利なもんだと思うんっスよ俺っちは。」

対象は桜咲刹那と近衛木乃香の２名。
自身の見立てによれば、お互いに大事に想いあってるようではあるし
仮契約を結んだとしてもさほど問題にはなるまい、と言う判断である。
それに、近衛木乃香には既に魔法の存在を明らかにしてある訳で、
自分が喋る事も承知であることであるし。

「それでどないなことができるん？」

と木乃香の方は乗り気であるようだ。

「仮契約するとカードが出てきやしてね、そいつで従者はアーティファクトって言う
１人が一つしか持てないマジックアイテムみたいなものが使えやす。
それと従者の
召喚機能に、カードを使った念話と言ったところでさぁ。後は、従者に魔力供給を行う事で
身体能力をぐっと上げる事も可能になりやすぜ。
ま、基本的に従者は魔法使いを守る前衛みたいなもんっスからね。
仮契約もそれに則った
特典が付いてくるんでさぁ。
木乃香嬢ちゃんも魔法使いとして一歩を歩みだすなら、従者の一人くらいいたほうが

かっこもついていいですぜ？」

「しかし、お嬢様にはまだ早すぎるのでは……
まだ魔法使いとしては何も知らないも同然なのですよ？」

そう懸念を表明するのは刹那。

「いやいや、何言ってるんっスか桜咲の姐さん。手軽に戦力アップできて尚且つ二人の絆もより一層強く結ばれるんっスよ？それに、知らないところは手取り足取り教えていけば良いだけの話じゃないっすか、誰だって最初は始めてなんっスから。」

この辺の説得は難しい。
何しろ、一度攫われている前科があるのでつつき過ぎる訳にも行かず。
主に友情（？）面から攻めて行く事にする。

「手取り足取りって、ウチそんな……」
「その仮契約ってどないやってするん？」

赤い顔をして小声でぶつぶつ言い出した刹那と、身を乗り出して聞いてくる木乃香。
ここは後一押しと判断。

「俺っちが契約の為の魔方陣を書くんで、その上でキスしてもらえば一瞬でさぁ。」

一瞬、空気が凍る。

「え、せっちゃんとキスするのん？」
「そ、そんな女同士でキスなどと……」
頬を染める木乃香と、慌てふためく刹那。
「いやいや、女同士でも主従関係ならそれくらいは当然っスよ当然。『思い立ったが吉日』と日本の諺でもあることですし、ここは一つぶちゅーっ、と。」
そう力説するカモ。
そんなカモを見て、ふと刹那が尋ねる。
「……所でカモさん。」
「何ですかい？」
「この件、ネギ先生はご存知なんでしょうか？」
一瞬、びくっとカモの体が震える。
「いやいや、兄貴は関係ないっすよ兄貴は。俺っちは俺っちで独自に兄貴の手助けになりたいと思いやしてね。」
「へぇ。『小さな親切、大きなお世話』って諺知ってるかなカモ君？」
その声を聞いた瞬間、カモの時間は停止した。
ぎぎぎ、と言う音が聞こえるかのように首を声の方に向ける。
「さて、昨日言ったよね？次は無い、って？
全く、まさか昨日の今日でこういう事をするとは思わなかったよ。」

そこに立っていたのはネギ・スプリングフィールドの姿。
もはやこれまで、と観念した彼は一言だけ言い残す。

「兄貴、それは諺じゃなくて格言っスよ……」

と言うわけで、被告カモ君、検察俺、裁判官俺、弁護士無しの裁判の結果有罪と言う事でカモ君の牢屋入りを決定したネギ・スプリングフィールドです。

お慈悲をくだせぇー、とカモ君が檻の中で言ってますが知ったこっちゃありません。
甘く見られても困る。

「いや、俺の使い魔が迷惑かけてごめんね。
こんな事しないように強く言い聞かせておくから。」
「い、いえお気になさらず。」
「別にウチは迷惑やなかったんやけどなー。」
「お、お嬢様!?」

思いのほか近衛さんは乗り気のようで。
とは言え、流石にまずいよなぁと言う話で。

「魔法の事については確かに近衛さんに教えたけど、それを踏まえて自分の道は自分で
選ぶ必要がある。ましてや仮契約は西洋魔術師の手段だからね。近衛さんが陰陽師として
勉強していくと言うならその必要は全く無いわけだし。」

まぁ、仮契約だけやっておいて陰陽師として大成しても問題は無い

気もしますが。
……いや、やっぱ問題あるか？
西と東が仲良くやる、って言うならそれでも問題ないのか？
どちらにしろ、ここで一発やるかと言う話ではない。

「と言うわけで、今すぐに仮契約がどうこうとかそんな事を考える必要は無いよ。
先は長いしゆっくりと考えればいい。」
「しかし兄貴、実際に戦力足らないのは事実じゃないっスか！
刹那の姐さんの気と木乃香嬢ちゃんの魔力を足せば戦力アップ間違いなしっスよ！？」

檻の中からそう抗弁するカモ君。
まぁ、戦力に関して気にかけてくれるのはありがたいんだけど……

「それ、無理なんだ。」
「へ？」
「気と魔力の合成。『咸卦法』って言う究極技法でね。
ちょっとやそっとじゃ身に付かない最上級難易度って話だよ。」
「ま、マジっスか……」

知らなかったぜ……と煤けるカモ君。
そうだったのですか、と納得する桜咲さん。
まぁ、あくまでも『難易度が高い』だけで『不可能』と言うわけではない。
ただ気ばっかり扱っていた桜咲さんが、魔力を使えるかと言うと……無理だろうと。

「それで先生、何か用があったのではないんですか？
それとも、カモさんの暴挙を止める為だけにこちらに？」

暴挙って言い方はひどすぎっすよ、と言うカモ君はスルー。

「カモ君の行方を捜してたのは確かなんだけど、近衛さんに渡す物があってね。」

そう言って取り出したのは腕輪。

「先生、これは何なん？」

「一種のお守りみたいなもんだと思ってくれればいいよ。誰かに襲われた時とかに念じれば、一度だけその腕輪が守ってくれる。」

実際の所は【文珠】に〔護〕と入れて以前作ってた腕輪に嵌めこんだんですが。

一度っきりの防御としては最高クラスのはず。

腕輪自体も抗魔力が上昇するような護符みたいなものですけどね

「……やはり、まだ来ると思われますか先生は。」

「まあね。」

真剣な表情で尋ねてくる桜咲さんに頷き返す。

相手の面が割れてるのは恐らく向こうも気が付いているはず。

何しろ、神鳴流の方に問い合わせを入れたりとか色々やってるのだから。

だからと言って諦める訳にも行かないだろう。

ここまでやった以上は既に引き返せるレベルを超越している。

多少強硬な手に出ても近衛さんを攫いに来るはずである。

一応、総本山の守護結界も確認してみて〔倍〕と【文珠】使ってき

てみました。
単純に強度が倍になっただけなのでどこまで効果があるか分かりませんが、
無いよりはマシのはず。１文字だけだったら長時間持たせられますし。
しかし一番痛いのは、単純な護衛戦力がいないと言う話で。
一応、ここに常駐してる巫女さんとかも戦えない訳じゃないそうなんですが。
あくまでも護身レベルっぽいしなぁ。

ホテルの方の防備も固まってるだろうし、長瀬さんと龍宮さんをこちらへ呼ぼうかな。
幾らなんでもあれから東の増援全く来てないって事は無いだろうし。

そして、日が暮れる。

天ヶ崎千草は１人、陣の中央に立っていた。
必要な事は全てやり終え、この後の準備についても整った。
後は、木乃香お嬢様をここへ連れてくるだけの話。

一枚の札を掲げ、呪を唱える。
その言葉は力となり、その力は陣を経て倍増する。

彼女が敷いた魔方陣。
それは、総本山の結界を構成する霊脈から魔力を掠め取る為の物。
霊脈から魔力を奪うことで結界の強度を少しずつ下げつつ、こちらの魔力とする。
そして、対象への行動を開始するつもりだったのだ。

と言うよりは、そこまでしなければこの切り札は使えない。

だが、ほんの少しだけ予定が狂った。
事前に調べた総本山の結界は、何らかの手段で単純に倍となっている。
この魔方陣で吸収した分を含めてぶつけても、通り抜けられる確立は半分。
ならばどうするべきか。答えはすぐに出た。

どちらにしろこの切り札を切れば自分の命は無いのだ。成功しようと失敗しようと。
ならば命を惜しむ必要がどこにある？
過剰なまでの、いや死ぬ事を前提とした魔力強化を行い臨んだのがこの儀式だ。
本来ならば４倍近く膨れ上がるだけの儀式において、８倍、１６倍、３２倍、６４倍と
体内で魔力が膨れ上がっていくのが彼女には分かる。

その結果全身の血管が血を吹き、体中の全てが悲鳴を上げる。
関節はねじれ、骨は砕かれ、陣の中央に崩れ落ちてもなお、彼女の呪は止まらない。
ここで止めれば全てが無に帰るのだから。悲願成就まで後一歩なのだ！
そして、最後の言葉が紡がれる。

後に残るのは、物言わぬ躯が一つ。

総本山、刹那の部屋。

刹那と木乃香の二人はここに来てから、ずっと一緒だったといっていい。
ひたすら木乃香が喋り、刹那が相槌を打つ。そういう流れではあったが双方が満足していた。
お互いに、お互いが友人であると再認識できたのだから。

「それでな……」

と話を続けようとした木乃香がひくり、と震える。

「どうかなさいましたか、お嬢様？」

それっきり黙りこくってしまった彼女を見て、心配になって声を掛ける刹那。
ふっ、と我に返ったかのような木乃香の姿。

「ごめんせっちゃん。喋りすぎてウチ疲れてもうたみたいやわ。ちょっと早いけど、ウチ休む事にするな？」

そう言って立ち上がる木乃香に不審な所は無い。
いや、あえて言うならさっきの挙動が怪しいのだが。
しかしほぼ一日中喋り倒していたのならば疲れるのも事実。

「大丈夫なのですか？薬か何かを貰っておいた方がいいのでは……」

「心配あらへんよ？ウチこそせっちゃんゆっくりさせなあかんのに、いつまでもごめんな。
また明日ゆっくりとお話しょうな？」

そう言って、退出する木乃香。

その顔に張り付いた笑みを見たものは、誰もいない。

第２４話：そして、最終決戦の幕開けの話（後書き）

と言うわけで、大したものでもない切り札は大体想像が付いたかと思います。
詳しい解説は次回と言う事で。
またせっちゃん虐めか、と言うのはさておいて（こら

＞フェイト来日の理由
少なくとも、アスナをくすぐった水妖陣は彼自身もよく分かってなかった
みたいですし、自分の召喚獣（？）に札が貼り付けてあったのも、恐らく東洋魔術による強化じゃないかなぁ、と。

＞自分の正体が
この辺、魔法世界編以降を持ってないので良く分からないんで想像です（苦笑）。
色々見た感じでは、顔くらいは知ってると思ったんですが。

＞立候補
流石に他所から来た研修生に「お前ちょっと監視しろ」とは言えんだろう、とｗ
まぁ、「するよ」って言われて「任せた」って言うなよって話ですがｗ

＞心臓
液状化することで刺されても大丈夫、って言おうと思ったら破魔の槍だったでござる。
じゃあ、器官を入れ替えればいいんじゃね？とも思ったけど無理っぽかったでござる。入れ替え自体を無かった事にされそうで

……w

＞小さな親切大きなお世話
ことわざと思って調べたら違うかった。びっくりだ。

＞仮契約
実際、正体を明かして無い段階で仮契約すると大惨事なんですよねw

このか「（カードを見て）わー、せっちゃんのこの羽何ー？」
せつな「そ、それは……っ！？（真っ青）」
かも君「（やっべぇ、何か俺っち地雷踏んだ？）」

と言う事態が発生しかねないw
まぁ、やっぱり「綺麗な羽やなぁ」で終わりそうな予感もしますがw

しかし、原作では二人（ネギ・木乃香）の従者になってるらしい刹那さん。
仮契約が所詮お試しとは言えそれでいいのか？
と言うか、理屈の上では仮契約をしまくってアーティファクトたくさん、
と言う手が使えるわけだけど……（まぁ、使いこなせるかは別）。

１０／２５：改行直しと「」を閉じてなかったので閉じ
１０／２８：指摘によりフェイトのネギへの認識を訂正。

第２５話：そして、長い夜の始まりの話（前書き）

相変わらず難産だったでござる。
まぁ、ここからは殴ったり殴られたりするシーンがメインになるはずなんで
ちょっとはマシになると思いたいなあ。

あ、戦闘描写が得意と言う訳でもないんですけどね（苦笑

第２５話：そして、長い夜の始まりの話

龍宮さんと長瀬さん呼びだして防衛計画立ててる、ネギ・スプリングフィールドです。
呼び出したとは言っても、まだ来てないんですけどね。
意外と距離があるからなぁ。
話によると魔法先生方も集まってきてるそうで、こちらにも何人か来れるとの事。
学園長よく頑張ったと言いたい所ですが、それ位してもらわないと困る。
数さえ揃えば、後はひたすらこの一夜を守りきればいい訳で。

何とかなるかな、と思ってたら襖の開く音と共に桜咲さんが。
手にはカモ君の入った檻。
妙に慌てた様子です。

「申し訳ありません、お嬢様を見ませんでしたか？」
「見てないけど？　体調が悪いとかで早めに寝たんだったっけ？」

確かそう聞いたはず。夕食の時にも姿を見せなかった訳だし。

「はい。それで私の体調も十分ですし、お嬢様の様子を見に行こうと部屋に行ったら
いなかった次第でして。」
「刹那の姐さんが来る前に、『汗かいたからお風呂行ってくるわー』と部屋を出て
行ったんっスけど……」
「風呂場を覗いてもいない、と。」
「はい……」

持って出たはずの着替えが脱衣所に置いたままだったという。
……また結界抜けられたのか！？
いやいや、この結界は俺が作ったんじゃなくて本式の守護結界。
そこに【文珠】で倍化してあるわけだから、そんなあっさりと気づかれずにとか……

「ともかく桜咲さんは詠春さんに報告を。俺は辺りを探し回ってみるから。」
「わ、わかりました！」
「兄貴、俺っちはどうなるんっスか！？」

このまま檻の中、って訳にもいかないだろう。
外へ出してれば……いやいや、本当に風呂だったなら変態オコジョ爆誕だった訳で。

「しょうがない、この状況で檻の中に入ってろってのも無茶な話だ。出してあげるから、桜咲さんと一緒についていってやって欲しい。」
「あ、ありがとうございます！」

泣きながら感謝するカモ君。そんなに嫌だったならやるなよお前。
1人と一匹が去った後、調査を開始。
と言ってもあの腕輪に込めた魔力を辿れば済む訳で。
糸を辿るように魔力を手繰っていくと……いた。
敷地の外に出ようとしている？

そうやって動きを感知しながら移動していると……世界が裏返る感覚。
結界を張られたかっ！？
それもこの結界は……

あっさりと総本山の守護結界から外へ出られたことに『天ヶ崎千草』は安堵していた。
まぁ、『総本山の守護結界』と言っても山全体に守護結界が展開している訳ではない。
外周は認識阻害の結界が主であり、メインの守護結界は屋敷を含む敷地が中心なのだ。
それに、守護結界は外からの侵入・攻撃を防ぐ物であって中から外へ出る人間を
防ぐ訳ではない。

そういう意味では出られて当然の物ではあるのだが、彼女が懸念していたのは
家中の者に見つからないかどうか、と言う一点である。
見つかった所でオコジョ妖精宜しく誤魔化せばいい話ではあるが、
流石に近衛詠春や
担任教師であるネギ・スプリングフィールドまで誤魔化せるかは未知数。
最悪、駅で対峙した龍宮や長瀬と出くわす可能性もあったのだから。

檻の中に入ったままのオコジョに分からないように急造の札まで作っておいたのだが、
それも使う事無く、予め打ち合わせておいた敷地の外へ移動する。

「月詠はん？　眼鏡返してもらいに来ましたえ。」
「わー、ほんまに千草はんなんですかー？」

予め打ち合わせておいた言葉で呼びかけると、がさがさと茂みから

月詠が現れる。
月詠が見たのは和服の近衛木乃香の姿。
いや、よく見れば纏う雰囲気は別人のそれ。
そう、近衛木乃香として『天ヶ崎千草』は存在しているのだ！

『天ヶ崎千草』の切り札。一番最初に近衛木乃香を攫った段階で体内に仕込んだ一品。
それは【憑依符】と呼ばれる禁呪の一つ。
霊体と化して他者に憑依することで、その取り憑いた人物を乗っ取る符である。
符自体は起動するまでは休眠した状態であり、他者に気取られる事も無い。

勿論リスクはある。
休眠した状態であるが故に、仕掛けた自身ですら確認するのは困難であるという事。
まぁ、これは仕込んで即使えば全く問題の無いリスクである。
問題はもう一つ。
術者はその身体を完全に捨ててしまう形となる為、その肉体は死亡する。
一度取り憑いてしまえば、二度と元の身体へは戻れないのだ。

符の起動に必要な魔力はバカ高いのだが、そこは陣を敷き総本山の霊脈から
ちょろまかした分＋自身のブーストでクリア。
総本山の結界自体にも対術効果はあるのだが、それを物ともせず近衛木乃香の体内に
仕込んだ符に直接ジャンプするイメージで取り憑いたのだ。

ちなみに、禁呪になった理由は至極単純。
この符を使っていけば、疑似的な不老不死すらも可能となるからである。
それも、他人の身体を使い潰していく形で。
あまりにも外法過ぎる。それが理由である。

月詠は背中に背負っていたリュックを降ろして、荷物を中から取り出す。
予め天ヶ崎千草から預かっていたものだ。

「後始末の方は？」
「問題なく始末させてもらいましたー。けど、宜しかったんですかー？」

前から持っていた自分の札やら、儀式に必要なものなどを身につけていく『千草』。
服に関してはサイズが明らかに違うのでこのままである。

「あのまま放置しておく訳にもいかへんやろ？それに、小太郎はんに頼む訳にもなぁ。」
「ですねー。」

何しろ、絶命した天ヶ崎千草の死体の処分と儀式の痕跡の消去である。
説明するのに時間がかかりそうな小太郎よりは、月詠に頼んだ方が手っ取り早い。

「ま、これで木乃香お嬢様を『連れ出す』ことは成功したわけや。
もう一つの方も準備できてはりますか？」

「そっちも大丈夫ですー。後、お偉いさん達が封印の地に集まりつつあるって
小太郎はんの方から連絡ありましたー。」
「さよか。気が早いこっちゃな。
１０分前集合とか言うけど、まだ４時間以上もあるんやで？」
眼鏡をかけて準備完了、である。少々サイズが合わないのが問題ではあるが。

「さて、そしたら始めましょか。」

そう言って、呪を紡ぐ。
内容は至って単純。総本山の守護結界に介入するだけの代物。
完全に外と中を隔絶する為の結界への書き換えである。
そのための仕込みも月詠に頼んでおいたのだ。

本来の彼女であるならば、魔力量の問題からそこまでするのは難しい。
だが……今の『天ヶ崎千草』の身体が持つポテンシャルならば十二分に可能！

そして紡がれた呪は形と為す。
守護結界そのままの力が、結界の内と外を完全に遮断する。
だが、これだけでは安心できない。
ネギ・スプリングフィールドと言えば『英雄の息子』であり『真祖殺し』の名を持つ存在。
青年だったと言うのは内心驚いたが、子供が少年である理由はどこにもない訳で。
それに加えて『赤き翼』の１人にして『サムライマスター』近衛詠春の存在。

さらには東が動いている以上、更なる増援が来る事は確実。
押せるだけの念は押しておいた方がいい。

一枚の札を取り出すと、『自分』の魔力を引き出して鬼達の召喚を行う。
敷地を包囲できるだけの数を揃えると、近づく者と結界の外へ出た者の排除、
もし、結界がなくなるようであれば攻撃に転じる事と命じて
自分達は移動を開始する。

まだ、儀式を行うには早い時間。
もう少し遅い時間に抜け出せばよかったのだが、それでは外へ出られるかわからなくなる。
結局相手の防備が整う前に抜け出るしかなかったのだ。

予定の時間まで相手を釘付けにできれば御の字ではあるが……。
まぁ、足止め要員だけは事欠かない訳で彼らに期待するしかないだろう。

さて、どうしたものかと悩んでいるネギ・スプリングフィールドです。
目の前の結界を〔解〕〔析〕してみましたが、どうやら中と外を断絶する類の結界のようで。
しかも、総本山の守護結界をそのまま利用しているらしく、中に入るも外に入るも
困難きわまり無いと言う状況です。
いや、ぶち破るだけなら手はあります。手はあるんですが……

と悩んでいると誰かが走りよってくる気配。
桜咲さん＋カモ君と詠春さんですね。

「ネギ君、これは一体……！？」
「話の方は桜咲さんの方から伺ったと思いますが、近衛さんが敷地から出て行きました。
理由は分かりませんが、最悪操られている可能性もあります。
追いかけようと思ったらこの結界ですし……」

よく見れば、結界の外には無数の鬼の群れがいる。
ここに押し寄せてくる訳では無いようだけど……結界あるから入って来れないか。
と言うよりは外へ出さないように結界張ってるわけだし、見張りとかその類か？

「お嬢様……っ！！」
「兎にも角にもこの結界をどうにかしないといけない。
詠春さん、恐らくこの結界は総本山の結界をそのまま利用していると思うんですが、
元に戻すことは可能ですか？」
「可能には可能です。ですが、恐らく外から術式を弄ってある以上は……。」

外から弄りなおすしかない、か。外の鬼ども退けて。
〔修〕〔復〕しようにも、そもそもこの結界自体が書き換わってるので無理。
〔初〕〔期〕〔化〕すると結界強度自体が怪しくなるしなぁ。
どちらにせよ、大元が変わってしまってる以上は効果時間切れで元に戻るわけで。
とは言え、ここから出れないと話にもならん。

まさかぶち壊してしまう訳にもいかないし……。

しょうがない、人前で使いたくは無かったけど緊急事態だ。
後で適当に誤魔化すなり何なりすればいい。

「わかりました。結界の初期化だけなら俺が何とか出来ます。」

えっ？と言う顔で俺を見る2人と1匹。
そりゃそうだ。傍目から見てもこの結界が難儀な代物だと分かる。

「兄貴、何とかできるんッスか？」
「一応はね。ただ、いつまで初期化してられるかは分からないって所かな。
それに、外で出待ちをしてる鬼達もこれのお陰で手出しをしてこない可能性もあるしね。
……元々の総本山の結界の強度ってどれくらいですか？」

カモ君の疑問に答えつつ－破壊した方が楽な事はあえて言わない－詠春さんに尋ねてみる。

「ある程度は持ちこたえるはずですが……」

流石に、初期化した状態の結界強度までは把握できてないとの事。
そりゃそうか。詠春さんが赴任する前からこの結界あるわけだしなぁ。

「つまり、この総本山でこっちの増援を待ちつつ持ちこたえる役と木乃香嬢ちゃんを
連れ戻しにいく役の二手に分かれなきゃならないって事っスね。」
「そうせざるを得ない、と言うべきかな……」

総本山にいるのがこれだけなら、全員で一点突破すれば済む話なんでしょうが。
人残ってますからね。置いておくわけにも行かない訳で。

「それなら、私が残る事にさせてもらいますよ。
関西呪術協会の長として、ここを離れる訳には行きませんからね。
ですからネギ君、刹那君。君達でこのかを助けに行ってほしい。」

そう言う詠春さん。
本来ならば自身が真っ先に助けに行きたいだろうに……。

「しかし、長！」
「心配はいりませんよ、刹那君。しばらく実戦からは遠ざかっていましたが、
身体は鈍らせてないつもりです。
それに私だけで戦う訳ではありません。
警備の人間も、結界を張れる人員も揃っていますし。
ここを守っていればおっつけお義父さんが派遣した増援も来るはずですからね。」

そう言って桜咲さんを安心させるように笑みを浮かべる詠春さん。
実際、その布陣にならざるを得ないか……。
自分の敷地を守る訳だから、それなりに守り方はわかっているだろうし。
総本山にいるのは俺たちだけじゃなくて、警備の人員やら構成員の人間もいる訳で。
幾らなんでも全てが非戦闘員などと言う事はないだろう。
で、こっちはこっちで桜咲さん前衛で後衛が俺、と。

とは言え二人で4人相手取る計算になるのか……厳しいな、おい。
俺一人ならどうとでも無茶通すんだけど、この流れで桜咲さん置いておく訳にもいかんし、
前の失態を挽回したい＋大事な友人を助けたいってのはあるだろうからなぁ。

「それじゃ初期化した後で一気に上空駆け抜けるつもりだから、桜咲さんしっかり
掴まっていてね？　後、カモ君はここに待機して増援の応対宜しく。」
「は、はい……宜しくお願いします。」
「了解っス！　兄貴も気をつけてくだせぇ！！」

と、そこまで言って気がついた事があったので聞く事に。
物凄い大事な事を聞き忘れる所だったという。

「所で桜咲さん。」
「な、何でしょうか？」
「……武器は大丈夫？」
「はい、代わりの刀を頂いております。」

そう言って見せるのは一本の野太刀。
それなりに業物とは思いますが、見てるだけじゃわかりません。
まぁ、大丈夫でしょう。

そういう訳で、【文珠】を使用して結界を〔初〕〔期〕〔化〕。
同時に行き成り最大戦速で上空へ飛ぶ！！
必死に俺の身体にしがみ付く桜咲さん。

下を見下ろせば屋敷の方へ討ち入りに動く鬼達の群れと、

空を飛んでこちらへ追いかけてくる烏天狗の集団。

「面倒だな……もう。」

空中での戦いならば、あちらの方が有利。
とは言え……振り切るには厳しいものがある。
いや、一人降りればいいんですけどまさか降りろとも言えず。

「桜咲さん、【虚空瞬動】できる？」
「す、すいません……完全には。」

申し訳なさそうな桜咲さんの声。

「しょうがないな……日本の諺には『習うより慣れろ』って言葉があるそうだね？」
「え？先生……？」

そうやってる間にもぐんぐん追いついてくる烏天狗たち。
これ以上問答やってる暇はなさそうです。

「今からあそこの群れに突っ込むから、斬りこみ宜しく！！」
「ちょっ、待ってくださいっ！？」

そう言って、方向転換をかけると一気に群れに突撃をかける俺。
勿論、１００本ほどの雷の矢を先に飛ばしておくことは忘れません。
そして桜咲さんの制止を聞く事無く、俺達は群れの真っ只中に突っ込む事に。

さて、手早く片付けさせてもらいたいんだけどなぁ。

第２５話：そして、長い夜の始まりの話（後書き）

きりがいいのでここで切り。

＞以外と距離がある
少なくともホテルからは電車は確定な訳でして。
徒歩→電車→徒歩だとは思いますが。
魔法先生だって空飛んでくるとも思えないしなぁ……来るかなぁ？

＞憑依符
物凄い適当ぶっこいてます（おい）。

＞初期化
最初から完璧強固な結界が構成されてた訳じゃない、と言うのが持論です。
何度も術式の更新をした結果が今の守護結界になってるという事で一つ。

＞身体は鈍らせてない
「お前は何を言ってるんだ」と突っ込みたくなるでしょうが我慢です（え。

＞武器は大丈夫？
ＮＧ：１
「……武器は大丈夫？」
「あ……」

一瞬この場に沈黙が漂う。
無手で来てたからもしかしてと思ったけどやっぱりか。

NG：2
「……武器は大丈夫？」
「大丈夫です、問題ありません。」

……激しく不安すぎる。
せめて一番いいのを渡しておくべきなのだろうか？

＞しがみ付くせっちゃん
お前飛べるだろうに、と言うツッコミは無しの方向で（何

＞せっちゃんが【虚空瞬動】できるかどうか？
実際の所できそうな気しますが、当作品ではこういう事にさせてもらいます。
と言うか、多分自前で飛んだほうが賢かった（え。

１１／４　感想で指摘を受けた分を訂正。

第２６話：そして、激突する話。（前書き）

お待たせしました。短いですが最新話でございます。

第２６話：そして、激突する話。

空中戦を見事制したネギ・スプリングフィールドです。
いや、ほんと大変でした。
何しろ相手は空中戦のプロ。それ相手に同じ土俵で勝負挑んだ訳で。
俺一人ならどうとでもするんですが……。

「……」

後ろで俺を睨んでいる桜咲さんの視線が痛いです。
いいじゃん【虚空瞬動】失敗する事無く地べたに落ちずに済んだんだから。
勿論、俺もカバーには入れるようにしてましたよ？
どの道、あれは空を自在には動けても留まる事はできないから最低限の足場は必要だという。
そういう訳で足場を用意したり、敵を撃墜したりと大忙しでございました。

と言うわけで、俺と桜咲さんはタンデムする形で杖で空飛んでいるわけです。
場所に関しては近衛さんに持たせた腕輪の魔力辿っていますが、もうすぐ追いつけそうです。
結界突破とさっきの戦闘で時間取られたとは言っても、徒歩に負けるつもりはない訳で。
どういう形で近衛さんを操っているのか不明な以上、手荒な真似にも出れないしなぁ。
〔眠〕らせるのが一番か……そう考えていた時。

「先生、前ですっ！！」

桜咲さんの警告も間に合わず、森の中に突っ込んでしまった俺達でした。
……木々に思いっきり突っ込んだせいで意識が飛びそうになる中で考えていたのは一つ。
何でこんな所に山がある？

「ま、こんなもんやろ。」

そう1人ごちたのは【三枚符術・山呼びの符】により山を呼び出した『天ヶ崎千草』である。
あの結界をどうやって抜けたかは分からないのだが、追跡してきた事は事実。

恐らくはこの腕輪の魔力を辿ってきているのであろうが、強力な防御結界を展開できると
推測されるこれを捨てていく、と言うのは非常に勿体無く感じてしまう訳であって。
何しろ、腕輪にはめ込まれたその【護】と書かれた珠は過剰ともいえる圧縮された
魔力が込められているのだ。
外せるのならば外したかったし、機会があれば調べてみたかったのだが。

その追跡者もはっきりと確認した訳ではないが、飛行高度を考えればこの山を
回避したとも思えない。

そして【三枚符術・山呼びの符】が『呼び出す』山は（一時的にせよ）物理的に
存在する山であり、どれだけ結界破壊の腕前が高けれど無意味。
鬼の脚力ならば山の踏破に時間も掛からないであろうが、人の足ではそれもままならず。
空を飛んだとしても、しばらくの時間は稼げるはずである。

それに、打った布石はそれだけではない。

「後は頼んだで。小太郎はん、月詠はん。」

それだけ言い残すと『天ヶ崎千草』は先へと進む。
封印の地へと。己の目的を果たす為に。

気がつけば山に突っ込んでいたネギ・スプリングフィールドです。
車は急に止まれないといいますが、杖で飛んでいても同様な訳でして。
空を飛ぶ際に展開する魔法障壁が無ければ大惨事でしたが、とりあえず怪我も無く。
桜咲さんの方も確認しましたが大丈夫のようです。

「……しかし、ついさっきまで山なんか無かったはずなんだけど。」

「それなんですが……」

桜咲さんが語るには突然山が『生えてきた』らしい。
想像するだにシュール極まりない光景だが、考え事をしてた俺はそ

れに気がつかず
飛行高度にまで大きくなった山に突っ込む羽目になってしまった、
と。

「東洋魔術ってそんなのもありなの？」
「話程度には聞いたことがありますが……」

まぁ、こっちはこっちでかい石柱を上空から打ち込むような大雑把？な魔法もあるし
山自体を落とされないだけマシと思うとするか……。
そう考えつつ【幻想殺し】で土を触ってみるもののやはり効果はなし。
ざっと見た感じ、山の中腹辺りにいるのでその状態で山が消えたらどうなるのか？
と考えると発動しなくてよかった気もしないでもない。

となると、空から山を飛び越える必要があるのか。
歩いていく訳にもいかんしなぁ。
最も、直に空を飛んでいくわけにも行かなくなった訳で。
何故なら……

「こんばんはー、神鳴流ですー。」
「悪いな、ここから先は通行止めや。」

ゴスロリ剣士と学ランの少年が、俺たちの目の前に立ちふさがったのだ。
確か、月詠と小太郎とか言ってたっけか。
見た感じは前衛が二人、と言う印象だけど……

「先輩お久しぶりですー。また死合いに来ましたー。

ちゃんと新しい刀用意できたんですねー？」

そう言って彼女が抜き放つのは二刀。

……そういや、桜咲さんの刀こいつが持ってるんだっけ？

「……っ！　今はお前と遊んでいる暇は無いっ！！」

そう言いながらも、刀を抜き放つ桜咲さん。

その様子を見て、小太郎の方も俺に向き直る。

「月詠のねーちゃんがそっちと相手する、って事は俺の相手はお前やな？」

「正直、相手してる暇は無いんだけどね。」

闘志満々にファイティングポーズを取る彼。

一方の俺も杖を構えるが、真面目に取り合うつもりはない。

「そう言うなや兄ちゃん。西洋魔術師の力、俺に見せてみぃ！」

言うが早いか、真っ直ぐ俺に突っ込んでくる小太郎。

それが、戦いの合図となった。

……最も、俺と彼の戦いは数秒で終わる事になる。

「じゃ、遠慮なく。『我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）』。」

その言葉と共に、俺が【王の財宝】から出した赤い布が彼を拘束する。

カウンターを喰らう形で芋虫のように布でくるまれて倒れる小太郎。

その姿は、まるで水揚げされた魚のようです。

「な、何やこれっ！　外れへんっ！？」

もがもがと振りほどこうと、あるいは引きちぎろうと悪戦苦闘しているようですが、
拘束するための魔術礼装であり男性は決して抜け出せない『マグダラの聖骸布』は
そんなものでは解けはしません。
本来ならここから宝具の一斉投射とかやらかすんですが、流石にここでは無理。
なので、風・雷・光の順番に魔法の矢を３００発ほど打ち込んでおくことに。

「見たか、これが西洋魔術師の力って奴だよ……って聞こえてないか。」

爆炎が晴れ、後に残ったのはぴくりとも動かない小太郎少年の姿。
ボロボロになった聖骸布も回収しておきます。
……後で〔修〕〔復〕かけないと。

一方の神鳴流同門対決は案の定膠着状態になってます。
決して桜咲さんが弱いわけではないんですが、相手の戦い方が上手いと言うか。
こちらの戦い（と言っていいのかあれ？）が終わったのを見て、俺に支援させないように
射線を遮ってるので魔法で火力支援する訳にもいかないし……
こうなったらしょうがないな。

「桜咲さん、そこは任せた！！」
「えっ！？」

「ほえ？」

そう言い捨てて、杖を使って上空へ浮かぶ俺。
この状況、逆に考えれば月詠を桜咲さんが足止めしている訳で。
唯一の懸念はまた桜咲さんが人質にされると言う事だけど、大丈夫と思いたい。
と言うか、二度目は面倒見ないぞ！

そう心の中で主張しつつ、俺は空を飛ぶ。
魔力を辿る限り、かなり離されてるからなあ……急がないと。

リョウメンスクナ封印の地。
それは湖の中心辺りに存在した。
まるで神楽を踊る為に用意されたような大きな舞台に、幾人もの人影がある。
所謂『掌握派』と呼ばれる人間達であり、彼らは天ヶ崎千草を待っていた。

遠ざけておいた人員が帰還するのは早くて明日。
そうなってしまえば、近衛詠春は自分達を取り締まるべく動き出すだろう。
ここ最近の彼の動きを見ていればそれくらいの想像はつく。
仮に、天ヶ崎千草に全ての罪を被せた所で無事では済むまい。

スクナ復活はまさに起死回生の策なのだ。
あの時こそ術者が制御しきれず、スクナが暴走してしまった訳ではあるが
復活の際の魔力不足が原因、と天ヶ崎千草は述べていた。

言ってしまえば腹が減って不機嫌な状態で呼び出した、と。
つまり、近衛木乃香の魔力量を媒介に呼び出せば十分な量が賄えると。

「皆さん、お早いお着きどすなぁ。
約束の時間にはまだ余裕がありますえ？」

そこにかかる声。
その方向を見てみれば、監視役として派遣したフェイト・アーウェルンクスと……

「近衛木乃香だとっ！！」

そう、そこには連れ去るべき近衛木乃香の姿……いや、あれは本当にそうなのか？
確かに外見は彼女自身ではある。不釣合いな眼鏡をかけていたりするが。
だがその彼女から放たれる雰囲気は、明らかに近衛木乃香のものではない。

「予定通り、ちゃーんと近衛木乃香をここへ連れてきましたえ。」

そう言って微笑む彼女の笑みは、間違いなく天ヶ崎千草であった。
それをフェイトが補足する。

「彼女が近衛木乃香ではなく、天ヶ崎千草である事は僕も証明するよ。
……どう言うからくりを使ったのかは知らないけど、僕達しかしか知らない事を
近衛木乃香が知らないのは確実な以上、それを喋った彼女は『天ヶ

崎千草』だよ。」

ざわめく一派。
恐らく天ヶ崎千草が使用したのは禁呪とされた【憑依符】。

「貴様……そんな物まで持ち出したというのか！？」

何しろ、悪用すれば（と言うより一番ベストの使い道として）擬似的な不老不死が
実現してしまう呪符である。
ましてや、憑依した相手は近衛木乃香。
この件が上手く進めば自分達が担ぎ上げる存在。
その彼女に憑依したとあっては、将来のトップを狙っていると警戒するのは道理。

「ウチかてこれは使いたくありませんでしたわ。せやけど背に腹は変えられませんさかい。
それとも総本山に篭られたまま手を出しあぐねて、時間切れになった方が宜しかったどすか？
それに、こないな事を何時までも話し合ってる暇はありませんえ？」
「どういう事だ？」

そう言う『天ヶ崎千草』に疑問を呈する一派の１人。

「総本山から追撃部隊が近づいてると言う事ですわ。
まぁ、足止めはしとりますけどどれだけ持つ事やら……」

騒然となる一派。
それを見て内心で溜息をつく『天ヶ崎千草』。
せめてどっしり構えていられないのか、と。

「儀式の準備も時間もまだまだ掛かりますよって、皆様方には式神を出して頂けるとありがたおすけども。」
「貴様っ、我々を顎で使う気か！？」
激昂する別の１人。
よくもまぁ抜け抜けと、と言った感じである。
「ウチはこれから術式の変更も含めて召喚儀式の準備をせんとあきまへん。
余計な魔力は使いたくあらへんので。」
「くっ……！」
そのやり取りを見ていたフェイトが宙へと浮かぶ。
「なら、僕が足止めをしてくる事にするよ。
……恐らくネギ・スプリングフィールド、彼が来る。」
「そしたら、足止め宜しくお願いしますわ。」
「足止めはいいけど……別に倒してしまっても構わないんだよね？」
そう言い放って、フェイトは空を飛ぶ。
前回の戦いで大体の戦力評価は出来ている。
無論、隠し玉の一つや二つはあるだろうがそれはこちらも同じ。
後はどちらの隠し玉が相手を上回るかの勝負である。
「ま、精々きばると宜しいわ。
最もスクナさえ出てしまえば、こっちのもんやけどな。」
彼を見送った『天ヶ崎千草』はそれだけ言うと、準備に取り掛かっ

た。

第２６話：そして、激突する話。（後書き）

フェイト戦まで行きたかったけど、キリがいいのでここで切る。

＞【三枚符術・山呼びの符】
ネーミングに関しては【三枚符術・京都大文字焼き】（ｂｙ究極ガイドブック）
より名前をつけさせてもらっております。

……冷静に考えると山一つ精製している訳ですげぇな。
その辺りの空間がどうなったのかとかその辺考えると気が狂いそうです（こら）
まぁ、魔法ですから。

＞ネギＶＳ小太郎戦
……最後までいい所なんて無かった小太郎乙としかいいようがない（やったのは俺）。
流石にバラバラに散らばってた、は自重したｗ
ちなみに、フェイト・小太郎ＶＳネギとかもプロットにはありました。
その場合誰が千草＝木乃香をお偉方に証明するんだよと言う事実に思い至りましてｗ
こう言うのは監視役が適任だよね、と言う（相手が納得するかどうかは別）

１１／６　指摘により誤字訂正（お付き→お着き）

第２７話：そして、目覚める前の話（前書き）

お待たせしました。
本来ならスクナ覚醒まで行きたかったんですが、キリがよかったのでここまで。

第27話：そして、目覚める前の話

桜咲刹那と月詠。神鳴流同士の戦いは、月詠優勢で戦いが進んでいた。
刹那としては手早く終わらせて、木乃香を助ける為に前へ進みたい。
だが、その気の焦りが敗北を呼んだのはついぞ一昨日の話。
同じ相手に同じような状況で敗北する訳にも行かず。
とは言え、時間を掛けていればそれだけ木乃香への危機が迫る事になる。
その葛藤が太刀筋を鈍らせ、本来の力を出し切れないのだ。

「先輩ー？、他所事考えながらとは余裕ですねー？」

そうにこやかに言い放ちながらも、月詠の動きは止まらない。
そもそも、二刀流は一般的なイメージほど強い物ではない。
両手武器である日本刀を片手で扱う必要があるという事、両手を別々に動かす必要があることなどなど……流派としては存在するが、その習熟は並大抵の物ではない。
ましてや神鳴流は野太刀をメインに扱う剣。二刀流は考慮の外にある。
この若さでそれを容易く行い、神鳴流としての技を繰り出す月詠の技量こそ恐るべしなのだ。

どうする……と間合いを取りつつ内心考える刹那。
相手との腕はほぼ互角、いやあちらの方が若干上。
確かに月詠の言うように、全力を持って挑む必要がある相手ではある。

だが、この先の事態を考えればここで配分を間違える訳にもいくまい。
ネギ先生が先行して進んだ以上、任せてしまうべきなのだろうがそれでは護衛の……

「隙ありどすえ、先輩？」
「しまっ……！」

再び陥りそうになった思考のループは致命的な隙を呼び。
月詠が放った一撃が刹那を切り裂く寸前に銃声が咆哮、振り下ろされた刀の軌道を逸らす。
結果、刹那は掠り傷一つで危機を脱する事となる。

「やれやれ、らしくない戦い方じゃないか？
この助っ人の仕事料はツケにして置いてあげるよ、刹那。」

硝煙たなびく銃と共に森から姿を現したのは、龍宮である。
ネギから連絡を受けた後、他の魔法先生と総本山に乗り込もうとした際に
その総本山の方から連絡が長距離念波であったのだ。
即ち、総本山が包囲された事実と木乃香が連れ去られたという事実の二つを。

結果、総本山組とネギ・刹那支援組の二手に分かれることに。
と言っても、総本山が鬼達によって攻撃を受けておりいつまで持つか分からない以上は
支援に大人数を裂く訳にも行かず二人の支援に出たのは現状、龍宮と楓のみであるが。

「急いでいるんだろう？ここは私に任せて先に行け、刹那。」

「すまない、ここは任せた！」
「えー、先輩逃げはるんですかー？」

離脱する刹那に追いすがるべく月詠が動き出すが、龍宮から放たれた銃弾はそれを見逃さず。

「神鳴流に飛び道具は効きまへんえ？」

放たれた銃弾を当然のように斬り落とし、龍宮に対峙する月詠。
二兎追う者は一兎も得ず。まずは目の前の銃使いを倒すべきだと判断したのだ。

「知ってるよ……それに。」
「っ！？」

二挺の銃を構え、龍宮がそういった瞬間。
直感的にその場を飛びのく月詠。

飛びのいた場所に突き刺さったのは、巨大な十字手裏剣。

「2対1とは卑怯とは思うでござろうが、これも戦いでござる故に。しばらくの間、拙者達と相手してもらうでござるよ？」

木の上から楓が投げつけたのだ。
正直、気配を悟った様子はなかったので第六感で回避したのであろうが、
それだけでもあの剣士は厄介な相手と分かる。
野生のような直感は、下手に鍛えられた勘よりも恐ろしいと知っているのだ。

「いえいえ、構いませんよー。
ウチも丁度消化不良でしたからー。」

そう言って構えを取る月詠。
雑念を持って挑んだ刹那より、純粋に戦う為に立ちふさがったこの二人の方が
戦い応えは十分にあると考えたのだ。

「それはよかったでござる。」
「ほえ？」

そう考えた月詠が見たもの。
それは、１６人に分身した楓の姿であった。

『さて。甲賀中忍長瀬楓、推して参るでござる。』
「勿論、私も忘れてもらっては困るけどね。」

流石にそれは酷いんとちゃいますかー？と月詠が心の中で思ったかどうかは定かではない。

時間は少々遡る。
フェイト・アーウェルンクスは空を見上げ、彼が来るのを待っていた。
穏やかだった空は雲が立ち込め始め、あっという間に雲は月をも隠してしまう。
今晩は快晴だと聞いたんだけどな、と思っていると探知結界に魔力反応。
このスピードならば、接敵まで後僅か。
しかし、フェイトは慌てない。

やるべき事は既に決まっていたのだから。

「……出番だよ。ルビカンテ、ファルファレルロ。」

その声と同時に、召喚用魔方陣が地面に展開し2体の悪魔が姿を現す。

咆吼と共に、魔力弾の猛射が空を走った。

それは絶妙なタイミング。言ってしまえば対空砲火の嵐の中に飛び込んだと同義である。

だが、それだけで終わらせるつもりはフェイトにはない。

「……第二陣。グラッフィアカーネ、チリアット、ドラギニャッツォ、リビコッコ。」

その声と共に、再び召喚用魔方陣が展開。

4体の悪魔が姿を現すと同時に自らの役割を心得ているのか、空へと舞いネギへと向かう。

対空砲火を縫う形で接敵を試みるも、空へ上がった4体の悪魔達がそれを近づけず。

決して接近戦を挑まず、中距離からの魔力弾攻撃に徹させているのはフェイトの命令による。

あの『槍』は危険すぎる。そして、生半可な腕なら叩き伏せるだけの技量がネギにはある。

そう判断したフェイトの対応策の一つ。

何より、ネギ自身の魔法火力は知れていると判断したのも理由ではある。

確かに『魔法の射手』だけならば、そこらの魔法使い以上の運用を行うだけの力は

あるようではある。現に、百本単位の魔法の矢が悪魔達へと放たれ

るのが見える。
しかし呼び出したのは中位クラスの悪魔。その程度の魔法の矢では倒れない。
無論、全弾まとめて無防備に被弾すれば話は別だろうが……

「さて、後一押しとさせてもらおうかな。
バルバリッチャ、カニャッツォ、カルカブリーナ、アリキーノ、スカルミリオーネ。」

地上にいた2体と共に、空へ舞い上がる。
呼び出した悪魔の数はこれで総勢１１体。
ある意味壮観な光景ではある。

「戦力の小出しは愚の骨頂、と言うらしいからね。大盤振る舞いさせてもらうよ。」
そして、どう凌ぐか見せてもらうよ？ネギ・スプリングフィールド。」

魔力弾が空を彩るのを見上げ、そう呟くフェイト。
撃ち出された魔力弾を魔力障壁で防ぎ、あるいは撃墜し。
それでも多数に無勢の様相を呈する上空。
そもそも、１対１１の戦い自体が理不尽極まりないのだ。
尚且つ接近戦ではなく魔力弾砲撃がメインの為、気をつける必要があるのは誤射のみ。
それにしても、統率の取れた動きで波状攻撃を行えばある程度は避けられる。

「へぇ……そういう手があるのか。」

空を見上げたまま感心するフェイト。

全方位に『魔法の射手・光の矢』が降り注いだのだ。
まさに空だからこそできる手段。
無論、その程度で呼び出した悪魔達が落ちるわけではないし、痛打を与えた訳ではない。
しかし、距離を開けるには十分で。

一気に上空へ舞い上がるネギ、そしてそれを追う悪魔達。
雲の中にネギが隠れてしまったのを見て、雲に紛れて逃げ切るつもりかな？とも考える。
だが、その考えは次の瞬間吹き飛んだ。
膨大な魔力と共に、無数の鏃が雲を突き抜けて悪魔達へと降り注いだのだ！

「たった一撃で、１１体の悪魔を全滅させるだなんて……」

そう、たった一撃。その一撃が上空へと上がりつつあった悪魔たちを全滅させたのだ。
魔法障壁など紙屑のように突破して。

「あの時の槍……いや、あの槍は障壁をない物として貫いていた。となると、別の武器を持ってるのか彼は。」

上空より降りてくる彼の姿を見つつそう判断するフェイト。
ますます油断できない相手であると再認識する。
同時に、疲弊している今こそが絶好の好機であると。

「だけどこれで終わりだよ、ネギ・スプリングフィールド。
少々力押しになるけど、君相手ならそっちの方が有効そうだ。」

範囲を狭めた代わりに隠密性を最大限まで上げて展開していた結界

を解除。
まだ、向こうは気がついていない！
そして、気がつく頃には既に魔法は解き放たれている。
姿を現したのは、雲を割るかのような形で空より落ちてきた無数の巨大な石柱。

『冥府の石柱』。

大質量の巨大な石柱を召還し、相手へ……と言うよりは目的地へと落とすと言う
極めてシンプル且つ、威力の高い魔法である。
1ダースほどの石柱がネギのいた辺りを狙って落下し、轟音と共に地面に突き刺さる。
着弾と共に巻き起こった土煙が晴れた時、そこには石柱群がオブジェのようになっていた。

「……これで、死んだと思うけど。」

だが、相手は石化から謎の手段で逃れるような相手。
あれが何だったか分からない以上、油断はできない。
死体の確認でもするか。そう思いながらフェイトは歩き出す。
あの石柱が彼にとっての墓標になってればいいんだけどね、と思いつつ。

空から落ちた石柱を遠目から目の当たりにし、桜咲刹那は足を止めてしまっていた。
山を下り始めた辺りから遠くの方で開始された空中戦の光。
ネギ先生と敵の何者かが交戦をしているものと判断していたのだ。
空から降り注いだ光を見た限り、先生が勝ったものだと思っていた

のだ。
しかし、あれほどの巨大質量が無数に落ちたとなれば……最悪を覚悟する必要がある。
木乃香お嬢様を直に助けに行けるのは自分1人である、と言う事を。

一瞬、先生を探しに行くべきかどうかを悩んだがそれ所ではないと判断する。
こうなってしまった以上は、自分一人で助け出す事を念頭に置くしかない。
そう決意すると、刹那は再び駆け出し始めた。

ほぼ同時刻、当然ながらその石柱の姿は『天ヶ崎千草』達の方からも捉えられていた。

「何や、ほんまに倒しおったんかいな。」

一通り召喚陣の構築を済ませた『天ヶ崎千草』がそう呟く。
あれだけの巨柱群を防ぎきるなど、どう考えても不可能である。
仮に防ぎきったとしても無事では済むまい。
猫の手にもならない『掌握派』の方々もその辺は分かったのか、好き勝手な事を口々に述べている。

「さて、皆様。ようやく準備も整いましたんで、予めお知らせしておいた位置に
付いて頂けまへんでしょうか?」

一しきり談笑（?）が終わったのを見計らって『掌握派』の面々に声をかける。

「しかし、本当にこれは必要なのかね？」

だが、その扱いに不満を持つものも当然いるわけで。
そもそも、前線に出てくること自体が不本意であるのだ。
ましてや過去に召喚し、扱う事すらままならず暴走したリョウメンスクナである。
もし失敗すれば、真っ先に死ぬのは自分たちなのだから。

……そう、この『掌握派』にはかつての東西大戦においてリョウメンスクナを
対西洋魔術師への切り札として用いようとした者達がいる。
正確には、その者たちの後を継いだ者と言うべきか。
当時、直接封印解除に携わった術者達は、結局制御しきれなかったリョウメンスクナの
犠牲者第一号となったのだから。
そんな先代たちの二の舞にだけはなりたくない。

「勿論どす。皆様のお力あってこそリョウメンスクナは完璧な制御が実行できる。
そうさっきも説明させてもらったはずどすえ？」

「……それはそうなのだが。」

確かに、そう言う説明は受けている。
受けてはいるのだが……何故今更になってそんな説明をするのか。
最も、最初の段階でそう説明を受けていればＧＯサインは出さなかったのか、と
聞かれればそういう訳でもないのだが。
この辺は純粋に不信感の問題ともいえる。

「勿論、最初にこの話を説明せえへんかったウチにも問題はあります。
せやけど、これくらいは必要なリスクやと思いまへんか？
封印解いたはええけど、また暴れだした言うたらそっちの方がややこしい話どすえ？」
「むぅ……」

確かに、過去でこそ『赤き翼』が『ナギ・スプリングフィールド』がいたからこそ、
あの程度の被害で済んだのだ。本来ならば、関西中の術者たちが総力戦を挑んで
封印を施さねばならないような相手なのである。
そして今現在『赤き翼』は解散状態、『ナギ・スプリングフィールド』に至っては行方不明。
そもそも西洋魔術師に頼って再封印等という屈辱は二度とごめんであり、だからと言って
制御できないリョウメンスクナを相手になど命が幾らあっても足りない。

結局の所、ここまで来てしまった以上は言われた通りにするしかない訳で。
何しろ、この儀式に関しては『天ヶ崎千草』が一手に握ってしまっているのだから。

舞台一帯を丸々使用した巨大魔方陣の中央に『天ヶ崎千草』。
その彼女を囲むかのように『掌握派』の面々が立つ。

そして、詠唱が始まる。
大鬼神を覚醒させる為の、詠唱が。

第27話：そして、目覚める前の話（後書き）

斬り合いとか難しくて書けないよ！（おい

＞二刀流
不利な点はＷｉｋｉに聞きました。
後、二刀流が本当に考慮の外なのかは知りません（何
獲物を選ばず、とか言ってる事を考えると二刀流も行けそうな気はするんですが。
後、これで月詠が実は相当な年齢とかだったらどうしよう（待て。

＞せっちゃん
実際、ネギが宜しく！って言ったんだから任されました！とやってればよかったんですが。
そこで人に任せきれないのがせっちゃんかなぁ、と思った次第。
救出相手がこのちゃん、と言うのもあるでしょうけどね。

＞長距離念波
実際、連絡手段が電話だけとかそういう事はないだろう、とｗ
魔法的な手段で連絡が取れる以上、そういう手段があってもいいと思った次第。
……と言うか、エヴァンジェリンさんが京都にいながら学園長と会話してるんですよね。
この場合、エヴァだからできたという可能性もありますがｗ
まぁ、京都市内なら大丈夫だろう（おい

＞ツケ
さり気に二重取りなんですよね（おい

＞その頃の小太郎
既に戦闘不能で脱落状態と判断されています。

＞ルビカンテさんたち
元ネタはダンテの『地獄門』だそうなのでそこから引っ張ってきました（何。
知能はそれなりにあるけど喋らない悪魔だぞ、と（え

＞全方位魔法の矢
グレンキャノンもだ！（嘘

＞封印解除儀式
え？もうそんな時間なの？とお思いの方。
もうそんな時間なんですと言う事でひとつ（何。

第２８話：そして、大鬼神覚醒の話。（前書き）

お待たせいたしました。

「一体何が始まるんです？」

「第三次大戦だ。」

（ｂｙコマンドー）

第２８話：そして、大鬼神覚醒の話。

第２８話：そして、大鬼神覚醒の話。

フェイト・アーウェルンクスは、今しがた撃墜した相手であるネギ・スプリングフィールドの
生死を確認するべく、自らが落とした石柱群が落下した場所を歩いていた。
本来ならばここまでする必要も無く、一時的・永久的な石化措置でも構わなかったのだが、
謎の手段を用いて石化を容易く解除できる以上、ここで潰すべきかと判断したのだ。
逆に言えば、ここで倒せてないならば後々厄介な事になる。

とは言え、まるでできそこないのストーンヘンジのようになってしまった場所で
一人の人間を探すと言うのは困難に近い。
ましてや、石柱に押しつぶされたと言うなら死体が見つからない可能性が大きい。
石柱を一つ一つ砕いて確認していく、と言うのは流石に非効率に過ぎる。
呼び出した悪魔たちが『全滅』してなければ人海戦術も取れたんだけど、と内心思う。

そう思いながら歩き回る事5分。見つけた収穫は……

「杖一本、か。」

恐らく彼が握っていたであろう杖。どことなく見覚えがあるので間

違いあるまい。
しかし、杖はここにあるのにその持ち主がいないとはどういうことだろうか？
普通に考えれば、石柱群に巻き込まれた際に杖を取り落としたと考えるべきだろうが……

その瞬間。
一条の魔力の奔流がフェイトに直撃する。
それを受け止め、たわむ魔法障壁。
障壁が完全に破壊される前に、障壁を強化。

矛と盾の激突は、盾の勝利で終わる。
最も辛勝に近い勝利ではあるが、勝ちは勝ちだ。
例え、後数秒照射を受けていれば障壁が持たなかったとしても。

「へぇ……やっぱり生きてたんだね、ネギ・スプリングフィールド。」

そう言って砲撃地点に眼を向けるフェイト。

「お陰さまでね。しかし、名前を名乗ったつもりはないんだけど？」

砕けて短くなった石柱の上に、ネギ・スプリングフィールドがいた。
手にしているのは別の杖。
そして、どこで着替えたか衣服も異なっている。

「やれやれ、君は君自身の価値と父親の名声をもう少し自覚した方がいいよ？
確かに、年齢に騙されればバレないかも知れないけどね。
ナギ・スプリングフィールドを知ってる人間ならば、君と関連付け

るのは容易い話になる。
後は、どうやって年齢を誤魔化してるのかと言う話になるだけさ。」

そう言いながらもネギを観察する。
機械で作られた『弾倉と引き金のついた』奇妙な杖。
明らかに杖として何かおかしいが、その意匠は間違いなく魔法使いの杖だ。
そして、要所要所を鎧で固めた奇妙な魔力を持つ服。
見た目にはさほど防御力は無さそうに見えるが、ただの服という訳でもあるまい。
……どれも見たことのないマジックアイテムである。

「なるほど……と言う事は、親父を知ってたりするのか？」
「さてね？　知ってても教える義理は無いと思わないかい？」

恐らく、先ほどの一撃はあの杖の力で増強して放ったものと考える。
つまりは科学と魔法の融合か？

「しかし、君はどれほどマジックアイテムを持ってるんだい？
まるで、マジックアイテムの博覧会でもみてる気分になってくるんだけどね。」
「そっくり返してやるよ。知ってても教える義理はないってね。
それに……教えてもお前に分かるとも思えないね。」

そう言って、杖を構えなおすネギ。

「なら、教えてくれても問題はないと思うけど。
実は君自身も知らない、なんていう落ちは無しだよ？」

杖を投げ捨て、対峙するフェイト。

「古代ハダリア人が作成したアンチグレズデバイス、と言って分かるのか？」

ネギの口から出てきた言葉は、全く意味のわからないものであった。
ハダリアなどと言うものは聞いたことが無い。歴史に隠れた種族か何かだろうか？
それに、アンチグレズと言うからには『グレズ』なるものが存在するのであろうが、
そんな存在も聞いた事はない。

「ま、由来や来歴を知ってもしょうがないのも事実だね。
今はその杖が極めて危険な物だ、と言うことが分かれば十分だよ。」

恐らく、あれが全力の砲撃と言うわけではあるまい。
少々相手の戦力を上に修正する必要がある。
しかし、逆に考えればあれを振り回すことで例の槍は振り回される恐れがなくなったのだ。
少なくとも、進んで白兵戦を行おうという気は向こうには無いだろう。

「お前を倒す為に用意したんだ、当然だろう？
さっきの一撃は全力ですらないとだけは言っておく。」
「そんな事は承知の上だよ、ネギ・スプリングフィールド。
それに君だけが隠し玉をもってるとは思わないことだよ。」

彼が呼び出した悪魔は『神曲』のマレブランケから名を取られている。
その数は総勢１２体。
そして、彼が呼び出したのは１１体のみ……つまり、１体残って

いるのだ。
現状、最大最強の『マラコーダ』と呼ばれる悪魔が。
先ほどまでは質より量。ここからは量より質。

両者が互いに構えあった時。
強大な魔力と共に光の柱が立ち上る。

「……！？」
「余所見とは余裕だね？　来い、マラコーダ。」

一瞬、ネギがその光の柱に目を向けた瞬間を見計らって、最後の一体を召還する。
それが、戦いの合図。

……だが、その戦いは突然終了する事となる。
大鬼神の目覚めの咆吼が響き渡る事によって。

白き光の柱が立ち上った時点で、付近の生物達はこぞってここから離れようとしていた。
動物、鳥、魚、虫にいたるまで。
逃げ切れないと悟った彼らは、何かに脅えるかのように自ら死を選ぶ。
湖に飛び込み、何かに頭をぶつけ、高所から飛び降り。
まるで、今死ななければ『何か』に殺されてしまうかのように。

だがしかし、それでも間に合わなかったのだ。
『それ』の目覚めには。

その咆吼に音は存在しなかった。

しかしその咆吼は、京都全域に正しく『均等』に響き渡った。

その咆吼に呼応するかのように大地が動く。
震度にすれば僅か3弱。
しかし、それがもたらしたものはそれ以上のおぞましい物であった。
響き渡った咆吼による『狂気』によって動物達が死に、あるいは狂う。
動物でそれならば、人間が無事で済む訳が無い。
感受性の高い者や赤ん坊、身体・精神が弱い者などが同じ運命を辿る。

表のみならず、裏においても被害は巻き起こっていた。
響き渡った咆吼は結界・封印すら揺るがせたのだ。
結界を維持していた術者は全身から血を吹き倒れ、魔を封じた封印はその力を失う。

たった一つの聞こえざる咆吼。
それは終末を呼ぶ笛の音なのか。

そして、雨が降り始めすぐに嵐となる。

麻帆良学園学園長室にて、関東魔法協会理事である近衛近右衛門は増援に向かった
魔法先生からの京都からの最新報告を受け取っていた。

京都全域で霊的異常発生。原因は不明。
綻びた封印などから悪霊などの出現を確認。
現時点では生徒達の安全は保証されているものの、いつ結界が破ら

れるかは不明。
西の総本山とは通信が途絶。
至急、増援を求む。

京都とは霊的守護地であり、そこに封印される悪鬼・悪霊の類となれば最終的に
どれだけの数・質になるかなど想像することは不可能。
麻帆良の全魔法戦力を差し向けてもいいぐらいではあるが、現実的にここを空にする訳に
行かないのも事実。
最大戦力であるタカミチは間の悪い事に出張中。
エヴァンジェリンさえ生きていれば、何とか呪いを騙くらかして京都へ派遣する、と
言う手も使えたのではあるが。

だがしかし、ない物強請りをしても始まらない。
このまま放置していては魔法の隠匿どころの騒ぎではなくなってしまう。
麻帆良に常駐している他魔法組織の協力も視野に入れて動く必要が出てくるだろう。
そう考えながらも必要な指示を出す。

娘婿や孫娘、そして『英雄の息子』の安否を心配しつつ。

関西呪術協会総本山。
そこは既に戦場となっていた。
東からの増援を受け、結界を急造ながらも再構築しなおして一息ついた後の一撃。
再構築した結界が再び綻び、鬼達の攻撃を受けることになったのだ。

その鬼達にしても、先ほどまでとは違って戦闘力が上昇している状態にある。
一匹の鬼を斬り倒しながら、光の柱が立ち上った方を見る近衛詠春。

「……復活したというのですか、リョウメンスクナが。」

あの咆吼に感じたものは、間違いなくスクナの気配。
だがしかし、過去に自分達が戦った時にこのような現象が起きた覚えは無い。
何が起こるか分からない以上、この総本山を放棄する必要があると判断する。

「こうなってしまっては……」

そう思いながらも、鬼達を切り伏せていく。
こうなるのであれば、自分が出て行くべきだったのか。
例えナギの息子だとは言え、スクナを単独撃破できるとは思わない。
刹那がいてもそれは変わらない。圧倒的過ぎる戦力差があるのだ。
だが、それでもアレは倒さなければならない。

その為に、今は生き延びる為の努力をする！

龍宮・楓ＶＳ月詠の戦いは圧倒的な数の優位を誇りつつも全くの互角であった。
所詮は分身、戦闘に耐えうる密度を持つのはわずかに４体。
実質は６対１の戦いでしかない。
それとも、それだけの数を捌き戦った月詠の戦闘力こそ賞賛に値するのか。
しかし、いつまでも続くかと思われた戦いは『咆吼』によって唐突

に終了する。

「くっ……無事かい、楓？」

「そちらも無事で何より。しかし……さっきのは一体何でござるか？」

まるで背筋に氷柱を突き刺されたかのようなプレッシャー。

恐らくは、戦いに生きるものならば普通の人間よりも強く感じ取ってしまうであろうそれ。

……ならば、戦闘狂はどうなるのか？

月詠は膝を地に着き、空を見上げて笑い続けていた。

狂気が一回りして、人として終了してしまったのだ。

もはや、彼女が刀を振るう事は……ない。

「こちらの少年もやはりダメでござるな。

辛うじて生きていたとしても、さっきのでアウトでござろう。」

ぼろぼろの姿のまま倒れていた、学ラン姿の少年の死亡を楓が確認する。

「こちらも、このまま生きてるのも辛いだろう……安らかに眠るといい。」

月詠に銃を突きつける龍宮。

そして、銃声が森に響き渡った。

その咆吼を聞いて、思わず桜咲刹那は蹲ってしまった。

恐れを抱いたのではない。体中の『血』が暴れているのだ。
ただの人間ではない『化物』としての血が、闘争と殺戮を訴えかけてくる。
理性を捨てて、本能のままに暴れよとざわめくのだ。

「……くっ！」

頭を数度、近くの木に打ちつけ、正気を保つ。
向こうに見える光の柱の向こうに『何か』が見える。
恐らく、先ほどの『咆吼』の主が。

もはや一刻の猶予もならず。

そう判断した彼女は忌まわしき自分の力を解放する事にする。
白い翼。『人間ではない』自身の象徴。

しかし、それでも彼女は助けると決めたのだ。大事な友達を。
例え、助けた後で罵られたとしても。
だから彼女は空を飛ぶ。

お久しぶりのネギ・スプリングフィールドです。
悪魔の攻撃どうにかこうにか退けつつ、『刺し穿つ死棘の槍』を投げて撃退したと思ったら
今度は上空から石柱群の空爆を受け死にそうになるも、ＡＲＭＳを脚部限定解除する事で
何とか乗り切り、出来るだけ相手を倒せそうでそれほど目立たなそうな武器防具を
引っ張りだして、いざ勝負だというところで響き渡った『咆吼』。

思わず、膝をつくほどの圧迫感。脳も揺さぶられてる感じ。
どうやら、それはあっちの白髪の少年も同じらしい。

「これほどとは……リョウメンスクナ、甘く見すぎていたかな？」

立ち直りはあちらの方が早い。どういう体してるんだあいつ？
しかしリョウメンスクナ……聞いたことないな。
まぁ、どう考えてもあの光の柱から現れようとしている『アレ』だとは思うんだけど。

全長１００ｍ－いや、１５０ｍ近くはあるのか？－の四本の腕を持った巨大な鬼。
流石に、アレを相手とかマジ無理ゲーだろ……。
全力全開で挑めば何とかなる、のか？

そこに上がる咆吼。
……マラコーダすっかり忘れてた、ってこっちもこっちで何かおかしい。
と言うか、さっきの『咆吼』で狂乱状態にあるようで。
敵味方の区別関係なく、襲い掛かって来た！！

口から放たれる無差別魔力波を避けながら『杖』を使って『魔法の射手・光の矢』を放つ。
杖でブーストしても効かないか！？

「少し彼女と話をする必要があるようだね、これは。」

そう言いながらも、攻撃を避けつつ遠ざかりつつある白髪の少年。

「逃げる気か？」

「無事たどり着けたら相手してあげるよ、ネギ・スプリングフィールド。
頑張ってそれを倒すことだね。」

それだけ言ってそいつが水の『扉』で退場するのを確認。
ああ言った手前、実はどこかで見ていますなんて事はあるまい。

とっとと片付けて、追いつくことにしよう。

光の柱より姿を現したリョウメンスクナの姿を見て、『天ヶ崎千草』は笑みを浮かべていた。
ようやく、ここまでたどり着いた。
いや、ここからこそが本当の始まりに過ぎない。

「さて、皆さんご苦労様でした。」

そう言って見渡せば『掌握派』の面々の半分が、使い物にならなくなっている。
スクナの咆吼は、正に平等だったのである。
半分しか残らなかった事を不甲斐なく思うべきか、半分は残った事を褒めるべきか。

「これが、これがスクナだと言うのかね！」
「勿論どす。皆様の中にもご覧になった方がいらっしゃると思いますけど？」

確かに見たことはある。
だが、過去に暴れたスクナは精々が５０m前後。
しかし、このスクナは１５０m近いサイズを誇る。

それに咆吼一つでここまでの事態を引き起こすような事はなかったはずだ。

「つまり、これこそがリョウメンスクナの完全なる姿ですわ。この力が皆さんの為に振るわれる訳どすえ？もっと嬉しそうな顔をしたらどないですか？」

『天ヶ崎千草』の背後のリョウメンスクナが、舞台の上に右手の一本を差し伸べる。

「これから、とっときの特上席で面白いものを見せて差し上げますわ。
さぁ、皆さん手の上へどうぞ？」

そう言って、『千草』自身が率先してスクナの掌に乗る。
思わぬスクナのその姿に度肝を抜かれ、思考能力が落ちた状態のまま誘われるように掌に
乗る『掌握派』の生き残り達。

雨風を感じながらの１００m近い上昇は、決して快適なものではなかったが直に終わる。
もし、晴れているのならば辺り一面が見渡せるであろう。

「右手の方にちらっと見えるのが、総本山ですわ。
さてさて、リョウメンスクナの力をご覧あれ。」

そう言うと、何かを唱える『千草』。
それに反応するかのように、スクナは巨大な口を開く。
同時に、左手で右手に乗っている人間を庇うように包む。外が確認できるように。

口に集まるのはスクナ自身が蓄えていた魔力、そして周りの霊脈から取り込んだ魔力。
かき集めたその膨大な魔力は、一条の破壊を呼ぶ光となって放たれる。

そして、総本山は閃光と共にあっさりと消し飛んだのである。
結界などはまるで無意味で。
後に残ったのは、変形した山と巨大なクレーターのみ。

その一撃がもたらした光は、一時的に昼のような明るさを夜に生み出し、
衝撃は離れた場所にまで伝わり、窓ガラスが砕け散った家屋もあったと言う。。
そして、巻き上げられた土砂等が空にまで昇り、雨は泥まみれの物となる。

まさに、大鬼神覚醒の号砲としては相応しい一撃であった。

第２８話：そして、大鬼神覚醒の話。（後書き）

＞ネギの装備
「マジカルデバイスＳｈ（シューター）」と呼ばれる武器でございまして。
機械的に魔法を発動させる武器（兼防具）、と言う物であります。
（出展：異界戦記カオスフレアＳＣ）
まぁ、リリカルなのはのアレを想像してもらえればｗ
データ的にはチャンバースタッフ（出展：アルシャードガイア）辺りも流用する
つもりですが。デザインとかネタ的に一緒だし（え

ダイの大冒険からヒュンケルとかラーハルトのあれを持ってきても良かったんですがｗ
魔法通じなくなりますしｗ
でも、飛び道具無いんですよね、あれｗｗｗ
まさかブラッディスクライドとかぶっ放す訳にいかないし（ルーン効果でやっていい、と
言う気もしたんですが流石に自重したという）

＞マラコーダさん
この辺の元ネタは薬師寺涼子シリーズの黒蜘蛛島からでございます。
（実はもう１体、的な意味で）
最も、悪魔の名前聞いてないネギからすると事前知識以前の問題と言うｗ
戦力の小出しは愚の骨頂みたいな事フェイトさん言いつつ、
やってることはそれだというｗ
切り札だから気にしないで下さいｗ

＞咆吼ＶＳ結界

結界の中にいた人たち自体はまだ大丈夫ですｗ
ただ、ホテルの外では東西力を合わせて溢れ出る悪鬼悪霊の類と戦うハメに……
助けて陰陽師！（謎

ちなみに、咆吼の範囲は最初は麻帆良まで届く予定でした（何

＞鬼達のステータスＵＰ
リョウメンスクナの常時効果に「種別：鬼は＋３／＋３、先制攻撃、側面攻撃、トランプルがつく」みたいなのがあると思ってくださいｗ

＞月詠さん
ハイパーバーサーク！と言う方向もあったんですが（え

＞自分達が解いた
解いてません（おい。
やったのは千草さんです。

＞スクナのサイズ
割と適当です。
とは言え、無茶苦茶にでかいという訳でもなさそうなんですよねぇ。
下手したら３０ｍちょいしかない可能性も……。

１１／２０
かねてからの予告通り、日本海まで突き抜けた部分を訂正。
具体的な爆発による影響はぼかしておきました（おい。

後、小太郎の辺りを訂正。

第２９話（偽）：そして、３年後の話（前書き）

最初に謝っておきます、ごめんなさい（え
閃いた以上は形にしておこうかな、と。
まぁ、ぶっちゃけネタです。

第２９話（偽）：そして、３年後の話

とある大都市のとあるマンションの一室に、彼の姿はあった。
彼の名はムギ・シルバームーグ。
マンションもその名前で借りてあるし、戸籍だってその名前で用意してある。
勿論、当然のことながら偽造であり偽名である。
見る人間が見れば一発で分かる。彼はネギ・スプリングフィールドだと。

あの後、彼が取った行動。
ぶっちゃけてしまえば逃げ出した、となる。

『闇の福音』の時こそ、数は力だと言わんばかりの手段で相手と戦った訳であるが
（結界によって『闇の福音』の全力稼働時間に制限が掛かっていたのも大きいが）、
今回ばかりはそうも行かず、準備する時間すら存在しない。
無論、自身が全力全開をもって挑めば勝てない相手ではない、と言う話なのだが……

そこでふと考えたのだ。
何故自分が戦う必要があるのだろうか？と。
無論、このままアレを放置しておけば生徒達にも危機が及ぶし、そもそもにして
生徒が危険に晒されている状態である。その為に戦う事は間違いではない。

……だが、元はといえば学園長の無茶振りからスタートした話な

のだ。
素直にハワイにしておけば、ここまでの大惨事にもならずに済んだのである。
そして、何故自分がその後始末を命懸けでやる必要があるのか？
汚い言い方になるが、「てめぇのケツはてめぇで拭け」と思ったのである。

無論、ここで彼が逃げ出しても責められる筋合いはない。
彼自身は知らないが、敵は飛騨の大鬼神『リョウメンスクナ』。
一人で戦うなど正気の沙汰を疑われる前に死にに来たと思われるだけである。
ただ、自分の生徒達を放り出して一目散に逃げたとなると少し問題である。

そこで彼は考えたのだ。
「俺も死んだことにすればいいんじゃねえの？」と。

思い立ったが吉日とばかりに、『スキルニル』で自分のコピーを作り出す。
その後『アイギスの盾』－メドゥーサの首ありＶｅｒ－で石化させる。
【文珠】による〔石〕〔化〕では何となく不安だったのだ。
最後にそれをバラバラにして、自分の石化バラバラ死体の完成である。
杖もどこかに放り出したままだが放置。
これで、何者かと戦った挙句石化された上にバラバラになったと言う状況の完成である。

その後に語ることは少ない。
〔転〕〔移〕で自分の部屋に戻って最低限の物－『別荘』とか－を

かき集め、
その後イギリスまで〔転〕〔移〕したのだ。
幸いにして、資金面などで困ることはありえない訳で。
ほとぼりが冷めるまで動向を集めてながら暮らしていたのである。

あの後、『リョウメンスクナ』は京都から麻帆良学園都市までを横断。
無論、後に残るのは死と破壊のみ。
麻帆良学園都市にて壮絶な防衛戦が繰り広げられたそうではあるが、最終的には壊滅。
後に残ったのは瓦礫の山とへし折れた世界樹だけだったという。

この段階で既に魔法と言う非常識の存在は世間に知られるハメになっている。
嵐と大雨が姿を隠すとは言え、巨大な鬼が行く手を阻む物を破壊して回っているのである。
さらに言えば、魔法を隠蔽するよりも露見するスピードの方が早すぎたのだ。

その後も大鬼神の進撃は止まる所を知らず、魔法組織の拠点と目される場所に次々と攻撃
結果として日本における魔法組織のほぼ全てが壊滅の憂き目を見たことになる。

無論、魔法使い側とてただ黙ってみていた訳ではない。
それに、こうなっては自衛隊の出動も発生する訳で。
まさに怪獣映画のような状況が発生したと言っていい。

……最も、結局スクナの進撃を止めるには至らなかったのであるが。

『リョウメンスクナ』自体の力もさることながら周りを固める＜分体＞の存在、
そして行く先々でその『神気』によって溢れ出す悪霊などの存在が、スクナを阻むのだ。

結局の所、日本全土を破壊しつくすまで『リョウメンスクナ』は動きを止めなかったのだ。
いや、最終的に『リョウメンスクナ』は朝鮮半島を渡り、中国からインド方面を経由してヨーロッパへと迫る勢いであったのだ。

そう「だった」である。
魔法使い、そして国連の総力を結集した戦いが中東にて発生。
これによりようやく『リョウメンスクナ』は消滅する事になる。

人の住んでいない砂漠だから、と魔力付与された核爆弾やらが投下されたと言う話もちらほらと聞かれるが、真相は闇の中である。

スクナの脅威は去った物の、世界は今だ混乱を引き起こしている。
そう、魔法の存在である。
どう向き合って行くのかは、これからの世界の課題とも言える。

最も、ネギ・スプリングフィールドにはそんな事は関係ない話である。
決して関係ない訳ではないのだが、さしあたって直に解決しないとならないものでもない。

しかし、これからどうしようかな?と彼は考える。
魔法の存在が公になってる以上、それで細々と食べていくのも手で

はある。
あまり目立ちすぎると、自分の存在が明らかになってしまう可能性も捨てきれない訳で。
一応、誤魔化してはいるのだが自分の事だ。どこでポカミスをやらかしているか自信が無い。
とは言え、ただ食っちゃ寝ニートするのもどうかと言う話だし、魔法以外に何かできるか、
と言われると……教師くらいしかない。
予備校とか塾かなんかで講師しつつ、錬金術関係を副業にしてやっていくかなぁ？
そんな事を思いながら求人広告に目を通すネギ・スプリングフィールドであった。

―完―

第２９話（偽）：そして、３年後の話（後書き）

あくまでもネタです、念の為ｗ
「今日は４／１じゃねーぞ！」と言われてもしょうがないｗｗ

＞３年後
割と適当です（何）

＞アイギスの盾
実際の所、盾にはめ込んだ首にまだ石化の魔力が残ってるのかどうか（え。
……まぁ、切り落としてもまだ使えたみたいですし、大丈夫でしょう。

＞自殺偽装
まぁ、フェイト辺りは生きてる事に気がついてるかもしれませんｗ
スクナの一撃で死んだかな？と思ってるかもしれませんけど（どっちだよ）

＞イギリス
特に理由はありません。ふっと浮かんだのがイギリスでした。
まぁ、故郷には帰れませんけどねｗ

＞中国からインド方面
ロシアは寒い（何

＞ＶＳスクナ戦
スクナ自体も性質が悪いんですが、＜分体＞とかの数が膨れ上がりすぎて

厄介すぎる状態になってた、と言う事にして置いてください（え。
戦争は数だよ兄者！

と言うか、そこまでスクナ強いか？とは自分でも思う（おい
ちょっとやりすぎた感はしないでもないｗ

＞魔力付与核爆弾
聖なる手榴弾みたいなもんっすよ（何

１１／２０
ちょこっと前書きつけたし

第２９話：そして、『天ヶ崎千草』の話。（前書き）

短くてごめんなさい。キリが良かったんで……

第２９話：そして、『天ヶ崎千草』の話。

それを見た誰もが、声もなかった。
関西呪術協会総本山は既に無く。
そこには巨大なクレーターが一つあるだけであったのだ。
たった一撃によって。

「何と言う……」

『掌握派』の生き残り達は、口に出さずとも全員同じ事を思っていた。

―自分達は、とんでもないモノを復活させてしまったのではないか？―

唖然としている彼らに上から掛かる声。

「どないしましたんや、皆さん。
信じられへんもんをみた、言う顔をしてますえ？」

近衛木乃香もとい、『天ヶ崎千草』である。
その顔は、喜びに震えているようでもある。

「……まさか、これほどの物とは思わなかったのだよ。」
「そうどすか。喜んでもらえたようで何よりですわ。」

明らかに震えと恐怖の混じった声を、『千草』はわざと曲解する。

「さっきの一撃はそうポンポン撃てるもんやありまへんさかいに、

ここからは地道に押して行くしかないわけですけど、その辺は堪忍しておくれやす。」
「ま、待ってくれ！　ここからとはどういうことだ!?」
事も無げに進撃と侵攻を開始を告げる『千草』に慌てて問いかける『掌握派』の1人。
そんな彼に、「何を言ってるんだこいつ?」と言う不思議そうな顔をして『千草』は言う。

「決まっとりますやろ?　このまま関東まで乗り込んで麻帆良まで行くに決まってますわ。」
「そ、そこまで今はする必要は無い！」

あくまでも目的は『関西呪術協会の掌握』であり関東との全面戦争は二の次だ。
無論、最終的にはそうなる可能性もあるのだが今は『こちらにはスクナがいる』と言う
その主張だけで十分なのだ。
言ってしまえば核ミサイルなどの抑止力のようなものである。
「手を出せばスクナを暴れさせるぞ」と言う恫喝になれば今はそれでいい。
それに、スクナは強すぎる。下手に動かせばそれだけで死人が大量に出かねない。
いや、既に覚醒時の咆吼で死人は出ているであろう。
そちらの方にも対処する必要があるし、自分達の組織の再構築も必要である。
今は、外よりも中をどうにかするほうが先なのだ。

「さよですか?　このまま行ったら確実に麻帆良落とせますえ?」
「必要ないと言ったのだ!!」

「それは残念どすなぁ。ええ夢、見せたろうと思いましたのに。」

それはどういう事だ？そう聞こうとした矢先に、ゆっくりと被さった掌が下りてくる。

そう、このままでは手と手の間に挟まれてしまう。

式を使い、空を飛んで逃げようにも包まれた状態の手から逃げ出す事もままならず。

丁度、掌の間で空間が出来ているだけの状態である。

「な、何をする気だ！？」

「裏切る気か、貴様！！」

押し潰されないように精一杯の無駄な足掻きをしながらも、口々に罵る『掌握派』達。

そんな彼らをまるでゴミを見るような目で『千草』は見ていた。

「裏切る？　あんたら阿呆ちゃうか？　いや、阿呆やったな。はなっからあんた等の思うとおりに動くつもりなんかあらへん、言うだけの話や。」

「貴様……端からこれが望みだったか！

我々に変わって西を支配しようと言うつもりだったな！！」

氷点下のように冷たい『千草』の声。そんな彼女に『掌握派』の１人が噛み付く。

実際問題、後は口を拭って『近衛木乃香』の振りをしておけばいい。

総本山が消失した以上、関西呪術協会代表・近衛詠春もまた運命を共にしているであろう。

そうなれば近衛家の跡取りは彼女しか存在せず、否応なく魔法の世界に足を踏み入れる事になるのは想像も難くない。

そして実権を握れば、後は西洋魔術師を追い出すも敵対するも彼女次第である。
更に言えば、状況が許せば関東魔法協会すら乗っ取る事が可能なのだ！！

しかし、彼女は溜息を吐くだけ。
所詮その程度の観点でしか物を見れないのか、と。
いや、この場合自分の真意を見破られた方が恐ろしい話ではある。

「大事なことやからもういっぺん言うたるわ。あんたら阿呆やわ。ウチがそんなもんの為にこないやっとると思うとるんか。」
「な、ならば……何が目的だというのだ！」

再び溜息を吐く『千草』。
何も分かっておらず、何も調べようともしなかった生き残りにほとほと呆れたのだ。
本当にこれで上に立っていたのか、と。

「『天ヶ崎』は、父様も母様もおらんようなったウチを引き取った人の名字や。
ほんまの名字はな……」

その名を聞いた時、『掌握派』の生き残りの面々は戦慄した。
そう。はるか昔より『リョウメンスクナ』の封印を守る家があった。
西も東も関係なく、ただ封印を守る為に存在する家。
スクナを西の最終兵器として復活させようとした面々によって、根絶やされたはずの家。

その生き残りが、今自分たちの目の前にいる。

「おかしいとは思わんかったか？『リョウメンスクナ』の完全復活が、
木乃香お嬢様の魔力だけで、ほんまにどないかできると思っとったんか？
それで復活したところでええとこ3割、言う所や。
大鬼神の完全復活には、それに相応しい儀式と手順がないとあかんのや。」

だからこそ、かつて復活した『リョウメンスクナ』は本来の力を発揮しなかった。
莫大な魔力を用いてただ力任せに封印を打ち砕き、強制的に起こしたのだろう。
その結果がスクナの暴走である。

完全復活のための儀式魔術。
それは、焼け落ちた実家の地下から見つけた本を頼りに彼女が復活させた儀式魔術。
無論、ただ復活させるだけではない。
たった一つの目的の為に、執念で為しえた物。

「あんたらがウチの計画に乗ってくれて、ほんまに助かったわ。
その代わり言うたらあれやけど、ええ夢、見れたやろ？
後はあの世でウチと父様、母様に詫びいや。永遠にな！」

次の瞬間、掌同士は合わされる。
ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと。絶望で押し潰すように。
そして、『掌握派』首脳の面々はここに全滅した。

「終わってみると、あっさり過ぎて何の感慨も沸かへんなぁ。」

『リョウメンスクナ』の手に残った物を捨てさせながら呟く『千草』。

だが、感慨が沸かないのは今だなさねばならぬ事が残っているからとも思う。

「で、今更になって登場とは遅すぎまへんか？　雇い主はんは全滅しましたえ？」

「そう言わないで貰いたいね。正直、これほどまでとは僕も想定外だった。」

後ろを見れば、そこにいるのは宙に立つフェイト・アーウェルンクス。

その表情からは何を考えているのか読み取れない。

「それで、復讐を終えた君がこれからどうするのか。それを聞いて見たい所だけどね。」

「終えた？　何を寝ぼけた事を抜かしてますのや？　まだ終わっとりまへんえ？」

「……終わって、いない？」

首を傾げるフェイト。

彼女の目的は両親の敵討ちではなかったのか？

確かに、その目的の為だけに完全な『リョウメンスクナ』を呼び出す必要は全くない。

極端な話、今の彼女の腕前ならば確実に術者としての腕前で殺せるだろう。

スクナは過剰すぎる火力なのだ。個人に対して使うような代物ではない。

人間1人を殺すのに列車砲を持ち出すようなものだ。

「君は、まさか世界に喧嘩を売るつもりでいるのかい？」」
「少しちゃうな。ウチの目的は……」
次の瞬間、『千草』の手が振られる。
同時に放たれた呪符が、フェイトの障壁とぶつかり四散する。
「ウチから大事な物を全部奪って行った『魔法使い』の全滅や。
西も東も関係あらへん。この世界から全ての魔法使いを殺したる。」
「そんな事が可能だと思ってるのかい？
今の僕の障壁すら貫けない君が、世界全ての魔法使いを相手にすると？」
冷笑を浮かべるフェイト。
確かに『リョウメンスクナ』自体の戦闘力は凄まじい物がある。
正直に言えば、今の自分でも手に負えないほどの存在なのだ。
だがしかし、操る術者自体はそれほどではない。
ならば、近づければいかようにも手はあるのだ。
……そう、今まさに『千草』を貫いた『石の槍』のように。
心臓を貫いたその一撃。
「……がっ！？」
「このままだと真っ先に殺されるのは僕みたいだからね。先に潰させて貰うとするよ。
それに、君の考えは少々危険すぎる。」
血を吐き、膝をつく『千草』に語りかけるフェイト。
だが、それに答える事無く何かを呟き続ける『千草』。
「遺言かい？　聞くだけなら聞いてあげるよ？」

「よくやってくれたわ。感謝するで。」

壮絶な笑みを浮かべ、立ち上がる『千草』。
貫かれ、穴の開いていた心臓部分が修復されていく。それも服ごとだ。
例え真祖の吸血鬼と言っても、再生されるのはその肉体のみ。
服ごと再生するなど、フェイトも始めて見る光景。

「これはその感謝の気持ちや！ありがたく受け取りぃ！！」

再び放たれた呪符は、フェイトの障壁に阻まれ……障壁ごと彼を貫いた。

「な……」

まさか、と言った顔をするフェイト。
自身の障壁を貫かれたのはこれで2度目。
しかも、1度目とは違い放たれたのさっきと術式が変わっていないただの呪符。
いや、この込められた魔力は……。

「君は、スクナの力を引き出しているのか？」
「ちゃうな。ウチがスクナや。」

それだけ彼に告げると、フェイトに突き刺さったまま残っている呪符を起爆。
それは松明のように燃え上がり、彼の姿は消滅した。

「ま、流石にあれで死んでへん言う事はないやろ。」

それだけ言うと『千草／スクナ』は進撃を開始する。
目的は麻帆良学園都市、そして関東魔法協会。
その前に、京都を灰塵と化すのも手ではある。
衰えたとは言え、日本の霊的守護を司っていると言ってもいい京都の地を破壊すれば
『自分』にとってもプラスになる。

となれば、手が足りない。
いや、破壊するだけならば少し暴れるだけですぐに終わる作業ではある。
しかし、そのような雑事を一々するのも力の無駄である。
それに……やはり、数は力なのだ。

印を組み『天ヶ崎千草』は祝詞を唱える。
眷族にして＜分体＞たる存在を召喚する為のモノを。

第２９話：そして、『天ヶ崎千草』の話。（後書き）

多分、次の話はスーパーせっちゃんタイム（え

＞ゴミを見るような目で
アニメ版の〇〇〇さん見たいな目ですね（謎

＞天ヶ崎千草さんとか

超俺設定です。これくらいいいよね？（笑
特に名字は思い浮かばなかったので、あえて語ってません。

＞殺さないフェイト
以前感想で「フェイトは殺さない」みたいな意見があったんですが、実際のところ障壁突破・石の槍でエヴァを奇襲してるんですよね、あれ。
明らかにあれ決まってたら死んでるんじゃね？と言う。
一発かますまでフェイトはエヴァだと分からなかったみたいだし……。

第３０話：そして、大鬼神と戦う話（前書き）

遅くなりました。と言うか遅くなりすぎました。

せっちゃんファンとこのちゃんファンは本当にごめん（え

第３０話：そして、大鬼神と戦う話

圧倒的な火力を目の前に、ネギ・スプリングフィールドは立ち尽くすことしか出来なかった。
まさにそれは絶望を呼び起こすような理不尽な一撃で。
放たれた方向を考えるに総本山は既に無いであろう、と判断する。
あの場にいた（カモ君も含む）全員が、一瞬で死んだとしか考えられず。
一撃で消し飛んだならば痛みも無く、それだけが救いかもと思い直す。

そして、これからについて考える。
正直な話をすれば、自分がアレと戦う必要はほぼ無いと言っていい。
むしろ、あれを目の前に逃げ出したとしても責められる言われは無いはずだ。
だがしかし……アレを放置すれば、間違いなく回りに被害が及ぶ。
アレはただ歩くだけ、いや存在するだけで破壊を撒き散らす存在。
真っ先に被害を受けるのは、この京都だ。
そして、この京都には自分の生徒達がいる。
この件にも生徒達が関わっている。
いなければ逃げても構わないだろうが……生徒達を見殺しにするのは後味が悪い。

アレの正体は今だ不明ではあるが、倒すだけならば手段は幾らでも存在する。
とは言え近衛木乃香もあそこに囚われている状況であり、まずは彼女を助け出すのが先決。
最悪『約束された勝利の剣』とかでまとめて吹き飛ばすのも止む無し、であるが。

とにもかくにも、助ける為には接近する必要がある。
そう思った彼が移動を開始しようとした時、それを見た。
自分の頭上を白き翼にて飛び越えて進む、一人の少女の姿を。

「桜咲さん……だよね、あれ。」

誰とも無く呟くと、追いかけるように自分も宙を飛ぶ。
そして、合流したのは数秒後。

「……ネギ先生!?　ご無事だったんですか?
それに、その格好は……?」
「まぁ、何とかかんとかだけどね。この格好はただの魔法装備だから気にしなくていいよ。」

どこか驚いた様子で刹那が質問するが、軽く流す。

「近衛さんの奪還の為に、アレにこっちで攻撃を掛けてみる。
その間にアレに近づいて近衛さんを奪い返せるよね?」
「……任せてください。しかし、先生こそアレをどうにかできるんですか?」
「倒すのは無理だろうけど、引きつける位は問題ないと思うよ。」

しかし、事態は変化する。
そう。スクナだけならばその手で十分であったであろう。

「先生?　何かこっちに……!?」

先に見つけたのは刹那。
夜の嵐の中でそれを見つけたのは、ひとえに半妖としての力を全解

放したからに他ならない。
それを聞いて、ネギも自身の眼鏡の探査機能を発動させる。
しかし、その必要は無かった。
なぜならば、既に目視できる距離へと近づいていたのだから。

それは、今正に向かおうとするスクナを小さくしたような存在。
違う点といえば、腕が二本しかなく翼が生えて空を飛んでいるという点。

「あのでっかいの、どうやら眷属を召喚し始めたみたいだ……ね！」

そう言いながら突っ込んでくる眷属－＜分体＞－の突進をかわし、魔法の矢を叩き込むネギ。
最も、数発で倒れるほど＜分体＞は柔な訳ではない。
見れば刹那も＜分体＞の一体と交戦しており、そうしている間にも無数の＜分体＞がこちらへ近づき、あるいは通り過ぎてゆく。

「ネギ先生！　このままではっ！！」

＜分体＞と交戦しながら、刹那が叫ぶ。
加速度的に膨れ上がってゆく＜分体＞の数は、自分と刹那に群がっているだけでも
数十匹になりつつある。無視して通り過ぎる数を考えれば、百を越えるのでは無いだろうか？

このままだと最終的に数で押し潰される。
そう判断したネギの行動は早かった。
【王の財宝】から引き出したのは一本の捩れた剣。

ケルト神話においてアルスター伝説に登場し、クラウソラスと同一の存在とも言われる剣。
『硬き稲妻』と呼ばれるその剣こそ、カラドボルグと呼ばれる存在。

そして、その神話の力が解放される。
かざされたその剣から走った雷は天へと昇り……轟雷となって眷属たちに降り注ぐ。
次々と眷属達が消滅していく様は、正に裁きの雷の如く。

「先生……その剣は？」

思わず刹那が聞いてしまったのもむべなるかな。
そこらに転がっているようなマジックアイテム、と言うのは絶対にありえない。
あの剣はそんなチャチなものでは決して無い。
どう考えても出鱈目過ぎるのだ。存在自体が。

「そうだね……君のその背中から生えてる物ぐらいには秘密かな？」
「！？」

ネギは、まじまじと刹那を見ながらそう返す。
正確には背中から生えた白い翼を、だ。
どう説明した物か焦る刹那。

「こ、これは、その……」
「まぁ、別にどうこう言うつもりは無いけどね。
今はそれより優先するべき事があるでしょ？」

実際そんな事でぐだぐだくっちゃべってる暇は無いのだ。

お互い見なかったことにしよう、で解決できればなとも考えている。
まぁ、実際の所は空を飛べるなら最初から飛べよ、とか言いたい事は色々あった訳ではあるが。
諸々を飲み込んで、二人は空を飛ぶ。

「桜咲さん、これを今のうちに渡しておくよ。」

眷族のいない今だからこそ、渡せる物を渡しておく事にする。
自分も飲んでいる身体強化のポーション。
そして、【王の財宝】に入っていた一振りの刀。

「先生、これは？」

ポーションの方は見れば分かる。
ペットボトルに入っている、と言うのがアレではあるが。
だが、この刀は何だ？
相当な銘刀なのはわかる。もしかしなくとも『夕凪』など比べ物にならないほどに。

「髭切、って言うんだけどね。」
「……！本当ですか！？」

鬼切り、獅子ノ子、友切などとも呼ばれた退魔の太刀。
結局の所は元の名前に戻された訳ではあるが……。

「ど、どうしてこんなものを？」
「秘密。それに出所を気にしてる場合でもないと思うけどね？」

人差し指を口に当てて喋るつもりの無い事を示すネギ。
それに、出所が何であれ刹那に損は無い。

少なくとも今の刀よりは１００倍頼りになる装備なのだから。

そして、スクナの姿が近くなってくる。

その肩口辺りには人が立っている。

「あれは……」

「お嬢様！」

そう、間違いなく近衛木乃香その人。

しかし、彼女しかいないと言うのはどういうことなのか？

「ネギ先生、援護をお願いします！私はお嬢様を！！」

「ちょ、ちょっと待った！！」

止める間もあらず。真っ直ぐスクナへと突っ込んでいく刹那。

放って置く訳にも行かず、ネギもまた行動を開始する。

【王の財宝】より引っ張り出したのは古びた金属製のロングボウに、古びた一本の矢。

矢を弓につがえ引き絞る。

この距離・あのサイズなら、【神の左手】の補正があれば十分に精密射撃も可能と判断する。

ましてや、弓と矢もただのぼろい物ではない。

かつて闇が色濃く支配する異界の世界（ハイデルランド）にて

恐るべき魔法使いが用い、後に伝説の“聖桿騎士団”の1人となった女騎士の従者が

使用した伝説の武具『魔神の弓』。

この弓から放たれた一撃にとって、あらゆる護りは意味を成さず。

そして、用いる矢は同じ世界にて救世母（マーテル）に死をもたらした矢であり

聖遺物でもある存在。邪悪なる存在を灼き尽くす『ヴァルタニクス

の矢』。

そして、運命の一矢は放たれる。
嵐の中を駆けるは一条の光。
当たったと手ごたえを感じた瞬間、彼は言葉を紡ぐ。

「汝が使命を果たせ。」と。

次の瞬間、矢の着弾地点－左目－が壮絶な輝きに包まれる。
それは、邪悪を灼き尽くす聖なる光。

光が収まるか収まらないかと言った所で、大鬼神咆哮す。
それは苦痛の絶叫であり、怒りの叫び。
確実に片目は潰れたはずだ。

しかし、逆に言えば片目が潰れただけで大鬼神は今だ健在。
再びその身体から無数の＜分体＞が姿を現し、ネギへと襲い掛かってくる。

「全く……勘弁して欲しいよ！」

一方、強烈な輝きを突っ切るように上空へと舞い上がり、木乃香を助け出そうとした刹那。
そこで彼女は見た。
片目を抑え、もがき苦しむ木乃香の姿を。
そして、そのままスクナから落下する木乃香を見た刹那は、彼女を受け止める。

「お嬢様！　大丈夫ですかお嬢様！」

「ウチの、ウチの眼が……眼がっ！！」

そう呼びかける刹那。

見れば、まるで焼け火箸を突き刺されたかのように、木乃香の左目付近は焼け爛れている。

左目？

ふと、刹那はスクナを仰ぎ見る。

そこには左目を潰されたスクナがいる。そして、左目が潰れた木乃香。

まさか、これは……

「気づくのが遅い、っちゅーねん阿呆。」

次の瞬間、『木乃香』は直接刹那に呪符を叩きつける。そして爆音。

最愛の友を助ける為に空へ昇った白き翼は、最愛の友によって大地へと落とされる。

……そのはずだった。

「貴様、お嬢様ではないな！」

満身創痍ながらも刹那は落ちない。落ちる訳には行かない。

「残念ながらハズレや。ウチは『近衛木乃香』やで、せっちゃん？」

「黙れっ！！　その顔で、その声で騙るな！！」

対する『近衛木乃香』は痛みにうずく左目を押さえたまま、宙を浮かんでおり。

「ウチは嘘はつかん。この身体『は』間違いなく『近衛木乃香』や。」

「まさか……！？」

刹那もここでようやく一つの可能性に思い当たる。
禁呪と呼ばれた一つの手段に。

「さぁ、せっちゃんどうするの？　ウチを斬るの？」

そう刹那に問う『木乃香』。
だが、その答えは彼女の予想を覆す物であった。

「……斬ります。」

刹那は悲壮な表情で。
それでも、躊躇いの無い声でそう告げた。

「本気で言うてるの？　本気でウチを斬るの、せっちゃん？」
「ここで斬らなければ、あの巨大な鬼が暴れまわる事となるでしょう。
それをお嬢様が望むとは思えません。
……ご安心下さいお嬢様。痛みは一瞬です。」

そう言って、構えを取る刹那。
ああは言ったものの、実際に斬り伏せるつもりは彼女には無い。
この状況を唯一ひっくり返せる手段……斬魔剣・弐の太刀。
悪霊などに取り付かれた人間の、悪霊のみを叩き斬る神鳴流奥義。
しかし、自身がそれを使えるのか？
否、使えるのか？ではない。使うしかないのだ。
それしか、彼女が木乃香を助ける手段は存在しないのだから。

「神鳴流奥義！　斬魔剣・弐の太刀！！」

そして、刃が唸り……木乃香を袈裟懸けに斬り捨てた。血吹雪を上げる木乃香の身体。
何も言わず、下へと落ちていく木乃香。

そう。まだ早すぎたのだ、刹那には。
返り血を浴び、満身創痍の身体のままその場に立ち尽くしたのは一瞬。
刹那もまた力を、そして気力を失い下へと落ちる。

「ごめんな、このちゃん……やけど、1人とちゃうで……」

それだけを言い残し。

しかし、水面に上がった水しぶきは一つだけ。

「……まさか、ほんまに斬るやなんて思わんかったわ。
少しだけ、甘く見とったみたいやなウチも。」

水面に立ったままそう呟いたのは、『近衛木乃香』であった。
斬られたはずの傷は既に無く。
しかし、左目は潰れたままで。

「今のウチはスクナと同じや。どうしても叩き斬って殺したいんやったら、
スクナを叩き斬るだけの一撃を持ってくるこっちゃな。」

最も、もう聞こえてへんやろうけど。
と刹那が沈んだ水面を見下ろしながら、『木乃香』は呟く。

その目から涙を流していたことは、彼女自身気が付いていないことであった。

第３０話：そして、大鬼神と戦う話（後書き）

＞自分の頭上を
どんだけ距離あったねん、と言う野暮なツッコミはなしでｗ

＞せっちゃんウィングについて
そんな事問答してる暇なんかねーよ（え

＞カラドボルグさん
某ＳＣでは虹色の輝きが、と書いてますがぐぐって見ると見事に雷属性（え。
……虹色の雷だというのか！！
外見については、Ｆａｔｅのアレをそのまま参考にしてます。
いや、無駄にでっかくてメカメカしたカラドボルグもありましたけどねｗ

＞弓と矢
ルール的にも可能です（何。
色々代償が酷かったり、そもそも届くのかこの距離からとかあったりしますが
あんまり突っ込まないで（おい。

＞斬魔剣・弐の太刀
レベルが足りなかったようだ（おい。

＞立ち尽くした
実際は空飛んでるんですけどね。
浮き尽くした？おかしいだろｗ

第３１話：そして、大鬼神と戦う？話（前書き）

お待たせしました。
と言うかこればっかり言ってる気がするな（苦笑）

第３１話：そして、大鬼神と戦う？話

湖へ沈んだ神鳴流剣士の生死を確認するまでもなく―どう足掻いても彼女では
自分を殺せない―『千草』は下を見下ろしていた。
眼下には＜分体＞と交戦するネギ・スプリングフィールドの姿。
だがそれも、多数に無勢であり力尽きるのは時間の問題である、と判断する。
所詮、どれだけの戦闘力を保持しようが最終的には数なのだ。
それこそ単騎で集団をひっくり返せるだけの英雄『サウザンドマスター』でも無い限り。
そして、目の前の西洋魔術師（ネギ・スプリングフィールド）では彼の代わりになり得ない。
いや、『サウザンドマスター』を持ってしても封印までしか持ち込めなかったのだ。
ならば、それ以下の存在がどれだけの物だろうか……と考えて首を振る。
少なくとも、この眼を傷つけるだけの手段を保持する以上は油断する訳にもいかないであろう。
片目が使えない程度でどうこうなる物でもないし、治そうと思えばすぐに治せるのだが。
今の最優先事項は、目障りな眼下の敵を確実に潰してしまう事。
自律行動をさせていた付近の＜分体＞を掌握。一気に押し潰す方向に切り替える。
＜分体＞は所詮兵隊。幾らでも替えなど効くのだから。

指令を受け取った＜分体＞は残らずネギへと殺到する。
それは正にレミングの行進のよう。
だがこの行進は自らの死ではなく、他者の死の為の行進だ。
たちまちの内に人の波に攫われるかの様に、彼の姿は押し潰されて

しまったかに見えた。

「何や、あれは。」

『千草』が呟いたのもむべなるかな。
まるで爆発が起こったかのように吹き飛ばされる＜分体＞達。
そして、そこに立っていたのは一体の異形の姿。
兎のような流線型の頭部に、悪魔のような巨大な翼。

「悪魔に魂売り渡したって言うんか……っ！！」

自分の事を棚に上げようとした『千草』を強烈な衝撃が襲う。
気が付けば視界は何かに覆われており、更に言えば凄まじい勢いで後ろに流されている。
いや、流されていると言うレベルではない！
凄まじい風圧が『千草』を引きちぎらんとばかりに襲い掛かるのだ。
人間のままであれば、確実に跡形も残らないスピードで後ろへ吹き飛ばされている……
いや、さっきの『悪魔』が自分の顔面を掴んだまま空を飛んでいるのだ！
そう判断したのも束の間、急降下に移った事を感じ取る『千草』。
このままではと思う間もなく、凄まじい勢いで固い何かに叩きつけられるのを感じる。
口の中に入ってきた土を思えば、正しく地面に叩きつけられたのだろう。

「ようもやってくれた……なぁ！」

未だに顔を掴んだままの『悪魔』の腕を両手で掴み、全力で握りつぶす。

大鬼神と一体化した今ならば、この細腕の握力もまた大鬼神と同じ。
その結果は、正に握撃と言うべきもので。
空き缶を握りつぶすような感触と共に『悪魔』の腕はへし折れ、その結果『千草』は
束縛から抜け出す事に成功する。
地面に降り立つと直接魔力を『悪魔』に押し当て、吹き飛ばす。
その一撃は『悪魔』ごと木々をなぎ倒して行き、彼女の視界から消えるには十分であった。

「ここはどこや？」

即座に場所を把握しようとするが、どこかの森か山かと言うぐらいしかわからない。
そもそも、どれほどまでの距離をアレと一緒に飛ぶことになったのかすらはっきりしない。
荒れ狂う嵐が全く無いのを考えれば、相当な距離を移動するハメになったのだろうが。
何しろ車だ新幹線だ、などと言う次元のスピードではなく明らかに音速を越えており。

「あれでウチが死んでたら、どないする気やったんや一体。」

思わず身震いする。
神鳴流剣士とて、弐の太刀と呼ばれる人を斬らない技にて戦いを挑んだのだ。
それすらも考えず、まさに殺す気で潰しに来た。
確かに、スクナを止める事を考えればそれが一番なのは間違いないのだが。
スクナはともかく＜分体＞だけでも呼びつけて迎えに来させたほう

がええやろか？
どっちにしろ、あっちのスクナは暴れさせておいたらええわ。
そこまで考えて、気配を感じ取って意識を向けた瞬間。
『千草』は派手に吹き飛ばされ、地面を転げまわる羽目になった。
彼女の最大のミスは、あれでほぼ片が付いたと考えた事。
そして、彼女が言う所の『悪魔（ホワイトラビット）』が超高速戦闘用の生物であると
考えなかった事にある。
強さゆえの慢心、と言われればそれまでではあるのだが。
どちらにせよ、ソニックブームが巻き起こるほどの超音速を捉えて
迎撃するのは
例え神鳴流とて至難と言えよう。

「この、調子に乗るんやないで……！？」

起き上がろうとした『千草』が眼にしたのは、高高度から高速落下
してきた『悪魔』であった。
ご丁寧に翼で自身を包み込んでドリル状になり、きりもみ回転をし
ながらの急降下である。
そして激突。凄まじい轟音と共に土煙が巻き起こる。
煙が晴れた時、そこにあるのはドーム状の結界を張り巡らせる『千
草』と
それを突き破れず、空に舞い上がった『悪魔』の姿であった。

「この札切るハメになるとは思わんかったわ。と言うか、ここまで
堅いのは予想外やわ。」

そう言って掲げた腕輪に付けられた【文珠】を見る。
そこに刻まれているのは〔護〕の文字。
そう、ネギが木乃香に渡した奴である。
実際の所、それほど大した防御力を発揮する訳でも無いと思い自前

の結界も張り巡らせたのだ。
所が蓋を開けてみれば、自前の分を使わずとも全く問題なく防ぎきった訳で。

「だけど、それは一回だけ。こっちはもう一度同じ事をすればいい。」

空に佇む『悪魔（ネギ・スプリングフィールド）』がそう述べる。
確かにその通りだ。【文珠】は役目を果たしその姿を消してしまっている。

「できたらええなっ！！」

そう言うが早いか、自ら空へ舞い上がり全力で『悪魔』をぶん殴る。
強度自体は明らかにこちらが上なのだ！
不意を打たれて殴り飛ばされた『悪魔』に追い討ちをかけるべく指の肉を噛み切り、
流れ出る血で空に呪を描く。そして『悪魔』が立ち上がると同時に詠唱が完成、発動する。
同時に強烈な重力が『悪魔』に圧し掛かり、押し潰そうとする。

「通常の１００倍の重力下なら、空は飛べへんやろ！」

重力に変調をきたしているのは『悪魔』のみであり。彼女自身には全く影響は無い。
そして、ここが勝機！
懐から取り出したのは三枚札の一枚。
本来は逃走用の一品であるが、アレンジを加えればそのまま攻性のための手段となる。
【三枚符術・京都大文字焼き】

名前こそ間抜けではあるが、その火力は神の力が加わったことで生半可なものではなく。
瞬く間に炎に包まれていく『悪魔』の姿が見える。

これで勝った。
そう思った『千草』を強烈な風が襲う。
そして、彼女は見た。
先ほどよりも巨大な翼をした異形の『悪魔』が炎を風で吹き飛ばし、空を舞う姿を。
それは１００倍の重力下において空を舞う為の進化。

「『悪魔』め……どんだけ出鱈目や！！」
「いや、その台詞だけは言われたくなかったなぁ……」

空から『木乃香』を見下ろし、『悪魔』（ネギ・スプリングフィールド）は呟いたのであった。

しかし、ネギとて手詰まりの感はあるのだ。

＜分体＞そして大鬼神、更には様子のおかしい近衛木乃香と数だけは多い上に味方はゼロ。
刹那も力尽き散ってしまい、分かった事と言えばあの木乃香はただ操られている訳ではない、
と言うこと。何しろ、魔法を知ったばかりにも関わらずあれだけの事をやるのだから。
とにかくまとめて相手するのは余りにも分が悪いと判断して、
『木乃香』だけを引っ張ってきたのだ。でかいのやらたくさんいるのよりは遥かにマシである。

その結果、京都が大惨事になる可能性は高い訳だがそれは置いておくことにする。

どちらにせよ既に惨事になっている訳で。後はどれだけあの大鬼神を早く止めるかだ。
術者を倒せば止まる、と判断したのもここまで引っ張ってきた理由ではあるが……。
仮に止まらなかったとしても、命令を下す相手がいないならでくの坊だと判断したのだ。

しかし、実際に戦ってみればどうか。
音速を超えるスピードで地面に叩きつけても生き残っている時点でまともではない。
対物理障壁を張り巡らせているにしてもだ。
そして、符術による強烈な攻撃。あれほどの火力を放つには相当な力量が必要である。
明らかにアレは木乃香の皮を被った何か、である。

「となれば遠慮はいらないんだけど……」

そうなると本物はどこへ行った？となる。
入れ替わる暇は逃亡途中で幾らでもあったであろうが、メンバー構成を考えるとこれ以上共犯がいるとも考えずらい。
どこか遠くで操っているにしては効果範囲が広すぎる。腕をへし折り、今の自分を殴り飛ばすだけの身体能力を見ればただ操っている訳ではない。
となれば……

「最悪乗っ取られてる、かなぁ？」

どういう手段で乗っ取ったのかが分からない以上は、追い出すことは難しい。

恐らくは何らかの術を用いたのだろうが……〔解〕〔析〕をかける暇は恐らく無い。

〔破戒すべき全ての符〕なら何とかなるかも知れないが……

それをするためにはＡＲＭＳを解除せねばならず。

一度解除してしまえば、次にＡＲＭＳ化するのに時間を置かないと身体がやばい。

そして、ＡＲＭＳの腕すらへし折る身体能力の相手に生身で挑むなど無茶の極みである。

そもそも〔解〕〔析〕をかけるよりは後腐れなく【王の財宝】の中身を大盤振る舞いした方がはるかに確実に倒せるのだから。

刹那ですら斬りに行ったのだから問題あるまい、という判断である。

「ウチを相手に他所事考えとるとは、ええ度胸やないか！」

『木乃香』の声を聞いて下を見れば、光り輝く弓を構える彼女の姿。

どこから出した！そう思う間もあらず、次の瞬間には光の矢によって腕・脚・翼を貫かれる。

そして弓はそのまま剣へと変化し、光り輝く巨大な剣が彼を斬り落とすべく振り下ろされる。

結果、翼ごと片腕を斬り落とされたネギは森へと墜落することとなる。

第３１話：そして、大鬼神と戦う？話（後書き）

あくまでも＜神＞ダメージが入るだけで再生できない、と言うわけではございません（謎）。

＞スクナさん

飛騨の大鬼神が何で京都に？と言う話をちょっと考えてみた。
京都で暴れて封印された、とは言ってますけど。どこから来たってのは言ってないんですよね。
つまり、飛騨で封印されたのが開封されて大暴れしつつ京都に。
そして京都の地にて一大決戦の後に封印された、と言うのはどうだろうか。
京都までどれだけ距離があるねん、と言うのはさておいて（おい）。

遥か昔、神話の時代？に飛騨で大暴れのスクナさん。誰かがバラバラにして封印する事に。
その結果京都以外にも日本各地で同じように封印してある場所があると言うのはどうだろう。
かつて京都で暴れて『赤い翼』と一大決戦を行ったのはスクナ（一部）だったんだよ！
はっきりとした実体を持たず、光の巨人状態？だったのは姿形がきちんとできあがっていないからと言う方向で一つ。
……まだこっちの方がましか。

＞あっちのスクナ

うん、向こうは向こうで大変でしょうね（ひでぇ）。

＞神鳴流とて至難と言えよう

銃弾切り払うなら行けるかなぁ？（おい

＞きりもみ回転急降下
紅葉卸もしたかったんですけどねぇ。

＞文珠
エクスカリバーぶち込んだけどダメージ0、とかも考えたんですが
（おい。
流石に派手過ぎて周りが大惨事なのを打ち込むわけにも行かずw
一番最初の案では、スクナにエクスカリバー↓流石にアレを食らうとまずい
↓スクナ全力防御＋【文珠】と言う流れだったんですがどうしてこうなったんでしょう（え。

＞殴り飛ばす
ウェイトとか体格差を考えると凄い絵面に（今更）

＞詠唱
この手の詠唱ってどこか載ってませんかねぇ（おい。
いや、どーまんせーまんだのじんびょうとうしゃだの、きゅうきゅう如律令
とかはわかりますけど。
探したけど見つからんかった……つまり、皆創作なのかあれ！？
いやまぁ、リアル陰陽師は戦闘なんかしないでしょうけどさぁw

＞進化
実際の所は翼がでかいだけじゃないわけですが。
高重力下で空を飛ぶ為の進化、ってのが思いつかなかった（え。
まぁ、そんな小難しい話をわざわざする必要はないよね！

1／4

若干修正。

第３２話：そして、長い夜の終わりはあっさりしているという話。（前書き）

今回も相変わらず独自解釈乱れ飛びなので注意でござる。
まぁ、いまさらと言う話ですけどねｗ

第３２話：そして、長い夜の終わりはあっさりしているという話。

大鬼神復活（リョウメンスクナ）とその影響により、京都は大混乱に陥っていた……と言う訳ではない。
季節外れの嵐は外へ人を出さないのに十分であり、また夜も過ぎている事も幸いした。
これが仮に昼ならば、眼も当てられない大惨事になっていただろう事は想像に難くない。
……もっとも、後で知るか今知るかの差でしかない、と言う話でもある。

そんな中動くのは関西呪術協会でも穏健派に属する者達と関東魔法協会の魔法使い達。
既に総本山と連絡が取れないこの状況だからこそ、今できる事を行うしかない。
綻びた封印を修復しに回り、漏れ出た悪霊を撃退し。
少しでも被害を減らすために活動を続けていたのである。

「ここの結界はこれで問題ありません。」

巫女服の女性が処置を施したのはとある小さな神社。
京都を霊的な攻撃から防衛するための守護結界の基点の一つである。
先の大鬼神の咆吼により、ズタズタになったそれを修復するのもその活動の一つであった。
とは言え、完璧と言うわけではなく応急処置程度のものではあるが。
それでも何もしないよりはマシ、と言う奴である。

「ご苦労様です。次の基点はどこでしょうか？」

そう尋ねるのは関東魔法協会からの増援であり、手練の魔法先生であるガンドルフィーニ。

「大鬼神の復活の余波だけでここまでの事になるなんて……。」
「嘆いてる場合ではありませんよ、まだ全て終わった訳ではないのですから。」

そして、同じく増援としてやってきた佐倉愛衣と高音・D・グッドマンである。
結界・封印の修復が行える西の術者は現在少なく、戦闘力を有する者となると更に数は減る。
悪鬼悪霊の類が徘徊している可能性がある現状では、一人で行かせるのは死亡フラグなのだ。
その為、戦闘力はあるがその手の京都の事情に詳しくない関東魔法協会からの増援が
護衛として同伴する事になったのだ。
もっとも、西の術者の少なさのお陰で護衛として動かせる人数も少なくて済んだのだが、
その分1グループが回る基点の割り当て数は膨大な数に及んでしまう訳ではあるが。
ましてや時間は深夜であるため交通機関が動いている訳でもなく、
状況が状況なため
タクシーを使う訳にも行かず。嵐と悪霊などの存在が空を飛ぶことすらままならせない。
大鬼神の方角から飛来してきた眷属と思しき存在が来たとなれば尚更である。
結果、魔法による身体強化を併用したとしても徒歩で行くしかない訳であり。

「他の皆さんは大丈夫なんでしょうか？相当な数が溢れ出ているっ

て聞きましたけど……」
「その心配は無いと思うよ、佐倉君。学園長は学園都市内の外部勢力にも協力の要請を行ったと聞いているからね。京都の現状が伝われば向こうとて無下に出来ないはずだよ。」

他の魔法使い達を心配する愛衣に答えるガンドルフィーニ。

増援として京都にやってきた関東魔法協会の魔法使い達は大まかに三手に分かれて行動している。

1．修学旅行でやって来た生徒達を守る為のグループ
2．京都市内にて悪鬼悪霊を退治するグループ
3．結界・封印を行う西の術者を護衛するグループ

である。

とは言え、関東魔法協会の人員とて打ち出の小槌と言う訳ではないので人数に限りはある。
麻帆良自体の防衛を疎かにしてしまう訳にも行かない。
関西呪術協会の人員が戻ってくるにしても、今晩中に帰って来るのは不可能であり。
となると他所から人員を引っ張ってくる必要があるのではあるが……それが存在した。
そう、以前『【闇の福音】の反乱』の後に麻帆良に常駐する事になった魔法関係の組織である。
かつて『赤き翼』が封印した大鬼神が復活した、と言う事情を出せば動かざるを得まい。
ついでに言うならば、関東魔法協会・関西呪術協会両方に貸しが作れる訳でもあるし。

「今は考える時ではなく行動する時ですわよ、メイ。」
「は、はい。お姉さま！」

そんな二人を見ながらガンドルフィーニは考える。
山火事に如雨露で水をかけるようなものではあるが、確実に鎮火しつつある。
しかし、それも遥か向こう側で存在を主張する大鬼神が動かないからだ。
初撃を放ってからは全く表立っては動きが無いと言うことではあるが。

そして、総本山へと向かったネギ・スプリングフィールド、そして学園長の孫であり
関西呪術協会の長、近衛詠春の娘でもある近衛木乃香とその護衛との連絡が取れない状況
だという。最悪の状況は覚悟しておく必要がある。
そもそも、学園長がこのような形で特使の派遣と言う事を行わなければ……
そこまで考えて首を振る。
高音君の言うように、今は考える時ではない。
今はできる事を片付けていくしかないのだ。

一方、ホテル嵐山。
３－Ａの行動力の高さを考慮した魔法先生たちにより、睡眠結界を展開している状況である。
その為、ホテルで眠っている生徒達は夢の中であった。
嵐の夜の為、外を見ても何も見えないのだが大鬼神の存在感（プレッシャー）は半端ではない。
それを認識してしまえば、大惨事が確定である。それを抜きにして

も今起きられるのはまずい。
３－Ａは問題児揃いと言うかテンションの高い面子が揃っている、と言うのもあるのだが。

そんな中で、一人起きている生徒がいた。そう、超鈴音である。
無論、式神の監視を考えてベッドの中にいるわけではあるが。
正直言って、彼女は頭を抱え込みたくなっていた。
未来で集めた過去の出来事が現在において全く使い物にならなくなっているのだ。
正確に言えば、ネギ・スプリングフィールドとその周りで起こる出来事についてである。

先のエヴァンジェリンの時もそうであったが、今回の京都修学旅行についてもそうだ。
まさか修学旅行が中止状態にまで追い込まれるとは想像の範囲外であった。
彼女も少しは楽しみにしていたのである。
そしてリョウメンスクナの復活。『史実』においては『闇の福音』によって秒殺された大鬼神。
しかし、今『闇の福音』は存在しない。なら誰が止めるのか？
最悪は日本が焦土になる可能性も考慮しなければなるまい。
そうなってしまえば、この時代に来た意味もなくなってしまうのではあるが。
最も、その時は自分の命も絶えているであろう事は間違いない。

「エヴァンジェリンを倒したのがネギ先生なら、まだ勝ち目はあるはず何だけどネ……」

今の彼女にはそう思うしか無かった。

そして、そのネギ・スプリングフィールドは。
接合した片腕の具合を確かめていた。と言っても、難しい事をした訳ではない。
ＡＲＭＳのナノマシンによる再生機能は問題なく機能しており、切れた腕さえ見つければ
問題は無かったのだから。
そして、彼の姿は既に【白兎】ではなく人間としての姿。
腕を接合させた後、右手を自分に当てた状態でＡＲＭＳを解除する。
それとほぼ同時に起動するのは【幻想殺し】。
そうしなければ、自分が１００倍の重力で押し潰されて死んでしまう。
これ自体もある種の賭けではあったのだが、無事に重力呪法を打ち消してしまうと
【王の財宝】より〔マジカルデバイスＳｈ〕を取り出すと起動、バリアジャケットを展開する。
そうしないと全裸のままな訳で。

「ユニクロの服でもいくつか詰めておくかなぁ……」

元の持ち主が聞けば激怒しそうな台詞を吐きながら、この先を考える。
少なくともＡＲＭＳで勝つのは難しい、と言うのが彼の現状の結論。
と言うより、攻撃力が足りなさ過ぎるのだ。
並大抵の悪魔や竜ならぶちのめせるだけの戦闘力でも足らないとなれば、
別の手段をぶつける必要がある。【白兎】を解除した方が手札は多いのだ。
単純な話【直死の魔眼】で相手の死の線を叩き斬るなり、死の点を

突くなりすれば相手は死ぬ。
最も、ＡＲＭＳを正面から殴り飛ばし、腕をへし折るような身体能力者と近接戦闘とか本気で自殺行為以外の何者でもない。
そうなると、自然【王の財宝】からの一斉投射に頼るしかない訳ではあるが、これも前述の理由で確実に命中するかと言えば大変疑わしい。
無論、自分も死ぬ気で防御する気ではいるが防御が抜けてしまえば魔法障壁をぶち破られるだけでは済まず、自分自身の身体がぶち抜かれる可能性のほうが高い。

「なんと言うか、吸血鬼と戦う以上に性質が悪いんじゃないのかこれ……」

そこまで呟いてはっとした顔をする。
何も人間のまま戦う道理はどこにもない。そして、それが出来るだけの力が自分にはある。
問題としては無事にその後人間に戻れるのかどうか、と言う一点ではあるのだが。
しかし他に手は無い以上、それしかないだろう。

そして、数刻後。
辺りの森は、先ほどの炎が延焼を始めており。
燃え広がる炎が明かりとなる中で、二人は再び対峙する。

「何や、てっきり逃げたんかと思いましたわネギ先生？」
「それでも良かったんだけどね。流石にここまでやっておいて逃げるのもねぇ。」

『木乃香』はその手に先ほど『悪魔』を叩き斬った『光の剣』。
ネギが持つのは異世界の魔王の武器の一つである〔烈光の剣(ゴルンノヴァ)〕。
ちょっとした対抗意識である。

「ところで、その光の剣はどこから生えて来たのかが凄い気になるんだけどね。」
「気が合うわ。ウチも色々と聞きたい事はあるけど今はそれが気になるわ。」

『木乃香』から見ればあの『悪魔(ホワイトラビット)』は何なのか、とか
自分(スクナ)の片目を潰したあの矢は何だ、と問いただしたい事は幾らでもあるのだが。
今、気になるのは目の前の剣。
刀身こそ光ではあるが、それ以外は何の変哲もなさそうな剣である。
自身の『光の剣』はリョウメンスクナとしての装備品を魔力で具現化したものでしかない。
先に『悪魔』を撃ち落した『光の弓』もそうである。

「じゃあ、お互い内緒って事でいいかな?」
「……せやな。そんな問答は無駄でしかないわ。」

そして、互いに剣を構える二人。
最も片方は即席の達人であり、もう片方は身体スペックでゴリ押しする素人なのだが。
当然の如く動き出すのは『木乃香』が先。
ＡＲＭＳとも張り合えるだけの身体能力の前では、ただの生身など相手にならない訳であり。
……そう、『ただの生身』ならば。

交差は一瞬。文字にすれば一行。
真正面から突っ込んできた『木乃香』をするりと避けたネギが、唐竹割りの要領で斬った。
それだけである。

「な、何でや……。今のウチの動きが捉えられるんか……。」

丁度左右対称になるように、『木乃香』に線が入る。
『悪魔』形態ならまだしも今の彼はただの人間のはず。

「悪いね。少しだけ人間を辞めさせて貰ったんだ。」

ネギの顔を見れば、犬歯が少々長いように見え。
そもそも、漂う魔力の質が変わっている。
それで『木乃香』は悟った。

「どこまでも人間辞めてる、って訳やな……。」

確かに、吸血鬼の身体スペックならば全くの不可能ではない。
吸血鬼ではなく【文珠】による〔真〕〔祖〕〔化〕により『真祖の』吸血鬼である事。
そこまでは『木乃香』では分からない事ではある。

同時に左右に分かれて行く『木乃香』。
これで決着は付いた、と思ったネギが見たのは信じがたい光景。
何しろ、自分の身体を抱きしめてずれを防いだのだ！
それだけではなく、切断したはずの身体が元に戻って行く。

「どっちが人間辞めてるのか小一時間問い詰めたい状況だね、近衛さん。」

正直予想外すぎる展開にもほどがある。
まさか、一刀両断されて死なないのは想定外だった。
正確には『死の線』を斬りそこねた結果が一刀両断だったのだが。
ましてや純魔族をも斬り捨てる〔烈光の剣(ゴルンノヴァ)〕をもってしても、である。
乗っ取っている、にしてもこれは異常の一言に尽きる。

「今のウチはスクナや。どうしても叩き斬りたいんやったらスクナを一刀両断できるだけの一撃でウチを叩き斬るんやな。」

そう言いながらも、仮にも自分の生徒を問答無用で叩き斬るという行為には冷や汗が出る。
『悪魔』の姿による凶暴性の発露か、とも考えたがアレは地だ。
必要ならば、誰であろうと排除すると言うのだ彼は。

「なるほどね……近衛さんであって、近衛さんで無い状況か。」

そう言いながら、左手に出してきたのは奇妙な短剣。
とても剣としての実用性など皆無の刀身。
しかしこの期に及んで使えない武器など出すはずが無い。

ならば、出された短剣ごとその片腕を貰えばいい！
その考えの下振るわれた『光の剣』は彼の『右手』の前に消え去った。
唖然とする『木乃香』。そして、その隙を見逃すネギではない。

〔破戒すべき全ての符〕は『木乃香』の胸ー『死の点』ーに突き立ったのである。

〔破戒すべき全ての符〕が木乃香から『天ヶ崎千草』を切り離す。
『死の点』を突かれたのは近衛木乃香、ではなく『天ヶ崎千草』であり。
そして『天ヶ崎千草』は『リョウメンスクナ』と一つになっている。

つまり……はるか遠くの京都の地にて。リョウメンスクナは死を迎えたのである。

こうして、長い長い夜は終わりを告げたのだ。

第３２話：そして、長い夜の終わりはあっさりしているという話。（後書き）

よく考えるとなんでこいつらチャンバラのような物してるんだろう（おい。

＞増援
魔法先生・魔法生徒関わらず出動している状況です。
と言うより、相手が相手だけに総力戦になってもしょうがないと思うんだ（おい。
そういう観点から見れば学園長は出し渋りしている（こら

＞嵐
Q：嵐だけど魔法先生たち合羽とか着てるの？
A：魔法で何とかなるでしょう（おい

＞大鬼神
Q：プレッシャーとか大丈夫なの？
A：無視はできませんが、それでどうこうなるほどではありません。
一般人は気づかないけど、霊感の強いやつなら「向こうに何かいるんじゃね？」
と言い出すレベルのようなものです。

＞睡眠結界
明日菜の魔法無効化能力は結界系には効力を及ぼさないようなので。
ちなみに、護衛の魔法先生たちはレジストするための手段を用意してきてます。

＞再生機能
これが菊池秀行作品だったりすると、再生機能が働かないってなる

んですよね（え。
神の攻撃を科学で防ぐとかｗｗｗとか言われますからねあそこはｗ

＞【王の財宝】
たまにご指摘があるのですが、当作品では「色んなマジックアイテム等が入ってる倉庫」を
兼用しているくらいの認識でいて頂けると幸いでございます。

＞ただの生身は相手にならない
せっちゃんの時はほら、まさか目を潰されるとは思って無かったとか、
まさか斬りにくるとは思ってなかったとかそういうことで一つ（え。
まぁ、気やら魔力で補正すれば大丈夫だとも思いますけどね。その
為の神鳴流だろうし。

＞斬りそこねた
所詮即席達人でござる。

＞真祖
吸血鬼の凄いやつが真祖である、くらいの認識で当作品はお送りしております（え。
まぁ、今だと４文字行けるんで〔吸〕〔血〕〔鬼〕〔化〕でも構わなかったんですけどｗ

＞消えたスクナ武器
「種別：魔法・アイテム」みたいな扱いです。
まぁ、消えないなら消えないで『裂光の剣』で受け止めるなり右腕落とされるなりすれば
いいんですけどｗ

＞死の点
本来なら、天ヶ崎千草を切り離した後で点を突くべきなんでしょうが。
とは言えここまでやっておいて、行き成りそれはないだろうと思ったのでｗ
ただのナイフでやらなかったのは切り離さないと何が起こるか分からない、
と言う判断と言う事で一つ宜しくお願いします。

第３３話：そして、京都後始末開始の話。（前書き）

相変わらずのご都合主義が炸裂中です。

第３３話：そして、京都後始末開始の話。

『彼女』が目を覚まし、最初に目にしたのは知らない天井であった。
起き上がろうとすると頭に痛みが走り、再び枕に頭を乗せる。
頭痛の自覚を感じてから、痛みは収まりそうに無い。
キリキリとドリルを脳にねじ込まれているような感覚だ。
ここはどこなのか……。
一通りの物は揃ってはいるが、生活感の無いその部屋。
辺りを見渡してみると、どうやらホテルの一室と言った感じがする。
そうしていると、ドアのノックの音と共に鍵を開ける音がする。
足音がするに、誰かが入ってきたのだろう。

果たして、その「誰か」は現れた。
見慣れたような気がする服を着た、少し歪なショート髪の女の子。
どこかで見たような気もする。
その女の子は、ベッドの『彼女』を見て驚くように声を上げた。

「お嬢様！　目を覚まされたのですか！？」

安堵の表情で泣き出しそうになりながら。
その表情を見て『彼女』も哀しくなった。
きっと自分は目の前の女の子にとって、とても大事な存在だったのだろう。
だとすれば、今から自分は彼女にとってつらい事を言わなければならない。
そう、自分の記憶がないと言う事実を。

頭痛が痛いネギ・スプリングフィールドです。
近衛さんとの決着をつけた後、まずやったのが彼女の状態の確認でした。
〔診〕〔察〕してみると、近衛さんの身体は大変な事に。
まずは精神的な部分。取り憑かれてたのが響いたのか危険な状態。
恐らく、取り憑いていた方が死んだ時に魂やら精神やら全部引っ張られたんじゃないか、と
推測した物の、門外漢なので詳しい事は分からず。
分かりやすく言えば、ＳＡＮ値だだ減り状態で要入院ただし十数年間。と言うレベル。

肉体的な部分で言えば、もう大惨事。
『近衛木乃香』の言葉を信じるならあの大鬼神とリンクしてたと言う事で。
神降ろしの状態と言いますか。
それがあればこそのＡＲＭＳ形態をぶん殴れるほどの身体能力だったんでしょうけども。
どちらにしろ、そんな超常パワーを生身で発揮すれば元の身体はズタズタな訳で。
まさに遠慮無しの全力全開だったんでしょう、きっと。

魔力的にも、神降ろし現象が影響を及ぼしたのか酷い事になってます。
人間が持つにしては巨大すぎる魔力が精製される傍からだだ漏れと言いますか。
魔力酔いしそうな濃度の魔力が垂れ流し状態と言うのも恐ろしい話で。

精神的な部分は【文珠】で〔正〕〔気〕とか〔癒〕とか考え付く限りの物を試し、
肉体的な部分は【王の財宝】から〔エリクサー〕を引っ張り出して飲ませ、
魔力的な部分は簡易的に封印しておきました。

ただ、問題も幾つか。

精神的な面で言うと、どこまで治ったのかは近衛さんが意識を取り戻さないと分からない事。
肉体的な面で言うと、左目だけは見た目しか治っていない事……
視力がどこまで落ちたやら。
ダメージまでリンクしてた上に『近衛木乃香』が再生を後回しにしてたツケを近衛さんが
払う事になった、と言う話ですね。
魔力的な面で言うと、あくまでも取りあえずの処置なのでちゃんとしたのを後でやらないと。

やれるだけの事はやらないと、死んだ詠春さんに申し訳ない。

処置が終わると、近衛さんを抱えて〔転〕〔移〕する事に。
まずは桜咲さんを回収するべく、大鬼神のいた辺りへ。
念のため〔遠〕〔見〕で向こうの状況を確認することは忘れずに。
大鬼神とリンクしてる、って事はこっちが死んだらあっちが死んだと言う事でしょうが、
死ぬ間際にリンクを強制切断して自分だけ生き残る、と言う手を使ってもおかしくないんで。

……戦う前より、戦った後の方が【文珠】の使用率が高いと言うのはどういう事だ？

戻ってみると、嵐は既に収まっており。
桜咲さんは既に保護と言うか救出された後でした。
龍宮さんと長瀬さんに。
思わず「二人とも生きてたの!?」と聞いてしまった俺は悪くない。

「結構酷い言い草でござるな。」
「まぁ、確かに死ぬかとは思ったけどね。」

あちこちボロボロで、服装的な意味で目のやり場にちょっと困る二人によれば、
自分と桜咲さんを追いかけて敵の一派（敵方の神鳴流剣士）と交戦して倒した後、
＜分体＞の襲撃への対応に手一杯の状況だったそうな。

「強い上にあの数でござったからなぁ。」
「最後の一発まで使い切ったからね。」

進むに進めず、引くに引けずの状態でいよいよかと覚悟を決めたその時＜分体＞が急に
崩壊していく姿と、遠目に見えていた大鬼神が消滅したそうな。

「で、ここまでやって来ると岸辺で倒れてる刹那を発見したでござる。」
「応急処置は全部やっておいた。意識は失っているがそのうち目を覚ますと思うよ。」

そんな二人に感謝の声を掛けつつ、これからどうするべきか考える。
何しろ総本山は吹き飛んでしまってる訳で、そこに戻るわけにも行かず。

こういう時はまず関係者に連絡を……と思ったものの携帯電話は既に行方不明。
ＡＲＭＳやらかした時に服ごと吹っ飛んだかなぁ。
そんな訳で、龍宮さんから携帯を借りて電話を掛ける事に。相手は瀬流彦先生です。

瀬流彦先生の第一声は「生きてたのかい！！　ネギ君！？」でした。
そりゃそうだろうなぁ。
こちらの状況を伝えると、ホテル嵐山の方へ戻ってきて欲しいとの事。
まぁ、繰り返すけど総本山完全に吹っ飛んでるし。

「そうは言いますけど、ここからそこまで電車も走ってない時間ですよ？」
「タクシーとか拾えないかい？」
「人数的に入らないのと、見た目がちょっと……」

明らかに何をやってたんだみたいな女子二人に、意識の無い女子二人。
そして男は俺一人。
どう見ても不審者グループ以外の何者でもない。

迎えに来れないか、と尋ねてみたが戦後処理で一杯一杯の状況らしい。

流石に徒歩で帰るとか論外だし、空飛ぶわけにも行かないし。
俺一人なら速攻で帰ってやるんですが……まぁ、何とか誤魔化せるか？
取りあえず、どうにか帰ってみますとだけ言って電話を切る事に。

「どうやって帰るつもりだい？ネギ先生？」
「拙者達は服の都合がつけば問題なく帰れるのでござるが……」

この時間じゃ服屋も空いてない。
……やっぱり、ユニクロの服でも詰め込んでおいてやろうか【王の財宝】の中に。
いや、一応女物の服も【王の財宝】にはあるのだ。〔光のドレス〕とか〔あぶない水着〕とか。
もうちょっと、こう、まともな服と言うのが一着も無いのが問題で。
そもそも、二人意識不明なんだから君達だけ帰ってもしょうがないでしょう、と言う話で。

「ここ一番の切り札なんだけどね。転移魔法で一気にホテルまで飛ぶことにするよ。」

空間転移符、と言うのもあるそうなんですが俺は持ってない。
しかも、ピンポイント移動となると果たしてそんな符があるのかどうか。
しょうがないので、さっきと同じように〔転〕〔移〕する事にする。
人数が多いけどどうにかなるだろう、多分。

そういう訳で、遅延魔法で転移直後に認識阻害結界を展開するように設定。
ホテルの正面近くに一気に移動することを告げてから、身体に触ってもらう形で〔転〕〔移〕。
誰一人はぐれる事無く成功したので、そのまま周りに人がいない事を確認してからホテルへ。

正面玄関で瀬流彦先生が待っていました。俺たちを見て驚いています。

「は、早かったねネギ君。」
「正直魔力がからっけつに近いんですが、何とか転移するだけの魔力はあったみたいです。」
そう言ってロビーのソファに座り込む……と立ち上がれなくなるので、その前に桜咲さんと近衛さんを部屋へ連れて行ってもらう事に。
長瀬さんと龍宮さんに頼むしかない訳ですが。
「連れて行った後は休憩してもらっていいよ。本当にご苦労様。」
「あぁ、一応君達からも話は聞いておきたいから、後で時間を作ってくれないかな？」
解散を宣言する俺に割り込むように声を掛ける瀬流彦先生。
あぁ、そういやそうか。
一応と言うか完璧関係者だもんなぁ、夜の件は。
「それなら私が残るよ。楓はすまないが二人を頼む。」
と言うわけで裏的に適任の龍宮さんが残る事に。
手伝ってもらって何だけど、長瀬さん一応表側の人間なんだよなぁ……嘘だろ絶対。
「あいあい、頼まれたでござる。」
そう言いながら堅気がいない事が分かってるので分身に一人持たせて運んで行く長瀬さん。
何あれ欲しい、ちょっと伊賀忍者滅ぼしてくる。って奴です。いるのかどうか知りませんが。

とにかく、夜明けも近いので手短に報告だけ行う事に。
どうせ詳しい話は報告書の形で書かないと行けない訳で。マジめんどいです。
自動筆記装置とか……ペンだけ魔法で動かして口述筆記させりゃいいのか。

それはさておき、総本山に向かってからの出来事をダイジェストで解説します。
大鬼神に関しては「操ってた術者倒したら還ったと思う」と推測語りをしておく事に。
チートスペック全力で挑みました、とか普通に語れない。

結局、主犯の術者がどうやって近衛さんにとっ憑いたのかも分かりませんし。
『神降ろし』にしても本人が語った事と状況から伝聞推定するだけですし。

近衛さんの件に関しても報告をせざるを得ないわけで。
「大鬼神降ろされてたみたいです。」と言ったら瀬流彦先生飲んでたお茶吹きましたが。
……まぁ、そうだわな。
無論、一通りこちらで治療は試みて安定している事も告げておきます。
専門機関で精密検査を受けることも必要でしょうし、その辺の手配は頼んでおく事に。

実際、大鬼神周りの報告はかなりぼかした形で終わらせざるを得ない訳で。
第三者が見てたわけでもないですし。困ったら「詳しい事はわから

ない」か
「生きるか死ぬかの無我夢中でよく覚えていない」で押し通すことにしましょう。
流石に「全力戦闘で死ぬか殺されるかの殴り合いしてました、お互いに。」とか
「一刀両断で近衛さん真っ二つにしてみましたが、生きてたから結果オーライですよね？」
とか「中の人だけ殺してみました。外には影響ないから大丈夫です。」とか
そんな台詞吐いたら色々まずいでしょうし。

で、俺の報告が終わったら次は龍宮さんの方ですが一度聞いた話なので割愛。
取り立てて追加報告があるわけでもありませんしね。

そして俺たちが死ぬ気で戦っている間のホテル側の状況も教えてもらえました。
大鬼神の咆吼であちこちの寺社仏閣にある結界が崩れかけるわ、それに伴って封じられた
怨霊なんかが湧き出してくるわと、霊的な危機一歩手前だったそうです。
幸い、学園長が派遣した応援部隊が到着したので危機は免れたそうですが。
現在進行形で結界の復旧・応急処置と湧き出した怨霊の始末してるそうです。

「現状では人は足りてるからね。ネギ君たちは休んで貰って大丈夫だよ。」

との事ですのでゆっくり休ませて貰う事にしましょう。

と言うより、この上更に働かされたら労基に駆け込んでやる。

そして自室のベッドで体中に走る痛みで目が覚めたのはお昼近く。
薬の副作用がっ！！
いや、正確にはホテルに戻った段階で結構来てたんだけど。
今日は一日働かないぞ！とまず無理な事を誓いながら、これからどうしようか悩むことに。
身体は痛いが、桜咲さんと近衛さんの様子は見に行く必要がある、と考えつつ腹が減ったので
飯を食べる事に。腹が減ってはなんとやら、と言うか昨日からろくに飯食ってないんだよなぁ。
とは言え、このホテルの状況で飯が食えるのか？
そんな事を考えながら、何とか身だしなみを整えてドアを開けると

「先生っ！　大変ですっ！！」

と俺を呼びかける声。
一応、この辺りのフロアは生徒いないんだけど、もうちょっと音量落とそうか？
そう思いながら振り向くと桜咲さんの姿。
話を聞けば、近衛さんの意識は戻った物の記憶の方がないらしい。

「……どうしましょうか？」
「いや、どうしましょうかって聞かれてもねぇ……」

正直、俺も困る。
まさかハンマーで頭部スタンプする訳にもいかんし。
それに記憶復元とか試してみて、とっ憑かれてた時の記憶まで戻るのも問題だろう。

憑依状態での記憶は憑いた人間の記憶なのか憑かれた人間の記憶なのか？
と言う点では興味はあるのだが。

「医療施設に搬送して色々見てもらった方がいいかも知れないね、それは。
近衛さんにはどこまで話したの？」
「い、いえ……こっちも気が動転してまして。とにかく先生に報告を、と。」

頭が痛い。
いや、気持ちは分かるんだけど。
とにかく桜咲さんには近衛さんの部屋に戻ってもらって、彼女の相手をしてもらう事に。

「そう言われても、一体何を話せばいいのか……」
「うーん、子供の頃の思い出とか……ダメだ、逆効果かも。」

実家、吹っ飛んでるからなぁ。
どの道話さないとダメな事なんだが、いきなり話すには重すぎる。

「取りあえず、事件の事に関しては今は何も話さなくていいから。学校の事とか友人の事とか、君自身の事とか色々話せばいいと思うよ。」

とだけ言っておいて、瀬流彦先生を探す事に。
桜咲さんが何か言いたそうにしてましたが、全力スルーです。
恐らく手配の方は終わってるでしょうから……段取り悪いなぁ。
始めっからホテルじゃなくて病院手配してもらうんだった。
……それだと転移できないのか。いや、先に手配して到着次第即

送ればよかったのか

などと反省しつつ、ロビーで見つけたのはガンドルフィーニ先生。
交代したのかな？
向こうもこちらを見て驚きと喜びの表情を見せます。

「ネギ君、無事で何よりだよ！瀬流彦先生の方から話は聞かせてもらってる。
身体の方はもう大丈夫なのかい？」
「お陰様で普通に動くぐらいなら、と言った所です。」

実際の所は、筋肉痛で涙目なんですけどね。だから身体を叩かないで下さい。
それより伝えないといけない事がある。

「瀬流彦先生の方から引継ぎが終わってる、って事は近衛さんの搬送の手筈はできてます？」
「流石に救急車を使うとホテルの方に迷惑と生徒達に不安が募るからね。
普通の車を用意してあるよ。医療施設も、『こちら』関係の病院に話をつけて貰ってる。」

ああそうか、一応ここまだ感染による封鎖中って扱いなんだよな。
それに確かに搬送者二人目、とか言ったら生徒達が不安がるか。

「なら、早速運びたいと思います。さっき意識を取り戻したそうなんですが……」
「何か問題でもあったのかい？」

不安そうな顔をするガンドルフィーニ先生。

「記憶を、無くしてるそうで。」
「それは……」

絶句。
そりゃそうだわな。

「ともかく、その辺も含めて本格的に検査の方を行いたいなと思いまして。
本来なら帰還する段階で病院の方へ運ぶべきだったんですが……すいません。」
「いやいや、ネギ君が気にする必要は無いよ。ともかく、今は近衛さんを早く運ぼう。」

そういう訳で、先に色々説明するのが面倒なので近衛さんを『眠りの霧』で眠らせて
（流石にガンドルフィーニ先生と桜咲さんから白い目で見られた。）
、車で病院へ運ぶ事に。

「……で、何で君が乗ってるのかな？龍宮さん？」
「何を言ってるんだいネギ先生。私が受けた依頼は『近衛木乃香の護衛』だと聞いたけどね？
護衛対象が動くなら、護衛も動くのは当然だろう？」

いや、そりゃそうですけどね。
でも実際の所、敵対勢力は完全に排除してる訳で。

「実は部屋で一日じっとしてるのが嫌だ。とかいう理由じゃないよね？」
「……」

黙り込まないで、お願いだから。
あ、車の運転はガンドルフィーニ先生がやってます。
俺は免許持ってないですし、桜咲さんにしろ龍宮さんにしろ免許取れる歳じゃないし。

と言うわけで到着したのは普通の大病院。
直に検査やらなんやらの開始です。

……どうなる事やら。

第３３話：そして、京都後始末開始の話。（後書き）

このまま続けると切る場所がわからなくなりそうなのでここで切るｗ

＞少し歪な
ほら、切られてるから。

＞女の子
少女、と書くと何か１０歳前後のイメージが俺にはありまして。
女の子と言う表現もどっちもどっちな感じはありますがｗ
何かいい表現ないかしら。
女性、だと大人になるし……。
いやまぁ「若い女性」とか「妙齢の女性」とかすればいいんですけどもさ。
この辺男だと「少年」「青年」とか使い分けられるんで楽なんですがｗ

＞恐らく
あえて語ってない部分は本人も目を背けてます（おい。
だってしょうがないじゃん、あれが最善だったんだよ！（こら

＞左目
あえて語ってない部分は本人も（ｒｙ
だって（ｒｙ

＞応急処置
（偽）ＮＧシーン

たつみー「ここは人工呼吸をするしかなさそうだな」（何故か唾を飲み込み）
ばかえで「ここは応急処置に定評のある拙者が。」（目を輝かせてたつみー押しのけ）
たつみー「いやいや、プロの傭兵たる私に任せてもらおう」（ばかえで押しのけ返して）

（ぎゃーぎゃー）

ばかえで「（息を切らせて）このままでは決着がつかんでござるな。」
たつみー「（息を切らせて）全くだ。先に刹那の人生に決着がつくかも知れん」

二人『ここは共同作業とすることにしよう（するでござる）』

ねぎ（転移してきて）「あのー、君達？桜咲さん顔真っ赤なんだけど？」

無論、そんなシーンはありません（当たり前だ）

＞ガンドル先生
これ、多分タカミチと同時に書いたらどっちがどっちかわかんなくなるよ！（苦笑
実際の所はもうちょっと生真面目に書くべきなんだろうか。
……とは言え、応対的にはこんな感じがするしなぁ。

＞免許
たつみーは戦車やヘリくらいなら操縦できそうだから困るｗ
確か海外なら学生でも自動車免許いけるんでしたっけ？

調べるのがめんどい（おい

第３４話：そして、京都後始末終わりの話（前書き）

「後始末中」にして書いてたら、終わってしまったという（おい。

……やり残した事ないよなぁ？

第３４話：そして、京都後始末終わりの話

病院の待合室で寛いでいるネギ・スプリングフィールドです。
検査の為に病院関係者に事情説明して近衛さんを引き渡した後、腹が減ったので売店でパンと牛乳買って手早く朝飯を……もとい昼飯を済ませてる所です。
桜咲さんと龍宮さんもですけどもね。

「いや、昨日から何も食べてないんで……」

と言ったらガンドルフィーニ先生も納得してくださった様子。
食べながら近くの新聞を手にとって目を通すと思わず噴出すところでした。

『京都に巨大隕石落下か！』

みたいな見出しが一面でどかん、って載ってたら誰でもビビるわっ！
それも東スポとかならまだしもちゃんとした新聞で。
俺の様子を見て、何事かと新聞に目を通した龍宮さんと桜咲さんも何とコメントしていいのやらと言う状態です。

「これはまた……」
「確かに、この状況を隠す手段は限られているでしょうが……」

いや、コメントはするけど呆れ半分と言った所かな。
そんな俺たちの様子を見てガンドルフィーニ先生が口を出します。

「何しろ地形が変わってしまってる状況だからね。それに場所が場所だ。
火災やテロ、ガス爆発等で誤魔化すには厳しくてね……」

と言うガンドルフィーニ先生自身も「だからと行って流石にこれはどうよ？」と
言う雰囲気をまとってます。

じゃあ実際他に誤魔化し様があるか？と言われると物凄い微妙と言う話で。
何しろ、吹っ飛んだのは山。
これが休火山とかならいきなり活性化して地形変わるほどの大噴火、とか言えるだろうけど
ただの山だし。調べればそこが休火山かどうかなんてすぐ分かるだろ、と言う話だし。
そもそも、火山灰も何も積もってないのに噴火とかねーよって話で。

ガンドルフィーニ先生も言ってたけど火災では山は燃えるが吹き飛ばないし、ガス爆発や
テロで地形が変わる勢いで山ごと吹き飛んだ、とか言ったらギャグにもならん。
核兵器でも使用したのか、と言う話に……核兵器でも山一つ吹っ飛ばすのはきついだろ。

だからと言って馬鹿正直に
「かつてこの京都の地に封印されていた大鬼神が吹き飛ばしました、怪光線で。」
とか言ったらそれこそオカルト雑誌向けの話である。真面目に語ると生暖かい視線確実である。

そうなると隕石落下しかないのか……と思いながら気を取り直して記事を読み進める。
とにかく、昨晩京都で起こった変事は全て『隕石の落下』で収めてしまうつもりらしい。
地震から急激な天候異常、突如夜を明るく照らした光に衝撃波などなど。
ご丁寧に『第二のツングースカか！？』などと書いていたりする…
……あれ隕石だっけか？

それはさておき、情報操作としてはこんな物かもしれない。
何も無かったと言えない以上は、カバーストーリーをでっち上げる必要がある訳だし。
いっそ非現実的なカバーストーリーで非常識な出来事を隠すのもありなのだろう。きっと。
……と言うか、ＴＶはこれで持ちきりじゃないのか？
インフルエンザの蔓延といい、隕石の落下といい京都は恐ろしい所だと言わざるを得まい。
いや、インフルエンザはホテル一軒の範囲だけど。

そんなこんなでぼうっ、と待つこと数時間。
検査結果が出たと言う事で医者先生の話を聞くことに。
まとめると以下の通り。

1. 身体に関しては異常は見られない。健康体そのもの。
2. 左目に関しては視力がほぼなくなっており、回復の見込みは無い。
3. 記憶に関しては基本的な日常生活に影響は無い。ただし自分の名前、友人の名前などは
　欠落している模様。回復の見込みは全く持って不明。
4. 連れ帰る分には問題なし。記憶の回復にも効果があるだろうし。

話を聞いたのは俺とガンドルフィーニ先生、それと桜咲さんだったわけですが。
（龍宮さんは近衛さんについててくれました）
どうした物かと額を押さえるガンドルフィーニ先生、今にも倒れそうな桜咲さん。

何と言うか、片目を除いて健康体だってのが唯一の朗報じゃないかこれ。
それに連れ帰ると言っても……クラスとは別に連れ帰る必要があるかなぁ、これは。
どちらにしても、インフルで担ぎ込まれてる設定だから別に連れて帰らないとダメなんだけど。

それよりも帰った後が問題だ。具体的には学校生活。
記憶喪失と片目失明は高熱が原因だから、で押し通すにしても日常生活がまずい。
幾ら問題ない、と言っても回りも困るだろうし本人も困惑する。
とは言え、視力はこっちでもどうにもならんかったし、記憶は戻す訳にも行かんし。
確か近衛さんは神楽坂さんと同室だっけか。桜咲さんと入れ替えてもらうか？
いやいや、この時期に部屋の変更とか逆に怪しすぎる。

取りあえずは学園長に指示仰ぐか。俺が一人で決められる物でもないし。
近衛さんの相手は桜咲さんに押し付け、もとい任せておいて学園長に電話する事に。
この度の件はご苦労じゃった、とか殊勝な声でねぎらってくれる学園長です。

「いえ……色々と申し訳ありません。」
「何、ネギ君のせいだとは誰も思わんし言わんわい。」
言われても困ります。
「それで、近衛さんの容態なんですが……」
と先ほど医者先生から聞いた話と魔力に関しての話をし。
「漏れ出してる魔力に関しては、封印処置を施すなりすればいいんですが……」
「ううむ……」
学園長も頭を抱えてる様子ではあるようです。
あの後頭部でどうやって頭を抱えるんだろう、と言うのは少しだけ興味ありますが。
現実逃避はそこまでにしておいて、学校生活に関してどうしたものかを確認する事に。
「日常生活に問題は無い、と言うておるならそのままでいいじゃろうて。
通常通りの生活を続けていれば、木乃香の記憶も戻るかも知れんしのぅ。」
「……あの、クラスメイトとかにはどう説明しましょう？
特に、同室の神楽坂さんには多大な迷惑をかける気しかしないんですが……。」
結局、病院にて一時危篤状態に陥った為、片目失明と記憶喪失と言う事になりました。

近衛さんの記憶操作は俺がやらないとダメのようです。
目が覚めたのは普通にホテルなわけで、そんな発表したら本人が不信がる。
ここの所は完全に俺のミス。
何故にホテルに真っ直ぐ連れ帰ってきてしまったかなぁ。

神楽坂さんには旅行終了の後に、学園長の方から宜しく頼むと話を通すそうな。
何でも、神楽坂さんの後見人と言うかそういう立場についてるらしい。
どちらにしろ、クラスメイト全員に話通す必要がある訳ですけども。

「では、そう言う事で処理のほうはしておきます。」
「うむ。すまんが宜しく頼むぞい。そうそう、それから木乃香の帰還時期じゃが。」
「何かありましたっけ？」

ありました。葬式とか葬式とか葬式とか。
親とか死んじゃってる訳で葬式しない訳にもいかず。
……でも家吹っ飛んでるんだよなぁ。どうするんだ一体これ。

「ワシもそっちへ行かんとならんじゃろうし、ネギ君にもいて貰いたいんじゃが……。」
「いや、俺いる必要ないでしょう？　むしろ高畑先生とかの方が。」

恐らく詠春さん関係だとは思いますが、俺は殆ど関わり無いぞ？

「無論、高畑君にも来てもらうつもりじゃ。」
「……わかりました。日取りの決定とかその辺はそちらで行うんですね？」

人が死んでるわけだし、断固拒否と意地張る訳にも行かず。
日程に関しても数日中に行う事になる、との事だし授業にも影響しないですし。
何しろ、修学旅行組は後数日ホテルに缶詰状態ですから。
そんな感じで後の事を色々打ち合わせてから、電話を切ったわけである。

そうだ。カモ君の遺族に手紙書かないと。
妹がいるとか言ってたよな、確か……。

そんなこんなで数日が過ぎ。
生徒達から一日遅れで、俺も麻帆良へと戻る事になったわけでございます。
葬式の日程の都合で近衛さんと桜咲さんも俺と同じ電車ですが。
龍宮さんは先に帰ってもらいました。まぁ、契約終了と言う事で。

後で聞いた話ですが、電車の中は通夜会場のようだった……訳ではなかったそうな。
むしろ、騒げなかった分だけ帰りに騒ぎ倒してやると言わんばかりのカオスっぷりだったとか。
新田先生……ご迷惑をおかけしました。

で、葬儀に関してはしめやかに行われました、としか言いようが無い。いやほんと。
俺も隅っこの方で目立たないように動いてました。お手伝いとかで。
危うく弔辞読まされかけたけどな（結局高畑先生が読んだという）。

しかし、と電車の座席に持たれながら溜息をつく。

この度の総本山消滅・長死亡による関西呪術協会の実質機能停止に付き、
関西呪術協会は関東魔法協会と統合し、日本魔術協会とすることにする。
と言う決定が元老院によってなされたのだ。
この話が出た時は喧々囂々だったらしい……と言うか現在進行形で喧々囂々してるそうな。

とは言え、長が死亡しており跡取りである近衛さんはご覧の有様の上に裏をろくに知らず。
じゃあＮｏ２以降は？となると穏健派で下を取りまとめるだけの者はいないらしい。
まさか反対勢力を長にする訳にもいかず……という。

そこで白羽の矢が立ったのが我らが学園長殿である。
ぶっちゃけて言ってしまえばアレである。摂関政治。
近衛さんが一人前になるまでは学園長が仕切る訳で。
で、一人前になった段階で改めて関西呪術協会として再分離する、と。

こういう時って、昔重鎮やってて引退してる人間引っ張り出したりするんじゃね？と
思ったりもしましたが、過去の一件で軒並み命を落としてるそうで……
そう考えると、ろくに後ろ盾も無いまま詠春さん悪戦苦闘だったんだろうなぁ。

それはさておき、関西の方としても無条件でＹＥＳとは言えず、調整に難航してるとか。

とは言っても長のいない状態では組織としての体裁云々以前の問題だろうし……。

……しかし、だ。

どうにもこうにも嫌な予感しかしない。

こう、トラブルを押し付けられそうなそんな予感。

時間は少し戻り。

麻帆良学園女子中等部京都修学旅行組の帰還途中。

超鈴音はこれからについて考えを巡らせていた。

リョウメンスクナは無事倒されたらしい。でなければ、今こうやって自分はいないだろうから。

しかし、それは本来ありえない出来事なのだ。

“今の”ネギ・スプリングフィールドでは不可能な所業。

『闇の福音』抜きではありえない現実。しかし、現実は受け止めなければならない。

やはり自分の知る“過去”と明らかに違うレールを進んでいる。

そして、その鍵を握るのは……ネギ・スプリングフィールド。自分の『先祖』に当たる人間。

「やはり……彼をマークする必要がありそうネ。」

まだ計画発動までには時間はある。

それまでに、彼についてもう少し突っ込んで調べるべきなのかも知れない。

自分の計画を確実に成功させる為にも。

第３４話：そして、京都後始末終わりの話（後書き）

＞ちゃんとした新聞
毎売新聞、とか読日新聞とか、朝教新聞とか（最後待て）

＞オカルト雑誌
レムリアとかアトランティスみたいな雑誌があるんだよきっと！
ムーでええやん、と言う気もしますがｗ

＞記憶に関して
ぶっちゃけてしまえば、俺が覚えていると言えばあるし忘れたといえば無い（おい。

＞後見人
タカミチ、と言う気もしますが。あれはどっちかと言うと保護者になるのか？
学費出してるのは学園長だったはずだし、後見人でもいいんじゃね？と。

＞葬式
当然ながら俺は葬式を準備した事がないので（ｒｙ）。
ましてや組織を挙げた葬式とかわかるわきゃねえ（何。

＞そんなこんなで数日が
葬式の模様を延々とやってもしょうがないでしょう、と。
切れる所はすっぱりと切る。
いやまぁ、魔法世界関係に関しての情報不足があるのは認める（苦笑）。
……まさに自爆だったという。

＞日本魔法協会
京都支部最初の仕事はずたずたの霊脈の補修とか封印などの再強化などです（え。
しかしこんな日本レベルで大事な事を一組織の長の葬儀の場で決めていいんだろうか？
いや、やったのは俺なんですけど。
……まぁ、話がややこしくなる前に先手を打ったんだと言うことにしましょう（苦笑）。

＞元老院によって
前の話でも書きましたが元々、関西呪術協会の設立の段階で一枚かんでるわけで……

3／3
訂正と加筆。

3／7
感想を受けて訂正。

第35話：そして、麻帆良に戻ってきた話。（前書き）

書いてたらこうなった（嘘
別タイトルをつけるなら「そして、関西呪術協会の大逆襲の話」となるｗ
始めはそんなつもりなかったんですが、感想欄での意見を参考にしてるとこうなったｗｗｗ

第３５話：そして、麻帆良に戻ってきた話。

５月６日早朝、麻帆良学園女子中等部学園長室。

「改めてご苦労じゃった、ネギ君。無事で何よりじゃ。」
「いえ……俺は大した事してないんで。それに、犠牲が大きすぎました。」

３－Ａ担任にして魔法先生であるネギ・スプリングフィールドと学園長にして関東魔法協会理事である近衛近右衛門がそこにいた。

「うむ……今回の件に関しては、のぅ……」

学園長のテンションもいつもに比べれば半分以下と言った状況である。
何しろ義理の息子を亡くし、孫娘は片目の光を失い記憶喪失になってしまったのだから。

「木乃香の記憶に関してはネギ君でもどうにでもならんのかのぅ？」
「学園長が無理だった物が俺に出来る訳無いじゃないですか。お気持ちはお察ししますが。」

近衛木乃香の記憶の復活に関しては学園長を始めとする関東魔法協会でも試みられたのだが、
結局の所は失敗に終わっている。迂闊に弄って頭をパーにする訳にも行かない訳で。

実際にはやれない訳ではないのだが、諸々の事情（主に保身）によ

りそうもいかないネギ。
とは言え、学園長には同情的な視線を送ってしまう。
何しろ京都にて学園長が木乃香に再会した際、一歩引かれた上に「ぬ、ぬらりひょんや！？」
と言われたのだから。
以前一緒に取った写真などを見せられようやく祖父だと分かった時には大謝りしていたが。

「それで、今日の御用向きは何でしょう？ＳＨＲまでには終わらせて欲しいんですが。」
「うむ。それなんじゃがな……」

そう言って学園長は語り始める。

つい先だっての元老院における『日本魔術協会』設立宣言。
西日本の魔法業界の混乱とそれに付け込むかのような諸勢力の暗躍の防止、
更に言えば京都の霊的復興を早急に成し遂げたいが為の措置である。
拠点の設置、長の選出に悠長に時間を掛けている場合ではないのだ。
それ故に、既に完成された拠点といえる麻帆良の地を本拠地とし、
長年のキャリアを持つ
近衛近右衛門がその長として推挙されるのはある種、当然の事とも言えるのだ。

しかし、それに待ったをかけたのは他でもない関西呪術協会の生き残りの面々である。

つい先日『闇の福音』の造反を起こし、麻帆良自体の管理能力も問われた人間を
これから新しく立ち上げる組織の長にするのか？

ましてやこの問題の発端は近衛近右衛門による特使派遣ではないか、と。

露骨に「この一件、全て近衛近右衛門の計画通りなのではないか？」と口に出すものこそいなかったものの明らかな不信感が漂っていたのである。

無論、全くもって誤解もいい所なのではあるが、結果だけ見れば反関東派の中でも急先鋒の一派を排斥し、関西における管理能力の低さが問題視されていたであろう近衛詠春を粛清し、その娘にして跡取りである近衛木乃香は手の内に握り、と言う一石三鳥取れそうな状況なのだ。

とは言え、組織の早急な建て直しは急務であるのも事実。元老院的には「じゃあ、お宅らに長になれる人間と拠点となる場所用意できるの？」である。

「なら待っていて下さい、一週間以内に長と拠点を用意しますよ。」ではないが、関西呪術協会は代案を用意してきたのだ。

彼らは代表者複数名による合議制を持ち込んできたのである。それも「近衛木乃香が正式に関西呪術協会の長となるまでの暫定的な措置」として。

拠点となる場所の問題に関しては、

「将来の長をお守りする意味も含めて、麻帆良に拠点を置きたい」と言ってきたのだ。

厚かましいにも程がある話ではあるが少なくとも難癖をつけている訳ではない。

「あのー？」

「なんじゃね？ネギ君。」

そこまで聞いて口を挟むネギ。

「……そこまでして近衛さんが長にならんとダメなんでしょうか？ぶっちゃけ、生きてる面子でどうにかしろって思うんですけど俺だけですかね？」

「そうは言うがのネギ君。君も分かっておるじゃろうが、この世界は『血統』も重要視される世界じゃ。木乃香の魔力もそうじゃが『近衛の血』と言うだけでも重要なんじゃよ。」

何とは無く、少し哀しげな口調の学園長。

彼とて本当ならば孫娘にはこの道を歩んで欲しくはなかったのだ。

だからこそ早い早いと思いながらも、孫娘にお見合いを勧めていたのである。

一般人の所に嫁いでしまえば魔法の道からは切り離しやすくなる、そう考えて。

「……それで、その前振りと俺が呼ばれた訳が繋がらないんですが。」

「関西呪術協会側がネギ君に会いたい、と言ってきておっての。本来ならば断わるべきじゃが『木乃香お嬢様をお救い下さった礼を直接言いたい』と言われればこちらも断わりきれんでのぅ……」

基本、ネギへの他組織からの『お話』はシャットアウトしている関東魔法協会である。

「彼を組織同士のパワーゲームに引きずり込むべきではない」と言う他の魔法先生からの要望

もあるが、魔法協会的にも他組織との接触にて余計な面倒が起きても困るのだ。
ネギ自身にも「他組織からの接触があっても丁重にお断りするように」と通達している。
無論、ネギ自身も面倒事は避けたいのでその辺は上手くかわしているのだが。

「それでは、放課後にでもそちらの方へ寄ればいいんですね？」
……って既に本拠こっち置いてるんですか？」
「そうじゃ。場所はここになるぞい。」

そう言って一枚の紙を渡す。

「何も無いとは思うのじゃが、十分に気をつけるように。」
「了解です。敵地に単身赴くつもりで行きますよ。
……って、今近衛さんの扱いは関西呪術協会的にはどうなってるんです？
次期長、と言うからには相応の扱いを取ると思うんですが。」

素質があるだけで全くずぶの素人と言う木乃香を次期長として迎えるのなら
それ相応の教育は必要であるし、また重要度も跳ね上がってる以上は護衛方法も変わるだろう。
その辺はどうなるのかと聞いたネギ。

「その辺は今の所は現状維持、と聞いておる。
向こうとしても組織の刷新と建て直しに京都の復興など仕事が山盛りじゃからの。
護衛に関しても桜咲君の続投と言う事にしておる。式神による遠隔監視等を導入したい、

とも言ってきたがそこら辺もまだ話し合いの段階じゃな。」

本来ならば桜咲刹那当人を呼び出しての査問会が行われてもおかしくは無い出来事である。
最も、この非常事態時にそこまでやる暇は無いと本人抜きの処分の検討会だけ行ったのだが。

その場において「護衛として派遣されておきながら全く役に立たなかった」と言う事で
桜咲刹那を護衛から罷免する案も出たのだ。
木乃香の幼なじみであると言う縁故とて「木乃香お嬢様の記憶が消えてるなら意味なくね？」
と言う意見まであったほどである。流石に「責任とって腹を切れ」までは行かなかったが。

結局の所、木乃香の記憶を取り戻す為の一環としてと記憶が戻った時の事を考えた時の事を
考慮して続投が決まったと言う形である。無論、それだけではなく関西側の人員を木乃香の
身辺に配備させる事や式神などによる遠隔監視なども要望として出す事にしたのだが。

「では、取りあえず今まで通りと言う事でいいんですね？」

と言うネギの質問に頷いて肯定する学園長。
そして、この早朝会談はお開きとなる。

と言うわけで、関西呪術協会本部へ赴くネギ・スプリングフィールドです。

しかし、『関西呪術協会』のままでいいんだろうか？
『真・関西呪術協会』とか『関西呪術協会・極』とか名前変わるんだろうか？
そもそも、東に拠点置いてて関西とか何かおかしいんじゃないのか？
などと馬鹿な事を考えながら目的地まで歩いてる所だったりします、
３－Ａですが、休み明け一発目でしたが今日も元気一杯でした……
…約一名を除いて。

新体操の夏の大会選抜テストに出られなかった佐々木さんはテンションどん底でした。
選抜テストに受かる為に相当練習頑張ってたそうです。
……下手に慰めるのは逆効果とは言いますが、慰めざるを得なかったです。
インフルエンザって怖いですね、ほんと。

記憶喪失な近衛さんも何事もなくクラスメイトに受け入れられて何よりです。
桜咲さんも見た感じ、近衛さんとの距離を近づけるようにしてるみたいですし。
……まぁ、京都での出来事が出来事だったしなぁ。

しかし、超さんの視線が怖い。
別に「てめぇぶっ殺してやる」と自分殺しを行いそうな眼で睨んでる訳ではないんですが。
何と言うか……何か仕掛けてきても驚かない。勘弁はして欲しいけど。

とまぁ、学校での出来事を思い返しながらたどり着いたのは一軒のマンション。

この一室が関西呪術協会本部と言うことだそうで。

念のため、一度帰宅して魔法世界で冒険してた時並に武装は整えてきてます。

流石に杖を持って歩くわけにもいかないので発動体は指輪ですけども。

いざとなったらどうとでもなりますし。

防具に関しては対物・対魔・対呪用の装備を用意しておきました。

と言っても、腕輪やら服やら札やらですが。

流石にフルプレートメイル着込む訳にも行かないですし。むしろ重い。

バリアジャケット着こんでも良かったんですけどね。あれはあからさまに怪しまれるだろうし。

実際の所、このマンションは『闇の福音』の造反以来派遣されてきた各組織の支部がまとめて押し込まれてるような状況になってます。俺は勝手に『魔女の鍋』と呼んでますが。

流石に好き勝手に麻帆良のあちこちに支部を建てられるのは麻帆良としても困る訳で。

少々値段は張りますが、立地条件的に美味しいこのマンションを提供する事にしたそうです。

やって来た組織同士が対立するんじゃないかとも思いますが、麻帆良に支部を置けたんだし

下らないいざこざを名目に追い出されては割に合わないと思ったのか、極めて平穏です。

恐らくやって来た組織同士で不戦条約なり何なり結んでると思いますが。

と言うか、そうでないとバチカンのカソック来たシスターがイギリ

ス国教騎士団の支部に
「すいません、カレー作りすぎて余ったんですけどどうですか？」
とか行かないだろうし。
ましてや「いつもどうもすいません」とか向こうも受け取らないだろうし。
と言うかお前ら仲良すぎだろう、本当に宗教的に仲が悪いのか？

そんな光景を温かく横目で見守りながら、俺は関西呪術協会本部に到着。
で、挨拶したり念のため持ってきた菓子折り渡したりしながら奥に通された訳で。
迎えてくれたのは葬式の時にもちらりと見た覚えのあるおっさんですが、名前は覚えてません。
ここでこうやっている、と言う事はそれなりに上の立場なんでしょう。

この度はどうもお世話になりました、いえいえ大した事はしてませんむしろすいません、
いやいや、元はと言えば身内の不始末ですからなどと世間話を交えて話は続く事になります。
親東派・中立派・反東派から代表者だして合議制にしてますとか、京都の霊脈・各地の封印は
完璧にボロボロで復旧するまでどれくらい掛かるのか見当もつかないと言うより総本山は
立て直すだけ無駄のレベルにまでズタズタになってるとか、そんな話も伺う事ができました。

「……で、ここからが本題何ですが。」
「はぁ。」

前置き長いです。歳を取るとつい余計な話をしてしまうと言う奴でしょうか？

「次期長……木乃香様の記憶は戻るのでしょうか？」
「現時点では絶望的だとお考えいただければ……」

既に報告は行ってるとは思うのですが、確認は取りたかったのでしょう。
それを聞いた西の代表（？）は溜息を付きますが、見た感じそこまで悲観的には見えません。
その辺、俺が考えてる事が向こうにもわかったんでしょう。

「それほど落胆していない、と思われますか？」
「そうですね……正直な所を言わせて貰えば。」

そもそもぶっちゃけてしまえば、近衛さんの記憶は戻らなくても西としては困らない訳で。
欲しいのは近衛と言う血統と立場、後は巨大な魔力量だけだろうし。
昔の事を思い出そうが思い出すまいが、現状「貴方が次期長なんですよ」と認識させておけば
それで構わないはずなんですが。
葬式の席で近衛さん自身も自分の立場は把握してるはずだし。

その辺を失礼を承知で突っ込んでみると、代表さん大笑い。

「いや、そこまであくどく考えられるとは。噂に違いは無かったようだ。」

……どんな噂が流れてるのかはあえて聞かないことにします。
まぁ、『闇の福音』の時の話がおかしな方向に拗れて大惨事になっ

てるんだとは思いますが。
これならもう少し腹も割れますな、と代表さん。

「実際の所、木乃香様の記憶が戻ろうと戻るまいとこちらとしては一向に構わんのです。
我々が一番恐れてるのは『記憶回復の見込み無し』という理由で木乃香様を勘当する事で、
近右衛門殿が関西呪術協会を吸収し、日本魔術協会を立ち上げてしまうことです。
自分の義理の息子すら捨て駒とするあの冷徹さならばやりかねない！」

何と言うか、誤解も誤解大誤解と言った所ですが……フォローしなくていいよね？
した所で信じてくれないだろうしさ。
と言うか、代表さんエキサイティングしすぎです。

「あのー、幾らなんでもぶっちゃけ過ぎだと思うんですが？」
「……これは失礼。」

別に学園長に御注進、とも考えませんけどね。
こほん、と一つ咳をして改めて語りだす代表さん。

「それで、話は変わるのですが。木乃香お嬢様の今後の事です。
折り入ってネギさんにお願いしたい事がございまして……。」
「はぁ。」

凄い嫌な予感しかしません。

「木乃香お嬢様に魔法の指導をして上げて頂けないでしょうか？」

案の定、と言うか想定は何となく出来てたんですが。

「近衛さんは西の代表になられる以上は陰陽術の方を習得するべきかと思うんですが？
流石に下の者からの反発も出るでしょう？」

「無論、陰陽術の習得もさせたいのですが如何せん人手不足でして。
しかし木乃香お嬢様にも、我々が如何なる力を振るうのかは自覚して頂きたいと
考えております。
次期長となられるならば教育は早めの方がよいわけですし。
それにこれからはただ魔法使いと対立するのではなく、協調するべきだとも考えております。
そういう点から考えても、木乃香お嬢様が魔法を習得する事は不都合ではございません。
陰陽術を習得する際の下地にもなりますし。」

何と言うか生まれ変わった呪術協会を見事に前面に出して来てます。

「無論、ただでとは申しません。月々の月謝の方はお支払いしますし……」

「えーと、すいません。流石にそれは俺の一存では決められないんですが。」

まくし立てる代表さんのセールストークを遮ります。
実際問題、俺がここで独断で決めていい話ではないわけで。
学園長に判断を仰がないとどうにもならない。

「つまり、代表者である近右衛門殿の許可があれば受けても良い、と？」

「それ以前に、俺はそもそも魔法使い見習いの身分でして人に教えるなんてとてもとても。
他の魔法先生に教えを請う訳には行かないんでしょうか？」

魔法先生には違いないが、ある種の例外だしなぁ。
それに、俺よりも優秀な魔法先生はいるだろう。
学園長と個人レッスンしてもいいわけだし。流石に代表さんは納得しないだろうけど。

「ネギさんの事はある程度調べさせて頂いております。それによれば防御・回復系の魔法を
得意としていらっしゃるとか。」
「まぁ、そうですが……」

攻撃魔法は『魔法の射手』と『武装解除』だけですしね。

「魔法先生の中でも、そちら方面に特化している方はおられないようでして。攻撃面に関しては
護衛の桜咲君がいますから心配はしていないのですが、如何せん防御に不安がありまして。
その為に防御・回復魔法の指導の方を宜しくお願いしたいと考えてるのですよ。
それに、木乃香お嬢様の性格から言っても攻撃よりは回復の方が向いているでしょうからな。」
「まぁ、それは確かに。」

近衛さんがガンガン攻撃魔法をぶっ放す姿、と言うのが想像できん。

「この件に関しては近く正式に関東魔法協会の方へ要請させて頂きますので。」

「そうですか……。」

何と言うか、外堀だけが埋まっていく感じしかしません。
取り合えず話はそこで終わったのですが。

そして数日後。

「……と言う訳での、木乃香に魔法を教えてやってくれんかのぅ？」
「マジですか……」

学園長室で予想通りの展開に出くわす俺がいたりします。

「お忘れかもしれませんが。俺、今だ見習いなんですが？」
「何、見習いは魔法を教えてはいかん、などと言う法もないわい。」
「他の魔法先生にお願いすればいいんではないかと……」
「向こうさんがどうしてもお主にお願いしたい、と言って来ておってのぅ。」

尽く撃墜されてる状況です。
これ以上面倒ごとは背負い込みたくないんだよっ！！

「魔法の素人を1から育てるとなると日数がいりますし、俺にも授業の準備と言う物が……」
「つまり、時間があれば問題ないと言う事じゃな？」

そう言って学園長がどん、と置いたのは『別荘』。
まぁ、最低限の建物しかないような極めて標準的な『別荘』ですね。

「この中の1日は外の1時間となっとる。ここを使えば時間も問題

ないじゃろう？」
「いやですね、年頃の女性の老化を早めるような真似は……」
「何、世の中には年齢詐称薬と言うものがあっての。知っとるじゃろ？」

ん？と言う感じでこっちを見てくる学園長。
……分かってて黙ってたのかっ！いや、バレてないとは思ってないけどここで出すのか！！
思わず溜息を吐いてしまう俺。

「分かりました……いつからやらせて頂ければいいですか？」
「そうじゃのぅ。今日からと言うわけにもいかんじゃろうし、明後日からでどうじゃろう？」
「では、そういう事で。俺の家を使うという事で構いませんね？」
「場所に関しては『別荘』を保管できる場所ならどこでも構わんぞい。」

後、これははっきりしておかないと。

「それで、どこまで俺は教えればいいんですか？後、どのくらい無茶していいんですか？」
「向こうからも何も聞いておらんからのぅ。ネギ君の独断で構わんよ。
気になるなら呪術協会の方に問い合わせてみるとよいじゃろうて。」

学園長がくれた連絡先のメモを受け取る。
ここらへんはっきりしておかないと、「よくも傷物に」とか言われたら洒落にならん。

しかし、厄介事が次々舞い込んで来る気がする……もうやだ。

第35話：そして、麻帆良に戻ってきた話。（後書き）

切りがいいのでここで切り。
超さんの動きとかもやりたかったけど次回に回そうｗ

と言うか、色々穴だらけの気がする（苦笑）。
致命的にでかい穴がなければいいよね？

今日の話を一言でまとめると
「始めからそうしろよ関西呪術協会！」の一言に尽きます（おい。
あれですよ、組織崩壊崖っぷち一歩手前で団結心が芽生えたんですよきっとｗ
詠春たちの死は決して無駄ではなかったんだ……

昔チャンピオンで連載してた涅槃姫みどろでありましたよね。
うちの野球チーム優勝できないだろうか、って監督の望みに「監督が死んだこと」で
チームが一致団結して優勝するって言う話がｗ

いや、前書きでちょっと語りましたが本当は結成するつもりだったんですよ、日本魔術協会ｗ
学園長が長に就任して忙しいからちょっと木乃香の面倒みてくんない？具体的には魔法関係。
とネギに頼む辺りまでは考えにあったんですが。

＞口に出すものこそいない
一応、葬儀終わってまなしの話なんで……。

＞合議制

本当は中立の目立たない派閥の人間引っ張ってきて据える、と言う案だったんですが
こっちの方がいいかなぁ、と思ってしまった（え。

＞切り離しやすく
本当にそうかな？と言う気はします（おい。
と言うか、第一話の段階でネギに孫娘薦めてるんですよねｗ
まぁ、軽いジョークのつもり……だと思いますが。うん、多分、きっと。

＞査問会とか
実際あったらせっちゃん、雪山から帰ってきたら一緒にいたはずの衝撃のアルベルトもいない
から十傑集から詰問喰らって十傑集裁判3秒前（ただし孔明はいない）の幻夜状態かとｗ
腹切れって言ったら間違いなくその場で……武器持ち込めねーな（そこか。

＞出られなかったバカピンクさん
俺のせいじゃないぞ！！（おい。
真面目な話、「休みの人間がいるからテストの日にちずらそう」にはならんと思うんですよ。
繰り返すようですが、作者は佐々木まき絵に恨みを持っていない事をここに宣誓します（え。

＞東にあるのに関西呪術協会
東京ディズニーランドだって東京には無いしいいよね！！（関係ねぇ）

＞訪問関西呪術協会

他組織に見つかると色々ややこしいので〔隠〕〔密〕とかやってます。

＞個人レッスン

『祖父と孫、放課後個人レッスン』とか書くとどこはかとなくエロスを感じませんか（何。

第３６話：そして、バカと天才と学園長の話（前書き）

裏話、で別枠にするほどの量でもないわけでして
……とか言ってたら膨れ上がった（おい。
膨れ上がった分完璧に別枠にすることに。それでも短いという（汗
本当は木乃香修行編をメインにするつもりだったんですが……

久々なので色々おかしいところあったらごめんなさい。

第３６話：そして、バカと天才と学園長の話

関東魔法協会理事、近衛近右衛門は朝っぱらから締め上げられていた。
とは言っても別に組紐だとか三味線の弦で物理的に、と言う訳ではない。
朝一でメルディアナ魔法学校の校長－ネギの祖父であり、近右衛門の知人でもある－から
電話が掛かってきたのだ。

要約すれば「そっちに預けてて本当に大丈夫か？」と。

何でも先日、孫－ネギ・スプリングフィールド－より手紙が来たとの事。
無論、手紙の送り先は直接校長にではなく従姉であるネカネにではあるのだが、
それに目を通した彼女が校長室に殴り込みをかけた次第である。
手紙に曰く。

1. 日本における西と東の政争に巻き込まれてます。
2. 今だ修行中の身でありながら、一組織の代表者候補（ほぼ確定）の教育頼まれました。
　しかも両方から。
3. このままなし崩し的にどちらかの組織に入れられそうでマジやばいから帰りたいです。
　とは言え、生徒達を放り出すわけにも行かないですけど。
4. そもそも「日本で先生をすること」が修行内容だからって麻帆良学園で魔法的な治安を
　担う魔法先生までするのは明らかに詐欺に近いと思います。

5．契約書にサインしちまった俺も俺ですけど、吸血鬼の一件さえ大々的に学園が出さなきゃ
　こんな事にはならなかったんじゃないのかと今更ながら思ってる所です。

大雑把に要約するとこんな感じである。
ネカネが殴りこみをかけるのはある種必然であるとも言える。
「やはり、私も麻帆良へ行きます！」と声を上げるネカネを何とか抑え、麻帆良学園、正確には
近衛近右衛門へ連絡した校長だったのだ。

近衛近右衛門としては「大丈夫だ。問題ない。」と言いたい訳ではあるが、『闇の福音』の
一件で全く大丈夫でなかった上にその件で抗議が来ており。
ネギが手紙を出す発端となったであろう修学旅行先の事件について話すと、逆に「どうして
そんな所に行かせたの？馬鹿なの？死ぬの？」と質問される可能性がある上にそもそもネギの
手紙がどこまで書いているのかも分からないので迂闊な事を言う訳にもいかず。
かと言って「すまんかった。」と謝るのもこれからの事を考えれば問題で。
「真に遺憾である。」と言うわけにもいかず、さてどうしたものかと必死に頭を捻った結果、

1．政争は既に解決済みであり、和解に向けた動きが加速している所である。
2．そもそも「修行中の身」とか言ってるけど明らかに実力隠してるよね彼？
　と言うか、冒険者として魔法世界でやんちゃやるだけの力量あ

るじゃん。
　向こう側もその辺を把握済みで打診してきており、和解の動きを阻害したくは無かった。
3．上記はあくまでも期限付きの物であり、それは向こう側も了承している。
　最大でも来年の3月まで。延長は絶対に無い。
4．確かにこちらにも落ち度はあるが『闇の福音』の一件でこちらの了承無しに独自の行動を
　取ったネギ君にもある程度問題はある。
　他組織の行動から彼の身を護る為にも、魔法先生として登録する事が必要だった。
5．とは言え、そちらが心配するのも当然であり我々としてもこれ以上トラブルを彼の元へ
　持って行くような事はしたくない。
6．魔法先生の業務に関しても最低限で止めるように留意し、修行内容である「日本で
　先生をすること」を全うできるように努力は続けるつもりである。

大雑把に要約するとこんな感じである。
実際の所、京都における一件は近右衛門としても想定外の事態の悪化であったのだ。
リョウメンスクナの復活における京都の霊的壊滅、総本山消滅、婿である詠春の死亡と
孫である木乃香の記憶・視力喪失……そこまで起こる事を想定できればそれは預言者だ。

そんなこんなで会談を終わらせたと思ったら今度はガンドルフィーニたちの来襲である。

用件はほぼ同じ。ネギ君を一体どうするつもりでいるのか？と言った内容である。
つい先だって行われた京都での一件を労う飲み会にて『間違って』酒を飲んでしまった彼が延々と愚痴ってたとのこと。

幸いにして、内容はほぼ同じだった為にさっきと同じ答弁をする羽目になる近右衛門。
更に魔法先生としての業務は学園祭から再開させる、と言う事で納得させる事に。
実際問題、今年は世界樹の大発光現象が発生する為に人手は1人でも欲しいのだ。

朝から精神的にくたびれた近衛近右衛門なのであった。

一方、同様に麻帆良最高頭脳と言われる才女・超鈴音もくたびれていた。
ネギ・スプリングフィールドについて持てる情報網・調査網を駆使して調査したのだ。
茶々丸がいれば楽だったのではあるが、既にこの世にいない為そういう訳にも行かず。
徹夜で情報をかき集め、まとめる必要があったのである。

しかし、その結果は彼女を満足させるようなものではなかったといっていい。

3歳の頃ウェールズの村にて悪魔の襲撃に合い、重傷を負う（なぜか全裸だったという。
原因は明らかにされていない）。その後メルディアナ魔法学校にて

魔法使いとして歩み始めるも、
石化した村人達の治療の手立てを探す為に5歳の折に家出。
魔法世界に潜り込むと旅の錬金術師に師事する形で魔法世界を放浪する。
その折に作成した魔法薬と遺跡にて発見したマジックアイテムによって石化の解除に成功。
『マギステル・マギ』として推薦する声も上がるも、本人が断固辞退。
その後、最年少卒業生としてメルディアナ魔法学校を卒業し、現在に至る。
回復・補助魔法を得意としており、マジックアイテム作成もこなす後衛型魔法使い。

何故全裸？と言うのは気になるがそこを気にしていてもしょうがない。

確かに自分の知る知識においてそんな事はなかったのではあるが。
それを言い出せば、家出して魔法世界で錬金術を学んでいたという事やウェールズの村人達の
石化がこの段階で解除されている事も同様である。
そしてただ脱げただけの状況に比べればこちらの方が大きな誤差ではある。

やはり世界の修正力、と言うやつなのか？
それとも時間を飛び越えた際に平行世界へと飛んでしまったのか？
最も、自分がこうして存在する段階で純粋な「過去」とは言いがたい。
少なくとも自分が知る「過去」には『闇の福音』に茶々丸と言う従者はいなかったのだから。

話を戻そう。
『桜通りの吸血鬼』の一件にてエヴァンジェリン・茶々丸主従が死亡。外部組織の麻帆良進出。
修学旅行において関西呪術協会総本山の消滅と『紅き翼』の一員にして関西呪術協会の
長でもあった近衛詠春の死亡、さらには近衛木乃香が記憶喪失であるという。
さらにはそれに伴って関西呪術協会が麻帆良に間借りしたという事実。

小さいようで大きな所ではオコジョ妖精であり、ネギの使い魔であるカモミール・アルベールの
死亡と言うのもある。
この段階で既にネギ・スプリングフィールドが従者を持つことはあり得ない。
あるいは、彼自身がそれを望めばありえるかも知れないが。

正直な話をすれば、既にこの先がどう動くのかが全く読めないと言った状況である。
自分が知っている「過去」ならばヘルマンを名乗る魔族が襲来するという話ではあるが……。
神楽坂明日菜が「裏側」を全く知らない現状で、果たして動く事があるのだろうか？

「……まぁ、来ないに越した事は無いんだけどもネ。」

それは取りも直さずクラスメートが巻き込まれる、と言う事なのだから。
死者・負傷者が出ないにしても、何も起こらないに越した事はないのだ。

しかし、と考える。
両方の事件において彼は何をしていたのであろうか？

まずは『桜通りの吸血鬼』事件。あるいは『闇の福音の反乱』事件。
龍宮によれば、彼は吸血鬼化された生徒達を前に途方にくれていたという。
そこに至る経緯や人数に差異こそあれど、エヴァンジェリンがクラスメイトを吸血鬼化し彼に
決戦を挑んだことまでは「過去」と同じ。そこで何があったのか？
後衛型魔法使いである彼が優秀な前衛である茶々丸と、封印解除済みのエヴァンジェリン相手
に互角で凌ぎ切ったと言うのか？もしそうだとするならどうやって？

それを知る唯一の情報源、茶々丸は完全に破壊されておりデータの復元も不可能。
改めて残骸を調べてみれば明らかにパーツが足らない……無論、跡形も無く吹き飛んだ
可能性はあるが、彼が証拠を隠蔽する目的で隠した・破壊しつくした可能性も捨てきれない。

修学旅行一ホテルに滞在してる日数の方が長かったが一での一件。
目的は親書を渡す事と近衛木乃香の護衛。
しかし、護衛対象を護る為に修学旅行をおじゃんにするとはどういう了見なのだろうか？
確かに効果は認めるが……結局の所、大鬼神は復活したわけであり。
「過去」とは違う規模の復活を考えれば結果論ではあるが妥当であったとも考えられる。

この件においては先の件より不可解極まりない状況である。
一体、誰が大鬼神を止めたのか？
あの時点において関西呪術協会に押さえられるだけの力は無く、唯一可能性のある近衛詠春は先に逝き。
「過去」において大鬼神を圧倒的な力で秒殺してのけた『闇の福音』も存在しない。
……なら、誰が？
「ネギ・スプリングフィールド」では不可能なのだ。強さの桁が違いすぎるのである。
しかし、現に自分たちは無事に麻帆良に帰ってくることが出来ている。
となれば、やはり彼が何かをやったのか……しかし、何を？
魔法世界で揉まれて来たとは言え、大鬼神をどうこう出来る何かを持っているとは思えない。

龍宮にネギについて尋ねた事がある。
詳しい事は「口止め料を貰ってるんでね」と教えてくれなかったが
「アレは羊の皮を被った
狼のような物だ。油断だけはしないほうがいいね」とは言っていた。
少なくとも口止め料を払わなければならないような事があった、と言う事でもある。
となれば「切り札」一格上を倒せるだけの一を持っている可能性を考慮する必要はある。

とは言え、学園祭の時期に入ればこちらも「切り札」を切る事ができる。
その前に彼と戦う事になるのか？と言う問題もある。無理に戦う必要は無いのだ。
ああ見えて生徒の事は真剣に考えている節はあり、話し合い次第ではこちらに引っ張る事も

出来るのでは無いだろうか？無論、楽観はしていないのだが。

とにかく、彼についてはこれからもマークする必要があるだろう。
『計画』が崩れるとするならば、それは彼が原因になるのだろうから。

３－Ａ出席番号８番、神楽坂明日菜は怪しんでいた。
ルームメイトであり友人でもある近衛木乃香についてである。
修学旅行でのインフルエンザ騒ぎで病院に担ぎ込まれ、高熱で片目の視力と記憶をなくした
木乃香であるが、麻帆良に戻ってきてからどうも人付き合いが悪いのだ。

無論、記憶が無い一個人的には料理の味付けまで変わってる辺りに戸惑ったのであるが一と
言う事で本人がやや引っ込み思案になっているという点はある。
「ずっと友人だったんですよ」と言われても本人に記憶が無いのだから戸惑うのは当然の事。
その代わり、桜咲刹那とはそれなりに仲良くやっている雰囲気はある。どちらかと言えば、
桜咲の方が歩み寄りを見せていると言う感じであるが、それはそれでよしである。
やはり、記憶を無くしたというのは彼女にとってもショックだったのだろう。幼馴染と言う事は
その衝撃も大きかったに違いない。

しかし、ここ最近二人でつるんで何かをしている節がある。
二人が一緒にいるのはいい事であり、帰宅時間が遅い訳でもないのだが何かを隠してる気配が

あるというか……とにかく怪しいのだ。
やたら疲れているのか、帰ってきて直に寝てしまうと言う事もあるぐらいで。
初めの内は「桜咲さんも図書館探検部に入ったのかしら？」程度の認識だったのではあるが、
その図書館探検部である綾瀬、早乙女、宮崎から最近木乃香が部活動を休む日があるけど
何か知らないか？と尋ねられてびっくりした物である。

当人に尋ねるのが手っ取り早いと言えばその通りだし、実際に確認を取ってみたのではあるが
修学旅行の折の隕石落下（！）で木乃香の実家は壊滅的被害を被ってしまったとの事であり。
「実家の方のゴタゴタが片付いてなくてな、その関係で忙しいんや。」と言われればなるほど
と納得をせざるを得ない訳だったのだが……

「え？あの二人ならネギ先生と一緒にいるのを見たって人がいるけど？」

と言う某パパラッチの証言が新たな流れを生み出す事になる。
情報網に引っかかった話で、少し前に喫茶店で待ち合わせて合流してるのを見た人間がいる
との事。良くも悪くもネギ・スプリングフィールドは目立つのだ。
最も、そこから先は不明であり調査に乗り出すところだったのではあるが。

まさか教師と生徒の爛れた関係っ！しかも3……と言いかけた所で強制的に沈黙させられた
某アホ毛をスルーしつつ、どういうわけだと頭を捻る。

木乃香の家の事情に何らかの形でネギ先生が関わっているのか？しかし木乃香とネギ先生だけならまだしも、そこに桜咲が混じるととたんによく分からない事になる。
いや、木乃香と桜咲は幼馴染なのだから一緒にいる事は問題ではない。
問題なのはそこでネギ先生が関わってくる理由だ。

やっぱり3人で……と言いかけて再び強制的に沈黙させられた某アホ毛をスルーしつつ、
やはりこれは直接調べるしかない、と決意する。直接聞いてもはぐらかされる可能性もあるし。
現場に直接踏み込むのがやはり手っ取り早い。

でも、踏み込んだ先がお祭り騒ぎだったら……とのたまう某アホ毛を強制的に沈黙させて
そう決意する神楽坂明日菜であった。
当然の如く、図書館組＋朝倉がついてくる事になるのではあるが。

第３６話：そして、バカと天才と学園長の話（後書き）

タイトルと話の流れが逆じゃん、というツッコミはなしでｗ
語呂がよかったんだよ、語呂がｗ

超の思考が取りとめのないものになっておりますが、
思考ってこんなもんだよねと言う事でお慈悲をいただければ……。

＞物理的
壱さんよろしく素手、と言う選択肢もあるんですよね。こう、コキャっと（待て）。

＞殴りこみ
どうしても殴りこみ、って言うと男達の挽歌なイメージが脳内に（おい。
敵地に潜り込んでから武装を始めたり、弾痕だらけのコートに手榴弾引っ掛けたり、
挨拶一発目がショットガンで敵を吹っ飛ばすことだったり、明らかに死んでるだろう勢いで
銃弾喰らっても死なない味方だったり、爆発物の量間違えてたり、
某アニメが参考にしたり。

いや、無論そんな事はしてない訳ですが（当たり前だ

＞会談の内容
分かりやすく端折った書き方にしております。
本当にそんな言い方してるわけではありません。念のため。

＞謝る
トップはあっさり謝っちゃダメだと思うんですよねｗ
意地の張り方間違えるのは問題でしょうけど。

＞頭を捻った結果
別にその場しのぎで物喋ってる訳ではないですからね？
一応念のために言っておきますｗ

＞来年の3月
ようは木乃香が中学卒業するまでですね。
将来は高校へ行くのか、中卒なのか……（え）。

作品関係ないですが、なのはさんは中卒なんですよね確か。
近所から見ると「高町さんちの末っ子は中卒で働きに出てるそうな。
お店の経営ってそんなに
苦しいのかしら？しかも滅多に実家に帰らないなんて……家族仲も悪いのかしら？」
とか言う感じになるんだろうかｗ
後、「中卒で子持ち」って書くと本当に大丈夫か？って気になりますよね（おい。

＞想定
まぁ、無事に親書を渡せるとも思ってなかったでしょうけどもｗ
とは言えここまで大惨事になるとは思うまい。
……なんてひどい話だ。

＞間違って
実年齢的には飲めるんですが、表向きは飲んじゃダメなんですよねｗ
戸籍上はまだ9歳児なんで。

＞情報網
自分で書いてて何ですがどんな情報網なんだろうか（おい。
麻帆良学園のメインデータバンクとかそういう所にハッキングしかけてるのは
情報網、っていわない気もするしなぁｗ

＞情報項目：ネギ・スプリングフィールド
そもそも、彼がどこで生まれたのかがさっぱり分からないというｗ
いつウェールズに預けられたのか、ウェールズで生まれてナギたちが置いて出たのか。

＞目立つ
だって、外人ですよ？（おい。
それを言い出すとガンドル先生もシスターも外人ですけどもｗ

＞一緒にいるのを見た
修行初日です。住所教えて来させればいいじゃんとも思うでしょうが詳しい事は次回にて。
まぁ、素直に油断もあったと言う話ですがｗ
と言うか、自宅なんか使うなっつー話ですな（ひでぇ）。

5／6
一部改訂、削除。
年齢的に不適当な一文があったので。
いやまぁ、確かに原作どおり9歳児ならありなんでしょうが。

第３７話：そして、修行開始直前の話（前書き）

相変わらず遅くてすいません。
今回は切りのいい所で切ったのでちょっと短いっす。

第37話：そして、修行開始直前の話

時間は少し巻き戻る。

少し小洒落た喫茶店。
その隅の方の席にネギ・スプリングフィールドの姿があった。
コーヒーを啜りながら、これからの事を考える。
そう、近衛木乃香の魔法教育についてである。
西の方とも話を詰めた結果、大雑把に言えば以下のようになる。

近衛木乃香の魔法教育に関しての期間は中学卒業まで。
彼女の護衛として桜咲刹那を同行させる。
教育方針については口は出さない、との事。

逆に言えば自分の好き勝手にやっていい、と言うことだ（無論、常識の範疇でだが）。
言い換えれば、次期西の長にどのような教育を施すのかお手並み拝見と言われているような
物で護衛の桜咲刹那も、実質西への（あるいは東への）報告役だろう。

……手は抜けないし迂闊な事も出来ない、と言う事だ。
元よりそんなつもりもないのだが。

ここで自分が教えられる範囲を教え込んで、後々頼られる事が無いようにするべきだ。
それが彼が出した結論である。
即戦力として働けるだけの物を身につけさせておけば、向こうも問題にはすまい。

懸念としては、その結果を知って東西共に欲を出さないかと言う点についてではあるが、
少なくとも西に関しては楽観視している。今だ組織の建て直しに力を注ぐ状況であり、
それほど大きなアクションを取ってくることもないであろう。
東に関しても自身の現状に関して手紙を送った結果が既に出てきている形にはなっている。
祖父としても学園長の意見に関して全て納得した訳ではないが、少なくともこれ以上の
無茶振りがネギに降りかかってくることは無いだろう、と言っている。

……まぁ、それでも無茶を振るなら今度こそ三行半を叩きつけるまでだ。
生徒達には申し訳ないが、寛容にも限度と言うものは存在する。
最も、自身が学校から出て行く場合は近衛木乃香への指導も中止するわけで。
それは学園長としても西としても不本意な結果になるに違いない。
そういう点から考えれば、吸血鬼だの修学旅行だのと言ったややこしい事態は訪れないだろう、
と考えておいても問題はないだろう……多分。

そんな事を考えていると、視界に入るのは二人の姿。
桜咲が見つけるに違いないと手は振らない。あまり目立つ訳にも行かない訳で。
案の定、自分を見つけた二人がこっちへ来るのが見える。

「ごめんな、先生。待たせてもた？」
「すいません、抜け出すのに時間がかかってしまい……」

「気にしなくていいよ、二人も適当に何か頼むといい。」

そう言って二人にメニューを渡す。

ついさっきまでクラスメイト達と話をしていたとの事。

近衛木乃香の記憶がなくなってからこの方、少しでも木乃香の記憶を取り戻そう！と言う事で

クラスメイト達は出来うる限り木乃香と話すようにしているのだ。

何しろ1年の頃からクラス替えがないのだ。話す内容には事欠かない状況である。

昔の話から盛り上がる話もあったりして、中々抜け出す暇を見つけられなかったのだ。

一しきり注文が届いてから、会話を当たり障りのない物にする魔法をかけるネギ。

「と言うわけで向こうの方でも話があったと思うけど、今日から近衛さんには魔法に関しての

講義を聞いてもらう事になる。勿論実技もあるからそのつもりでね。」

「しかしネギ先生、今から講義と言われても……時間が。」

時計を見れば既に17時近く。

女子寮へと帰る時間も考えれば非常に非現実的なスケジュールになりかねない。

そんな桜咲の危惧を読み取ったのか、

「その辺は心配しなくてもいいよ、ちゃんとそこら辺は解決済みさ。ま、論より証拠とも言うからね。早速行こうか？」

会計は当然ネギ持ちである。

経費で落とすわけにも行かないし、そこまでみみっちい人間でもない。
お金は有り余ってる訳で。

「それで先生、どこで授業するん？やっぱりそういう専門の施設があったりするん？」
「……ご期待に添えないようで悪いんだけど、本来なら魔法学校に入って1から学習するのが基本でね。無論、師匠を見つけて弟子にしてもらうと言う事もあるんだけど。
その場合は師匠の家で住み込みで勉強しながら雑用する、って形になるかな。」
「つまり、うちは先生の家に住み込むん？」
思わずぶっ、と吹きそうになる桜咲とネギ。

「流石にそれは勘弁して欲しいかな……まぁ、自宅と言うところは合ってるんだけどさ。」
「他に場所はなかったんですか先生？」
「先方、学園長共に了承は取ってるから心配しなくていいよ。
……まぁ、桜咲さんの言いたい事もわからないでもないけどね。」

正直な話、どこかそういう施設があるなら借りても良かったのではあるが。
『別荘』を持ち歩くのが非常に面倒くさいのだ。無論【王の財宝】の中に放り込んでおいたりすれば問題なく持ち運べる訳ではあるが、出すときに人目を気にする必要がある。
ましてや「それどこから持ってきたんですか」と聞かれたときに釈明するのも面倒だ。

「一応、俺の家は普通の人間にはたどり着けないようにはしてあるしね。
……そうそう、この辺りから道順はちゃんと覚えて置くように。」
でないといつまで経っても堂々巡りになるからね、と言う発言に首をかしげる二人。

「ちょっとした結界を施していてね。決まった道順を辿らないと家には辿りつけないんだ。」
「……何でそんな結界を施してるんですっ！」

思わず突っ込んでしまう桜咲。
まぁ、無理もない。
普通そんな結界、自宅近辺に使用する奴などいない。

「ちょっと命を狙われてたこともあってね。そのための用心って奴だよ。
……あぁ、その件は既に解決済みだから心配しなくていいよ。」
だったら結界解いても問題ないんでは……と言う桜咲の呟きは華麗にスルーする。
その時、さっきから考え込んでいた近衛が気になった疑問を口に出す。

「先生？それって郵便物とか宅急便とかそういうのはどないしてるん？」
「……私書箱借りてるよ。」
そう。その結界の都合上、彼の家に絶対に郵便物の類は届かない。

故に彼は私書箱を借りているのである。
当然ながら出前も頼めないし、知り合いを家に招く時は自分が迎えに行かないとならない。
逆にセールスだ勧誘だとか言ったものもこないのでトントンではあるのだが。

そして到着したのは普通のどこにでもある一軒家である。

「ま、狭いところだけど上がって上がって。そうそう、靴は使うから持っててね。」
「お邪魔しますー。」
「それでは、お邪魔します。」

そんな感じで彼が案内したのは地下室であった。当然自家製である。
そこそこ広い部屋であり、書庫に見せかけてあるが実の所『別荘』を置くための部屋である。
大きな『別荘』が一つと、比べるのもおこがましいほど小さい『別荘』が一つ。
何しろ床を占領している面積から違うのだ。

「先生、これは？」
「ダイオラマ魔法球、みんな『別荘』って呼んでるけどね。一種の異界だよ。
ま、百聞は一見にしかずともいうし入ってみれば分かるさ。」

近衛の質問に答えつつ、小さい方の『別荘』の転送用魔方陣へと誘うネギ。
そして、３人の姿は地下室から消えた。

「わー、これあの中なん？」
「その通りです、お嬢様。私も話にしか聞いたことなかったのですが。」
興味深そうに辺りを見回す近衛と、中を確認するかのように辺りを見回す桜咲。
魔方陣を抜けると、そこは南国リゾートだった。
そう思わせるかのような暖かい気候、一面の青い空、煌めく海。
……そして、ぽつんと立ったログハウス。

「さて、この『別荘』の1日は外の1時間に相当する。時差とか慣れるまでに時間掛かるけど、
この中で一日みっちりと修行の方をやってもらう事になるのでそのつもりでね。」

砂浜を踏みしめ、ログハウスの方へ歩いていくネギ。
辺りを見ていた二人がそれを追いかける。

「さしあたっては、座学からになるのでしょうか？」
「そうだね。魔法とはどういう物かと言う事から説明しないと行けない訳だし。
それと並行する形で魔力と言うものを感じ取って貰う必要もあるしね。」

桜咲の質問に答えながら、たどり着いたログハウスの扉の鍵を開ける。
ログハウス自体は平屋建てであり、極めてシンプルな作りとなっている。

「ここが台所でここがトイレ、君たちの休憩する場所はこの和室を

使えばいいから。」

そう言いながら案内するネギ。
生活する為ではなく修行の為に用意された物であり、彼自身もこの件を受けるに当たって
色々と物を持ち込んだりしているので、本だの機材などが居間に置かれている状態である。

「さて、じゃあ今日一日のスケジュールを伝えるよ？」

一しきり説明を終えた後、台所のテーブルの椅子に座りながら説明するネギ。
下座には近衛と桜咲。

「一先ずは座学の方から始めようと思う。
まぁ、魔法についての初歩的な授業だね。この辺は魔法学校の教材を使うから。
で、その後は睡眠をとってもらって……」
「あの、先生？」

おずおずと手を上げる桜咲。

「どうしたの桜咲さん？」
「いえ、何故そこで一旦睡眠と言う選択肢が……」
「時差の問題があるからね。１日経つまで外へ出れないから中で時間調整するしかないんだ。
話を続けるよ？　その後はランニングとか筋トレとかやってもらうから。
……魔法使いって、結構体力勝負な所あるからね。無論、研究一本槍なら話は別だけど。

で、その後食事を取った後は瞑想の時間。魔力を感じ取ってもらう為のね。
本当は練習用の起動キーでひたすら『火よ灯れ』ってやるんだけど、効率悪いんだこれ。
早い話、使えるか使えないか分からないけど取り合えずやってみるか、ってノリだから。
で、一しきり休憩入れた後は体術を覚えてもらおうと思う。これは桜咲さんも協力して欲しい。
俺よりもその辺は出来るだろうしね。で、少し休憩を挟んで再び座学って所かな。
もし、近衛さんが魔力の運用を行えるようになったら、瞑想の辺りは魔法訓練の時間になる。
さしあたってはこんな所で、あとは臨機応変にやっていこうと思うけど。」

何か質問ある？と尋ねるネギ。手を上げる近衛。

「入る時、隣にこれより大きいやつがあったけど、あれ何なんですか？」
「あれは貰い物と言うか、手に入れた戦利品と言うか……ま、私物だよ私物。」
「あちらの『別荘』は使えないのですか？」
「まだ早い、と言っておこうかな。……いや、桜咲さんなら問題なく行けるか？」

桜咲の質問に答えながらも、後半は考え込むように呟くネギ。

「ま、近衛さんが一通り魔法を使えだしたらあっちに案内してもいいよ。」

ただし覚悟はしておいてね、と言う言葉に眉をひそめる桜咲。

「何か凄いもんがあるん？」

「……外の1時間が中の一週間に相当するんだ。
つまり、多用しすぎるとあっという間に大人になっちゃうって事さ。」

「あの……それはもしかして……」

近衛の質問に答えるネギ。
それを聞いた桜咲が恐る恐る、と言った形で確認を取ろうとするが。

「ま、月4回4時間くらいならまだ大丈夫だとは思うよ？それでも合計1ヶ月経つけどね。
それとこの『別荘』とは違って色々と危険が溢れてるような地形があったりするから、そういう意味でもまだ早いって所かな。」

具体的には黒狼鳥とか、火竜とか、轟竜とか、水竜とか、鎌蟹とか、金獅子とか。
割と物騒な生物名が出てきてる感じしかしない為、確かに早いかもと思う桜咲であった。
結果的に質問はスルーされてしまったわけなのだが。

「さて、それじゃあ早速授業の方に入ろうか？」

第37話：そして、修行開始直前の話（後書き）

あくまでも木乃香の修行なんで、せっちゃんが基本ヒマヒマ星人なんですよねw
体術の講師くらいしかできそうにねぇw
……あー、陰陽術の基礎も一応喋れるか。

＞『別荘』ことダイオラマ魔法球

8巻を見る限り少なくとも気軽に持ち運びできるサイズではないw
販売時は「魔法球組み立てキット」みたいな感じで箱に入って……
…あの球も入ってるのか？w
洗濯機や冷蔵庫並みに嵩張るサイズだし。後は割れ物注意、のシールは必須か。
いや、そう簡単に割れるようなもんじゃないし割れても困るんですがw

まぁ、中の建物をどうやって作るんだとか、自然の一部をどうやってあの中に放り込むんだとか
色々ツッコミどころはあるんですが魔法でどうにかするんでしょうとしか言いようが無いw

それとも「魔法球拡張パック：城」とか「魔法球拡張パック：砂漠」とかあるんだろうか？
あー、でもエヴァさんの魔法球にある城は自分が持ってた城、って言ってるんだよなぁ。

つまり作成は材料を揃えて自前で作るのがデフォ、と言う可能性も

あるのか？
まずあの水晶（ガラス？）球を作るところからスタート、みたいなw
実際の所は市販あり、市販で物足りないなら自作ありとパソコンみたいなノリでいい気もします。

Q：じゃあ魔法世界でネギがげっとした『別荘』はどうやって持って帰ったの？

A：そんな事俺が知るか……と言う電気人間ネタはさておき、ここを書くまで『別荘』のサイズについては一切考慮してませんでした（苦笑）。
手間暇かけて解体して、かばんの中に仕舞ったんじゃないですかねぇ？
まさか『別荘』自体が取り外し不可、とかそんな阿呆な話もないと思いたいですし。
ある程度のサイズまでは解体できて組み立てるタイプだと思いたい、うん。

しかしあれ、相当な大きさになるよなぁ……部屋に収まったのか？（汗

Q：じゃあ学園長がネギに渡した『別荘』って？

A：同上（待て）。
仮にまだ持ち運びしやすいサイズだからと言っても、そんなもの持ち歩くのは面倒だよね？
家電製品やらパソコンの本体を持って歩くようなもんで。

……そういうことにしておいてくだせぇ（涙。

＞届かない郵便物
カモ君が来た後で結界張ったんですよきっと（え。
で、今度から手紙送る時はこっちに送ってね、と連絡は入れてるに違いないｗ

＞具体的には
気がつけば別荘の生態系が変化して最新作にアップデート！と言うわけにもいかないんでｗ
ジンオウガさん出したかったなぁ（おい。

第３８話：そして、修行開始の話（前書き）

実は時間軸的には３６話より少し前だったりします（苦笑）。
そうしないと辻褄が（おい

第３８話：そして、修行開始の話

近衛木乃香の一日は、結構早い。
何しろ、ルームメイトである神楽坂明日菜がバイトの都合上起きるのが早いのだ。
そんな彼女に合わせて、自然と早く起きる事になる。

彼女が帰ってくるまでの間に部屋の片づけやら朝食の準備に夕食の仕込みを終わらせ、
余った時間で予習と復習をやっておく。無論、学校の授業のである。
記憶障害は、学力レベルにも若干影響しているのだ。

そして、戻ってきたら一緒に朝食を食べて登校する。
寮の入り口で、いつものように桜咲刹那とも合流。

「せっちゃん、おはようさん。」
「おはよう、このちゃん。」

嬉しいと感じるのは、彼女が自分の幼馴染だからだろうか？
とは言え、こうやって一緒に通い始めた最初の頃は、
「おはようございます、お嬢様。」だったのだ。
それが何故？と一度聞いてみた事がある。

「その……公私さえちゃんと弁えていればいいんじゃないかと。
それに、そっちの方が木乃香お嬢様……いえ、このちゃんも嬉しいんじゃないかな、と。」

まぁ、そう桜咲に言ったのはネギなのだが。とは言えそんな事を近衛が知ることもなく。

いつものように、左側に桜咲がいる形で登校することになる。

さて、今現在３－Ａで一番ホットな話題と言えば、
「近衛木乃香と桜咲刹那はそういう関係か？」と言う物である。
何しろ、修学旅行前と修学旅行後では全く関係が変わっているのだ。
話題にならない方がおかしい。

ましてや、放課後二人きりでどこかへ行っていると言う話もある。
それに関しては、

「実家の方がゴタゴタしててなー、そっちの関係で色々忙しいんよー。
せっちゃんにも色々手伝ってもらってるんや。」

と言う近衛の発言である程度の落ち着きを見せ、
二人の仲が急接近したのもそれが理由だろうと言う事で若干の解決を見たかのように
見えたのではあるが……。
その後の事態に関しては、以前語った通りである。

とは言え、学校生活も非常に良好であるともいえる。
そもそも破天荒な３－Ａがクラスメイトが記憶喪失になった程度で臆する訳もなく。
木乃香との思い出を語ろう会、などと言う物が出来る始末。
帰りのＨＲが終わった後も、３－Ａは賑やかな声が絶えないのである。

「遅くなってもたなー。」

「そうですね、少し急いだ方がいいかも知れません。」

そう言って早足で道を歩く二人。

学校からネギの家までは電車と徒歩で３０分程度と言った所。

少々遅れた所で修行場所が修行場所なので問題ではないのだが……。

そうこうしている内に無事到着。チャイムを鳴らす。

「いらっしゃい、今日は遅かったね？」

「先生ごめんなー、皆と話し込んでたら遅くなってもたんよー。」

「申し訳ありません……」

まぁ、別に気にしないよと言うネギと共に地下の『別荘』へ。

『別荘』の現在時間は今の時間とほぼ同じ時間帯に調整されている。

「ほら、中に入ったら朝だったとか言ったら幾らなんでもきついっしょ？

と言うか、『別荘』内の時間が調整できるなんて始めて知ったよ……」

とはネギ。

ログハウスに用意された部屋に荷物を置くと、早速修行の開始である。

まずは座学。

と言っても、魔法学校の初等部が勉強するような所からスタートしている。

魔法の成り立ち、魔法使いとは何か、魔法を使うに当たって気をつけなければならない事等々。

何事も基礎と道徳面の教育が肝心、とも言う。

「と言うわけで、一般人に魔法バレした場合オコジョにされるので注意ね。
……まぁ、近衛さんの場合は立場が微妙だからどうなるかわからないけど。」
「それでも、最低魔法封印される事ぐらいは覚悟した方が宜しいかと。」

無論、一般人への記憶消去やらそもそも魔法を隠す立場で情報操作が行われたりするので、
魔法バレ＝直ぐに世間に魔法が認知される訳ではない、と言うことも伝えておく。

「まぁ、実際問題『俺は箒で空を飛んでる人を見たんだ！』って言われて信じる？って話。」
「ちょっと信じひんかな……」
「ですので、そこまで神経質になりすぎる事もない、とは言えます。」
「とは言え現代においては携帯電話と言う素敵ツールがあるからね。
手軽に情報を取得できて
手軽にそれを発信できる。それを考えると……ね。」

まぁ、このレベルの話は既に終了しており、現在は魔法理論に関する話などを行っている。
いかに効率よく魔法を扱うか、魔力を運用していくかといった理系な話が繰り広げられてる
と思って欲しい。

これが途中晩ごはん休憩などを挟みつつ、２１時まで行われるので

ある。
その後は自由時間……とは言うが、学校の宿題をやっていたりする。

「あの、先生……ここが分からないのですが。」
「えーと、ここはね……。」

何しろ現職教師がいるのだ。分からない所は直ぐに聞けるわけで。

「そろそろ寝た方がいいかな？明日に響くからね。」
「せやな、その方がええやろな。」
「……はい、すいません。」

最低でも２３時には就寝となる。
枕は二つ、布団は一つ。

「先生、どうにかならないのですかっ！」
「せっちゃん、ウチと一緒に寝るのは嫌なん……？」
「い、いえそういう訳ではなくてですねっ！？」

そんな話もあるが大した事ではない。

「やっぱり仲良くなるには同じ布団で寝るのが一番だよ、うん。」

と担任教師が呟いたかどうかも謎である。
そんなこんなで夜も明け、朝６時には修行再開である。

「本当はジープとか用意したかったんだけど。」
「先生、免許持ってるん？」
「……」

「先生？」

体力錬成の為の早朝訓練はランニングから始まる。「この島を一周」と言う奴だ。

とは言え島自体がそれほど大きなものではなく、１時間で回りきれるサイズでしかない。

その後は、ストレッチだの筋トレだのと地味な物ばかりである。

「うーん、障害物でも用意してそこ走る奴でもやる？

鉄線の下を匍匐前進したり、ロープで壁昇ったり見たいな。」

「いえ、流石にそれはやりすぎかと……」

運動の後は軽く汗を流して朝食を取ったりしつつ朝９時くらいまでまったりし、

その後は再び座学となる。

「魔法の発動の方が早かったからね。」

「最初のスケジュールが欠片も残ってませんよ、先生。」

「……予定は未定、ってね。」

意外と、と言うよりは寧ろ当然のごとく近衛の魔法起動スピードは速かった。

『別荘』の修行２回目において既に『火よ灯れ』に成功したのである。

その為本格的に魔法を教える事にしたのだが……

攻撃魔法は『魔法の射手』と『武装解除』のみ、後は防御と回復に特化してるネギが

指導する以上、教える魔法もそちらに傾く訳で。

攻撃魔法は的を用意すればいいが、回復魔法は実地でやった方が早く。

結局『魔法講座・実践編』と言う事になったのである。
即ち、戦闘における魔法の使い方なんかの解説などである。時に体験談を挟みながら。

「とにかく、回復役は怪我に慣れる必要がある。
極論、片腕斬り飛ばされた相手みて失神されると繋がる物も繋がらないからね。」
「後ろでひたすら支援飛ばせばいいや、と考えるかもしれないけど状況をよく確認して
適切な魔法を選択しないと支援は上手く回らないよ。予め前衛と打ち合わせておいて
どういう状況の時はどういう魔法を使うのかも考えておいた方がいいよ。」
「最終的にはどれだけ場数を踏んでるか、が勝利の分かれ目になると思う。
最も、世の中スペックだけで押し切れる出鱈目ってのも存在する訳だけど……」

なぜか最後の台詞は凄い自嘲的だった、と後に木乃香は語る。

休憩を挟みながらの座学が終わると、昼食を取って次は体術の訓練である。
ここで講師は桜咲刹那に代わる。

「あの……何故私がこんな事を?」
「いや、俺の体術は最低限の物しか持ってないからね。
折角天下の神鳴流がいるんだから、自分もちょっと鍛えようかな、と。」
「せっちゃん、頑張ってなー。」

と言う事で、接近戦での相手の捌き方や投げられた時の受身の取り方、攻撃のかわし方、
素手での戦い方、武器を用いた戦い方……などを教授する羽目になったのである。

「私も免許皆伝と言う訳ではないんですが……」
「心配しなくていいよ桜咲さん、俺も見習い魔法使いだからね。」

もしかして意趣返しか何かか？と桜咲が思ったかどうかは謎である。
そして休憩を挟み１５時ごろに、最後の仕上げとして実戦訓練となる。
とは言え、３人で実戦訓練と言ってもチーム戦も出来ない状態だったのだ。
そもそも後衛系が２名、と言う辺りでどうしょうもないのだ……
普通なら。

「……しょうがない、こうしよう。桜咲さん、ちょっと手伝って。」
「どうするんですか？」

数分後、そこにはもう１人の桜咲が！

「うわ、せっちゃんが二人もおるー！」
「しかし、一体どういう原理でこういう事が……身代わり符とも違いますし。」
「魔法世界って凄いよね、本当。」

どちらにせよ、そういう形でチームを組んで実戦形式の訓練と相成

ったのだ。
骨折上等、血を吐くのは当たり前と言わんばかりの訓練である。

「しかし、やはりやり過ぎではないでしょうか？」
「いきなり実戦に放り込まれてパニくられるよりは、多少手加減してる状態でも実戦の匂いを味わわせるのがいいと思うけど？回復魔法の練習にもなるしね。」
「それはそうなのですが……」

そんなこんなで夕暮れ時まで訓練は続き、汗を軽く流してから解散となる。

「と言うわけでお疲れ様。疲れが残ってるだろうけどちゃんと宿題はやっておくようにね。」
「はい……」
「せっちゃん、ウチの部屋に来たらええよ？」

そんな感じで寮に帰宅すると夕食の準備をし。
食事も終わり、風呂を済ませた頃に桜咲が勉強の為に部屋を訪れ。
勉強を終わらせると就寝時間までまったりして、明日に備えて床に就く。

そんな感じで、近衛木乃香の一日は過ぎていくのである。

第３８話：そして、修行開始の話（後書き）

木乃香の一日なのか、せっちゃん受難編なのかよくわからなくなってきた（おい

後、まるで記憶が戻ってるかのような木乃香ですが、そんなことはありません。

それとネギ、先生の仕事はどうしたと思われるかもしれませんが、学園長からの公認を貰う形で早めに上がってる、と言う事にして置いてください（汗。
学校の授業の準備とかも『別荘』で多分やってるｗ

＞公私
この場合ボディーガードの公私ってどこやねん、と言う話もありますがｗ

＞ネギの家
凄い適当ですｗ

＞時間
前話で「時差とか」発言がありましたが、気にしないで下さい（おい。
きっと、あの後別荘内の時間を弄る方法を見つけたんだと言う事で一つ。
パソコンは持ってるけど機能を使いこなしてないみたいなもんです、きっと。
幾らなんでも時間が弄れない、と言うのもなと思いましてｗ

＞思って欲しい
俺は魔法使いじゃないんで、どんな授業するのやらと言う話ですｗ

＞スケジュール
大体１７時から開始を目処に組んでおります。

＞ジープ
何に使うのかは大体察していただけるとありがたく思います（おい。

＞意趣返し
明らかにせっちゃんとばっちりだというｗ

＞もう１人の桜咲
スキルニルさんの無駄遣いですｗ
勿論、訓練終了後は〔解〕〔除〕などで元の人形に戻しております、念のため。

第３９話：そして、『別荘』での話（前書き）

今回も短いっす。

今原作スケジュールを確認して思ったこと。
そうか、ヘルマン事件は５月中なんやなー、とｗ

で、第３５話（西によるこのちゃん教育計画の依頼）が５／６。
そこから数日後に正式に学園長の方から依頼。
そこから『別荘』での修行がスタートする訳で……よし、問題ねーな。
中間テストが５／２６との事なので、それまでにヘルマン終わらせれば（え。

第３９話：そして、『別荘』での話

気がつけば5月も中旬、時が経つのはあっという間ですね。
お久しぶりのネギ・スプリングフィールドです。
近衛さんの修行を始めてまだ１ヶ月も経った訳ではないんですが、
飲み込みが速い。
正直、そろそろ『別荘』いらないんじゃね？と思い始めてます。
大っぴらにドンパチできるフィールドと時間を準備する手間を考えると、『別荘』が
確実なのも事実なんですが……

「それで、ここ最近はどんな感じかな？」
「そうですね……これと言って気配は感じないのですが。」
「油断は出来ない、と。」
「……はい。」

桜咲さん曰く「つけられている」そうで。
数が多いのと、尾行の技術自体が稚拙なのですぐに分かったそうですが。
ここ数日、ぱったりと尾行が途絶えたそうで。

近衛さん曰く「多分、アスナ達とちゃうか？」との事。
何やってるのか聞かれたらしいので。「家庭の都合」と言う事で誤魔化したそうですが。
真実を確かめるべく、調査に乗り出したって所かなぁ。
……結界を一般人が破れるとは考えてませんけどね。

とは言え、偶然から遭遇する事は１００％ないとは言い切れない。
何かの弾みでエンカウントすると話がややこしくなる。

対策は早急に考える必要があるんだけど……うーむ。

「まぁ、今日明日に露見する物でも無いと思うんだけど……困ったなぁ。」

「うちのクラスのバイタリティは目を見張る物がありますからね。」

もう一軒家でも借りて……いやいや、移動する所を見られれば一緒じゃないか。

修行時間をずらして目立たない時間とかにするか……そんな時間ねーよ。

……時間、か。

「よし、何とかなりそうだ。」

「……なるんですか!?」

「何が何とかなるん?先生。」

そんなに驚かなくてもいいんじゃないかな、桜咲さん。

結局の所、しょっちゅういなくなるから問題なんであって。

そして、席を外していた近衛さんが戻ってきます。

ちなみに今は『別荘』（小）の中。一しきり修行を終了した所です。

「さて、これからの方針を伝えるよ。」

そう告げると姿勢を正す二人。

「近衛さんの修行も順調に進んで一当初の予定の倍以上のスピードだからね一正直な所、

魔法理論なんかの座学に関しては教えられる事が少なくなってきた。

何分、一介の見習い

魔法使いな上に、一人が教えられる分量なんて高が知れてるからね。

」

実際、魔法に関しては回復と防御系列しか俺が教えられることは無いわけでして。

攻撃魔法は『魔法の射手』と『武装解除』だけだしなぁ。

……何かバリエーション増やした方がいいのか？地力上げの意味も込めて。

とは言え、今から新しいのを覚えるというのも……。

「と言うわけで次回からは錬金術関係をメインにして、実践の方を重視しようと思う。

具体的にはアイテム作成とか、素材集めなんかだね。ついでに戦闘技術の向上にも繋がると思うから一石二鳥じゃないかな。」

「先生、素材ってどこで集めるん？」

「この『別荘』にそんなものは無さそうですが……」

二人の疑問もごもっともです。

実際この『別荘』リゾート用に作られた感じですし。

「そろそろ君たちの実力も上がってきた事だし、ちょっと一狩り行こうか？って所かな。

明日は相当ハードになると思うから、明日の１４時くらいにここに集合ね。」

幸い、明日は日曜日ですし。

今日帰ってから明日の昼くらいまではゆっくりさせましょう。

と、言う事で解散させる事に。

……さて、こっちは明日の準備が待っている。

そして翌日。
桜咲刹那と近衛木乃香の両名は、砂浜に立ち尽くしていた。

照りつける太陽と、波の音に潮の匂い。
右を見れば、大海原。
左を見れば、ジャングル。
まごうことなき密林であった……海もあるが。

話は数時間前に遡る。
いつものようにネギの家を訪れた二人は、いつものように地下に案内される。
しかし、ここからがいつもと違った。

「今日からはこっちの『別荘』を使うから。」

とネギは『別荘』（大）を前にして宣言したのである。
確かによく部屋を見れば、小さい方の『別荘』は既に片付けられており。

「先生、確かその『別荘』は外の1時間が一週間相当になる、と以前言ってませんでしたか？」

そう確認を取る桜咲。
流石に修行とは言え、毎回そんな事をやっていればあっという間に歳を取る。
それは認めるわけにもいかない。

「桜咲さん、最後まで話は聞こう？

この『別荘』を使うけど修行時間は週1回の日曜日だけにするよ。
毎日やってる分を一日で
やってしまおう、ってだけの話だからね。
……まぁ、その代わり1週間みっちりやるって事になるけど。
週一でどっかに行くって話なら、周りからもそんなに不自然じゃないでしょ？」
「確かにせやなぁ。それに部活動とかにも専念できる、言う事やし。」
「それでしたら問題はありませんが……」

ネギの説明に納得する両名。
それを見て取ってネギの説明は続く。

「この『別荘』は中心の“屋敷”をメインにして“雪山”“密林”
“砂漠”“火山”“森丘”
“樹海”の7つのエリアがある。基本は“屋敷”に移動してからそこの転移魔方陣で
各エリアに移動するんだけど……君たちにはのっけから“密林”エリアに行ってもらう。
自分たちが今現在、どれだけの力があるのかをその身で確かめて欲しい。」

そう言って予め昨日用意しておいたバックパックを二つ取り出し二人に渡す。

「せ、先生？幾らなんでもハードすぎやしませんか？」
「そうでもないと思うよ？特に目的も設定してないし、1週間サバイバル生活するみたいなもんだと思えば問題ないって。さっきも言ったけど、あくまでも今の自分たちがどこまで

やれるかってのを確認してもらう為の物だしね。」

桜咲の質問にそう返しながら、空間に展開したウィンドウ一後で聞いたところによると、

『別荘』のシステム調整をする為の物らしい一を操作するネギ。

「必要な物はそのバックパックの中に全部詰めてあるから。足りない物は自力調達するように。

それじゃ、目の前の魔方陣の中に入ってくれるかな?」

二人が魔方陣の中に入ったのを確認すると、再度設定を弄るネギ。

「えーと、場所は“密林”で……転移場所はランダムでいいか。」

「ら、ランダムって……」

「心配しなくていいよ、バラバラに飛ばされる訳じゃないから。

どうしても気になるなら、しがみついてたらいいと思うよ?」

「そしたらそないするわー。」

「って、このちゃん!?」

そんな感じのまま、二人は転送された訳である。

そして現在に至る。

ちなみに、ネギもまた転移し再び〔転〕〔移〕する事で“屋敷”エリアへ移動していたりする。

「いつまでもじっとしている訳には行きません。まずバックパックの中身を確認しましょう。」

「せやな、先生何鞄の中に入れてくれてるんやろ?」

そう言いながら立ち直った二人は受け取った荷物を確認し始める。

・ロープ１０ｍ
・折りたたみ式１１フィート棒
・松明×６本
・油×６本
・保存食３日分
・調理セット
・水筒（中は水）
・毛布
・ナイフ
・地図（ただし、当てにし過ぎないようにと書いてある）
・携帯動植物図鑑（地図と共に防水加工済み）
・呼び鈴（不測の事態、不慮の事態が発生してこれ以上の冒険が不可能であると判断した場合、
また、７日後に鳴らす事）
・時計（カレンダー付き、防水加工）

「この棒は一体何に……」
「さぁ？ウチもようわからへんわ。」

折りたたみ式１１フィート棒を前にして首をかしげたり。

「松明と油はありますけど、着火する為の道具はありませんね……」
「魔法で火つけたらええやん。」

松明と油を確認し。

「保存食3日分、言う事は後は自力調達せぇってことやな？」
「そうなりますね……幸い、その手の調達には事欠きそうにはありませんが。」

保存食と調理セットを確認する。

「何やかんや言うて、先生も気にはかけてくれてるんやな。」
「とは言え……油断できる生態系、と言うわけでもなさそうですが。」

地図や時計などを見て近衛が思い、図鑑の方を確認して桜咲が気を引き締める。
そんなこんなで二人の珍道中……もといサバイバル生活が始まった訳なのだが。

「確かここに道があるはずなんやけど……」
「獣道すらありませんね、これは。」

『別荘』内は加速度的に時間が過ぎており、地図は殆ど役に立たず。

「見てみてせっちゃん、お猿さんやー。」
「このちゃん下がってくださいっ！　あれはモンスターですっ！！」

ピンク色をした猿（と言うかゴリラ）の群れと刃を交わしたり。

「せっちゃんせっちゃん、あそこの魚釣れるやろか？」
「……！？　み、見なかったことにした方がいいと思います。」

海辺に姿を見せた巨大な魚？の背びれを目撃したり。
（後に図鑑で確認して胸をなでおろしていたりする）

「結構いけるで、このカニミソ。」
「このちゃん……すっかり逞しくなってもうて。」
ヤドカリ型モンスターを晩御飯にする近衛にほろりと涙する桜咲だったり。
そんなこんなで5日が過ぎ。
「気がつけば後二日やでせっちゃん。」
「せやな、このちゃん。でも、油断はできひんよ?」
すっかり桜咲も口調が砕けてしまってたりする。
それはさておき、地図を睨めっこしながらルートを選定する二人。
とは言え、地図自体がほとんど役に立たなくなっているのだが、無いよりはマシである。
「何やかんやで結局外周しか回ってへんな、ウチら。」
「本格的に回ろうとするとなると、月単位、年単位やでこのちゃん……」
「せやな……」
山の方には洞窟もあったりするそうなのだが、海沿いを歩いて回るだけで5日。
何故海沿いなのかと言うと地図を広げて確認した結果、“屋敷”エリアへ行く為の
転移魔方陣が設置された小屋が海沿いに建っているからである。
何も目的無しにただ歩く、と言うのも何なのでそれを目的にして歩いている訳だが……

「せやけど、ここに着くにも後2日やと足りひんよ？」
「そやな……こればっかりはしょうがないわ。」

諦め顔の桜咲。
徒歩で歩ける距離などたかが知れているわけで。
歩くだけならまだしも、クリーチャーに遭遇したり食料を調達したり、とやる事はある訳で。
それに強行軍をする必要もない。
とは言え、目的地を設定しておいてたどり着けないと言うのは無念らしい。
実際、日程的に考えても無理ではあるのだが。

「せっちゃん、何か風強くなってきてへん？」
「一雨来そうな感じですね、どこか凌げそうな場所を……」

と言っても、ここはジャングルでありそんな場所は無い訳で。結果として。

「一雨どころか大嵐やー！」
「このちゃん、はぐれたらあかんで！」

台風のように凄まじい嵐が、“密林”を襲うこととなる。
そして……

「せっちゃん、何か向こう！？」
「あれは……どうして！？」

二人は、信じられないものを見る。

第３９話：そして、『別荘』での話（後書き）

切りがいいのでここで切るｗ
うん、何がどうなったのかは大体見当ついてると思いますｗ

＞結界
実は（今更ながら）ツッコミどころはバリバリでしてｗ
「ネギ先生の家の隣の家を目指せば、真横はネギ先生の家だよね？この場合どうなるの？」
とか「空飛べば迷う以前の問題だよね？」とか。
前者は「ネギの家が見えなくなります」
後者は「空からの侵攻も防ぎます、つーか元々エヴァ対策の結界なんだから
それくらいはやってます」でいいんでしょうけど、
それでもどうよ？と自分でも思うわけでしてｗ

＞６つのエリア
「あれ、“沼地”は？」と思った方。
第３話を確認しなおしたらど忘れしてました（おい。
時間計算が面倒なのでこのまま６エリアにしますｗ
いやまぁ、１年増やすだけなんですけども。

第４０話：そして、『別荘』での話（裏）（前書き）

３９話、若干訂正しております。
具体的には尾行云々の部分（確認したら繋がらなかったので繋げる様にした）

後、今回キャラ崩壊が酷いかもしれません。ご容赦下さい。

第４０話：そして、『別荘』での話（裏）

「ど、どこなのよここー！！」

麻帆良女子中等部３－Ａ出席番号８番。バカレッドこと神楽坂明日菜は大声を張り上げていた。

沈み行く太陽と、波の音に潮の匂い。
右を見れば、大海原。
左を見れば、ジャングル。
まごうことなき密林であった……海もあるが。

一体……どうしてこうなったのか。ここに来るまでの経緯を思い出す。

そもそもは、ルームメイトでありクラスメイトである親友、近衛木乃香の不審な動きが原因だ。
一時は原因も究明し無事解決と思っていたのだが、麻帆良パパラッチの異名を持つクラスメイト
の朝倉和美の発言－ネギ先生と一緒にいるところを見た人がいる－がそれをぶち壊す。
こうなれば直接現場を押さえるだけだ、と図書館組－宮崎のどか、早乙女ハルナ、綾瀬夕映－
に朝倉を加えた調査団を結成、早速調査を始めたのだが……のっけからつまずく事になる。

「……また撒かれたっ！？」
「この数でバレない、と考える方が不思議だと思うのですが。」

『ただの水道水』と書かれた紙パックジュースをストローで啜りながら、残念がる神楽坂に
突っ込みを入れる綾瀬。
ここ数日、行き先を確かめるべく二人の跡をつけているのであるが……ご覧の有様である。

実際、５人がぞろぞろと付いて来てるのを気づかないなら、桜咲は護衛を辞める必要がある。

「て言うかさ、ネギ先生の自宅に直接押しかけてみたらいいんじゃない？」
「それよっ！！」

と言う早乙女の提案を実行に移すことにしたのだが。

「ねぇ朝倉、本当にこの道であってるの？」
「間違いないと思うんだけど……」
「見つからないですー。」

迷うのだ。
ネギの家は決して魔境にあるわけでもなければ、スラムにあるわけでもない。
ごく普通の住宅地の一軒家である。
しかし、たどり着けない。

「一体どうなってんのよー！」
「確かにこの辺にあるはずなんだけどねぇ。」

神楽坂の遠吠えをＢＧＭに参ったなと頭を掻く朝倉。
仮にも報道部に所属している以上、その情報の正確さには自信があ

る。
間違いなく、先生の家はあるはずなのだ。
「……そもそも、本当に二人はネギ先生の家に行っているのでしょうか？
もしかすれば、三人揃って違う場所にいるかもしれません。やはり、初心に帰って二人を
追う所から始めた方がいいのでは……。」
「違う所？やっぱり……」
「いい加減にその路線から離れるですよハルナ。」
「でも、それだと撒かれちゃうんじゃ……」
「安心してくださいのどか。こうなればプロを雇うしかありません。」
そうして雇われたのが。
「……なるほど、このか殿と刹那がどこに行っているのか調べて欲しい、と。」
バカブルーこと長瀬楓だったりする。
「しかし、直接当人に聞いた方が早いんでござらんか？」
「この話題になると、このか話逸らしちゃうのよね。
家庭の事情って言われたらそれ以上突っ込む訳にも行かないし……」
そう言う神楽坂に『ならそっとしておいた方がいいんではないでござろうか？』とも思った
長瀬ではあるが、先生の自宅と言うものには若干の興味がある。
それに。

「まぁ、何にせよお任せでござるよ。報酬の方はよろしくでござる。」

プリン食べ放題と言う報酬は魅力的過ぎたのだ。

その報酬の為に頑張った、と言う訳ではないがその日の午後にはスターブックスで
待機していた調査団の元へ連絡が入る。

『ネギ先生の家に入って行った様でござるな。表札も確認したので間違いなしでござる。』
「よし、長瀬さんはそのまま待機してて！私達も行くわよ！！」
「せめて自分の分の勘定は払うです。」

とまぁ、そんな感じで現場へ踏み込むべく動き出した一行ではあるが……

「迷ったですー」
「な、何で迷うのよー！！」

当然ながら迷う事になる。

「おっかしいなー。地図は間違えてないんだけど……」
「楓ちんに連絡とって、迎えに来てもらえばいいんじゃない？」
「それです。早速連絡を取ってみましょう。」

地図を確認しなおす朝倉の後ろで、早乙女が提案する。
確かにその通りだ、と綾瀬が携帯電話で連絡を取る。

そして、十数分後に合流した訳ではあるが。

「……むむむ、確かにこっち側だったはずでござるが。」

「何で？何で迷う訳ー！？」

やっぱり迷ってしまう訳である。

「本当にネギ先生の家だったのですか？」

「拙者がしっかりこの目で確認したので間違いないでござるよ。表札にもちゃんと名前が入っていたでござるし。」

しかし何故かまぼこ板なんでござろうかなぁ、と首を捻る長瀬を横目に綾瀬も首を捻る。

少なくとも長瀬が嘘をつく理由はない。

……まぁ、買収されたとか可能性は無くもないが、それを言い出すとキリが無い。

なのでここは間違いなく家を見つけたと仮定する。

何故自分たちはたどり着けなかったのに、彼女はたどり着けたのか？

自分たちと楓さんとの違いは何か？

……思考する。

「なるほど……大体分かりました。」

「何がわかったの？夕映ちゃん？」

真実は一つ、と言った感じで回りに告げる綾瀬に質問する神楽坂。

「理屈はわかりませんが……恐らくこのかさんと桜咲さんの二人についていかなければ、

ネギ先生の家にはたどり着けないのではないでしょうか？」

『……は？』

何を言い出したのかこの人は、と言う顔で見る長瀬以外。
長瀬自身は「あー、恐らく魔法的なものなんでござろうなぁ」と考えていたりする。

「実際の所、私たちでは発見すら出来ないネギ先生の家を何事もなく確認した楓さんが、
私たちを迎えに来て案内すると途端に辿り着けなくなりました。この事を論理的に考えると
先生の家に辿り着く／辿り着けないの鍵はあのお二人が握っているとしか考えられません。」

綾瀬自身も考えがたい話ではあるが。
とは言え、こう考えればすっきりとはする。

「それじゃぁ、私たちは絶対にネギ先生の家に辿りつけないって訳？」
「いえ、厳密に言えば長瀬さんは二人と一緒に先生の家に行ったわけではありません。
つまり『二人と一緒でないと辿りつけない』と言うのは正しくは無いと思います。」

早乙女の質問にそう答える綾瀬。そして、長瀬のほうを向く。

「楓さん、特に二人は何か妙な物を持ち歩いていたとか、特定のアクションをとっていたとか
そういうことは無いのですよね？」
「そうでござるなぁ。特に妙な物を持ち歩いてる訳でもなく、おかしな行動を取ってると

言う事もなかったでござるな。」

最も、物に関してはポケットサイズに収まるなら分からない訳だが。

「しかし……」

「しかし、何です？」

首を傾げる長瀬に続きを促す綾瀬。

「地図を見させてもらうと、妙に遠回りと言うか直線距離で通ってないんでござるよ。」

「……尾行を撒く為に習慣的に遠回りしているだけでは？」

実際、自分たちが散々撒かれた訳で。

向こうだって尾行が承知の上ならば、遠回りの一つや二つするだろう。

「いやいや、そういう事が言いたいんではないでござるよ。例えば、ここからネギ先生の家に行く為に皆はどういう道を通るでござるか？」

と2点間を指差して質問する。

「……まぁ、こう行くわよね。」

人通りの多そうな大通りをメインにした道を指でなぞる神楽坂。

残りのメンバーも大体同じである。

「ところが、このか殿と刹那はこういう道順で歩いているでござるよ。」

そう言って指を動かす長瀬。

「大通りを一つも通ってないですー。」
「あ、怪しい……」
「尾行避けとは言え、ねぇ……。」
「そもそも何でネギ先生の家の近くでぐるっ、と一周してる訳なのよ！？」
「つまり……『特定の道順でなければ辿りつけない』？」

自分で自分の発言にまさか、と綾瀬は思う。
それではまるで許可されずに入る者・近づく者を拒む結界のようではないかと。
ファンタジーの世界ではあるまいし……しかし。

「ともかく、今日はもう遅いしここで解散にしましょ。
明日は幸いにして休日だし、このルートをダメ元で歩いてみて、たどり着けるならそのまま
突撃して、やっぱりダメなら考え直しましょ。」

と言うバカリーダーの言葉を受けて解散。
翌日、再チャレンジする事になる。

後に長瀬は語る。「あの段階で先生に連絡を入れておけばよかった」と。

そして翌日。

「つ、ついたです……」
「私たちの努力が遂に報われたのよっ！」
「近所迷惑ですよハルナ。」

何事もなくあっさりと到着した調査団＋長瀬だったりする。

「ていうかネギ先生、表札くらい買おうよ……」

そう言いながら家の写真を携帯で撮ってる朝倉。

「確かにかまぼこ板ですね。」

「だからそう言ったでござろう？」

表札には『ネギ・スプリングフィールド』の文字。

ただし油性マジックで。かまぼこ板に。

ドアをノックし、チャイムを鳴らしてみるが誰も出る様子はない。

「返事が無いですー。」

「ちゃんと二人がここに来たことは確認してるでござるよ。」

前日と同様まず長瀬に先行してもらい、到着を確認してからの移動である。

地図自体に長瀬にルートを書き込んでもらったので間違えるわけも無く。

「居留守じゃないの？」

「外の音が聞こえないほど熱心にナニかやってるとか！？」

「だからパル、そこから離れなさいって！」

「私、裏口の方を見てきます。」

そう言って綾瀬が裏口へと回る。

そして数分後。

「皆さん、裏口が開いていたようです。」
「よし、それじゃ行くわよ！」

綾瀬が戻ってきて裏口が開いていた事を告げると、神楽坂を先頭に裏口へと移動する。

「しーん、としてるわね……」
「やっぱり留守じゃないの？」
「入ってみればわかるじゃない？」
「流石にそれはまずいですー。」

裏口から台所を覗く形で見渡してみるが、人気は感じられない。

「……夕映殿？」
「どうかしましたか、楓さん？」

どうする？と相談してる一行を横目に、ドアノブを確認していた長瀬が綾瀬に眼を向ける。

「本当にこの裏口は『開いていた』んでござろうな？」
「……勿論です。」

『ドリアンワイン（ノンアルコール）』と書かれた紙パックジュースを飲みながら、
いつも通りのポーカーフェイスで頷く綾瀬。
……事実はそうではないのだが。
少なくとも『何故、我々は迷ったのか？』と言う原理だけでもネギ先生に直接問い詰めたい。
好奇心の暴走とも言えるその行為……後に反省することになる。

「ふむ……まぁ、それなら構わんでござるよ。」

ドアノブの鍵穴に付いた引っかき傷のようなもの。
無論、それだけで彼女が鍵をこじ開けたなどと言うわけにも行くまい。
証拠は何も無いのだから。例え黒に近くても白は白だ。

「二人ともー、置いてくよー？」

どうやら相談はまとまったらしい。中に入ることを選択したようだ。
朝倉が声を掛けてくる。
何も無ければいいんでござるがなぁ、と思いながらも付いていく長瀬であった。
もし万が一『何か』があれば対処できるのは自分だけであろうし。
……報酬のプリン食べ放題もまだ連れて行って貰っていない事ではあるし。

「意外と綺麗に片付いてるわねー。」

携帯カメラであちこちパシャパシャやりながら朝倉が批評するように、彼の家は小奇麗だった。

「綺麗、って言うか物が無さ過ぎない？
もうちょっとこう、ごちゃって物があるもんだと思ってたけど。」

そう早乙女が言うように、最低限の荷物しか置かれていないと言うのもあるには違いない。

「しかし、誰もいないでござるなぁ。」
「やっぱり留守だったんじゃ……」
見事なまでに誰の気配も無い。
結局引きづられるように入ってきた宮崎など早く出たほうがいいんじゃオーラである。

「それはありえません。裏口から外へ抜け出れない以上は、中にいるはずです。」
「何か夕映ちゃん、燃えてない？」
「……気のせいです。」

そんな感じで家の中を見て回るが、誰一人として見当たらない。

「玄関に二人の靴もなし……か。どこに消えたって言うのよ？こんな狭い家で！？」
「もう一度1から調べなおした方がいいかもしれませんね。」
「も、もう諦めて帰った方がいいんじゃ……」

ヒートアップ中の神楽坂と、再調査を決意する綾瀬に宮崎は消極的である。
……まぁ、どう見ても違法行為な訳であって。

「何言ってるですかのどか。ここで引いてはここまでの苦労が水の泡です。」
「ま、それでも万が一ネギ先生たちが出かけてて戻ってきたら洒落にならないし、
切りがいい所で帰るのはありなんじゃない？」
家に来る方法は判明したんだし、と早乙女。

そんな訳で、2度目の捜索が開始されたのである。
そして。

「……地下室でござるな。」
「怪しい匂いとスクープの予感ね。」
「これはまさかのエロゲ的展開っ!?」
「突っ込みませんよ、ハルナ。」

廊下の一部に偽装した地下室への扉を発見したのである。
発見したのは某忍者。流石である。
そして地下で見たものは!

「何かしら、これ?」
「箱庭……でしょうか?」
「何だか凄いですー。」

見たことも無いような『何か』であった。
台の上に置かれた水晶球のようなものが連結された状態で鎮座している。
水晶球の中には山や海や砂漠が存在し、箱庭と言う表現もあながち間違っていない。

「砂漠に雪山、火山まであるとは……む?」
「どうしたの楓ちゃん……ってあれ?」

何かに気が付いたかのような声を上げた長瀬の方を見た神楽坂。
しかし、彼女はそこにはいなかった。

「あれ?楓ちゃんは?」
「いないですか?」

「さっきまでそこにいたはずなんだけど……」

神楽坂が指差した方角には、当然誰もいない。

「トイレじゃないの？」

「いや、幾らなんでも姿消したりはしないっしょ。」

そう言いながら、早乙女と朝倉が指差した方角へと歩みを進め……

「消えたー！？」

そう、神隠しにあったかのように忽然と消失したのだ。

「ゆ、ゆえー。」

「だ、大丈夫ですよのどか。何も心配ありません。そう、この世の中に不思議なことなど
何一つ存在しないのです。全てはプラズマが原因で……」

「夕映ちゃんも落ち着きなさいって。」

がくぶる状態の宮崎と宥める綾瀬、そして神楽坂は彼女たちが消えた場所へと歩みを進める。
その足元には意味不明な文字と線が何かを形作っており……

「これは魔方陣……！？」

そう口に出した綾瀬の言葉を聞きながら、一瞬意識が飛ぶこととなる。

そして、気が付けばご覧の有様である。

神楽坂が叫ぶのも無理はないと言えばない。

「アスナ殿もこっちへ来てしまったでござるか。
いや、この場合は全員同じ場所に出てきた事を喜んでおくべきでござろうな。」

そんな彼女に声を掛けたのは長瀬である。見れば、朝倉と早乙女の姿もある。
片方は「こんな所に潮風を頬に受けて裸足で駆け出しそうな天然リゾートが！」と写真を撮り、
もう片方は「まさかの異世界召喚っ！これはいいネタになるわっ！！」と狂喜乱舞状態で
あるのだが。どちらがどちらかは語るまでも無い。

「楓ちゃん、一体ここどこなの！？」
「拙者に言われても分からんでござるよ。」

神楽坂が長瀬に問い詰めるが、当然彼女に答えられるわけもなく。

「ですが、推測する事は可能です。
恐らくは、あの『箱庭』の中なのではないでしょうか？」
『……はぁ？』

冷静に推論を述べる綾瀬に、長瀬以外が「何いってんだこいつ？」的に声を上げる。
長瀬自身は「あー、これも魔法的なものなんでござろうなぁ」と考えていたりする。

「あの『箱庭』一仮にあの水晶球をそう呼びますが一には、一面を海に囲まれた島も

存在していました。そして、私たちが足を踏み入れた床には魔方陣のような物がありました。
極めてファンタジー的な事態ですが、恐らく『中』にテレポートしてしまったのかと。」
「そ、それって帰れるの？」
「入れる以上は出れる、と考えるべきでしょう。一方通行だとは考えにくいです。」

神楽坂の質問にそう答える綾瀬。

「問題はどこからどうやって出るか、です。
この辺りに魔方陣のような物はありましたか？」
「見ての通りの砂浜でござるからなぁ……」

長瀬の言う通り、どうみてもそのような物があるようには見えない。
砂浜に隠されてると言うことも無いだろう。

「私たち、一体どうなっちゃうんですかー？」
「大丈夫ですよのどか。直ぐに帰る事ができますよ。」
「そ、そうよ！何とかなるって！！」

不安そうな宮崎を宥め、励ます綾瀬と神楽坂。

「でも、この島？って人とかいるの？」

一通り写真を撮り終わって満足したのか、朝倉が基本的な疑問を呈す。

「無人島じゃないの？　……『無人島物語』や『蝿の王』をやれって事ねこれはっ！」

「いやいや洒落になっておらんでござるよそれは。」
「と言うか、どっちも色々と大惨事です。」
相変わらずテンションが上がってる早乙女に突っ込む長瀬と綾瀬。
「ともかく、もうすぐ日も沈むでござる。
今日はここで野宿するしかないでござるなぁ。」
日も暮れる時間に無闇に歩き回るのも危険な話ではある。
何しろ、どのような土地なのかも不明なのだから。
そして夜。
砂浜で焚き火を囲みながら談笑する彼女たちの姿があった。
食料ー魚とかキノコとか魚とかーを調達したのも火を起こしたのも長瀬なのではあるが。
「いやー、楓ちんがいてくれて助かったわー。」
「ほんと助かったわ楓ちゃん。私たちだけじゃここまでできないもの。」
「いやいや、この位ならば。」
魚をもしゃもしゃと食べながら早乙女と神楽坂が礼を言う。
実際、彼女がいなければ食事すらままならなかっただろうし、火を起こす事すら不可能だろう。
「何ていうかキャンプファイアーって感じよねー。」
そう言いながら、夜空を仰ぎ見る朝倉。
空には星が綺麗に瞬いて見える。

風も無く、程よい気候であると言えよう。

……しかし、その平穏はすぐに破られることになる。

最初に気がついたのは長瀬だった。

何かがこちらへ歩いてくる音がする。

それも、木々の方から。

足音から推定されるサイズは……っ！

「皆、直ぐにここから離れるでござるよ！！」

「えっ？」

長瀬が警告するのと、それが姿を現したのはほぼタッチの差であった。

鮮やかなピンク色が夜の暗闇でも映え、頭部には角？があり。

……それは、紛れも無く猿だった。

もっとも、９ｍサイズの猿を猿と呼ぶべきなのかは非常に悩むところではあろうが。

「な、何よあれー！？」

「お猿さんですー！」

「に、逃げるですよ！！」

恐らく、ここはあのピンク猿の縄張りだったのであろう。

キノコの匂いにつられてきた可能性も無きにしも非ずではあるが。

ともかく彼女たちは無事に逃げ切れたのである。

「全員、無事に揃っているでござるな？」

人数を確認し、全員揃ってるかを確認する長瀬。
影分身による猿の足止めを敢行し、マンツーマンで彼女たちのカバーについたので大丈夫とは
わかっているのだが念の為である。

「そ、揃ってるけど……」
「何だったのあれ！？」

息を整えながら同じように全員がいるかを確認する神楽坂と、写真取り損ねたっ！と
残念がってる朝倉。

「猿、だったわよね？」
「あんな猿は始めて見ますが……いえ、そもそも動物園でもないと見ない訳ですが。」

間違いは無いと思うが綾瀬に確認を取る早乙女。
綾瀬は頭の中の動物図鑑と照合するが当然、該当する生物がいる訳でもなく。

「わ、私たち本当に一体どうなっちゃうんですかー？」

涙目の宮崎だったりする。

そして、それから４日が過ぎた。

「あれはヴェロキラプトルにそっくりです！」
「よくわかんないけど逃げるわよっ！！」

青い恐竜のような二足歩行のトカゲに追い回され。

「……あれ、魚？」

「足がある魚とか聞いたこと無いんだけど……」

巨大な水竜に遭遇し。

「今日の晩飯はあれで決まりでござるな。」

豚のような生物を狩ったりして。

ともかく彼女たちは生き延びれたのである。

しかし……と長瀬は考える。

この島にやって来て既に5日目、疲労はピークに近い。

何しろ、夜の見張りはほぼ一人。

食事を取るのもほぼ一人。

何か野生生物（モンスター）が襲って来たときに撃退するのもほぼ1人。

負担は全て彼女に掛かっていると言っても過言ではない。

他のメンバーも最初の頃と比べれば口数も少なくなり、黙々と海辺を歩く状況が続いている。

ジャングルの中に分け入るのを嫌がったのだ……まぁ、無理は無い。

どこかに奥に入るための道があるだろう、と言う事で歩いているのだが……

「もう帰りたいよう……ネギせんせー、助けてください……」

特に宮崎の状態が酷い。

半分不眠症のような状態が続いており（初日の猿がインパクトがありすぎたとも言う）、
食事も満足に喉を通らず、ふらふらと歩む姿は痛々しい事この上ない。

「大丈夫ですよのどか、きっと帰れるです。だから頑張るですよ。」

そう言う綾瀬の声もまた疲れたものになっている。
……この数日、のどかとの同様のやり取りは既に数え切れないほどの物になっている。
介護疲れ、と言う言葉が適切であろうか。

このままでは近い内にどちらも潰れてしまう。
そう思っていた矢先。

「きっとって何時ですかっ！」
「の、のどか？」

遂に、宮崎が限界に達した。
既に5日経つ。
歩けども歩けども何も見つからず、得体の知れない生物に追い掛け回され。
精神的にも、肉体的にも疲労した状態ならばこうなるのもやむを得ず。

「一昨昨日も一昨日も昨日もそう言って、何も変わらないじゃないですか！
だからあの時もう帰ろう、って言ったのに……」
「のどか……」

そして座り込んでしまう。
綾瀬に返す言葉は無い。後悔は先に立たないのだ。

「少し落ち着こう宮崎、休んだら気が楽になるって。」
「そうそう、皆頑張ってるんだからさ。」
「朝倉さんとハルナが『ちょっとだけなら大丈夫だから』って言うからこうなったんですよ！
何でそんなに他人事みたいに言えるんですかぁ！」

朝倉と早乙女が落ち着かせようとするが、宮崎は止まらない。

「た、他人事って別にそんなつもりじゃ……」
「そんなに言うなら、残ってればよかったじゃない。付いてきたのはのどかでしょう？」
「ちょ、ちょっとパルまで……こんな所で喧嘩してもしょうがないでしょ！」

神楽坂が仲裁に入ろうとするが。

「元はと言えば、アスナさんがこんな事言い出したのが原因じゃないですかぁ！」
「わ、私が全部悪いって言うのっ！？」
「せんせーの家が見つからない時点で諦めればよかったんですよ！」

売り言葉に買い言葉状態である。
そして長瀬はといえば。

「（困ったでござるな……）」

頭を抱えていた。

このままではパーティ分裂の危機である。
とは言え、解決方法があるわけでもなく。

「もうやだよぅ、おうち帰りたいよう……」
「のどか……」

そう言って泣き出す宮崎。
天も空気を読んだのか、ぽつりぽつりと雨が降り出す。

「とにかく今は雨宿りできる場所を探すのが先でござる。
このままでは全員風邪を引いてしまうでござるよ。」

しかし、そんな場所が見つかるはずも無く。

「嵐になってるー！！」
「台風でも直撃したというのですか！？」

まるでニュースで見る台風直撃の沖縄状態だ。
そんな状態の中、長瀬は見た。

「アスナ殿。」
「ど、どうしたの楓ちゃん？」

いつに無くまじめな声に驚く神楽坂。

「今すぐ、ここからダッシュするでござる……出来るだけ遠くに。」
「ちょ、ちょっと何を言い出すのよ行き成り！」

長瀬が抱えていた宮崎を預けられ、状況の飲み込めない神楽坂。

当然、周りも同様で。

「楓さん、一体どういうことですか？」

「説明している暇は無いでござる、今すぐにここから……」

逃げるでござるよ、と言いかけて。

「ねぇ、この音何の音？」

「ちょっとあれ見てっ！！」

間に合わなかった事を悟る。

空を見上げれば、巨大な翼を持つ鋼色の龍が今まさに、舞い降りようとする所。

古龍種の中でも『鋼龍』と呼ばれる龍である事を、彼女たちは知るよしは無い。

第４０話：そして、『別荘』での話（裏）（後書き）

中途半端かもしれませんがキリがよかったのでここで切る。
まぁ、次回龍と殴り合って、次辺りで後始末含めて終了かしら。
モンハンＳＳではないのでｗ

今回、余りにも後書きがひどかったりするので注意です。
具体的には綾瀬と宮崎が酷い目に合う。

宮崎と言えば、今回ちょっとキャラ壊したかなあと思ったり。
何だかんだで芯は強そう、ってイメージはあるんですが話の都合でこうなった。
ごめん。

＞雇われた
実はたつみーも予定してたりしましたが、代わり映えの無いメンバーになるので辞めたｗ
後、古参戦も検討しましたが尾行の役には立たないだろうので流したｗ
それと以前自宅の場所を教えてるのでその絡みで人を増やそうかとも考えましたが、
あまり増えすぎると扱いきれ無いので没に。

＞忍者
プロなら尾行に徹すれば容易いだろう、と。
没案としては「超りんが人工衛星を駆使して宇宙から二人をトレース」とかありましたｗ

これなら、歩く道筋も分かるでしょうし。
しかし幾らなんでも厳しいな、とw

……まぁ、独自に自宅近辺に無人偵察機を配備してる可能性は捨て切れません（おい。

＞裏口へと回る

書いててつい考えてしまったシーン：

そして数分後。裏手から爆発音が響き渡った。

「今の音は何よー！？」
「ゆ、ゆえー！？」

慌てて裏口へと走った彼女たちが見たものは。
地面に倒れこんだ状態でぴくりとも動かない綾瀬と、爆発で吹き飛んだドアの残骸と瓦礫。
壁が剥がれた部分からは金属製の2枚目の壁が見えている。

「うーむ、恐らく指向性爆薬をドアに仕掛けておいたんでござろうなぁ……」

爆発の跡を検分しながらそう呟く長瀬。

「ちょっと、冷静に判断してる場合じゃないって！」
「ユエ息してないっ！？」

パニくってる朝倉と、綾瀬に駆け寄った早乙女から絶望的な報告が

なされる。

「いや、先生やりすぎでござろう……」

背中から冷や汗を流しながら長瀬はとんでもねーことになったな、と思ったのである。

仮に家主がいたらこう言ったであろう。

「勝手にドアを開けようとしたのが失敗だったね。」と。

＞鍵開け

図書館探検部はダンジョン探索と似たようなもん、と言うか魔法世界で本屋が罠感知で

冒険者からすげー、と言われてる辺りどんな腕前やねん、とｗ

別に鍵開けやったわけでもないんですけども。

＞む？

罠探知判定に失敗、危険感知判定に失敗、テレポーターが起動しました（え

テレポーターは罠ですよ？

＞無人島物語と蝿の王

前者は名前しか知らないんですよねｗ

後者は映画で見た。

ちらっと（本当にちらっと）原作も読んだんですが、全滅ＥＮＤじゃなかったの？

と思ってしまった映画観賞後。

多分、救助に来た人の「一体何があったんだ？」みたいな台詞を超解釈してしまったんだと思うんですがｗ

＞火を起こす

一応、早乙女の眼鏡で頑張れば火を起こせるかもしれませんがｗ

……あー、でも無理かなあ？少なくとも初日は不可能だ（太陽的な意味で）

後は神楽坂が気合で木を擦り合わせるしかねーなｗ

＞揃ってる？

書いててつい（ｒｙ）‥

「のどかは？のどかがいないですよ！？」

「えっ、嘘！？」

辺りを見回して綾瀬が叫ぶように言う。

神楽坂も追従するかのように見渡すが、確かにいない。

「この暗さで迷った？」

「のどかー！？」

早乙女が声を上げて呼ぶが、当然返事は返って来ない。

「まさかあの猿、発情期だったとか言わんでござるよな……」

長瀬の背中から冷や汗が噴き出る。

あまりにも、それは洒落になっていない。

もっとも、その嫌な想像は見事に的中していた訳だったのだが。

（当作品は健全な作品です。よって、ここから先はお見せできません。ご了承下さい。）

＞そっくり

本当にそっくりかどうかは知らんｗ

＞おうちかえりたい

ＮＧシーン：あまりにも空気が読めなかったので

「もうやだよう、おうち帰りたいよぅ……

おいしい布団とぽかぽかご飯、温かいお風呂で眠りたいよう……」

「のどか……」

それだと湯冷めして風邪を引きますよ。

そう言いたいが空気を読んだ綾瀬であった。

第４１話：そして、『龍』の話。（前書き）

のどかファンごめんｗ
恨みとか特にあるわけじゃないけど、一番割り食ってるかもしれないｗｗ

第４１話：そして、『龍』の話。

彼女たちは空から舞い降りる『それ』を見上げていた。
その時だけは、降りしきる雨も叩きつける風も気にならなかった。

全長は大よそ１８ｍほど、全身を覆うのは鋼の皮膚。
極度に発達した強大な翼を以って、ずしん、と言う地響きと共に地面に降り立つ。
その大地を踏みしめた強靭な四肢は、『龍』と呼ぶに相応しく。
トカゲと言うには余りにも凶悪すぎるその『龍』の顔が、彼女たちに向けられる。

そして『龍』は後ろ足で立ち上がり、咆哮した。
殺戮の宴の始まりを宣言するかのように。

『龍』が舞い降りてきた時、彼女達は動けなかった。
まるで、動く事を忘れたかのようにそこに突っ立っていた。
圧倒的な強者のみが持ち得る雰囲気（プレッシャー）。
それが、彼女たちを縛り付けていた……のかも知れない。
……まぁ、ちょっと前までごく普通の女子中学生だったのが、映画も真っ青な展開に
追い込まれているのである。思考を放棄したくなるのも理解できる話である。

そこに叩き付けられたのが、『龍』の咆吼だ。
これで皆が正気に返った。しかし、それでも彼女達は動けなかったのだ。

逃げてどうなる？
立ち向かってどうなる？
動いてどうなる？

訪れるのは、約束された死そのものだ。
何かをする前に彼女達はその心をへし折られたのだ。

そんな中でただ一人。心が折れなかった者がいる。
まだ死んだわけじゃない、手持ちの札で足掻けるだけ足掻く。
それでダメなら……その時に死は受け入れよう。

……否。忍とは、目的達成の為なら命も捨てる。
自身の命もそっくりチップに換えて勝負に挑むのが忍なのだ。
そしてこの場合の目的達成条件は……自身以外の生還。

ちと、報酬と釣りあわんでござるなぁ。

そう考えながらも、甲賀中忍・長瀬楓は死地へ行く。

１６体の影分身のうち、５体は明日菜達をジャングルへと避難させる。
少なくとも、何も遮蔽物の無いこの砂浜よりはまだマシだ。
後は……彼女たちの運にかけるしかない。

そして、残り１１体が『龍』へと攻撃を仕掛ける……が。

「手持ちではどうにもならんでござるな……これは。」

ジリ貧……などと言うレベルではない。
投げたクナイは『龍』に届かず、爪を掻い潜っての白兵戦すら寄せ付けない。
『龍』の全身は風に覆われていたのだ。
密度の薄い分身などは、その風に吹き飛ばされる形で消滅する始末。
あの風自体は自然現象である以上、結界破壊の術を以っても破壊は不可。
このような事態を想定していなかった為、クナイ以上の武器も所持していない。
……仮に巨大十字手裏剣を持って来たとしても、通用したかどうかは疑わしい。
そして、あのサイズでは考えられないレベルの俊敏性。
猫のように、とまでは言わないがあの大きさでは考えられないような動きをするのだ。
気が付けば、分身は既に数を減らして3人。
長瀬自身も手傷を負い、戦闘の継続は困難。
しかし、それでもやるしかないのだ。
だが、『龍』の方はちまちまとした戦いを好まなかったらしい。
口から吐き出されるのは可視化するほどの密度を持つ疾風の吐息（ブレス）。
長瀬はギリギリの位置で回避一可視化されてなければ直撃だったはずだ一するが……
その吐息は、明日菜達を逃げ込ませたジャングルを直撃したのである。

気がつけば大地に転がっていた。
神楽坂明日菜の心境はそんな所である。

雨のせいで大地は当然泥に塗れており、今の彼女は子供の泥遊びよりも
酷い有様になっている。
長瀬に連れられてジャングルに入り、そこで突風に吹き飛ばされたのだ。

口の中の泥を吐き出し、起き上がろうとするが起き上がれない。
脚に力が入らない。
足を見れば、おかしな方向に曲がっている自分の左足。
よく見れば右腕も曲がってはいけない方向に曲がっている。
認識した途端に痛みが明日菜を襲う。

他の皆は、と見渡すがこのジャングルで探すのは至難の業以外の何物でもなく。
少なくとも辺り一帯が突風でなぎ倒されたようになっているので、
視界が確保できない訳ではないのだが……。

どうしてこうなったのか。
ここで私たちは全員死んでしまうのだろうか？
嫌だ、死にたくない。
まだ高畑先生に告白もしてないのに……。

そんな彼女に近づく足跡が一つ。

朝倉和美はライブでピンチ、と言う危機に立たされていた。

片足は倒れた木に挟まれ身動きの取れない状態。
そして、目の前数m先には小型の青い鳥竜種（無論、彼女には分からない事だが）の姿。
それも複数。
恐らく獲物のお裾分けに預かろう、と言う魂胆なのであろうがそんな事がわかるわけも無く。
報道部の意地か、携帯電話こそ手放さなかった物の役に立つ訳でもなく。

近くには頭部を強打したのか、頭から血を流す早乙女の姿。
その血すらも、雨風が流し落としてしまう。
呼びかけにも答えない所を見ると、完全に意識を失っているのであろう。
最も、朝倉からは見えなかったが腕を同じように木に挟まれており、気が付いていた所で
逃げる事は不可能であったのだが。

そして、その声に反応するかのように包囲網を狭める鳥竜種達。

あぁ、もうダメだ。
意識を手放す朝倉の最後の思考。

「のどか、目を覚ますですよ！のどか！！」

綾瀬夕映は宮崎のどかに声を掛け続けていた。
奇跡か幸運かはたまた悪魔の悪戯か、綾瀬自身に怪我らしい怪我は見当たらず。
無論、泥塗れには違いないがそれだけで済んでいるのは驚嘆に値し。
……彼女の傍にいる宮崎の姿を見れば、こう思うだろう。

彼女の運を奪ったか、と。

吹き飛ばされた折に突き刺さったのか、倒れた木の尖った枝が宮崎の腹を貫いており。

流れる血は彼女の下半身を、地面を赤く・薄く染めていく。

出血の影響で彼女の意識は既に無く。命の灯火は消えていくばかり。

こうなっては博識を誇る綾瀬の頭脳でももはやどうにもならず。

ただただ後悔を募らせ、彼女に呼びかけるばかり。

何故あんな事をしてしまったのか？

何故引き返さなかったのか？

しかし、もはやそれはＩＦの話であり。

現実は非情であったのだ。

それを身をもって理解した時には遅すぎた、のであるが。

長瀬もまた、完全に追い詰められていた。

空からの攻撃と吹き荒れる吐息は彼女の体力を奪うに十分で。

腕の一本も取られずに持ちこたえたことこそ賞賛に値する。

だが、それもここまで。

元より生き延びる為の戦いではなく、生き延びさせる為の戦い。

しかし、それを嘲笑うかのような『龍』の吐息は一切を台無しにし。

そして今、動かぬ彼女に止めを刺すべく『龍』が突撃す。

覚悟を決めて、それでも最後まで目を瞑らなかった彼女が見たものは……

「神鳴流奥義！極大雷鳴剣！！」

横合いから龍を斬り付けた桜咲刹那であった。
瞬動により間合いに入り、『龍』がまとった風を物ともせずに放ったその一撃は。
凄まじい雷光と爆炎を巻き起こした。

神楽坂明日菜が目を覚ましたのは、爆音を耳にしたからである。
痛みの余り気を失って……と思い出すが、意識は朦朧としたままである。
丁度、寝起きの状態とでも言うべきだろうか。

それでも、吹き付けていた風雨の影響が無いことだけははっきりする。
地面は泥に塗れており冷たい泥の感触が彼女の身体に伝わってくる。
しかし、暖かい光のような『何か』が彼女の周りを覆っているのか、不愉快ではない。
……むしろ、この暖かさが心地よいと言うべきか。

「　　」

誰かが声を掛けてくる。
そちらにゆっくりと目を向けると、おぼろげながら見える親友の木乃香の姿。
何でそんな所にいるのよ？と声を出そうとするが、上手く声が出ない。

大丈夫、みんな無事やさかいにな。せやから、もうちょっとだけ我

慢しとってな。

そう木乃香が言ったような気がした。
そして彼女は再び目を閉じる。

近衛木乃香と桜咲刹那が出くわしたのは、巨大な鋼色の『龍』と追い詰められた長瀬楓の姿。
何故こんな所に彼女がいるのか？そんな事を考えている暇も無く。
一先ず助け出す事が先だ、と行動を開始したのである。

無論、彼女一人でここに来ている訳も無いだろうと近衛と桜咲の作った式神が付近の
捜索に乗り出したのであるが、まさに間一髪だったと言ってもいい。
1人を除いて五体満足ではない、と言う点では間に合ってないとも言う。

特に最後に見つけた宮崎に関しては、既に危篤状態と言ってよく。
必死の治癒魔法によって辛うじて息を吹き返したが予断は許されず。
しかし、あの『龍』は桜咲だけでは手に余るであろう以上は加勢に行く必要がある。
結果、広域治癒・防御結界を展開して彼女達を護る形にしたうえで式神に後を任せたのである。
当然ネギへの救援を要請してから、だ。

「た、助かったでござるよ……」
「貸し一つ、と言いたい所だが。何でこんな所にいる？」

今だ晴れぬ視界の中、油断無く『龍』のいた所を睨みつけながら桜咲は長瀬に問う。

「いやぁ、話せば長くなるんでござるが。」
「なら後でゆっくりとするんだな、ネギ先生と。」

それも勘弁して欲しいでござるなぁ、と思うがこの場合は止むを得ないと言うか当然で。
明らかに不法侵入者な訳だし。

「それでまだ戦えるか？」
「撹乱程度でよければ、でござるがな。」

手足の調子を確認。ついさっき呪符で回復してもらった身体はベストとはいえないが
動かすには問題ない状態で。

そのタイミングで空気を揺るがす咆吼が巻き起こり『龍』の姿が露になる。
頭部にあった角が一本、へし折れていた。

「相当な痛手になった、と思ったんでござるがなぁ。」
「……気をつけろ。あれは相当硬い！」

それと同時に真っ直ぐに突っ込んでくる『龍』を散開して回避する二人。
振り回される尻尾と前足、喰らいつこうとする牙から身を交わし、斬りつける。
幸か不幸か、『龍』を纏う風こそ収まっているが……

「硬いなんてものではないでござろう！」
「斬岩剣ですら満足に傷が入らない、か……」

長瀬の持つクナイは論外。
名のある銘刀を振るう桜咲の一撃とて、掠り傷を負わせる程度。
最低でも極大雷鳴剣クラスの奥義を持ち出さなければ手傷すら負わせられない、と言う事か。
そして、それを行うにはそれなりに『溜め』がいる。
その時間を稼ごうにも『龍』の攻撃は苛烈を極め、長瀬の攻撃は全く通らない以上、牽制にもならないであろう。
これが自分とお嬢様、そして長瀬だけならば撤退戦に移行するだけの話なのであるが。
式神を通して確認すれば、やはり数名がここに来ており負傷までしている。
そうなれば追い返すしかないのだが……

「刹那！！」
「っ！？」

長瀬の呼びかけで我に返るが既に遅く、『龍』の尾が今まさに叩きつけられんとする所。
刀で受け止め、『気』を全て防御に回し、自ら後ろに飛ぶ。
それでも十数m吹き飛ばされ、辛うじて受身は取ったが体勢は整っていない。
『龍』の口が開き……その頭部に数発の光の矢が着弾。
一発は開いた口の中に飛び込み。さしもの『龍』も苦鳴を上げた。

「せっちゃん！！」
「お嬢様！」

近衛が作ったその隙に体勢を整え、『龍』から近衛を守る位置に立

ちふさがる。
今は考える時ではない。お嬢様を守ることこそが重要なのだ。
極論してしまえば、後は全ておまけである。
口には出さないし出したら彼女から怒られるだろうが。

「みんな何とか無事や。ネギ先生にも連絡したさかいに、どないかなると思う。」
「分かりました。後はこの『龍』にお帰り願うだけですね……っ！」

いつの間にか低空をホバリングするかのように飛んでいた『龍』が急降下してきたのだ。
よほど先ほどの一撃は応えたのであろうか、近衛を狙う形で襲い掛かる『龍』。
近衛を抱き上げるように飛び下がる桜咲。
しかし、その落下速度は、舞い降りた辺りを吹き飛ばすには十分で。

「ひゃぁっ！」
「くっ！！」

その威力と風圧は、桜咲が思った以上の一撃であり吹き飛ばされる事になる。
再び放たれんとする疾風の吐息。

「いかん！」
「私よりもお嬢様を頼むっ！！」

助けに入ろうとする長瀬に咄嗟に呼びかける桜咲。

「せっちゃん！！」

そう叫ぶ近衛を長瀬が引き離した瞬間。
吐息は、桜咲を直撃したのである。
響き渡る近衛の悲鳴。
そこには、何も残っていなかったのだ。

……桜咲刹那は、宙に舞い上がっていたのだから。

上空へ吹き飛ばされた桜咲は考える。
この高さから落ちれば死ぬ。それは確定事項である。
だが、それはただの『人間』なら、の話。
今だお嬢様に『あの姿』を見せるのは踏ん切りがつかなかったのではあるが、
ここで死んで悲しませるならば……！

そして、彼女は空を舞う。
背中には白き翼。
彼女本来の姿が、ここにある。

なすべき事はただ一つ！
一気に急降下、目指すは『龍』の首！！
今の自分が為せる最大の一撃を、叩き込むのだ！！！

それは『龍』ですら知覚できなかった。
落ちてくる風の唸り声を耳に入れた時には、既に一太刀浴びせられていたのである。
その一撃こそ。

「神鳴流決戦奥義！真・雷光剣！！」

先ほどの極大雷鳴剣を上回る雷光の一撃が、龍ごと辺りを爆炎で覆い尽くした。

近衛木乃香は見た。桜咲刹那の勇姿を。
刀を納め、彼女はこちらを向く。

「お嬢様……」
「せっちゃん……」

桜咲の背には、白き鳥の翼。

「お嬢様、私は……」
「いやや！ウチそんな話聞きたくない！
せっちゃんが……死んで天使になって帰ってきたやなんて！！」
「……え？」

一瞬拒絶されたか、と寂しげな顔を浮かべそうになった桜咲はその後の言葉で固まってしまう。

「あ、あの、お嬢様？」
「帰って来てくれた事はウチはめっちゃ嬉しいけども、ちゃんと神様から許可は貰ったん？
それとも天使やのうて、戦乙女とかそういう類やろか？せっちゃんヴァルハラ逝ってもたん？」

せっちゃんがラグナロクに行ってまうー、と1人テンションを上げる近衛に桜咲は何と言っていいのかわからない。

「刹那、早く事情を説明しないと誤解が広がるばかりでござるよ。」
「お、お嬢様っ、お願いですから私の話を聞いてくださいっ！」

長瀬に促される形で慌てて近衛に声を掛ける桜咲。
そもそも空へ吹き飛ばされただけで死んでなかったと言うこと、鳥族とのハーフである事、
その中でも禁忌とも呼ばれる白い翼を持ってるのが自分である事。
この姿を見られたら自分は姿を消さなければならないこと。
その他諸々、今まで黙ってた事を謝るかのように喋り倒す桜咲。

そんな彼女を見て「テンパってるでござるなぁ」と思った忍者が１人。

「……と言う訳です。お分かりいただけましたか？」
「何でせっちゃんが姿を消さなあかんの？」

まくし立ててぜいぜいと息を継ぐ桜咲に頭が冷えたのか冷静に返す近衛。

「で、ですから一族の掟で……」
「そんなの関係あらへん！せっちゃんがおらんようなるなんてウチは嫌や！！」

そう言ってしがみつく様に抱きつく近衛。

「お嬢様……」
「あー、二人ともちょっといいでござるか？」

なんだよ、空気読めよと言った二人の視線をスルーするかのように長瀬が現実を突きつける。

「あの『龍』……死んでおらんのでござるが。」
「なっ！？」

その声と『龍』の姿が現れたのは同時。

「さっきのせっちゃんの一撃で死んだんとちゃうかったん？」
「まさか、あの一撃を耐え抜くとは……！！」

それでも『龍』もただでは済んでいなかった。
首の辺りからは血を滴らせ、全身も電撃によるダメージで動きが少しぎこちない。
ただ、それだけなのだ。
『龍』にとっては掠り傷……とまでは行かないが軽微の傷と言ってよい。

もう一戦かと構える3人を前に、『龍』は辺りを見回す。
そして、徐に空へと舞い上がり……そのまま飛び去っていったのだ。

「……何故だ？」
「この場合は喜ぶべきでござると思うが。」

そんな桜咲と長瀬の声を聞きながら、急速に天候が回復していく空を近衛は見上げていた。

第４１話：そして、『龍』の話。（後書き）

龍の強さが今ひとつ再現し切れなかった……マジすんません。
ちなみに去っていった理由ですが、次回と言うことで一つ。
まぁ、誰が原因かは大よそ分かると思いますｗ

＞全長１８ｍ
長田にある鉄人２８号と同じサイズですね。ちっちゃいちっちゃいｗ
エラスモテリウムオルフェノクくらいのサイズにしようかと思ったんですが、
サイズが分からなかったので断念。
調べようと思えば多分出てくるんですが……時間が（え。
あれで１８ｍ以下、とか言ったら笑うぞｗ

＞宴の始まり
捧げよ聖痕！今宵は殺戮の宴なり！！ってやつですな（嘘

＞分身
分身、ってどういう風に行動させてるんでしょう？
まさか全員分の行動を本体が制御してる……わきゃねーだろうしなぁ。
出した時に大雑把な指令を本体が出してるんだろうか？

＞突風
ジャングルの木々が自然の防壁を果たしたと思ってください。
ここで全員宙を舞ってもよかったんですが（おい。
……いやまぁ、舞ってた方が幸せだったかもなぁ（遠い目

宙を舞った挙句、南米でアーカードさんに喧嘩を売って串刺しになった特殊部隊の人みたいになった彼女たちを想像してそんな考えが出来る俺自身が嫌になったｗ

＞携帯電話
ここでおもむろに「５５５」とかとか入力して変身と叫びつつベルトに装着しだすといきなり喜劇になりますｗ
しかし、名前的にはベノスネーカーさんと契約してても驚かない（名前違い

個人的には「おねがい朝倉さん」なんですが（何がだ。

＞一連の危機
時間軸は微妙にずれております。
でないとほんとに死ぬ人間がいますｗ朝倉と早乙女とかｗｗｗ
のどかが死んでる？気のせいっすよ気のせいｗｗ

＞後を任せた
負傷者は全員眠らせてありますｗ
『完全魔法無効化能力』も本人がレジストする意思が無ければ効果はないようですし。

＞踏ん切りが
修学旅行編における一連の出来事はノーカウントでｗ

第４２話：そして、『別荘』の後始末の話。（前書き）

色々ネギ先生がひどいです。
いつもの事といわれればその通りですが（おい。

後、いつになくご都合主義発動状態でござる。

第４２話：そして、『別荘』の後始末の話。

空へと飛び去る『龍』を見て安堵の溜息をつく男が一人。
言わずと知れたネギ・スプリングフィールドである。
手には大剣、地面には念のために出しておいた槍が一本。

剣の名は〔ノートゥング〕。
始原世界（オリジン）において北海のヴィーキングのとある氏族に代々伝わった龍殺しの剣。
槍の名は〔聖ゲオルギウスの槍〕。
龍殺しの守護聖人、聖ゲオルギウスが龍殺しに使ったといわれる槍。
非常に胡散臭い、もとい必殺を念頭に置いたラインナップである。

『龍』も本能的に察したのだ。
確実に殺せるだけの手段を持った『誰か』がここにいる、と。

無駄な戦いをしなくてよかった。と考えながら彼女たちの元へ向かう。
既に『龍』と戦っていた３人以外の人員は輸送済みで。
と言っても、転送魔方陣を設置して全員を屋敷の方に送り込んだだけなのだが。
後の事は屋敷の世話用自動人形に任せてある。
当分起きないように眠らせておけ、とは言ってあるし処置もしたのだが。

「大丈夫かい、３人とも？」

そう言って声を掛けられた３人は疲労困憊の極みであった。
（体感時間的に）長時間に及ぶ格上との戦闘。

しかも、一撃一撃が即死してもおかしく無いと言う容赦の無さである。
後半参戦の近衛はともかく、後の二人は疲労の余り地面に倒れこんでいる状況である。

「あ、先生。アスナ達は？」
「大丈夫だよ近衛さん。ちゃんと運んでおいた。今は世話係に世話をさせてるよ。」

きっと世話をしているはずだ、うん。
服を着替えさせたり体を洗ったり傷口の治療を行ったり……やる事は幾らでもある訳だし。

「で……事情は説明してくれるよね。長瀬さん？」
「む、無論でござるよ……ただ、少し休ませて欲しいでござる。」

一番長い間戦っていた長瀬は起き上がるのも億劫、と言った様相である。無理も無いが。

「実際、楓が戦っていなければ間に合わなかった訳ですし……その、お手柔らかに……」

と、桜咲がフォローに入るわけなのだが。

「そもそもここに来なければ、桜咲さんたちが無駄な戦闘をする事もなかっただろうし、
俺もここに来ることは無かったんだけどね。」
「それは……まぁ、そうですが……」

ネギの反論により撃墜。

相手が悪い、と言うかそもそもの状況が悪い。

「しかし、ちゃんと戸締りは万全にしたはずなんだけどなぁ……
まぁ、今はいいや。
いつまでもここでこうしてる訳にも行かないし、屋敷の方に戻るよ。
立てる？」

頭を掻きながら戸締りを思い出すが、今考える事でもないと思考を戻す。
今は、さっさとここから戻ることのほうが大事だ。

「大分マシになって来たので大丈夫でござるよ。」
「私もです……」
「近衛さん、二人に肩貸してあげて。辛そうなら。」
「せっちゃんも楓さんも辛いならいつでも言うてな？」

よろよろと立ち上がる二人に不安を覚えたのか、近衛に声を掛けて先導する。
転移魔方陣の設置場所までそれほど距離があるわけでもない。
一度回収して改めてこっちで設置すればよかったなぁ、と後悔したのは数分後。

「なるほどね……」

頭痛が痛いネギ・スプリングフィールドです。
屋敷エリアに転移後、桜咲さんと近衛さんには今回の冒険のレポートを書いてもらってます。
無論、身だしなみを整えてからと言ってありますが。
それほど難しい物を書け、とも言ってませんけど。

どちらかと言えば、こっちの件について口を出されたくなかったのがあると言う訳で……。

屋敷の一室、臨時取調室となったそこでマンツーマンで長瀬さんとお話中です。
事情聴取とも言います。
どういう経緯で俺の家に入った上で『別荘』に潜りこんだのか、と言う話を聞いたのですが。

もーちょっと魔法バレへの危機感持って動くべきだったかなぁ、と言うか。
３－Ａの生徒のバイタリティを舐めてたなぁ、と言うか。
どーすんだよこれ、と言う感じです。

「……と言うかさ、止めようよ？」
「真に申し訳ないでござる……」

取調べと言えばカツ丼だろう、とカツ丼を食べさせてから事情聴取を行った訳ですが。
その効き目もあって素直に謝罪する長瀬さん。
……いや、別にカツ丼は関係ないだろうけど。

「『別荘』内の件は魔法関係だから一先ず置いておいて、それを抜きにしても普通に不法侵入なんだけど、その辺の認識はあったんだよね？」
「む、無論でござる……のどか殿はしきりに撤退を主張しておられたでござるし。
とは言え、止められる面子と言うわけではなく……」

（女性にしては）大きな身体を小さくしながら答える長瀬さん。

まぁ、確かにあの面子を止めるには宮崎さんと長瀬さんだけでは無理か？……無理だなぁ。

「だからと言って、拙者とのどか殿だけで帰ると言うわけにも……」

「帰ってたら死体が出来てたよ……」

その辺は感謝しているっちゃしている訳で。

長瀬さんがいなかったら、明らかに間に合ってないし死人でてるし。

不法侵入者が死んだとは言え、責任問題は避けられないからなぁ。

最悪〔スキルニル〕でコピーして……死体コピった人形って機能するのか？

いや、探せば死者蘇生なり死者操作なり何か手段あるだろう。

そんな物騒な事を考えたり。

「……で、報酬は？」

「……」

「ボランティア？」

「……プリン食べ放題でござる。後払いで。」

「何と言うかご苦労様……」

ちょっとだけ同情してしまった。

プリン食べ放題の為に命を賭けたのか、と言う辺りで。

「まぁ、他にも言いたい事は色々あるけどこの辺にしておこうか。」

「か、かたじけないでござる。」

何故事前に情報を入れたんだから連絡しなかったし、とか。

明らかに隠匿された扉を発見するのはしょうがないにして何故報告したし、とか。

どう見ても魔法関係にしか見えない地下室なんだから気絶させてでも外へ連れ出した方がよかったんじゃないのか、とかそんな事は心の棚に仕舞い込んでおこう、うん。」

ふと見ると、机でライフが0になってる長瀬さんの姿が！！

「全部口に出てたでござるよ……先生。」

「出してたに決まってるじゃないか。」

と言うとげふっ、と言う断末魔と共に長瀬さんは沈黙したのでした。

これくらいは言わせて欲しい……いや本当に。

「それはともかく……これからの話だね。」

「ともかくで片付けないで欲しいんでござるが……」

長瀬さんの意見はスルー。

君に発言権はない。

「無難な所で言うと君も含めて記憶消去なんだけど。」

「拙者もでござるか！？」

いや、当たり前でしょう？

確かに京都の件では世話になった訳で裏側の事情も知ってるわけだし、今回の件でも

君がいないと大惨事確定だったし。感謝はしてるがそれとこれとは別と言うか。

「それだけは勘弁願えないでござろうか？」

「そんなに嫌？」

「普通『記憶を消す』と言われて喜ぶ人間の方が少ない気がするでござるが……
いや、今回の件に関してはのどか殿などは喜びそうでござるが。」
汗を掻きながらそういう長瀬さん。
何でも人間関係破綻3歩手前まで行ってたそうで。

「いやぁ、こういうと何でござるが『龍』が来なければ酷い事になってたでござるよ。」

それもどうなんだ、と思ったり。

「ともかく、全員の記憶を消してしまえば元の木阿弥、と言う話にならんでござるか？」
「……君がストッパーになると？一度失敗してるのに？」

長瀬さんの言いたい事は分かる。
全員の記憶をここで消した所で、再び同じ問題が発生しないとは限らない。
『別荘』の使用頻度も減らすつもりでいるけど、どこで何がどうなるかは神のみぞ知る訳で。
そういう意味では事情を知ってる人間が一人近くにいれば、と言う考えは分かる。
でもなぁ……。

「そこは信用してもらうしかないでござる。
それに、同じ事が起こったら再び拙者に声が掛かると思うでござるが？」
「戸締りを完全にして、防衛網を自宅内に構築すれば済むよね？」
「それで怪我人が出ればそれはそれで問題なんでござろう？」

長瀬さんとにらみ合う形。
実際の所、追い払うだけなら怪我させずに追い払う手段がないわけでもないし。
最悪今の住居を引き払って引越ししてもいいわけだし。
無理に引き込む必要性もないんだよなぁ……。
とは言え、色々やる事は幾らでもあるのにこのまま食い下がられるのも面倒だ。
溜息が口に出る。

「……OK、君の言い分を飲もうじゃないか。」
「流石先生、話が分かるでござるよ。」

安堵した表情の長瀬さん。
そんなに嫌か、記憶消えるの。

「一応雇用契約って事にするけどいいかな？この辺は報告の必要もあるし。」
「その辺は先生にお任せするでござるが……いいのでござるか？」

こっちから押しかけ同然で言い出した事で報酬まで出す、と言われてるのだ。
困惑する長瀬さん。

「1生徒がボランティアで協力してくれるって言うよりは契約結んだ方が信頼性があるしね。
……報酬に関してだけど、こいつでいいかな？」

そう言って、ビー玉のような物を長瀬さんの方へ転がす。
受け取る長瀬さん。

「これは……なん……」

質問しようとするものの、そのままがくっと長瀬さんはそのまま眠りこむ。

〔眠〕と入れた【文珠】は効果ばっちりの模様です。

念のため、〔眠りの霧〕の魔法でダメ押しをかけておく事に。

「悪いね、これからの事を考えると……ちとそれは辛すぎると思うしね？」

そう言いながら立ち上がり、呼んでおいた世話用自動人形に部屋に連れて行くようにさせる。

さて、後始末に取り掛かるかなぁ。ああ面倒だ。

それから数日。

神楽坂明日菜は自室のベッドで布団に包まっていた。

「ほなアスナ、行ってくるさかいに。ご飯は冷蔵庫に入ってるからな？」

「……うん。」

「その……元気出しや。」

それだけ言うと、何故か申し訳無さそうな顔をした近衛が登校する為に部屋を出る。

玄関のドアが閉まる音。

溜息をつく神楽坂。

どうしてこうなったのだろう、と。

この数日、彼女は女子寮から出ていない。と言うよりは自室謹慎扱いとなっている。
ついでに言えば、部活動の停止・バイトの禁止処分も加わっている。
担任教師であるネギ・スプリングフィールド宅への不法侵入が理由だ。
自分だけではなく、早乙女ハルナ、朝倉和美、宮崎のどか、綾瀬夕映、長瀬楓もなのだが。

ただ問題は……自分たちの記憶がまったくない、と言う点だ。
記憶にあるのは（その時は）見ず知らずの家の居間で寝ていたと言う事だけ。
後の事は思い出したくない。

何故彼の家に入ったのかどうやって入ったのかそもそもどうして入ろうと思ったのか。
何度も生徒指導の教師たちに問い詰められたのであるが、覚えていない物は答えられない。

担任であるネギ先生ならば何か知っているかと期待したのだが。
「呼んだ覚えも無いですし、彼女達に家を教えた覚えもない」と言ったらしい。
となると、自分は見ず知らずの家に勝手に上がりこんで、それがたまたまネギ先生の家だったと言うことになるのだろうか？

記憶が無い、と言うのが非常に気持ち悪い。
いっそずかずかと泥棒宜しく上がりこんだ記憶でもあった方がまだマシだ。
自分はおかしくなってしまったのか、と考えると食事もろくに喉を

通らない。

そもそもクラスではどういう扱いになっているのか。
木乃香は「気にせんでええよ、誰もアスナたちの事を悪く言うてへん。」と言うのだが……。
それでも誰一人様子を見に来ない、と言うのは不安を煽る訳で。

再び神楽坂は溜息を付く。
自分しかいない静かな部屋で。

クラスメイトのうち5分の1に当たる6人がいないことで教室がすっきり……もとい
クラス全体が暗い印象を受けるネギ・スプリングフィールドです。

いや、後始末がこれほど大変とは思わなかった。
まずは近衛さんと桜咲さんに処分内容を含めて事情説明。
当然ながら難色を示されたんですが。
とは言え、魔法バレを引き起こす訳にも行かず。
ついでに言うなら、やった事にはそれなりに責任を持ってもらわないと行けない訳で。
懇切丁寧に説明したら一応理解はしてくれた模様。

「理解はするわ。でもウチ、先生の言うたことに納得はできひん。」

とは言われましたが。
……まぁ、今はそれでいいんじゃないかな?と思ったり。
将来的にえらい人になったらそんな事言ってる場合でも無いだろうし。
納得できなくてもやらなきゃいけない事、ってある訳だし。

説明会終了後、桜咲さんと近衛さん連れる形で『別荘』の外へ。
中から外へは連絡できませんし。
二人を家に帰し、しばらく修行の方は休みの旨を伝えます。
こうなってくるとほとぼりが冷めるまでは大人しくしておいた方がいいですし。

まず電話をかけたのは学園長……ではなくガンドルフィーニさん。
これこれこういう事情でうちの生徒たちがこうなったんですがどうしたもんでしょう?と。
前に困った事があれば頼っていいよ、みたいな事言われたんで頼らせてもらいました。

記憶は消したんだが人の家に不法侵入した、と言う点に関しては見過ごせないんですが
どうしたもんでしょうか?と言う俺の質問に少しだけ絶句するガンドルフィーニさん。
まぁ、自分でも無理難題を言ってると思うわけで。

実際の話、特に生活態度が悪い訳でもない人間にどう住居不法侵入の辻褄を合わせる記憶を
植えつけろというのか、と言う話ですし。
ガンドルフィーニさんからは「彼女たちの将来もあることだし、そこは見過ごしたらどうか?」
と言われたんですが。

「とは言え、ここで一度ガツンとやっておかないとまた同じことすると思うんですが?」

と言うと流石に考え込む様子を見せるわけで。

まぁ、こっちとしても流石に警察に訴えるのもなぁ、と思うわけで。
内々の処分と言う形ですが1週間の自室謹慎と部活動停止処分辺りで、と話をまとめる事に。
神楽坂さんがバイトしてたからそれも禁止ですね。
……後は内申点に傷がつくくらいですが、高校はエスカレーター式だから問題ないはず。
高校以降は知らない。
俺の家に入った、お前が悪い。と言う事で。

と言うわけでどうにかこうにか6人を外へ運び出し……魔法でですよ?
流石に抱えて運ぶのは気が引けた。

後の経緯はお察し下さい、と言う事で。
とは言え、処分を下すまでの難敵がもう1人いたんですが……二人か。
ええ、Tさん（仮名でいいよもう）と学園長です。
前者はさておき、後者は決済の判子が無いと処分が決定しない訳で……。
まさか偽造する訳にも行かないし。

と言うわけで朝まで生討論状態でした。掴み合いとか退場者はありませんでしたが。
なまじ魔法関係が関わってるので新田先生とかは参戦できませんでしたが、その代わりにガンドルフィーニ先生が一晩でやってくれました状態で。
いや、俺もちゃんと討論には加わりましたが。それでも足を向けて寝られないです、はい。

また今度飲みに誘おうかと思います、俺は飲めませんが。

後、俺自身も「一般人への魔法露見防止へのガードが甘かった」と言う事で処分を受けてます。
訓告と給料１ヶ月の３０％カット、後は奉仕活動ですが。

そんな訳で処分も確定して後はクラスへの事情説明だけ、と言う。
とは言え、ダイレクトに「不法侵入のかどで謹慎です」と言う訳にも行かないですし。
「色々事情があって当分休み」と誤魔化しておきました。「今はそっとしておいて、教室に
戻ってきたら暖かく迎え入れて欲しい」とも言っておきましたけど。

後は西の方にも事情を説明してしばらく修行は休止、と言っておく事に。
そちらで活動スペースと人員の余裕があるなら面倒を見てやって欲しい、とも言っておきます。

あぁ、本当に疲れた。

第４２話：そして、『別荘』の後始末の話。（後書き）

色々すっとばしてると思われるかもしれませんが仕様です（おい。
実際の所「担任の家に入り込んだ生徒をいかにして不法侵入者として罰を与えるか」
と言うのは難易度が高かったｗｗｗ
警察でいいか、とも思いましたが感想欄での指摘を見てそれもそうだな、と思う訳でｗ
とは言え、この状況下とこの主人公でなーなーはないなぁ、と言う話で。
そもそもどこにどうやって彼女達を突き出したんだ、とか疑問はあるかと思いますが、
華麗にスルーしていただけると大変ありがたく存じます……

「博士、弁解は罪悪と知りたまえ」と言葉が見事に自分に突き刺さりましたとさ（吐血）。

＞剣と槍
片方はゲームで片方は伝承、と言うひどい有様ですｗ
いやね、対龍にはマジ効くんですよノートゥング。なので出してみたｗ
本当は槍のほうはぶん投げて武力介入の予定だったんですけどね。

＞長瀬さん
扱いに関してはギリギリまで悩んだんですがｗ
ギアススクロールなんかを持ち出してみるとか案はあったんです。
しかし「甘い」って言われたくなかったので心を鬼にした。反省はしない。

……まぁ、実際記憶ある方が辛いルートになるんですけどもｗ

＞それから数日。
「カットだ。」（ｂｙ某ワラキアの夜さん）
冗談はさておき、途中経過を実況するより結論を先に出した方が楽だと気がつきまして（おい。

＞悪く言ってない
実際、あのクラスがそんなネガティブな方向に走る姿が想像できないｗ

＞処分に至るまでの経緯
色々あったんでしょうがばっさりカットで（おい。
何とかならんかと懇願する学園長一派と魔法バレは魔法バレ、しかも反社会的行為までやってるのにお咎め無しは本人の為にならんと言うネギ・ガンドル連合が激突したんだと思って下さいｗ

第４３話：そして、雨の日の話。（前書き）

今日は恐ろしいくらい山も谷もない話です。
１日の情景を描いただけで山も谷もガツガツ出てこられると
それはそれで波乱万丈ですがｗ

……などと思いつつ書いていたら急転直下になった謎（おい。
しかもヘルマンさん相手に時間かけてもしょうがないんで凄い端折ってますｗ

と言うか、今回は色々と別ベクトルではっちゃけた感がある。
学祭は真面目にやる（キリッ

後、短くてごめん。

第４３話：そして、雨の日の話。

その日は朝から雨だった。
気が滅入るなぁ、と思いつつ起床。
手早く身だしなみを整えつつ、朝食を作って食べる事にする。
そんな感じでネギ・スプリングフィールドの一日は始まるのである。

教師の朝は早い。
生徒よりも先に登校するのだから当然ではあるのだが。
車の免許も持っていないため電車通勤である。
無論、空を飛ぶだの空間転移するだの手段はあるが、そんな事で魔法を使う訳にも行かず。
まださほど混んでいない電車に揺られるのである。

駅から徒歩で少々、学校へ到着すれば朝の職員会議である。
その日の重要な予定や注意点、その他諸々の連絡が終わると
次は学年単位の職員会議があり。これが終わると、教科担任同士での打ち合わせとなる。
各クラスの授業の進行状況などは確認して足並みを合わせてないと、テストの時に面倒なのだ。

打ち合わせが終了すると、立ち番などの当番でもないので朝のＳＨＲまでの時間を教材作成に
当てる事にする。謹慎組に渡すプリントなどもある訳で。

そんな感じで教材をモリモリ作っていると程よい時間なので教室に移動。
日直の号令と共にＳＨＲが始まるのである。
欠席者はいつも通り相坂さん、それと謹慎組かと教室を眺めて出席

簿に記帳。
朝の連絡事項を伝えると、中間テストも近づいてるので気を引き締めるように言っておく。

後はひたすら授業である。
英語の担任として受け持ってるのは３－Ａだけではないのだ。
それでも、空き時間は当然あるのでその間にやはり教材作りをする事に。
テスト対策用のプリントも作成しておく必要があるわけで。

そんなこんなで一日の授業も終了し、放課後に突入するのだが教師の仕事は終わらない。
とは言え、部活動で顧問をしている訳ではないネギは残務処理を片付けるくらいであり。
普段ならば近衛木乃香の修行の面倒を見なければならないのだが、休止を言い渡しており。
まぁ、そもそも日程の変更を通達しているので平日修行はないのだが。

そういや、近衛さんに魔導書とか貸し出したほうがいいのかな？『別荘』の書庫には
無名祭祀書（初版）とかあったような気がしたけど。などと思いつつ作業を続けていると、
携帯電話（買いなおした）に着信音。発信者は桜咲刹那である。
席を外して念の為認識阻害の魔法を展開しつつ電話に出る。

「もしもし？」
「もしもし、ネギ先生ですか！？」

なにやら切羽詰った、と言う感じの声が受話器から響いてくる。

「一体どうしたんだい？」

「どうやら麻帆良に侵入者が入り込んだようです！！ついさっき私達も襲われまして！」

「怪我とかは？」

「いえ、私もお嬢様も無事です。現在、呪術協会の面々とその他の組織が交戦に……」

よく耳を澄ませば、確かに何か物騒な音が聞こえる気がしないでもない。

「もしかすれば、ネギ先生の所にも『誰か』来るかもしれません。その事を……」

「ありがとう桜咲さん、でも……」

「どうかしたのですか？」

そこで区切るネギ。不審に思う桜咲。

「いや、既に目の前にいるんだ。これがね。」

先ほどまであった学校の喧騒は既に無く一結界を張ったのであろう、律儀な事だ一

目の前には、雨に滴るコートとつば広帽子？を身につけた貴族然とした男の姿。

「君は近衛さんを全力で護る様に。こっちに加勢なんて考えない事。」

それだけ言うと向こうの返事を待つまでも無く電話を切り。ポケッ

トに収める。
正面に向き直り、対峙する。

「態々電話を切るまで待っててくれてありがとう、と言うべきかな？むしろ、電話を切らないでくれてありがとうと言うべきかな？できれば、校内での戦闘は勘弁して欲しかったんだけどね。」
「何、こちらもあまり悠長に物事を進める暇が無くてね。貴族として十分におもてなしの準備を整えた上で君に招待状の一つも送りたかったのだが……」

渋いバリトンボイスがそう返してくる。
本来ならば、桜咲・近衛両名を人質に取った上で彼をおびき出す予定だったのだが。
予想外に抵抗が頑強であったのと、外部からの第三者の乱入が早すぎたのが予定を狂わせた。
外部組織の常駐は情報にあったがここまで積極的に防衛に動くのは想定外だったのだ。
麻帆良の防衛網に関しては、下級悪魔とその眷属による陽動で吸引していたのだが。

「知ってる貴族はこう言ってたよ。『事は全てエレガントに運べ』ってね。」
「ふむ、これからの参考にしておこう。ネギ・スプリングフィールド君。」

そして二人は同時に構えを取り……ガラスを突き破って乱入した第三者がその『貴族』を殴り飛ばした。

「ご無事ですかっ！ネギ・スプリングフィールドさんっ！！」
「え、ええ、まぁ……」

今まさに激突する寸前だったのだから怪我のしようも無い。
パイルバンカー『貴族』をぶん殴ったのがそれだ一を構えなおしたのはバチカンの人間。
蒼いショートカットの髪に眼鏡の似合うシスターである。
執行者です、と以前自己紹介を何かで受けたような気はしたがちと無茶苦茶ではなかろうか。

「くっ、一対一の戦いを……ぐおっ！」

そう言い起き上がろうとする『貴族』に無数の銃弾が撃ち込まれ。

「先生、無事かい？」
「今度は龍宮さんかい？　またどうしてこんな所に？」

足音共に廊下から歩いてきたのは龍宮真名の姿。両手には愛用のデザートイーグル。
ここでポーズでも決めていれば様になっているのであろうが、彼女自身にそのつもりはなく。

「何、麻帆良のあちこちでドンパチやってる上に、近衛に刹那も襲われたそうじゃないか。
最悪の事態を想定して学園長が、ね。」

実際の所、近衛・刹那組の襲撃の報告を学園長へ送ったのは呪術協会側であり。
要約すれば防備どうなってんの？と言うクレームである。
そのクレームに対応しつつ、龍宮に依頼を出したのだ。

「さて、これで三対一だね。」
「逃がすつもりはありませんよ？　既に武装神父隊による結界がこの辺り一帯を覆っています。神に逆らう悪魔風情がここから生きて帰れると思うな？」
顔に似合わない物騒な台詞を吐き出しつつ、前へ踏み出すシスター。油断無く銃を構えながらも何故か微妙な顔をしてシスターを見る龍宮。
俺、いらないんじゃないの？と思ってきたネギ。
「この程度で私に勝ったつもりになるのはやめてもらおうか！」
その『貴族』は人の殻を脱ぎ捨て、卵のような頭部にねじれた角を持つ悪魔へと変化する。
そして、上位悪魔・ヘルマンとの戦いの火蓋が切って落とされたのである。

結果は語るまでもないであろう。
史実においては神楽坂明日菜の魔法無効化能力の力を用い、ネギ・スプリングフィールドのトラウマとも呼べる部分を刺激しての戦いぶりを見せたヘルマンであったが。

神楽坂明日菜の力は未だ誰も知る事が無く。
そもそも、ヘルマン自身もネギ・スプリングフィールドと面識があったわけではない。
そして何よりも、史実以上の戦力を誇る面子を相手には荷が重かったと言わざるを得ないのだ。
あるいは3匹のスライムが手元にいれば、まだ話は変わっていたか

も知れないが……
彼女？たちとて既に関西呪術協会の手だれとその他の組織の手によって仕留められており。

長々と語ったが結局の所ヘルマンは地に伏し、滅せられたのである。
塵は塵へ。灰は灰へ。

「ふぅ、これで一安心ですね。後は一帯の浄化を行えば……どうかしましたか？」
「何と言うか、凄いね……」
「ネギ先生、バチカンを舐めちゃ行けない。彼らは戦闘集団としても一流だ。」

結界の効果により、民間人にこそ被害は出なかったものの辺りの惨状は凄まじく。
まるで用務員ＶＳ傭兵＋格闘家の戦いの惨状を髣髴とさせる有様で。
さすがのネギもドン引きであったのだ。
無論、仕事柄その手の連中とも敵味方になった龍宮的には当然の結果といわざるを得なく。

「えーと、それじゃ後始末の方はそちらにお任せして？」
「はい、こちらで『綺麗に』しておきますので安心してください。
そうそう、もし良ければご一緒に夕飯でも如何ですか？昨日の朝から煮込んだカレーが……」

そう言いかけた所で割ってはいるのは龍宮。

「すまないが、こちらも学園長への報告があるのでね。……ネギ先生が。」
「えっ？」

お前空気読めよ、と言う目でネギを見る龍宮。
学園長からの依頼には「外部組織の接触の阻止」も含まれており。
ネギ自身にも通達は行っているが念の為と言う奴である。

まぁ、シスター的にも来て貰えればラッキー、と言うレベルで声をかけたわけで。

「そうですか、それは残念です。
もし良ければウチの所へ来ていただければいつでも美味しいカレーをご馳走しますので。」

それだけ言うと、身を翻して去っていく。
去って行ったのを確認してから、警戒ランクを下げる龍宮。
彼女にとってはバチカンも敵の内なのだ。

「頼むよネギ先生、せめて話くらいはちゃんと合わせてくれないかな？」
「いや、流石にあれは無茶振りに近いと思うんだけど……」

いきなり振られた挙句、内容が内容である。

「それに報告よりもまず、結界内の教師・生徒達の記憶処置の方を行わないとね。
流石にあちらさんに全部任せきり、と言うのもまずいと思うんだけど。」

この手の結界ならば、中の一般人は全員意識を失って倒れこんでいるはずである。
何らかの理由をつけてそれを誤魔化さなければならない。

結局記憶の操作を行わなければならない訳で……この惨状を誤魔化す必要もあるし。

「まぁ、私はその辺門外漢だからね。」

「せめて学園長辺りに掛け合って応援を呼んでくれるとありがたいんだけど……」

流石に（どっちが来るにしろ）応援が来るまで一人で記憶操作とかめんどくさい事この上ない。

そもそもどういう形で話を落とし込むのやら。

「残念だけど、今の私はネギ先生の護衛任務の途中だからね。席を外す訳にもいかないさ。」

「呼びに行くのが面倒だ、って理由じゃないよね？」

「……」

明後日の方向を向いた龍宮に、ジト目を向けるネギであった。

結局の所、結界外から電話で学園長に応援要請を出した事を付記しておく。

第４３話：そして、雨の日の話。（後書き）

前書きでも書いたんですが妙な方向にはっちゃけたといいますか。
何と言うかごめんなさい。

＞悪魔襲来
麻帆良の防衛網なにやってんねん、と思うかもしれませんがヘルマン編自体がそんな話ですしｗ
エヴァすら感知し切れなかった辺り、ヘルマンは凄いやり手と考えたほうがよさそうかもｗｗ
後、渋いバリトンボイスは俺の中の勝手な想像ですｗ

＞バチカンの人間
どっかのカレー先輩とは一切関係がございませんし、ここで出したのも魔が差したからです（え
これ以上出張る事はないのでご安心をｗ

＞結界
ヘルマンが結界張ってたやんけ、ともお思いでしょうが武装神父隊の結界が
それを上書きした結果だと思ってください。

第４４話：そして、学園祭前と幽霊の話（前書き）

ようやく学園祭編へ突入。
何だかんだで１年近くこいつと付き合ってるんですよねぇ。
後、相坂さんファンの人ごめんなさい（土下座）。

第４４話：そして、学園祭前と幽霊の話

６／５。
ネギ・スプリングフィールドは唖然としていた。
彼にしては珍しい事ではあるが、人の子である以上は唖然もすることがある。
さて、何が彼にあったのかと言うと……

「いらっしゃいませー！」

と数人のメイド姿の生徒達がお出迎え、と言う奴である。
無論、自分の担当クラスである３－Ａである。
いつからここは夢のクラブになったのだろうか？などと一瞬思考が過ぎる。

「えーと、これは……？」
「学園祭での３－Ａの出し物がメイドカフェに決まりましたの。」
「早いね……もう相談を終わらせてたなんて。」

そう言う雪広の言葉に、驚嘆するネギ。
学園祭間近と言うことは知っており、そろそろＨＲでも使って出し物を何にするかと言う事を相談しないとなぁ、と考えていたのだが既に終わっているとは驚きである。

「ウチの学校、お金儲けしていいからね。小遣い稼ぐならこれだよ！」
「あー、なるほどね。」

無意味にガッツポーズを取る明石の台詞に納得する。
確かに、選り取り見取りな美少女揃いのクラスである。
一度評判が流れれば、客足は増えるに違いないであろう。

「でもなぁ……」
「どうかなさいましたか、先生？」

腕を組み首を傾げるネギを不審に思ったのか雪広が尋ねる。
メイドカフェ、と言うものはよく知らないが確かに売り上げは上がりそうである。
無論、その辺は原価なども考えて商品を出す必要もあるのだが幸いにしてその手の事に
詳しい人間もクラスメイトに存在する訳であって。

「いやさ、メイドカフェって事はお客様にお持て成しするんだよね？」
「そうだと聞いていますけど……？」
「君達、お客は選り好みできないって分かってる？」

静寂。

「まぁ、君たちがどこまでサービスするのかは知らないけど、そういう所から無駄に勘違いする
ような人間も出てくるだろうし、清潔感溢れる好青年だけがここに来るとも限らない訳だし、
肥満体で脂ぎってる身だしなみにも気を使ってないフヒフヒ言うような輩が……」
「も、もう結構ですわ先生……」

ネギの発言を遮る雪広。よく見れば、生徒達の半分以上が涙目状態

で。
「やっぱり止めた方がいいんじゃ？」とか言う声が上がっていたりする。

「その辺を踏まえて尚メイドカフェをやるんだ、と言うなら俺としても応援はするけど？」
「す、すいません……もう少し考えさせてもらえませんか？」

何故か葬儀ムードで生徒達が相談会を開始する。
ネギとしてはそれを温かく見守るしかない訳で。
あくまでも生徒達のイベントであり、助言はするが直接手を出すわけにも行かないのだが、
とは言えいつまでも決まらない、となるとそれはそれで問題で。

「どうしても決まらないと言うなら『麻帆良の歴史展』と言う事で……」
『やめてー！！』

一部「それです！」とか言ってる人間もいたが、全力却下される羽目になる。
最も、あくまでも決まらない時用の代案と聞いて、必死で考えるハメになるのだが。

「じゃあ、演劇をやるってことでいいのかな？」
『はーい！！』

黒板に書かれた候補と、その賛同者数を確認して最終確認を取るネギ。
大正カフェだお化け屋敷だ、と書かれているが触られそうな物は最終的に排除された模様。

よほどインパクトが強かったらしい。
とまぁ、そんな感じで舞台の用意やら衣装の準備に台本の用意などが始まったのだが……。

6／9にまで時間は進む。

「幽霊、ねぇ。」

そう言いながら掲示板に張られた麻帆良スポーツを見ながらそう呟くネギ。
掲示板の周囲には、同じように新聞を好奇心旺盛に眺める生徒達の姿があり。
その新聞の中央には怨念が篭ったようなセーラー服姿の女の子の写真があった。

「ネギ先生ネギ先生、何とかなんない？
さすがにあんなのが出るんじゃ、誰も残ってくれないよー！」
「ただでさえ、ウチのクラス部活の方で忙しい奴多い上に、進行遅れてるしねー。」

騒がしい生徒達の中から、ちょっと弱気の明石と困った顔の早乙女が声をかけてくる。

「何とかと言われても……ねぇ。」

どうにかしようと思えばできるし、コネもあるのだが。
少なくとも後者は却下である。こんなことで借りを作るのも如何な物かと思うわけで。
となると、自身でどうにかするしかないのだが……。

「こりゃいっそ討伐隊でも作るかね？」

などと言う早乙女とそれに賛同する明石などを見てると付いて来そうな予感はある。

と言うか間違いなく付いてくると言うか黙ってても勝手に何かやらかすだろう。

となると、多少嘘をついてでもどうにかする必要があると判断する。

「流石に素人が除霊に出ると問題かな、と思うな先生は。」

「じゃ、じゃあ先生どうするのー？」

「あまりにこっちじゃ胡散臭いから黙ってたけど……これでも悪魔祓いの資格があってね。

あまり人に吹聴しちゃ駄目だよ？取材も受け付けないからね？」

「えー、凄いー！」「いいじゃん先生それくらい」などと声が上がる。

嘘八百なのにここまで信じられると逆に申し訳なってくる。

後、某パパラッチは過去を思い出して自重するべきだろうが記憶がないのでしょうがない。

「それじゃ？」

「まぁ、今日の晩には片が付くかなぁ……本人がいれば、だけど。」

いない物は退治できない、当然の話である。

「じゃあ先生、それ見学していい！？」

「……取り憑かれてもいいなら、だけど？」

首をフルフルと横に振る明石。

よく見れば興味を持っていた周りも似たような反応である。
姿無き『何か』ならば肝試し感覚でついて来るだろうが、あからさまに姿が写っており。
それに取り憑かれるとか言われると流石に躊躇する。

「そう言うわけで、今日は台本合わせとかそっちの方をメインでやるといいよ。
それくらいなら女子寮のロビーのほうでも出来るだろうしね。」

それに、学祭の開始日時も迫っておりスケジュールに余裕があるわけでもなく。
無事生徒たちを引き離す事に成功したのである。

除霊自体は３０分も掛からなかったのだが。
人払いの結界を張って念を入れた後、〔霊〕〔視〕で視認した後に〔成〕〔仏〕に
切り替えて彼女がいた方角に投げつけるだけの簡単な仕事である。
これで失敗すれば【直死の魔眼】の出番であったのだが杞憂であった。

件の幽霊が写真写りに反して全うな女子中学生にしか見えたかったことや、
消え去る間際に「えっ、私消えちゃうんですか！？」とか言ってた事は気にしない。

「うん、ちゃんと成仏して来世でいい子に育つんだよ？」

消えていった宙を見上げ、そう呟くネギの姿があったのである。
念の為教室全体を〔浄〕〔化〕したのは余談である。

「そういやさっきの幽霊、名簿に載ってる子に似てなかったっけか……まぁ、いっか。」

そんな感じで幽霊騒ぎは収束することになる。
そしてさらに時は進む。

6／19

ネギ・スプリングフィールドの姿が世界樹前広場にあった。
それ以外にも魔法先生・生徒が集まっており。無論全員ではないのだが。

その中に桜咲刹那の姿は無い。
彼女は既に関西呪術協会所属・近衛木乃香専属の護衛と言う扱いになっており。
代わり、と言っては何であるが長瀬楓の姿がそこにあったりする。
京都の件、それに彼女自身は覚えていないが『別荘』の件もあったので、ネギが推挙したのだ。
多少ながら手当ても出る事ではあるし。

「それで、今日は一体何が？　これだけの面子となると大仕事のようですが。」
「ふぉっふぉっふぉ、それなんじゃがの。『世界樹伝説』を知っておるかの？」
「まぁ、噂話レベルですが……」

クラスで話題になってたのを聞いた覚えがあるし、まほスポにも載ってた筈だ。
何でも告白成功率１００％でカップルを成立させるとかどうとか。
そんな事を言ってたはずだ。

「それ、本当なんじゃよ。」
「は？」

学園長曰く、『世界樹』と生徒達に呼ばれているこの樹は実際に魔法の樹であり、
２２年に１度の周期でその内に秘められた魔力が極大に達する事で樹の外に溢れ出し、
世界樹を中心とした６箇所の地点に強力な魔力溜まりを形成。
この膨大な魔力が人の心に作用する事で、告白に関する限りは１２０％成就するとの事。

さらに言えば、本当は来年のはずだったのだが異常気象の影響で１年早まったとか。

「それはそれは……告白どころか迂闊な事は喋れなさそうですね、それ。」
「幸いにして、大きな事件になった事はないんじゃがの。」

それでも、人の心を永久に操るような事は魔法使いとしての本義に反する、と学園長。
記憶操作とかその辺はどうなんだろう？と一瞬思ったがそれはそれと言う事にしたネギ。

葛葉刀子によれば、既にこの噂は広がっておりかなりの部が真実に近づいてるとの事。
占いや迷信が好きな女子を中心に実行したがる女子は少なく無いだろう、とは明石教授。

「……いっそ魔力溜まり６箇所封鎖するというのは？」

「そういう訳にも行かんからこうして集まってもらっておる訳での。
それに、そう言う事をしてしまえば余計に噂に真実味を持たせてしまうしの。」

あまりにもあんまりなネギの発言に関係者ドン引きである。
とは言え、効率的な話をしているだけなのだが。

「この手の人払いの結界を6箇所で張ればいいだけの話では？
現にこうして関係者以外人っ子一人いない訳ですし。」
「先生、それだと他の人口密度が大惨事でござるよ。」

長瀬に指摘されてそれもそうか、と思いなおすネギ。
現実問題、学祭期間中の来場者人数は不明だが大変な事にはなりそうである。

「……いっそ、シュールストレミングの缶でも置いておきますか？」
「いや、それ既にテロの領域でござるよ先生？」

どう見てもバイオテロの一環である。

そんな漫才じみたことをやっていると、魔法生徒の一人である佐倉愛衣が何かに気づいたように
上空を見上げる。

「誰かに見られてます。」
「何？」

学園長が上を見上げると同時、魔法教師・神多羅木の無詠唱魔法がフィンガースナップと

同時に撃ち出され……小型偵察機と思しき機械が破壊されたのが確認された。

「魔法の力は感じられなかった……機械だな。」

「生徒か……やるなー、人払いの魔法を抜いてくるとは」

などとのんびりした発言をする魔法教師たち。

「追います。」

「深追いはせんでいいよ、こんな事ができる生徒たちは限られておる。」

その横で追跡しようとする高音・D・グッドマンに学園長が無理はするなと告げる。

高音たち追跡組が去った後、告白阻止の為の見回りのシフトと諸注意を述べた学園長がこの場の解散を告げた。同時に喧騒が徐々に戻ってくる。人払いの結界を解いた結果である。

こうなって来ると、数人の生徒達の方とも約束してたけどある程度はお断りかなぁ、などと脳内スケジュール表と告白阻止の見回りシフトを照らし合わせて思案するネギ。

そんなネギに学園長から声が掛かる。

「何でしょう?」

「ネギ君も生徒に告白されんようにの。年頃の娘が揃っておるからのぅ。」

「その辺は十分に留意しますよ。」

別に自分の顔に自惚れている訳ではないが、一般的な基準として考えても
十分に「かっこいい」顔である事は自覚しており。
まぁ、別にフラグを建てまわっているつもりはないので大丈夫とも思っているが。

「それと、先日夜の教室の方で何かやっておったみたいじゃが？」
「ああ、それですか。と言うか何で学園長が知ってるんですか？
まあいいですけど。
うちのクラスで幽霊騒ぎがありまして、何とかして欲しいと生徒の方から陳情がありましたんで
そちらの方の処理に乗り出してたんですが。」

一瞬硬直する学園長。

「それで、結局どうなったのかのぅ……？」
「過程は省きますが、無事トラブルは解決しました。もう幽霊が出る事もないですね。
あ、ちゃんと魔法バレはしないように隠蔽はちゃんとしてますのでご安心を。」
「そ、そうか……」

それだけ言い残すと、どこか唖然とした雰囲気の学園長を不思議に思いながら広場を後にする。

「『なんちゅう事をしてくれたんじゃ』みたいな顔でござったが……」
「何も特に注意点とか聞いてないしね。事後承諾がまずかったかな？」

律儀に待っていた長瀬にそう答えるネギ。
実際の所事後承諾どころか事件発生から始末までの報告もやってないのだが。
一応ぼかせる所はぼかして報告書を上げたほうがいいんだろうか？

「ところで、結局幽霊の正体は何だったんでござるか？」
「あぁ、それなんだけど……ここの彼女だよ。」

名簿を開き、写真を指差すネギ。
そこには相坂さよ、と書かれた名前と写真。

「クラスメイトでござったか……」
「明らかに一人年代がおかしい、と思ってたんだけど……怨霊になってるとはね。」
「人の業も深いものでござるなぁ。」

そう言って納得しあう二人。

「しかし、シフトの件だけど色々あるだろうに大丈夫？」
「その辺は心配無用でござるよ。ネギ先生こそ大丈夫でござるか？」

ネギがそこそこの生徒達に誘われていた事を思い出す長瀬。

「うーん、一応シフトに噛んでる部分は断わるしかないかなぁ。」

新入りだからなのか、これまで実質的に活動をしてこなかった分なのか学園祭3日間、
どこかしらでシフトに入ってると言う現状に溜息が出るネギ。
そんな彼の目の前に吹き飛ばされて来る人の姿。

「だ、大丈夫かい？」

何かの撮影でもやってるのか、と思いながら倒れた人影に目をやる。

「ね、ネギ先生丁度良かった、助けてくれないか？　私、怪しい奴らに追われてるネ。」

そう言って被っていたフードを取ったのは、彼のクラスの生徒である超鈴音であった。

第４４話：そして、学園祭前と幽霊の話（後書き）

ここで切るのもどうかと思うんだけど、きりがいいのでここで切る。
単行本と同じ位置で切るのもどうかなぁ、とも思ったんですけどねぇ。
ここで区切らないと恐ろしく長くなりそうな雰囲気が。
次の話の流れ次第では結合する可能性もあるけど（おい。

まぁ、察しのいい方はこの後の展開が読めるでしょうが、言うなよ？　絶対に言うなよ？（え

＞メイドカフェ諸々
多分に俺の偏見ですｗ
とは言え、原作だとカフェじゃなくてメイドバー（つーかキャバクラだろ）になってたしなぁ。
ネギだからああしたのか、そもそもああするつもりだったのか……興味は尽きない。
後、学園祭と言うことは当然女子校だろうが男子が入ってくる訳で、ねぇ？

＞演劇
多分一番涙目なのは村上（え。
二箇所で演劇とかマジ罰ゲームか何かだろうとｗ

＞部活
停止してた所（図書館探検部とか）も活動再開してます。
まぁ、学園祭で何もできないと言うのも気の毒だろう、と言う。

＞相坂さん
既に死んでるので死人は出てないよ！！（お
学園長の憧れの人だか片思いの人だかで、って設定はアニメだと思
ったが違うのか？
Ｗｉｋｉで確認したけどわからんかったし。二次設定かこれも？
【幻想殺し】で消去できるかと思ったんですが、自縛霊が消えるか
どうか怪しかったので。

＞シフト
本編だと1日目だけっぽいんですよねぇ。
子供だからと言う事で免除されてるのか、親の七光りが働いてるの
か。
魔法先生として正式に扱われていないだけ、と言う話もありますが。
形としては修行の名目で来てるわけですし。
当作品では魔法先生として登録されてる為、このような扱いになっ
ております。

第４５話：そして、超と長瀬の話。（前書き）

遅くなってごめんなさい。
体力的に疲れてたり精神的に疲れてたり仕事だったり。

第４５話：そして、超と長瀬の話。

「先生、あれでよかったんでござるか？」

長瀬さんから若干白い目で見られているネギ・スプリングフィールドです。

思い起こせば数十分前。うちのクラスの超鈴音さんを助けた所から。

「ね、ネギ先生丁度良かった、助けてくれないか？　私、怪しい奴らに追われてるネ。」

「……君の格好が一番怪しいと思うんだけど？」

何しろこの初夏の季節にレインコートのようなフード付きのコートだし。

ハハハ、と誤魔化し笑いをする超さん。

と言うか、そのコートの後ろに書かれてる『工学部試作２００３光学迷彩』って……

「先生、どうやらその追っ手が来たようでござるよ。」

そんな事を考えてると、長瀬さんから警告。

確かに、仮装にも見える姿をした黒いヒトガタが7体ほど確認できる。

状況ははっきりしないが、じっとしてる訳にもいかないだろう。

「確かに見た目は怪しいけどね……とにかく場所を変えよう、長瀬さんは超さんを宜しく。」

「あいあい、任されたでござるよ。」

と言うわけで、超さんを長瀬さんに預けて逃げ回る事に。
人ごみが多い地上では逃げ切れない恐れがあるため、屋根の上を。

「超さん、一体何をやったんだい君？」
「イヤー、ちょっと好奇心で猫に殺される所だったヨ。それで悪い魔法使いに追われているネ。」

何か儀式魔術でもやってる現場でも見たのか？
一応、『こちら側』の事情は知ってるみたいだけど……

「それなら……長瀬さん、前だ！」

着地地点の屋根の上に先回りするかのように現れ、長瀬さんへと飛び掛るヒトガタ。
しかし、こともなげにそれを捌ききり、屋根に着地する。
さっきのヒトガタは明らかに西洋魔術ー影属性の使い魔のようなものーだ。
超さんの言う『悪い魔法使い』と考えていいだろう。

「来るでござるよ、先生！」
「しょうがない、迎え撃つよ！！」

すぐ近くに大衆が大勢いる中、認識阻害も張れない状況で戦闘とか。
何で俺にばっかり厄介ごとが舞い込むのか？　主人公補正か？　返品するぞこんちくしょうめ。

とは言え、このヒトガタ。
ぶっちゃけそれほど強い訳でもなく。
近接格闘戦闘で俺でも捌けるとか、本気で強くない。

つまり、長瀬さんからすれば雑魚と言う訳で。分身まで駆使して相手してくれてます。
俺も時折【幻想殺し】を織り交ぜてちょこちょこと消してみたり。
そして固まった所を魔法の矢で撃墜して終了。
花火のタイミングに合わせての攻撃だったんで、バレていない……はず。

ともかく一旦落ち着く為に裏路地へ避難する事に。

「最終的にアレ、１４、５体くらいいたよね？」
「大雑把に数えてたくさん、でござるな。」

実に分かりやすい長瀬さんである。

「しかし、アレを操ってる人間がいるのは確定だから……」
「また仕掛けてくるでござろうなぁ。」
「でも二人とも強いネー、私驚いたヨ。
いや、かえでサンが強いのは薄々わかってたガ、ネギ先生がここまで強いとは……」

気がつけば例のコートは吹き飛ばされたのか、チャイナ服の超さん。

長瀬さんは一応武術四天王、とか言う立ち位置にいるらしいですし。
とは言え、リアル戦闘を見たわけでも無いだろうからそんな評価……でいいのか？
俺自身の評価については割愛。

「しかし先生、何か妙な魔法を使て無かったカ？」
「そういや、超殿は魔法を知ってるのでござるか？」
「ん、知ってるらしいよ？」

俺も詳しい事は知らないけど。
後、超さんの質問をインターセプトした長瀬さんに今度バケツプリンを作るだけの
材料を送りつけてやろうと思う。

「むしろ、私はかえでサンが魔法を知ってた事にびっくりヨ。」
「色々あったんでござるよ。」

にんにん、と誤魔化す長瀬さん。
まぁ、他に言いようがないわな。

「それで誰に追われてたの超さん？もし侵入者なら大変な事だから
報告しないとまずいし。
……って、そうだ。報告忘れてるよ。」
「アー、イヤそこまでしなくても良いヨ、ネギ先生。」
「いやそういう訳にもいかないしね。」

などと妙な押し問答をしていると。
こちらに近づく複数の気配。

「これは気づかれたかな……」
「長居は無用でござったなぁ。３人、と言ったところでござるか。」
「あやー、マズイネ。今度……」
「今度？」
「い、いや何でもないヨ？」

何かこう、超さんの挙動が不審すぎる。何を隠してるのやら。
とは言え正体が分からない以上は放置を決め込む訳にも行かず。

「ここはもう囲まれてるでござるな。」
「しょうがない……奥の手を切ろう。」

人数的にはこちらが不利。
長瀬さんの分身が何人出るかは知らないけど、相手も数を出してくる以上は無理をさせられず。
二人にもうちょっと俺にくっ付いてもらう事にする。

「くっつく？ひっつくでござるか？」
「いやかえでサン、そのネタはオーガニック的に分かりづらいネ。」
「結構メジャーと思ってたでござるが……」

そんな二人をスルーしつつポケットの中で【文珠】による〔隠〕〔蔽〕を発動。
二人を誤魔化す為の詠唱も忘れない。
後、効果範囲が狭い事と音は出さない事も伝えておく。

「いなくなった？」
「さっきまでここに……」

と言う聞き覚えのある声が聞こえ。
ほどなくして足音がして現れたのは。

「ガンドルフィーニ先生じゃないですか！？」
「ネギ君達かい！？」

ガンドルフィーニ先生と、それからウルスラの……名前忘れた。
まあいいや。
ともかく、こんな場所で話し合いは何だと再び場所を変える事にしたのである。

自分から姿を出した理由？いや『悪い魔法使い』じゃないしさ。

と言う訳で、小さな公園と言うか広場のような所で情報を交換することに。

こっちとしては、クラスの超さんが助けて欲しいと助けを求めてきた事を報告。

向こうとしては、超さんは要注意生徒であり何度も警告を出していたそうで、３回も。

それを破っての今回の所業（会合の盗み見）との事。

……結論から言うとお任せしてきました。

流石にそこまでいくと庇う訳にも、ねぇ？

それに、ガンドルフィーニ先生には前の一件で色々世話になったし。

そんな訳でドナドナされて行く彼女を見送って……一番最初の台詞に繋がるのである。

「とは言え、校則を破れば罰を受けるのは当然と思わないかい？」

「ま、まぁそれはそうなんでござるが……。」

「今回の場合は記憶消去措置、って言ってるから酷い事にはならないと思うよ。

全部の記憶を根こそぎ持って行ってしまうわけでもないからね。」

煮え切らない長瀬さんに説明するのだが。何故か考え込み始める。

「先生、ちょっと聞きたいんでござるが……拙者達の記憶を消した、と言う事は？」

「いきなり藪から棒だね。どうしてまたそんな事を？」

……薮蛇だったようです。

「件の先生宅への不法侵入の一件、納得の行かぬ事ばかりだからでござるよ。
幾ら拙者でも呆けるほど耄碌してはいないでござる。それに、人の家に無断で入り込むほど
性根が腐ってるつもりもござらん。となれば、魔法絡みを考えてもおかしくないでござろう？」

少し、いやかなり真剣な表情でこちらを見つめて一睨む一長瀬さん。
確かに君が主導で潜り込んだ訳じゃないし、君のお陰で他の面子の生命が助かったんだけど。

「さて、ネギ先生返答や如何に？」
「黙秘権を行使したいんだけど……ダメだよね？」

頷く長瀬さん。そりゃそうだろうとは思うけども。

「と言うか、この状況でその台詞は何かあったと同義でござるが？」
「それもそうだ。」

はぁ、と溜息を付く。

「それで、君はそれを聞いてどうするつもり？」
「どうもこうもするつもりもないでござるよ？」

好奇心かよ。

「いやいや、もし拙者が知らぬ内にネギ先生の触れてはならぬ領分へ踏み込んだのなら、

その事だけは伝えておいて貰えた方が、同じ過ちを繰り返す事もないでござろうからな。
正直、記憶を消されたという事実があるだけでも不愉快な点はあるでござるが、
こちらもそれだけの事をしたと言う事でござろうし。」

ネギ先生はむやみやたらに力を振り回す御仁でもないでござるしな、と長瀬さん。
信用してもらえている、と言っていいのだろうか？

「……俺の家には近づかないこと。
もし誰か近づくようなら止めなくていい。必ず一報を俺の方に入れること。
無論、こっちでも対策は整えたけどね。」
「先生の携帯番号を知らんでござるが？」

そうだっけ、と携帯番号の交換をすることに。

「しかし、ネギ先生の自宅は魔境か何かで……いやいや、聞かんでござるよ。」

当たらずとも言えど遠からず。
結局、記憶消した意味あったんだろうか？と言う結果になったのである。
……まぁ『別荘』の件だけでも隠匿できただけよしとするべきか？
差し引き０のような気もするけど。

取り合えず、バケツプリンの材料を送る件は中止にしたのである。

夜の麻帆良学園は前夜祭で盛り上がっていた。
明日からの3日間に勝るとも劣らない勢いである。

そんな賑やかな学園の上空に浮かぶ一隻の飛行船。
その上に、3人の姿があった。

一人は葉加瀬聡美。
一人は超鈴音。
もう一人ー いや、1体かーは3ーA・そしてネギが見れば驚くだろう。
どこからどう見ても茶々丸にそっくり、と言うよりは瓜二つなのだから。

今回の作戦、主力はロボ軍団である。そして、結界制圧の為のハッキング役も必要なのだ。
その為にも茶々丸は使われていた・使われる予定だったのであるが、桜通りの一件で大破し。
改めてデータ取得の為に予備パーツなどで組み上げた2号機である。

「大丈夫ですか、超さん?」
「イヤ、全然問題だらけヨ。最も、彼らも爪が甘かったから助かったけどネ。」

彼女が手で弄んでいるのは超小型録音機。
分かりづらい所に隠しておいて、記憶消去の可能性がある段階で起動させているのだ。

無論、録音していた事も記憶から捜索される恐れもあるが、この麻帆良ではそれはないと
彼女は断言できる。

約1名やりかねない人間がいる、と今さっき認識を変えたが。

基本的に“立派な魔法使い”を目指す彼らは不必要な介入を行わない。

記憶の覗き見などは明らかなプライバシーの侵害であり、それを無闇にするべきではないと

判断している部分があるのだ。

明らかな魔法犯罪者ならば話は変わってくるのだが、要注意とは言え生徒でもあり、学園に

敵対的意思を持たない彼女にそこまではしないだろうと。

記憶を消された場合、辻褄が合うように記憶を改竄されてしまう為に、解放されて即録音機を

起動させることは出来ないが、録音機の存在自体の記憶を奪われない限りは手はある。

今回のような共同作業ならば片方が記憶を持っていればそこから辿ることだって可能なのだ。

しかし、当然ながら限界は存在する。

その為、今回作成した小型偵察機が結界を抜き、情報を仕入れる事に成功した事を鑑みて、

声を拾って発信、外部から受信・記録できるようにする事も視野に入れているのではあるが。

「取り合えず今回の件で確信したのはネギ先生は敵ヨ。それも要注意でマークするべきネ。」

確認するように口に出す超。

事前の情報収集である程度予測はついていた事でもあるのだが、今回の接触でそれを再確認

できたと言ってもよい。
職務に忠実な事は大変素晴らしい事なのかもしれないが、アレはどっちかと言うとただ面倒事を抱え込みたくないが故の行動だ。そう彼女は判断している。
何しろ葛藤も何も抜きであっさりと手放されたのだから。仮にも担任だというのにだ！

「でも、ネギ先生の戦力評価は未知数だったはずですけど？」

葉加瀬の言う事も最もである。
戦闘に関わった事は確認・推測すれど何をやったのかはさっぱりの不明。
今回の件である程度把握できるとは思ったが、強力な人払いが出来る程度にしかない。
いや、そもそもあれは人払いか？隠密の為の魔法なのか？
どちらにしても『奥の手』と言ってる以上は、それに相応しいモノではあるのだろうが。
後は……相手の魔法使いの使い魔を消した謎の魔法。強力な解呪魔法を叩き込んだのか？
それにしては詠唱も無かったのだが。

「最低でも高畑先生クラスは想定しておいても罰は当たらないネ。少々過大評価気味に考えておくほうが良さそうだヨ？」

それだけ言ってから溜息をつく。

「とは言え、仲間に出来ないのは少々惜しい気もするが……これも運命か。」

そして夜は更けてゆく。

夜が明ければいよいよ学園祭。
麻帆良を舞台に、混沌の3日間がスタートするのである。

第４５話：そして、超と長瀬の話。（後書き）

今日は短いです。

＞一番怪しい
感想欄のご意見を反映させて見ました。
言われてみればその格好は怪しいｗ
……コスプレ、にしてはなぁ？という。

＞認識阻害
杖で飛ぶ時は移動に合わせて認識阻害が働くそうなんですが。
まぁ、お互い派手な戦闘は避けたいってことでしょうか。
Ｘの結界？みたいに人がいなくなるわけでもないですし。

＞記憶消去に関して
真面目な話、何かあったら記憶を消すような人間と一緒にいたいですか？と言う話。
自分に都合の悪い記憶は全て消してるかもしれない……って考えると。
この辺は術者の良識に任せるしか無いと言う。
そういう点を含めても魔法使いは自らの力と言うものを自覚するべきであり（ｒｙ

長瀬も一応裏の住人みたいなもんですし、その辺は話せば分かるかなぁ、と。
……ネギが甘いというより、俺が甘いんですね、はい。

実は仲たがいルートもあったんですが、どう見ても長瀬の逆恨みじゃね？って言われそうでｗ

チキンな俺ですごめんなさい。

ついでに言うと初期プロットでこの話は無かったw
そもそも長瀬がついて来る辺り（これもアドリブ）から勝手に話が動き出した（おい。
影法師相手にネギ一人も辛いよな、とか言う辺りで。
どうにかするだけならどうにでもなるのに、手札を切りたくないからこうなるw
挙句の果てに手札切る方向で持って行ってるんだから始末が悪い（苦笑）。

さらに言えば、超を眠らせた上で引き渡して先生方にドン引きされる案もあったんですが、
ガンドル先生との話の段階で連行3秒前なんですよねw
ならそのままどうぞどうぞ、とならざるを得なかったという。

＞2号機
ブーツと手袋は赤い（おい。
マジレスするとハッキングは同性能のガイノイドおらんと回らんだろう、と。

第４６話：そして、学園祭の話。（前書き）

お待たせしました。
今回はちょっと短めです。

……ほぼ毎回言ってる気がする。

第４６話：そして、学園祭の話。

と言う訳で始まりました麻帆良祭。
資料によれば３日間の延べ入場者数は約４０万人。
麻帆良学園全体がこの学園祭の範囲である事を考えれば当然の人数、と言う話だけど。
仮装行列にしても凝るに凝って等身大スケールの恐竜が歩いてたりするから困る。

そんな感じの麻帆良祭にて、暇を持て余しているネギ・スプリングフィールドです。

「少しは働こうよ、ネギ先生？」
「そうは言うけどね龍宮さん。そんなアウトレンジからどうこうする手段持ってないから。」

現在、龍宮さんと組んで告白生徒の阻止に動いてるんですが。
望楼から狙撃する龍宮さんをどうカバーしろと言うのか。
俺に出来るのは観測手くらいだぞ、いやほんと。

「無いのかい？」
「あると思ってたの？」
「むしろ、無い方がおかしいと思ってたんだけどね。」

龍宮さんは人の事を何だと思っているのか。

「いや、ネギ先生だしね。人に言えない手段なら３つや４つ隠し持ってる物とばかり。」
「……」

「そこで沈黙されるとリアクションに困るんだけどね……。」

実際あるから困る。

弓でよければ。

……いや、まだあるにはある、あるにはあるんだが……

「残念だけど、超遠距離狙撃とかそういう類は無理だから。

そもそも攻撃魔法すら初歩しか持って無いのに無茶言っちゃ行けない。」

「まぁ、そういう事にしておくよ。」

そう言って狙撃姿勢に入る龍宮さん。

まさか「アーマライトＭ－１６あるよ。」とか言う訳にも行かないし。狂喜乱舞するか？

でも狂喜乱舞する龍宮さん、と言う姿がそもそも想像できない。

「ともかく、そろそろ別の場所に移動した方がいいんじゃないかな？

さっきから相当数射殺してるみたいだけど。」

「心配は無用だよネギ先生。峰撃ちだ。」

そうか、峰撃ちならしょうがないな。

「そこで納得されても困るんだけどね……」

「いや、龍宮さんだし。きっとスナイパー的ガン捌きで峰撃ち位は余裕とばかり。」

「さっきのお返しかい？」

さぁ？と首を竦めると、実際撃たれた人間は大丈夫なのかと聞いてみる。

ガチで射殺してる訳ではないから大丈夫とは思うけども、見てて

いもんでもない。

「心配はいらない、特殊な麻酔弾でね。
１０分後には目を覚ますが、身体は神経毒で３日ほど動かない代物だ。」

「明らかにヘッドショットだよね？」

「スナイパーに頭部以外のどこを狙えというんだい？」

「それはそうだけど、そんな弾を頭にぶち込んで大丈夫？　それに弾自体の衝撃とか……」

「……さて、ネギ先生の言うとおりここから移動した方がよさそうだ。
センサーにも感は見当たらないようだしね。」

そさくさ、と言う感じで降りていく龍宮さん。
……いやまぁ、別に気にしては無いですけども。深刻な障害の出る弾は使ってないだろうし。
最悪救護室に担ぎ込まれて手当てされるだろうしね。

そして数十分後。
シフト終了時間到来。今日の業務はこれで終了！
呼び出しがあったら出ないと駄目ですけどもね。

「こんな所かな？」

「こんな所だと思うね。で、ネギ先生は何時から巡回してるんだい？」

「朝一から……」

何故か肩を叩かれました。情けが身に染みます。
そもそも魔法先生の中では下っ端の部類に入る訳で。
明日も明後日もこのノリだしなぁ。

お陰で色々生徒からの誘いも断わる羽目になったし。残念がってたがしょうがない。

さて、取りあえずは自分のクラスへの陣中見舞いかしら。
って龍宮さんはどうするの？

「私かい？　私はもう少し営業時間でね。
時間給の割にはいい値で更に歩合給で尚且つ弾代も出る。気前のいい話じゃないか。」

一応頷いておきました。それ以外にどうしろと？
そんな感じで龍宮さんと別れたのである。

そんな感じで時間も過ぎてもう日も暮れて。

勿論、自分のクラスへ陣中見舞い行きましたよ？
適当に飲み物やらなにやら買い込んで行ったら喜んでくれました。
客の入りもそこそこらしく。
3グループに分けて時間帯ごとに演目を変える事で3度楽しめるのがウリとか言ってましたが。
ちなみに、俺が見た時は『真！（チェンジ）恋姫戦極姫！！－外史最後の日－』とか言う
笑いあり涙ありの戦国ファンタジーでした。

……正直、その行動力と努力をもうちょっと勉強に向けてもらいたいと思ったり。
と言うか、よくその大仰なタイトルを1時間展開でまとめたなと感心仕切りだったりする。

後は適当に生徒達の出し物を見て回ったりしつつ時間を潰し。
適当にアトラクションを見て回るだけでも時間はあっという間な訳で。
そうこうしている内に高畑先生の方から電話で呼び出されて龍宮神社の方へ。

人通りをかき分けつつ―やたら武闘派層が多いのは気のせいか？―
待ち合わせの神社の正門へ。
しかしまた、何でこんな所に？

「やぁ、ネギ君。すまないねこんな所まで来て貰って。」
「いえいえ、お構いなく。それで何の御用ですか？」
「実はね……」

と話す高畑先生曰く。
今日ここで行われるのは『まほら武道会』の予選（現在予選中）。
本来なら小規模な格闘大会だったのだが、超さんがいくつかの大会を買収・統合して大規模な
武道大会にしてしまった。
理由は「表裏問わず学園最強を見たい」との事。

「あらゆる武道武術の達人たちが自慢の技を競う夢の武道大会って所ですね。
それで、俺と何の関係が……」
「それがね。」

ルールは飛び道具及び刃物の禁止、さらに“呪文詠唱”の禁止。
……っておい。

「超さんが何かやらかそうとしている、と？」

「そうなるかな。何も無ければ問題は無いんだけど、何かあってからでも遅いしね。」

ただ、会場内での電子機器の使用は不可になるらしい。
科学力凄いな、おい。
とは言え、外部へ映像の形で外へ漏れ出ることはないって事か……
…本人が意図しなければ。

「つまり、超さんを探して手段を問わず自白させろ……と。」
「いやいや、そうじゃないんだ。そうじゃないんだネギ君。」

結論から言ってしまえば内偵である。
試合に参加する事に意味があるのか、と言う気もするが。

「でも俺、武術なんて使えませんよ?」
「昔、向こうで色々やってたんだから大丈夫だよ。
それに『武道大会』と言っても何らかの流派を齧ってないと駄目と言う訳じゃない。」

そりゃそうだけどさぁ。

「明日も朝から巡回業務の方が……」
「そっちに関しても僕の方から言っておくから心配しないでいいよ。」

ぐぬぬ。

「と言うか、俺一人でやれって言うんですか?」
「流石にそこまで無茶は言わないよ。長瀬さんにも声をかけたし、桜咲さんの方にも声を

かけておいたからね。それに、僕も出るつもりだ。」

桜咲さん呼んだ、って……

「西、よく納得しましたよねそれ。」

「超さんの目的が分からないからね。麻帆良自体にとって不都合な可能性を訴えたのさ。

彼らもここを拠点としている以上、何かあれば困るのはお互い様だしね。」

そりゃそうだけどさ……まぁ、向こうからすれば貸しも作れるって所か？

こう言ったら何だけどたかが武道大会だしなぁ。

「そういう訳で、まだエントリーは続いているはずだから急ぎ行って来てくれないかな？」

「高畑先生は？」

「ちょっと前に終わらせた所でね。」

早いなおい。

「それじゃまぁ、逝って来ます……」

「いってらっしゃい。」

はぁ、と肩を落として受付へ。

何だかんだとゴネてはみたけど、魔法絡みの問題なら最終的に動かないとダメなのか。

わざと負けてやろうかしら。それはそれで問題だよなぁ……。

向こうは俺の経歴知ってるわけだから、手を抜いてるって明らかに分かる訳だし。

しかし、潜入ミッションにすればいいのに何でわざわざエントリーを薦めたんだ？
……今更か。

ネギが去ってしばらくした後。

「助かりましたよ、タカミチ君。」
「いや、どっちにしても人手が欲しかったのは事実ですから。」

煙草を咥えたタカミチの後ろに現れたのはローブの男。
フードで顔を隠しており、声が辛うじて男であることを証明しているといっても良い。

「とは言え、ああでもしなければネギ君は戦いには出て来そうにありませんからね。
これでナギの遺言を果たすことが出来そうだ。」

心持ち嬉しそうな声をだすローブの男。
この麻帆良から動く事のできない彼にとっては、今こそがチャンスなのだから。

「あなたも嬉しいんでは無いですか、タカミチ君？」
「半分はそうですが……もう半分は少し後悔してますよ。」

首をかしげるローブの男。
彼とてナギの息子である彼と戦う事はある種の夢だったはずだ。
何を後悔しているのだろう？

「いえ……どうにも嫌な予感がするんです。
ネギ君が絡んだ出来事は、どうにも話が大きくなりすぎる。」
「ナギだってそうだったでしょう？」

首を振るタカミチ。

「ナギさんと違って、ネギ君の場合は……被害も大きくなるんですよ。
ちゃんと事件は終息してるんですけども、ね。」

そのまま沈黙する二人。

一方、まほら武道会会場では全ての予選が終了してトーナメント表が張り出される事となる。

Ａブロック第一回戦
第一試合：大豪院ポチＶＳクウネル・サンダース
第二試合：マスク・ド・カレーＶＳ長瀬楓
第三試合：ケン・イシマツＶＳ高畑・Ｔ・タカミチ
第四試合：大太刀左京之助ＶＳネギ・スプリングフィールド

Ｂブロック第１回戦
第一試合：龍宮真名ＶＳ中村達也
第二試合：古　菲ＶＳ桜咲刹那
第三試合：豪徳寺薫ＶＳ田中
第四試合：井之頭純一郎ＶＳ山下　慶一

第４６話：そして、学園祭の話。（後書き）

何が酷いって、原作のシーンが軒並み無いと言うこの事実（おい。
保健室で寝る必要も無ければ、カシオペアは手に入って無いし、超を探す必要も無いし、
のどかとデートもしていないと言うｗｗｗ
いやほんとどうしようこれｗどうしてこうなったｗｗｗ

で、急遽梃入れ（？）で突っ込んだのが武道大会だったり。
このままだと食っちゃ寝さん（仮名）が出てこないまま終わりそうだしｗ
別にかまへんやんと言われればそれまでですが。
しかしそれにしても、エヴァ・こたろーはおらず、キス・ターミネーターイベントが
発生していない為に高音・愛衣ペア参加せず、当然明日菜もいないと、

どうすんだよこれ、と言う流れだったので約一名調子に乗って放り込む事に（おい。
ちなみに、トーナメント表はこっちで振りました（え
そのまんまでも面白くないですし。

……反省はしているが訂正はしない（え

と言う訳で次回からは武道大会だ！！
何か、バトル物が武道大会をやりたがる理由が少しだけ分かった気がするｗ

＞峰撃ち

峰打ちの間違いではありません、念のためw
「安心しろ、峰打ちだ……すまん、この剣は両刃だった」てのがスレイヤーズであったなw
全然関係ないですけど。

＞たつみーの特製弾
3日間動かない、と言いつつ英子ペアはベストカップルコンテストに出てる件w
担ぎ込まれた先で治療してもらったりしたんだろうか。というかしないとまずいだろう。
誰だよこんな物騒な弾を用意したのは。学園か？たつみーの自腹（弾代は後日請求）か？
と言うか、ベストカップルコンテストに出てると言う事は告白してOK貰ったと言う事か。

＞3グループに
3人いないので28人を約9人に分割して、3交代で回してるんだと思ってください。
舞台セットの入れ替えやらなんやらが一番時間掛かってるんではなかろうか。
なので、1日3回。
作品のタイトルは超適当です。
つか、この辺の話は本編でやるべきかも知れないけどいれるスペースが無かった。
ごめん。

＞トーナメント表
上でも言いましたがこっちで振ってます。

1．井之頭純一郎

２．大太刀左京之助
３．クウネル・サンダース
４．古　菲
５．ケン・イシマツ
６．豪徳寺薫
７．桜咲刹那
８．大豪院ポチ
９．高畑・Ｔ・タカミチ
１０．龍宮真名
１１．田中
１２．長瀬楓
１３．中村達也
１４．ネギ・スプリングフィールド
１５．マスク・ド・カレー
１６．山下　慶一

本編で見た事無い名前は（当然ながら）オリキャラですが、約１名ｗを除いて雑魚です。
山下とか豪徳寺でも勝てるレベル（え。
まさかここでさらっと駒井翔太、とか参加者に書く訳にもいかんかったしｗｗｗ
別世界ですよ別世界。

で、１６面体を持ってないので２０面体をひたすらダイスロール。
飛び越えた分はそのまま貫く方向で（１投目が２０なら４番になる）。
消えた番号はそのままカウントせずに次へ飛ぶ。（上の状態で２投目が２０なら６番になる）
６人が埋まった段階で１０面体に。
１０人が埋まった段階で６面体に。

そんな感じで決めさせていただきました。
……怖いね、ダイス目。

第４７話：そして、学園祭の話。（武道会編１）（前書き）

かつてこれほどまでに軽快に進む武道大会があっただろうか！

……いくらでもあるな（おい

第４７話：そして、学園祭の話。（武道会編１）

学園祭二日目。
まほら武道大会選手控え室。
はるばる遠い都に集まった訳ではない武道武術の達人？　達がそこに揃っていた。

「やっぱり全選手入場！！とかやるのかな？」
「いや、やられても困るんでござるが。」

などと長瀬楓と無駄口を叩いてるのはネギ・スプリングフィールドである。
大会責任者が改めてルール説明を行う、と言う事でそれを待っているのだ。

「やあ先生。先生がこんな大会に出るなんて意外だね。」
「本当は出たくなかったんだけどね……」

いや本当に、と声をかけてきた龍宮に愚痴るネギ。

「アイヤ、先生と戦える日が来るとは思ってなかったアルよ。」
「いやいや、当たるとしたら決勝戦じゃないか。そこまで持たないって。」
「駄目アルよ先生、勝負はまず勝つと言う気迫からネ。」
「しかし古、相手は刹那だが勝算はあるのかい？」

どうにもやる気の無さそうなネギを鼓舞するべく古が声をかけてくるが、
そんな彼女に龍宮が疑問を飛ばす。

無論堅気の人間の前での戦いである以上、派手な何かをする訳にもいかないであろうが。
ましてや刀が使えない以上、代わりの物で代用するしか無いだろう。

「何、強い敵と戦える。それだけでも嬉しい事アルよ。
それに、刹那を倒せば次の相手は真名ネ。」
「やれやれ、余り期待されても困るんだけどね。」

あます事無くバトルジャンキー的一面を見せる古にやれやれ、と言った表情の龍宮である。

「そう言えば、その刹那殿が来ておらんようでござるが……」
「うーん、ギリギリまで来ないんじゃないかなあ。色々忙しいみたいだし。」

実際の所は時間一杯まで近衛木乃香の護衛を全うしているのだとは思うが、口には出さない。

「そういえば先生、拙者の対戦相手でござるが……」
「ノーコメント。」
「見た目はともかく、とても強そうアルよ。」

にべも無く切り捨てるネギ。
正直『彼女』には関わりたくない。

控え室の隅の方の壁にもたれて立っている『彼女』こそ、謎の覆面選手マスク・ド・カレー。
覆面、とさっき言ったが正確には違う。
戦隊ヒーローのようなコスプレをしている、と言ったほうが正しい。
あえて言えば、キレンジャ○とカレ○パンマンを足して2で割れば

そういう格好になる。

「見た目こそ面妖なものの、相当できるように見えるんでござるが。」

そりゃまあそうだろうねぇ、と心の中で長瀬に同意するネギ。

本人は「謎のカレー好き」で通しているが、実際の所はついこの間共闘したバチカンのシスター（本名不明・カレー好き）である。

「しかし先生、どう言うつもりだろうね？」

「俺が聞きたいよそう言うのは……」

ただでさえこれからの事を考えると憂鬱なのにこれ以上の厄介ごとを持ち込まないで欲しい。

ネギの切実過ぎる願いである。

「やっぱり二人は知ってるでござるか？」

「私から言えることは一つだけだ……楓、生きろ。」

「ちょっ、どう言う事でござるか！？」

ぽん、と肩を叩いて歩いていく龍宮に説明を要求せんと追いかける長瀬。

やれやれ、とネギが思っているとようやくやってきた桜咲が声をかけてきた。

「おはようございます。ネギ先生、本当にこの大会に出られるんですね……」

「例の件があるからね。」

古が先の二人を追いかけて行ったのを確認してから、ネギも返事を返す。

「しかし、近衛さんの護衛はいいのかい？」

「一応代わりの者が数名お嬢様の護衛についております。監視用の式神も幾つか。」

このような状況ですから、誰が入り込んでいてもわかりませんし。

と桜咲。

「と言うか、近衛さんの事だから……」

「はい……応援に。ネギ先生のことも応援するそうですから頑張ってください。」

「いやいやいや。」

何故かはっぴにメガホン、と言うどこの野球ファンやとツッコミを入れたくなるような

格好で応援する近衛の姿を想像してげんなりした顔をするネギ。

「実際それは二の次で、本来の目的は超さんの調査だからね。」

「それなのですが……怪しいのですか？」

立場的に関西に戻った桜咲としては、その辺の情報に疎く。

「うーん、白か黒かで聞かれると真っ黒だね。」

「全然ダメじゃないですか！」

「とは言え、具体的にと言うか最終的に何をするのかと言うのはさっぱりだね。

それを言い出すと過去の経歴から不明になっちゃうんだけど彼女。」

だからこそ自分がここに来るハメになったんだけど、とつけたし。

「確認しておきたいんだけど、桜咲さんはどこまで動けるのかな？」

「一応、この大会中は魔法生徒と同じ扱いで動く事になってます。」

もっとも、一応命令に対する拒否権とかもありますが。と桜咲。

当然だねとネギも頷き。

「なら一先ずは近辺の建物の探索からか……」

「それに関しては既にやってますので、結果待ちですね。」

「つまり、当面はこっちに専念できるって事か。」

などと話していると大会責任者である超が姿を見せ、改めてルールの説明となったのである。

と言う訳で試合を観賞しているネギ・スプリングフィールドです。

Ａブロック第一回戦第一試合：大豪院ポチＶＳクウネル・サンダース

大豪院が怒涛のラッシュを仕掛けるもクウネルの一撃でＫＯ。

……つーか、あれ強すぎるんじゃないか？

そもそも、魔法障壁を張り巡らしてる時点で何を今更と言った感じだけど。

Ａブロック第一回戦第二試合：マスク・ド・カレーＶＳ長瀬楓。

こちらは壮絶な戦いだったと言っても過言ではなく。

長瀬さんの１６分身に対し、無数のスプーンを投擲して迎撃するという離れ業を見せ付けるし。

と言うか、何でスプーンが地面に突き刺さってるのか。それはもう刃物と同義じゃないのか。

最終的には実体を捉えたカレーさんに床に叩きつけられた上で腕を関節技でへし折られ、
長瀬さんのギブアップ。

「いやいや、あれ以上戦っても勝ち目は見えんかったでござるからな。
拙者も一層の精進が必要でござる。」

とは長瀬さんの一言。

Aブロック第一回戦第三試合：ケン・イシマツVS高畑・T・タカミチ。
瞬殺。その一言に尽きる。高畑さんの超余裕勝利。
ポケットを鞘に見立てての居合い拳、と言うべきものであろうか。
正確には拳圧を飛ばしてるので居合いともちょっと違うのだが。
俺でもぎりぎり見えるレベルなんだけど……

「ハンドポケットにはハンドポケットで対抗するべきだと思わないかい、ネギ先生？」
「ごめん、次俺の試合だから。」
「……」

Aブロック第一回戦第四試合：大太刀左京之助VS俺ことネギ・スプリングフィールド。
小太刀二刀流（無論木刀）の使い手でしたが“神の左手”発動の俺の敵ではなかった。
武器？　木刀ですよ？“阿修羅”って言うんですけどね。

「先生、その木刀妙に気が……いえ、気のようなエネルギーを感じるんですが。」

「気のせいじゃないかな、って言うか気のせいだよ。」

1回戦突破できずに負け、と言うのは流石に体裁が悪いと思ったし。
次の試合は高畑さんだから、適当にやって適当に負ければいいよね！と言う話で。

Bブロック第一回戦第一試合：龍宮真名ＶＳ中村達也
こっちも瞬殺。
まさに稲光のような一撃が頭部にクリーンヒットして龍宮さんの勝ち。
しかし、一体何が飛んだって……５００円玉か。

「羅漢銭、と言う奴ですね。」
「銭投げでござるな。」
「超電磁砲（レールガン）になったり最終的には重力縮退起こしたりするのかな、あれ？」
「……どんな投げ方をしたらそうなるんですか？」

Bブロック第一回戦第二試合：古　菲ＶＳ桜咲刹那
剣道3倍段、と言う言葉がある。
平たく言ってしまえば剣道初段の人間と素手で戦うには3倍の腕前一三段一を持たないと
無理だ、と言う事である。
とは言え、実際に剣道が他流試合を繰り返した結果における事実を表したわけではない。
そもそも剣道は精神修養の意味合いのほうが強いのだから当然と言えば当然であり。
まぁ、単純に間合いの時点で素手が不利なのは明確な事実である。

しかし、それでも古さんは善戦したと言っていい。

無論相手の桜咲さんの武器が刀ではなく木刀だった、と言う事実もある。
桜咲さんとの間合いの差を布槍術と言う珍しい技で補ったと言うのも見過ごせない。
槍と剣ならば、間合いの差は逆転する。ましてや布と言う構造上相手に巻き付ける事も可能で。

しかし、それでも軍配は桜咲さんの方に上がった。

「お嬢様の前で負けるような真似だけはしたくありませんでしたから。」

とは桜咲さんの談。

「刹那の本気を見れないのは残念だけど、全力は尽くしたアルヨ。」

とこちらは古さん。

「これはBブロックは実質次が準決勝みたいな物かなぁ、これ。」
「真名と刹那の対決でござるか……確かにそう考えるべきでござるな。」

トーナメント表を見ながら片腕吊った状態の長瀬さんと和やかに会話を交わしつつ。
実際の所、後の4人はこう言っちゃ何だがそれほど強いとは思えないし。

「一方のAブロックは予断を許さない状況でござるが……」
「いやいや、高畑先生かあのクウネルって人が持って行くって。あ

るいはカレー。」
「……先生は勘定に入らんでござるか。」
「無理無理、レベルが違いすぎるって。」
殺し合いならどうにかなると言うか、どうにでもするんだけど……ってそうか。
カレー以外ならどうにでもなるな。決勝戦では使えない事確定してるけど。
いやいや、無理に勝つ必要は無いから次の試合で〔無〕〔痛〕でも用意しておいて、
一発食らって吹っ飛ばされておけば……。
「ちょっといいかな、ネギ君？」
と考えていると高畑さんが目の前に。
「どうしましたか？　何か問題でも？」
「うん、刹那君の放った式神が気になるものを発見したみたいでね。」
「どうも始めましてー。ちびせつなと呼んで下さい♪」
桜咲さんをデフォルメしたような妖精サイズの彼女が“ちびせつな”なんだろう。
しかし、気になる物って一体なんだろう？
そう聞いた所、下水道を通った先に巨大な部屋と沢山の機械のある空間があったとか。
詳しい部分は“ちびせつな”さんではよく分からないとのこと。使えねぇ。
「それで確認の為に調査をするんだけどね。」

「俺が行って来ればいいんですねっ！」

身を乗り出すように強調する俺。
ここで棄権しておけば無駄にぶん殴られなくても済む！

「いや、そっちは僕が行く事にしたから。」
「え？」
「本当は君と戦いたかったんだけど、流石に超君の事を考えるそういう訳にもね。
そういう訳で、僕は棄権するから後のことは頼んだよ。」

そう言って歩いていく高畑さん。
いや、俺が代わりに行きますからと抗弁したんだが通らなかった。
と言うよりここで誰が行くかで揉めて時間を無駄にするわけにも、と言われればその通りだし。
なら同行するとも言ったんだけど、もしもの為の備えとして居て欲しいと言われれば断われず。

つまり俺はクウネルかカレーかのどっちかと戦闘か、と言う事になる。
こうなったら理由は無いけど棄権するか、とも思ったが意味も無いのに棄権するのもなぁ、
と言う気はするし……。

しょうがない、クウネルが勝つことを祈ろう。
女で無ければどうにでもなるんだ、うん。

ちなみに、このやり取りの間に

Ｂブロック第一回戦第三試合：豪徳寺薫ＶＳ田中
Ｂブロック第一回戦第四試合：井之頭純一郎ＶＳ山下　慶一

が終了。
それぞれ田中と山下　慶一が第二回戦出場となる。

「いや、何と言うか接戦には違いないのでござるがレベルが……と言うやつでござったな。
後、あの田中とか言うロボはある種のセクハラでござるよ。」

とは長瀬さんの談である。

Ａブロック第二回戦（準々決勝）
第一試合：クウネル・サンダースＶＳマスク・ド・カレー
第二試合：高畑・Ｔ・タカミチＶＳネギ・スプリングフィールド

Ｂブロック第二回戦（準々決勝）
第一試合：龍宮真名ＶＳ桜咲刹那
第二試合：田中ＶＳ山下　慶一

第４７話：そして、学園祭の話。（武道会編１）（後書き）

＞桜咲さんの木刀
しかし何故デッキブラシだったんだろう原作。
殺傷力の問題なのかしら、やっぱ。
それを言い出すと詠唱禁止とは言え魔法は普通にやばいんだけどｗ

＞セクハラ
野郎のもろ出しなんかみたくねーよ、と言う話で（何

＞どうにでもなる
よくよく考えるとアレを使えば……と言う。
一種の布槍術っすよ（え

第４８話：そして、学園祭の話。（武道会編２）（前書き）

ちょっち今回はクオリティが低いかも……ぐぬぬ。
後、若干の魔改造が原作キャラに入っております。ご容赦下さい。

第４８話：そして、学園祭の話。（武道会編２）

２０分の休憩後、準々決勝開始。
Ａブロック第二回戦第一試合：クウネル・サンダースＶＳマスク・ド・カレー。

「やれやれ、正直言って貴方のような方とは戦いたくないんですが。」
「奇遇ですね。私もです。ですが……賞金１０００万の為にここで散ってもらいます。」

お互い正面から対峙する二人。
……と言うか一千万を何に使う気だあの人、とネギは思い。

「いや、カレーでござろう？」
「カレーだと思いますね。」
「カレーアルな。」
「……だよねぇ。」

武道四天王一龍宮の三人が一致する以上は間違いなくカレーだろう。

「しょうがないじゃないですかっ！　カレーは経費で落ちないんですよ！！」
「一体……何の話をしてるんですか？」
「いえ、事実ながらも何か釈然としない物言いをされたような気がしまして……」

そんな和やかなスタートとは裏腹に、戦いそのものは苛烈を極めた。

開幕直後に炸裂するクウネルの重力魔法、そしてそれを直前で回避してのける『彼女』。
そこからの怒涛のラッシュ一先のクウネルの相手よりも速く、重い一を難無く凌ぐクウネル。

「なるほど……種は十分に分かりました。」
「ほう。」
「そこまでして一千万が欲しいんですか、あなたは!?」

何故か指を突きつけて糾弾するかのような『彼女』に、クウネルは悪びれずに語る。

「いえ、そちらよりも重要な目的がありまして……どうしても勝たせて頂きたいな、と。」

それさえ叶えば棄権してもいいんですが、とクウネル。

「何言ってるんですか、ここであなたに勝たせれば……私の食費がっ!!」
「いや、そこなんですか?」
「勿論です!! 私の身体は……」
「いえその辺で結構です、言いたい事は大体分かりましたんで。」

手を前に出し、それ以上言ってくれるなと言うポーズのクウネル。
どことなく何でこんな相手と、と言う感じもしないでもない。

「カレーで出来てるのかな?」
「でござらんかなぁ?」
「他に何が、と言う気もしますが。」
「そうアルな。」

そんな選手席を他所に事態は動く。

「しかし……性質が悪いですね。今の私の装備では始末しきれない。」

「でしょうね。その特性上“詠唱”抜きで貴方が私をどうこうするのは無理でしょう。」

「……ですが、『はい、そうですか』と諦められない理由が私にもあるんです!!」

そう言うと両手に計8本のスプーンを構え……それでも様になっている『彼女』。

「でもカレーなんだよねぇ。」

「締まらんでござるよなぁ。」

「まぁ、カレーですし。」

「しょうがないアルよ。」

「そこ、さっきからツッコミが煩いですよっ!!」

選手席に向かってびしっとツッコミを入れる『彼女』。

その機を逃すクウネルではなく……

「っ!?」

「掛かりましたね!!」

それよりも早く動いたのは『彼女』の方。

弾丸並みのスピードで投擲されたスプーンは彼を吹き飛ばす。

「『始末しきれない』とは言いましたが、『始末できない』とは言っていません。

その身が実体で無いにしろ、やりようは幾らでもあるんですよ？」
「なるほど、少し油断していたようです。なら、私も手札を切る事にしましょう。」
体勢を立て直し、そう言うと一枚のカードを取り出すクウネル。
「来たれ（アデアット）。」
カードは一枚の栞へと変化し、無数の本が彼の周りで螺旋を描く。
「っ！？　させませんっ！！」
何かをやらかそうとするクウネルを止めるべく動き出す『彼女』であったが。
時既に遅し。
一冊の本が彼の手に握られ……
「姿が変わったアルよ！！」
「誰でござるか、あの背広の御仁は？」
「高畑先生に似ている印象はありますが……」
「誰だか知らないけどさぁ、自重しようぜ……」
食い入るように観戦する3人の横で一人頭を抱えたくなるネギ。
明らかに魔法関係、と言うか仮契約カードである。
トリックと言う事で誤魔化す……のも難しい感じではある。
「その姿……何者ですか！？」
『彼女』の問いにフッ、と笑みを浮かべると右手と左手を合わせる。
同時に彼を包む巨大な闘気。

「あれは咸卦法!!」
「知ってるんでござるかネギ先生!?」
「いや、話だけだけどね。究極技法と言われるほど高難易度の技だよ、アレ。」

そして撃ち出されるのは居合い拳。
弾幕のごとき無数のそれと、一発一発がまさに大砲とも言えるだけの強力なそれ。

「あ、吹っ飛んだアルよ。」
「落ちたでござるな。」
「俺、あれと戦わないといけないの?」
「先生……ご愁傷様です。」

準決勝であれと戦わないとならんのか、と考えると憂鬱なネギであったがいやいや、と首を振る。
女に変身しない以上は勝てる。間違いなく、だ。
……まぁ、棄権しても誰も責めないよね? とは思っているのだが。

結論から言えば、それでも『彼女』は善戦したと言っていい。
舞台そのものが破壊されかねない激戦を繰り広げ、決着は付かなかったのだから。
この場合、一番お疲れ様だったのは司会実況をやってる朝倉だったかもしれない。
結局の所勝負はメール投票に委ねられ……

「何故私が負けるんですかー!!」

「はっはっは、日頃の人徳と言うやつでは無いでしょうか？」
勝者はクウネル・サンダースと相成ったのである。

Ａブロック第二回戦第二試合：高畑・Ｔ・タカミチＶＳネギ・スプリングフィールド

と言う訳で不戦勝で勝ってしまったネギ・スプリングフィールドです。
しかし、土木建築研究会おかしいだろう。
あれだけボロボロだった舞台があっという間に元通りとか……。

「いや、残念でしたね。折角あなたの戦いを見れると思ってたのですが。」

そう声をかけてきたのは相変わらずローブで顔を隠したクウネル・サンダース。

「第１回戦で戦ってたじゃないですか、俺。」
「いえいえ、タカミチ君との戦いを見たかったんですよ。１回戦は遊びだったでしょう？」
「……高畑さんのお知り合いで？」
「ええ、昔からのお付き合いです。と言う事にして置いてください。」

高畑さんの知り合い、と言うことは魔法関係者……いやいや、それは仮契約カードを
持ってる段階と言うより重力魔法をぶっ放した段階で分かってた事だ。

「次は私との対戦ですが……」
「知ってるとは思いますが、一般人に魔法の存在を示唆するような事は控えて下さいよ？」
「私もあそこまでするつもりは無かったんですが……どうしても勝つ必要が、ね。」

それだけ言うと、俺とすれ違う様に去っていく。
その間際。

「次は、俺と戦わせてやる。」

見知らぬ一クウネルでも無い一男の声が俺の耳元に囁かれる。
振り向いた時には、既に姿は無く。

「……誰だったんだ、あれ？」

首を捻る俺がいるだけだったのである。

Bブロック第二回戦第一試合：龍宮真名ＶＳ桜咲刹那

「龍宮。行っておくが神鳴流に飛び道具は……」
「知ってるよ。」

舞台の上に立つ二人。
そして、試合開始と同時に龍宮の早撃ちが桜咲の頭部に直撃する……かに見えた。

「言ったぞ、飛び道具は通用しない、と！」

「これに反応するか……思考ではなく、もはや反射レベルか。」

振るわれた木刀が撃ち出された５００円玉を弾き飛ばす。
それにも構わず次々と撃ち出される５００円玉、そしてそれを弾き飛ばすべく振るわれる木刀。

「まだまだ本気じゃなかったアルな、龍宮は。」
「いやいや、眼で追いつかないレベルだよこれ……」
「恐らく、刹那も感覚で撃ち落してるはずでござる。神鳴流侮りがたし、でござるな。」

撃ち出される５００円弾幕を潜り抜け、ついに肉迫する桜咲。
木刀を振り下ろそうとした瞬間、殺気を感じとっさに後方へ飛びのく。
次の瞬間、下から上へとギリギリの場所を掠めて飛ぶ５００円玉。
あのまま振り下ろしていれば、アッパーカットの如く宙を舞っていたに違いない。

「この距離からでもかわすか……流石だな、刹那。」
「何度も言わせるな、神鳴流に飛び道具は通じん。」

そう言って睨みあいに入ったのは一瞬。
再び繰り返されるのはさっきの攻防の焼き直し。
だが……

「刹那の木刀が折れたアルよ！？」
「恐らく、龍宮は同じ位置をピンポイントで狙い続けていたんでござろうなぁ。」
「同じ所で弾かせるように撃ち続けてたんじゃないのかな？」
「どっちにしろ神業でござるよ。」

へし折れた木刀を見、そして龍宮を見る桜咲。
そんな彼女を油断無く見つめる龍宮。

「どうする刹那？　続けるか？」
「愚問、だな。神鳴流は獲物を選ばん。」

すっ、と構えを取る桜咲。
自分の戦いを見てくれる者がいる以上、無様に負けることはありえない。
ましてや、降参など……！

「ならば終わらせるぞ！」
「それはこちらの台詞だ、神鳴流奥義・斬空掌・散！！」

振りかざした両手から放たれた複数の気弾が龍宮の周囲に着弾、爆炎を巻き起こす。

「そんなものが目晦ましになると思ったか？」

立ち込める煙の中接近する桜咲の姿は『魔眼』で確実に捉えている。
片手には今だ手放さぬ木刀の成れの果て。
あれでは弾幕を防ぐ事もままなるまい、と放たれるは無数の５００円玉。

しかし、ことごとくを彼女は弾き返す。
それは龍宮をもってして予測不可能な出来事で。

「貰ったぞ！　浮雲・旋一閃！！」

気がついた時には宙を舞い、大地に叩きつけられていたのである。
それと同時に地面に飛び散る５００円玉。

「参ったな……私の負けだ。」

少し残念そうな顔で、降参を宣言する龍宮。
こうして、決着は付いたのである。

「立てるか、龍宮？」
「大分上手に投げてくれたみたいだからな、立てないわけじゃない。」

試合終わって。
心配そうに手を出す桜咲の手を掴んで起き上がる龍宮。

「しかし、一体どうやって弾き返した？　折れた木刀でそんな芸当は不可能なはずだぞ？」
「不可能を可能にするのが神鳴流だ、と言う事にしておいてくれ。」

そう言いながら、自分の名前を呼んで歓声を上げる近衛の方を向いて手を振る桜咲。

正直、今だ特訓中の不完全技を発動させられたのは偶然か気合か。
今だイメージの維持の為に棒状の何かを持つ必要はあるが、気自体を刀身としたのである。
当然ながらすっぱりと物が斬れてしまうぐらいに危険な為に、本当は試合では使えないのだが。
そもそも気の刃が斬れる・斬れないは彼女自身以外誰も知らない事実である。
長時間使用に耐えない、と言ってしまえばそれまでな訳で。

それでも念の為に周りからは見えないようにしたのではあるが。
気の放出も一瞬だった為、龍宮も分かってないようだし。

桜咲刹那、少々汚れてしまったようである。

それはさておき残り1試合も無事に消化し、準々決勝も終了する。
Bブロック第二回戦第二試合：田中ＶＳ山下　慶一の試合については

「これは酷いね。というか公然猥褻じゃないの？」
「次の試合の相手は刹那でござるが……」
「ご愁傷様アルな。」

と言う会話から察して欲しい。

準決勝
Aブロック：クウネル・サンダースＶＳネギ・スプリングフィールド
Bブロック：桜咲刹那ＶＳ田中

第４８話：そして、学園祭の話。（武道会編２）（後書き）

＞詠唱
シスターならその辺なんかやってくれそうだけど、無詠唱でとなるとなぁと言う話。

＞『彼女』と言う表記。
いや、カレーだと何か締まらなくて……全く、誰だこんなキャラ用意した馬鹿は！（何

＞クウネルＶＳカレー
クウネルボロ勝ち、と言うのもなんだかなーと思ってしまいまして。最終的にこんな形にしてしまいました。

＞誰あれ？
原作にしてもそうですが、ネギがナギの声を知っているからこそのリアクションなんですよね。
知らない場合、こうなってもしょうがないだろう……（ひでぇ

＞気の刃
……うん、やっちゃった（おい。
気を弾にして飛ばせるのに固定化できない、って言うのも理不尽だろうと言うｗ
どちらにしろ気を纏わせた方が効率的ですし、ロスユニのケイン並みの隠し玉と言う方向でｗ

＞最近のネギま

火星をテラフォーミングっつーことで舐めんな的話が噴出してるようなこの頃。
ちょっと色々無駄に脈絡なく考えて見ましょう。

魔法世界崩壊までの期限は「最短で9年6ヶ月」との試算を出したのはポヨ。
（正確には専門機関ですが……どこだ？　魔界か？）
あくまでも『最短』なんですよねぇ。無論楽観は出来ませんけども。

しかしテラフォーミングに掛かる期間は30年単位……仮に最短の9年で魔法世界崩壊が
発生すると間に合わない事に。
とは言え、科学だけやなくて魔法も併用しての惑星改造を考えれば何も火星全土を9年で
改造しきる必要も無いわけで……ぶっちゃけ一部だけでも改造できればよくね？と。
（仮に魔法の力を借りれば9年で終わります、とかだと吹くw）

Wikiに聞くとパラテラフォーミングっつーもんがありまして。
ようは人間が住める環境が整ったでかい囲いを用意して、どんどん広げていくと言った感じの
もんなんですが。
……それでも9年じゃ無理だろう、とは思うんですがw

いっそどこぞで言われてたように魔法球用意してそこに魔法世界人詰め込んだほうが
いいんじゃねーのか、と言うw

立ち読みなんで「火星を緑化することで魔法世界人の維持に必要な魔力を精製してそこに

魔法世界人全員移住」なのか「火星を緑化する事で魔法世界の維持に必要な魔力を生産させて
魔法世界の崩壊を食い止める」なのかをど忘れしてるのが問題ｗ

結果的に魔法バレするんなら超と戦う必要なかったんじゃね？と言う話。

現状を見ると、「あらかじめ魔法をばらす」か「後で魔法をばらす」かの差なんですよね。
ネギ案を魔法抜きで語るのも難しいだろう、と言う気もしますし。
そんな短期間で火星開発できるか、と言うより魔法世界人移住計画だったらどちらにしろ
説明しないとならないわけだし。

超なら超科学の産物って事で……どうなんだろう。
あれだけの田中さんやら鬼神兵の存在を考えると金だけは唸ってそうだし。
と言うか、未来から来てるならインサイダー取引マジ余裕じゃねーの？（何

しかし超の目的が「魔法世界に住んでる純粋な人間の救済」だったりすると確実にネギと
かみ合わなくなるんですよねｗぶっちゃけクルトと超は合うかも。
ネギは間違いなく全員を救うことを考えるでしょうし。
まぁ、超の目的が成功している＝ネギはオコジョなんですがｗ

しかし、先に魔法ばらそうが後で魔法ばらそうが混乱は避けられない罠。
超はその辺も含めて「上手くやる」と言ってましたがそう上手く行

くのかと言う疑問。
世界樹を用いた儀式で「魔法が存在するぞー」とばらしただけですしねぇ、あいつ。
どうせなら「魔法の存在を認知して欲しい」ってすりゃよかったのに。
「今日一日世界が平和でありますように」が通るんだからさぁ。

……と言うか「世界の人々が分かり合えますように」とかは無茶振りなんじゃろうかw
そんな事やったら話し終わっちゃうんでやらないし俺もやる気ありませんがwww

じゃあネギなら上手くやれるのかといわれると……ねぇ？
原作は何事もなくスルーされそうな予感もしますが、ますます超が涙目と言う結論にw
ぶっちゃけネギと一緒にいりゃ悲劇回避できてた可能性があった訳ですからね。
それこそフェイト宜しく「ネギがだめなら私がやる」でいいという話で。
まぁ、この辺は結果論ですが。

そもそも超のいなかった未来とはどんなのなのか。
正確に言えば、超のいなかった時間軸ですな。

・そもそも茶々丸がいない→エヴァ一人っきり。それでもスクナはどうとでもするでしょうし、
ネギの弟子入りにしたって発生してるでしょう。
・ハカセ・四葉が魔法を知らない→超がいてこその話でしょうし。
・まほら武道会が発生しない→とは言えクウネルはどうにかしてネギと接触するでしょう。

結局ネギは親父の手がかり求めて魔法世界に行ってるはず。

……こんなもん？

一番大きいのは茶々丸の不在、ってくらいっすかねぇやっぱ。

彼女いてこその魔法世界編での早期合流だったり鍵奪取だったりしますし。

あぁ、ネギが超と戦わないから原作より甘ちゃんの可能性はあるのか。

最悪、魔法世界に散らばった生徒達を探してる間に「完全なる世界」が目的を達成してる

可能性は……流石にねーか。

とは言っても、先に明日菜見つけられて拉致られた挙句儀式されるとそこで魔法世界崩壊のお知らせなわけですし……。

あれ、でもあいつら崩壊の儀式やるのはいいけど魔法世界人どうするんだよ。

魔法世界の崩壊と同時に消えてしまうから「完全なる世界」に送ってたんじゃないのか？

それとも明日菜を使用した大規模リライトを兼ねた儀式なのかしら？

今確認したらリライトの儀式のようですな。結果的に魔法世界崩壊するんで一緒ですが。

しかし、地球ＶＳ火星で１００年間戦争（正確には１００年を越える）と言うのもすごい。

百年戦争かよ、とツッコミを入れたくなるｗ

とは言えこれもポヨ情報なんだよなぁ。お前未来見てきたのかとｗ

何がどうなって１００年にもわたる戦争になったんじゃろうかとざ

っと考えてみる。
そもそも魔法世界崩壊前の時点でゲートが全て破壊されてる為、地球との通信は不可能。
当然ながら人の行き来もできないので地球からすればさっぱりの状態。
もしかしたら麻帆良は吹っ飛んでる可能性もありますな（学園長も危惧してましたが）。
仮にそうなった段階で魔法世界は終わったな、と誰しも思うでしょう。
生存者の確認に動くのも不可能でしょうし。
まず魔法世界が火星に存在する、と言う事実を何人が知っているかと言う話でもありますが。
そして判明していた所で場所が場所だけに救援に行く、と言うのも不可能でしょう。
技術力が追いついていないだろうし、魔法でどうにかなるなら苦労はして無いだろうし。

つまり、火星に放り出された人間はマジで孤立無援状態と言うこの事実。
しかも魔法世界自体が消滅してるからライフラインなんてもんはないだろうし……

おいおい、こいつらどうやって生き残ったんだよ。魔法はそこまで万能なのか？
空気やらはどうにかできるにしても（それも難しいけど）、食料とかはどうしたのか？
魔法世界上層部はその事実を知ってると言ってる以上、何らかの備えはしていると
考えるべきなんだろうけど……魔法世界の外（火星）にシェルターでも作ったのかしら。

どちらにしろ６７００万近い人間を養うなんて不可能だろうし、下手すりゃ（しなくても）
血で血を争う内輪揉めが目に見えますな。
養う養わない以前に、何人が養ってもらえる環境にいられるかと言う問題もありますけど。
下手したらネギＰＴ＋生徒たちこの段階で何人か死んでますよねｗ

ここまで考えてなんですが、１００年経っても地球人が火星に来る事はないんじゃね？（おい
それともこの世界では「火星に移住するぞ！」って計画が持ち上がったりしたんじゃろうか。
もしくは地球の魔法関係者が政府機関に働きかけたとか？（見殺しには出来んでしょうし）
どちらにしろ、火星から地球へ侵略行為は不可能だろうと。
明日を生きていくだけで精一杯じゃねーの？
火星に古代人の遺跡があってそこのオーバーテクノロジーで、とか言い出したら別ですがｗ
そんなご都合主義満載の展開が無い限り、地球側からこっちに来るしかない。
来るにしても１０年単位は掛かるでしょうし、と思ったら火星は半年ほどで行けるらしいｗ
どちらにしろ、国にやらせるとなるとプロジェクト立ち上げてですから長い時間掛かる罠。

いやほんと何で戦争になったんだ？
地球人が火星に到達したら先住民がいて土地を巡って争いにでもなったのか？
自らの住む場所を守ろうとする火星人と侵略する地球人の戦いなのか。

インディアンだと思ったら魔法使いなんていうファンタジーな代物で地球涙目みたいな。
でもそうなると地球側の魔法使いはどうするんだろう。火星を支援するのか。
支援と言っても地球側との仲介くらいしか出来ない……でも魔法はばらせない、か。

火星における科学技術の進歩は地球側の技術を奪取・吸収すれば……きっと、多分（おい。
超が生きてる時代まで行くと気の達人なんてものもいないみたいだし。
超に施された呪紋処理を考えると、純粋な魔法使いの数すら怪しくなってくる。
つーか、火星に魔力が無い以上魔法使い魔法使えるのか？
全くの０ではないにしろ、相当コスト悪くなってるんじゃ……ってその為の呪紋処理か？

こうなってくると超の言う悲劇、っつーのは火星人としての悲劇になるわけで、
極論すると未来における火星人ー魔法世界に住む人間ーを救おうって事になるんだろうけど。
どうやって救うんだろうなぁ、と言う。
魔法をばらす事で魔法使いの存在を世に知らしめつつ、その資金力と技術力で火星への移動手段
を確立して魔法世界崩壊後に放り出された人間を救出するとでも言うのかしら。
いや、魔力云々を考えなければ大規模な惑星改造も必要ないわけで。
どの道６７００万人を
地球のどこに住まわせるんだ、という話もある。
もう火星地表に６７００万人入る規模のコロニー建設すればいいん

じゃねーの？（え

結局魔法をばらした意味がわからんのですがｗ
あー、でも量産型茶々丸にしろ田中さんにしろ科学オンリーで動いて無いんだよなぁ、あれ。
無線田中さんは学園祭限定にしても。
そうなると科学と魔法のハイブリッドでござる、で火星活動でもさせるつもりなのか？
人が作業するよりは効率的だろうし、魔力の補充は最終的に缶で行けるみたいだしｗ
補給さえ確立してれば行けそうな気はするｗ
後は「火星に住んでる人は魔法を使うよ」と言う事を事前に分からせておけば無駄な血を
流す必要も無い……かなぁ？
幾らなんでも地球側からの先制核攻撃とかはありえんだろうしｗ
あったら木星にでも逃げないとならないしｗｗｗ

まとまりもなくここで終われ。
本文並みに長いぞ、こいつ！（おい

第４９話：そして、学園祭の話。（武道会編３・完結）（前書き）

短いですがキリがよかったので。

第４９話：そして、学園祭の話。（武道会編３・完結）

準決勝Ａブロック：クウネル・サンダースＶＳネギ・スプリングフィールド

舞台に立つのは二人の姿。

一人は麻帆良学園中等部教師、ネギ・スプリングフィールド。
一人は謎のローブ姿、クウネル・サンダース。
下馬評ではクウネル有利。

「でも、ネギ先生でござるからなぁ。」
「ネギ先生ですしね。」
「……そんなに凄いんアルか？」

唯一知らない古が何かを悟ったような長瀬と桜咲に質問する。
確かに第一試合での試合を見る限りはそれなりの腕はあるのだろうが、剣の腕前だけならば
恐らく桜咲の方が上を行くであろうし、体術だけでも長瀬の方が上に見える。
隠し玉を隠し持っている可能性はあるが……。

「凄いと言うか……」
「恐らくルール無用なら誰にでも勝てるんでは無いでしょうか？」
「なんと、それは凄いアルな。」

散々な評価である。そして間違ってはいない。
隠すだけ隠してるとは言え、外部に見せた分だけでも反則級ではあるのだから。

そんなネギが腕に巻きつけているのは紅い布。
先の戦いとは違い、どこにでもありそうな品であり。

「あの布は……！！」
「知ってるのでござるか、刹那！？」
「闘牛士でもするアルか？」

唯一その『布』を見た事がある桜咲だけが声を上げる。
そう、修学旅行の一件で使用した拘束道具一自身もちゃんと見たわけではないが一だ。

「ほう、中々な業物のようですね。」
「いやいや、大したものじゃないですよ。」

どのような物かは分からないが、それがマジックアイテムの類だと言う事は分かったらしい。
クウネルが感心する。

そして、準決勝の幕は切って落とされた。

「一瞬であのクウネルとか言う奴、グルグル巻きアルよ！　凄い布槍術アルな！！」
「しかも脱出すらままなら無いとは……恐るべき技でござるな。」
「先生……警戒するのはわかりますが、そのまま場外に放り出すのはどうなんでしょう？」
「まるで人で魚を釣ってるみたいでござるな、あれは。」

そして場外である故に無常にもカウントは取られ……。

「勝者、ネギ・スプリングフィールド選手！！」

あっさりと勝敗は決定したのである。

無事に勝利して一息ついたネギ・スプリングフィールドです。

いやよかった。カレーさんの言葉を借りれば「実体が無い」そうだからすり抜ける事もありと

思ってたんですが……そんな事が無くて本当によかった。

最悪【幻想殺し】か―いや、それだと失踪してしまう―【文珠】で〔実〕〔体〕〔化〕か。

「先生、凄いアルな！　どこでその技身につけたアルか？」

「いやまぁ、たまたまだよたまたま。」

「偶々であんな事されたら私立場無いアルよ！」

こっちへやって来て追求してくる古さんを交わしつつ、選手席へと戻る事に。

戻る道すがら姿を現したのはクウネル・サンダース。

「いや、まさか秒殺とは思いませんでしたよ。流石ですね、と言わせてもらいましょうか。」

「やっぱり相性の問題とかありますからね、偶々ですよ偶々。」

「一度、君とは個人的にお話したいこともあります。私はそのつもりでここに来てたんですよ。

君の父、ナギ・スプリングフィールドについての話ですが。」

それって一々武道会出なくても直接コンタクト取ればよかったんじゃ？

「俺の親父が何か？」
「今ここで話すとなると、色々ややこしい事になりますので後日……ではどうでしょうか？」
ちらり、と古さんの方に視線を向けてそういうクウネル。
となると魔法関係か。いやまぁ、親父の話の段階で魔法関係確定なんだけども。
正直受ける気はしないが、遺産贈与とかそういう話だと無視するわけにも行かないしなぁ。
「えーと、それなら日は改めてと言う事で？」
「そうですね。学園長を通じて日程の方は調整させてもらいますよ。」
では、と去っていくクウネル。無論歩いてである。
選手席に戻ると、見慣れないシスター姿が二人に真剣な表情の長瀬さんと桜咲さん。
「どうしたんだい、二人とも……と言うか二人増えてるけど。」
「ちと問題が発生したようなんでござるよ、ネギ先生。」
「いやぁ、多分大丈夫とは思うんだけどねー。」
どこと無くやる気の無いシスター（大）とそんな彼女を見上げるシスター（小）。
さっきまでいなかった事を考えると、ついさっき来たんだろうけど。
ともかく、長瀬さんと桜咲さんが真剣な表情をしている辺り魔法関連だろう。
大っぴらに話を聞くわけにも行かないので、救護室の方まで移動することにする。

俺とシスター二人組みだけだけど。誰かが古さん足止めして無いと付いてきそうだし。

「と言うか、春日君が魔法生徒と言うのは初めて知ったよ。顔合わせの時はいなかったしね。」

「いや、いなかったと言うか顔を合わせてなかったと言うか……」

「……シスターシャークティの後ろに隠れてたカラ。」

「あー、なるほど。」

救護室に入って諸々の結界を張り巡らせてから本題に入る。

大きい方のシスターがうちのクラスの春日さんで、小さい方のシスターはココネさんだそう。

「つまり、高畑先生が超さんに地下に捕らえられてて、その救出をしろと。

しかし……君たちだけでと言うのはちょっと無茶過ぎないかい？」

「いやぁ、シスターシャークティも一緒に来てたんだけどたつみーに足止め食らっちゃって。」

「……チケット持ってる私達だけ先に来タ。」

とは言え、高畑さんが捕まるというのは想像できん。

まさか実は弱い、って事は無いだろうし。流石に生徒相手では拳も鈍るか。

後さり気に龍宮さん何やってんのさ。あれか、雇われたのか？

「確かに少し前に地下に潜ったみたいだから……そこから探していくしかないみたいだね。」

「えー、探しに行くんですかー？

ぶっちゃけ高畑先生強いんだし、一人でどうにかしちゃうんじゃ。」

まぁ、決勝を残して棄権と言うのは非常に惜しい気はするのだが。
それでも仕事は仕事な訳で。
上も忙しいらしくて、応援は見込めないみたいだし。

「試合が気になるなら観戦してもいいけど……」
「いいの!?　さっすが先生話が分かるー!!」
「俺が決勝戦棄権するから、後1試合しか無いよ?」
「え……」

やったー、と言う喜びの表情から一気に急降下する春日さん。
せ、折角のプラチナチケットが……と言ってるけどそんな事は知らん。

「じゃあ、納得してくれた所で行こうか?」
「全然納得して無いんですけど……」
「……諦めよう、ミソラ。」

ココネさんに慰められながらもトボトボと俺の後をついていく春日さん。
そんなに試合見たかったか。
外に出ると、準決勝Bブロックの試合が開始されるようで歓声が上がっていた。
と言うか歓声大きすぎるんじゃね?
そんな事を思いつつ、棄権の連絡を頼む為に長瀬さんのいる選手席へ。

「やたら観客のテンションが高いけどどうしたんだい?」
「まぁ、1回戦2回戦の戦いぶりの結果と言う奴でござるよ。」

刹那じゃなくてその対戦相手の方でござるけどな、と苦笑いの長瀬

さん。
……そーいや、脱がしてくるんだっけか。
なるほど大体分かった。

それはさておき、用事が出来たので棄権する旨を長瀬さん経由で運営の方に伝えるように
頼んだ後に、地下に囚われた高畑さんを救出するべく動き出したのである。
勿論シスター二人組と共に。

準決勝Ｂブロック：桜咲刹那ＶＳ田中

一部野郎共が期待の余り歓声を上げてしまったこの一戦。
しかし、期待通りに進まないのが世の常と言うものである。

そもそもにして相手の攻撃手段は既に判明しており。
火力が無いとは言え、服が脱げるとわかっている攻撃を度々食らう人間はいない。
ついでに言えば、神鳴流に飛び道具は無効なのだ！

……光学兵器にまで適応されるかは大変怪しいのだが、現に切り払ってしまうのだから
事実は事実として受け止めるしかないのであろう。

とは言え、桜咲も攻めあぐねていた。
何しろ相手はロボ。痛みなど感じない。
無論衝撃を受ければ怯みもするし仰け反りもするが、お構い無しに一撃を入れてくるのだ。

だが、先の二人とは違う物が彼女にはあった。
神鳴流はそもそも対人にはあらず。人外を倒すための技。

「神鳴流を無礼るなぁぁっっ！！」

と言う叫びと共に打ち込まれた神鳴流奥義・雷鳴剣は物の見事に相手を沈黙させたのである。

恐らく高畑さんが落としたであろう煙草を拾い上げつつ下水道を進むと田中さんと沢山遭遇したネギ・スプリングフィールドです。

と言うか口からのビーム砲を障壁で防ぎつつ後退か、とも思ったのですが……

「先生！　後ろからも団体さんが！！」

と言う春日さんの言葉通り、後ろからも田中さんの群れ。量産型か！こうなってくると彼女達を連れてきたのは失敗だったかな、これは。どちらにせよ、ロボと言う事は最悪リアルタイムでこの様子を中継されている可能性がある。
となると迂闊な事はできない訳で……

「しょうがない、一旦撤退するよ！」
「どこに撤退するんですかー！？」

涙目の春日さん。いやまぁ、気持ちは分かる。
逃げ場ってどこ？って状態だし。

「俺に掴まって！」

そう言って春日さんが掴まったのを一ココネさんは春日さんが肩車してるので一確認した後、
俺は〔転〕〔移〕を発動、一度下水道入り口まで撤退する事にしたのである。

やはりこれは一人で行くしか無いか……こう言っちゃなんだが足手まといすぎる。
彼女達を連絡役に残しておいて再チャレンジするしかあるまい。
何と言うか悪いことをした気がするなぁ。

一方、武道会決勝戦は俺の試合棄権により桜咲さんの不戦勝となり、幕が下りる事となる。
もうちょっと派手になるかと期待していた超さんが肩を落としていたのは俺の知る所ではない。

第４９話：そして、学園祭の話。（武道会編３・完結）（後書き）

＞下馬評
てっきり競馬の用語か何かだと思ってたら全然違ってて吹いたｗ
いやぁ、大団円を大円団だと思ってたくらいに恥ずかしいｗｗｗ

＞クウネルＶＳネギ
棄権以外でここまで早い決着もないんではなかろうかｗ

すり抜け回避した挙句、あの布どうにかしないとナギの再生はままならん、
とラカンを再生して気合で聖骸布ぶち破ったはいいものの、
バグキャラっぷりから主導権を握ってしまったラカンが「よし、一勝負やろうぜ！」と
挑んできたせいでネギ涙目、と言う展開もあったんですがｗ

＞美空組
びみょーに来襲時期がずれ込んでおりますがご容赦下さい（汗。
つーか、美空の口調がすっげー自信ないｗｗｗ

＞逃げ場どこ？
実は逃げるだけなら逃げられるんですけどね、春日ｗ
原作だと相手が明日菜たちだからあーしたでしょうけど、
まさか教師の前で敵前逃亡はしないだろうなぁ、と言う話で。

第５０話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編１）（前書き）

実は微妙に話の流れがずれております。
余りお気になさらぬよう（え。

第５０話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編１）

「結局何も見つからず……か。」

再突入直後に高畑先生と合流、そのまま内部調査に赴いていたネギ・スプリングフィールドです。
結論から言えば夜逃げ大成功状態だったわけで。
ついでに他の魔法先生方が、武道会表彰式後に超さんを拘束しようと動いたようですが
案の定と言うかやっぱりと言うか逃げられてしまったらしい。

「瞬間移動のように消えた。」

とは瀬流彦先生の談。
うーむ、瞬間移動能力保持者とでも言うんだろうか？
魔法でも無茶な領域ではあるのだが。

空間転移の魔法は『何か』を媒介にする必要がある。水しかり影しかり。
しかし話を聞く限りでは媒介にするようなものもなく。まるで当たり前のように消えたとか。
こうなってくると超さんを確保するべきなんだろうなぁ。
後、龍宮さんも何らかの関わりがあるみたいだし……まぁ、依頼主が超さんなだけか。

「と言うわけで、超さんの身柄を確保する必要がって桜咲さんは？」
「刹那なら記者団などに囲まれて身動き取れんでござる。」

とは長瀬さん。

武道会優勝と言う事で色々と記者が詰め掛けて逃げられないようである。
後スカウトとか……って彼女剣道部だろう。

「空飛ぶなり強行突破なり色々あるだろうに……」
「あの密度は逃げるのはちと骨でござるよ。」

ぎゅうぎゅう、と言う奴である。
まぁ、取材攻勢頑張って捌いていただきたい。
物理的に無双する訳にもいかないだろうし。

「微妙にこちらのほうを向いて救援を要請しているようでござるが……」
「薮蛇を出しそうだし桜咲さんには犠牲になってもらおう。近衛さんが近づけて無いのはちょっと気の毒だとは思うけど。」

記者団の作る円陣の外側に近づきたいけど近づけない近衛さんの姿が。
ちらほらと彼女の回りにいるそれらしいのは関西の人間か？
お役目ご苦労様である。

そんな訳で「がんばれ」とそっと口パクで声を掛けておいて超さん探しに出たのである。
……まぁ、どこへ雲隠れしたのか夜までかかっても見つからなかったのだが。

お陰であちこちの予定をキャンセルする羽目になったのは余談である。
何ていうか色々と申し訳ない気がしてならない。

「そうだ、メールで呼び出せばいいんじゃんか。」

と気がついたのは一通り探し回って日が暮れてからのことである。
ついでに言えば、来なかったので意味はなかったのであるが。

「流石にネ……先生とサシで会うほどお人よしでも無いヨ私は。」
「それは酷い。俺は生徒の事を第一に考えてだね。」
「エヴァンジェリンと茶々丸のこともカ？」
「何を言ってるのか俺には分からないけどね。正しい事をしたと言う気持ちは変わらないよ。」

夜中。
俺と超さんはテーブルを挟んで楽しい会話に乗り出していた。
『超りんお別れ大宴会』で。

俺もついさっき聞いてびっくりしたのだが退学届けを出したとかで。
そんな状況で黙ってるうちのクラスではなく、この運びとなったのである。
ちなみに主催は雪広さん。

この場で取り押さえる訳にも行かず、一時休戦的流れになったのだ。
そもそも休戦も何も戦ってる訳ではないのだが。
……いや、戦う事になるから構わないのか？

「で、退学の理由は尋ねないのカ？」
「聞くと教えてくれるかい？」
「勿論ネ。一身上の都合と言う奴ヨ。」

それは教えたって言いません。

「じゃあ代わりに、君が何をしようとしているのか聞いてもいいかな？」

「フム……それほど大した事ではないヨ。そう……」

と口に出した辺りで椎名さんが超さんにプレゼントをあげようだとかで。

サイン付きボールやらサイン付きイラストやら妙な生物やら本やらとうず高く詰まれて行き。

雪広さんプレゼンツの超さんの胸像が一番でかい訳だが。

「せんせーは何か無いのー？」

「あー、俺も急な話だったからね。」

思わず苦笑してしまう。

まさかプレゼントの代わりにピストルの弾を、と言うわけにも行かんし。

「もう少し早めに教えてくれていれば何か探してたんだけども。」

「イヤイヤ、気持ちだけでもありがたく受け取っておくヨ。」

これ以上は持って帰られないネ、とは超さん。

胸像の段階でどうやって持って帰るんだ、とは思ったが。

「火星人で未来人……ねぇ。」

「先生は信じるのカ？」

そして宴も終わり、大多数の生徒たちは轟沈し。

実際問題、丸二日徹夜状態は若くても無茶だろうと思う訳で。
体力の有り余ってる起きてる生徒一神楽坂さんとか一に寝てる生徒たちの移送をお願いしつつ、
俺は会場の後片付けをやってるわけである。超さんと一緒に。

今話している内容は超さんの挨拶の中にあった「未来から来た火星人である」発言についてなのだが。

「そりゃまぁ。世の中には魔法使いに忍者にロボに吸血鬼までいるんだ。
そこに未来人で火星人が追加された所で今更、って感じだね。」
「属性で存在を肯定されるとは思わなかったヨ……」
何故か煤けた表情をする超さん。

「つまり、君の目的は過去の改竄？」
「凄いぶっちゃけた発言ネ。まぁ、大よそその通りだガ。」
未来からやってきてやる事は一つしか無いだろう。
いや、過去観光とかそういう目的だってあるだろうけど。

「正確には……この世界に魔法をバラす。それが目的ヨ。」
「へぇ。」
「……いや、リアクションそれだけなのカ？」
もうちょっと驚きようが、と超さん。
とは言えなぁ。

「高畑先生から聞いてたしね。」
「……今無性にネギ先生をぶん殴りたくなったヨ、私。」

プルプル震え、はしてないがこの野郎とは思ってると言った様子の超さん。

「で、『俺の子孫』ってのは本当なの？」

そうとも言っていたし、未来人だというならその可能性も考慮はできる。
とは言え俺が結婚して子を儲けて更にその子供が結婚して子供を生む？
想像できんぞ、割と。

「……分からないネ。」
「はぁ？」
「既にこの時間軸は私の知る時間軸とは異なる未来を進んでるネ。いや、ネギ・スプリングフィールド。私のご先祖たるアナタの存在が既に私にとってのイレギュラーヨ。」

そう真っ直ぐに俺を見つめる超さん。
心当たりがありすぎてて困る。

「未来の可能性は無限だガ、過去は既に確定した揺るぎの無い事実ヨ。
『誰か』が過去をひっくり返すような真似をしない限りはネ。」
「……例えば君か。」
「……例えば私ヨ。」

過去をひっくり返す、と言う例を挙げるなら彼女自身もそうだ。
少なくとも彼女が麻帆良に来てから今までの『過去』は『未来』が記録しているそれとは
全く別のはずだ。
そして彼女はさらに『過去』をひっくり返そうとしている。

「そこまで未来は悲惨なの？」
「地球は知らないガ、火星は少なくとも悲惨ネ。
何しろ死者だけで１２億人近く。生きてる人間も１００年近く厳しい生活を強いられるヨ。
いや、これからも安息の日々は恐らく訪れないネ。」

待て待て。火星になんで人がいる？
それも１２億人とか……いつからそんな星になった火星。

「そんな未来を変える為に私は来た。過去にネ。
さて先生、遠く無いその残酷な未来を変えようとする私を止めるカ？」
「……未来の都合に現在を巻き込むな。」

挑戦的な目で俺に問うて来た超さんにそう返す。

「それが未来の地獄を保証する物であってもカ？」
「未来人だから言える台詞だろう、それ。現代人はそんな事わからないんだよ、普通は。」

予知能力者とかそう言うのがいたら知らない。

「だからこそ、私が現在を変えようと……」
「自分一人で何もかも出来るだなんて思わないほうがいい。」

「……その台詞、そっくり先生に返すネ。」
「少なくとも『未来を救う』だなんて偉業に挑戦するつもりは無いよ。
俺は、俺に降りかかってくる火の粉を払ってるだけに過ぎないからね。」
溜息をつく超さん。
「やはり……先生は私のご先祖様ではないみたいネ。
少なくとも私の聞いた『ネギ・スプリングフィールド』はそんな男ではなかったヨ。」
「なら話は簡単だろう、君は自分が知ってる過去と違う過去に来た。それだけじゃないか。」
「原因を作ったのはアナタでは無いのカ？」
「そんな事、俺が知るわけ無いだろう？」
超さんが知っている時間軸に俺が割り込んだせいで過去が変わったのか。
そもそも俺が存在する時間軸に超さんが間違って割り込んだのか。
それこそ時間軸を客観的に見れる存在ーそれは神では無いのか？ーが必要だろう。
「しかし仮に私が間違った時間軸に突入していたとしても、先生が影響力を及ぼしていない点
に関しては全て私の知る『過去』と同じネ。ならば私は予定通り事を成す。」
「未来人の勝手な都合で『現在』をしっちゃかめっちゃかにされても困る。
それほど『未来』を変えたいのなら誰もが納得の行く方法で変えればいいだけだろう？」

いや、何をやらかす気なのかは知らないが。
少なくとも人に褒められるような手段で事を成すつもりだけはないと確信できる。

「それでは遅すぎる……遅すぎるんだヨ、ネギ先生。
今必要なのは、多少痛みを伴っても即効性のある手段ネ。」
「……なら、今から１００年前にでも戻ってればよかっただろうに。」
「魔法科学にも……限界は、あるヨ……」

苦しそうな顔で超さん。
どのような手段で時間移動をしたかは不明だが、そこまで無茶は無理と言うことか。
俺にしても過去未来をどうこうする手段はあるが、１００年単位で無茶は無理だろうしなぁ。
……やれるかも知れんが、後が怖い。

「最後に一つだけ聞かせて欲しいネ。
先生は過去を後悔し、やり直したいと思ったことはないのカ？」
「今のところ順風満帆でやらせて貰ってる……いや、順風満帆とは行かないか。」

苦笑する俺。
しかし、『やり直し』と言う点では既にやり直ししてるようなものだ。
全く違う人生、全く違う世界において、なのでそう言い切るかは微妙だが。

「とは言え、やり直そうなどと考えた事などなかったと言うのが正

直な所かな。」
「なら、やり直せると言われたらどうするネ？」
既にやり直してます、とは言える訳も無く。
その点で言えば彼女のやろうとする事にあれこれ言う資格は俺には無いのかもしれない。
別の世界に生まれ新しい人生をやりなおすか、過去を改変して未来をやり直すか。
俺自身の力でやり直してるわけでは無い分、俺の方が１００万倍性質が悪い。

「これ以上それを望むのは贅沢を通り越した別の何かだ、としか言いようが無いね。」
「それはどういう事あるカ？」
「さて、ね？」

少し喋りすぎたか。

「もう時間も遅い。後の……！？」

直後、俺の体は黒い球体上の『何か』に覆われる。
重力魔法の類か……いや、違う。

そして、俺の姿はこの『時間』から姿を消したのである。

「ふぅ……ご苦労様ネ龍宮。」
『しかし、よかったのかい？』

ネギ・スプリングフィールドが消滅してまもなく。

超鈴音は通信機で龍宮真名と会話していた。

「恐らくあれ以上話した所でネギ先生は自身の事は喋らないネ。」

『私としてはあそこまで喋った事に驚きだけどね。

しかし、最後の台詞はどういう意味だったのか……まぁ、私には関係の無い話だ。』

スナイパーライフルをギターケースに仕舞いつつ、遥か彼方の鐘楼から超の方を見る龍宮。

作戦としては非常に単純。

超がひきつけている間に龍宮が狙撃をする。それだけである。

「これでネギ先生は明後日まで出てこない計算ネ。

こんな事もあろうかと、特注の弾を一発用意しておいてよかったあるヨ。」

使用された弾丸は【強制時間跳躍弾】。

本来ならば明日でなければ使用できない『それ』。

しかし、超の科学力がたった一発だけの形をもって可能にしたのである！

それも3時間後ではなく、2日後と言う長期間で！！

『後は高畑先生か？』

「そっちは当日私が抑えるネ。最も警戒するべきは学園長だが自身が出張る事はありえないヨ。

仮に出張る事になっても……その時には既に手遅れネ。」

本来ならばエヴァンジェリンを（限りなく友好的な）中立にする事で学園長を牽制する

つもりであったのだが、彼女が死んだことによりその目論みも外れ。

しかし、トップであるが故に最高権力者が簡単にその場に出張ってくる事は考えられず。

そうなれば麻帆良の最大戦力は高畑と言う事になる。
確かに彼は強い。だが、自身の生徒だった人間に本気になれるような人間でもない。
それに、彼ならば分かるはずだ。自身が為すべき事が完璧な間違いではない、という事を。
自身の『能力』を持ってその一瞬を突けば勝ち目はある。
……そもそも初見で見切れる物でもないのだが。用心に越した事は無い。

「それじゃ、今日はここで解散ヨ。龍宮もお疲れ様ネ。
今回の狙撃に対する追加の依頼料は……」
『いや、この件に関しては直ぐには払わなくていい。』
「何故ネ？」

いぶかしむ超。

『そうだな……明後日になってネギ先生が出てきたら貰おうか。』
「あくまでも成功したかどうかを見極めてから、という事カ？」
『そう考えてもらって構わないよ。どうにもあの程度で終わる先生とも思えん。』

えらく過大評価だ、と超は思う。
仮に脱出しているなら現時点でこの場に存在しているはず。
魔法詠唱をしている暇も無かったし、無詠唱の転移魔法を行うにしても触媒が無い。
＜影＞を用いた転移魔法は存在するがその兆候もなかった。

確実にネギ・スプリングフィールドはこの時間に存在していない。

……間違いなく、だ。

超が彼を過小評価していたと知るのは、もう少し先の話である。

第５０話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編１）（後書き）

色々書き足したりしてたらそこそこの分量になってほっとした（おい。
いや、そもそものプロットで超とネギが会話するとかほとんどなかったんでｗ
しかし時間関係の話はほんとクソめんどいｗ
何か辻褄合わなかったりしたらごめんなさい。

＞強制時間跳躍弾
独自設定てんこ盛りですｗ
と言うか科学者の端くれなら「こんなこともあろうかと！」で解決しても……いいよね？（え

でも実際、どうやって試射したんだろうこの弾。
理論だけは先にあってそのとおりに組み立てたから確実です、なんて死んでも言えんぞ。
つか龍宮だってそんな不安定な弾撃ちたく無いだろうしｗ

第５１話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編２・学園祭編完結）（前編）

実は

学園祭編（前編）
学園祭編（中篇）
学園祭編（後編）
学園祭編（完結編１）
学園祭編（完結編２）
学園祭編（完結編３（終））

とかやろうと思ってたのは内緒です（え。
……まぁ、実際やれたわけですがｗ

第５１話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編２・学園祭編完結）

「強制認識魔法発動……失敗しました……」
「おのれ、何て事をしてくれたカ……！！」

悲痛な葉加瀬聡美の報告。
それを聞き、麻帆良最高頭脳にして未来人で火星人の超鈴音は飛行船の上で激怒していた。

ついさっきまで全ては上手く行っていたのだ。
ロボ軍団２５００体、鬼神兵６体を通称『魔女の鍋』と呼ばれている外部魔法団体の
詰まったビルへ投入して足止めを計り。
高畑教諭を始めとした魔法先生を強制時空跳躍弾で無力化し。
その他の魔法教師・先生なども残りの２５００体のロボ軍団と、儀式発動に用意した６体の
鬼神兵の前に敗れ去り。

６箇所の魔力溜まりを占拠して、後は儀式魔法が発動するだけだったのだ。
全世界に対する強制認識魔法。
『魔法の存在を世界に認めさせる』事を目的としたソレ。

魔法世界崩壊とそこから始める火星の悲劇を防ぐ為に。
その為の第一歩。

それが、一瞬で崩された。
そう、たった一本の『右手』によって。
儀式魔法に必要な魔方陣。その１つが消滅してしまったのだから。

それによって、儀式魔法の発動自体が失敗する事になる。

「……これが本当の『奥の手』ってね。」

高高度から捉えた、こちらが見えてるかのように見上げているその姿。

歳を取ったように見える－４０歳前後だろうか？－がその顔姿は間違えようも無い。

「どこまでも私の前に立ちふさがるカ！　ネギ・スプリングフィールドッ！！」

「超さん！！」

葉加瀬の制止を振り切るかのように上空へ舞い、一目散にネギの元へと飛んでいく超。

その間にも、次々と魔方陣が消去されていく。

結局、超が到着するのとネギが魔方陣を全て消し去ったのはほぼ同時であった。

「自分が一体何をしたカ……分かっているのカ！！」

超が叫ぶのと同時に、軍用戦闘服から切り離された遠隔攻撃端末ービットーからレーザー砲が迸り。同時に展開した無数の強制時空跳躍弾がネギへと殺到する。

「勿論。君の計画を叩き潰した。それだけだよ？」

そうネギが返した瞬間、レーザーと跳躍弾が次々と彼に殺到する。

だが、全てが彼から『外れて』しまう。

確実に直撃コースのものまでが全て反れてあらぬ方向へと飛んでいく。

防御魔法？

いや、あんな防御魔法は知らない。

そう思いながらも擬似時間停止による（相手主観における）急接近から指に挟み込んだ

強制時空跳躍弾を直接叩きつける超。

しかし、その直前にまるで消えるかのように姿を消すネギ。

「（まさか……いや、ありうる話ネ！）」

判断するが早いか再び時間停止を決行、一気に格闘の間合いから遠ざかる。

そこで超が見たのは、自分がいた位置に立つネギであった。

あのまま立っていれば、確実に何かをされていたはず。

いや、その前に自分も時間を操作することで回避していたか。

「先生もタイムマシンを持ってたカ……。

確かにそれならこの時間軸へ帰ってこれるし、この私の攻撃を避ける事も可能ネ。」

「２２年後に実用化させたからね。魔法によって。」

ネギは事も無げに言い放つ。

「そんなバカな話があるカ。私がこのカシオペアを開発するまで、そんな手段は……」

「魔法は科学よりも理不尽なもんさ。超さんなら分かってるだろ？

それに……あんまり魔法使い舐めるな、科学者（マッドサイエンティスト）。」

唖然とする超。

「たった２２年……２２年で時間遡行の魔法を確立させたというのカ！？」

「まぁ学園祭限定と言うか、世界樹の発光現象があってこその魔法だけどね。

もう諦めろ超さん。儀式に必要な魔方陣は全て消去させてもらった。

君の願いは叶わない。」

「アナタにそんな決定権があったと言うのカ！？

いや、そもそもアナタは『やり直し』に対して否定的ではなかったのカ！？」

叫ぶ超。

そう、火星に生きる全ての人を救う為に自分はここへ来たのだ。

過去の過ちを正す為に。未来の人々を救う為に。

「確かに。確かに俺はそう言った。『これ以上は贅沢だ』ってね。」

「なら……」

何故戻ってきた、そう言おうとした超にネギが被せる。

「自分の存在する時間軸に戻ってくる事の何が悪い？」

「それは詭弁ヨ！３日後の未来は確実にアナタの時間軸ネ！！」

「……それにそれだけじゃないんだ。

態々２２年間を費やして時間遡行の魔法を作り、ここへ戻ってきただけの理由がある。」

真剣な表情で告げるネギ。

「君がこの作戦を成功しても、君の望みは達せられない。
いや、それどころか事態は更に悪化する。大規模な時間改変を試みようとした君のミスだ。」
「私の策は完璧ヨ！　どこにもミスなどある訳がないネ！」
そう、スパコンまで持ち出してのシミュレーションは綿密に繰り返した。
この先起こりうる事象全てに適切に対応できるだけのプランは用意したのだ。
失敗するどころか、悪化する理由など……。
「そう、君がずっと存在していれば、ね。」
「どういう事カ？」
沈んだ顔のネギに不安になる超。
一体何が未来で起こった？
「簡単な話だよ、超さん。君が死んだって事さ。」
「そんな馬鹿ナ……。」
「正確には本拠地ごと大火力魔法で吹き飛ばされて終了、だったかな？
魔法使いからすれば君は余計な事をしてくれた敵でしか無いからね。
君が行った『強制認識魔法』でどれだけの魔法使いが日常を失ったと思う？」
当然、超もその事は頭にあった。
だからこそ、魔法使いを社会へ問題なく浸透させる為に……
「何事も理論通りに行くとは限らないんだよ、超さん。
この麻帆良で通用する事が全世界で通用するだなんて、それこそ間

違いなんだ。
君も確かに手を打っていた。だけど世界はそれ以上に魔法に反発したんだ。」

確かに、魔法が使えるからと言って必ずしも害される訳ではない。
『魔法使い』の本分から言えばそのような事をする者こそ悪だ。
決して人を傷つけるだけではなく、人を癒す事もまた魔法がなせる業でもある事だし。

だがそれでも、人は悪い面を大きく見る。
人を褒める話は広まらないが、悪評が広まるのはその最もたる例であろう。
魔法使いの存在も、認知されて行けば行くほど悪評の方が大きくなったのだ。

考えてみればいい。
認識阻害で人を近づけず。
記憶操作で人の記憶を弄り。
殺すも眠らすもお手の物。
一利よりも百害の方が大きいのだ、魔法は。

それも公的な許可など必要の無い、言わば抜き身の刃のような物。
無論、魔法学校などと言うものは存在するがそれ自体が公的な物ではなく。
極端な言い方をしてしまえば魔術結社の私塾のような物だ。
更に言えば怪しげな団体が勝手に怪しげな資格の免許を発行してるような物である。

「魔法を使えない人たちの不信感は、君が思うよりも日増しに高まって行ってね。

ある日、一人の魔法使いが一般人に魔法を向けたという事実が……彼らを恐慌に陥れた。」

「そんな筈は……」

「君も勿論、情報操作と火消しにイメージアップ、色々と手を尽くしたさ。

だが君一人で全ての魔法使いを統制できる訳も無い。そうだろう？

ましてや君が魔法使い全員を支配している訳じゃ無いんだ。それは分かるよね？」

超の組織の最大の問題点、それは動ける人間の少なさである。

学園祭における儀式魔法発動にしても兵力の大部分はロボであり。

企画立案実行と超が殆どやったような物である。

無論、葉加瀬も存在するが彼女が担当するのは科学面であり、政治・外交面の話をするなら

超自身が出張る必要がある、と言うより出張るしかない。

「後はもう泥沼の戦いさ。どちらかと言えば魔女狩りの方が近いかな？

『あいつは金持ちだから魔法使いに違いない』

『あいつは３０過ぎても女性経験が無いから魔法使いに違いない』

些細な理由で次々と人が吊るされて……まさに地獄絵図ってあの事を差すんだろうね。

そこから魔法使い達の一部が反撃に乗り出して、後はご想像にお任せするよ。」

絞り出すような声で、超がネギに問う。

「なら、火星は……火星はどうなったネ？」

「えっ？　そんな事は俺が言うまでもなく想像がつくだろう？」

語るまでもなし、と切り捨てるネギ。

「どちらにせよ、君の計画は失敗したんだ。今においても、未来においても。」

「もう一つだけ聞かせて欲しいヨ。『魔法世界』はどうなったカ？それだけの大混乱が起きてるなら魔法世界からのリアクションも確実にあるはずネ。」

その超の発言にネギは少しだけ息を呑み。

「その日を境に魔法世界とこちらを繋ぐゲートは全て閉じられたよ。地球に住む魔法使いは完全に見捨てられた、って事だね。」

「そうカ……」

力なく項垂れる超。

「もう諦めよう、超さん。君の負けだ。」

「イヤ……まだ終わっていないネ。お陰でまだ問題点がある事は発見できた。後はネギ先生の持つ時間遡行魔法を持って過去からやり直せば……！！」

「まだ君はそんな事を言うのか！？」

それでも諦められない理由が超にはある。

失敗の理由は把握できた、儀式を挽回する手段も存在する。

1度やり直したのだ、2度やり直しても変わりはないのだ。

「大体、俺からどうやって時間遡行の手段を聞きだすつもりなんだい君は？」

「聞き出すための手段なら幾らでも存在するヨ？

ネギ先生の２２年間、洗いざらい喋ってもらうネ。」
「残念だけど……それは無理だ。」
きっぱりと言い切るネギ。
「やけに自信があるネ。だが時間操作にはまだ一朝の長があるネ。ならば……」
「違うんだよ超さん。そんな事じゃないんだ。」
「どういう事ネ？」
問いただす超。
そして、帰ってきた答えは彼女を完全に激怒させたといってもいい。
「だって俺、２２年も先の未来から帰ってきてねーもん。」
と言う訳で３日前から戻ってきたネギ・スプリングフィールドです。
悪質なジョークとは思うがこれくらいはやっていいと思うんだ。
３日後に飛ばされて顛末を知り、こっちへ戻ってきた訳で。
この顔と言うか年齢は年齢詐称薬を飲んだのが理由だし。
時間を遡ったのは【王の財宝】の中に入っていた奇妙な時計。
『ド・マリニーの時計』とか言うらしいけど……何と言うか禍々しいから
あんまり使いたくなかったんだよなぁ。
ざっと【神の頭脳】で調べてみるとかの『死霊秘宝（ネクロノミコン）』の１ページとか言うらしいけど本当なのかしら？
この件では必要だったので使わせて貰ったけど、多分二度と使うこ

とは無いだろう。
余りにもインチキ臭いし。

後は『講釈師、見てきたような嘘をつき』と言う奴である。
とは言え、起こった事実は嘘っぱちだけど後は嘘と言う訳では無いわけで。
彼女一人で世界をコントロールできる訳が無い。
全ての人間の利益が彼女と一致するはずが無いんだから。

このまま心が折れるかなぁ、と思ったけどそうも行かなかったみたいだし。
できるだけ穏当に物事を進めたかったんだけどなぁ。あっちが今だ諦めないならこっちもそれなりの対応を決めるしかない。

「よくもまぁ、あれだけの嘘をペラペラと並べ立てられたものネ……！」

マジで超さん怒ってる！？
いやまぁ、同じ立場なら俺もキレるが。

「流石に火星と魔法世界の件に関しては適当並べただけだけどね。君の反応を見る限りは、大よそ間違ってなかった訳だ。」

多分、あそこの反応を間違えていれば思わぬ不意打ちを食らってた可能性はある。
できるだけ当たり障りの無い発言でお茶を濁したのが正解だったらしい。

「さて、ネギ先生……ここからは私も本気で行かせて貰うヨ？

人を騙くらかしタ罪は重いと知レ。」
「なら俺も少々反則させてもらうとするよ。」
キリリ、と時計の針がマワる。
銀色のオーロラのような時の門が開き、４人の人間が現れる。
そう。
「そんな……馬鹿ナ！　ネギ先生が４人……いや５人カ！？」
驚愕する超さん。そりゃそうだ。
「正確には１時間後の俺と２時間後の俺と３時間後の俺と４時間後の俺だけどね。」
「つまり、２時間前の俺は後で助けに行かなきゃならないんだけど。」
「ついでに言えば、俺が助けに行けるって時点で勝負は決まってると思うんだ？」
「さて、超さん改めて覚悟はいいよね？」
「最終的に物をいうのは数、って事だよ。」
後のことは取り立てて語ることは無いだろう。
俺が５人いる、と言う段階で結末は察して欲しい。
こうして、超鈴音が企んだ世界への魔法バレ計画は阻止されたのである。
超鈴音を始めとするこの件に加担した者一と言っても３名のみであるが一は捕縛。
後に、超鈴音はオコジョとして魔法世界にあるオコジョ収容所へ送

られることになり。
葉加瀬聡美はこの一件を含む魔法関連の記憶消去処分。
龍宮真名に関しては雇われていたと言う事と本人の戦闘能力を加味し、
当面の無償奉仕（弾代含む）を言い渡される事になる。

超鈴音が持ち込んだ技術に関しては既に一般に分散してしまっているものはともかく、
魔法関連が関わるものに関しては押収されることになったのである。

麻帆良学園学園祭、最終日はこうして幕を下ろしたのであった。

第５１話：そして、学園祭の話。（対決、未来火星人編２・学園祭編完結）（後

こう色々とアイデアはあったのですよ。
ロボ軍団を【王の財宝】からの射撃で蹴散らしながら突き進む４人のネギとか。
時間移動回避時に〔失〕〔敗〕させられて１００年先に飛ばされたものの、
そこから再び舞い戻ってきた超（全身擬体仕様）が〔紫〕〔電〕〔掌〕の前に沈黙とか。

しかし書きながら思ったわけですよ。
そんなだらだらした展開を読者は望んでるのか、と。
いやまぁ、修学旅行編ラストだってそうだったんですがｗｗｗ

しかし、本来チートと言うのが圧倒的な戦闘力で相手を身も蓋もなくねじ倒す物なら
長々と戦闘をするのは実は間違いなんじゃないんだろうか？と。

この辺どこら辺りを長い・短いと判断するかは個人差があるので何ともいえませんが。
あんまり身も蓋もなさ過ぎるとメリハリとかが無いし、と言う話で。

しかし現状書いてるものをそのまま進めていると明らかに長くなってしまうんじゃね？と。
ならいっそすっぱり切ってしまうか、と考えて書き直したのがこの展開だったりします。

＞原作における学園祭全体イベント（変更後）

前々から気になってて、某忍者のほうで突っ込もうかと思ってたんですが。
いいんちょのあの衣装って露出度やばくね？ｗ
ファンタジー系ＲＰＧな衣装としては常識の範疇、と言う気はしますし
コスプレとしてもありっちゃありでしょうが年頃の娘が着る服じゃねーだろうというか
乳首が隠れてるからおっぱいじゃありませんみたいなのはどうなんだろうと言うかｗ

＞飛行船
どうしても「飛空艇」と書きそうになる罠ｗ

＞本作における最終的な超の戦力
・超鈴音
・ハカセ
・茶々丸の同型機
・龍宮真名（外部）
・ロボ軍団５０００体
・鬼神兵１２体

……いやさぁ、外部魔法団体の少数精鋭っぷりを考えるとねぇ？（何
外交的に封じると言うのも難しい話ではあるし。
「あくまでもイベントでござる」と事前通告しておけば、とも思ったけど
学園の方に問い合わせたら「ねーよ」って言われる事確実だしｗ

こっちの武装は相変わらず脱げビームと強制時間跳躍弾だから死人は出ないｗ

鬼神兵とか動き回るだけでヤバイ気もするんですけどねｗｗｗ

＞儀式失敗
色々案はあったんっすよ。
・世界樹自体を枯らす
・麻帆良の魔力を一時的に消滅・霧散させる
とかｗ
あんまり極端な事をやると造物主さんが出てくる可能性がなぁｗ
後、微妙にアルもやばいｗｗｗ

＞ド・マリニーの時計
原典はどうも壁掛け時計らしいっすな。
デモンベイン要素とちょっと独自設定を混ぜて懐中時計サイズと言う事にしてます。
……デモベで出てきたときはどうだったっけかなぁ？（おい
アーカムシティの時計塔も、と言うのは覚えてるんですが。

まぁ、時間移動にカシオペア抜きで対抗する手段と言う事でｗ
フラガラックさんぶつけて見るとかゲイ・ボルグさんしてみるとか
色々あったんですが
最終的にこれで落ち着いたｗｗｗ

時間操作系と言う事で相当なインチキだとは思いますが、ご容赦を。
……今更と言う気はしますがｗ

＞処分
たつみーだけ甘い？
多分に私情が入ってることは認めざるを得ない（こら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2593n/

ネギ魔改造物略してネギ魔

2011年11月27日21時31分発行